

荒木田遺跡

北陸電力小松東部変電所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996.3

石川県小松市教育委員会

例　　言

1. 本書は、北陸電力小松東部変電所新設事業に伴って、平成5・6年度に実施した荒木田遺跡（あらきだいせき）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び出土品整理は、北陸電力株式会社石川支店の委託を受け、小松市教育委員会が実施した。

3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。

〈調査地〉石川県小松市荒木町丙187-1・2、188、189番地

〈調査面積〉全体調査面積 4,053m² (平成5年度) 2,500m²

(平成6年度) 1,553m²

〈調査期間〉(平成5年度) 平成5年7月20日～平成6年1月12日

(平成6年度) 平成6年4月1日～平成6年10月7日

〈調査担当〉(平成5年度) 望月精司、石田和彦 (平成7年4月から)(社)石川県埋蔵文化財保存協会

(平成6年度) 望月精司、津田隆志

4. 出土品整理は、洗浄、注記、接合、復元までの作業を、平成5年度から平成7年度にかけて下記17名を雇用し、望月が担当した。

(平成5年度) 池本ちか・小幡さよ子・坂下和子・東出喜美枝・南他作・南マス子・村田まき子・

山岸範子・山田洋子

(平成6年度) 上野昌子・久藤妃佐子・砂川麻衣子・高潮厚子・高橋典子・平井則子

(平成7年度) 久藤妃佐子・国本久美子・山口美子

5. 報告書の作成は、遺構と古代の遺物を望月が、古墳時代の遺物を津田が、中世の遺物を宮下幸夫・坂下義視・川畑謙二が、土器及び木製品以外の金属製品、石製品、土製品などその他の遺物を望月、橋雅子、川畑、宮田明（石川県立埋蔵文化財センター嘱託）がそれぞれ担当した。

6. 本書の編集は、望月が担当し、執筆分担は日次に示した。また、土器胎土の蛍光X線分析について奈良教育大学教授三辻利一氏、鉱滓の分析については大澤正己氏にそれぞれお願ひし、分析結果について玉稿をいただいた。

7. 写真撮影は、遺構を望月、石田、津田が、遺物を望月、津田、横、坂下、川畑が行った。

8. 本書で示す方位は、全て真北であり、水平基準は海拔高(m)で示してある。

9. 本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。

10. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい。(敬称略、五十音順)

上野与一、加納他家男、柿田祐司、川畑 誠、木立雅朗、北野勝次、北野博司、出越茂和、橋本澄夫、浜岡賢太郎、平口哲夫、藤田邦夫、南 他作、安 英樹、山田 勇(北陸電力石川支店用地課)、荒木田町内会、石川県立埋蔵文化財センター、石川県埋蔵文化財保存協会

目 次

| | | |
|---------------------------------|---------------|------|
| 第1章 遺跡の位置と環境 | (津田隆志) | 1 |
| 第2章 調査の経緯と発掘調査概要 | (津田) | 6 |
| 第1節 調査に至るまでの経緯 | | 6 |
| 第2節 発掘調査の概要 | | 6 |
| 第3章 遺跡の概要と本調査の概要 | (望月精司) | 8 |
| 第1節 遺跡の概要と既往の調査 | | 8 |
| 第2節 本調査の概要 | | 10 |
| 第4章 発見された遺構の内容 | (望月) | 25 |
| 第1節 古墳時代の遺構 | | 25 |
| 第2節 古代の遺構 | | 48 |
| 第3節 古代末～中世の遺構 | | 70 |
| 第5章 出土した遺物の内容 | | 88 |
| 第1節 古墳時代の遺物 | (津田) | 88 |
| 第2節 古代の遺物 | (望月) | 145 |
| 第3節 古代末～中世の遺物 | | 171 |
| 第1項 土師器 | (川畠謙二) | 171 |
| 第2項 国産陶磁器 | (宮下幸夫) | 195 |
| 第3項 輸入陶磁器 | (川畠) | 204 |
| 第4項 木製品 | (坂下義視) | 213 |
| 第4節 土器・木器以外の特殊遺物 | | 230 |
| 第1項 金属関連遺物 | (望月・川畠) | 230 |
| 第2項 土鍼 | (横雅子) | 233 |
| 第3項 石製品 | (宮田明) | 243 |
| 第6章 ま と め | | 245 |
| 第1節 遺構 | (望月) | 245 |
| 第1項 古墳時代の遺構分布とその変遷 | | 245 |
| 第2項 古代の集落景観復元 | | 248 |
| 第3項 中世村落の景観復元 | | 257 |
| 第2節 遺物 | | 267 |
| 第1項 古墳時代の土器 | (津田) | 267 |
| 第2項 古代の土器様相 | (望月) | 290 |
| 第3項 中世土師器の様相 | (川畠) | 312 |
| 第7章 自然科学の調査と分析 | | 326 |
| 第1節 荒木田遺跡出土土師器の蛍光X線分析 | (三辻利一) | 326 |
| 第2節 荒木田遺跡出土鉄滓と鉄製品の金属性学的調査 | (大澤正己) | 330 |
| 写真図版 | | 1~57 |
| 報告書抄録 | | 58 |

第1章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と自然環境

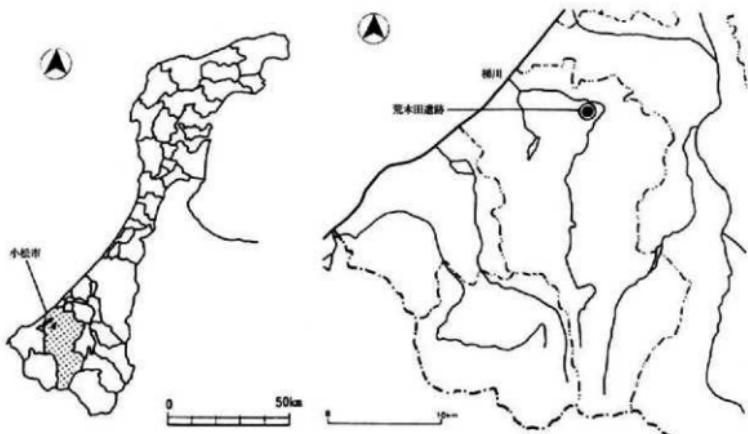
荒木田遺跡は、石川県南加賀地方に所在する小松市にあり、小松市の市街地から東へ約4.5km離れた水田地帯に位置する。遺跡範囲は、南北約550m、東西約850mにわたり、小松市荒木田町、光陽町、輕海町の3つの町にまたがる。

本遺跡の立地する箇所は、北流していた梯川が、津上川と合流して西へ大きく蛇行した直後の中流域左岸にあたる。梯川は、石川県下3位、南加賀地方最大の一級河川で、全長約42km、流域面積約271km²を測る。大日山のふもとの鈴ヶ岳に源を発した梯川は、山地・丘陵地の中を小規模な河岸段丘を形成しながら北流する。その後、津上川と合流し、中流域に至った梯川は、西へ大きく蛇行、蛇行とともに流速を急激に落とし、沖積平野を形成しながら下流に至る。そして小松市安宅町の河口で日本海に注ぐ。本遺跡の西方と、梯川を挟んだ北方には、この梯川によって形成された沖積平野が広がり、本遺跡は、この沖積平野の東の一角に位置する。

梯川中流域一帯に広がる沖積平野は、水田耕作の適地として豊かな穀倉地を形成しているが、梯川の緩流と蛇行による氾濫の記録も多く、一帯の旧地形は、氾濫による土砂堆積、浸食、自然堤防の形成等の繰り返しによって、複雑な様相を呈していると考えられる。他方、梯川の流れが遅緩なため、梯川を利用した水運の便ある地域であり、中・近世、さらには近代においては、水系の集落間や日本海とを結ぶ水路網として梯川が利用されていた。

さて、本遺跡の西方と、梯川を挟んだ北方には、沖積平野が広がっているが、東方に目を転ずると、能美江沼丘陵が連なっており、その背後には、能美山地が遠望できる。また、南方には、能美江沼丘陵の一部である小松東部丘陵が連なっている。

総じて、本遺跡は、西方と北方には沖積平野が、東方と南方には丘陵地があり、近くには河川が流れているという自然環境の中に位置している。



第1図 小松市の位置（左図）と荒木田遺跡の位置（右図）

第2節 遺跡周辺の歴史環境

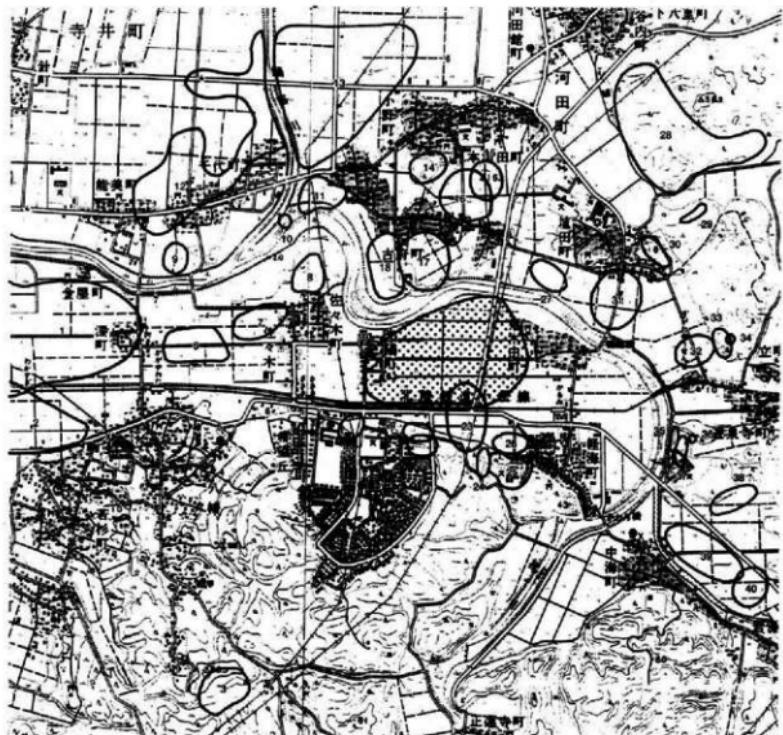
梯川中流域一帯の沖積平野部は、石川県内でも特に多くの遺跡が集中している地域である。これは、農耕適地であることと、弛緩な流れとなった梯川の水運によるものと考えられる。

荒木田遺跡周辺の遺跡で、縄文時代に属する遺跡には、軽海西芳寺遺跡と中海遺跡があり、両遺跡とも中期に位置付けられる。荒木田遺跡の南側に隣接する軽海西芳寺遺跡では、昭和59年の石川県立埋蔵文化財センターの調査によって、山裾部の斜面で縄文時代中期の炉址、土壙群が検出された。

弥生時代前・中期では梯川中流域の遺跡の分布は希薄であるが、弥生時代後期になると、集落の形成が本格的に始まり、漆町遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡、軽海遺跡等が出現、古墳

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|----|------------|-----|----------|----|-----------|-----|---------|
| 1 | 漆町遺跡 | 集落跡 | 弥生後期～中世 | 21 | 軽海遺跡 | 散布地 | 弥生後期～近世 |
| 2 | 打越遺跡 | 集落跡 | 弥生～中世 | 22 | 龜山玉造遺跡 | 集落跡 | 古墳前期 |
| 3 | 淨水寺跡 | 寺跡 | 奈良～中世 | 23 | 軽海西芳寺遺跡 | 集落跡 | 縄文中期～近世 |
| 4 | 八幡遺跡 | 集落跡 | 弥生～古墳・近世 | 24 | 軽海中世墓群 | 墳墓 | 鎌倉末期～室町 |
| 5 | 八幡古墳群 | 古墳 | 古墳 | 25 | 軽海庵寺 | 寺院跡 | 平安後期 |
| 6 | 佐々木遺跡 | 集落跡 | 平安 | 26 | 西芳寺遺跡 | 寺院跡 | 平安・中世 |
| 7 | 佐々木ノテウラ遺跡 | 集落跡 | 弥生後期～中世 | 27 | 埴田ウラムキ遺跡 | 散布地 | 古墳～中世 |
| 8 | 佐々木アサバタケ遺跡 | 集落跡 | 弥生後期～中世 | 28 | 河田山古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 9 | 千代マエダ遺跡 | 散布地 | 弥生～古墳・平安 | 29 | 埴田山古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 10 | フンド遺跡 | 散布地 | 平安 | 30 | 埴田後山古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 11 | 古府遺跡 | 集落跡 | 平安中期 | 31 | 埴田遺跡 | 散布地 | 奈良・平安 |
| 12 | 千代オオキダ遺跡 | 散布地 | 奈良～中世 | 32 | 遊泉寺クボタA遺跡 | 散布地 | 平安～中世 |
| 13 | 古府しのまち遺跡 | 集落跡 | 古墳前期～平安 | 33 | 遊泉寺クボタB遺跡 | 散布地 | 平安～中世 |
| 14 | 十九堂山遺跡 | 寺院跡 | 平安・中世 | 34 | 隆明寺跡 | 寺院跡 | 平安初期 |
| 15 | 小野スギノキ遺跡 | 散布地 | 平安・中世 | 35 | 遊泉寺遺跡 | 散布地 | 縄文 |
| 16 | 小野遺跡 | 散布地 | 平安 | 36 | 仏生寺塚 | 經塚 | 中世 |
| 17 | 南野台遺跡 | 散布地 | 縄文中期・古墳 | 37 | 仏生寺跡 | 寺院跡 | 中世 |
| 18 | 古府シマ遺跡 | 散布地 | 平安・中世 | 38 | 中海C遺跡 | 散布地 | 平安後期～中世 |
| 19 | 荒木田遺跡 | 集落跡 | 古墳～中世 | 39 | 中海B遺跡 | 集落跡 | 古墳～中世 |
| 20 | 大谷口遺跡 | 散布地 | 弥生後期 | 40 | 中海遺跡 | 集落跡 | 縄文中期 |

第1表 荒木田遺跡周辺の遺跡地名表



第2図 荒木田遺跡と周辺の主な遺跡 (1:25,000)

時代前期には、他地域からの土器群の流入とともに飛躍的な発展を遂げ、4世紀から6世紀前半にかけて隆盛を誇る。しかし6世紀後半に入ると、当地域の遺跡の規模は縮小し、漆町遺跡の金屋サンバンワリ地区、金屋ヤシキダ地区と佐々木ノテウラ遺跡でのみ遺構が確認される程度となる。

古墳時代を象徴する古墳については、荒木田遺跡の北東約1.5kmに河田山古墳群が位置しており、前方後方墳の河田山1号墳を代表として前期から中期初めの古墳群が主体をなしている。また、7世紀後半に位置付けられている河田山12号墳は、全国的に例のないアーチ型石室をもつものであり、これは朝鮮半島南部の王墓に類例が見られるものである。また河田山古墳群に近接したところには、梯川流域を臨む唯一の後期群集墳である埴田後山古墳群が存在している。

6世紀後半に入ると梯川中流域の遺跡の規模は縮小すると前述したが、7・8世紀においても、梯川中流域全体として見るとあまり目立った動きは認められないようである。そうしたなか、8世紀後半、加賀地方では少數ながら初期莊園の開発が興る。荒木田遺跡周辺では、梯川中流域ではないが、西大寺領本堀莊、東大寺領幡生莊が挙げられる。前者については宝龜11年（780年）に実在が確認でき、荒木田遺跡の西方約5kmにある現在の小松市本折町付近が莊域と推定されている。後者は、天平勝宝7年（755年）、橘大夫人（聖武天皇の夫人、橘古那可智か？）の施入により成立、12世紀前半まで存続し

ていたと見られている。所在地については、荒木田遺跡の北東約5kmにある能美郡辰口町下開発遺跡、徳久・荒屋遺跡が有力視されている。また、荒木田遺跡の西方に隣接する現在の小松市佐々木町周辺、及び荒木田遺跡の北の古府台地から北方に広がる平地には、条里制の跡が確認されている。この条里制の施行時期については不明であるが、前述の幡生荘と同時期に施行されていたものと考えられている。

9世紀に入ると、弘仁14年（823年）、越前国から分離して加賀国が設置された。加賀国府の所在地については諸説あるが、荒木田遺跡の北の古府台地周辺が有力視されている。また古府台地上に立地する十九堂山遺跡は、国分寺跡である可能性が考えられているが、積極的な資料に乏しく確証はない。

9世紀後半～10世紀には梯川中流域での活動が再び活発になり始め、古府しのまち遺跡、古府跡、佐々木ノテウラ遺跡、漆町遺跡等が活発化していた遺跡として挙げられる。また荒木田遺跡の南西約2kmに淨水寺跡が位置しており、当時期（10世紀前半）に創建され、15世紀後半まで営続したとされている。当寺院跡からは10世紀前半から11世紀前半の墨書き土器がきわめて多量に出土している。

弘仁14年の加賀立国により梯川中流域は加賀国江沼郡に属することになったが、まもなく江沼郡北部が能美郡として分離、当地域は加賀国能美郡に属することになった。能美郡には輕海・野身・山上・山下・免橋の5郷が存在し、荒木田遺跡の南にある現在の輕海町付近の平野部と梯川上流域の山間部は輕海郷に属していた。

平安時代後期には白山宮加賀馬場中宮の末寺である中宮八院が成立、隆明寺を除く7ヶ寺が輕海郷に所在していた。安元2年（1176年）、加賀守藤原師高の目代藤原師経が中宮八院の1つ涌泉寺を焼き払ったことが発端となり、安元事件が起こった。この事件は白山宮加賀馬場中宮三社八院による反国守闘争であり、師高・師経は配流される結果となったが、白山宮加賀馬場を核に求める上層百姓の寄人化運動が事件を惹起させる原因をなしたと考えられている。またこの事件は、加賀における古代秩序の決定的崩壊を表現するものであり、白山宮加賀馬場の本寺延暦寺さらには中央政界をもまきこみ、中世の幕開けをつげる治承・寿永の内乱をひきおこすきっかけのひとつともみられている。

中世に至ると、梯川中流域では、佐々木アサバタケ遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、漆町遺跡等の集落遺跡が存在している。昭和59年に石川県立埋蔵文化財センターが荒木田遺跡の西方に近接している佐々木アサバタケ遺跡と佐々木ノテウラ遺跡を調査しているが、佐々木アサバタケ遺跡では、掘立柱建物、竪穴状遺構の他、多数の井戸が検出され、13～16世紀代の各種陶磁器が出土している。佐々木ノテウラ遺跡では、掘立柱建物、井戸の他、建物群を囲む区画溝が検出され、12世紀頃に位置付けられている。また荒木田遺跡の西方約3kmの梯川沿いには白江梯川遺跡が存在している。その中世集落の規模は梯川流域でも最大と考えられ、12～16世紀の時期幅をもつが、盛期は13～15世紀とみられている。一方、中世における荒木田についてであるが、永仁5年（1297年）2月22日の関東下知状に「得橋郷長恒名内荒木田」（石清水文書）とあり、荒木田は得橋郷の加納分長恒名に属していた。また徳治3年（1308年）7月19日の後宇多法皇院宣により、荒木田が所在する長恒名は南禅寺に寄進されている。

最後に、荒木田という地名についてであるが、これは、この地が伊勢神宮の神主である荒木田氏の所領であったことに由来しているといわれている。また、「内宮延暦儀式帳」には荒木田一町、宇治田一町などの文字があることから、神田から出た地名であるとも考えられている。

引用・参考文献

- 浅香年木 1978年 「古代地域史の研究」 法政大学出版局
浅香年木 1981年 「治承・寿永の内乱論序説」 法政大学出版局
浅香年木他編 1981年 「角川日本地名大辞典17 石川県」 角川書店

- 浅香木本 1993年 「加賀国」「講座日本歴史」6 吉川弘文館
- 池邊 強 1981年 「和名類聚抄都郡里罪名考證」 吉川弘文館
- 石川県教育委員会 1992年 「石川県遺跡地図」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1984年 「県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ(昭和54・55年度)」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1985年 「県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ(昭和56~59年度)」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986年 「輕海遺跡」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986年 「佐々木ノテウラ遺跡」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986年 「漆町遺跡Ⅰ」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1987年 「小松市中海遺跡」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988年 「白江桶川遺跡Ⅰ」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988年 「佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1989年 「浮水寺墨書き資料集」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1994年 「輕海西方寺遺跡」
- 加能史料編纂委員会 1994年 「加能史料 錦倉Ⅱ」
- 川 良雄編 1965年 「第十二篇 中海篇」「小松市史」(2)沿革篇(下)
- 小松市教育委員会 1986年 「河田山古墳群発掘調査現地説明資料」
- 小松市教育委員会 1987年 「河田山古墳群発掘調査現地説明資料Ⅱ」
- 小松市教育委員会 1989年 「後山無常堂古墳・後山明神3号墳」
- 下出横典 1970年 「石川県の歴史」 山川出版社
- 関戸信次 1965年 「第一篇 自然編」「小松市史」(4)風土・民俗篇
- 古岡康暢 1959年 「加賀における条里制をめぐる問題」「北陸史学」第8号
- 古岡康暢 1976年 「平安前期の地方政治と国分寺(上)」「日本海城研究所報告」第8号
- 古岡康暢 1985年 「莊園道路 加賀・能登の初期莊園と横江莊園跡」「加能史料研究」創刊号
- 『日本歴史体系第17巻 石川県の地名』 1991年 平凡社
- 『石川県大百科事典』 1993年 北國新聞社

第2章 調査の経緯と発掘調査概要

第1節 調査に至るまでの経緯

平成4年11月19日、北陸電力株式会社石川支店（以下「北陸電力」と略称）は小松市教育委員会文化課埋蔵文化財調査室（以下「調査室」と略称）に北陸電力小松東部変電所新設工事実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議書を提出。当該工事区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地荒木田遺跡内にあったが、状況等の詳細に不明の点が多く、同年12月、調査室は北陸電力に詳細分布調査が必要と回答。

平成4年12月18日、北陸電力は調査室に詳細分布調査の依頼書を提出。これを見て調査室は平成5年1月6日に当該工事区域4,058m²を対象として詳細分布調査を実施。調査方法は、幅1mのレンチを南北方向へ3本、東西方向へ1本設定し、重機械（0.6mバッカフー）によって掘り下げた。その後、人力によってレンチ内地山面での遺構確認作業およびレンチ断面の地層を観察記録した。その結果、工事区域全域にわたって弥生時代から中世にかけての遺物が出土。遺物包含層が、工事区域の西側で現況面から20~30cm下、東側で50~60cm下にて、厚さ15cm程度で存在していることが確認された。遺構は溝水のためあまり検出できなかったが、確実に存在していることを確認。数棟の建物跡が存在すると予想された。この調査結果により、1月11日、調査室は北陸電力に対し、詳細分布調査の結果を報告するとともに、工事実施前の発掘調査の必要を伝えた。

平成5年4月19日、北陸電力は調査室に発掘調査依頼を提出。

平成5年6月7日、文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が北陸電力より提出され、6月17日には、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知が小松市教育委員会から文化庁長官宛に提出された。

平成5年6月28日、調査室は北陸電力へ調査依頼に対する回答書を提出。調査面積4,058m²を平成5年

7月20日~6年12月20日の期間で調査を行い、平成5年度に2,000m²（調査が予定以上進行した場合は2,500m²まで拡張）、平成6年度に2,058m²（5年度調査完了区域を除いた面積）を調査する予定とした（実際は平成5年7月20日~6年10月7日の期間で調査を行い、平成5年度に2,500m²、平成6年度に1,558m²を調査した）。

第2節 発掘調査の概要

今回の発掘調査は平成5年度（平成5年7月20日~平成6年1月11日）・6年度（平成6年4月20日~10月7日）の2ヵ年にわたって行ったもので、5年度に調査区の東側2,500m²、6年度に西側1,558m²を調査した。以下、平成5年度、6年度に分けて発掘調査の概要を述べていただきたい。



第3図 発掘調査位置図 (1:5,000)

《平成 5 年度の調査》

平成 5 年 7 月 15 日、重機械による発掘調査区内の表土除去作業を開始。7 月 21 日まで行う。
7 月 20・21 日、調査区内に 5 m × 5 m のグリッドを設定。
7 月 22 日、ベルトコンベアー設定。遺物包含層掘り下げを開始。随時、遺構プラン確認、遺構掘り下げを行い、10 月 26 日に遺物包含層掘り下げを完了。
9 月 2 日、遺構掘り下げ開始。なお、5・6 年度調査区内のピットはすべて半載して掘り下げる。同日、1 号溝掘り下げ開始。土層断面ベルトは 10 m ごとに設定。また 5 m ごとに A～J に区割りして掘り下げ、遺物を各区ごとに分けて取り上げた。12 月 8 日に 5 年度分（A～J 区）の掘り下げを完了。
9 月 17 日、1・2 号土坑（土器廐棄土坑）掘り下げ開始。遺物出土状況図を作成しながら掘り下げ、1 号土坑は 11 月 4 日、2 号土坑は 11 月 17 日に完掘。
11 月 10 日、25 号土坑（井戸）掘り下げ開始。12 日、下層より曲物、柄杓、土師器皿出土。13 日、下底より曲物底板、漆器曲物、箸出土。
平成 6 年 1 月 6 日、5 年度調査区のすべての遺構の掘り下げ完了。
1 月 9・10・11 日、調査区内全体の清掃作業。
1 月 11 日、ヘリコプター（実機）による航空測量を実施。5 年度分の調査を完了。

《平成 6 年度の調査》

平成 6 年 4 月 20 日、重機械による表土除去作業開始。4 月 26 日に完了。
4 月 25 日、調査区内に 5 m × 5 m のグリッドを設定。グリッドは 5 年度調査区のグリッドに延長する形で設定する。同日、調査区南側より遺物包含層掘り下げを開始。随時、遺構プラン確認、遺構掘り下げを行い、8 月 25 日に遺物包含層掘り下げ、遺構プラン確認を完了。
6 月 15 日、1 号住居跡掘り下げ開始。土層断面ベルトをほぼ東西南北方向に十字に設定、遺物は埋土上層、埋土下層、下層に分けて取り上げ、出土状況をドットマップ化する。9 月 9 日に完掘。10 日にエレベーション図を作成する。
6 月 17 日、1 号溝（6 年度分 J・K 区）掘り下げ開始。9 月 22 日完掘。
7 月 13 日、3 号住居跡掘り下げ開始。土層断面ベルトをほぼ南北方向に 2 本設定、下層及び住居跡内の土坑の遺物は出土状況図を作成する。8 月 12 日完掘。
8 月 10 日、91・92・95・96 土坑掘り下げ開始。かなり多量の遺物が出土し、遺物出土状況図の作成を行ったが、95・96 土坑については、田用水の調査区内への流入によって遺物の出土状況が不明となり、出土状況図の作成を断念。
8 月 12 日、33 号土坑掘り下げ開始。ほぼ東西南北に土層断面ベルトを設定。8 月 18 日、覆土内に 8 世紀代の完形の須恵器が多く出土、土器廐棄土坑と判明。遺物出土状況図を作成し、8 月 31 日完掘。
8 月 29 日、100・103・104 土坑掘り下げ開始。8 月 31 日、これら 3 つの土坑は 1 つの竪穴住居跡であると判明。5 号住居跡とする。9 月 2 日、5 号住居跡のプラン把握。9 月 5 日、土層断面ベルトを南北方向 2 本、東西方向 1 本設定し、掘り下げ開始。遺物は埋土上層と下層の 2 層に分けて取り上げ、下層の完形・半完形遺物、中央落ち込み内の遺物の出土状況図を作成。9 月 23 日完掘。26 日エレベーション図作成。
9 月 11 日、現地説明会を開催。約 120 名の参加者。
9 月 26 日～10 月 4 日、調査区内全体の清掃作業。
10 月 2 日、6 年度調査区すべての遺構の掘り下げを完了。
10 月 4 日、ヘリコプター（実機）による航空測量を実施。今回の調査すべてを完了。

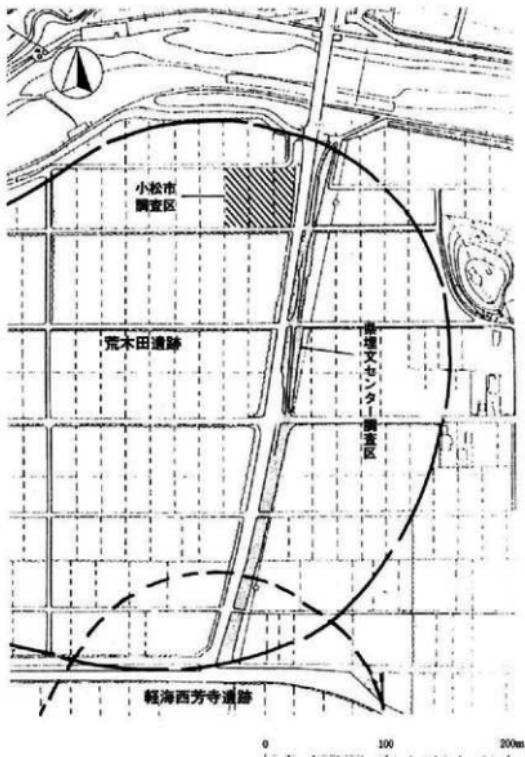
第3章 遺跡の概要と本調査の概要

第1節 遺跡の概要と既往の調査

荒木田遺跡はその名のとおり、荒木田町に所在する遺跡であるが、遺跡の所在が確認されたのは、比較的最近のことと、加賀産業道路本線工事においては、まだ確認されていなかった遺跡である。遺跡の発見は、当地域で行われた圃場整備工事中、石川県立埋蔵文化財センターが確認したもので、その後、昭和54年に詳細分布調査を実施している。この時の調査では、弥生土器、土師器、須恵器、綠釉陶器、青磁・白磁、中世陶器、瓦、石鎚、皇家通宝が採取され、弥生時代末から中世に至るまでの規模な複合集落遺跡であることが確認されている。

遺跡の範囲については、北を梯川、南を主要地方道小松下吉野線、西を佐々木町、東を荒木田町の集落域を境とし、遺跡面積約300,000m²を想定しているが、遺物散布地としての範囲であり、この中で、いくつかの集落単位が存在すると予想する。現に、今回の調査区域の北側と西側を送電線鉄塔建設のため5カ所ほど試掘調査しているが、全て地盤のしっかりした微高地ではなく、複雑に低地帯が入り込んでいることを確認している。遺跡は、微高地と低地が複雑に入り組む起伏に富んだ地形を利用し、集落が営まれていたものであり、それらが点在して大きな村を形成していくのだろう。平地化された現況での地形では、このような集落のまとまりが確認できず、遺跡どうしが重なり合う状況を生んでいるが、荒木田遺跡でも、南側を輕海西芳寺遺跡と、西側を佐々木遺跡と一部重複する。

荒木田遺跡は、今回の発掘調査が初めてではなく、平成4年度に、加賀産業道路四車線化工事に伴って石川県立埋蔵文化財センターが一部調査を行っている。およそ6m幅の調査区域で、拡幅工事区域



第4図 市調査区と県調査区の位置 (1/4,000)

4,250m²が対象となっており、北側半分が荒木田遺跡、南側半分が輕海西芳寺遺跡に包括されている。輕海西芳寺遺跡も類似した様相をもつため、遺跡として区切ることは無理があるが、輕海交差点より北へ100m付近からおよそ70mの区間は、ほとんど無遺構地帯となっており、両遺跡の境をここに設定することも可能である。荒木田遺跡はその箇所から北側に分布することになるが、150mまでは弥生時代後期の遺構や遺物が主に分布し、本調査区域の内容とは異なる様相をもつ。古代の遺構も存在するが、まばらであり、本地区の遺構分布の様相となるのは、本地区より南へ80m程度のところよりとなる。これに、本調査区の北西側へあまり延びない点や県埋蔵文化財センター調査の北端区域が遺跡の北東端にはほぼ位置することを考え合わせれば、一つの遺跡単位として括れる範囲は、半径70m程度になろう。集落単位というものは単位ごとに規模や性格が異なるのは当然であるが、村の中で中心的な集落と言えるものはこの程度の規模を有していたものと予想しており、それらが点在して大きな村を形成していたと考える。

以上、荒木田遺跡の概要を主に遺跡の範囲と遺跡単位分布の様相から述べたが、最後に、石川県立埋蔵文化財センターが平成4年度に実施した発掘調査成果を簡単に触れておきたい。

弥生・古墳時代 月影式期～白江式期を中心とする集落遺構が検出されている。遺構内容は河川1本、溝2条、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟で、河川跡からはまとまった土器群が出土している。

古代 8世紀後半を中心として、その前後の時期に営まれた集落遺構が検出されている。遺構内容は掘立柱建物跡14棟（うち縦柱建物4棟）、土坑3基、溝3条、そして水場遺構と言われる湧水をせき止める水溜め遺構が検出されている。遺構内には墨書き土器約130点をはじめとして（「荒木刀自」「岡万呂」などの人名の他、「兎橋」の郷名、「大家」「廻」「南房」の施設名、「殿長」の有力者の存在を示す墨書きも見られる）、木製盤や曲げ物などの木製食膳具、刀形・斎申・人形などの木製祭祀具、銅製・石製の帶飾具、鉄斧・鉄刀子・臼玉なども発見されており、單なる水溜め遺構ではない、祭祀的性格を色濃くもつ「水の祭祀場」であったと評価される。遺構は5～6次にわたって改築が行われ、8世紀中頃から9世紀前半頃まで使用されている。

中世 12～13世紀に位置付けられる集落遺構が検出されている。遺構内容は掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構1基、井戸1基で、井戸は曲げ物を井戸の側材に使用した12世紀後半に位置付けられるものである。



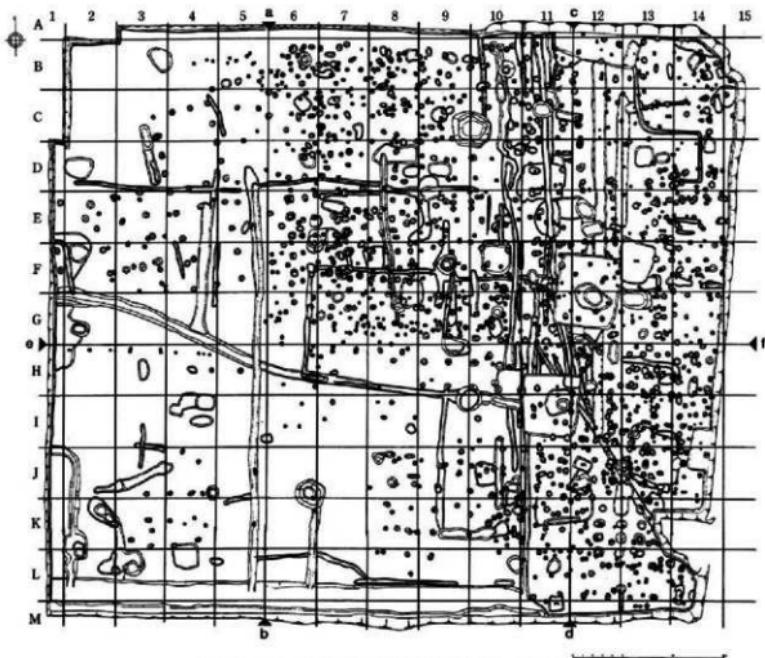
第5図 市調査区の遺構分布と県調査区の遺構分布

第2節 本調査の概要

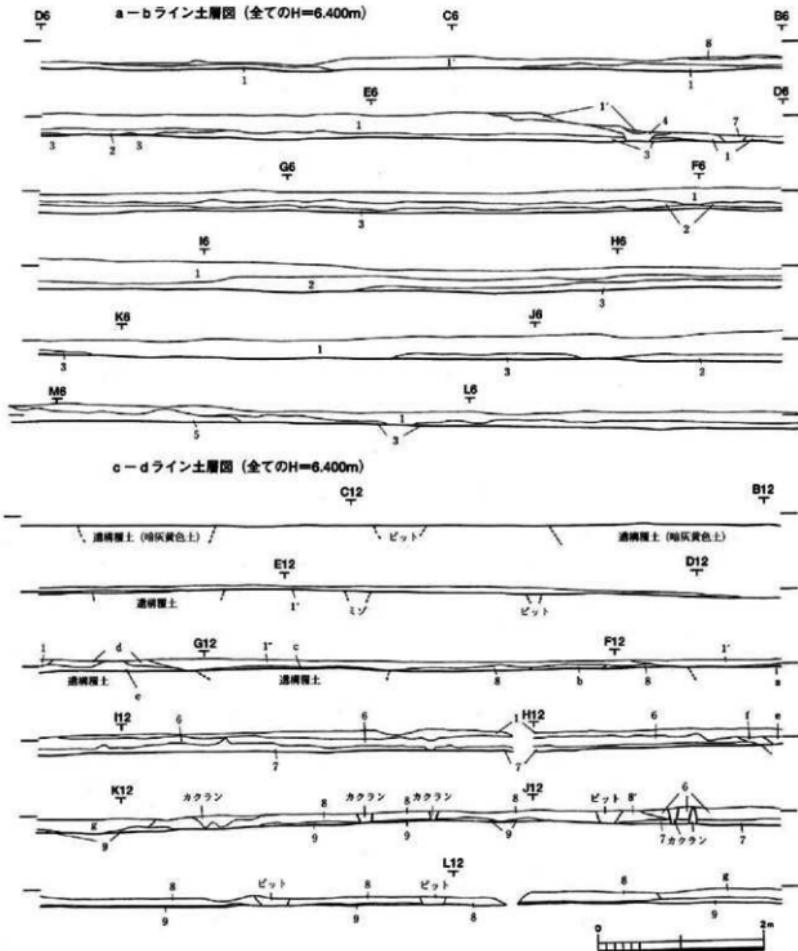
本調査区は、荒木田遺跡の北東側に位置する区域で、小松東部変電所建設用地内全域を対象としたものである。調査面積は平成5年度に2,500m²、平成6年度に1,553m²を実施しており、ほぼ全域で遺構・遺物を検出した。

調査区域は、既存の田圃3枚分、東西65m、南北60mのほぼ正方形の区域である。調査区のグリッド配置は、北西端を基軸として、調査区域の形状に沿って組まれている。区画は、5mメッシュで、グリッド番号は西から東へ1～15、北から南へA～Mとした。

発掘調査は、現況に田園經營時のカドミ防除客土や旧耕作土が厚く堆積していたため、遺物を包含する旧の遺構表土と想定される暗灰黄色砂質土（1層）のレベルまで重機で掘削除去した。ただし、旧表土は、主に西側で厚く確認できたが、東側では薄くなるか、既になくなっている部分が多く、北東側では旧耕作土下がすぐ地山粘土となっている部分もあった。遺構は、この1層直下の層から掘り込まれており、遺構上面に1層が被覆する状況であった。当調査区の遺構は、後で詳しく述べるが、中世、古代、古墳時代の3時期が重複しており、遺構の掘り込み土層が異なる様相が見られる。中世の遺構でも時期差はあるが、いずれも1層直下の層を切って掘られている。1層直下には2層、6層、11層があるが、この下に下層の3層・8層があり、古代の遺構はこの層を切って掘られ、その上に1層直下層が堆積し



第6図 グリッド配置と包含層土層図の位置 (S=1/500)



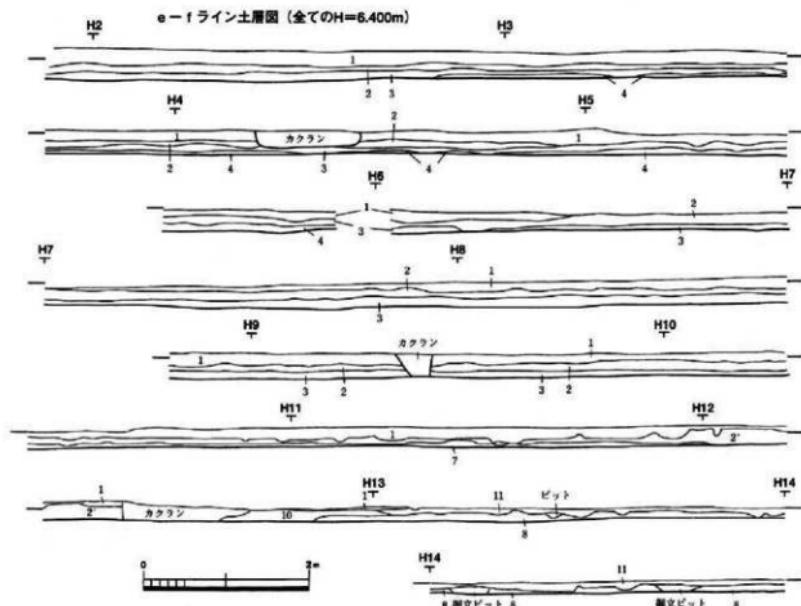
包含層土層注

- 1層：暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 白色砂含む。
 1'層：暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 砂質強く、白色砂多量。
 1''層：灰黃褐色砂質土 (10YR4/2) 白色砂多目。
 2層：暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 棕色吹出多、炭化粒多量。
 2'層：暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 棕色吹出極多、炭化粒多量。
 3層：オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/3) 棕色吹出多、炭化粒多目。
 4層：灰黃褐色砂質土 (10YR5/4) 黒色小塊含。
 5層：暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 黑色小塊含。
 6層：灰黃褐色砂質土 (10YR4/2) 棕色吹出多、小石・黒土塊含。
 7層：灰黃褐色砂質土 (10YR4/2) 棕色吹出極多、黒土塊含。
 8層：暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) 黑土塊含、灰黃褐色土少混。
 8'層：暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) 棕色吹出多、黒土塊多。
 9層：灰黃褐色粘土 (10YR5/2) 黑土塊多、暗灰黄色土少混。
 10層：灰色粘土 (5Y6/1) 棕色吹出多。
 11層：暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) 黑土塊少含。

第7図 包含層土層断面図(1) (S=1/60)

ている。古墳時代の遺構は、下層の下に存在しており、確認面は地山粘土層となる。以上をまとめると、中世の生活面を1層直下の面に、古代の生活面を1層直下層の下の面に、古墳時代の生活面を今回地山として捉えた白色系の粘土層にそれぞれおくことができるが、これは断面図で確認できたのみで、明瞭な間層などを挟まなかったことにより、掘り下げ時の調査では明確に面を把握できていない。よって、遺構のプラン確認も、中世遺構など部分的には上面で止めた箇所もあるが、最終的には地山粘土層の一面でプラン確認を行っており、そこまでを遺物包含層として一括で遺物を上げながら掘っている。ただし、確実に上面で遺構把握ができた箇所は、遺構上面の遺物として取り上げている。

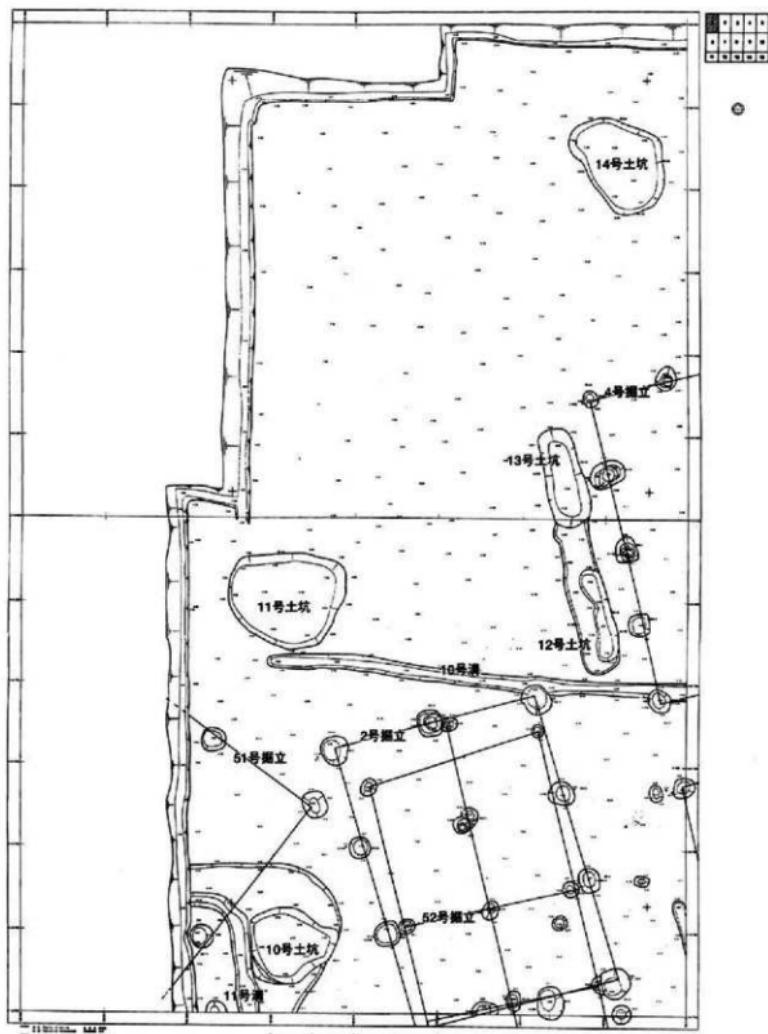
遺構の掘り下げは、土層観察のためのセクションベルトを各遺構で任意に設定して行っており、溝は凡そ5m間隔で、竪穴や大型土坑は「十」字か「キ」字に、井戸や小型土坑、掘立柱建物跡柱穴は長軸に沿って設定した。遺物の取り上げは1号竪穴住居跡のみで出土遺物のドットマップを作成したが、その他の遺構はまとまりをもった遺物のみ残すようにし、層位で随時遺物を取り上げた。残した遺物の出土状況は平面図と写真で記録し、井戸に関しては完掘後の平面図と井戸側見通し図を作成した。完掘状態の断面図は掘立柱建物跡や竪穴住居跡など随時作成し、全ての遺構完掘後、航空写真測量を実施した。



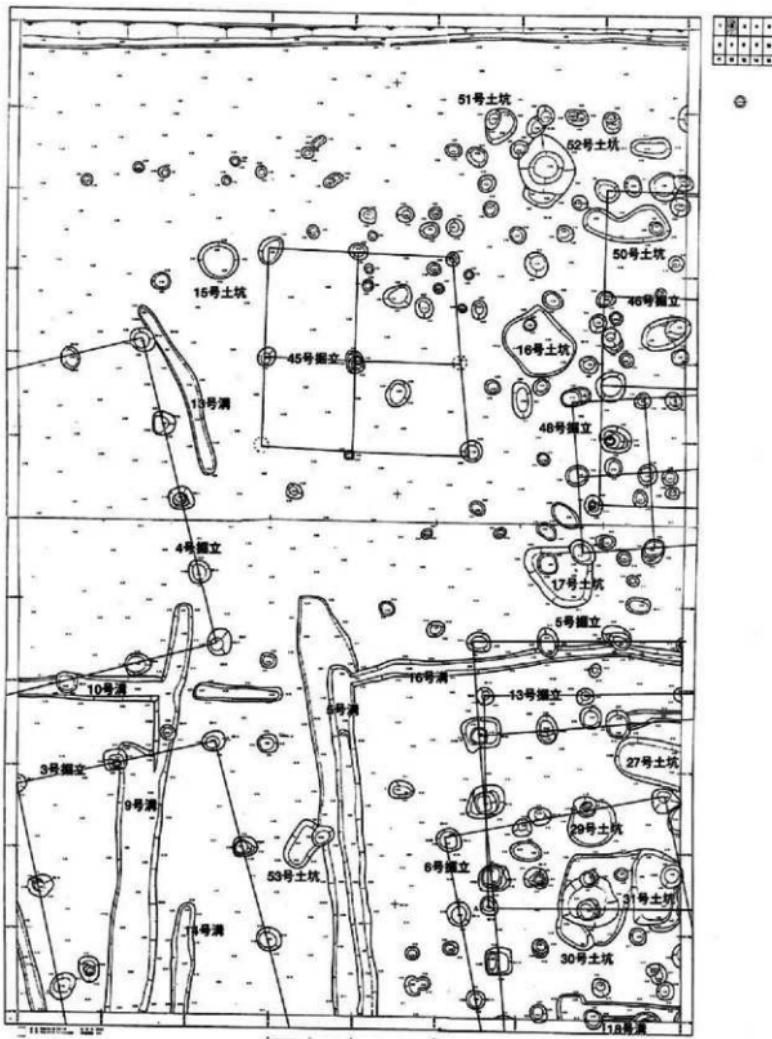
包含層中遺構覆土土層図

- a層：灰黄褐色土（10YR4/2）炭化粒・炭化塊多、白色砂少量含。
b層：灰黃褐色土（10YR4/2）黑土混含。地山土混。
- c層：黒褐色土（10YR3/2）と灰黃褐色土（10YR4/2）と混在。
- d層：黒褐色土（10YR3/1）と暗灰黃色砂質土（2.5Y4/2）と混在。
- e層：黒褐色土（10YR3/1）と灰黃褐色土（10YR4/2）と混在。白色砂含。
- f層：黒褐色土（10YR3/1）と灰黃褐色土（10YR4/2）と混在。白色砂、炭化粒少量含。
- g層：灰黃褐色土（10YR4/2）小石多含。黒褐色土まじる。
- h層：黒褐色土（7.5YR3/1）含有物少なく、粘土質。白色砂含。

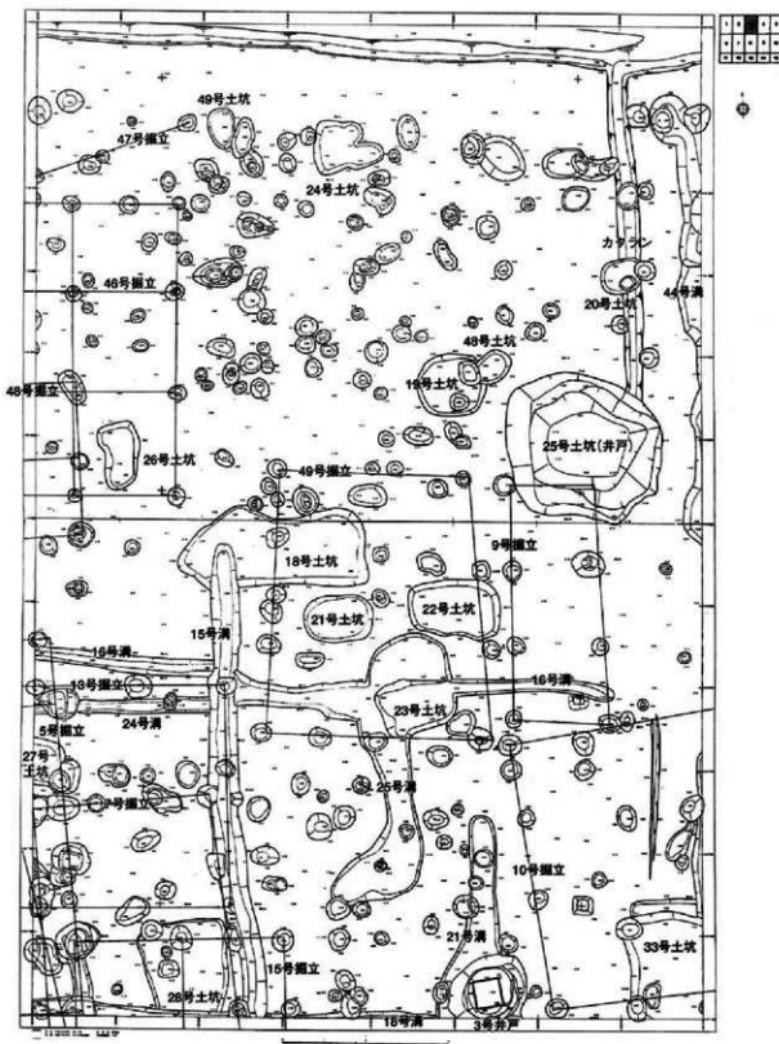
第8図 包含層土層断面図(2) (S=1/60)



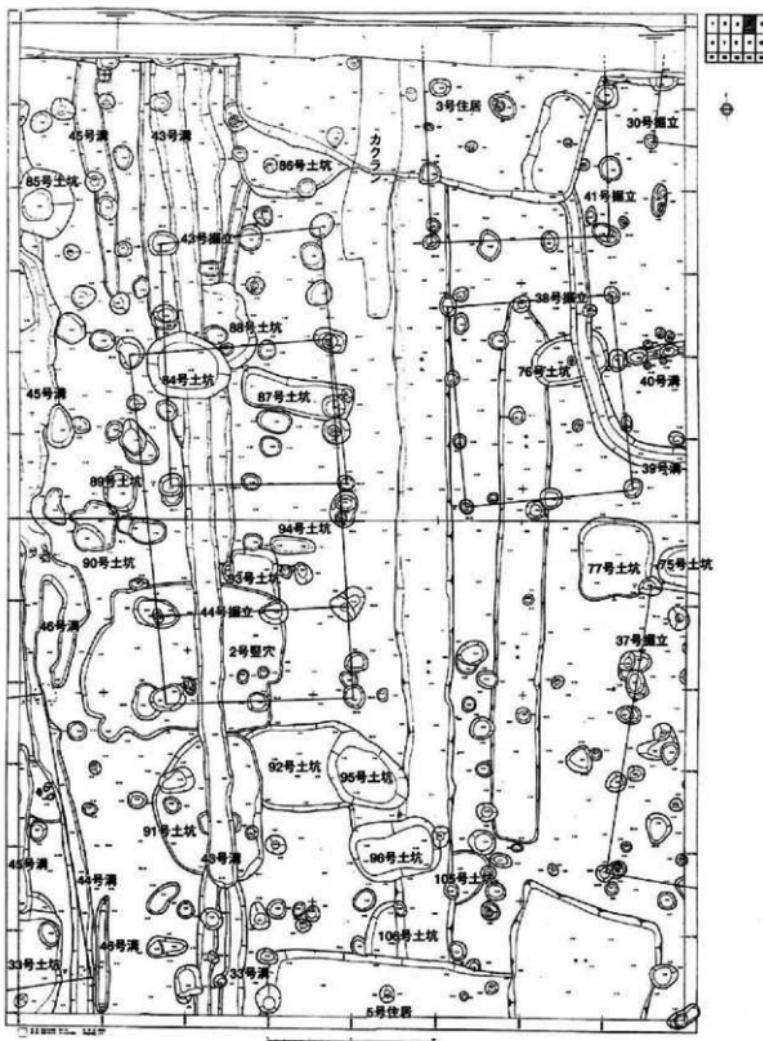
第9図 荒木田遺跡平面図(1) ($S=1/120$)



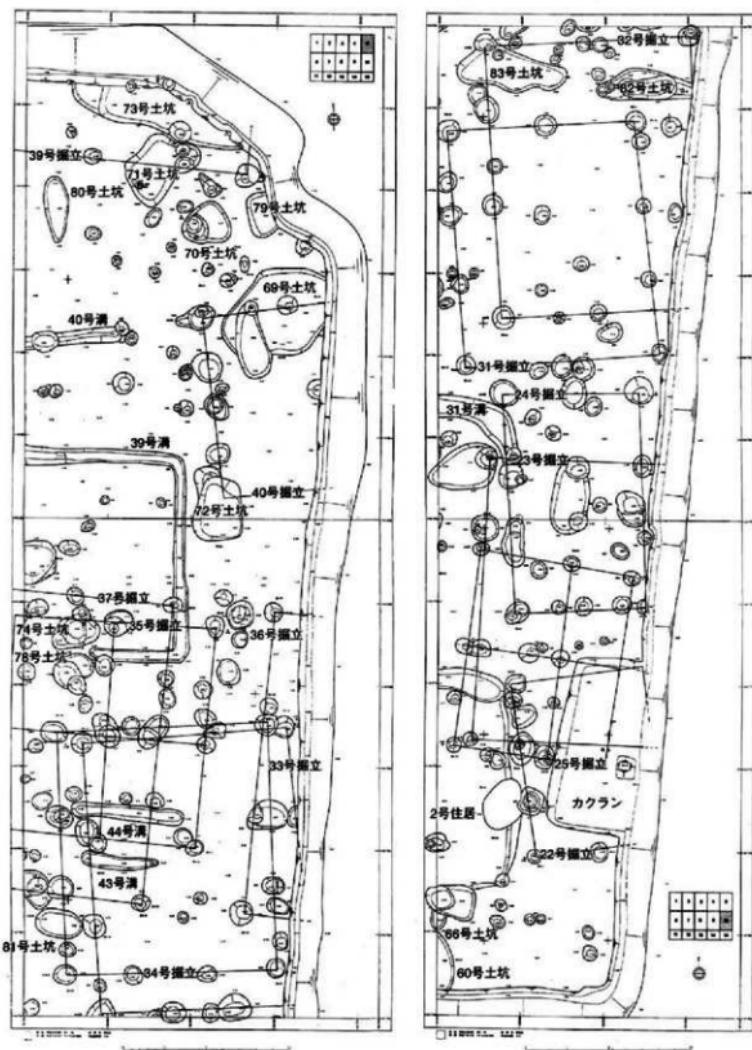
第10図 荒木田遺跡平面図（2）(S=1/120)



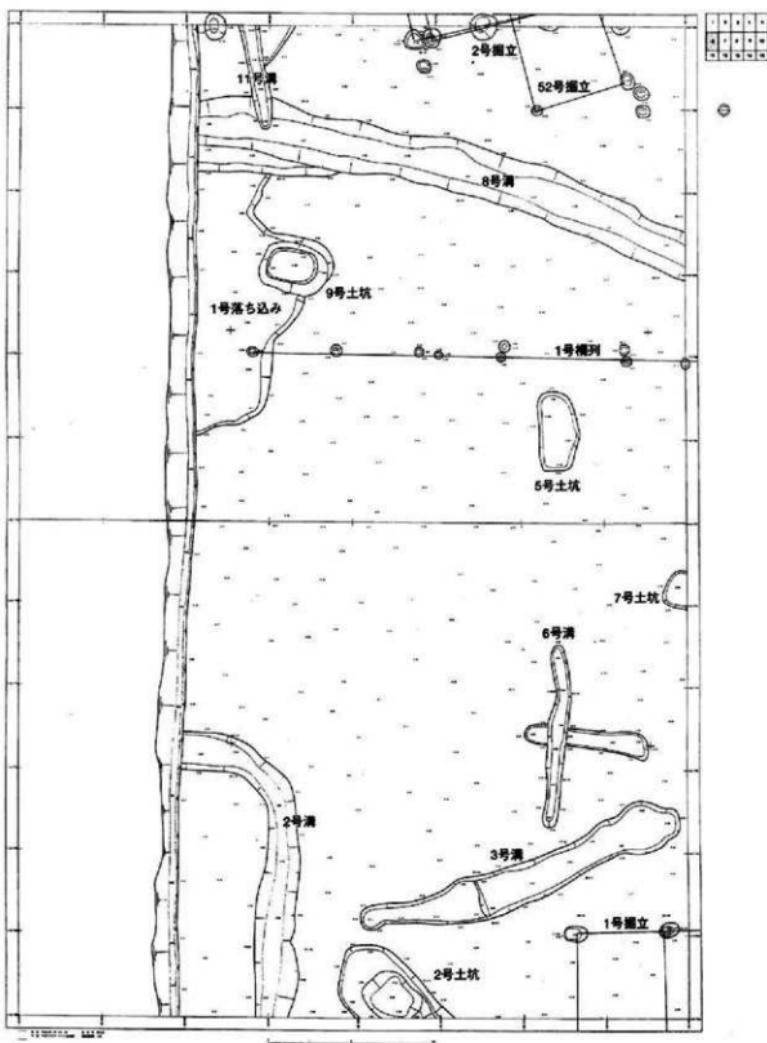
第11图 荒木田遺跡平面図（3）(S=1/120)



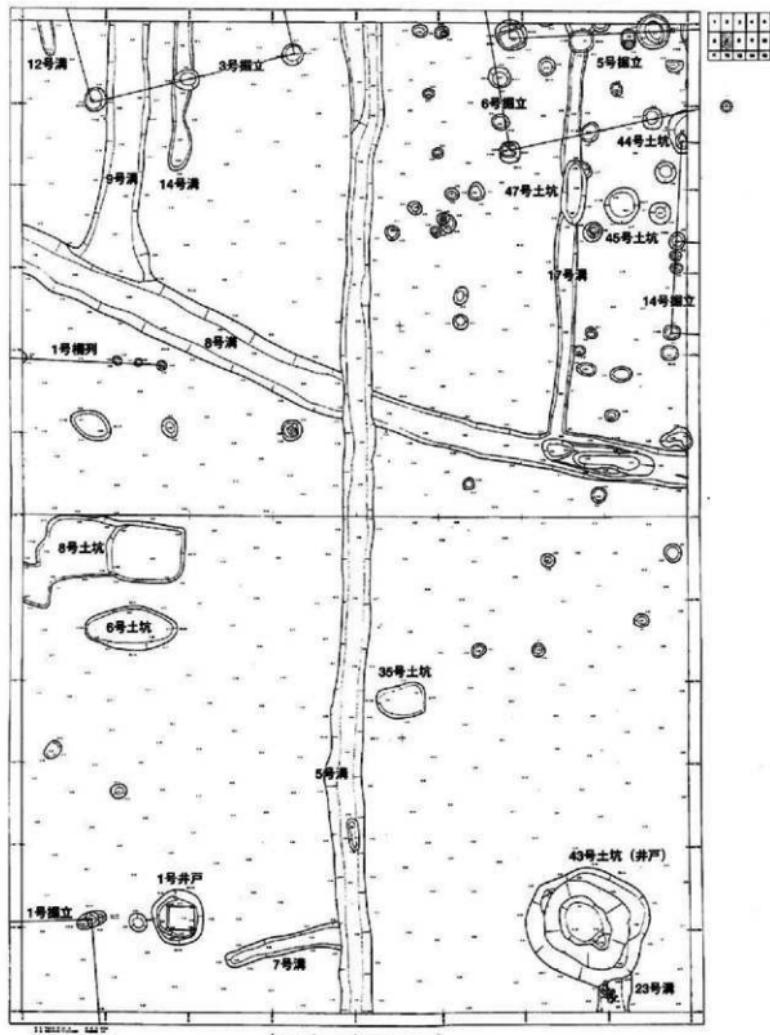
第12図 荒木田遺跡平面図(4) (S=1/120)



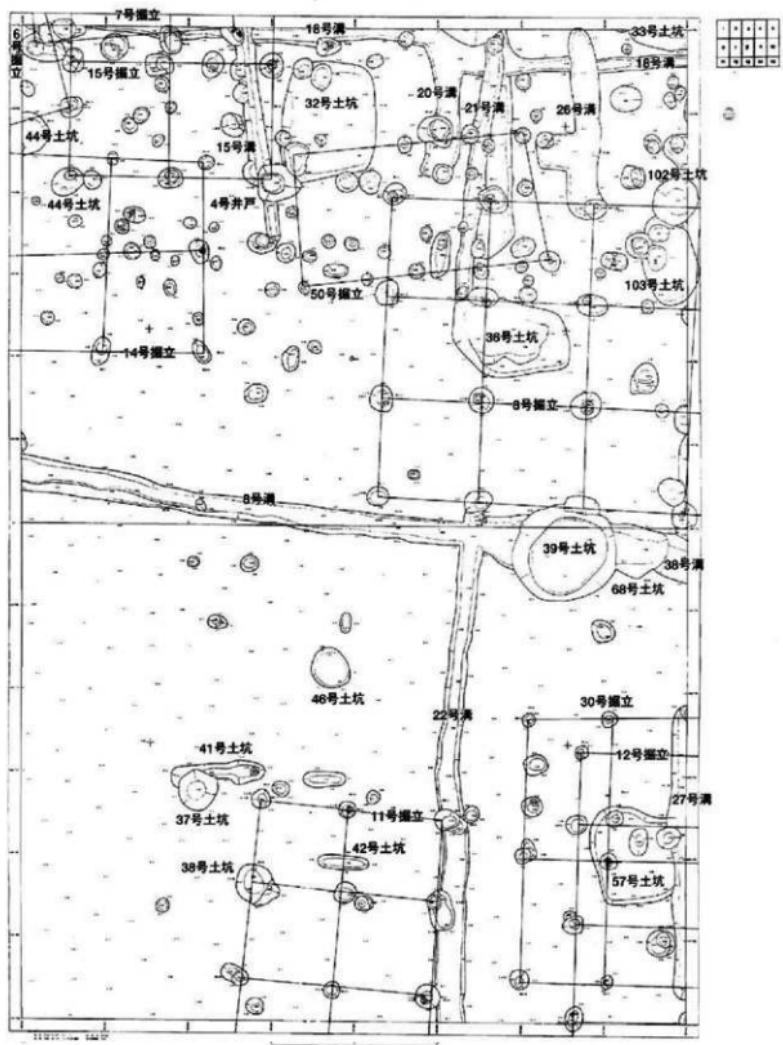
第13図 荒木田遺跡平面図(5)・(10) (S=1/120)



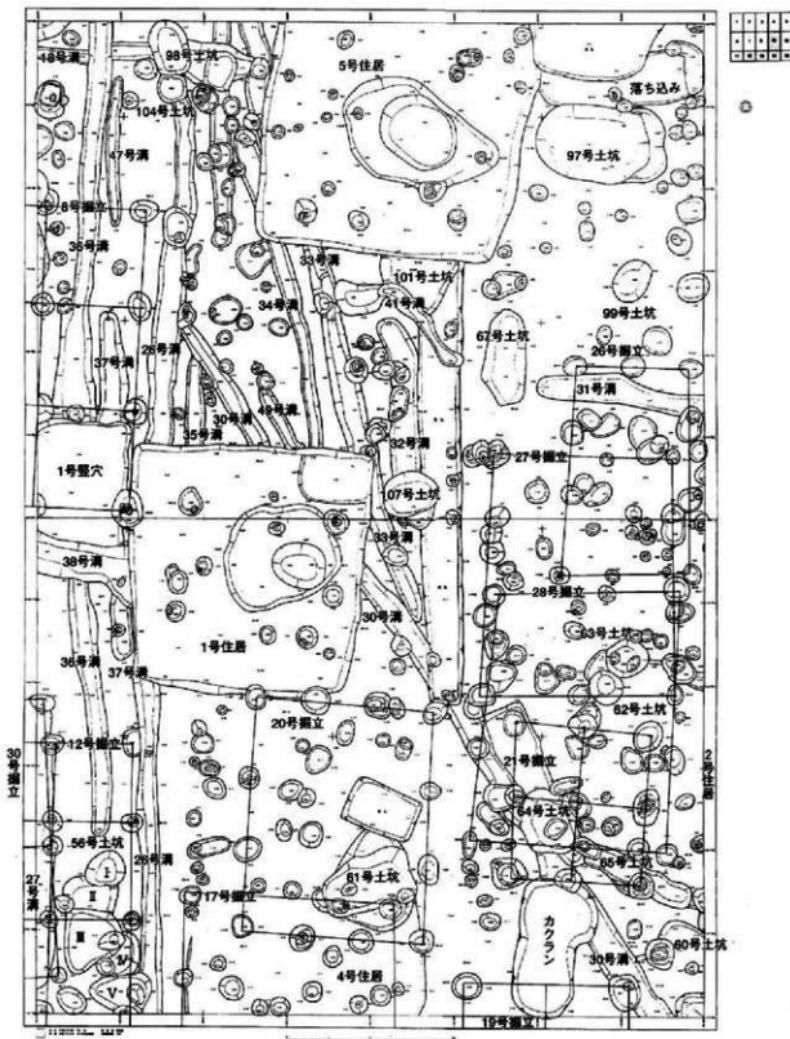
第14図 荒木田遺跡平面図 (6)(S=1/120)



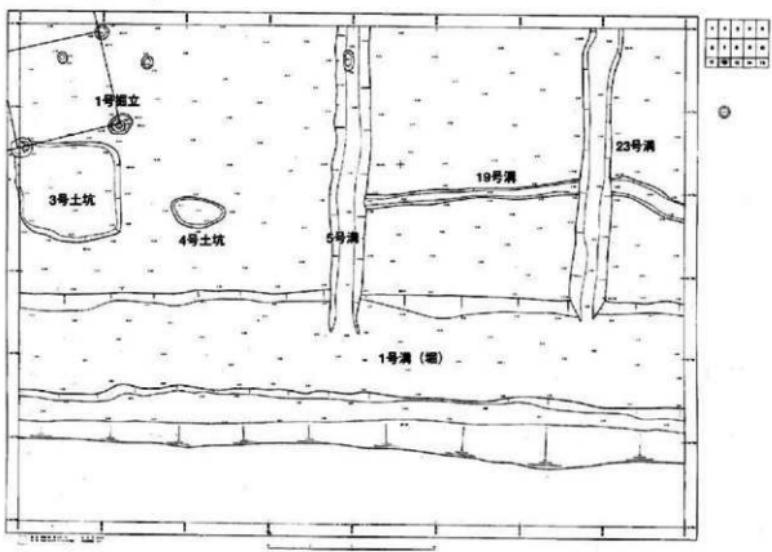
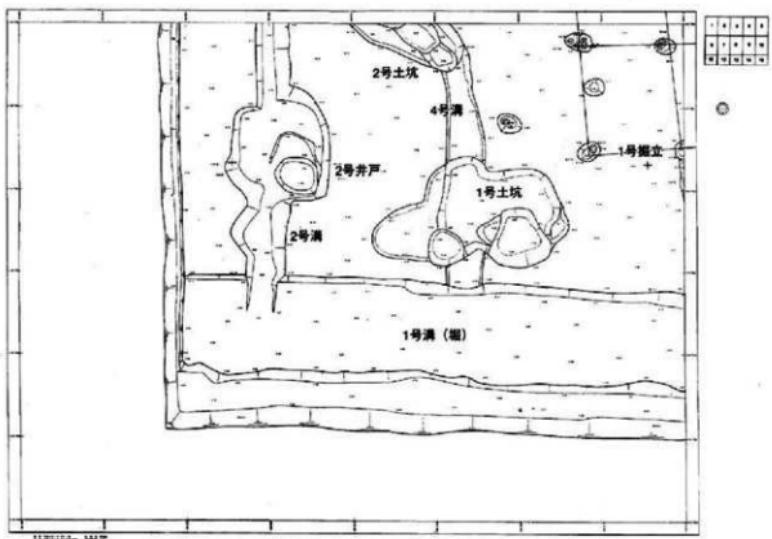
第15図 荒木田遺跡平面図(7) (S=1/120)



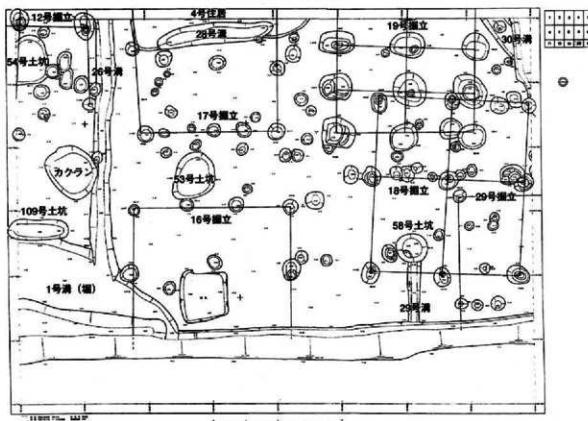
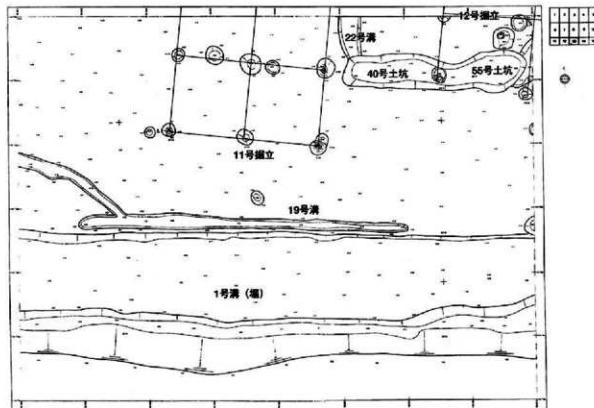
第16図 荒木田道路平面図（8）(S=1/120)



第17図 荒木田遺跡平面図(9) (S=1/120)



第18図 荒木田遺跡平面図 (11・12) (S=1/120)



第19図 芦木田遺跡平面図 (13・14・15) (S=1/120)

第4章 発見された遺構の内容

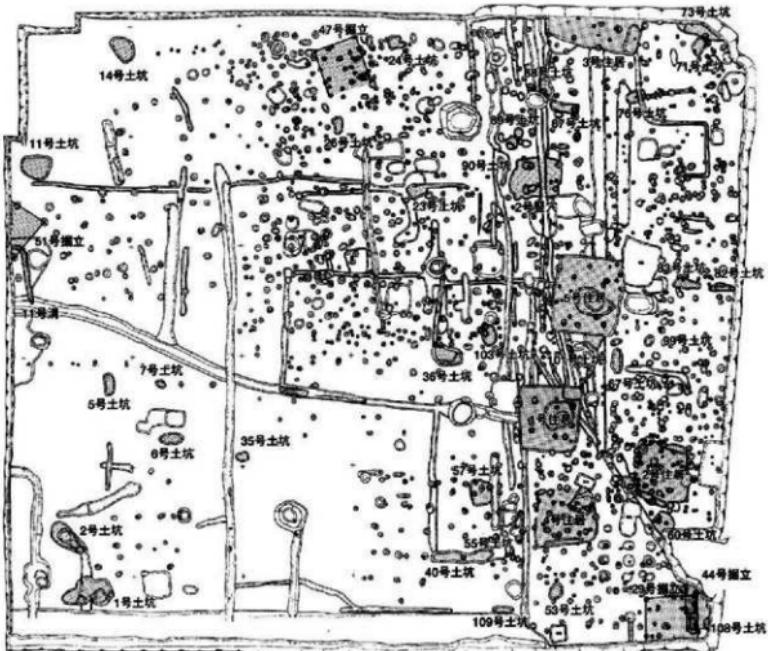
第1節 古墳時代の遺構

第1項 概要

弥生時代後期（法仏一月影式）頃の土器が少量出土しているが、弥生期の遺構ではなく、いずれも混入的な出土の仕方をする。石川県立埋蔵文化財センターが調査した区域に、この時期の遺構が確認されており、そこからの混入と考えるのが妥当である。その後、古墳時代前期前半（白江式期）の土器が極僅かに出土するが、弥生期的なものであり、当地区で確実な遺構を伴うのは古府クルビ式以降となる。

古墳時代の土器は主に中期に主体をおくもので、田嶋明人氏の漆町編年案10群土器以降に主体をおくものである。漆町7群に漸る資料もあるが、良好な資料は土坑1基のみであり、中心は10群から13群である。13群の時期をもって退跡は衰退へと向かうが、からうじて14群の時期（6世紀初頭頃）まで土器は入っており、この時期が集落の移動期と推察する。その後、再び集落が営まれるのは、古代II3期（8世紀初頭）であるが、僅かながら古代II2期（7世紀後葉）から土器は入っており、この時期が再度移動してくる時期にあたるものと言える。

古墳時代中期に位置付けられる遺構は、竪穴住居跡と土坑が主である。掘立柱建物跡も提示したが、



第20図 古墳時代の遺構分布 (S=1/500)

柱間隔などから平地式住居とすべきものかもしれない。時期認定も含め、当期の掘立柱建物跡は実態がよくつかめていないのが現状である。第2図には、当期に位置付け可能な遺構分布図を示してある。これを見ると、調査区の中央付近の無遺構空間を境に東西で、二つの遺構のまとまりが確認できる。そして、中央北側の47号掘立柱建物跡と記した区域にも土坑や当期の土器を出土する柱穴が検出される状況から、ここも一つの空間として考えれば、3つの遺構分布が存在することになる。

東側の区域は、主に竪穴住居跡が分布している。竪穴住居跡は4本主柱穴が確認でき、確実なものが3軒（1・3・5号）、柱穴は未確認だが竪穴住居跡と判断したものが2軒（2・4号）、土坑や竪穴状遺構としたが、竪穴住居跡の可能性をもつものが2軒（2号竪穴と73号土坑）確認されている。いずれも東に主軸をもって、重複なく、南北に並んで、等間隔に近い距離で、整然と建てられている。竪穴住居跡の集中する区域には同時期の遺物を出土する土坑が比較的多く存在する。竪穴住居どうしの間や南北に並ぶ竪穴の列の西側に隣接して存在するものが多く、竪穴住居に関連して作られた土器廐棄土坑と位置付けられる。

西側区域では土器廐棄土坑が主に分布する。廐棄土坑は1号土坑や2号土坑など土器の出土が極めて多いものがあり、須恵器を混在する土坑が多いことも特徴である。竪穴住居跡の検出はないが、51号掘立柱建物跡や11号溝の所に浅い窪地があり、ここで当期の土器を出土するなど建物の存在する可能性は高く、土坑の位置や北西部でゆるく下がっている地形から考えて、当調査区の南西側に建物域が存在するものと予想する。

中央北側区域は土器廐棄土坑数基と掘立柱建物跡1棟のみであるが、先述したように、当期の土器を出土する柱穴が分布している。ピット密集区であるため建物の把握はできていないが、未検出の掘立柱建物跡や平地式住居がまだ数棟存在するものと予想する。これより北側の区域は梯川へむかって傾斜し、低地帯となっているため、北へ延びることは考え難く、東側区域の竪穴住居を中心とする単位と明確に区分されて一つの単位を形成するかどうかは難しい問題である。

第2項 竪穴住居跡

竪穴住居跡として報告したものは5軒であるが、竪穴状遺構とした2号竪穴や竪穴住居の可能性をもつ73号土坑もあわせて述べる。

1. 1号竪穴住居跡

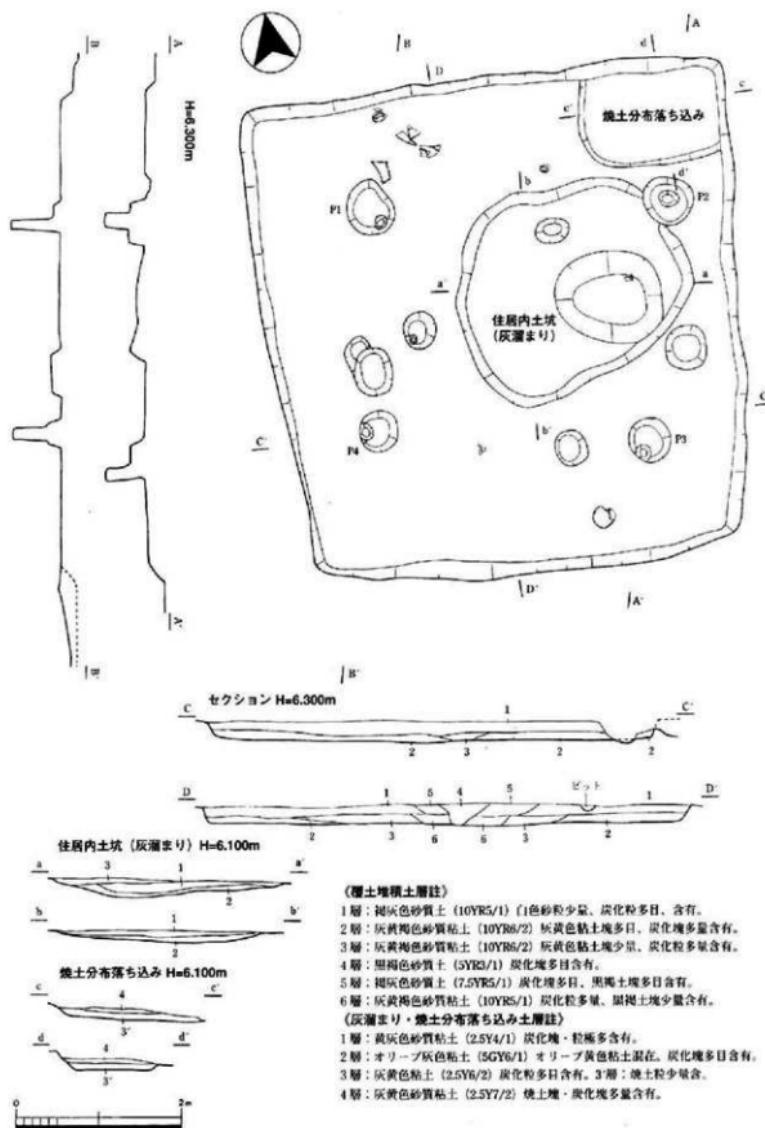
（位置と方位） 2次調査区の西寄りに検出されたもので、包含層除去の段階で竪穴住居と予想されていた遺構である。主軸はE-12-Sを示す。

（規模と形態） 東西570cm×南北600cmのやや横に長い正方形竪穴で、壁高は25cmを測る。床面は貼り床せず、地山のままで、平坦にしてある。床面積はおよそ34m²を測る。

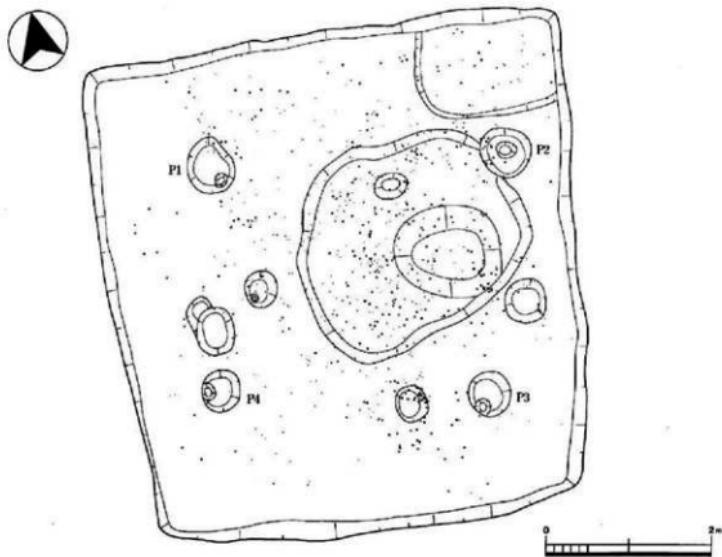
（柱穴） P1-P4が四本主柱穴となり、やや東側に偏って掘られている。柱穴掘り方は径50~60cmの円形で、15~20cm径の柱痕をもつ。深さはいずれも60cm前後あり、細くて深い柱穴の特徴をもつ。

（炉又は火廻） 北東隅の壁際から1m程度の範囲で焼土塊を多量に混在した床面の高まりがあり、その下には極浅い掘り込みがある。しっかりした焼土面を形成していないが、竪穴住居に伴う火廻であると判断する。

（住居内土坑） 主柱穴間のやや東へずれて存在する不整形の土坑で、240×290cmを測る。最深部で25cm程度の浅いすり鉢状を呈し、土坑上面（住居床面レベル）には多量の炭化塊・粒の混じる灰層的な土が存在している。形態的に貯蔵穴と言えるものではなく、当期の竪穴住居に見られる特殊ピットとは構造的な違いがある。どちらかと言えば、弥生時代後期の灰溜めピットに近いが同一の性格をもつかど



第21図 1号竪穴住居平面・断面図 ($S=1/60$)
(土器は床面出土土器)



第22図 1号竪穴住跡出土遺物ドット図（ドットの小は覆土上層、ドットの大は覆土下層）(S=1/60)
うかは不明である。

（覆土堆積状況） 土層断面図を見ると、住居内土坑の上のみ異なる土層が入り込んでおり、あたかも上からの掘り込みに見えるが、基本的には砂質の強い上層土（1層）と粘質を帯びる下層土（2・3層）に縱のレベルで分けられる程度で、かなり一気に埋め戻された状況であると予想する。横の土層変化は下に住居内土坑が存在していたための土質変化であろう。

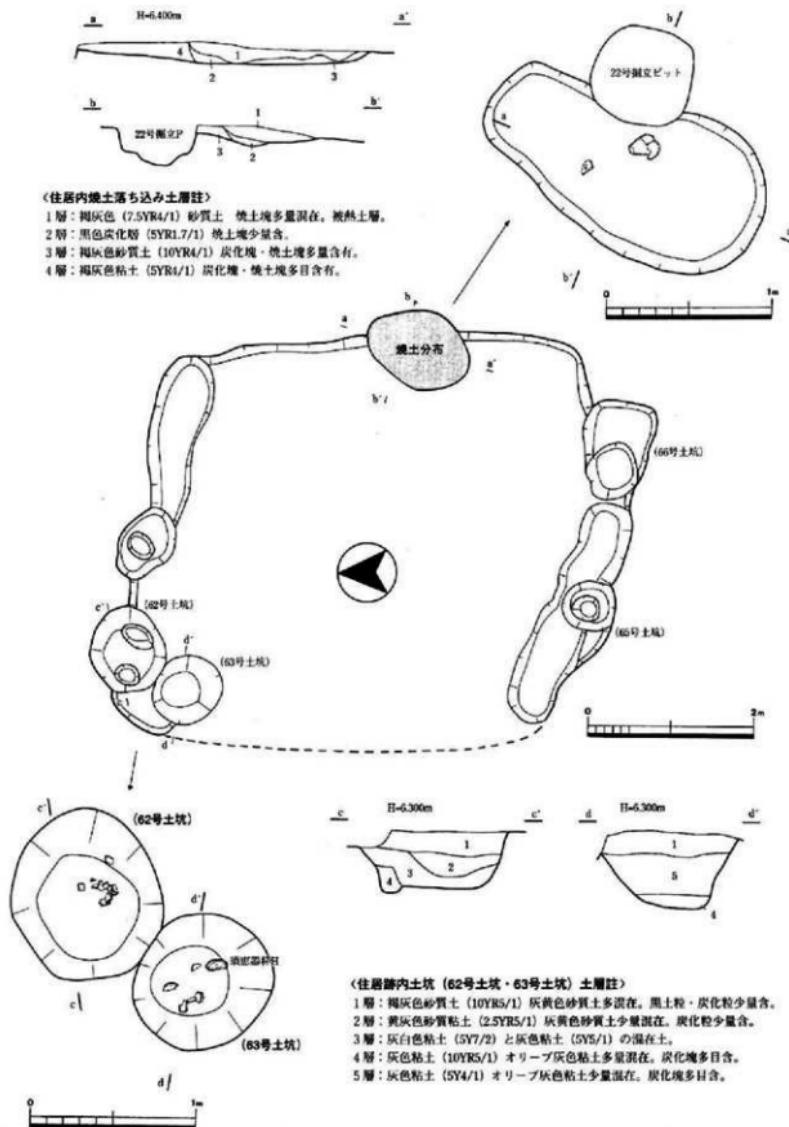
（遺物出土状況） 遺物は、上層で祭祀的な特殊石製品が一点ある以外は、ほとんど土器である。分布は、住居中央付近を中心とするが、上層から下層までまとまりなく存在しており、埋没土層内に混在させて捨てられたものであると考える。埋土内の土器はほとんど小さな破片であり、一括廃棄された様相はない。また、平面図に示したとおり、床面付近からも土器は出土しており、これらに関しては住居廃絶時か直後に廃棄されたものと判断されよう。

2. 2号竪穴住跡

（検出状況と予想プラン） 包含層除去の時に焼土が検出され、住居を予想し、精査したが、竪穴プランは東側の壁ラインのみ確認できただけで、明確にはつかんでいない。ただ、土坑として調査した62・63号土坑や65・66号土坑から古墳時代中期の土器が出土しており、土坑の位置関係から考えて、この範囲を竪穴住跡と予想した。

（予想される規模と方位） 焼土、土坑の位置関係から推察して、南北550cm、東西500cm程度を測るやや南北に長い方形竪穴と考える。床面積は推定で27m²前後。主軸は他の竪穴住居と類似するE—3—Sと予想する。

（柱穴と住居内土坑） 4本主柱穴は検出されておらず、竪穴外柱穴や2本柱穴など、他の柱配置を想像させる。2本柱とすれば、竪穴中央付近南北軸で径25cm、深さ30cm程度の細く深めのピットが2個並ぶが、2本柱としてはやや浅く、確実性に欠ける。住居内土坑は1号竪穴住居のような形態のもの



第23図 2号竪穴住居跡平面及び住居内土坑・落ち込み図 (S=1/60、1/30)

はなく、竪穴北西隅に径80~90cm、深さ30~40cmの円形土坑が2基並んで検出される。覆土は炭化塊混じりのもので、陶器・漆器等が下層に廃棄されている。貯蔵穴的な性格を予想する。

(炉又は火鉢) 東壁際の中央付近に1号竪穴住居跡と類似する焼土分布が見られる。1m程度の範囲で、焼土の下に浅い掘り込みをもつなど、類似した火鉢施設をもつものと予想する。

(遺物出土状況) 住居埋土を明確につかんでいないため、竪穴住居として取り上げた遺物はないが、包含層掘り下げを行った状況では、概して土器の出土が少なかったと記憶している。貯蔵穴状の土坑から出土する土器を当住居跡の遺物として扱いたい。

3. 3号竪穴住居跡

(位置と方位) 2次調査区の北端に位置する竪穴住居跡で、竪穴住居の北側2/3以上が調査区域外にかかっている。主軸は他の竪穴住居と類似した方位をもとと仮定した場合であるが、E-15-Sを示しており、1号竪穴住居跡とかなり近似した方位をもつ。

(規模と形態) 南側1/3の調査であるため、東西軸の規模は870cmと測れるが、南北規模は不明である。ただ、他の竪穴住居が南北にやや長いことを考えれば、南北900cm程度の規模を有する可能性はある、75m以上の床面積をもつ可能性がある。当遺跡最大規模の大型住居と位置付け可能である。床面は貼り床をもたず、地山のままで、平坦に作ってある。

(柱穴) 主柱穴は4本主柱穴のうちの2本(P1・2)が検出されている。径30cm前後、深さ50~60cmのしっかりした柱穴である。

(住居内土坑) 住居内の南東隅に260×125cm、深さ20cmを測る長椭円形土坑が掘られている。土坑形態や掘られる位置が、1号竪穴住居跡の住居内土坑と異なっており、同一の性格とは言い難いが、覆土に炭化塊を多く混在させる点では類似性をもつ。

(覆土堆積と遺物出土状況) 1号竪穴住居跡覆土同様、砂質の強い上層土(1・3層)と粘質性に富む下層土(2・4層)とに分けられるが、遺物の出土を見る限り、どちらかに偏る様相ではなく、一気に埋め戻され、その埋土内に土器が混在したものと考えられる。平面的にも遺物分布の偏りはなく、概して出土量は少ないと言える。床面付近からの出土も少なく、意識的に廃棄されたような土器は確認されていない。

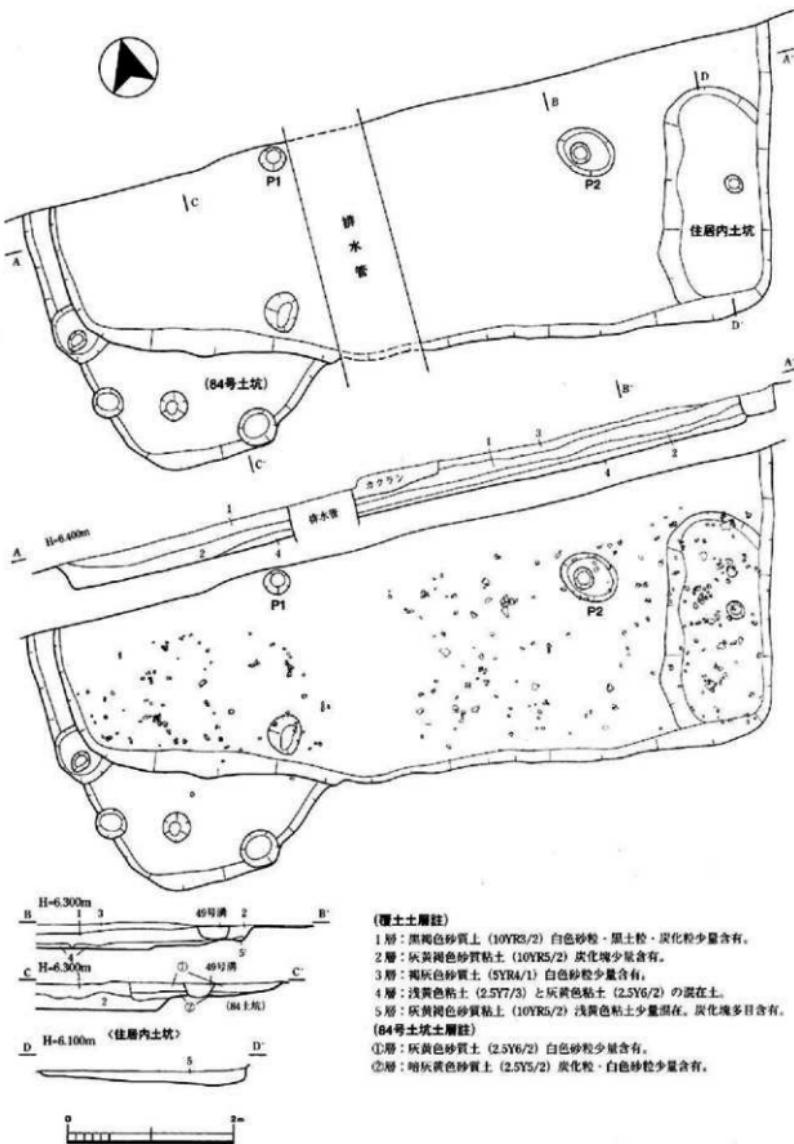
4. 4号竪穴住居跡

(検出状況と予想プラン) 重機による表土除去の際に、竪穴住居跡覆土を削平してしまったもので、部分的にしか竪穴住居跡覆土は残っておらず、竪穴プランの全体的な把握はできなかった。ただし、南側と東側の壁を確認できたこと、そして西側の一部の壁を検出できたことから、おおむね竪穴プランは想定可能である。なお、28号溝、61号土坑としたものは、当遺構に伴うと判断している。

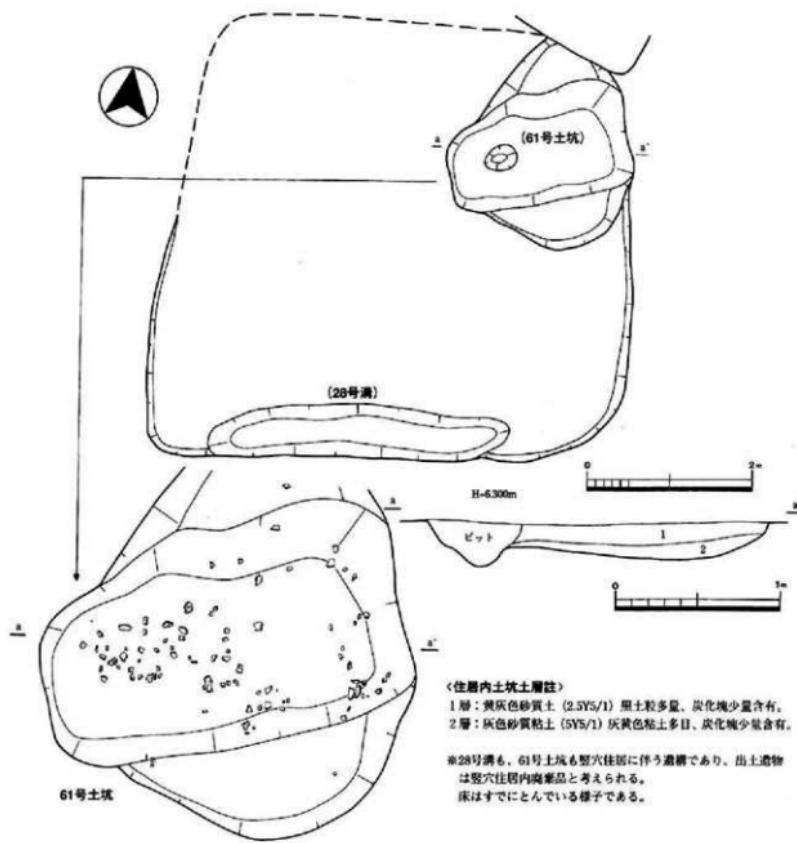
(予想される規模と方位) 一部残存する壁の立ち上がりから、東西580cm、南北600cm程度、推定床面積35m²前後を測る方形の竪穴であると予想する。壁ラインより主軸を求めるに、他の竪穴住居同様、ほぼ東に向くが、E-7-Nとやや北側に振っている。

(柱穴と住居内土坑) 4本主柱穴は検出されておらず、竪穴外柱穴や2本柱穴など、他の柱配置を想像させる。2本柱とすれば、竪穴中央付近南北軸で径30cm、深さ20cm程度のピットが2個並ぶが、2本主柱としてはやや浅く、確実性に欠ける。住居内土坑は北側寄りに、掘られており、61号土坑としたものである。260×220cmの不整形のもので、中央付近が椭円形状に一段深くなつて、20cmを測る。覆土には炭化塊を含むが、1号竪穴住居のような灰層とは異なり、同一の性格を有するかは疑問である。

(遺物出土状況) 住居埋土を明確につかんでいないため、竪穴住居として取り上げた遺物は少ないが、住居内土坑から少なからず土器が出土している。



第24図 3号竖穴住居跡平面・断面・遺物出土状況図 (S=1/60)



第25図 4号竪穴住居跡平面及び住居内土坑平面・断面図 (S=1/60, 1/30)

5. 5号竪穴住居跡

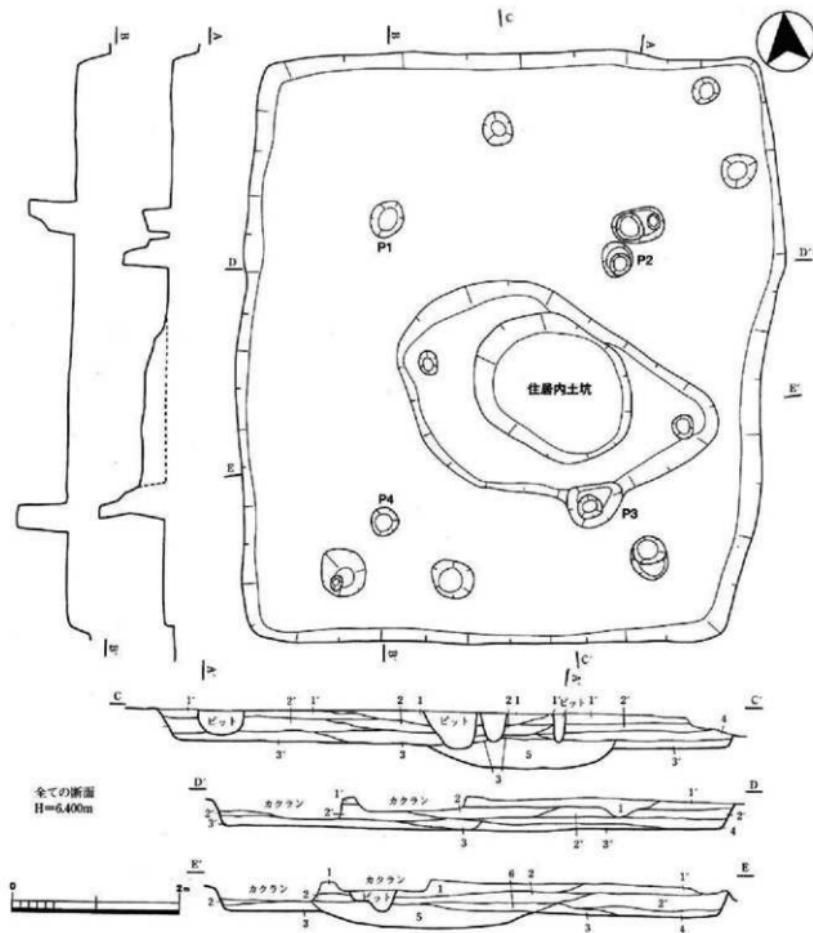
（位置と方位） 2次調査区中央のやや西寄りに検出されたもので、包含層除去の段階で多量の土器が出土し、竪穴住居と予想されていた遺構である。主軸はE—7—Sを示す。

（規模と形態） 東西635cm×南北715cmのやや横に長い方形竪穴で、壁高は38cmを測る。床面は貼り床せず、地山のままで、平坦にしてある。床面積は約45m²を測る。

（柱穴） P1～P4が四本主柱穴となり、南側に偏って掘られている。柱穴掘り方は径35～45cmの円形で、径20cm程度の柱痕をもつ。深さは60～80cmと深く、1号竪穴住居跡柱穴の特徴と類似する。

（炉又は火廻） 火廻としての焼土分布はなく、焼土塊の覆土への混在も少ない。

（住居内土坑） 4本主柱穴間に掘られる不整形の土坑で、250×390cmを測る。最深部で40cm程度を測る深めの土坑で、断面形はすり鉢状を呈す。土坑埋土上層には多量の炭化塊・粒が混在しており、底面近くにかけて多くの土器を出土する。土坑の位置や形態、埋土の特徴など1号竪穴住居跡内土坑と



〈覆土土層註〉

1層：黒褐色砂質土 (SYR3/1) 塩化物多量、白色砂粒少量含有。

1層：褐灰色砂質土 (SYRS/1) 塩化物多日含有。

2層：灰黃褐色砂質土 (10YR4/2) 塩化物多量含有。

2'層：灰黃褐色砂質粘土 (10YR5/2) 塩化物多日含有。

3層：オリーブ灰色粘土 (SGV5/1) 塩化物多日含有。

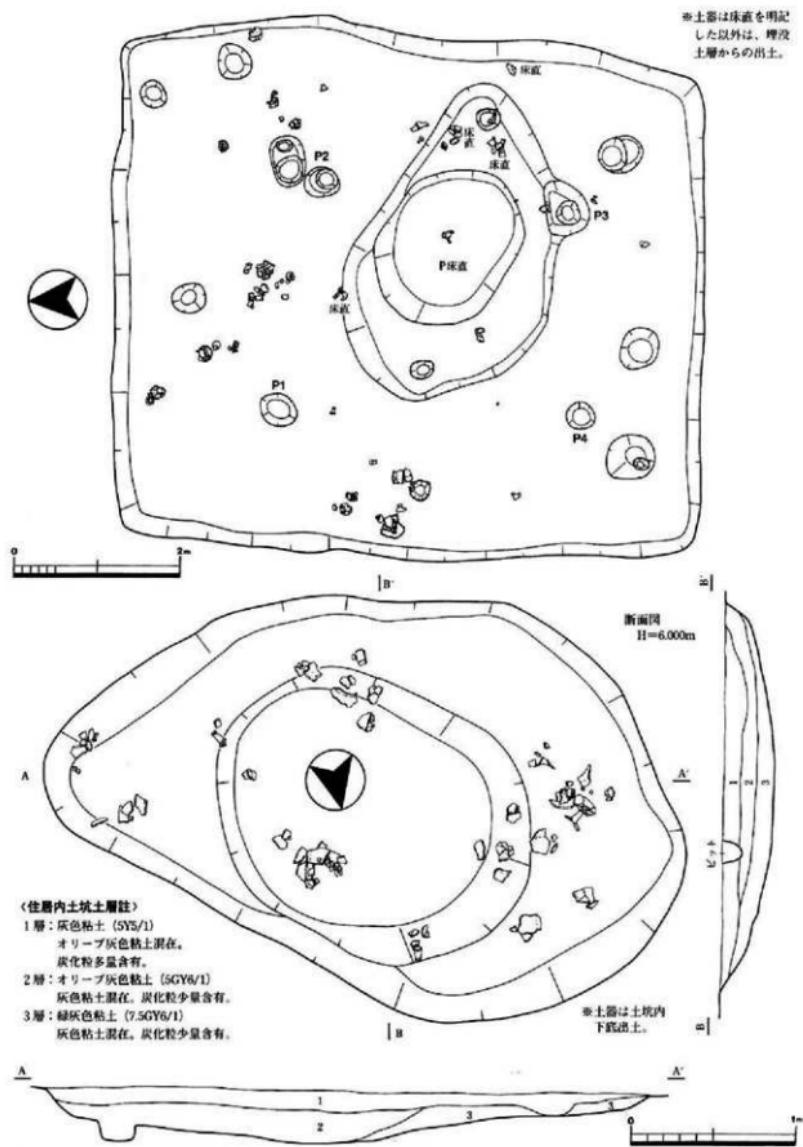
3層：緑灰色粘土 (7.5GY5/1) 塩化物少量含有。

4層：灰オリーブ色粘土 (5Y6/2)

5層：オリーブ灰色粘土 (2.5GY5/1) 塩化物多量含有。

6層：暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 塩化物多日含有。

第26図 5号堅穴住居跡平面・断面図 (S=1/60)



第27図 5号堅穴住居跡遺物出土状況及び住居内土坑平面・断面図 (S=1/60, 1/30)

類似しているが、5号住居は土坑内出土土器と竪穴住居下層出土土器の間で確実な時間差をもっており、竪穴住居とは別遺構の、住居以前に掘られた土坑である可能性ももっている。

(覆土堆積状況) 住居内土坑の上に当たる部分のみ土層が異なっているが、これは1号竪穴住居跡と同様、下の土坑による土質変化であると予想されるもので、埋没後の土坑重複を示すものではないと判断する。覆土堆積は、基本的に砂質の強い上層土(1・2層)と粘質の強い下層土(3~6層)とに別れるが、土器の出土状況を見る限り、かなり一気に埋め戻されたものと考えられる。

(遺物出土状況) 遺物はほとんどが土器であるが、床面近くから石製輪車の未製品1点と上層から石製有孔円板1点、そして上層土に混じって須恵器が少量出土している。土器の大半は土師器であるが、完形に近いものが多く出土しており、この竪穴住居に一括廃棄されたように出土している。床面付近や住居内土坑底面付近からもまとめて出土するものと埋土の上層から中層付近にまとめて出土するものとがあり、高壇や小型壇を初めとして当期に盛行する小型土器群が意識的に廃棄されている。

6. 2号竪穴

(位置と方位) 3号竪穴住居跡と5号竪穴住居跡との間に位置する小型竪穴で、他の竪穴住居跡と類似するE-2-Nを示す。

(規模と形態) 西側がやや張り出し、形が崩れるが、東西420cm×南北360cmのやや横に長い小型方形竪穴を呈す。壁高は15~20cm程度と浅いながらも、床面は平坦であり、土坑というよりも竪穴の形態をもつ。柱穴や焼土分布、住居内土坑など、他の竪穴住居跡に見られる特徴をもっていないことから、積極的に住居跡であるとは言えないが、方形を呈することと、床面が平坦であること、竪穴住居跡と類似する主軸をもつことを考えれば、その可能性はないと言えない。

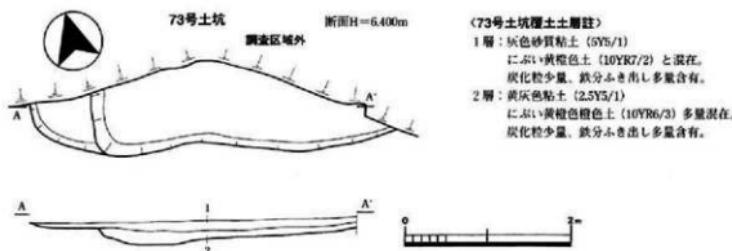
(覆土堆積と遺物出土状況) 覆土の堆積は上層と下層で分層できるが、基本的には類似した土層であり、埋められた土層であると評価する。土器は上層から下層にかけて多くはないが、偏りなく出土し、上層に炭化塊を多く含む土層が確認される。

7. 73号土坑

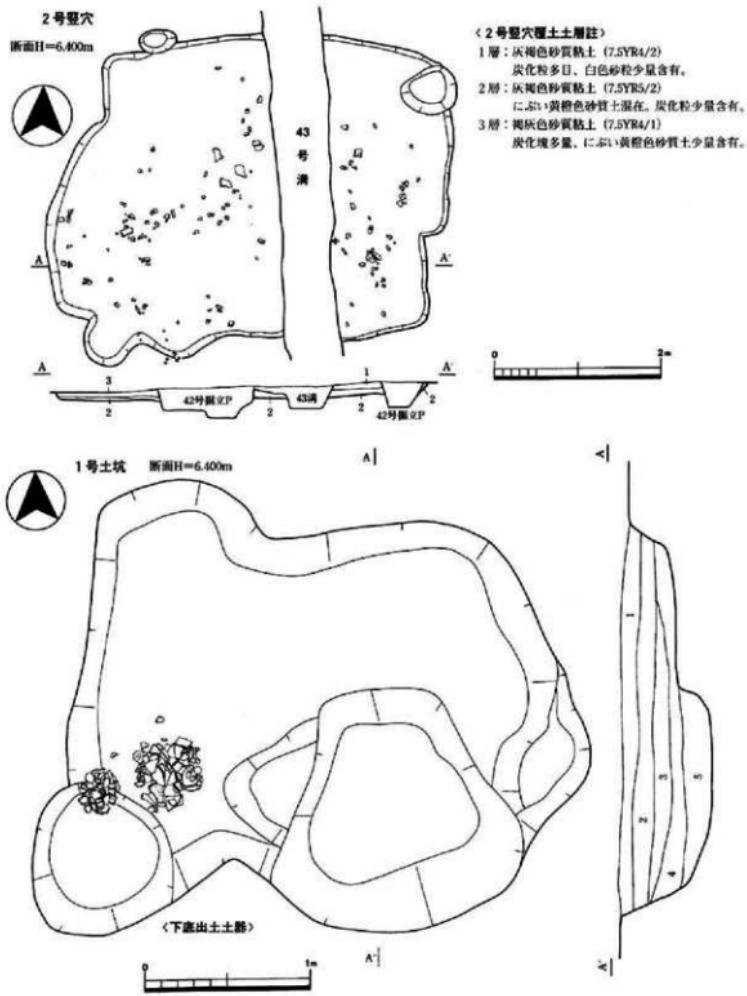
(位置と方位) 2次調査区域の北東隅に存在しており、南西側の一部のみ検出できた遺構で、竪穴住居跡と類似するE-10-Sを示す。

(規模と形態) 南西側の一部分の調査であるため、詳細は不明と言わざるおえないが、南西隅を見るとこの土坑が方形のプランをもっていることがわかる。底面も平坦であり、南側の辺が4m以上を測ることや主軸が他の竪穴住居跡と類似することを考えれば、竪穴住居跡である可能性は十分にある。

(覆土堆積と遺物出土状況) 覆土は上層が砂質系、下層が粘質系の土が堆積しており、竪穴住居跡の覆土堆積に類似する。土器は上層から下層にかけて偏りなく出土するが、細かな破片が主である。



第28図 73号土坑平面・断面図 (S=1/60)



第29図 2号竖穴・1号土坑平面・断面図 (S=1/80, 1/30)

第2項 土坑

古墳時代中期前に位置付けられる土坑は、全部で31基確認されるが、全て同一の様相をもっているわけではない。土坑は柱穴以外の、大型の穴を単にひとくくりにしたものであり、その用途は、墓穴にはじまり、ゴミ穴、土砂採取穴、何かを焼いた穴、お祭り用の穴、そして、その土坑のみ単体で機能するものではなく、住居とセットとなって機能する穴もある。これらは一つの穴をいろいろに使ったというもののではなく、基本的には異なる穴であり、土坑の規模や形態、土器の出土状況にその違いが反映されているはずである。以下に、土坑を3分類し、各類型の特徴・性格を提示する。なお、それ自体が竪穴住居跡である可能性をもつ2号竪穴や73号土坑は除外して述べる。

1. A類土坑

当類型は土器を意識的に大量廃棄する土坑であり、土器廃棄土坑と呼んでいるものである。土器の出方は完形や半完形のものが多く含まれることと高杯や壺などの供献土器よりも甕などの煮炊具が目立つことを特徴とする。土器は上層から下層まで分かれることなく混在する様相をもっており、穴の埋め戻しと土器の廃棄が一時期に行われたことを示している。土坑形態は、底面に部分的な掘り込みが行われるものもあるが、概して平坦な底面をもつしっかりした土坑が多い。平面形にきまとった形はないが、1号土坑のような何基もの土坑が重複している場合を除いては、不整形は少なく、比較的上坑形態のしっかりした楕円形が主体的である。規模は400cmを測る大型のものから100cm規模の小型のものもあり、一様ではないが、大型には多くの土器が、小型には少ない量の土器が捨てられる特徴をもつことから、底面積4m²以上を測る土坑については特にA類大型として区別したい。ただ、大型も小型も完形・半完形に近い土器が捨てられる点では共通しており、基本的には同一の性格を有するものと予想する。以下に該当する土坑について説明する。

1号土坑 土坑底面にさらに掘り込みをもったり、平面形が不整形となるなど、複数の土坑が重なり合っている様相をもつ。規模はおよそ230×300cmで、35cmの深さをもつ大型である。土器の出土は、上層で破片が多く含まれるのに対し、下層では完形・半完形復元可能なものが主体的である。

2号土坑 1号土坑に隣接する土坑であるが、時期的には後に位置付けられるものである。175×395cm、深さ20cmの大型規模をもつ長楕円形土坑で、底面には中央付近に浅いくぼみがある。土器廃棄は1号土坑同様、上層よりも下層で完形・半完形復元可能なものが存在するが、1号土坑ほどの復元度ではなく、また須恵器が定量含まれることが特徴と言える。埋土には炭化塊が多量に入る。

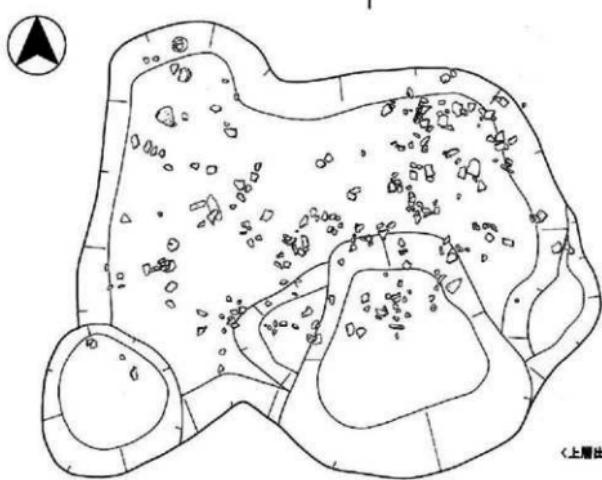
11号土坑 225×265cm、深さ25cmを測る隅四台形状を呈す大型土坑で、下層に土師器胴部破片の同一個体を一括廃棄する。胴部破片は器厚2~3cmの超特大壺型土器の破片で、かなりの破片数出ているが、器形復元できるものはなく、上器の図を掲載していない。1個体の破片しか存在しておらず、そのような特殊器種を一括廃棄する行為は、特別な意味をもつものと考える。

14号土坑 190×260cm、深さ20cmを測る大型楕円形土坑で、土師器甕を中心として多量の土器が廃棄されている。上層には数点須恵器焼片が混在している。

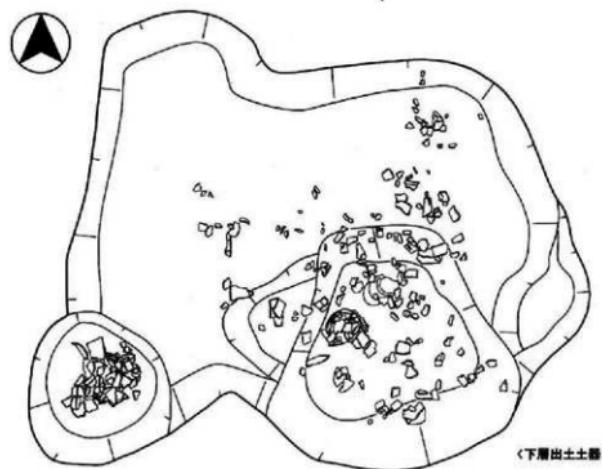
23号土坑 120×180cm、深さ25cmを測る楕円形土坑で、まわりに浅いテラス部分が伴う。土器廃棄量はさほど多くない。

24・26・35号土坑 規模は小型であるが、土坑形態が比較的しっかりしており、土器がしっかりと廃棄される土坑で、小規模ながら、半完形の土師器が1~2個体廃棄されている。24号土坑は115×130cm、26号土坑は80×160cm、35号土坑は80×120cmを測る。

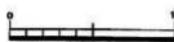
36号土坑 175×280cm、深さ20cmの大型土坑で、不整楕円形を呈す。下層付近に復元可能な土師器甕が數個体捨てられている。



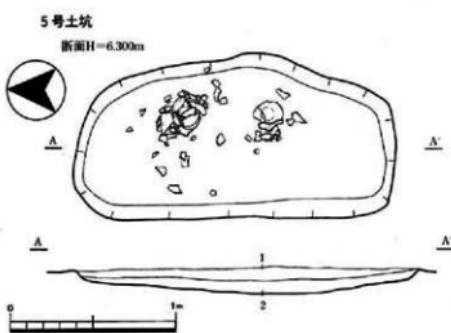
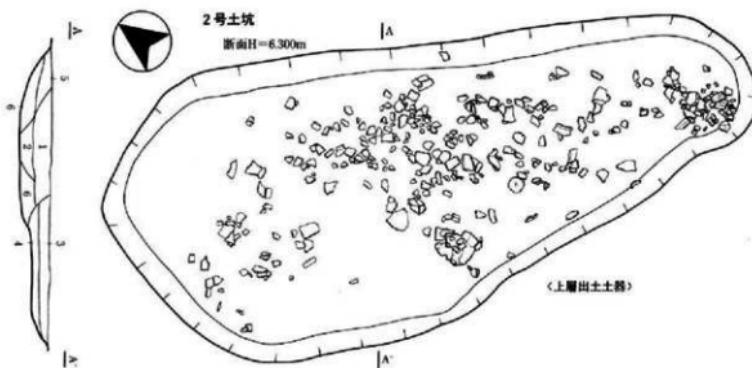
〈上層出土土器〉



〈下層出土土器〉



第30圖 1号土坑上器出土状况图 (S=1/30)



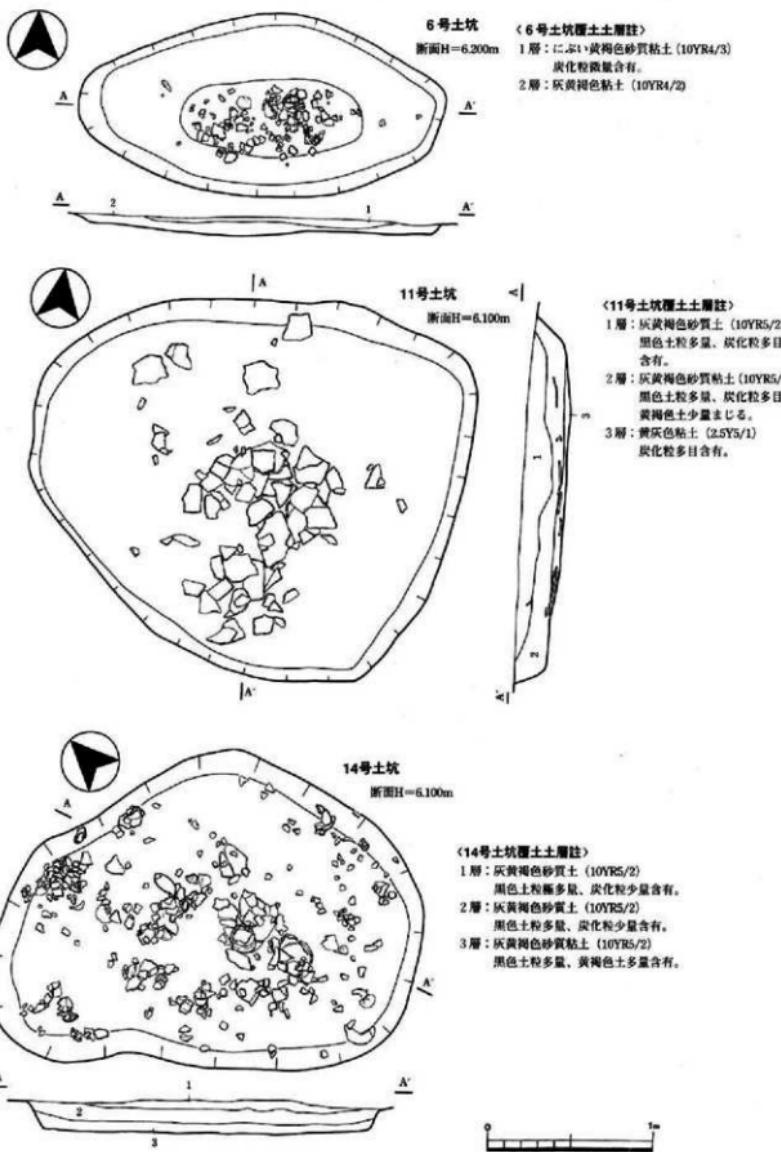
《2号土坑覆土层注》

- 1层：灰褐色砂质粘土 (10YR3/1) 炭化地核多量含有。
土器核多量含有。
- 2层：灰色粘土 (5Y4/1) 炭化粒多量，土器核多量含有。
- 3层：暗灰黄色砂质粘土 (2.5Y5/2) 炭化粒多量含有。
- (4号清理土)
- 4层：灰黄色粘土 (2.5Y6/2) 炭化粒少量含有。
(4号清理土)
- 5层：暗灰黄色砂质粘土 (2.5Y4/2) 黑色土质在。
炭化粒多量含有。
- 6层：暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) 炭化粒多量含有。

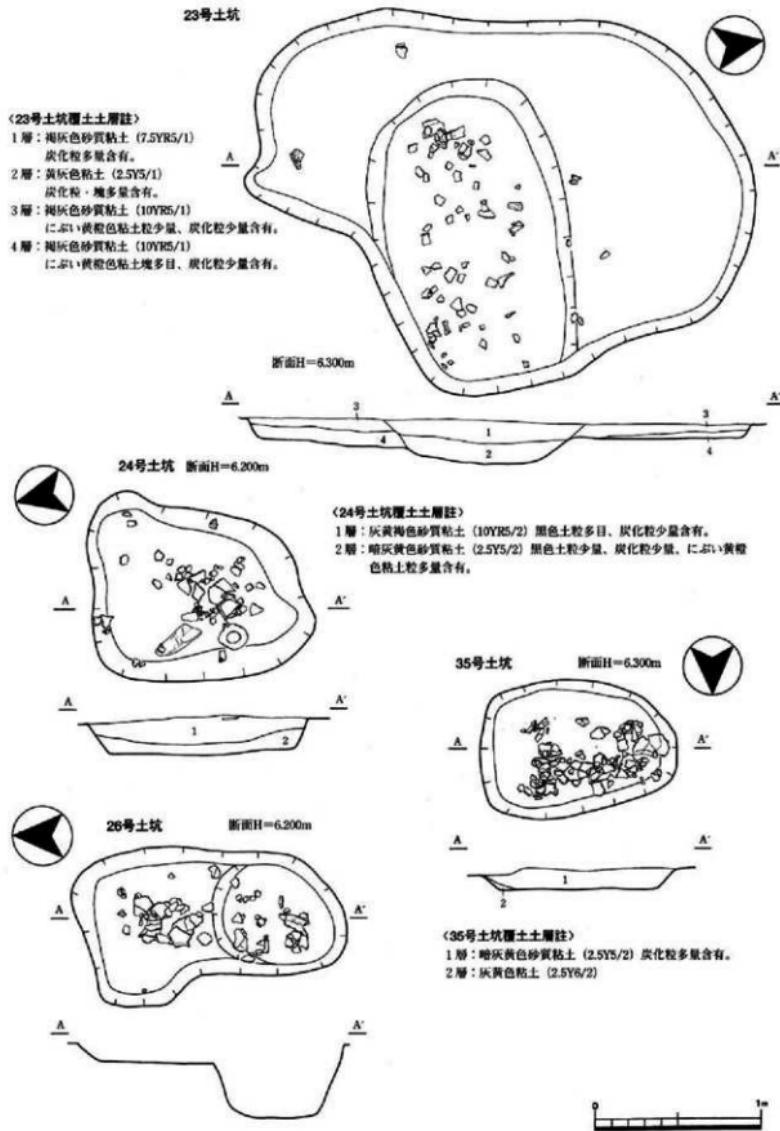
《5号土坑覆土层注》

- 1层：灰黄褐色砂质粘土 (10YR4/2)
炭化地核多量含有。土器核多量含有。
- 2层：灰黄褐色砂质粘土 (10YR5/2)
炭化粒多量含有。

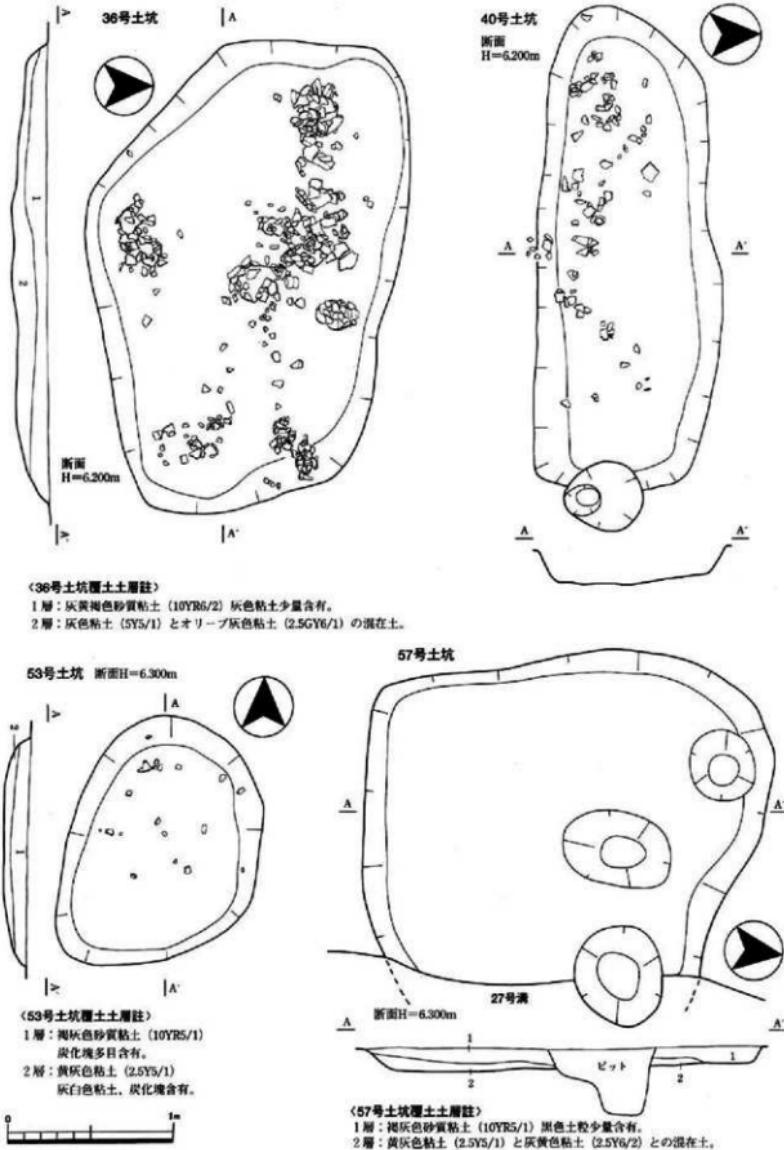
第31图 2号土坑·5号土坑平面·断面图 (S=1/30)



第32図 6号土坑・11号土坑・14号土坑平面・断面図 (S=1/30)

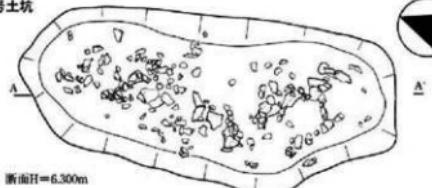


第33図 23号土坑・24号土坑・26号土坑・35号土坑平面・断面図 (S=1/30)



第34図 36号土坑・40号土坑・53号土坑・57号土坑平面・断面図 (S=1/30)

67号土坑



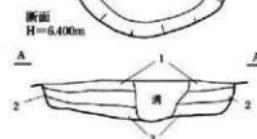
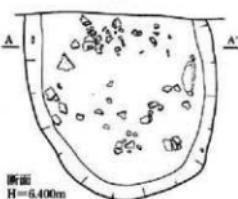
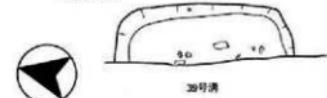
《67号土坑覆土土層註》

- 1層：黃褐色粘土（2.5Y5/3）褐灰土多目混在。炭化粒多目含有。
- 2層：褐灰色粘土（10YR4/1）黃褐色粘土少量混在。炭化粒多目含有。
- 3層：綠灰色粘土（10GY6/1）褐灰色粘土多目混在。炭化粒少目含有。

71号土坑



76号土坑



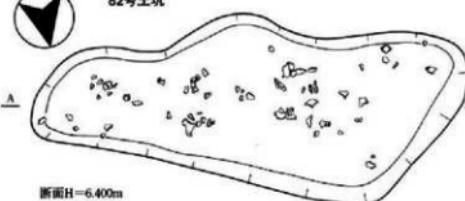
《76号土坑覆土土層註》

- 1層：灰黃褐色砂質粘土（10YR5/2）にいひ黄褐色粘土少量。白色砂粒多目含有。
- 2層：褐灰色砂質粘土（10YR6/1）にいひ黄褐色粘土少量。白色砂粒少量含有。
- 3層：褐灰色粘土（7.5YR5/1）炭化粒少量含有。

《71号土坑覆土土層註》

- 1層：灰色砂質粘土（SY4/1）炭化粒多目含有。
- 2層：黃灰色砂質粘土（2.5Y4/1）炭化小塊多目含有。
- 3層：灰色粘土（5Y5/1）炭化小塊多目、にいひ黃褐色粘土少量含有。

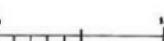
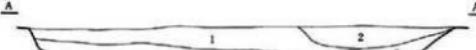
82号土坑



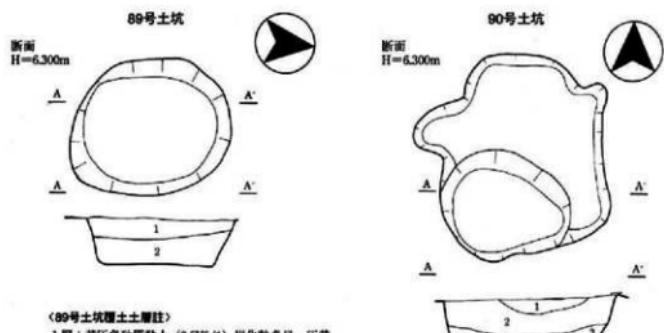
《82号土坑覆土土層註》

- 1層：灰黃褐色砂質粘土（10YR4/2）炭化塊多目含有。
- 2層：灰黃褐色砂質粘土（10YR4/2）にいひ黄褐色粘土多目混在。
- 3層：褐灰色粘土（10YR5/1）と灰黃色粘土（2.5Y7/2）との混在土。

断面H=6.400m



第35図 67号土坑・71号土坑・76号土坑・82号土坑平面・断面図 (S=1/30)



第36図 88号土坑・89号土坑・90号土坑平面・断面図 (S=1/30)

57号土坑 220×240cm、深さ15cmの隅丸方形で、比較的整った形の土坑形態をもつ。土器出土量はさほど多くないが、土坑形態がしっかりしていたことからA類に入れた。

71・76・88号土坑 概して土器が多いが、復元可能な土器の廃棄が少なく、破片での出土が目立つ土坑である。71号土坑は115×175cm、深さ20cmの不整形土坑、76号土坑は115×175cm、深さ25cmの楕円形土坑、88号土坑は200×225cm、深さ20cmの楕円形土坑である。

108号土坑 2次調査区の南東隅に位置する半分以上を区域外に残す深さ40cmの楕円形土坑で、まとめた土器が廃棄されている。

2. B類土坑

土坑内に土器が多く廃棄されることや、土器の中に完形や半完形復元可能なものを含んでいる点で、A類土坑の範疇に入るものであるが、長楕円形の土坑形態を有する点、類似した土坑寸法をもつこと、南北ないしは東西主軸をもつことなどから、A類とは区別した。土器の出土量も相対的に見ると、B類の方が少なく、また、数基の土坑が関連する位置関係をもって掘られることを特徴とする。竪穴住居跡の主軸方位と同様の軸をもつ点で、竪穴住居との関連も考えられる。以下に、該当する土坑の説明を行う。

5・6号土坑 やや離れているが、5号が南北に、6号が東西に軸をもちながら、計画的に配置されたような位置関係をもつ。5号土坑は95×195cmの隅丸長方形、6号土坑は110×220cmの長楕円形で、須恵器甕の復元可能品が廃棄されている。両土坑で接合関係もあり、上層には炭化塊が多く混在する。

40・55号土坑 東西に主軸をもって2基連結して掘られる土坑で、概して土器出土の少ない土坑である。40号土坑は110×290cmの長楕円形、55号土坑は130×180cmの長楕円形である。

67号土坑 100×230cm、深さ30cmを測る長楕円形土坑で、しっかりと深く掘られた長土坑形態はC類に近い。しかし、土器煮炊具を中心として多量に廃棄されていることや南北に主軸をもつ長土坑である点は、B類に該当するものと言える。

82・83号土坑 東西主軸をもって2基並んで掘られる長楕円形土坑で、概して土器出土は少ない土坑である。82号土坑は95×265cm、83号土坑は100×260cmの規模をもつ。

3. C類土坑

楕円形や不整形の土坑形態をもち、小型で浅い土坑をまとめてC類土坑とした。土坑形態でA類に類似したものもあるが、土器出土量は確実に少なく、土器廃棄土坑とは呼べないものである。ただ、103号土坑のみは出土量少ないながらも、高环完形1個体と脚半完形1個体を出土しており、土器を意識的に廃棄した可能性をもつ。規模は100~200cm程度で、深さは10cm程度を測る。先述した103号土坑をはじめとして、7・60・87・89・90・101号土坑が該当する。

以上、土坑を3つの類型に分類したが、墓坑と言えるようなしっかりした掘り込みをもつ土坑は確認されず、いずれの土坑も、はっきりとした性格をつかみ切れていない。A類の土器廃棄土坑にしても、B類の軸をそろえる長土坑にしても、土坑に土器が捨てられていたことと形態や位置関係から竪穴住居跡に関連するものであることは理解されるが、それがどのような性格を有していたものか、単なるゴミ穴であったのか、祭祀性を含んでいたものか、はっきりとした性格はわからない。竪穴住居跡の廃絶後の落ち込み穴への土器廃棄とは異なる様相をもつものであり、土器の廃棄形態として確実に分けられるものであろうが、土器廃棄を考えるうえで、類型化するにはまだ検討が必要であろう。

第4項 掘立柱建物跡

冒頭の概要でも述べたように、この時代の掘立柱建物跡を明確に捉えきれておらず、以下に提示するのも掘立柱建物跡と呼べるものか判断に苦しむ。また、提示した以外にも、確実に古墳時代中期の土器を埋土中にもつピットが存在しており、柱穴が並ばず、掘立柱建物跡とはしてないが、未検出の掘立柱建物跡がまだ数棟存在するものと予想する。なお、以下で提示する掘立柱建物跡の時期については、出土遺物が土師器甕の破片ばかりであり、中期であることはほぼ予想できるが、詳しい時期については検討できていない。

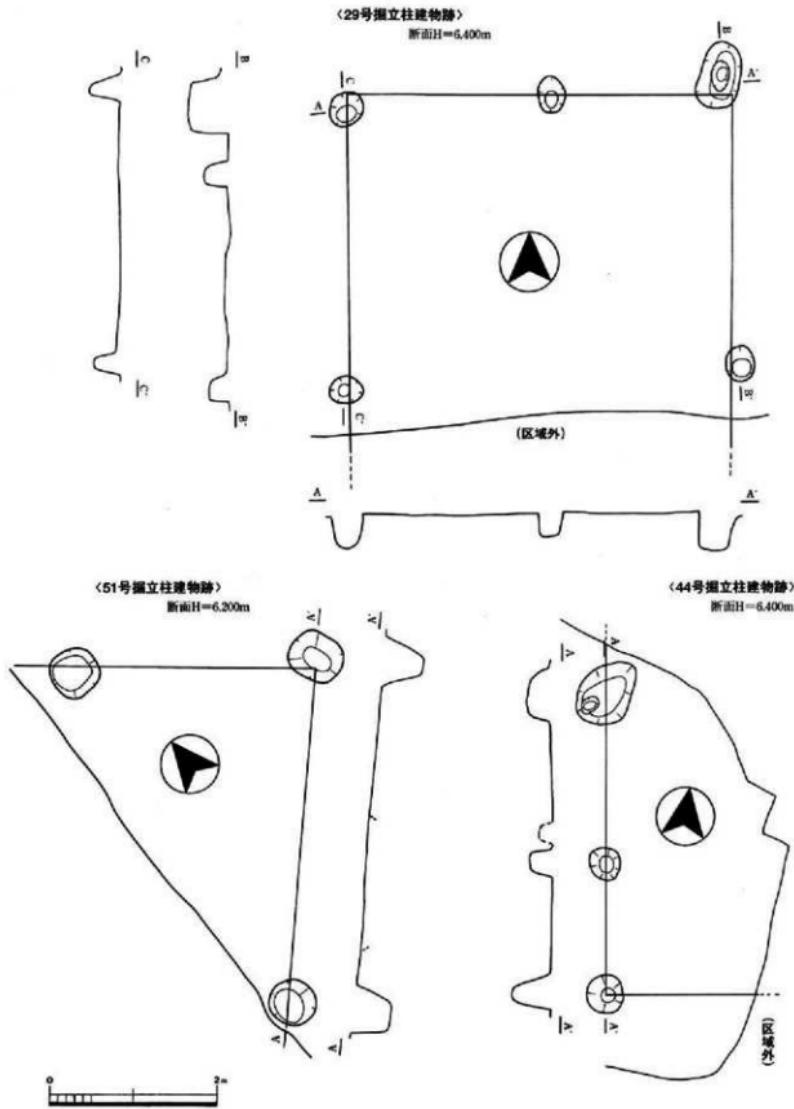
29号掘立柱建物跡 調査区域の南東隅に位置する建物で、南側が区域外に延びる2間×2間の北へ主軸をもつ建物と予想するが、1間×2間の東へ軸をもつ梁行335cm×桁行450cmの建物である可能性もある。隣接する竪穴住居跡との関連で考えれば、東へ主軸を振ると考えるのが妥当であるが、そうなると南側桁行の中間の柱が未確認であり、判断が難しい。柱穴は径30~40cm、深さ40cmを測るしっかりしたものである。

44号掘立柱建物跡 調査区域の南東隅に位置する建物で、29号掘立柱建物跡と重複して存在する。区域外に建物の大半が延びており、3本の柱穴しか確認していない。主軸方向は29号掘立柱建物跡に類似し、北へ軸を向けば2間×3間、東へ軸を向けば2間×2間の梁行180cm程の建物となる。柱穴は径40cm前後、深さ30~40cm程度である。

47号掘立柱建物跡 調査区域の北側中央付近に位置する2間×3間の建物で、南側梁行の間の柱が未確認のものである。主軸はN-18-Wと、東側の竪穴住居跡や掘立柱建物跡とは異なる方位をもっている。規模は梁行400cm、桁行450cmを測り、柱穴は径20~30cm、深さ30cm前後を測る。47号掘立柱建物跡の存在する区域は、柱穴状のものが多数分布する区域であり、未確認の建物がまだ複数存在する可能性をもつ。調査者の力量不足で、把握しきれていないが、同様の主軸をもつ建物が複数存在する区域と考えている。

51号掘立柱建物跡 調査区域外に延びているため、詳細は不明であるが、N-50-Wに主軸を振る1間×2間の建物である可能性とN-40-Eに主軸をもつ1間×1間の建物である可能性の両方が考えられる。前者の場合は、梁行420×桁行600cmとなるが、後者の場合は梁行300×桁行420cmの規模となり、1間×1間の場合は、掘立柱建物跡というよりも平地式住居を考えるのが妥当である。柱穴は径60cm、深さ45cmのしっかりした大きい掘り方であり、前述したものとは異なる。

51号掘立柱建物跡に直接関連するものとは言い難いが、掘立柱建物跡と重複する形で、11号溝が存在し、その周辺に浅いテラス状の遺構がある（1号落ち込み）。この溝とテラス状落ち込みからは、小破片ばかりであるが、当期の土器が出土しており、この時期に位置付けられる可能性をもっている。11号溝は幅20cm、深さ10cm程度のもので、途中で「L」字に曲がり、調査区域外に延びている。テラスは5cm程度の掘り込みであるが、底面平坦で、炭化塊を若干含んでいる。51号掘立柱建物跡の大型の柱穴の存在や主軸が他の当期の建物と異なることなど、この周辺には東側竪穴住居群とは異なる様相をもつ建物城が存在する可能性は高く、その建物城に伴って、西側土坑群が存在するものと予想する。



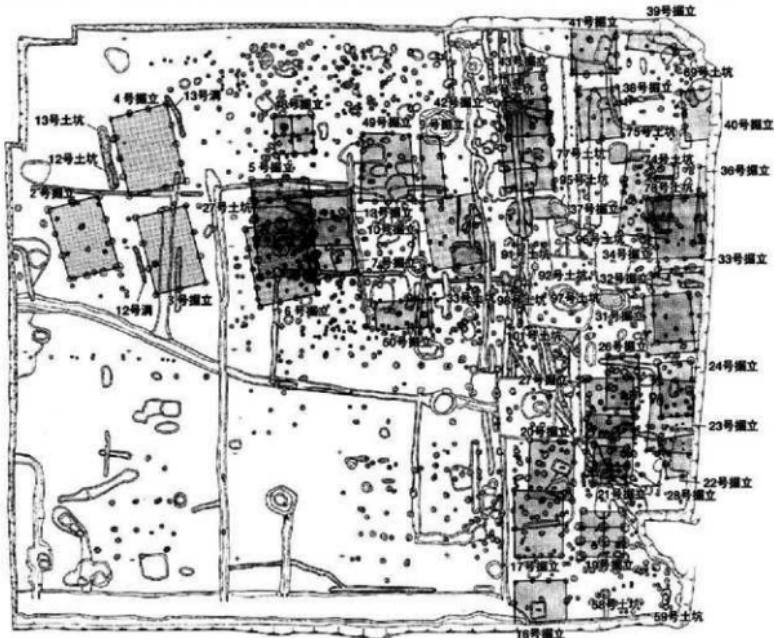
第37図 29号・44号・51号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/60)

第2節 古代の遺構

第1項 概要

土器は7世紀後半頃から少量出始めるが、遺構を伴ってまとまった出土をするのは、8世紀初頭以降で、北陸古代編年案Ⅱ-3期（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）」石川考古学研究会・北陸古代土器研究会）以降のものである。中心は、土器の出土量から見て、Ⅳ-1期～V-1期（8世紀中頃～9世紀前葉）と考えており、V-2期（9世紀中頃）以降は徐々に衰退する。ただ、遺構としては確実にV-2期まで確認できており、土器が激減するのもV-1期以降である。土器はVI期からVII期も少量存在するが、遺構を伴う風ではなく、遺跡範囲内の周辺地域に移動したものと予想する。中世は12世紀後半以降、定量の掘立柱建物跡と井戸を伴って、集落が再度営まれるようになる。

遺構として把握できるⅡ3期～V2期のものは、掘立柱建物跡と土坑のみで、豎穴住居跡の存在は確認できない。掘立柱建物跡は確認できるだけで35棟えるが、建物として並べられないピット列や柱穴としてしっかりと掘られたピットも多数あるため、実際の建物は提示した棟数よりも確実に増える。また、掘立柱建物跡には所謂「雨落ち溝」を伴う事例や廐付き建物の可能性が有るものも3棟あり、純柱建物も3棟含まれている。土坑は、墓坑と思われるものや土器廐棄土坑的性格をもつもの、井戸状のものなど性格はいろいろあるが、全体で16基ある。これらの土坑形態や土器の出方は一様でないが、これらに



第38図 古代の遺構分布 ($S=1/500$)

含まれない、古代の土器を出土するものの、土器出土量少なく、不整形ないしは小型土坑を呈する不確定土坑が定量ある。これらの土坑をここでは、古代遺構と認定していないが、古代に位置付けられる可能性は十分にある。

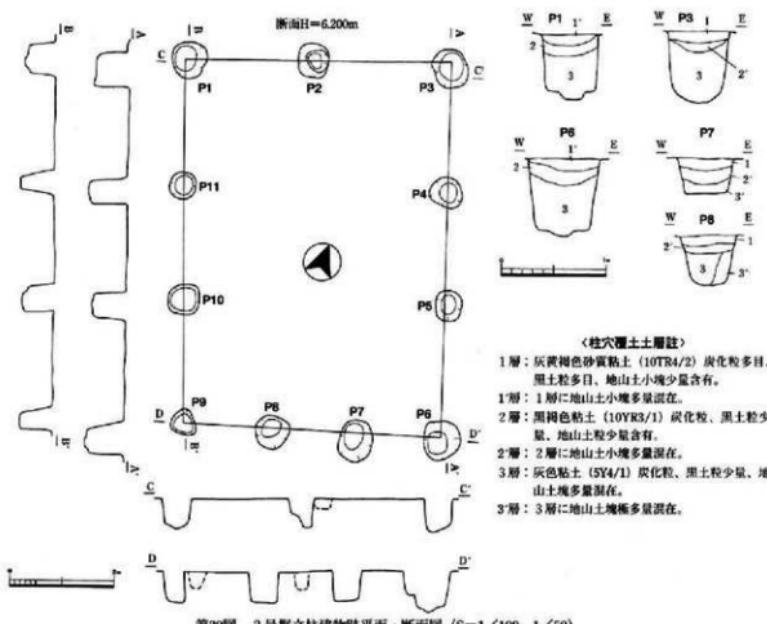
以上のように、遺構認定に不確定な部分を残すが、確実視される遺構を取り上げ、分布図を作成したのが、古代遺構分布図である。これを見ると、南西側に全く遺構の分布が見られないことがわかる。この部分はレベル的に北西側の建物が分布する箇所よりも高く、地質的にも建物が建てられないような土壤にはなっていない。田畠などの生産域とも考えられるが、それらしき痕跡もなく、広場的スペースだったのだろうか。建物跡は2号・3号・4号の掘立柱建物跡3棟が存在する北西区域から北へは急激に下がり、梯川の河川流域へ傾斜して行くため、ここより先に集落城が伸びる気配はなく、主に東へ向かって広がる。特に掘立柱建物跡の密集が見られる東側区域は西よりも高くなっている、現加賀産業道路敷区域を頂点として、集落跡の中心がここに存在したものと予想する。ここから東側の石川県立埋蔵文化財センターが調査した区域へは下降しており、その先是梯川の蛇行した河川の淵にあたるため、建物域はここまで伸びず、水場遺構など集落域の端を示すような遺構が存在する。東側区域は北東の39号・41号掘立柱建物跡が北の調査区域外へ伸びているが、地形的にここから北へは徐々に下降してくるため、この掘立柱建物跡をもって集落の端と捉えることができそうで、集落域の東と北の境はかなり明確に捉えられそうである。問題は南側へどのように展開して行くかであるが、地形にさほど起伏がある感じではなく、広がる可能性はあるものの、南東側は比較的遺構重複が少なくなる傾向があり、北西側の3棟の掘立柱建物跡からさらに西側へ分布が広がる感じも積極的には認め難いことも含め、この建物群としては、当区域からさほど広くは分布して行かないものと予想する。そうなると、南西側の無遺構空間を広場的な空間として捉え、その周囲を建物群が取り囲むように分布する可能性は薄く、建物群の区画として、このような無遺構空間が形成されたものと考える。

掘立柱建物跡は溝や杭列などの区画をもたず、建物が群集する形で営まれているが、主軸方位は北を前後する範囲に収まるものが主で、最も主軸を振る建物でも、西へ15度振る程度である。複数時期の建物があるため、時期別の建物配列は後で述べるが、概況としては東西に伸びて分布する建物と南北に伸びて分布する建物の2グループあり、逆さ「L」字型を呈する。この「L」字交差部分を見ると、建物が欠落する空間を確認でき（この空間は古墳時代中期の豊穴住居跡が存在するため、掘立柱建物跡を確認しづらかったという点は確かにある）、ここに古代の土坑が密集して分布する。土坑は一時期のものではなく、時期幅をもって複数存在し、主に大型の土器廐棄土坑が多く、連続して作られる様相をもつ。この空間が時期を越えて共通の広場的空間であれば、廐棄土坑がここに密集して検出されることも理解しやすく、炊事場などの日常生活の空間も含め、集落内共同の空間として機能していた可能性が高い。

第2項 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は35棟検出しているが、一部柱の検出しきれていない掘立柱建物跡もある。掘立柱建物跡の主体は側柱建物で、総柱建物は3棟のみ、この3棟はいずれも柱穴掘り方の大きさや柱間隔などから側柱建物とは異なり、倉としての機能が想定されるものである。また、側柱建物には廐付き建物の可能性をもつ3棟があり、これらは柱穴掘り方も大きく、しっかりした建物で、廐付き建物として遜色ない柱穴をもつ。しかし、廐部分の柱穴が不揃いであったり、建物の大きさ、廐の位置など廐付き建物とするにはやや疑問点もあり、確定できていない。以下に、個別の掘立柱建物跡の説明を行うが、詳細は掘立柱建物跡寸法表を参照願いたい。

2号掘立 北からやや西寄りに主軸方位をもつ2間×3間の側柱建物であるが、梁行の柱穴が北側で3



第39図 2号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100, 1/50)

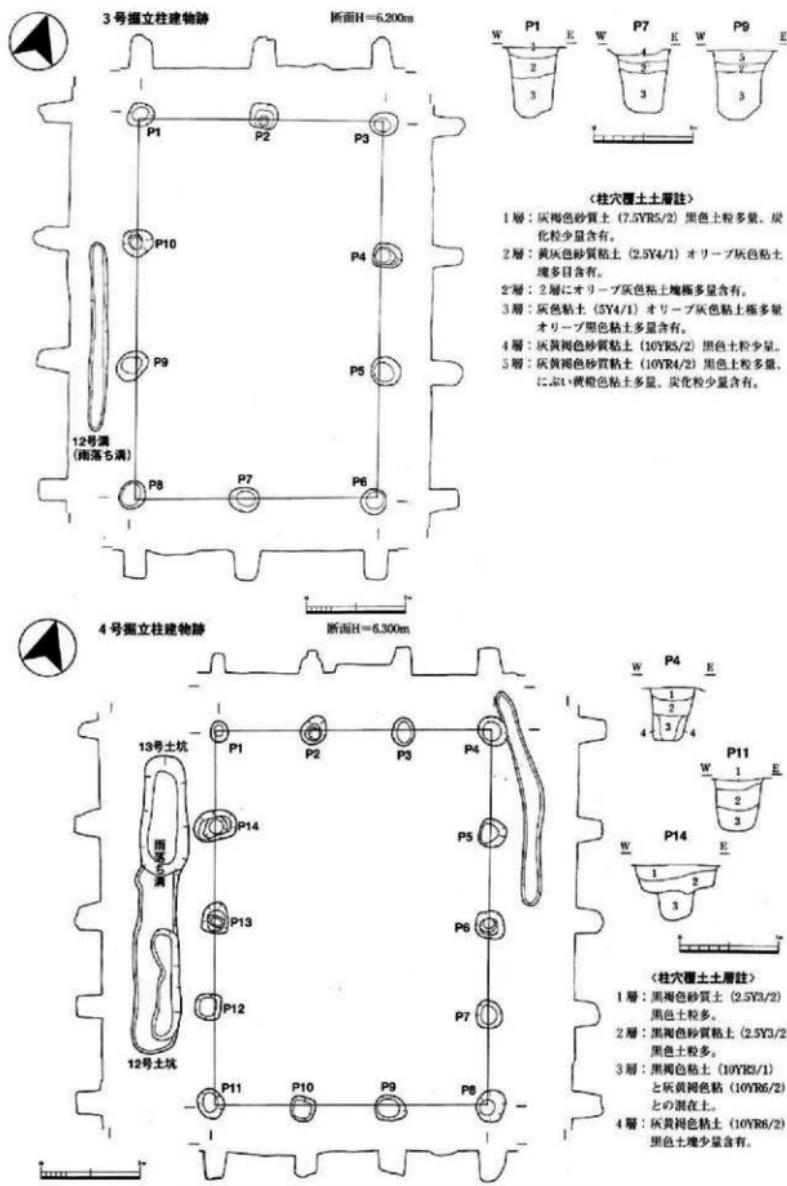
本に対し、南側で4本となり、南側では梁行3間となる。柱穴掘り方の比較的大きなものが目立つが、小型の柱穴もあり、やや不揃いの感もある。柱筋は桁行では通るが、南側の梁行がやや歪んでいる。出土遺物は比較的多く、一部図示した須恵器環Aなどから、Ⅲ期ないしはⅣ期の時期を推定できる。

3号掘立 2号掘立とほぼ同一の主軸方向をもつ2間×3間の側柱建物で、西側の桁行に沿って、浅い雨落ち溝が掘られている。柱穴掘り方は略円形の大きさ深いもので、柱筋がよく通った建物である。出土遺物は皆無に近く、時期不詳。2号掘立との同一主軸から同時期に位置付けられようか。

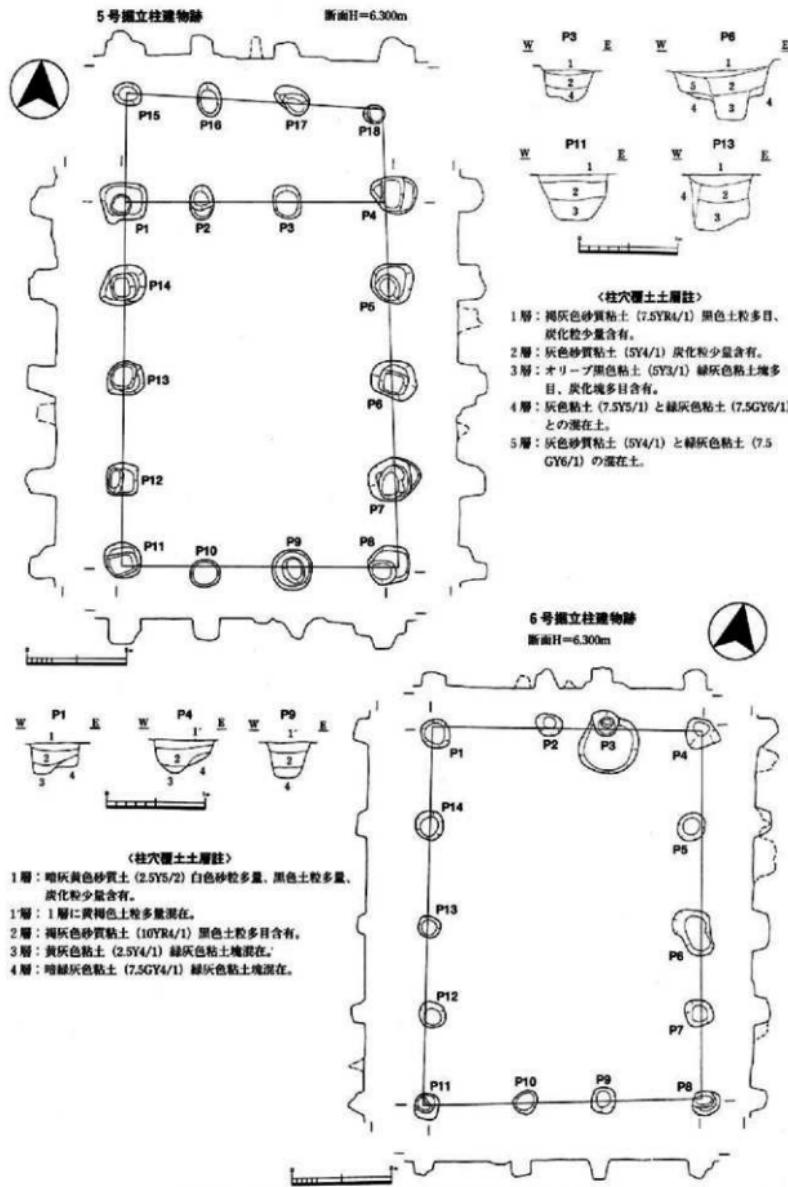
4号掘立 3号掘立の西側桁行の柱筋を通して建てられる3間×4間の側柱建物で、3号掘立同様、西側の桁行に浅い幅広の雨落ち溝(12号・13号土坑)をもつ。東側にも一部溝が見られるが、これは柱穴にかかるので、同時併存のものではない可能性をもつ。柱穴掘り方は略方形の大型で深いものが主で、柱筋はよく通っている。柱穴からの出土遺物は皆無に近いが、雨落ち溝からⅢ～Ⅳ期に位置付けられる須恵器環B身と土器飾赤彩塗が出土している。

5号掘立 主軸方向をほぼ北に向ける3間×4間の側柱建物で、北側梁行部分に廟をもつ。廟部分の柱穴は身舎部分の梁行柱穴筋にややズレて存在しており、P18が小型で浅いため、明確に廟と判断できるか疑問が残る。身舎部分の柱穴は径80cm程度の方形掘り方をもつもので、深さも60cm程度と深く、大きくしっかりした柱穴をもっている。柱筋も南側梁行で歪むが、概して柱筋の通った建物である。出土遺物はⅣ期かⅣs古期に位置付けられる須恵器環Bなどが数点ある。

6号掘立 3号掘立に類似した主軸方向をもつ3間×4間の側柱建物で、建物規模や柱間は4号掘立によく類似している。柱穴掘り方は比較的小さいものが主であるが、柱筋は通った建物である。梁行の中間2本の柱穴は隅柱よりも中央に寄る。出土遺物は須恵器環Aの小片3点のみで、時期不詳。



第40図 3号・4号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100, 1/50)



第41図 5号、6号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100, 1/50)

7号掘立 主軸方向を北から僅かに西寄りにもつ3間×3間の側柱建物で、柱穴掘り方は径30cm程度の小さいものもあるが、50~60cmの柱穴が主。梁行の南側柱列と桁行の東側柱列がしっかりしており、概して柱筋は通る。比較的小型の建物のわりにはしっかりした柱穴である。出土遺物は、図示した須恵器環B身・環AからIV₁期前後を推定する。

9号掘立 主軸を北にもつ桁行3間の建物で、梁行は1間と思われる。桁行東側には扇状に小型柱穴が2本あり、建物の補助柱の役割か。出土遺物は須恵器環B身と須恵器環Aの破片があり、IV₁期~IV₂古期に位置付け可能と思われる。

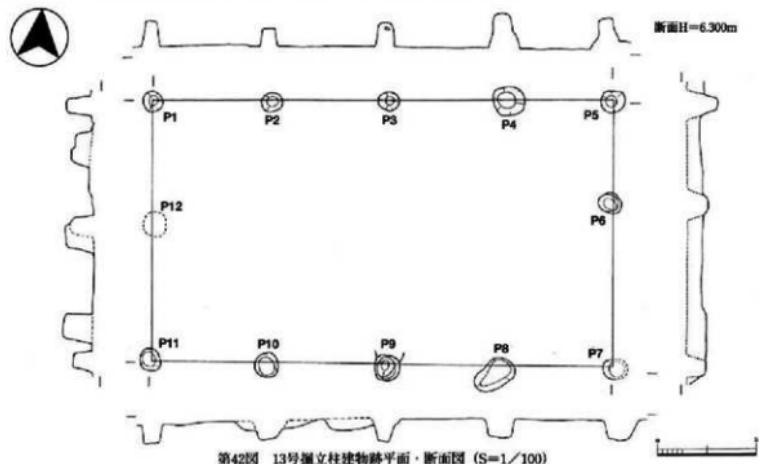
10号掘立 北から僅かに西へ主軸を振る側柱建物で、桁行3間、梁行は東側柱列を確認していないが、2間程度の建物と思われる。出土遺物は図示した須恵器環BからIV₁期~IV₂古期に比定する。

13号掘立 2間×4間の側柱建物で、北から西へ90度振る横向き配置をとる。桁行に長い建物で、柱穴掘り方の深さはあるが、径40cm前後の小型掘り方をもつ。出土遺物は須恵器環Aの小片が1点あるのみで、時期は不詳である。

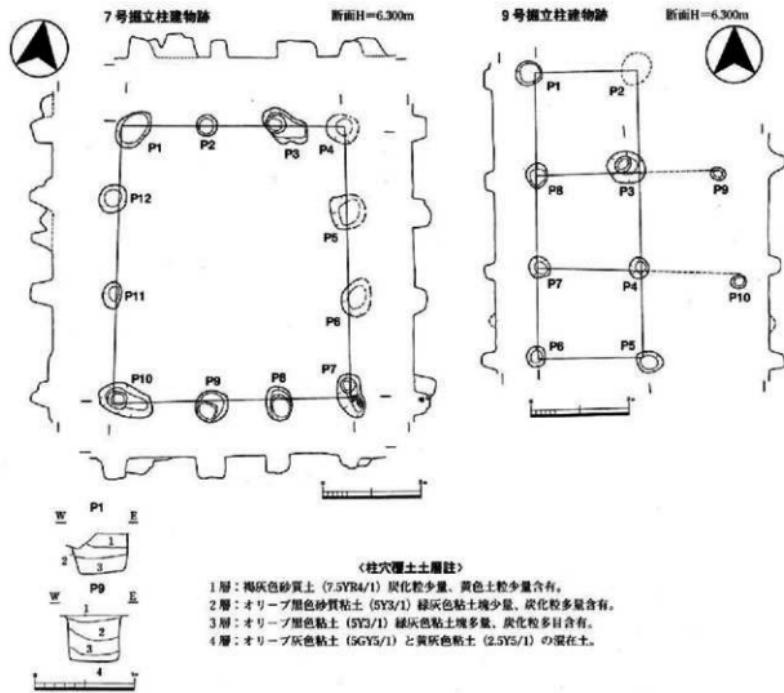
16号掘立 南側半分が調査区域外に位置する梁行3間の側柱建物で、ほぼ北に主軸をもつ。桁行は、確認できる柱間間隔から3間と予想され、そう仮定すると、7号掘立を少し大きくしたような規模の建物が予想される。出土遺物は須恵器環Aの小片1点のみで、時期不詳。

17号掘立 16号掘立と桁行の柱筋をあわせるかのように同一主軸で北向きに建てられる2間×3間の側柱建物である。梁行が北側で475cmあるのに対し、南側は425cmで、やや台形状となり、西側の柱筋も通りが悪い。柱穴掘り方は一般的の大きさだが、浅いものが目立つ。出土遺物は須恵器環B身片のみで、時期不詳である。

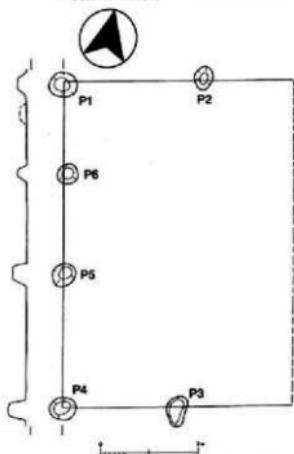
19号掘立 17号掘立の南側梁行に柱筋をあわせるように建てられる2間×3間の総柱建物である。桁行は3間であるが、梁行長と大差なく、正方形に近い平面形である。柱穴掘り方は100cm前後の大型で、略方形のものが主体的である。梁行北側の柱列のみ、やや柱穴掘り方が小さく、南側の9本柱穴から若干柱間が空いているため、扇状を呈す。出土遺物はいずれも須恵器の小破片であるが、環B蓋2点、環B身3点、環A3点が出土しており、IV₂新期~V₁期頃が想定される。



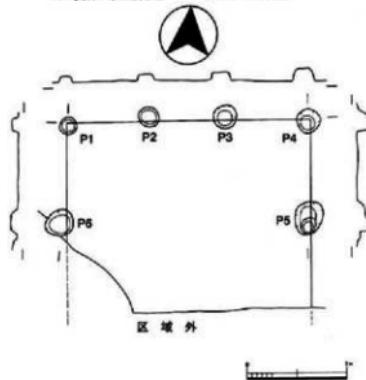
第42図 13号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)



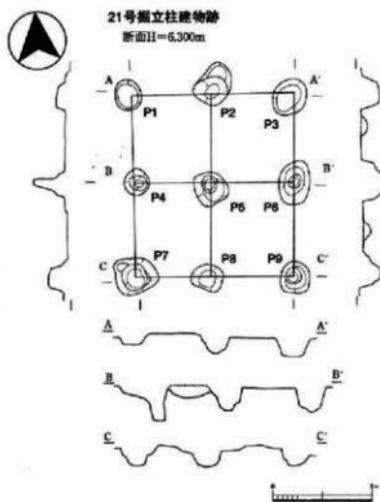
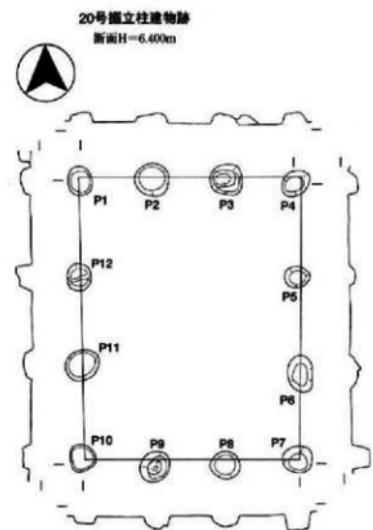
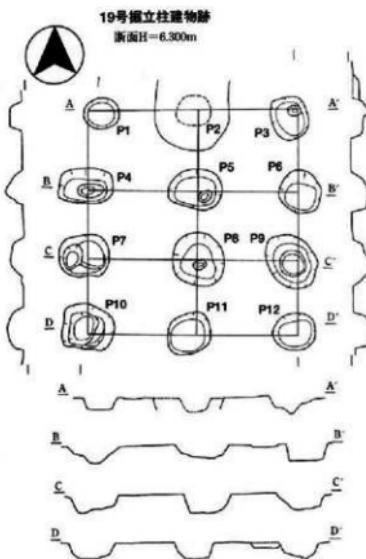
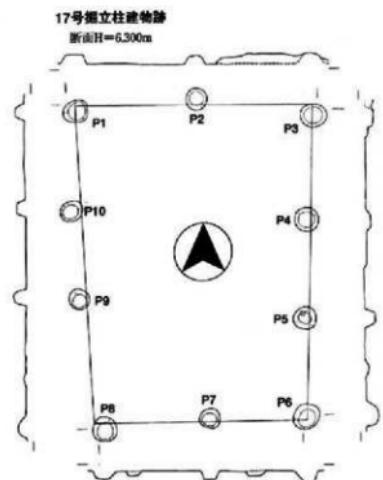
10号掘立柱建物跡 断面H=6.300m



16号掘立柱建物跡 断面H=6.300m



第43図 7号・9号・10号・16号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100, 1/50)



第44図 17号・19号・20号・21号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)

20号掘立 17号掘立とほぼ同じ主軸をもち、一部重複する3間×3間の側柱建物で、比較的整った柱筋をもつ建物である。柱穴掘り方はやや大きめの規模をもつが、概して浅い。遺物の出土はない。

21号掘立 28号掘立と重複して北向きに主軸をもつ田の字の2間×2間総柱建物で、柱穴掘り方は19号掘立より小型であるが、側柱建物よりは規模も深さも大きなものである。出土遺物は須恵器坏B身・坏A片があり、V1期前後に位置付けられる。

22号掘立 東側が搅乱ないしは調査区域外に出る桁行3間の側柱建物で、梁行は2間程度を予想する。20m²を切る程度の比較的小型の建物と思われる。出土遺物は須恵器坏Aの小片2点のみ。時期不詳。

23号掘立 北からやや東へ主軸を振る桁行3間の側柱建物で、36・37号掘立と類似した主軸方位をもつ。東側桁行は調査区域外に出ているため、梁行は不明だが、柱間隔から2間が妥当と言える。出土遺物は須恵器坏B蓋・身、坏Aがあり、V期頃を類推可能。

24号掘立 31号掘立と梁行をあわせるように北から西へやや主軸を振って建てられる2間×3間の側柱建物で、柱穴掘り方の規模のわりには比較的小型の面積である。梁行の柱穴掘り方は、北側柱列が径60~70cmと大型であるのに対し、南側柱列は40cm程度とこぶりで大きさが明瞭に異なる。出土遺物は須恵器坏B蓋・身、坏Aの小片で、V期頃を類推可能。

26号掘立 ほぼ北に主軸をもつ2間×3間の側柱建物で、梁行長が北側と南側で異なる台形状の平面形を呈す。柱穴掘り方は比較的大きいが、建物面積が小型となる24号掘立に類似しており、ここでも梁行柱穴掘り方に北側(50~60cm)と南側(30~40cm)とで違いが見られた。出土遺物は須恵器小片2点のみで、時期不詳。

27号掘立 17号掘立と桁行をあわせて北東側に建てられる2間×3間の側柱建物である。北側梁行の中柱が東に寄り、西側桁行の柱筋が通り悪い。柱穴掘り方は50~60cmが主。出土遺物は図示可能な須恵器坏B・盤Aの他、須恵器坏B身、坏A、盤Aがあり、比較的出土量が多い。V2期頃に比定可能。

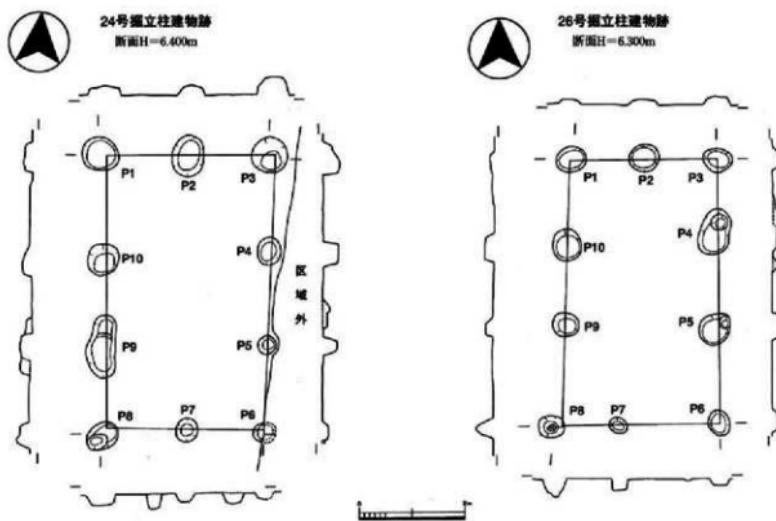
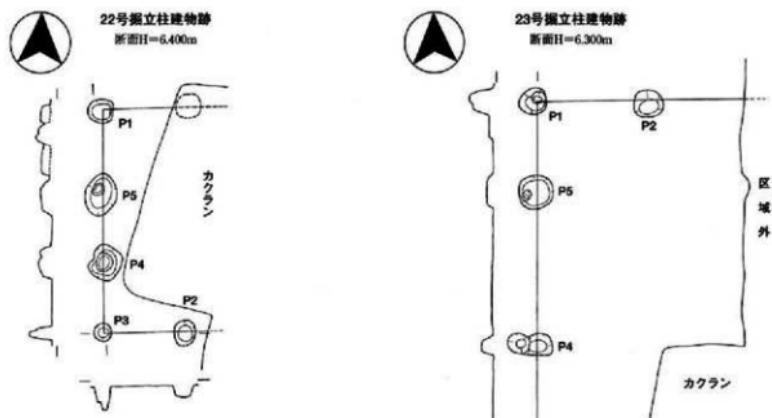
28号掘立 北から東へ僅かに主軸を振る2間×3間の側柱建物で、27号掘立と重複して存在する。柱筋は東側桁行が揃うが、西側はズレており、やや歪んだ平面形となる。梁行の中柱もやや東寄りに位置し、東側桁行が基準となっている。出土遺物は図示した須恵器2点以外にも坏A、盤A片があり、V1期頃に比定可能である。

31号掘立 24号掘立の梁行にそって北側に建てられる2間×3間の側柱建物で、比較的柱筋の通った建物である。桁行の中の2本柱は柱間がやや隅柱わりも狭くなっている。出土遺物は土師器小型壺の胴部片1点のみで、8世紀中頃以降とは思われるが、時期不詳。

32号掘立 31号掘立と重複する2間×3間の側柱建物で、東南部が調査区域外に出ている。西側桁行柱列は24号掘立の西側桁行柱列の延長線上にあり、間隔もいい位置にあるため、同時併存の可能性をもつ。柱穴掘り方はやや大きめであるが、概して浅く、桁行の柱間隔も北側に寄っている。出土遺物は須恵器坏B身1点のみで、時期不詳である。

33号掘立 31号掘立と同様の主軸方向をもつ3間×3間の側柱建物で、東南側の一部が調査区域外に出ている。比較的柱筋の通りのよい建物で、柱配置もほぼ均等である。柱穴掘り方は径50cm前後と一般的だが、深いものが多く、しっかりと掘られている。出土遺物は須恵器坏B蓋と坏A片、赤彩土師器坏B身が出土する。時期はV1期~V2古期に位置付け可能である。

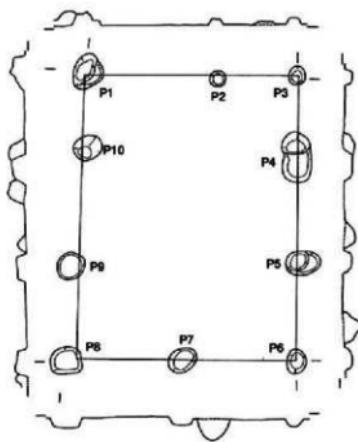
34号掘立 33号掘立と重複する3間×3間の側柱建物で、32号掘立の西側桁行柱筋を通す形で西側桁行柱筋が設定されているかのようである。いずれの柱列も比較的柱筋が通っており、整った平面形をもつ。比較的柱穴掘り方は小さく、桁行の中2本の柱穴は両側とも隅柱間隔よりも中央寄りに位置している。出土遺物は須恵器坏A片1点と土師器長胴壺片5点のみで、時期はV期頃を考えている。



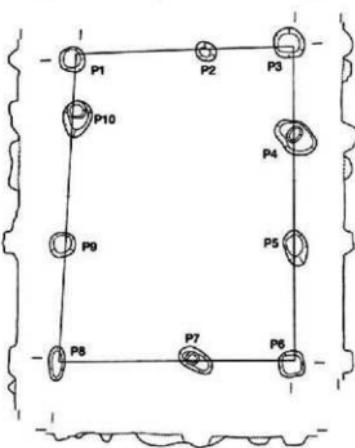
第45図 22号・23号・24号・26号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)



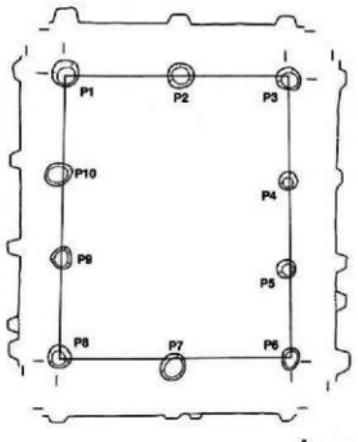
27号樁立柱建物跡
断面H=6.300m



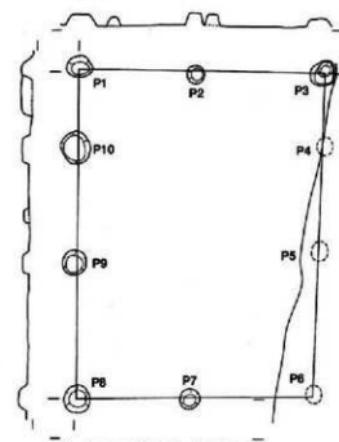
28号樁立柱建物跡
断面H=6.300m



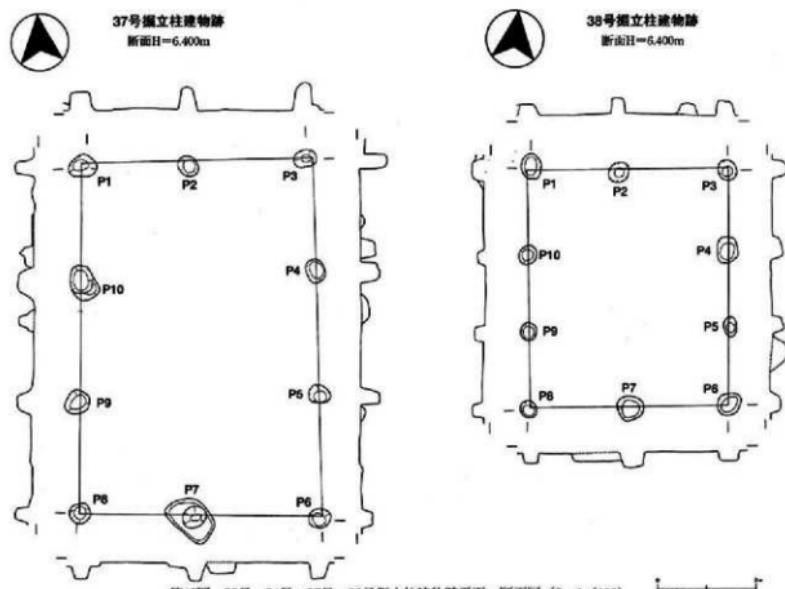
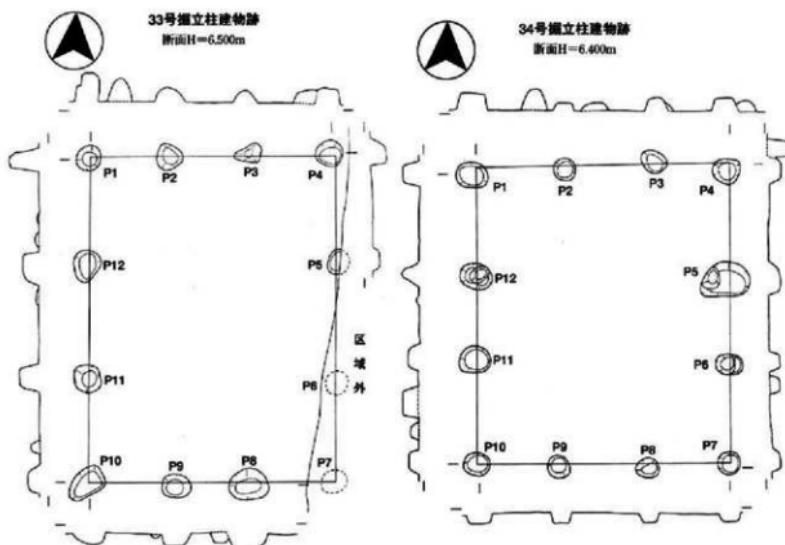
31号樁立柱建物跡
断面H=6.400m



32号樁立柱建物跡
断面H=6.400m



第46図 27号・28号・31号・32号樁立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)



第47図 33号・34号・37号・38号据立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)



36号掘立 大半が調査区域外に存在しているため、西側桁行3間の柱列のみ検出している。37号掘立と主軸を同じくして並列して柱列があるが、これを1棟の建物ではなく、37号掘立の東側廊部分に相当することも可能性としては十分にある。柱穴掘り方は比較的深くしっかりと掘られている。出土遺物は須恵器盤Aと盤Bの破片各1点のみで、盤Bの高台器形からIV₂期～V₁期を推定可能である。

37号掘立 主軸方向を北から僅かに東へ振る23号掘立と同一の主軸をもつ2間×3間の側柱建物であるが、上述したように36号掘立自体が廊部分になる可能性もある。梁行、桁行とともにやや寸法が異なる歪んだ平面形をもつ建物だが、柱穴掘り方は小さいながらも深く、しっかりと掘られている。出土遺物は図示した須恵器壺Bの他に、須恵器壺B蓋・身、壺A、盤A片があり、V₁期～V₂期に位置付け可能。

38号掘立 33号掘立と類似した主軸をもつ側柱建物で、42・43号掘立とも同様の主軸方位をもって並列して建てられている。2間×3間であるが、梁行柱間間隔が広く、桁行間隔の狭い、やや幅広の建物となっている。出土遺物は須恵器壺A片2点のみで、時期不詳である。

39号掘立 調査区域の北東コーナーに位置するため、北側と東側が調査区域外にあり、詳細は定かでないが、2間×3間の横向き建物の可能性が高い。主軸方位は北から僅かに東寄りに振る37号掘立と類似した方位をもつものである。出土遺物は須恵器壺B蓋片と壺B身片のみで、時期不詳である。

40号掘立 東側が調査区域外にある桁行4間の側柱建物で、梁行は2間の可能性が高い。38号掘立と類似する主軸方位をもち、69号土坑が重複している。桁行の柱間は間隔が115cmとかなり狭く、柱穴掘り方が50～60cmの大型でしっかりと掘られている特徴をもつ。出土遺物は須恵器細片が少量あるのみで、時期は不詳である。

41号掘立 北側が調査区域外にある梁行3間の側柱建物で、桁行は柱間間隔から見て、3間と思われる。

38号掘立よりも若干北向きに主軸をとるが、梁行をあわせる形で建てられている。柱穴掘り方は40～50cmで比較的深く掘られている。出土遺物は図示した須恵器壺B・壺AからIII～IV₁期に比定可能。

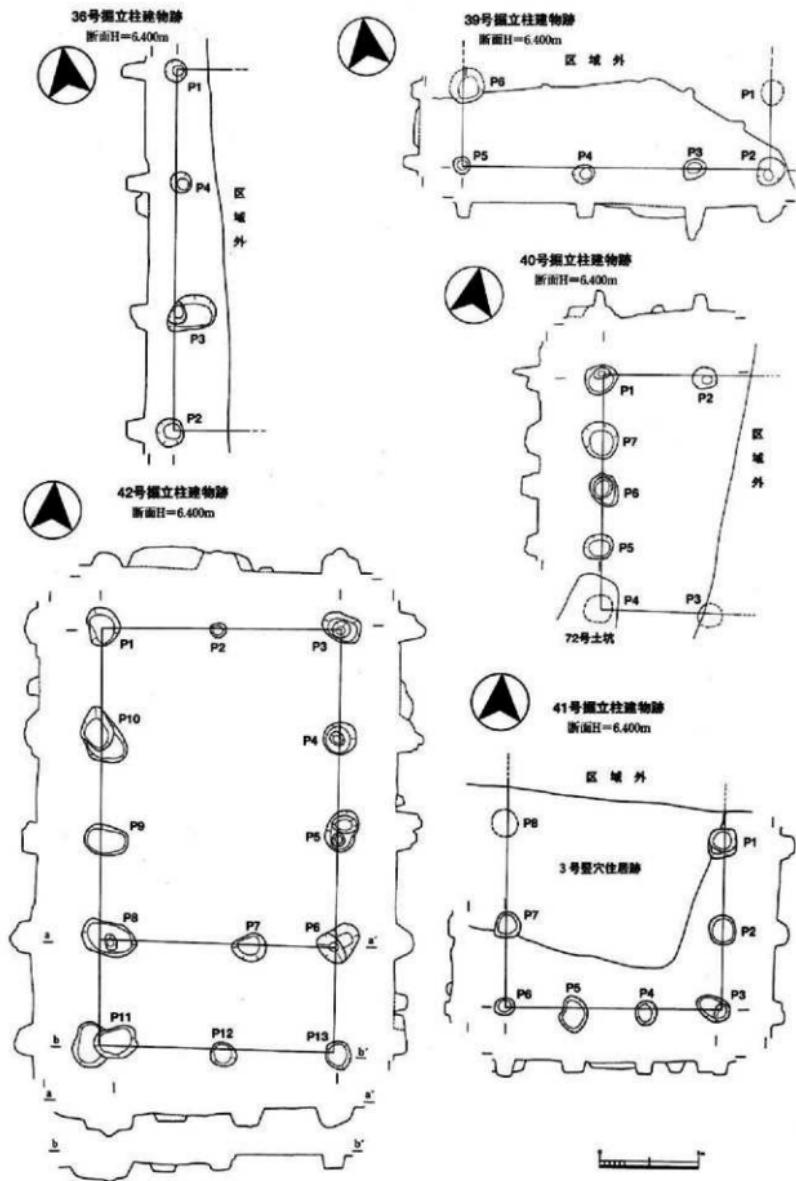
42号掘立 43号掘立とほぼ同一主軸で重複して立地する側柱建物で、38号掘立とも類似した主軸をもつ。梁行2間の建物で、桁行は4間分あるが、南側部分を廊と考えれば、2間×3間の身舎に南面廊をもつ建物とも考えられる。ただ、廊部分にあたる柱穴が比較的深くしっかりと掘られていることと南側梁行の中柱がやや東寄りにずれていることから考えて、2間×4間の建物とするのが妥当だろう。柱穴掘り方は全体的に大型円形でしっかりと掘られている。出土遺物は須恵器壺B蓋、壺A、盤A、短頸壺、土師器長胴瓶などの小片があり、IV₁～IV₂期頃に比定可能である。

43号掘立 42号掘立と同一主軸で重複して立地する2間×3間の側柱建物である。東桁行柱列と南梁行柱列はしっかりと並び、柱間も均等であるが、北梁行と西桁行は柱列がズレ、平面形がやや歪んでいる。出土遺物はP1から須恵器壺Bの蓋と身のセットが出土しており、IV₁～IV₂古期に比定可能である。

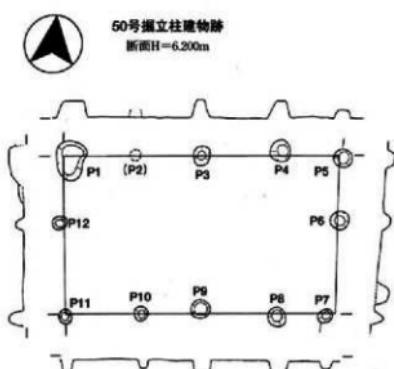
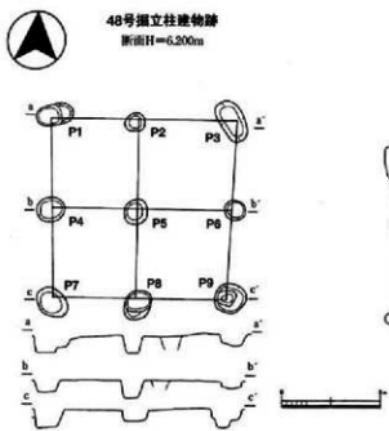
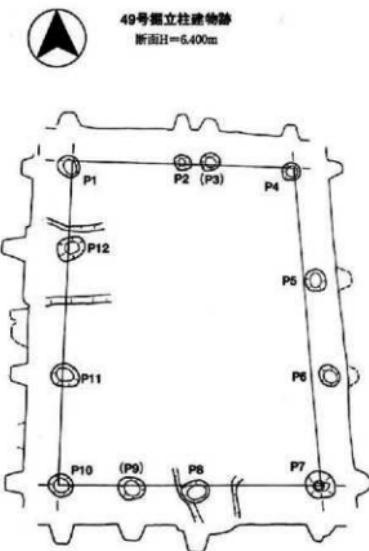
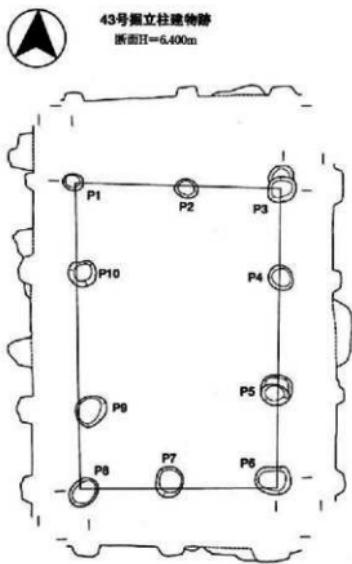
48号掘立 5号掘立に類似する主軸をもつ2間×2間の総柱建物である。柱穴掘り方は径50～60cmと側柱建物よりも大きめであるが、19・20号掘立の総柱建物から見れば小型であり、平面形もやや歪む。出土遺物は須恵器小片のみで、時期は不詳である。

49号掘立 北向きの主軸方位をもつ3間×3間の側柱建物で、柱筋は西側桁行のみ揃い、東側桁行は大きく歪む。梁行も、北側では中の2本柱が中央に寄って掘られており、梁行2間の感さえある。出土遺物はV期頃に比定可能な須恵器壺Aが1点ある。

50号掘立 7号掘立と類似する主軸方位をもって横向きに建てられる2間×4間の側柱建物で、間数のわりには比較的小型の建物である。柱穴掘り方も深さはあるが、径20～30cmと小型で、納屋的な感じを受ける。桁行の柱列は比較的通っているが、梁行の柱列はややズレ、中柱が北側によって掘られている。出土遺物は須恵器小片が少量のみで、時期は不詳。



第48図 36号・39号・40号・41号・42号樁立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)



第49図 43号・48号・49号・50号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)

| 掘立番号 | 主軸 | 形態 | 規模(間数) | 梁長/桁長/面積 | 振り方寸法・形態・深さ | 平均柱間寸法 | 備考 |
|-------|--------|----|---------|----------------|-----------------|-----------|-------------------------------------|
| 2号掘立 | N-15-W | 側柱 | 2間×3間 | 510/700/35.7 | 50~60・略円・50~60 | 梁250/桁230 | 南梁のみ大型の中柱2本 |
| 3号掘立 | N-13-W | 側柱 | 2間×3間 | 495/770/38.1 | 50~60・略円・60~70 | 梁245/桁255 | 西側雨落ち溝 |
| 4号掘立 | N-14-W | 側柱 | 3間×4間 | 560/760/42.5 | 50前後・略方主・50~60 | 梁185/桁190 | 西側雨落ち溝 |
| 5号掘立 | N-04-W | 側柱 | 3間×4間 | 560/735/41.2 | 70~90・略方主・45~60 | 梁180/桁170 | 北面廊(含む)と桁950の面積53.2)有? |
| 6号掘立 | N-10-W | 側柱 | 3間×4間 | 560/750/42.0 | 40~50・略円・30~40 | 梁185/桁185 | |
| 7号掘立 | N-04-W | 側柱 | 3間×3間 | 480/560/26.9 | 50前後・略円・30~40 | 梁160/桁180 | |
| 9号掘立 | N-01-W | 側柱 | 1間×3間 | 210/570/12.0 | 40~50・略円・20~30 | 梁210/桁185 | 東側補助柱(含む)と梁350面積19.9)? |
| 10号掘立 | N-09-W | 側柱 | 2間×3間 | 推460/655/推36 | 40~50・略円・15~35 | 梁230/桁220 | 東半不明、復元値 |
| 13号掘立 | N-90-W | 側柱 | 2間×4間 | 530/930/49.3 | 40前後・略円・50前後 | 梁265/桁235 | 横向き建物 |
| 16号掘立 | N-00-W | 側柱 | 3間×3間 | 495/推570/推28.2 | 40前後・略円・15~25 | 梁165/桁210 | 北半なし、復元値 |
| 17号掘立 | N-02-E | 側柱 | 2間×3間 | 450/640/28.8 | 40~50・略円・20前後 | 梁235/桁215 | 建物歪み梁行北と南で誤差 |
| 19号掘立 | N-03-W | 竪柱 | 2間×3間 | 420/450/18.9 | 100前後・略方主・30~40 | 梁210/桁150 | 倉、北梁行柱穴のみ小型 |
| 20号掘立 | N-04-E | 側柱 | 3間×3間 | 440/570/25.1 | 60前後・略円・15~30 | 梁145/桁190 | |
| 21号掘立 | N-05-E | 竪柱 | 2間×2間 | 320/370/11.8 | 60~80・略円・40~50 | 梁160/桁185 | 「田」の字型の倉 |
| 22号掘立 | N-06-W | 側柱 | 2間×3間 | 推320/425/推13.6 | 40~60・略円・20~40 | 梁160/桁140 | 東半なし、復元値 |
| 23号掘立 | N-05-E | 側柱 | 2間×3間 | 推430/690/推29.7 | 35~60・略円・15~40 | 梁215/桁230 | 東半なし、復元値 |
| 24号掘立 | N-02-W | 側柱 | 2間×3間 | 330/530/17.5 | 60主・略円・20~35 | 梁165/桁175 | 北梁行柱穴大きい |
| 26号掘立 | N-00-W | 側柱 | 2間×3間 | 300/510/15.3 | 50主・略円・10~20 | 梁145/桁170 | 梁行南と北で誤差、北梁行柱穴大きい |
| 27号掘立 | N-01-W | 側柱 | 2間×3間 | 450/575/25.9 | 50~60・略円・15~25 | 梁230/桁190 | |
| 28号掘立 | N-04-E | 側柱 | 2間×3間 | 460/625/28.7 | 50前後・略円・10~25 | 梁220/桁205 | 梁行南と北で誤差、重む |
| 31号掘立 | N-04-W | 側柱 | 2間×3間 | 460/570/26.2 | 40~50・略円・10~25 | 梁230/桁190 | |
| 32号掘立 | N-02-W | 側柱 | 2間×3間 | 500/660/33.0? | 50~60・略円・15~20 | 梁250/桁220 | 東南なし、推定。桁行柱間誤差有 |
| 33号掘立 | N-03-W | 側柱 | 3間×3間 | 490/660/32.3 | 50前後・略円・35~60 | 梁160/桁220 | |
| 34号掘立 | N-01-W | 側柱 | 3間×3間 | 510/600/30.6 | 40~60・略円・20~30 | 梁170/桁200 | 建物歪み梁行北と南で誤差 |
| 36号掘立 | N-06-W | 側柱 | ?間×3間 | ?/730/? | 40~55・略円・35~45 | 一/桁240 | 西桁のみ、37号掘立の可能性も有 |
| 37号掘立 | N-08-W | 側柱 | 2間×3間 | 470/710/33.4 | 40前後・略円・40~50 | 梁235/桁235 | 歪み有、36号掘立が東面廊の可能性 |
| 38号掘立 | N-05-W | 側柱 | 2間×3間 | 400/480/19.2 | 35~50・略円・20~30 | 梁200/桁160 | |
| 39号掘立 | N-81-W | 側柱 | ?間×3?間 | ?/620/? | 30~40・略円・20~30 | 梁150/桁200 | 北と西なし、横向き建物? |
| 40号掘立 | N-05-W | 側柱 | 2間×4間 | 推420/470/推19.7 | 50~60・略円・30前後 | 梁210/桁115 | 東半なし、復元値、桁間狭い |
| 41号掘立 | N-00-W | 側柱 | 3間×3?間 | 435/推510/推22.2 | 40~50・略円・25~30 | 梁145/桁170 | 北半なし、復元値 |
| 42号掘立 | N-04-W | 側柱 | 2間×3~4間 | 480/640/30.7 | 60~70・略円・30~50 | 梁240/桁210 | 桁4間なら850.40.3m ² 、南面廊かも? |
| 43号掘立 | N-03-W | 側柱 | 2間×3間 | 410/600/24.6 | 50前後・略円・20~30 | 梁200/桁200 | |
| 48号掘立 | N-01-W | 竪柱 | 2間×2間 | 370/390/13.3 | 50~60・略円・35~40 | 梁180/桁180 | 「田」の字型の倉 |
| 49号掘立 | N-04-E | 側柱 | 3間×3間 | 520/650/33.8 | 50前後・略円・30~50 | 梁175/桁215 | 東桁行柱ズレ、大きく重む |
| 50号掘立 | N-92-W | 側柱 | 2間×4間 | 320/550/17.6 | 20~30・略円・30前後 | 梁160/桁135 | 横向き小型建物 |

第2表 古代掘立柱建物跡一覧表 (寸法単位は全てcmであるが、面積のみm²で表示した。なお、推は推定復元値の略)

第3項 その他のピット

掘立柱建物跡として述べた以外にも、建物の柱穴となると予想される柱穴が多数存在するが、柱列として並ぶものは少なく、6号掘立の西側に沿う形で並ぶものが確認される程度である。大型でしっかりした掘り込みをもち、土器出土を伴う柱穴が少なからず存在するため、確実に掘立柱建物跡は数棟増えるものと予想するが、重複や複数時期のピットが多数あるため、把握できなかった。

第4項 土坑

古代の土坑として認定したものは全部で17基あるが、規模や形態、土器出土の形に様相があり、性格もそれによって異なっていただろう。以下に、分類した4類型の特徴を提示し、その性格を検討する。

1. A類土坑

土坑底面が比較的平坦な竪穴状を呈すもので、平面形にきまとった形はないが、不整形は少なく、比較的土坑形態のしっかりした橢円形や隅丸方形が主体である。規模は150~350cmとばらつくが、4つの類型の中では最も大きな土坑で、深さ30cm以下のものが主体である。土器の出土は土坑によって差があるが、4類型中、最も出土量が多く、一部完形に近いものも含まれるが、どちらかと言えば、破片での出土が主体である。須恵器食膳具が主体であるが、土師器煮炊具も定量含まれており、土坑の中では最も煮炊具を多く出土する類型である。当土坑資料の過半数を占める主体的類型であり、土器廐棄土坑と呼ばれているものに相当する。土坑は、33号土坑、69号土坑、77号土坑、84号土坑、91号土坑、92号土坑、95号土坑、96号土坑が該当すると言えるが、75号土坑、97号土坑、101号土坑の3基もやや土器少なかったり、A類としては深い形態をとるもの、該当する可能性がある。

2. B類土坑

長方形か長楕円形の平面プランをもつもので、底面を平坦にする土坑である。規模は長軸200前後、短軸100前後で、あまり深いものはない。土器の破片での出土は少なく、数個体であるが比較的大きな破片か完形に近い個体で出土する。主に食膳具が多いようである。確実な根拠に欠けるが、形態と土器出土から墓坑としての性格を想定したく、27号土坑や59号土坑をその事例として上げたい。

3. C類土坑

径が100~150cm程度、深さ50cm程度の小型で深い掘り込みをもつ円形土坑で、壁が直に立ち上がる竪坑的形態をもつ。土器の出土は少なく、埋土にこれと言った特徴はない。大型掘立の柱穴掘り方と類似するが、柱痕状のものではなく、水溜め穴など何かを溜めておく穴の機能を想定したい。該当する土坑は、58号土坑のみで、この土坑には南から溝が真っすぐ取り付いている。同時併存の必然性はないが、関連する遺構（導水のための溝等）と考えておきたい。

4. D類土坑

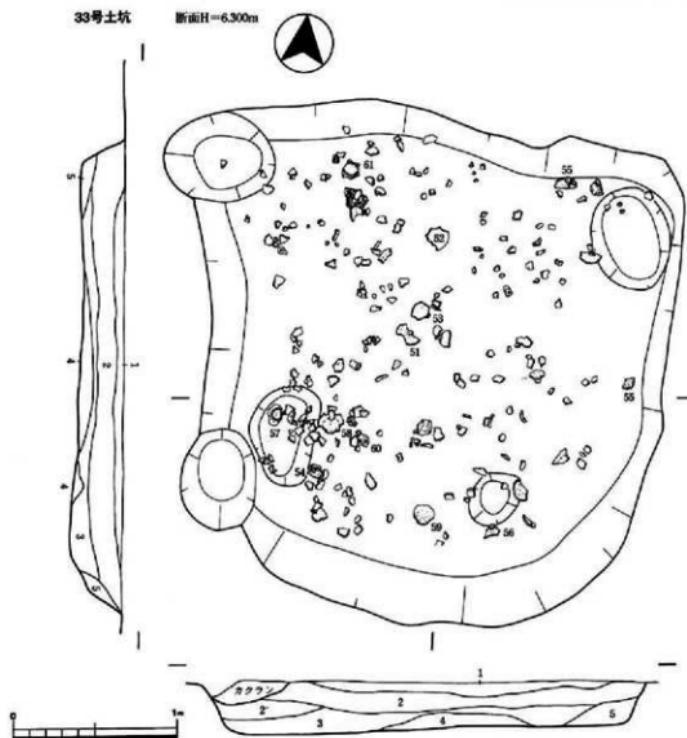
不整形ないしは不整橢円形を呈す100cm前後の小型土坑で、底面はすり鉢状か凸凹状となる。概して土坑は浅いが、大きさのわりに土器の出土は多く、破片を主として須恵器と土師器が定量含まれる。意識的に土坑として掘られたA類土坑とは異なるが、出土状況は類似しており、土器を廐棄した土坑と考えたい。74号土坑、77号土坑が該当し、98号土坑はこのような土坑が3基集まつたものと考えたい。

以上、4つの類型の土坑を提示したが、B類の墓坑的性格をもつものやC類の水溜め的性格をもつものは少なく、大半がA類、D類とした土器廐棄土坑の性格を有するものとなる。このA類とD類であるが、冒頭でも述べたように、掘立柱建物跡の分布が切れる中央東寄りの空間にまとまる傾向があり、この空間の中で順次移動して作り替えられている様子が見られる。建物とどのようにからむか興味深い。

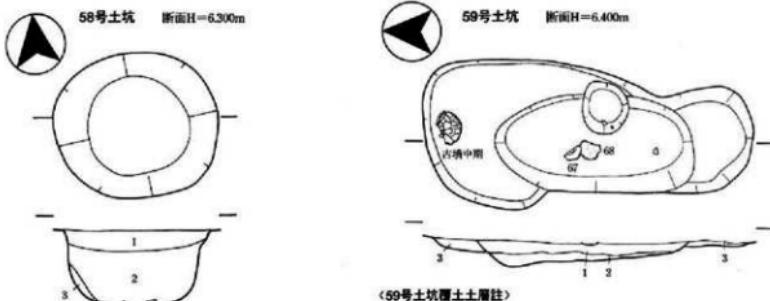
27号土坑 断面H=6.300m



33号土坑 断面H=6.300m



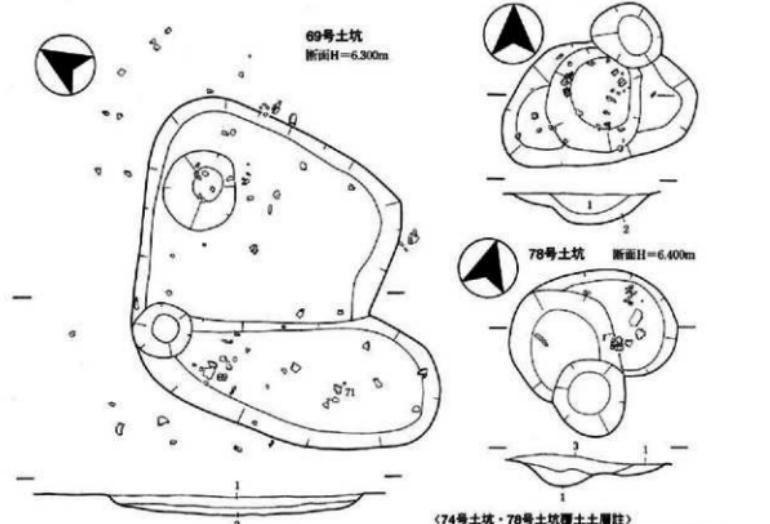
第50図 27号土坑・33号土坑平面・断面図 (S=1/30)



(58号土坑覆土土層註)

- 1層：黃灰色砂質黏土 (2.5Y5/1) 灰白色土粒多目、炭化粒少量含有。
- 2層：灰色黏土 (5Y5/1) 黑黃色黏土混在。炭化粒多目含有。
- 3層：黃灰色砂質黏土 (2.5Y6/1) 黑色土粒多目含有。

3層：オリーブ灰色粘土 (5GY6/1) と灰色粘土 (5Y5/1) の混在土。



(69号土坑覆土土層註)

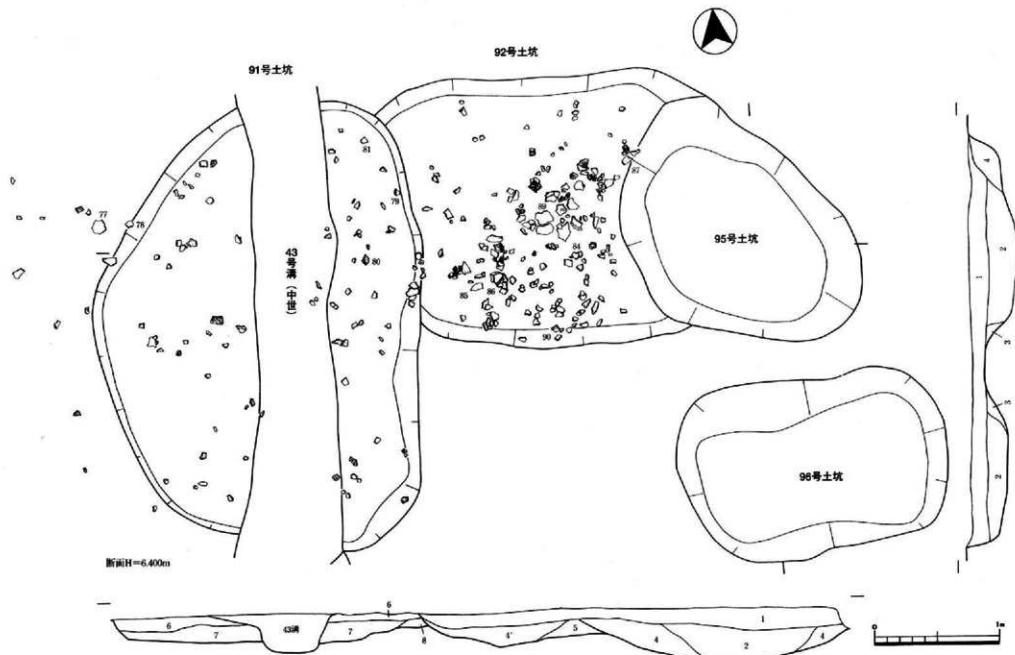
- 1層：灰色粘土 (5Y4/1) 炭化粒・塊多目、黃橙粘土土粒少量含有。
- 2層：灰色粘土 (5Y5/1) とオリーブ灰色粘土 (5GY5/1) の混在土。炭化小塊多目、黃橙粘土粒多目含有。

(74号土坑・78号土坑覆土土層註)

- 1層：海灰色砂質黏土 (7.5Y5/1) 黃棕粘土少量混在。
- 2層：海灰色黏土 (5Y5/1) 黃棕粘土少量混在。炭化粒少量。
- 3層：海灰色砂質土 (10Y5/1) 炭化粒少量含有。



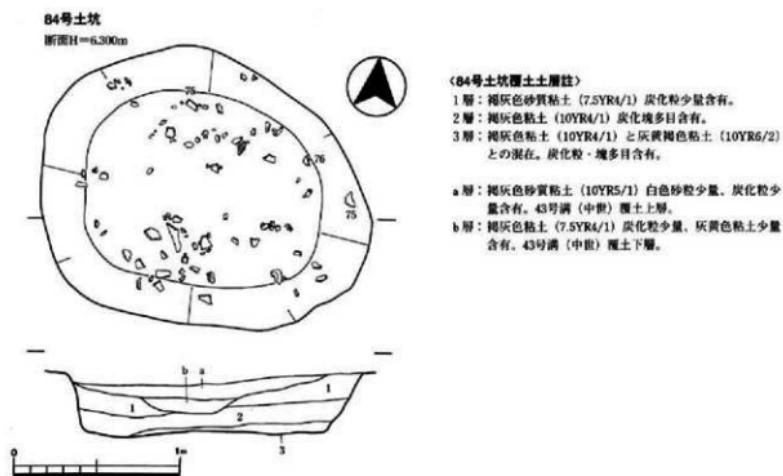
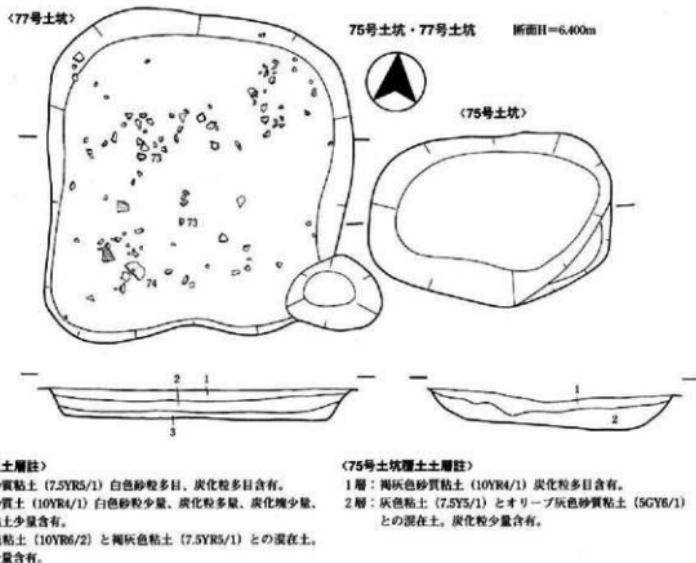
第51図 58号・59号・69号・74号・78号土坑平面・断面図 (S=1/30)



（91号・92号・95号・96号土坑埋土土層注）

- 1層：褐灰色砂質粘土。(10YR5/1) 炭化塊多目。に多い黄褐色粘土少量含有。(95号・96号土坑下層土)
 2層：灰白色粘土。(5Y4/1) 炭化塊多量。オリーブ灰色粘土少量含有。(95号・96号土坑下層土)
 3層：黄褐色砂質粘土。(2.5Y5/1) と灰黄色粘土。(2.5Y7/2) の混在土。炭化塊少量含有。(91号・92号・96号土坑下層土)
 4層：褐灰色砂質粘土。(10YR5/1) に多い黄褐色粘土多量、炭化塊少量含有。(95号土坑下層土)
 4'層：4層中に炭化塊多目含有。(92号土坑下層土)
 5層：灰黃色砂質粘土。(10YR4/2) 灰黃色砂質粘土多量混在。炭化塊多量含有。(92号土坑下層土)
 6層：灰黃色砂質粘土。(10YR5/2) 炭化塊少量。白色砂質少量含有。(91号土坑上層土)
 7層：褐灰色粘土。(7.5YR4/1) 炭化塊・塊多目含有。(91号土坑下層土)
 8層：褐灰色粘土。(10YR5/1) と灰黄色粘土。(2.5Y6/2) の混在土。炭化塊少量含有。(91号土坑下層土)

第52図 91号・92号・95号・96号土坑平面・断面図 (S=1/30)



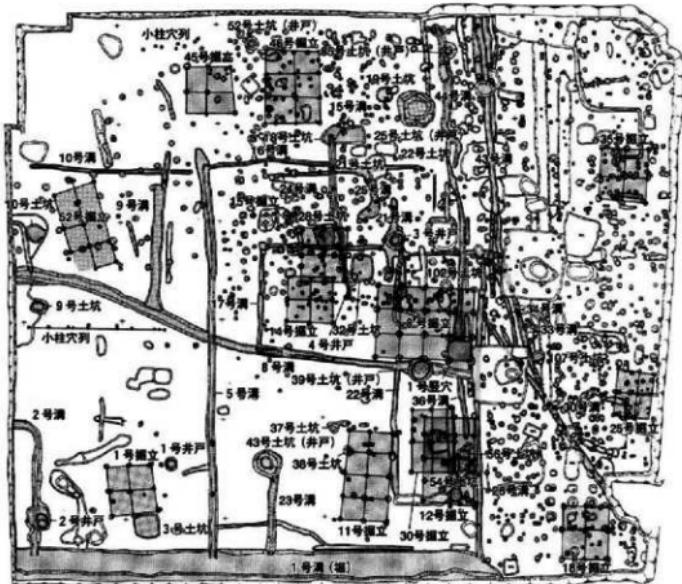
第53図 75号・77号・84号土坑平面・断面図 (S=1/30)

第3節 古代末～中世の遺構

第1項 概要

古代遺構は、9世紀中頃まで確認されるが、それ以降は少量の土器が出土するだけで、10・11世紀は確実な遺構を伴っていない。12世紀前半、藤田邦雄氏の加賀地域土師器皿編年案（藤田邦雄1992「加賀における様相—土師器—」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料）でのⅠ—Ⅱ期ないしはⅠ—Ⅲ期に入ると遺物量は増加し、遺構からも確実に出土するようになる。この時期に伴う遺構としては、溝が主体であるが、掘立柱建物跡や土坑も少なからず存在し、中世村落が当地区に確実に存在していることが伺える。主体となる時期はⅢ期（12世紀後半～13世紀前半）で、掘立柱建物跡の多くはこの時期に伴い、ピークを迎える。Ⅲ期以降も土器の出土状況から見れば、急激な衰退とは思われないが、遺構からの出土は減少し、明確に当期以降に位置付けられる掘立柱建物跡を確認していない。ただ、溝からはⅣ期（15世紀後半）に下る土器も出土しており、衰退の様相を呈しながらも、細々と存続していたものと思われる。

遺構として把握できるⅠ-Ⅱ期-Ⅲ期のものは、掘立柱建物跡、溝、土坑、小柱穴列があるが、土坑は竪穴状土坑と井戸状土坑があり、通常の中世村落より検出される遺構はほぼそろっている。掘立柱建物跡は確実に建物を把握できたものが13棟と少ないが、中世の土器を伴う柱穴はこれ以外にも多数あり、実際の建物は提示した棟数よりも確実に増えるものと思われる。帰属不明の柱穴は、主に調査区域の中央付近とその東側区域に確認されるが、その区域は柱穴密集区で、古代遺構との重複があり、建物把握



第54図 古代末～中世の遺構分布 ($S=1/500$)

は難しい。固定化された場所中で、建て替えも含め、時期を越えて建物が密集する状況だったのだろう。

以上のように、遺構認定に不確定な部分を残すが、確実視される遺構を取り上げ、分布図を作成したのが、中世遺構分布図である。これを見ると、南端に大型の壠状遺構（1号溝）があり、そこから直交して派生する形で南北に真っすぐ延びる5号溝、そして5号溝の北端から東西に10・16号溝が延び、方形区画を形成していることが分かる。この区画は、ほぼ真北に軸を置いて設定しており、建物の主軸もこれに一致する。壠状遺構には5号溝以外にも南北に直交して延びる溝が3条あり、同時併存とは言えないが、同様の方形区画を形成している。壠状遺構と直接的に連結しなくとも、他の溝と連結しながら、方形区画を形成しており、いずれもその軸は真北においてあることが特徴である。これらの溝は、重複などもあり、単時期でないことは確かで、複数時期にわたって營まれた区画であるが、常に壠状遺構を基軸にしているように見受けられる。ただ、8号溝のみは、5号溝と重複したあたりから西側へ、北に歪んで蛇行しており、真っすぐ伸びる溝とは異質の感を受ける。が、同時併存と考えられる9号溝や22号溝は南北軸に沿っており、基本的には同様の軸上に存在すると考えるのが妥当だろう。壠状遺構は26号溝と直交する付近で南へ急に曲がって、調査区域外へ走るが、そこから東側の区域では南北・東西に走る溝が確認されなくなり、区画は形成されず、斜行する溝が数条あるだけである。

建物や井戸、土坑の分布は、方形区画溝が密集する区域にあるが、区画溝が存在しない東側区域でも掘立柱建物跡は存在する。ただ、この区域での井戸や土坑は極少なく、西側区域とは明らかに異なる様相をもっている。東側区域の掘立柱建物跡の時期にもよるが、方形区画形成時期とは別の時期の建物である可能性がある。方形区画内の遺構は、掘立柱建物跡と竪穴状土坑、そして井戸（井戸状土坑）が一部重複しながら分布し、それらが区画の中でセットで配置される可能性がある。

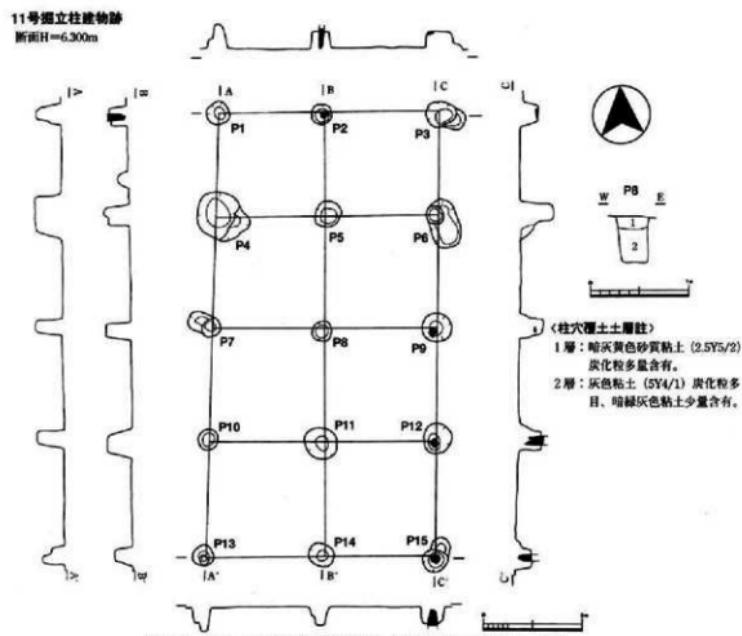
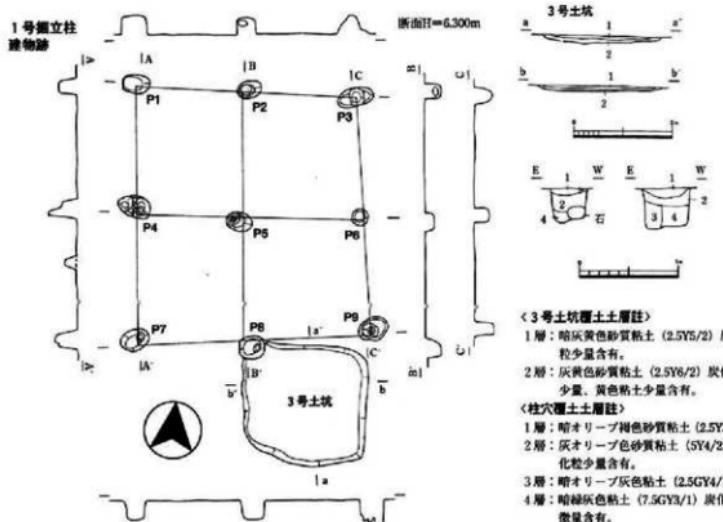
遺跡の分布は、古代同様、区域外にも広がるものと予想するが、地形的には北側へはこれ以上延びず、西側や東側へも主に南半のみと思われる。南端に存在する大型壠状遺構が南へ曲がって延びていることや南側での遺構分布が顕著であることを考えれば、中世における当遺跡の広がりは、主に南側に向かっていたと予想できる。壠状遺構が特定の建物を区画するような「方形壠」である可能性はないと言えないが、現段階では居館跡を想定する積極的根拠はない。

第2項 掘立柱建物跡

確認できた掘立柱建物跡は13棟のみで、いずれも総柱建物である。主体は2間×2間のもので、2間×3間は極少なく、大型建物として2間×4間が、また、3間×4間の横向き特大建物も1棟存在する。柱列は歪んだものが多く、柱穴掘り方は小型のものが主で、柱穴の抜けているものもある。しかし、柱根を残すものや礎板をもつものが定量あり、特に大型建物にはそれが顕著である。主軸は基本的に溝区画と同様、北に主軸をもつが、52号掘立柱建物跡のような西に15度振るものもあり、注意が必要である。以下に、個別の掘立柱建物跡の説明を行うが、詳細は掘立柱建物跡寸法表を参照願いたい。

1号掘立 北から若干西寄りに主軸方位をもつ2間×2間の建物で、西桁がやや広い歪んだ柱筋となる。P8とP9の南側には、250cm×250cm、深さ15cmの隅丸方形を呈す竪穴状土坑の3号土坑が存在する。多くはないが、土師器皿の廃棄が行われており、建物に付属する遺構と思われる。柱穴からの土器出土はないが、3号土坑からはII-I3期～II-II期の土師器皿が出土している。

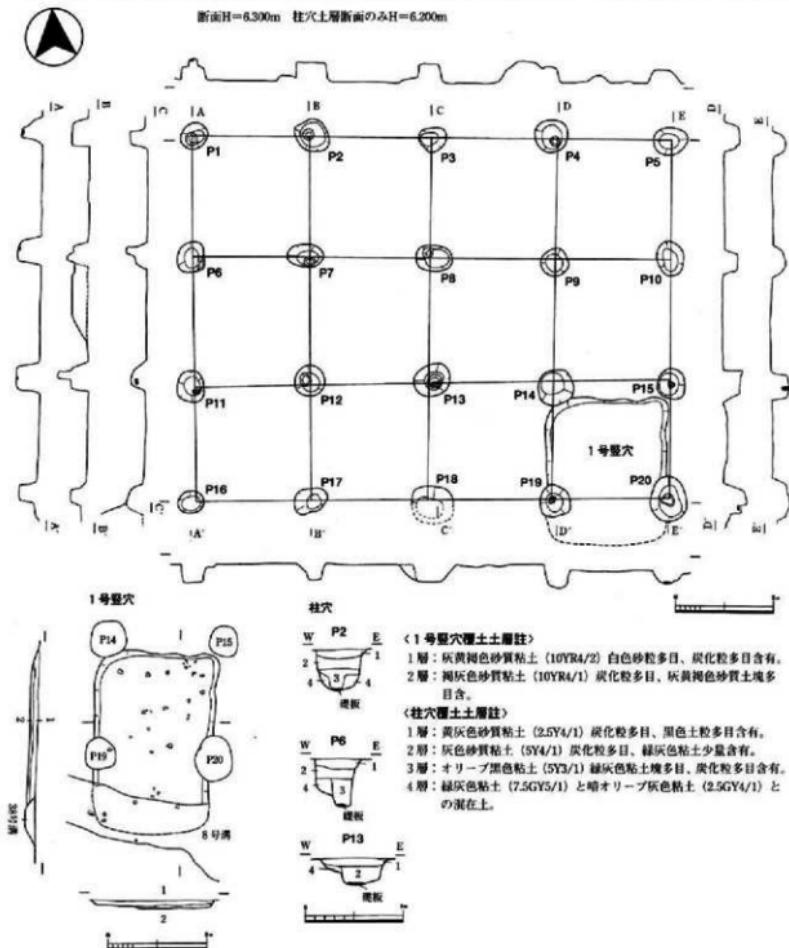
8号掘立 北から僅かに東へ主軸を振る3間×4間の横向き特大建物で、面積は70.8m²を測る。柱穴掘り方はさほど深いものはないが、底面平坦にしっかりと掘られており、径も大型である。柱はP15で柱根らしきものが確認されるが、地山に直接打ち込むような形態をとるものではなく、基本的には他の柱穴と同様、礎板を使った柱設置をしていると言える。礎板は7カ所の柱穴で確認しており、基本的に全



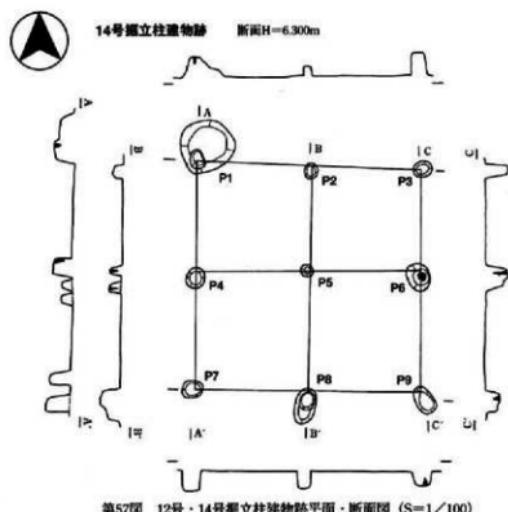
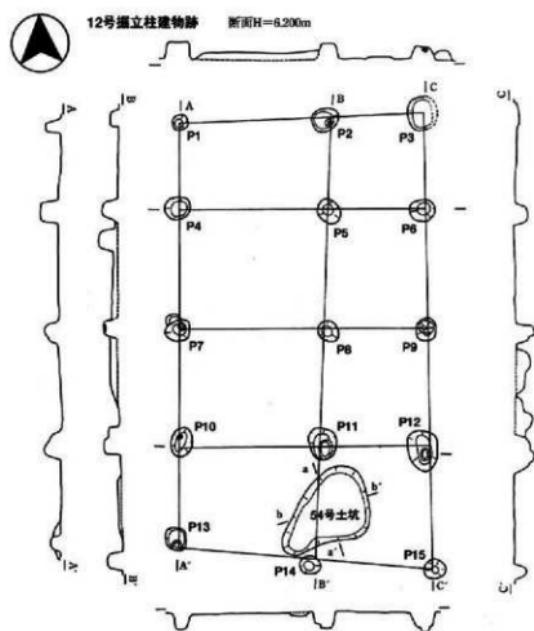
第55図 1号・11号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100, 1/50)

ての柱穴に設置されていたものであろう。また、P14・P15の南側、P19・P20にかけて240×360cm、深さ15cmの竪穴状土坑である1号竪穴が存在している。隅丸長方形を呈すもので、柱穴の柱間内で存在し、建物構造に直接的に関連するものと予想する。柱穴からはII-I期からII-II期頃の土器が出土しているが、土坑からはII-I期のまとまった土師器皿が出ており、後者を帰属時期に当てたい。

11号掘立 8号掘立の南方、8号掘立よりも僅かに東へ主軸を振る2間×4間の大型建物で、柱穴掘り方は深くしっかりと掘られている。柱は柱根を残す、地山に直接打ち込まれるもののが主体で、遺存するP2・P12・P15の3本の柱根ではかなり地中深く打ち込まれていた。ただ、一部礎板を残すものもあり。



第56図 8号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100, 1/50)



そこでは柱穴掘り方底面を平坦に掘り、比較的浅く、大型掘り方となっている。一つの建物の中で異なる柱建てが存在する理由を建物構造に求めることもできるが、単純に調達した柱材の長さが不均等であったことに起因する可能性もある。柱穴出土の土師器皿はⅡ-I₃期～Ⅱ-II期に位置付けられる。

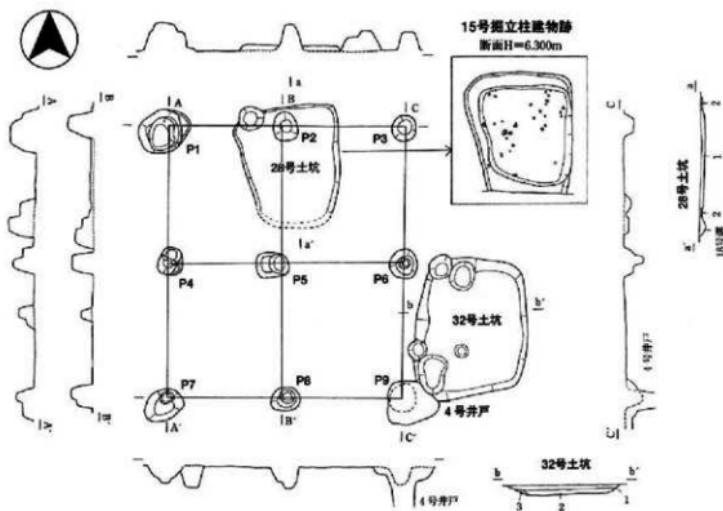
12号掘立 11号掘立の東側に並列して建てられる2間×4間の大型建物で、11号掘立に類似した規模をもつ。柱穴掘り方はP4～P12では比較的しっかりした掘り込みをもつが、北面梁部分のP1～P3と南面梁部分のP13～P15は小型で、浅い柱穴となっており、柱筋もやや歪んだ並びをしている。2間×2間の建物の北面と南面に庇を設けたような感じの建物と言える。柱穴には一部柱痕跡を残すものもあるが、底面平坦なものが主体的で、礎板を使う柱設置が主体的である。P11とP14の間には竪穴状土坑(54号土坑)が掘られているが、不整形のものであり、8号掘立のような建物に付設されるものとは判断しかねる。規模は150×220cm、深さ10cm程度で、土器は非クロロ成形土師器皿を主体とする。柱穴からは少量であるが、Ⅱ-I₂期～Ⅱ-I₃期頃の土師器皿が出土している。

14号掘立 8号掘立の西側に並列して建てられる2間×2間の建物である。柱穴掘り方は小さいが、比較的深く掘られ、柱痕跡状の2段掘り込みも見られる。柱根を遺存するものが5カ所と多く、地山への打ち込みはさほど深くないが、いずれの柱も掘り方掘削後に柱を打ち込む柱建ての方法をとっている。柱穴出土の土器から、Ⅱ-II期頃に位置付けられる。

15号掘立 14号掘立に一部重複して北側に存在する2間×2間の建物で、桁行きが幾分長くなっている。柱穴掘り方は比較的大きく、深くしっかりと掘られるものが多く、柱痕跡の2段掘り込みを残すものが主体的である。柱根は残っていないが、柱を打ち込む方法が主体の柱建てであると理解される。この掘立にはP2とP5の間(28号土坑)、P6とP9の東側(32号土坑)に2カ所、土坑が掘られている。いずれも竪穴状土坑で、28号は200×260cm、深さ10cmの隅丸方形、32号は200×280cm、深さ20cmの隅丸方形を呈す。一つの建物に2つの竪穴状土坑が伴う場合もあるが、32号土坑が方向も位置も柱穴配置と対応しているのに対し、28号土坑はやや軸が西に振っており、他の建物に伴う可能性をもつ。ただ、この軸に沿った建物は未確認であり、柱列すら把握できないのが現状である。柱穴内からは土器の出土がないが、

| 掘立番号 | 主 柱 | 形態 | 規模(間) | 梁長/桁長/面積 | 掘り方径・深さ | 梁間隔/桁間隔 | 備 考 |
|-------|--------|----|--------|--------------|-------------|---------------------------------|---|
| 1号掘立 | N-06-W | 繩柱 | 2間×2間 | 450/500/22.5 | 50前後・30～40 | 215,235/250,250 | 3号土坑付設、P5に礎板、P2に石当て。 |
| 8号掘立 | N-02-E | 繩柱 | 3間×4間 | 730/970/70.8 | 60前後・30～45 | 240,250,240 /235,250,250,235 | P14-P15南に1号竪穴付設、P15に柱根、P1,P2,P6,P11,P13,P19,P20に礎板。 |
| 11号掘立 | N-04-E | 繩柱 | 2間×4間 | 455/900/41.0 | 40～60・50～60 | 220,235/210,230,230,230 | P2,P12,P15に柱根、P3,P4,P9に礎板。 |
| 12号掘立 | N-01-E | 繩柱 | 2間×4間 | 500/900/45.0 | 40～50・30～40 | 300,200/185,245,245,230 | P1～3とP13～15の柱掘り方浅く小型、P11～P14間に土坑、P6,P7,P8,P10に礎板。 |
| 14号掘立 | N-01-E | 繩柱 | 2間×2間 | 460/460/21.2 | 25～40・40前後 | 230,230/210,250 | P1,P4,P5,P6,P9に柱根。 |
| 15号掘立 | N-02-E | 繩柱 | 2間×2間 | 490/550/27.0 | 40～50・40～50 | 230,260/280,270 | 南東に32号土坑付設。 |
| 18号掘立 | N-01-E | 繩柱 | 2間×2間? | 470/540/25.4 | 50～60・60～70 | 230,240/250,250 | P1,P2,P3,P7,P8に柱根、南桁行区域外? |
| 25号掘立 | N-06-E | 繩柱 | 2間×2間 | 375/470/17.6 | 35～45・25～45 | 230,145/240,230 | 南東柱区域外。 |
| 30号掘立 | N-03-W | 繩柱 | 2間×2間 | 430/645/27.7 | 30～50・25～50 | 205,225/340,305 | P5,P8に柱根。 |
| 35号掘立 | N-03-E | 繩柱 | 2間×2間 | 480/530/25.4 | 40～70・30～65 | 250,230/280,250 | |
| 45号掘立 | N-00-W | 繩柱 | 2間×2間 | 470/490/23.0 | 30～50・20～50 | 220,250/260,230 | 柱穴2カ所欠落。 |
| 46号掘立 | N-00-W | 繩柱 | 2間×3間 | 530/720/38.2 | 30～40・25～45 | 270,260/225,235,260 | P5に石当て。 |
| 52号掘立 | N-15-W | 繩柱 | 2間×3間? | 430/850/36.6 | 30～40・30～45 | 210,220/370,250,230 | 変則柱配置、主軸も西へ向く。 |

第3表 中世掘立柱建物一覧表(寸法単位は全てcmであるが、面積のみm²で表示。なお、梁間隔は西から東、桁間隔は北から南の順の平均値)

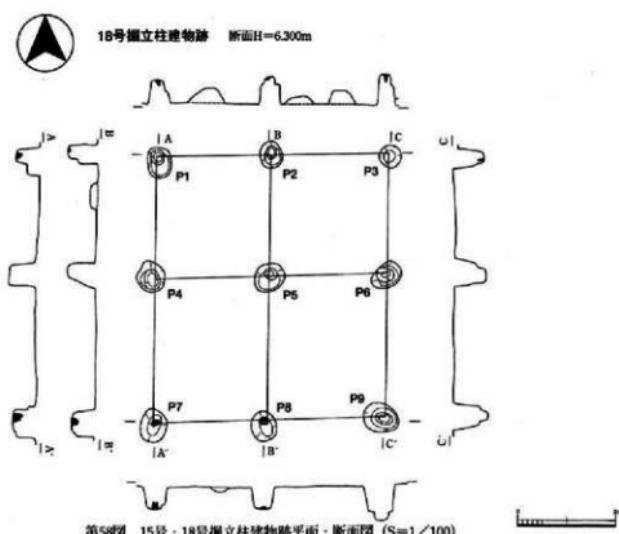


〈28号土坑覆土土層註〉

- 1層：褐灰色砂質粘土（7.5YR4/1）炭化小塊極多量、に赤い黄褐色
土壤少量含有。
2層：灰黃褐色粘土（10YR4/1）炭化粒多量、に赤い黄褐色土壤多量
含有。

〈32号土坑覆土土層註〉

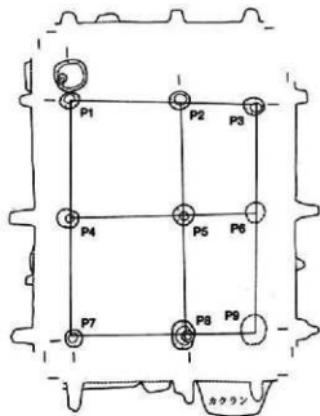
- 1層：褐灰色砂質粘土（10YR4/1）黑色土粒多量、炭化粒多量含有。
2層：オリーブ黒色砂質粘土（5Y3/1）炭化粒多量含有。
3層：灰色粘土（7.5Y4/1）とオリーブ灰色粘土（2.5GY4/1）の混在土、
炭化粒微量含有。



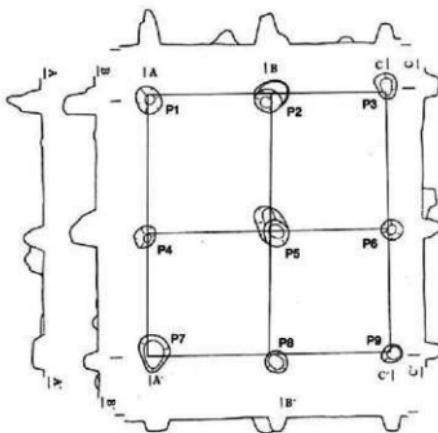
第58図 15号・18号掘立柱建物跡平面・断面図 (S=1/100)



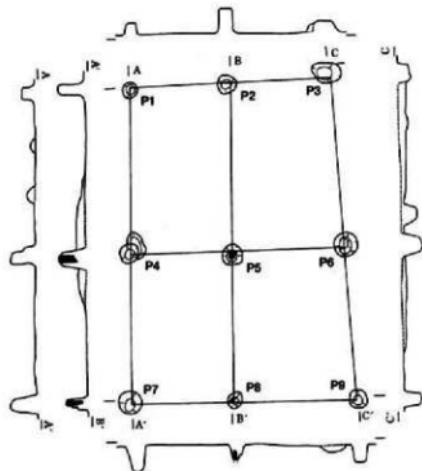
25号掘立柱建物跡
断面H=6.400m



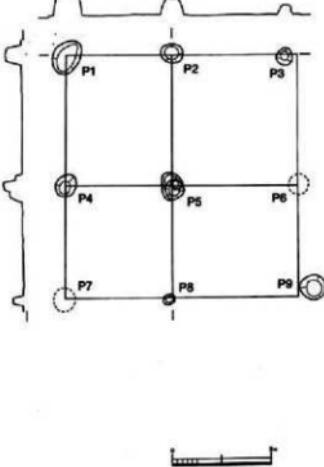
35号掘立柱建物跡
断面H=6.400m



30号掘立柱建物跡
断面H=6.200m



45号掘立柱建物跡
断面H=6.100m



第59図 25号・30号・35号・45号掘立柱建物跡 (S=1/100)

32号土坑からはⅡ-I₁期に位置付けられる土師器皿が出土しており、建物もこれに帰属可能と推察する。また、28号土坑でも32号土坑とほぼ同時期の土師器皿が出土している。

18号掘立 調査区域の南東に位置する、ほぼ真北に主軸をもつ2間×2間の建物で、南側が境界に接しているため、桁行がもっと区域外に延びる可能性もある。柱穴掘り方は、大きく深く、柱痕跡を示す2段掘りが確認され、その部分で柱根を遺存するものが多く見られる。地山への打ち込みは深くないが、柱痕跡の部分が打ち込みの深さを示す可能性もある。基本的に柱穴掘削後、柱を打ち込む方法のものであり、柱穴底面がその工法を物語る。柱穴からI-I₂期～I-II₁期の土師器皿が出土している。

25号掘立 調査区域の東側に位置する2間×2間の建物で、梁間間隔が西と東とで異なり、全体的に歪んだ平面形を呈す。柱穴掘り方は小型であるが、比較的深いものが目立ち、柱根は遺存していないものの、打ち込み式のものと思われる。柱穴出土土器からII-I₂～II-I₃期に比定する。

30号掘立 12号掘立と重複して、その北西側に同一主軸で建てられる2間×2間の建物で、梁間よりも桁間を長くとっている。柱穴掘り方は径は大きくないが、深くしっかり掘られたものが主で、柱根の遺存も2本の柱穴で見られる。遺存する柱根は、地山へ深く打ち込まれており、深く細い柱穴をもつものは、打ち込み方法によるものであろう。ただ、一部底面の平坦な大きめの柱穴をもつものについては、礎板使用である可能性もある。柱穴からはII期頃に位置付けられる土師器皿小片が少量出土している。

35号掘立 調査区域の北東側に位置する2間×2間の建物で、他の建物同様、北に主軸をもつ。柱穴掘り方は比較的径の大きなものが多いが、柱打ち込み式のような深く2段掘りの柱痕跡を残すものと浅く底面の平坦なものとがあり、一様ではない。出土遺物はI-I₃期頃の土師器皿が数点出土している。

45号掘立 調査区域の北側に位置する2間×2間の建物で、柱穴の一部が抜けるやや歪んだ建物である。柱穴掘り方はやや不揃いの感があり、柱穴からは土師器皿の細片が少量出土している。

46号掘立 45号掘立の東側に並列して建てられる2間×3間の建物で、真北に主軸をもつ。柱穴掘り方は小型で浅いものが主で、柱根の遺存はなく、柱穴に石を当てて固定するものが1カ所確認される。

52号掘立 中世掘立の中で唯一西へ主軸を振る2間×3間の建物で、上記の掘立柱建物跡とは別時期に位置付けられる可能性をもつ。柱穴の桁間間隔が北側で長くとっているため、桁行に長く延びる平面形態を呈し、そのためか、中央の柱列が変則的な配置を行っている。柱穴は小型規模であるが、比較的しっかりと掘られるものが多く、柱列の並びもさほど歪んだ感はない。柱穴から土器は出土していない。

第3項 土坑

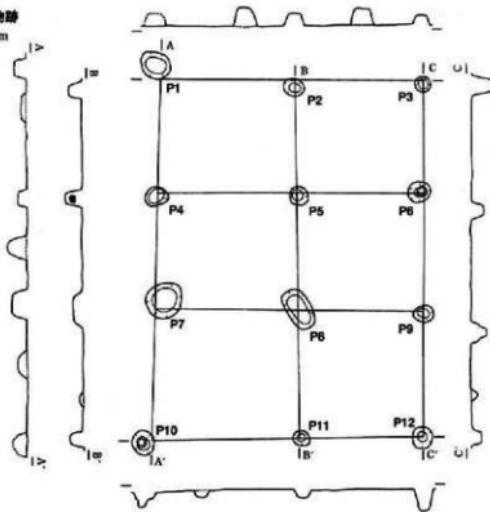
中世の土坑には、竪穴状土坑と井戸状土坑があることは前述したとおりであるが、両者に該当しない略円形であり深くない水溜め状を呈する土坑やあまり土器の出ない浅い不整形の土坑などもある。竪穴状土坑は竪穴造構も、井戸状土坑は井戸としたものも含めて以下に述べることとする。

1. 竪穴状土坑

土坑底面が比較的平坦な竪穴状を呈す浅い土坑で、土器の出土が比較的まとまって確認されるものである。平面形はやや不整形のものもあるが、隅丸形を呈すしっかりした規格のものが主体で、規模も200～300cmの正方形に近いものが多い。掘立柱建物跡に関連する遺構として、付設される例が大半で、単独立地するものは建物未確認である可能性も考えなければならない。いわゆる小竪穴と呼称されているもので、基本的に建物の主軸に沿って存在しているが、柱穴を跨いで存在するものではなく、柱穴間に存在するという法則性をもつ。ただ、1号掘立に対する3号土坑のような建物外に出るタイプと18号掘立と1号竪穴のような建物内に組み込まれるタイプとがあり、前者の場合は建物施設が竪穴部分まで張り出す可能性も想定される。機能としては、土間や作業場的空間が想定されているが（河西健二1993

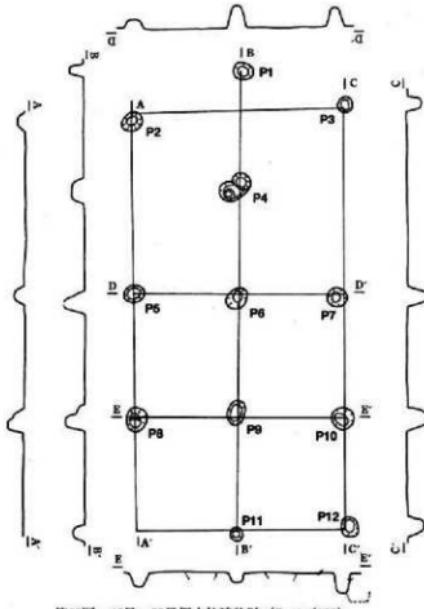
46号掘立柱建物跡

断面H=6.200m



52号掘立柱建物跡

断面H=6.200m



第60図 46号・52号掘立柱建物跡 (S=1/100)

「越中における様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしづくり』第6回北陸中世土器研究会資料）、そこで指摘されている炭化粒の混在を1号竪穴と32号土坑で確認している。当該タイプに認定可能なものとしては、上記に示した以外にも28号土坑、54号土坑、10号土坑がある。

2. 井戸状土坑

井戸に類する円形ないしは楕円形の平面形をもち、円筒状に深く掘り込んだ土坑を示すが、円筒形を呈さずとも、深さが150cm以上を測る土坑については、井戸に類する機能と判断し、これに含めて考える。形態から、井戸側を木組で構築するA類、井壁保護材が使用されていないような素掘り形態のもので、径1m以内の円筒形の掘り込みをもつB類、平面形が2m~3mを測る素掘り大型土坑で、壁は比較的傾斜をもって掘られるC類の3類型に分類できる。

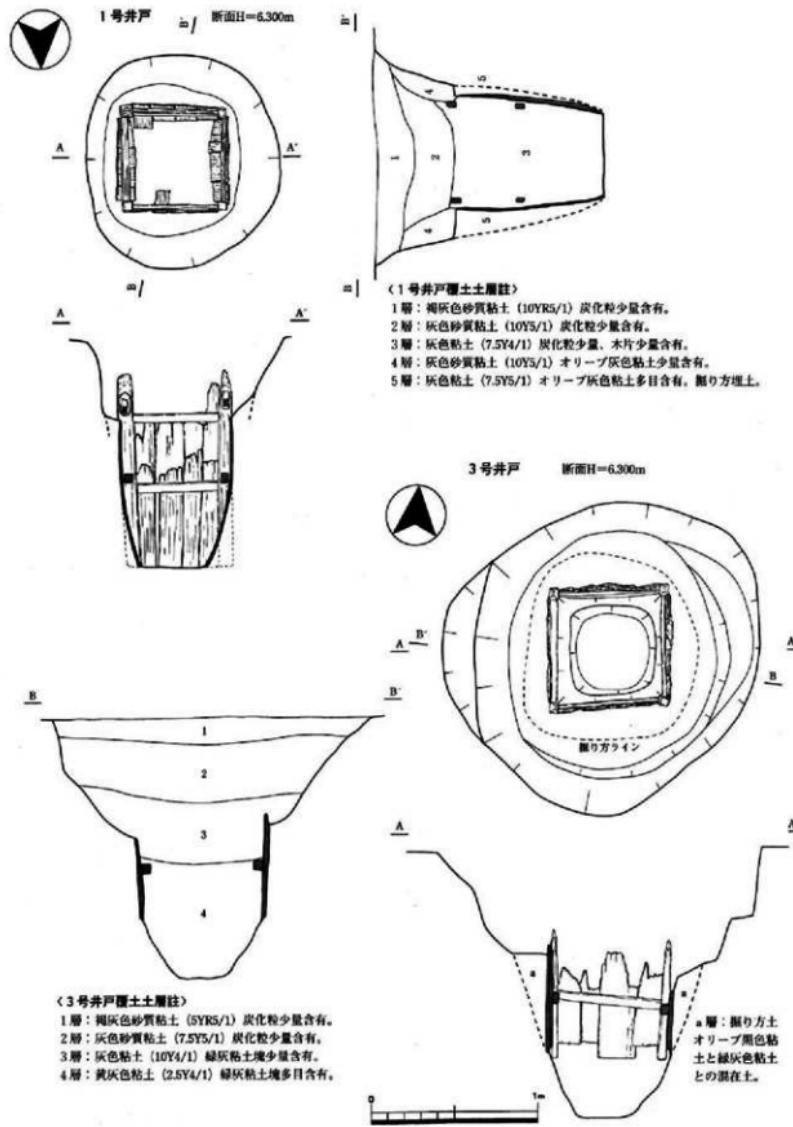
A類 1号井戸と3号井戸が該当する。いずれも縦板組隅柱横桟どめの隅柱に梢穴を切り、横桟を差し込む井戸側形態（宇野隆夫氏分類のBⅣ類、宇野隆夫1982「井戸考」「史林」第65巻第5号）で、掘り方を掘ってから、井戸側を設置して、構築している。

1号井戸は横桟を2段に設定するもので、隅柱や横桟は太く、しっかりと作られている。縦板は比較的薄いものを使っているが、下段の横桟より下では2枚重ねにしており、井戸底までしっかりと埋め込んでいる。縦板は一辺に4枚ずつ組まれ、65×65cmの正方形の井戸側を形成する。井戸底は平坦で、水溜めのような施設はなく、上部構造の井桁も確認されない。上部構造については廃棄とともに撤去されたと思われるが、上段の横桟より上は一回り大きな土坑となっており、上部施設の抜き取りに伴う掘削の可能性もある。出土遺物は極少ないが、II-I3期頃に位置付けられる土師器皿が少量出土する。

3号井戸は横桟が1段しか存在していないが、上半分が2次掘削を受けたように、一回り広く土坑が掘られており、上部施設の撤去の際に上の段の横桟は抜き取られた可能性をもつ。隅柱は1号井戸に比べて細く、横桟も細い材を使っており、全体的に貧弱で、やや歪んだ形態を呈するが、85×85cmの正方形の井戸側となっており、1号よりも一回り大きい。縦板は厚い材を使い、一辺4枚を基本とするが、幅は不揃いで、5枚を使う箇所もある。この井戸側であるが、1号井戸が井戸底までしっかりと埋め込まれていたのに対し、井戸側が下底まで届かず、下方では井壁保護されずに徐々に狭まる形態を呈す。このような形態は、意図的に木組の井戸側を中途で止めていたものではなく、井戸の構築方法に問題があったもので、掘り方自体がかなり傾斜をもって掘られていることによる井戸側寸法との誤差か湧水レベルの誤算が生んだものと考える。この井戸からはII-I3期の土器が出土している。

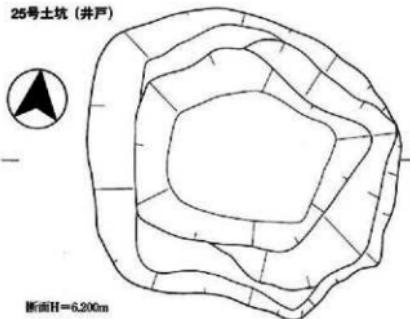
B類 2号・4号井戸、52号・85号土坑が該当する。素掘り井戸の可能性をもつもので、井戸として掘られる円筒形の部分は直径70~90cm、深さ150cm程度を呈す。埋土は砂まじりの層で、かろうじて木片や土器が入るため、掘っているが、地山に極近い層である。土器は少ないが、それぞれ土師器皿が出土しており、それから推察すると、2号井戸はII-I3期、4号井戸はI-I3期（15号溝の土器が混じった可能性もある）、52号土坑はIII-II2期、85号土坑はIII-I期に位置付けられる。また、2号井戸からは箸が数本出土している。

C類 25号・39号・43号土坑が該当するが、この中でも、25号・39号の底面の大きな土坑と43号の底面の小さな土坑とに分けられ、前者は深い大型土坑の形態、後者はB類の壁面傾斜で、その分だけ土坑規模が大きくなっている形態と言える。前者の土坑規模は25号土坑が350×350cmの楕円形で、深さ155cmを測り、39号土坑が235×250cmの楕円形で、深さ175cmを測る。いずれも土坑底面から比較的まとまった遺物が出土しており、25号土坑からは木製曲物類や箸などとともに土師器皿や珠洲焼が、39号土坑からも土師器皿と中世陶器が定量出土している。いずれもI-I3期に位置付けられるものである。これに対し、43号土坑は、径200cm程度で、深さ200cmを測る深い円錐状を呈す。出土土器も前者とは異なり少なく、



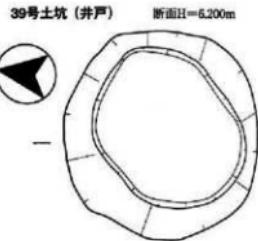
第61図 1号井戸・3号井戸平面・断面図 (S=1/30)

25号土坑(井戸)



断面H=6.200m

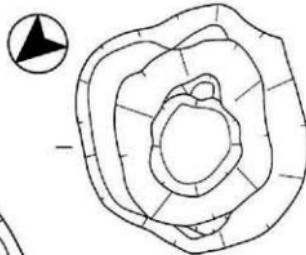
39号土坑(井戸)



断面H=6.200m

43号土坑(井戸)

断面H=6.300m



2号井戸

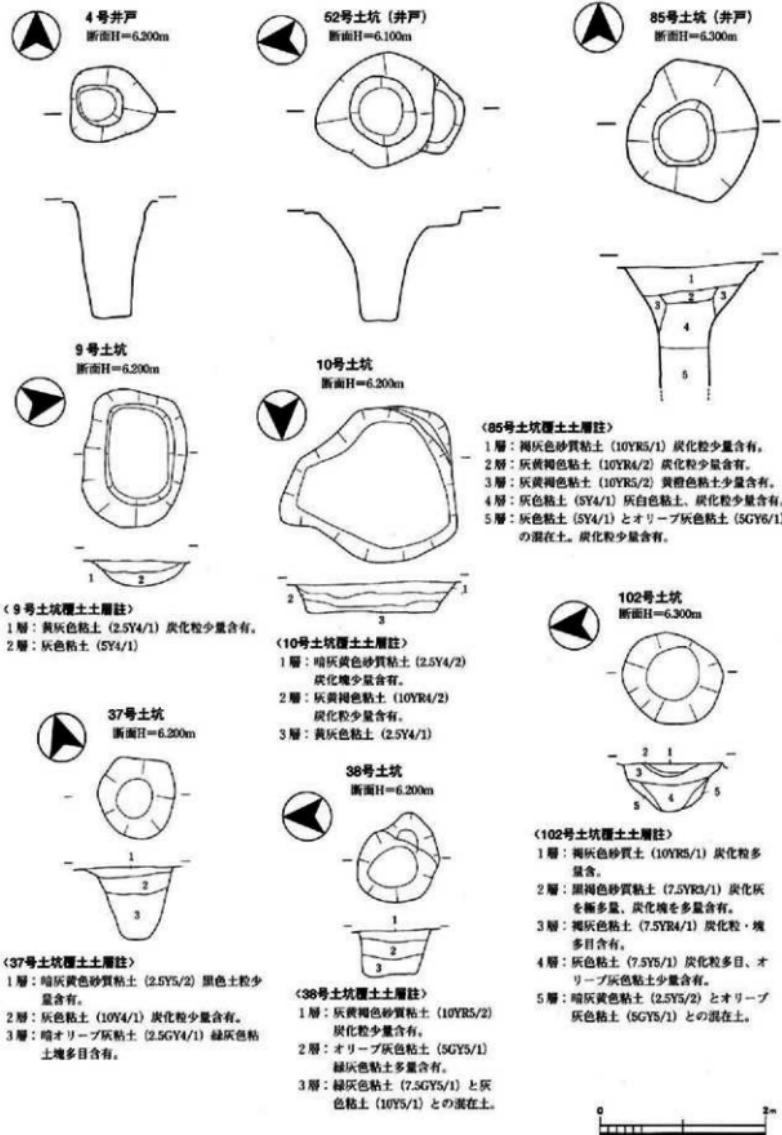
断面H=6.300m



〔25号土坑覆土土層註〕

- 1層：灰黃褐色砂質粘土 (10YR5/2)
黒色土粒多量、炭化粉多量含有。
- 2層：灰褐色粘土 (7.5YR5/2) 黑色土
粒多量、炭化粉多量含有。
- 3層：黃褐色粘土 (2.5Y4/1) 炭化塊
少量含有。
- 4層：灰色粘土 (5Y4/1) 炭化塊少量、
オリーブ粘土塊少量含有。
- 5層：灰色粘土 (7.5Y4/1) オリーブ
灰色粘土地少量、木葉・木枝・
木片・種子等多量含有。

第62図 25号土坑・39号土坑・43号土坑・2号井戸平面・断面図 (S=1/60)



第63図 4号井戸・52号土坑・85号土坑・9号土坑・10号土坑・37号土坑・38号土坑・102号土坑平面・断面図 (S=1/60)

時期もⅡ—Ⅲ期～Ⅲ—Ⅳ期と新しく位置付けられる。

3. その他の土坑

竪穴状土坑、井戸状土坑以外の土坑で、はっきりとした用途が捉えにくい土坑について、ここでまとめて述べる。この土坑には、略円形あまり深くない水溜め状を呈する土坑と方形か楕円形のプランで比較的深いしっかりした掘り込みをもつ土坑、あまり土器の出ない浅い不整形の土坑がある。

水溜め状土坑は径100cm前後の略円形ないしは楕円形を呈するもので、深さは50～100cmを測る。水溜め状としたが、井戸ほど深くないという意味であり、用途は不明である。37・38・102号土坑が該当するが、特に102号土坑の底面からは比較的まとまった土器が出土している。

しっかりとした掘り込みをもつ土坑は、9号土坑のみで、125×160cmの楕円形を呈する深さ30cmのものである。遺物は完形に近い土師器があり、Ⅰ—Ⅲ期に位置付けられる。56号土坑も類似したものか。

浅い不整形土坑は、出土する土器が少なく、中世と認定していないものが大半であるが、竪穴状土坑のような性格を有する可能性をもつ。18・19・21・22号土坑の4基が該当する。

第4項 溝及び小柱穴列

当遺跡で検出される溝はそのほとんどが中世に位置付けられるものであり、東西南北の区画に沿うように、何条も溝が走る。特に、堀状造構を呈す1号溝の存在する区域（26号溝・43号溝までの区域）までに集中し、その区域だけに23条の溝を数える。この区域内で存在する溝は全て東西南北の軸を基本として存在し、東西と南北の溝で方形区画を形成している。これに対し、上記区域の東側では、西と同様の区画で存在する溝は確認されず、北西から南東へ斜行する溝が3条存在するのみである。また、西側区域の溝の方形区画に沿うように、小柱穴列が存在し、同様の区画を形成する。

1号溝（堀状造構）

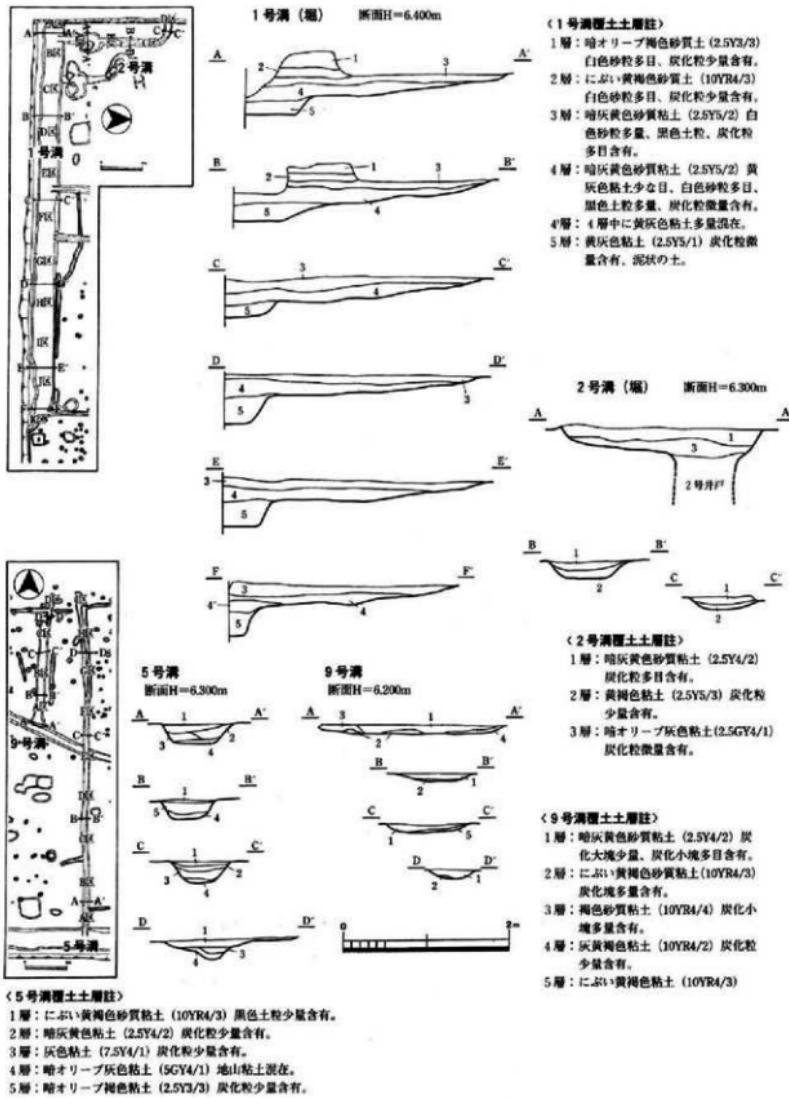
他の溝とは、規模や溝の形態で一線を画するものであり、堀状造構と性格づけた。幅は反対側の立ち上がりが区域外にあるため、確証はないが、少なくとも7m以上と思われ、中心が一段深くなる形態をもつ。深さは深い部分でも50～60cmと浅いが、区域外でさらに深くなる可能性はある。調査区域の南端区域で、東西にまっすぐ伸びるが、途中で急に南へと方向転換するので、「L」字形に曲がるものと予想する。しかし、建物を区画する「方形堀」となるかは疑問。出土遺物は、国産陶器や中国製磁器、土師器皿類があるが、土師器皿から見るに、Ⅰ—Ⅱ期～Ⅴ期までの幅をもち、長期にわたって存在していた可能性をもつ。ただ、中心時期はⅡ期であり、前後の時期は流れ込み的な混在の可能性もある。

5号溝と10・16号溝

1号溝と直交して南北に伸びる溝のうち、最も北へ長く伸びる溝が5号溝である。この溝は主軸を真北に向かって、真っすぐ伸びる溝で、規模は幅70cm程度、深さ20～30cmを測り、断面「V」字形を呈す。1号溝から北へ約40m行って終わるが、その部分で東西両方向に直交する溝を枝分かれして、方形区画を形成する。西側は10号溝、東側は16号溝で、両溝とも幅30～40cm、深さ15cm前後の細い溝である。10号溝は西へ18m伸び、16号溝は東へ22m伸びて止まり、西が40×18m、東が40×22mの長方形区画となる。これらの溝から出土する土器は、5号溝からⅡ—Ⅲ期の土師器皿がまとまって出ている以外は、16号溝からⅡ—Ⅲ期頃の土師器皿小片が少量出土する程度である。

26号溝と17・18号の「L」字形溝

5号溝同様、1号溝に直交して北へ伸びる溝に26号溝がある。この溝は幅50cm程度、深さ15～20cmの小溝であるが、真っすぐ北へ伸びており、18号溝と直交する所で止まっている。18号溝は17号溝と分け番号を付けているが、東西から南北へ「L」字形に屈曲する1条の溝で、幅50cm前後、深さ5～10cm



第64図 1号溝（堀）・2号・5号・9号溝断面図 (S=1/60)

程度を測る小溝である。この「L」字形溝と26号溝は、26号溝が18号溝と重なる部分で止まることを考えれば、繋がる可能性が高く、同時併存を仮定すれば、1号溝を南縁にする東西22m、南北31mの方形区画となる。5号溝と16号溝、1号溝で形成された方形区画の内側に入るものの、外側の区画を意識した区画設定と思われる。26号溝からⅡ-Ⅲ期に位置付けられる土師器皿が少量出土している。

2号溝と23号溝

5号・26号同様、1号溝に直交して南北に走る溝であるが、長く伸びず、2号溝では西側へ「L」字形に屈曲して区域外へ、26号溝では43号井戸状土坑に連結して止まる。両溝とも幅70~80cm、深さ15cm程度のもので、両溝の間隔は24mあいている。2号溝は2号井戸の埋没後に掘られているが、26号溝は43号土坑と同時併存の可能性が高く、それを示すように、連結部分に水を堰止めるかのような集石が見られる。両溝とも、Ⅱ-Ⅲ期の土師器皿が出土している。

15号溝と24号溝

他の東西区画を形成する溝と同様に、南北に走る15号溝と東西に走る24号溝とが直交しているが、他の区画溝のようには長く伸びない溝である。ただ、15号溝は、幅60~70cm、深さ40cm前後の断面「V」字形のしっかりした溝で、Ⅰ-Ⅱ期-Ⅰ-Ⅲ期の古い時期の土師器皿が定量出土している。

43号溝と44号溝

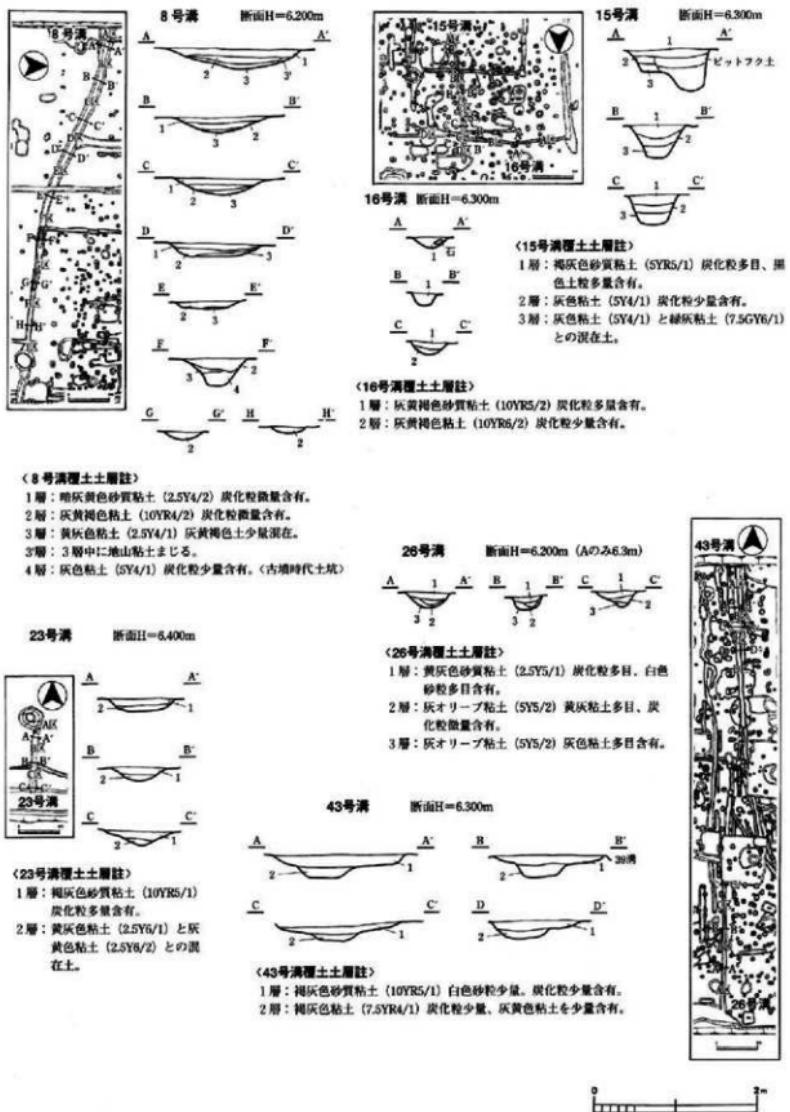
26号溝と類似した付近に存在する南北に走る溝で、いずれも北側から伸びている。26号溝の僅かに東側を走る43号溝と僅かに西側を走る44号溝があり、前者はⅠ-Ⅱ期-Ⅰ-Ⅲ期の土師器皿が、後者はⅢ-Ⅳ期の土師器皿が出土している。43号溝は北側で深く、南へ徐々に浅くなる溝で、北側では両側にテラスを伴い、最大幅16mにも及ぶ。中心の溝幅は70cm程度で、深さはあまりないが、真っすぐしっかり掘り込まれた溝である。44号溝は溝筋がやや定まらず、一部枝分かれしながら、蛇行気味に走る溝で、石を使って堰止める箇所もある。8号溝と直交することから、同時併存の可能性をもつ。

8号溝と9号溝・22号溝

東西に走る溝は、1号溝を除くといずれも南北溝から派生ないしは「L」字屈曲する溝であるが、8号溝のみは、単独で長く伸びる形態をとる。幅も西側では100cm以上を測り、深さも20cm程度と大型であるが、東側に向かって徐々に浅く細くなる。溝の軸は東西から、北へ5~7度振り、西側区域では強く北へ曲んでいるもので、その部分で南北軸をもつ9号溝と連結する。9号溝は幅広であるが、かなり浅い溝で、8号溝から真っすぐ北へ伸びる。また、8号溝の東側で、南へ伸びる22号溝が連結しており、9号溝とあわせて同時併存の溝と考えられる。出土土器は9号溝と22号溝からⅡ-Ⅲ期-Ⅲ-Ⅳ期頃の土師器皿が出土しており、8号溝からも同時期の土師器皿が出土するが、V期まで下りそうな土師器皿も出土しており、存続期間は長かった可能性をもつ。

小柱穴列

小柱穴列は2カ所確認できるが、他の柱穴の重複がない区域であるから、確認できているもので、小柱穴自体は調査区全域に存在している。小柱穴がいずれも柱穴列として、造構を形成するとは言えないが、小柱穴列の大半は確認できていない状況を念頭におく必要がある。まず、調査区域の中央西側に、東西軸をもつ小柱穴列が存在する。この小柱穴列は比較的真っすぐ東西に並ぶもので、さらに区域外に伸びる可能性もある。主軸方位では、5号溝と対応関係にありそうで、同時併存の可能性を考えたい。柱穴は径15~20cm程度の小型のもので、大体2m程度の間隔で存在する。溝同様に、星敷地を区画するような板塀や柵などが想定される。また、同様の小柱穴列は調査区域の北端、東西軸で1カ所存在しているが、これは柱穴間隔が狭く、柱穴筋もズレているため、異なる機能をもつ可能性もある。軸も上記の柱穴列とは異なっているため、別時期に位置付けられるものと予想する。



第65図 8号・15号・16号・23号・26号・43号溝断面図 (S=1/60)

第5章 出土した遺物の内容

第1節 古墳時代の遺物

今回の調査において出土した古墳時代の遺物は、パンケース（約6500mm×約4000mm×約1500mmの規格のもの）にして約100箱分あり、そのほとんどを土師器が占め、他に少量の陶邑産須恵器^①と石製品等がある。ここでは、そのうちの土師器・須恵器のみについて見ていくこととし、その他のものについては別項で述べられているので、それを参照していただきたい。

遺物の大まかな時期については、田嶋明人氏の漆町編年（田嶋1986）でいえば、7群土器が1号土坑においてまとまって見られる他は、概ね10群～13群に入るものであり、遺構外遺物に14群土器の破片も少數見られる。白江式と呼ばれる5・6群土器は、実測できないほどの小さい破片で、ごくわずかしかない。なお、弥生時代後期後半～末の法仏式期・月影式期のものも混入遺物として少量出土しており、それらもここで見ていくこととする。

以下、遺構ごとに、大まかにではあるが、遺物の出土量を述べ、実測し得た土器について見ていくこととする。

なお本文中、遺物の量を大まかに表す際に「パンケースにして」という表現を使うところがあるが、その場合は、約6500mm×約4000mm×約1500mmの規格のパンケースを差すこととする。また、とくに断らないかぎり、点数をいう場合は個体識別法を用いて述べていく。

1号竪穴住居跡出土土器（第66図）

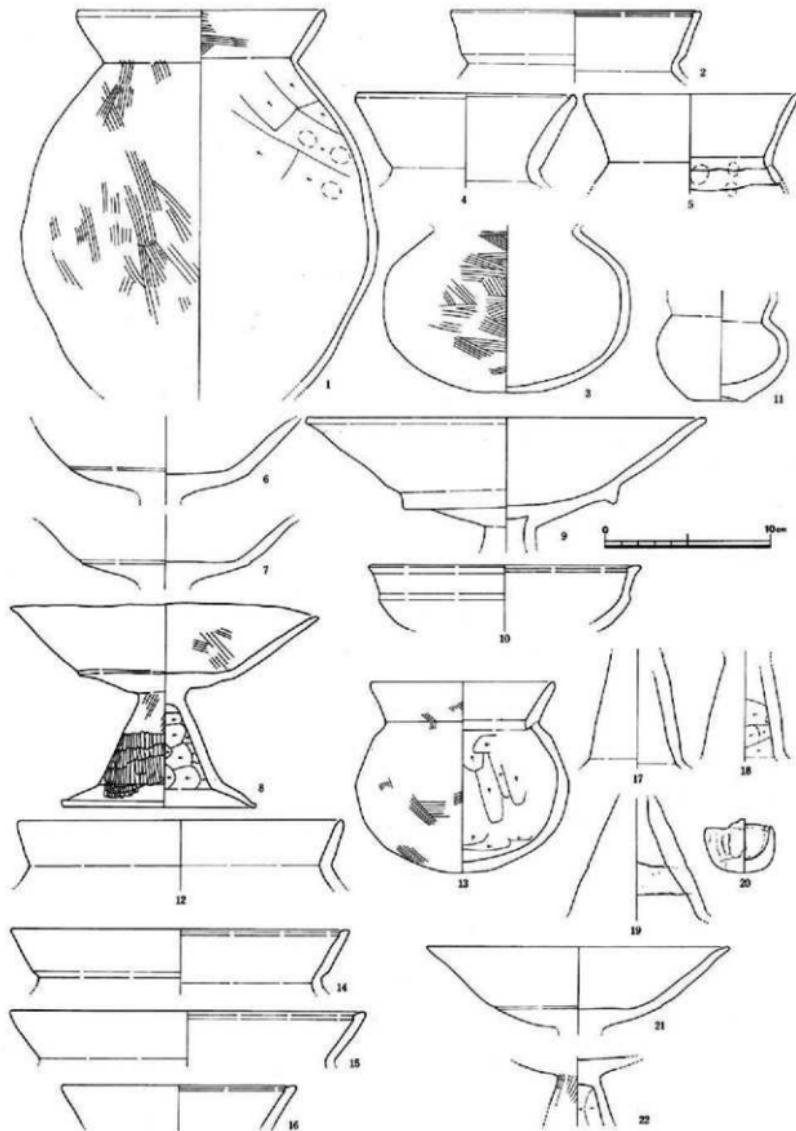
1号竪穴住居跡出土土器については、下層出土土器、上層出土土器、および主柱穴間のやや東にずれて存在する住居内土坑からの出土土器の3つに分けて見ていく。

下層出土土器（第66図1～11）

下層からは、甕では、くの字口縁甕1点、布留甕の口縁部片3点、小甕の体部1点、甕体部片少數（個体識別法で3点ほど）が出土。壺では、直口壺の口縁部2点、体部1点があり、壺の体部1点は、器壁の厚さが1.5cmほどあって、内外面がハケ調整されている超特大壺の体部である（パンケースにして約1/2箱分ある。体部片のため実測できなかった）。高壺では、略完形品1点と壺部5点がある。その他、壺形の小型土器1点、器種不明の細片パンケース約1/4箱分が出土している。

1は、くの字口縁の甕で、半完形に復元される。調整は、外面については、口縁部が器面の剥落で不明、頸部から体部はハケ調整されており、そのハケ状具は非常に粗い原体である。ハケ調整の方向については、胴部中位にハケ状具の押しつけによってできた凹みが1箇所あり、それにより、下から上への方向でハケ調整されたと思われる。内面は、口縁部がハケ調整されており、用いられたハケ状具は外面で用いられたものと同じものと思われる。体部内面は、ヘラ削りされており、肩部内面には指頭痕状の凹みが見られる。内外面とも調整は全体的に粗い印象を受ける。プロポーションについては、胴部最大径が中位よりやや下にあって、長胴形を呈する。なお胴部中位の全周には多量のススが付着している。また、下層出土土器としているが、一部、住居内土坑出土の破片と接合される。

2は、口縁端部内面が肥厚する布留甕の口縁部である。口縁端部内面の肥厚はあまり大きくなかったが、口縁部の器壁が厚く、肥厚が目立たないようである。調整は、口縁部内面が器面の剥落で不明、口縁部



第66圖 1號整穴住居跡出土土器 (下層1~11 上層12~20 住居內土坑21·22) (S=1/3)

外面は横ナデされており、とくに、頸部外面の横ナデは強くなされている。

3はやつぶれた球形を呈する小甕の体部である。外面は頸部から底部まで全面ハケ調整されている。内面は器面の剥落で調整不明である。

4・5は、直口壺の口縁部。4は、口縁部については内外面とも器面の剥落で調整は不明である。頸部の屈曲部分から下の内面では、破片が小さく図化できなかったが、ヘラ削りされた痕跡が見られる。また、口縁端部はつまみ上げたような形をしている。5は、口縁部では外面とも横ナデされている。頸部の屈曲部分より下については、外面は横ナデされており、内面では、接合痕が明瞭に残り、指頭痕も見られ、調整は粗い印象を受ける。

6・7は、坏底部が平坦で、坏底部と坏体部との境で屈曲後、外上方にのびて口縁部に至る高杯の坏部である。両者とも内外面の調整は器面の剥落が著しく不明である。

8は、脚柱部でややハの字状に下方へ開き、途中で外方に屈曲して脚裾部に至る脚部に、6・7と同様の形をした坏部が付く高杯で、ほぼ完形に復元される。調整については、坏体部外面は横ナデ、坏体部内面は、器面の剥落が著しくはっきりとしていないが、かすかにハケ調整の痕跡が見られる。坏底部については、内外面ともに器面の剥落で調整は不明である。脚部外面では、坏部と脚部との境から脚部上位にかけてハケ調整の痕跡が見られ、それより下については、脚裾端部が摩滅で調整不明であるが、それ以外はすべて縦方向のヘラ磨きがされている。また、脚柱部内面はヘラ削りされており、脚裾部内面では、器面の剥落が著しく、ほとんど痕跡が残っていないほどになっていたため、図化できなかったのであるが、横方向のハケ調整の痕跡がかすかに見られる。

9は、坏底部と坏体部との境の外面に断面三角形状の突唇を有する、比較的大型の高杯坏部である。調整については、内外面とも器面の剥落で不明である。

10は、椀形と想定される高杯の坏部で、口縁部が強い横ナデで帯状に凹み、口縁端部が内外に肥厚しているものである。壺の口縁部ではないかとも思われたが、口縁部から下の部分が椀形を呈していることから、高杯坏部と想定した。なお、調整については、外面が器面の剥落で不明、内面が横ナデされている。

11は、壺形の小型土器である。内外面とも器面が剥落しており、調整は不明。

上層出土土器（第66図12-20）

上層出土土器は、時期的なまとまりが見られなく、遺構に伴わないものと判断される。また、実測図に掲載した13の小甕（半完形に復元）、20の手捏ね土器（略完形）以外はほとんど細片である。パンケースにして約1箱分ほどある。なお、細片のため実測できなかったのであるが、須恵器坏蓋の細片1点が出土している。

12は、くの字口縁甕の口縁部。頸部で屈曲後、口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は丸くおさめられている。内外面は器面が剥落しており、調整は不明。

13は、くの字口縁の小甕である。調整については、外面は、器面の剥落が著しく、所々かすかにしか見られないが、口縁部から底部までハケ調整がなされている。内面については、体部ではヘラ削りがなされ、口縁部は器面の剥落が著しく図化できるほどの痕跡が残っていなかったのであるが、横方向のハケ調整痕がかすかに見える。

14-16は、口縁端部が内側に肥厚する布留甕の口縁部である。いずれも口縁部は真っすぐ開き、口縁端部の面は平坦で内傾する。15の口縁部内外面に横ナデの痕跡が見られる以外は、器面の剥落で調整不明である。

17・18は、若干下方へ開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方へ屈曲して脚裾部に至る高杯の脚部で

ある。17の脚柱部内面がヘラ削りされている以外は、器面の剥落により、調整不明である。

19は、ハの字状に下方へ開く高杯の脚柱部である。図化した部分の下端の割れ口から判断して、途中で外方へ屈曲して脚裾部に至るものといえる。調整は、外面が器面の剥落により不明、内面は接合痕が明確に見られ、粗く撫でつけたようである。

住居内土坑出土土器（第66図21・22）

住居内土坑からは、布留甕1点（口縁部の細片で、摩滅により原形を止めていなく実測不能）、高杯2点、器種不明の細片少量が出土している。

21は、平坦な坏底部から、やや屈曲度が強いが坏体部との境で屈曲し、外上方にのびて口縁部に至る高杯の坏部である。口縁部でやや外反気味となっており、比較的浅い坏部である。調整は、器面の剥落により、内外面とも不明である。なお住居内土坑出土土器としたが、一部、下層出土の破片と接合される。

22は、高杯の坏部と脚部との境で、その境の外面にハケ調整の痕跡が見える。また、脚部内面はヘラ削りされている。

2号豎穴住居跡出土土器（第67図）

第4章第1節の「古墳時代の遺構」のところで述べられていたように、2号豎穴住居跡は、豎穴プランが明確につかまれていないもので、包含層除去の際に検出された焼土と62・63・65・66号土坑がこの住居跡に伴うものとされる。

以下、焼土出土土器と土坑出土土器とに分けて見ていく。

焼土出土土器（第67図23～25）

焼土からは、甕底部片2点（実測不能）、高杯2点、碗1点、器種不明の細片ごく少量が出土している。

23は、高杯の坏底部である。平坦な坏底部から坏体部との境で外上方へ屈曲して口縁部に至るタイプと同じものといえようが、やや楕円に近い形を呈するものと思われる。調整については、外面は器面の剥落で不明、内面はヘラ磨きが施されている。

24は、高杯の脚部で、筒状の脚柱部から途中で外方へ屈曲して脚裾部に至るものである。調整については内外面ともに器面の剥落で不明。

25は碗である。内外面とも器面の剥落が著しいが、器面の所々に赤く発色している膜状の胎土が残っており、いわゆる赤色土器といえよう。調整については、内面は器面の剥落で不明、外面も一部にヘラ磨きの痕跡が残っている程度でほとんど不明である。

土坑出土土器（第67図26・27）

62・63・65・66号土坑においては、62号土坑で、布留甕口縁部細片1点（実測不能）、山陰系壺口縁部片1点、須恵器坏身1点が出土している他は、甕底部片少量と器種不明細片が少量出土している。

26は、山陰系の壺の口縁部である。赤く発色する胎土を用いており、赤色土器である。調整は、図化した部分の内外面については、横ナデされている。

27は、須恵器坏身である。半完形品で出土した。口縁端部は丸く仕上げられており、立ち上がりは、下位で内傾したのち直立して口縁端部に至る形を呈して、器高の約2/5を占める。外底面は回転ヘラ削りが施され、内底面は不整方向のナデつけがなされている。

3号竪穴住居跡出土土器（第67図28～44・第68図45～47）

3号竪穴住居跡からは、甕では、くの字口縁甕5点、布留甕9点、有段口縁甕6点があり、その他、甕体部片がパンケースにして1箱分（個体識別法で7点以上）ある。その他、高杯が14点、碗が2点、鉢形の小型土器が1点、須恵器壺蓋1点、須恵器甕1点があり、器種不明の細片も少量ある。

28～32は、くの字口縁の甕。

28は、頸部で継やかに屈曲後、口縁部が外反気味に開いて口縁端部が先細りする。外面と口縁部内面が器面の剥落で調整不明、体部内面はヘラ削りされている。頸部内面は外反するように開いており、屈曲によって生じるような種状のラインは見られない。

29～31は、頸部で屈曲後、口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は丸くおさめてある。29は、口縁部から頸部の外面が横ナデされており、体部外面は、器面の剥落が著しくかすかにしか残っていないが、ハケ調整の痕跡が見られる。口縁部内面は、体部外面と同様、かすかにしか残っていないが、ハケ調整の痕跡が見られる。また体部内面はヘラ削りされている。口縁部の器壁が比較的厚手である。30は、口縁部外面が横ナデされており、頸部以下の外面については、器面の剥落でほとんど調整不明であるが、頸部の屈曲部分に、圓化できないほどかすかにではあるが、縦ハケらしき痕跡が見られる。内面は、口縁部が横ナデされ、頸部以下がヘラ削りされている。なお、口縁部外面にはスグがやや多量付着している。31は、口縁部内外面とも横ナデされている。

32は、頸部の屈曲の度合いが比較的強く、口縁端部は先細り気味となっている。外面が器面の剥落で調整不明、内面は、口縁部から頸部については、外面と同様、調整不明、体部はヘラ削りされている。

33・34は、口縁端部が内側に肥厚している布留甕である。両者とも、口縁部内外面は横ナデされており、口縁部は内湾気味に開いている。口縁端部の面は平らに内傾しているが、とくに、33の端部の面には横ナデされた痕跡が見られる。また、両者とも口縁部の器壁は比較的厚手である。

35～39は高杯の脚部。

35～38は、やや下方へ開く気味の筒状の脚柱部で、途中で外方に屈曲して脚裾部に至るものである。35・36は内外面とも器面の剥落で調整不明。37は、脚柱部外面が、器面の剥落が著しくて一部にしか見られないが、縦方向のハケ調整痕が見られる。脚裾部外面は器面の剥落で調整不明。内面については、脚柱部がヘラ削り、脚裾部が器面の剥落で調整不明。38は、脚柱部が35～37に比べてやや下方に開いており、低脚である。脚柱部外面はヘラ磨きが施され、脚柱部内面はヘラ削りされている。

39は、ハの字状に下方へ開く脚柱部で、途中で外方に屈曲して脚裾部に至るタイプと思われる。外面は、器面の剥落で調整不明。内面は、明確に接合痕が残り、横方向になでつけたようなヘラナデが施されたものと思われる。

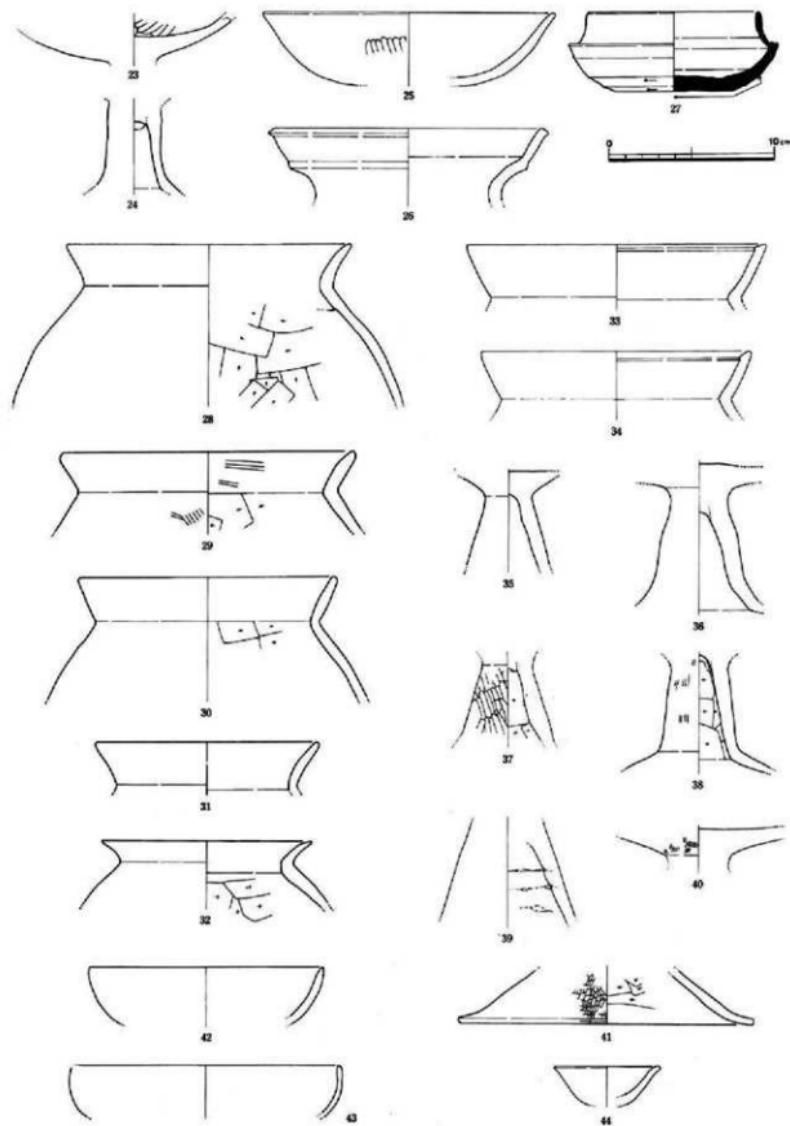
40は高杯の壺底部である。壺底部外面は横ナデされ、脚部との接合部分は細かい原体のハケ状具で縦方向にハケ調整されている。壺底部内底面は横ナデされており、上から見ると、方向は不明であるが、円を描くようにナデ調整されている。重厚感があり、比較的大型のものではないかと思われる。

41は、ハの字状に下方へ開く高杯の脚裾部。外面はヘラ磨き、内面は、端部が器面の剥落で不明であるが、その他はヘラ削りされている。

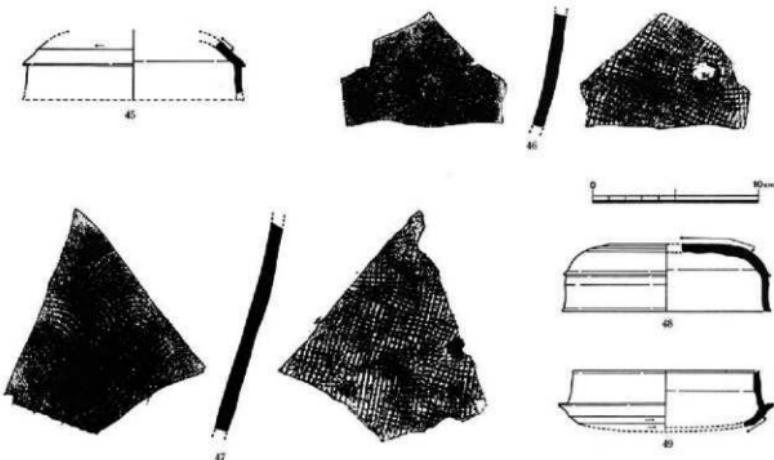
42・43は碗である。42は口縁部が外方に開くのに対し、43は口縁部が内湾気味である。調整は両者とも内外面器面の剥落で不明である。なお43については、破片の断面が焼成不良で黒みがかっているが、器面には赤く発色している胎土の膜が所々に付着しており、赤色土器と思われる。

44は鉢形の小型土器である。内外面ともヘラナデされているが、ナデの方向は定まっていない。

45は、須恵器壺蓋である。細片であるため詳細については分からぬが、外面では、天井部と口縁部



第67圖 2號整穴住居跡出土器 (23—27) 3號整穴住居跡出土器 (28—44) ($S=1/3$)



第68図 3号竪穴住居跡出土土器（45～47）4号竪穴住居跡出土土器（48・49）（S=1/3）

との境の稜の先端から約1cm上がったところから上を回転ヘラ削りしている。

46・47は須恵器甕の体部片であり、両者は同一個体と思われる。外面には平行叩きによる叩き目（H_a類^④）が見られる。内面については、木製無文当て具が用いられた痕跡が残っており、器面にはその当て具にある木目によって付いた細い線が見られる。なお、47の内面にはナデ消しされた痕跡が見られる。

4号竪穴住居跡出土土器（第68図48・49）

4号竪穴住居跡は、竪穴プランの全体的な把握ができなかったもので、28号溝と61号土坑がこの住居跡に伴うものとされる。28号溝からの出土遺物はほとんどなく、この住居跡の遺物は、61号土坑からの出土遺物で占められる。

61号土坑からは、土師器では、甕体部片少量（個体識別法で4点ほど）、高杯の細片1点が出土しており、高杯の細片は、坏底部と坏体部との境に突帯を持つ高杯の突帯部分の細片である（破片が小さすぎて図化不能）。その他、須恵器坏蓋、坏身が1点ずつ出土している。

48は須恵器坏蓋である。天井部は平坦であり、天井部外面の約2/3では回転ヘラ削りがされている。天井部と口縁部との境の稜は天井部からやや下がったところにあり、稜から下の口縁部は器高の約1/2を占める。口縁端部の面は、平坦に近い形ではあるが、若干凹んだ感じである。

49は、須恵器坏身である。破片からの判断ではあるが、底部は平坦な形を呈し、立ち上がりの高さは器高の1/2強を占めているものと考えられる。底部外面の回転ヘラ削りは、受部からすぐ下のところから施されており、底部のほぼ全面に回転ヘラ削りがなされてといえる。口縁端部については内傾する段を有する。

5号竪穴住居跡出土土器（第69図～第74図）

5号竪穴住居跡出土土器については、下層出土土器、上層出土土器、および、4本柱穴間に位置する住居内土坑からの出土土器に分けられる。

下層出土土器（第69図～第71図・第72図93～97）

下層においては、甕では、くの字口縁甕12点、布留甕12点、山陰系甕4点、有段口縁甕4点があり、その他に甕体部片が少量（個体識別法で4点ほど）出土している。個体識別法にして換算すると、点数が多い感じであるが、布留甕、山陰系甕、有段口縁甕については、布留甕1点を除けば、すべて口縁部の細片である。くの字口縁甕については、2点が半分弱まで復元され、残りは、細片とまではいかないが、口縁部の破片である。また、くの字口縁の小甕が4点あり、うち2点が略完形品である。甕では、口縁部片3点（うち山陰系2点）、体部から底部のみ略完形のもの1点、超大型甕の底部1点がある。また高杯では、個体識別法で22点出土しており、うち1点が略完形品、5点が坏部のみ半完形ないしは略完形のもので、残りはすべて脚部片である。その他、器台（高杯？）の細片1点、壺形の小型土器4点、器種不明の細片が少量ある。

50～56はくの字口縁の甕である。

50～54については口縁端部を丸くおさめているもので、50は口縁部が外反、51・52は口縁部が真っすぐ外傾、53は口縁部が内湾、54は口縁部が直立気味というようになっている。調整については、50～52は内外面とも器面の剥落で調整不明、53は体部の一部にヘラ削りされたところが見られるが、その他の部分については器面の剥落で調整不明である。54については、外面と口縁部の内面は器面の剥落で調整不明であるが、体部内面は、中位から下はハケ調整、中位より上がヘラ削りされている。ハケ調整とヘラ削りとの切り合い関係から、中位より下のハケ調整がされたのち、上のヘラ削りがなされたものといえる。なお体部のプロポーションは、頸部最大径が中位よりやや上にあり、倒卵形を呈している。

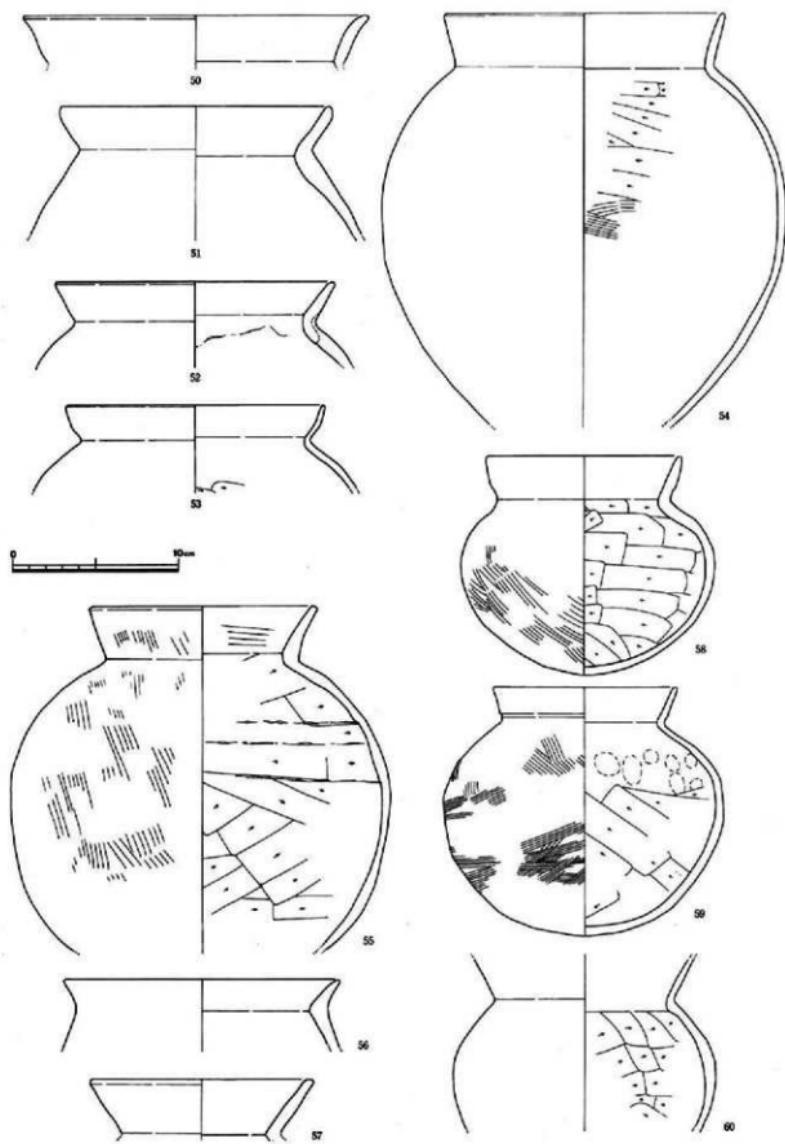
55は、くの字口縁の甕で口縁端部に面が見られるものである。体部のプロポーションは球形を呈している。調整については、外面は、口縁部から体部まで原体が粗めのハケ状具を用いたハケ調整を行なっており、頸部の屈曲部分のみ横ナデされた痕跡が見られる。内面については、口縁部ではハケ調整がなされており、外面で用いられたものと同じハケ状具が使われたと思われる。頸部より下ではヘラ削りがされているが、接合痕が残っている。全体的に調整が粗いという印象を受ける。

56は、頸部外面が緩やかに外反しているが、頸部内面は鋭く屈曲している。調整は外面とともに器面の剥落で不明であるが、頸部内面の鋭い屈曲から考えれば、頸部より下の部分はヘラ削りされたものと思われる。また、口縁端部は先細り気味である。

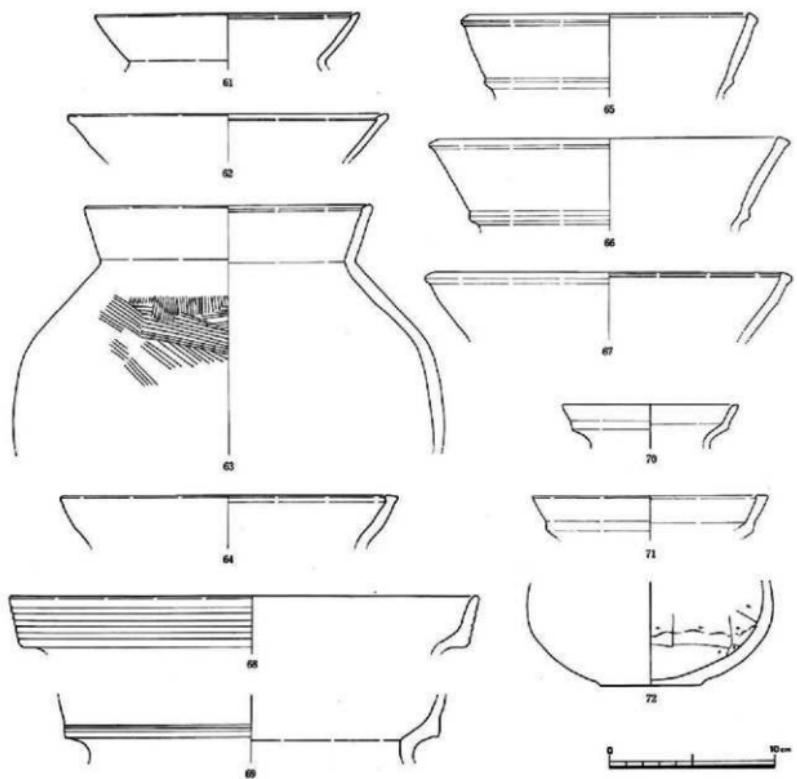
57～60はくの字口縁の小甕である。

57の口縁部は、小甕に分類したが、器壁に厚みがあって、他の小甕と違った感じがあり、くの字口縁の甕である可能性が考えられる。なお調整については、口縁部外面が器面の剥落で不明、口縁部内面が横ナデされている。

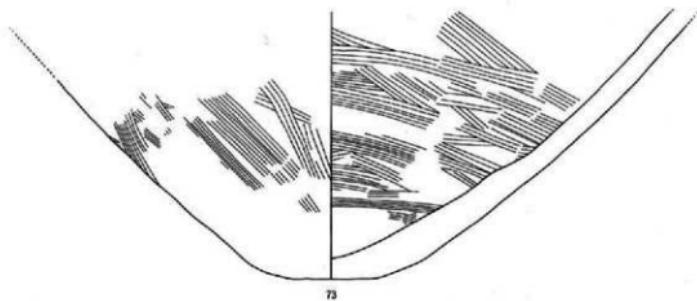
58・59は略完形品に復元されるものである。58は、口縁部から頸部外面が横ナデされ、肩部外面については器面の剥落で調整不明、体部中位から底部の外面はハケ調整が施されている。とくに、頸部外面は強く横ナデされたようであり、若干凹んだ感じになっている。また、頸部最大径が位置するあたりの外面にはススが少量付着している。内面については、口縁部は器面の剥落で調整不明、頸部以下はヘラ削りされている。59は、口縁部から頸部外面が横ナデされ、頸部外面については、58と同様に強く横ナデされ、若干凹んだ感じになっている。肩部外面から底部については、器面の剥落が著しいが、ハケ調整された痕跡が残っている。また、口縁部から体部中位にかけての外面にはススが付着しているが、と



第69图 5号竖穴住居跡下層出土土器 (S=1/3)



0 10cm



第70圖 5號鐵路下層出土土器 ($S=1/3$)

くに口縁部外面の付着が著しい。内面については、口縁部は器面の剥落で調整不明、体部中位から下がヘラ削りされている。肩部は指ナデされているようであり、また指頭痕が見られる。

60は、外面すべてと口縁部内面が器面の剥落で調整不明、頸部より下の内面がヘラ削りされている。61~64は布留壺である。

61は、口縁部が若干内湾気味に開き、口縁端部は小さく内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾する。口縁部内外面とともに横ナデされ、口縁端部の面にも横ナデが施されている。

62は、口縁部が真っすぐ外傾して開き、口縁端部は内側に小さく肥厚するが、外側にも小さく肥厚している。端部の面は平坦で内傾している。口縁部内面は器面が剥落しているが、口縁部外面には横ナデの痕跡が見られ、ススが微量付着している。

63は、口縁部が真っすぐ外傾して開き、口縁端部が内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾しているものであるが、口縁部から体部まで全体的に器壁が厚い。外面の調整については、口縁部が横ナデ、体部がハケ調整されている。頸部では、縦方向のハケ調整のうち横ナデが施されており、肩部には、布留壺によく見られる横方向のハケ調整痕が見られる。しかし、その横方向のハケ調整痕には規則性が見られない。内面については、器面の剥落でほとんど調整の痕跡が見えない。

64は、口縁部がやや内湾気味に開き、口縁端部は、内側にやや大きく、外側に小さく肥厚している。また、口縁端部の面はほぼ水平である。器壁については、63と同様、厚手である。調整については、口縁部内面は器面が剥落しているが、口縁部外面については、横ナデされており、ススが少量付着している。

65~67は山陰系の壺の口縁部である。口縁端部については、いずれも平らな面を持つが、65・67は内外に肥厚、66は外面のみに肥厚している。口縁部下端の稜については、67は不明、65・66の2点はいずれとも明瞭ではあるが、あまり張り出していない。また、65・66の内面の段は、若干見られるものの、無いに等しいものになっている。調整については、いずれも内外面とも器面が剥落して不明である。

68・69は、法仏式期の有段口縁壺の口縁部と口縁部から頸部の部分である。68は、口縁部に6条の擬凹線があり、口縁端部は丸くおさめられて、口縁端部の発達は見られない。69は、頸部のくびれが比較的強く、口縁部には、下端に3条の擬凹線が見られ、それより上は無文となっているようである。

70は、山陰系壺の口縁部。口縁部内面は器面の剥落で調整が不明であるが、口縁部外面は横ナデが施されている。比較的口径が小さく、薄めの器壁であり、小型のものと思われる。

71は、壺の口縁部で、口縁端部は、水平で平坦な面を持ち、内側に小さく肥厚している。口縁部下端は突出させており、70と同様、山陰系の壺ではないかと思われる。調整については内外面とも器面の剥落で不明である。

72は、つぶれた球形を呈した壺の体部から底部と思われるものである。底部は平底であり、調整については、外面が器面の剥落で不明、内面はヘラ削りされ、接合痕が残っている。

73は、器壁が1.5~2cmほどある超大型壺の底部から体部下位の部分である。底部は直径6cmほどの平底を呈している。調整については、外面では、底から4cmほど上がったところから上をハケ調整しており、それより下は横方向のヘラナデがなされている。内面では、底から2cmほど上がったところから上をハケ調整し、それより下は縦方向のヘラナデが施されている。とくに、底部内面では、5mmぐらいの幅のヘラを用いてナデ調整を行なった痕跡が見られる。なお、ヘラナデの痕跡とハケ調整の痕跡との切り合いかから、底部のヘラナデを行なったあとに、体部のハケ調整を行なったことが伺えられる。

74は、略完形に復元される高杯である。杯部は、平坦な杯底部から緩やかに外上方にのびて口縁部に至るものであるが、楕形に近い形を呈している。脚部は、外反しながらハの字状に下方へ開き、脚裾端

部は先細りしている。調整については、環底部が器面の剥落で調整不明、口縁部から環体部は横ナデされている。脚部外面は、器面の剥落が著しいが、一部で縦方向のヘラ磨きが施された痕跡が見られる。内面については、环部、脚部とともに、器面の剥落で調整不明である。なお、大半は下層から出土した破片で復元され、下層出土土器としたが、住居内土坑出土の約5cmの大破片1つとも接合される。

75~77は、平坦な环底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯の环部で、口径が18cm前後を測るものである。75・77は环部のみ略完形に復元され、76は环部のみ半完形に復元される。75は、口縁部から环体部の内外面がヘラ磨きされ、环底部の内面のとくに环体部との境付近では、器面の剥落でかすかにしか見えないが、ハケ調整された痕跡が見られる。环底部外面については、器面の剥落で調整不明である。76は、内面が器面の剥落で調整不明であるが、外面については、环体部から环底部が横ナデされ、とくに环底部の横ナデについては、一部強く横ナデされてヘラ削りの痕跡のようになっている箇所があり、その方向は、下から見ると反時計回りの方向である。また、环部と脚部との境では、縦方向のナデ調整がされている。77は、口縁部から环体部の外面が横ナデされており、环底部外面については、ナデ調整されているが、方向が定まっていないようである。内面については、口縁部では器面の剥落で調整不明であるが、环体部から环底部はハケ調整がなされており、环体部では横方向、环底部では上から見るといわば円を描くようにしてハケ調整を行なっている。

78は环部のみ略完形に復元される高杯の环部である。内面は平坦な环底部から緩やかに外上方に屈曲して口縁部に至るが、外面は、环底部からの立ち上がりの屈曲が見られず、楕円形に近い形を呈し、口縁部はやや外反する。口径は75~77に比べてやや小さく、比較的浅い环部である。調整については、口縁部から环体部の外面は横ナデされ、环底部外面は縦方向のハケ調整が施されている。また、环体部と环底部との境の外面は横ナデされて凹んだ状態になっている。内面については、口縁部は横ナデされ、环体部から环底部はハケ調整が施されている。环底部のハケ調整は上から見るといわば円を描いたようになっている。

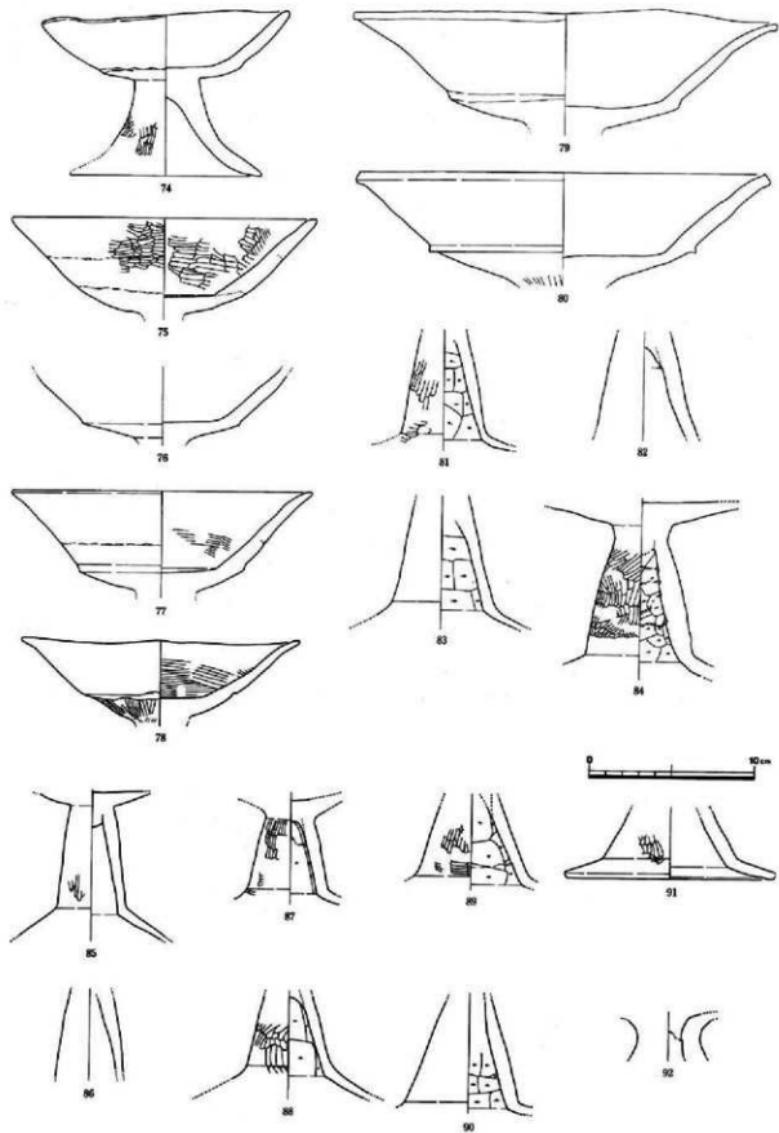
79は、平坦な环底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯环部で、口径が25cmほどの大型のものである。环部のみ略完形に復元される。口縁端部は面を持ち、その面には横ナデされた痕跡が見られる。口縁部から环体部の外面は横ナデされており、环底部外面と环部内面のすべては器面の剥落で調整不明である。なお、大半は下層出土の破片で復元されるが、一部住居内土坑出土の破片とも接合される。

80は、平坦な环底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯の环部であるが、环底部からの立ち上がりの部分の外面に突帯がめぐるものである。器壁が比較的厚く、重厚感があり、口径が25cmほどの大型品である。口縁端部は面を持ち、口縁部から环体部の外面は横ナデされている。环底部外面は器面の剥落で調整不明であるが、脚部との境には縦方向のハケ調整がなされている。内面については、口縁部から环体部が横ナデされ、环底部は、上から見ると、いわば反時計回りに円を描くようにしてハケ調整が施されている。

81~84は、やや下方に開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方に屈曲して脚裾部に至る高杯の脚部である。これらの調整については、一部器面の剥落で不明なところがあるが、基本的には、脚柱部の外面が縦方向のヘラ磨き、脚柱部内面が横方向のヘラ削りがなされているようである。ただし、84の脚柱部下端の外方に屈曲する部分の外面では横ナデされた痕跡が見られる。

85~86は、81~84と同様の形を呈する高杯の脚部であるが、比較的細めで長い脚柱部を持つものである。調整については、両者とも器面の剥落でほとんど不明であるが、85の脚柱部外面にヘラ磨きされた痕跡が残っている箇所がある。

87~88は、81~84と同様の形を呈する高杯の脚部であるが、脚柱部が比較的ハの字状に下方へ開き気



第71图 5号竖穴住居跡下層出土土器 (S=1/3)



第72図 5号竪穴住居跡下層出土土器 (93-97) 上層出土土器 (98-117) (S=1/3)

味で、低脚のものである。調整は、両者とも脚柱部外面はヘラ磨きされ、脚柱部内面はヘラ削りされている。脚裾部については、器面の剥落でほとんど調整不明である。

89~91は、ハの字状に下方へ開く脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至る高杯脚部である。調整は、外面については、90が器面の剥落で不明であるが、他の2点はヘラ磨きされている。内面については、89・90は、脚柱部がヘラ削りされている。91の内面については、器面の剥落でほとんど不明であるが、脚柱部の一部にヘラ磨きの痕跡が見られる。

92は、器台の受部と脚部との境の部分である。調整については器面の剥落で不明である。受部と脚部との間が穿孔されていることにより、器台としたのであるが、高杯の环底部に充填された円盤が取れてしまったものとも考えられ、高杯の破片である可能性も考えられる。

93~97は壺形の小型土器である。

93は、つぶれた球形の体部にやや長めの口縁部がついたもので、口縁部は器高の約1/3を占める。調整については、体部中位から底部の外側がハケ調整されている以外は、器面の剥落で不明である。

94・95は、ほぼ球形を呈する体部である。外側にハケ調整の痕跡が見られる以外は、器面の剥落で調整不明である。

96は、長胴の体部のもので、底部はほとんど丸底であるが、自立する。調整は、外側の一部にハケ調整の痕跡が見られる他は、器面の剥落で不明である。

97は、93~96に比べると法量が小さく、それらとは別に分類されるものと思われる。内外面ともナデ調整されている。

上層出土土器（第72図98~117）

上層からは、すべて破片で出土しており、まとまった形で出土したものはない。また、時期的ななまりも見られない。土師器ではパンケースにして約2箱分出土しており、また須恵器もごく少量出土している。

98~101はくの字口縁甕の口縁部である。98・99は、口縁部が真っすぐ外傾して開き、口縁端部は丸くおさめられているもの、100は、98・99と同様であるが、口縁部の長さが短いもの、101は、口縁部が外反しながら開き、口縁端部は先細りしているものである。いずれも内外面の調整は器面の剥落で不明である。

102~105は布留甕であり、いずれも口縁端部が内側に肥厚し、端部の面は平坦で内傾している。102・103は、口縁部が真っすぐ外傾して開くもので、口縁部内外面とも横ナデされ、さらに口縁端部の面にも横ナデされた痕跡が見られる。104は、口縁部が内湾しながら開くもの。口縁部外側は器面が剥落しているが、内面は横ナデの痕跡が見られる。105は、104と同様、口縁部が内湾しながら開くものであるが、口縁部の器壁が厚手のものである。しかし、体部の器壁についてはさほど厚くない。調整については、器面の剥落で不明である。

106・107は有段口縁甕の頸部と口縁部である。106は口縁部に擬凹線を施すもので、頸部外側は横ナデ、内面の頸部以下はヘラ削りされている。頸部のくびれは鈍く、月影式期のものに位置付けられると考えられる。107は口縁部が無文のもので、口縁端部は丸くおさめられてはいるが、外反してやや口縁部が発達しているようである。調整については、頸部外側に横ナデの痕跡が見られるが、その他は器面の剥落で不明である。月影式期のものと思われる。

108は、有段口縁を持った超大型壺の口縁部である。内外面にはハケ調整の痕跡がかすかに残っている。

109は、口縁端部が下方に拡張されている壺の口縁部で、東海系と呼ばれているものである。口縁端

部の拡張された部分の外面は無文であるが、棒状浮文が2本1組で付加されている。付加された箇所の数については破片が小さく不明である。調整については、内外面とも器面の剥落で不明である。

110・111は、下方へやや開き気味の筒状の脚柱部を持つ高杯の脚部で、筒状の脚柱部から外方へ屈曲して脚部に至るものと思われる。111については器面が剥落しているが、110の外面にはヘラ削り、内面にはヘラ削りが施されている。

112・113は、ハの字状に下方へ開く高杯脚部である。両者とも器面の剥落で内外面調整不明である。113は穿孔されているが、穿孔の数については破片が小さく不明である。

114は、壺形の小型土器の口縁部で、内外面とも器面の剥落で調整不明。

115は、蓋の鉢部と体部との境の部分である。外面と鉢部内面は器面が剥落しているが、体部内面においては、もっとも上のところから1cmほど下のあたりまではヘラ削りされ、それより下はハケ調整されている。ヘラ削りとハケ調整との切り合いから、ヘラ削りがなされたのち、ハケ調整を行なったことが伺える。

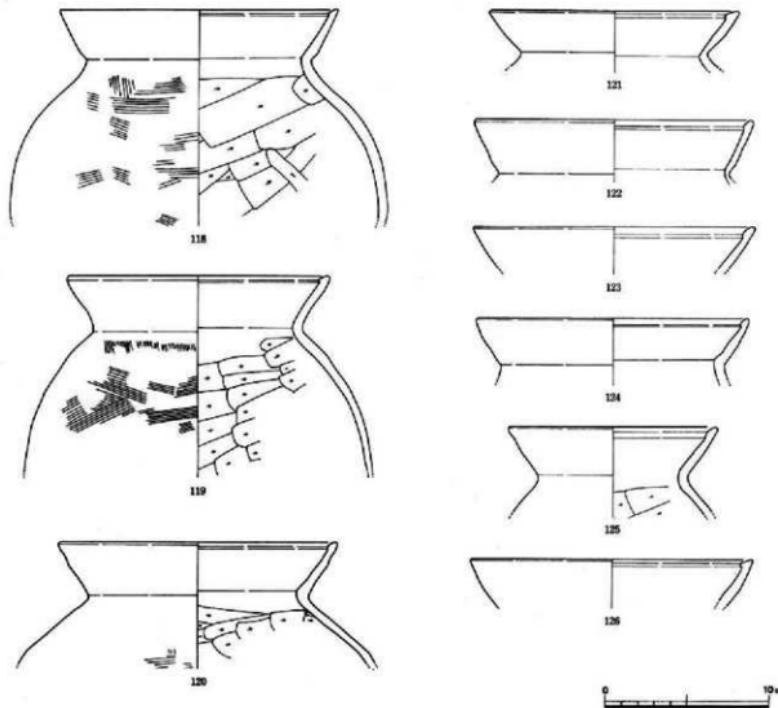
117は須恵器杯蓋である。口縁部のみの細片であるが、口縁部上端の割れ口から、平坦な天井部が付くものと思われる。口縁部は、天井部から真っすぐ下がり、途中で外方へ緩やかに屈曲して口縁端部に至る。口縁端部の面には小さな段が見られる。

住居内土坑出土土器（第73図・第74図）

住居内土坑からは、壺では、くの字口縁甕2点（口縁部の細片で実測不能）、布留甕19点（うち15点は口縁部の細片）、山陰系甕3点（うち1点は口縁部細片）が出土し、その他に甕体部片が少量ある（個体識別法で3点ほど）。壺は口縁部細片が1点出土。高杯は8点あり、略完形品が1点、坏部細片1点、脚部片6点（うち2点は細片）がある。

118～126は布留甕である。126を除いてはいずれも口縁部が真っすぐ開くもので、126の口縁部は内済気味に開く。いずれも口縁端部は内側に肥厚しているが、端部の面については、123・124は丸みを持って内傾する面で、それ以外は平坦で内傾する面である。なお125については、口縁端部の肥厚している部分の幅が他に比べると広く、いわばなだらかな肥厚を呈している。調整については、118～120は、口縁部から頸部の内外面は横ナデされており、体部外面はハケ調整、体部内面にはヘラ削りが施されている。いずれも肩部の外面には、布留甕によく見られる横方向のハケ調整の痕跡が見られるが、119の肩部の横ハケには規則性がない。また、いずれもハケ調整で用いられたハケ状具は、比較的細かい原体のものを用いたと思われる。121は、口縁部内外面さらには口縁端部の面に横ナデが施されている。122については、口縁部内面は器面の剥落で調整不明であるが、口縁部外面は横ナデされており、ススが少量付着している。123・124は、両者とも口縁部内外面に横ナデが施されている。125は、口縁部内外面とも横ナデされており、体部外面は器面の剥落で調整不明、体部内面はヘラ削りされている。126は、口縁部外面は器面の剥落で調整不明であるが、口縁部内面は横ナデされており、また、口縁端部の面にも横ナデされた痕跡が見られる。

127・128は山陰系の甕である。127は、口縁端部は面を持ち、外側に肥厚する。口縁部下端外面の稜については、明瞭に突出しているが、突出の度合いは小さく、口縁部下端内面の段はさほど明瞭ではない。調整については、口縁部から頸部の外面は器面の剥落で不明、肩部外面には横方向のハケ調整の痕跡が見られる。内面については口縁部では横ナデされており、頸部あたりの調整は器面の剥落で不明であるが、体部はヘラ削りされている。128は、口縁端部は、実測図ではやや丸みを持っているが、水平な面を持っている箇所もあり、また、内側に小さく肥厚している。口縁部下端では、外面の稜については、突出しているというよりも、段を形成しているという感じであり、内面の段は、ほとんど段をなさ



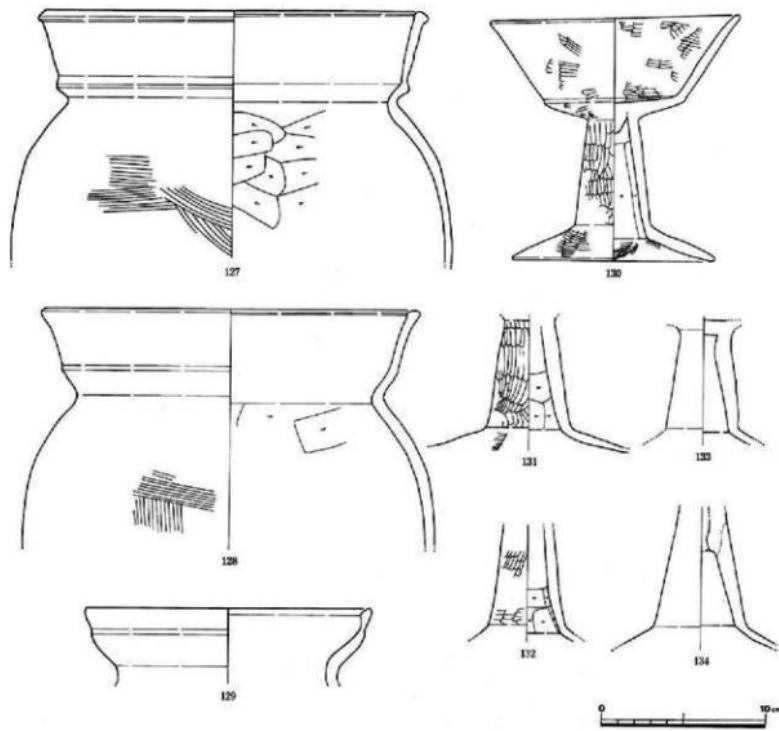
第73図 5号竪穴住居跡住居内土坑出土土器 (S=1/3)

ず、直線に近い感じで口縁部から頸部に至っている。いわばくの字口縁に近い複合口縁である。調整については、外面は器面の剥落でほとんど不明であり、肩部でハケ調整の痕跡がかすかに見られる程度である。内面についても、頸部の屈曲部分の下あたりでヘラ削りの痕跡がかすかに見られる程度で、ほとんど不明である。

129は、壺の口縁部である。口縁端部が内側に肥厚し、内傾するように平坦な面をなしている。また口縁端部外面が緩やかに小さく突出しており、山陰系の壺の口縁部に似た形を呈している。調整については、口縁部外面と口縁端部の面が器面の剥落著しく不明、口縁部内面は横ナデされている。

130は、略完形に復元される高杯である。杯部は、平坦な杯底部から外上方に立ち上がり、ほぼ真っすぐ外傾して開き口縁部に至る。内外面すべて横方向のヘラ磨きが施されている。脚部は若干下方に開き気味の筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至るものである。脚柱部は比較的細めで、長いものである。外面の調整は、脚柱部では縱方向、脚裾部では横方向のヘラ磨きがされている。また内面は、脚柱部ではヘラ削りがされ、脚裾部では横方向のヘラ磨きがされている。

131～134は、130と同様の形を呈する高杯の脚柱部である。これらもすべて比較的脚柱部が細く、長めのものである。131・132は脚柱部外面にヘラ磨き、脚柱部内面にヘラ削りが施されているが、内面の



第74図 5号堅穴住居跡出土土器 ($S=1/3$)

上半部はヘラ削りされていない。133・134は器面の剥落で調整不明である。

下層出土土器と住居内土坑出土土器

5号堅穴住居跡出土土器において若干の問題点があり、別項のまとめで述べるべきものであったが、5号堅穴住居跡のみの問題であったので、ここでその問題に触れておきたい。

5号堅穴住居跡出土土器のうち、下層出土土器と住居内土坑出土土器との間には明らかに時期差がある。田嶋明人氏による漆町編年（田嶋1986）でいえば、下層出土土器は12群、住居内土坑出土土器は10群にある。甕について見ると、下層出土土器では、くの字口縁甕が目立ち、布留甕は少量存在するもののすべて細片であり目立つ存在ではない。これに対し、住居内土坑出土土器では、くの字口縁甕が口縁部の細片すら1点もなく皆無に近いが、布留甕は比較的大きい破片が数点あり、甕のなかでは主体的な存在となっている。つまり、下層出土土器と住居内土坑出土土器との間で、くの字口縁甕と布留甕との比率が逆転しているのである。また高杯のうち、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る坏部に、筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至る脚部が付いたタイプのものについて見ると、下層出土土器と住居内土坑出土土器との間に型式差が認められる。下層出土の高杯は、全体的に浅めの坏部であり、漆町編年12群に見られるような、坏底部からの屈曲部分の外面に稜をもつ下層出土土器80

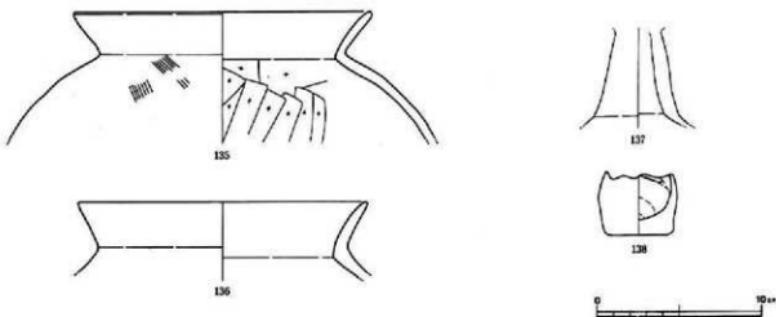
(第71図)は壊部が略完形に復元される。また脚部は低脚で、脚柱部の下方への開きは全体的に大きい。これに対し、住居内土坑出土の高杯は、脚部が全体的に高く、脚柱部の開きは小さい。また略完形に復元される130の壊部は深い。こうした下層出土土器と住居内土坑出土土器との時期差は、住居跡のほぼ中央により古い土坑が偶然存在していたためとも考えられる。しかし5号竪穴住居跡の南に隣接する1号竪穴住居跡の中央には、5号竪穴住居跡と似たように土坑があるが、この場合には時期差がなく、下層出土土器とした1(第66図)は住居内土坑出土の破片とも接合され、住居内土坑は住居に伴うものといえる。なお1号住居跡下層・同住居内土坑出土土器は、5号竪穴住居跡下層出土土器と同様、漆町編年12群に位置付けられる。このように、同時期の可能性があって隣接している竪穴住居跡のほぼ中央に住居に伴う土坑が存在しており、5号竪穴住居跡の住居内土坑を時期的な違いから即座に住居に伴わないものとするにはやや疑問が残る。また、5号竪穴住居跡下層出土の破片のごく一部と同住居内土坑出土の破片のごく一部との間に接合関係があり、住居内土坑を住居に伴うものとする可能性が残されている。しかし、なにゆえに下層出土土器と住居内土坑出土土器との間に時期差が生じたのだろうか。この問題については、住居の廃絶等についても考える必要があり、ここで行なう土器の話から違う方向に論が進んでしまうため、筆者の力量不足もあるが、保留しておきたい。

2号竪穴状遺構出土土器(第75図)

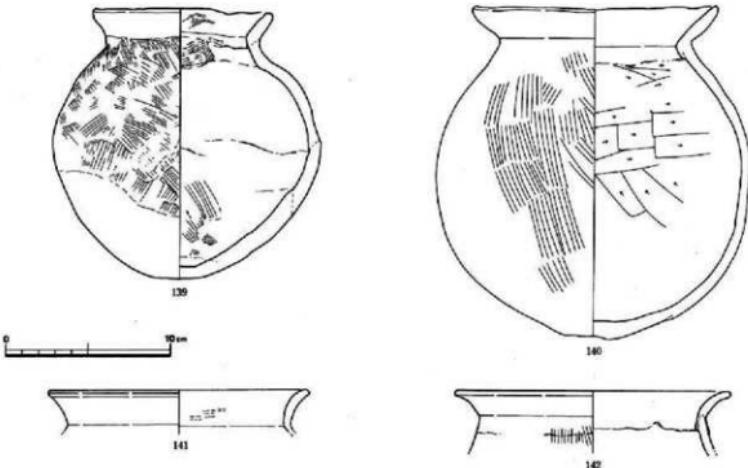
2号竪穴状遺構からは、甕では、くの字口縁甕2点が出土、その他、体部片がパンケース半分ほど(個体識別法で4点ほど)ある。壺では、体部の器壁が約1cmほどある超大型の壺の体部片1個体分(実測不能)が、高杯では脚部片1点がある。また、手づくね土器1点も出土している。

135・136はくの字口縁甕の口縁部である。いずれも口縁端部は丸くおさめているが、135は口縁部が真っすぐ開き、136は口縁部がやや外反気味に開く。調整は、135については、口縁部外面が横ナデ、体部外面は、器面の剥落が著しいが、一部ハケ調整された痕跡が見られる。内面は、口縁部では器面が剥落して不明であるが、体部ではヘラ削りされている。136については、口縁部から頸部の外面は横ナデされており、内面は、器面の剥落で調整不明であるが、頸部内面の屈曲部分の形から、頸部の屈曲部分以下がヘラ削りされたのではないかと思われる。

137は、高杯の脚部であり、下方に開き気味の筒状の脚柱部から外方へ屈曲して脚捌部に至るものである。比較的低脚のものである。調整については、内外面とも器面の剥落で不明である。



第75図 2号竪穴状遺構出土土器 (S=1/3)



第76図 1号土坑出土土器 ($S=1/3$)

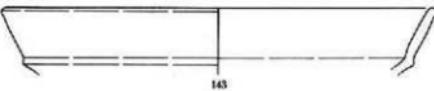
1号土坑出土土器（第76図～第79図）

1号土坑においては、甕では、くの字口縁甕5点（1点が完形品、1点は略完形品、3点は口縁部細片）、布留甕9点（すべて口縁部細片）、山陰系甕3点（2点は略完形品、1点は口縁部細片）、有段口縁甕8点（いずれも口縁部細片）が出土、その他に甕体部片がパンケースにして約1/2箱分（個体識別法で8点ほど）ある。また、壺3点（頸部片2点、体部から底部のみ完形に復元されるもの1点）、高杯9点（半完形品1点、坏部口縁片2点、脚部片5点、坏部と脚部との境の破片1点）、器台5点（受部片1点、脚部と受部との境の破片3点、脚部片1点）、壺形の小型土器1点、器種不明である底部片3点と脚台1点があり、器種不明の細片はパンケースにして約1/2箱分である。

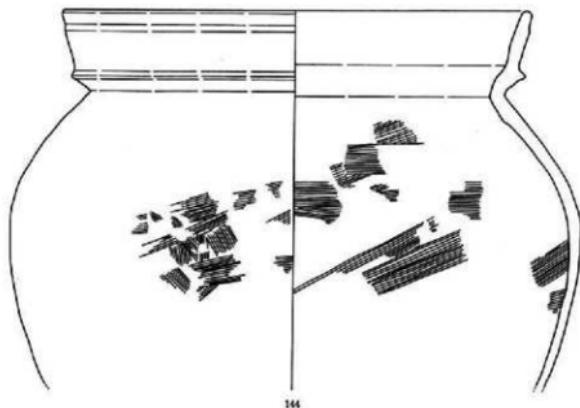
139～142はくの字口縁甕である。

139は、まったく削れることなく完形のまま、土坑の底から出土したものである。全体的に器壁が厚く、重厚感がある。口縁部は真っすぐ外傾して開き、口縁端部は丸くおさめてあるが、比較的短い口縁部である。また、底部はほとんど丸底に近い形を呈しているが、きわめて小さい平底を持っており、自立できる。口縁部外面が横ナデされており、頸部より下の外面では、底部は器面が剥落しているが、ハケ調整がされている。内面はほとんど器面が剥落してしまっているのであるが、口縁部と頸部と底部にハケ調整された痕跡が見られる。また、外面の胴部最大径のところのあたりにススがやや多く付着している。

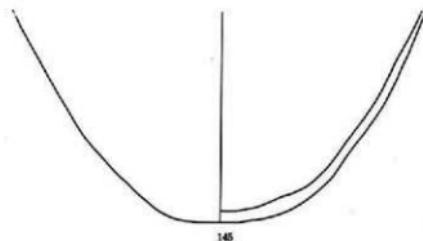
140は、略完形に復元されるものである。口縁部はほぼ真っすぐ外傾して開き、口縁端部は丸くおさめてある。また、底部には直径3cmほどの小さい平底の部分がある。調整については、口縁部から頸部の外面は横ナデされ、体部から底部にかけての外面には縦方向のハケ調整が施されている。内面については、口縁部から頸部では横ナデ、それより下においては、底部は器面が剥落してしまっているが、へら削りされている。胴部最大径のところから底部の外面と口縁部外面にはススが非常に多く付着している。



143



144



145

第77図 1号土坑出土土器 ($S=1/3$)

141・142は口縁部片である。両者とも、口縁部が外反しながら開き、口縁端部は丸くおさめてある。141は、口縁部外面に強い横ナデが施されており、その強い横ナデによって、口縁端部外面に段ができる。口縁部内面については、ハケ目をなで消したような痕跡が見られ、ハケ調整後に横ナデをしたようである。142は、口縁部内外面が横ナデされ、体部内面は器面の剥落で調整不明、体部外面にはハケ調整の痕跡が見られる。

143～146は、山陰系の甕である。

143は、口縁部下端外面の稜はやや小さいが明瞭であり、口縁部下端内面の段も明瞭である。また口縁端部には面を持つ。調整については内外面とも器面の剥落で不明である。

144・145は同一個体で、144と145とが接合できなかったところを除いては、ほぼすべて復元される。

口縁端部は丸くおさめられ、口縁部外面には、強い横ナデによって生じた小さな段が見られる。口縁部下端外面の稜は鋭くかつ大きく突出、口縁部下端内面の段は明瞭である。調整については、145の体部下位から底部の内外面と、口縁部から頸部の内面については、器面の剥落で調整不明であるが、口縁部から頸部の外側が横ナデされ、体部上位内外面にはハケ調整の痕跡が見られる。

146は、口縁部が内屈しているもので、略完形に復元される。法量が143・144(145)の大型品に比べて小さく、中型品である。底部は直径4cmほどの平底となっている。口縁部は内外面とも横ナデされており、口縁部外面には横ナデによってできたと思われる小さな段が見られる。体部から底部は、外面が器面の剥落で調整不明、内面にはヘラ削りされた痕跡が見られる。

147～153是有段口縁甕の口縁部である。

147・148は口縁帶に擬回線が施されたものである。147は、口縁帶に6条の擬回線が施され、口縁端部は、さほど目立たないが、やや先細りして若干外反している。また、頸部のくびれは鈍い。月影式期のものに該当する。148は、147と同様、口縁帶に6条の擬回線が施されており、口縁端部はやや先細りして若干外反している。口縁帶内面には指頭痕が見られる。これも月影式期のものに該当する。

149～153は口縁帶が無文のものである。

149～152は、口縁端部が丸くおさめられており、口縁端部の発達は見られない。151は頸部のくびれは鈍いものの、これら149～152は概ね法仏式期のものに該当するものと思われる。なお、調整については、149の口縁帶外面で横ナデの痕跡が見られる他は、すべて器面の剥落で不明である。

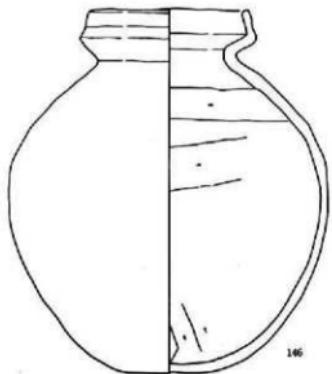
153は、有段口縁甕の口縁部であるが、口縁部下端外面に小さな稜が見られる程度となっており、口縁部の段はほとんど見られない。また口縁端部は先細りしてやや外反している。口縁部の段がほとんどなくなり、くの字口縁状を呈していることから、白江式期のものに該当するものと思われる。

154は、直口壺と思われるものの頸部である。内外面とも器面が剥落しており調整不明であるが、胎土自体が赤く発色しており、赤色土器である。

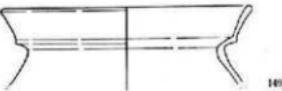
155・156は、直立した頸部に強く外傾した有段口縁を持つ壺で、体部と頸部との境、頸部と口縁部との境、口縁部の有段部分の3箇所で接合を行なっているものと思われる。調整については、155は、口縁帶の下から頸部の屈曲部分までの外面では、ハケ調整後に横ナデが行なわれているが、接合痕が明瞭に残っており、調整が粗い印象を受ける。口縁帶の外面が横ナデされ、頸部の屈曲部分から下の外面については、器面の剥落で調整不明である。内面については、口縁部から頸部の屈曲部分までの間は横ナデされており、体部については、器面の剥落で調整不明である。156の調整については、内外面とも器面の剥落で不明である。

157は、壺の体部から底部で、図化した部分のみ略完形に復元される。体部は球形を呈し、平底を持つ。外面の調整は、頸部の屈曲部分から体部中位あたりまではハケ調整がなされ、体部中位よりやや下がったところの接合痕が見られるあたりでは、ハケ調整後に強い横ナデを施している。その横ナデされたところより下は器面の剥落で調整不明である。内面の調整は、頸部の屈曲部分から体部下位あたりまではヘラ削りされており、底部のあたりでは、上から見ると時計回りの方向で、ハケ調整が施されている。内面の器面の剥落が著しく図化できなかったが、ハケ調整とヘラ削りとの切り合いを見ると、底部のハケ調整を行なったのちに体部のヘラ削りを行なったようである。

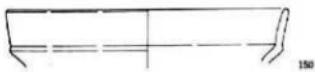
158は、半完形に復元される高杯で、坏底部外面に小さな段を持つ楕円形の坏部と、ハの字状に開く脚部を有する。脚部内外面は器面の剥落で調整不明であるが、坏部内外面にはヘラ磨きされた痕跡が見られる。また、坏部内部のごく一部と坏部外面の所々に、赤く発色している胎土の膜が付着しており、赤色土器であるといえる。



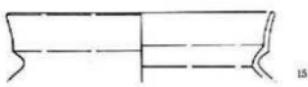
146



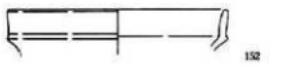
149



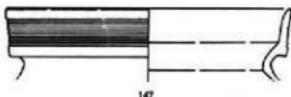
150



151



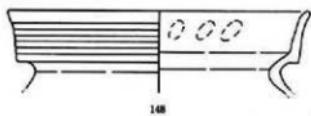
152



147



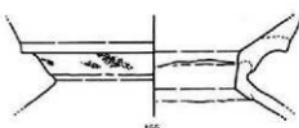
153



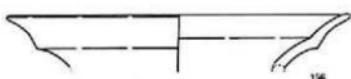
148



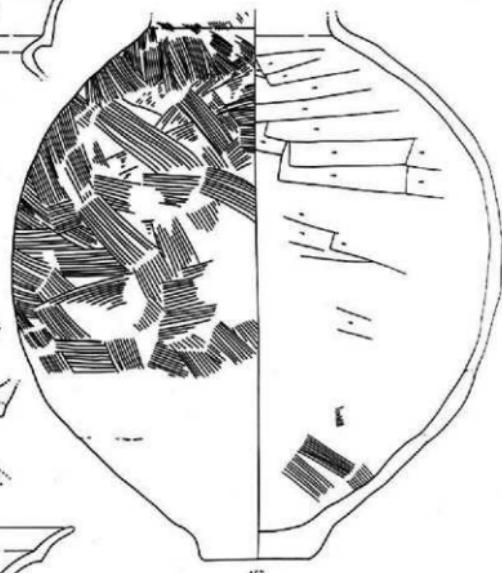
154



155

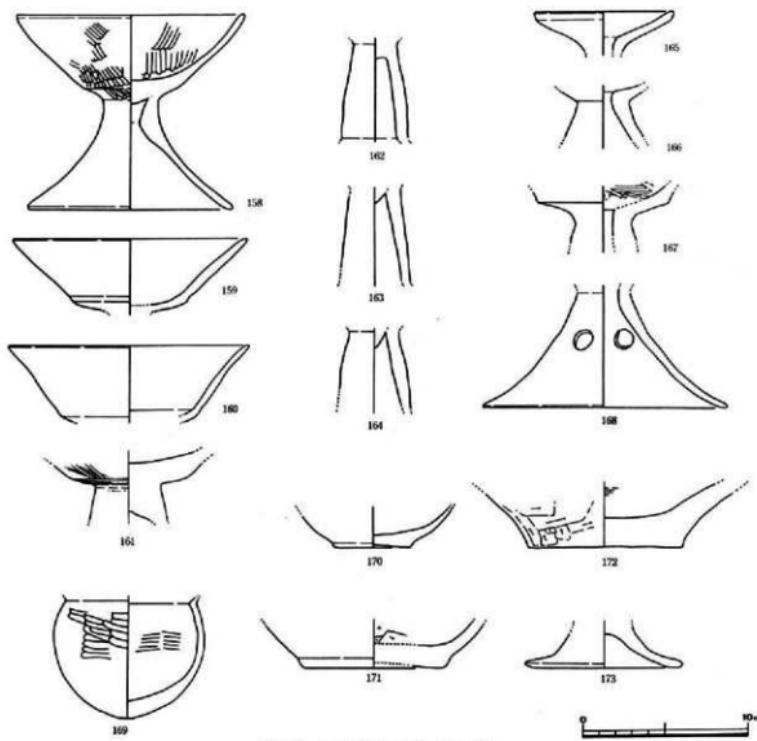


156



157

第78图 1号土坑出土土器 (S=1/3)



第79図 1号土坑出土土器 ($S=1/3$)

159・160は、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯坏部の口縁部片である。両者とも比較的深みのある坏部で、調整については、いずれも内外面器面の剥落で調整不明である。

161は、高杯の坏部と脚部との境の部分である。これだけではっきりとした器形は分からぬが、おそらく、158と同様、椀形の坏部に、ハの字状に開く脚部が付いたものと推測される。調整については、坏底部内外面にヘラ磨きされた痕が見られ、その他は不明である。

162～164は、若干下方へ開き気味の筒状の高杯脚柱部である。いずれも途中で外方に屈曲して脚据部に至るものと思われる。調整については、いずれも器面の剥落で不明である。

165は器台の受部である。口縁部内面は真っすぐのびて口縁端部に至るが、口縁部外面は途中でつまみ上げたように屈曲して口縁端部に至る。調整については、内外面ともに器面の剥落で不明である。

166・167は器台の受部と脚部との境の部分である。166は、受部が浅い椀状の形を呈し、脚部は受部の底からハの字状に下方へ開いて脚据部に至るものと思われる。167については、受部は、内面では緩やかではあるが、外面では明瞭に途中で上方へ屈曲しており、受部の底には筒状の脚部が付いている（途中で外方に屈曲しているものか否かは不明）。調整については、167の受部内面でヘラ磨きされた痕が見られるが、その他は器面の剥落で不明である。

168は、ハの字状に下方へ開く器台脚部である。4箇所に穿孔されている。調整は器面の剥落で不明であるが、胎土は赤く発色するものを用いており、赤色土器である。

169は壺形の小型土器である。口縁部以外は完形に復元される。底部はほとんど丸底に近い形を呈するが、きわめて小さい平底があって、自立する。調整については、外面はほとんど器面が剥落しているが、一部にヘラ削きされた痕跡が見られる。内面については、一部にハケ調整の痕跡が見られるが、ほとんどはナデ調整されており、おそらくハケ調整後にナデ調整を行なったのではないかと思われる。なお、胎土は赤く発色するものを用いており、赤色土器である。

2号土坑出土土器（第80図～第82図）

2号土坑からは、甕では、くの字口縁甕が25点出土し（略完形品1点、口縁部細片14点、口縁部残存率で約1/6以上残っているほどの残りの良い口縁部の破片10点）、その他に、山陰系と思われる甕の口縁部から肩部の破片1点、体部下位から底部の破片1点、また体部片がパンケースにして約2箱分（個体識別法で18点ほど）ある。壺では、山陰系壺の口縁部細片1点と口縁部から肩部の破片1点、高杯では、环部のみ略完形のもの1点、口縁部片1点、脚部2点、実測できないほどの細片が個体識別法で6点ある。また、椀が細片を含めた個体識別法で6点、須恵器が同じく細片を含めた個体識別法で、环蓋5点、环身4点があり、环蓋か环身いずれか判断がつかない破片1点がある。他に器種不明の土師器の細片がパンケースで約1/4箱分ある。

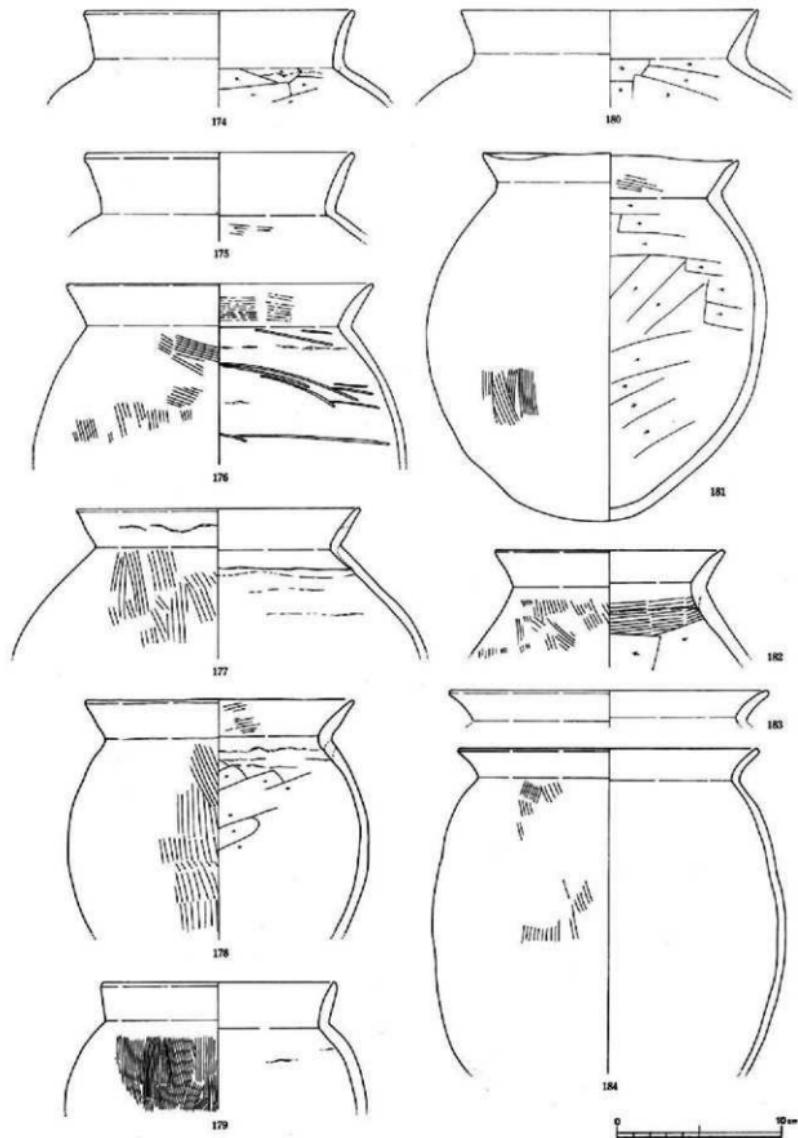
174～190はくの字口縁甕である。

174・175は口縁部が外反していて、口縁端部は丸くおさめてある。174は、口縁部内外面が横ナデされているが、口縁部内面については、かすかにハケ調整の痕跡が見られるところがあり、ハケ調整後に横ナデを行なったものと思われる。頸部の屈曲したところから下は、外面が器面の剥落で調整不明、内面はヘラ削りされている。175は、口縁部内外面が横ナデされており、体部内外面は、器面が剥落しているが、体部内面にはかすかにハケ調整の痕跡らしきものが見られる。

176は、口縁部が若干外反気味に開いており、口縁端部は先細り気味ではあるが丸くおさめてある。口縁部内外面は横ナデされているが、内面は、ハケ調整の痕跡も見られ、ハケ調整後に横ナデを行なっている。体部は、外面については、頸部の下のところから肩部までが横方向の、それより下のところでは縱方向のハケ調整を行なっており、縱方向のハケ調整のうち、横方向のハケ調整を行なっている。体部内面については、器面が剥落しているが、凹線状の筋が不規則に幾条か見られる。また、接合痕がいくつか見られるが、概ね消されてある印象を受ける。

177・178は、口縁部が真っすぐ外傾して開き、口縁端部は丸くおさめてある。177は、口縁部内面は器面が剥落して調整不明であるが、外面は横ナデされている。体部外面については、粗い原体のハケ状具でハケ調整されているが、頸部の屈曲部分の直下あたりでは、ハケ調整後に横ナデを行なっており、その部分に見られるハケ調整の痕跡が体部に見られる痕跡に比べて薄く見える。体部内面については、器面が剥落していて調整が不明である。体部内面には所々に接合痕が見られるが、概ね消されてある印象を受ける。なお、口縁部外面にはスグが微量付着している。178は、口縁部外面が横ナデされ、口縁部内面にはハケ調整された痕跡が見られるところがある。体部外面はハケ調整され、体部内面は、頸部の屈曲部分からやや下がったところから下がヘラ削りされている。

179は、口縁部が真っすぐのびて、口縁端部が丸くおさめられているが、口縁部が他に比べて直立気味になっている。口縁部から頸部の屈曲部分のあたりまでの外面は横ナデされ、それより下の体部外面は縱方向のハケ調整がされている。内面についてはすべて器面が剥落していて調整不明である。



第80图 2号土坑出土土器 ($S=1/3$)

180・181は、口縁部が真っすぐ外傾して開き、口縁端部が先細りしている。180は、外面すべてと口縁部内面が器面の剥落で調整が分からぬが、頸部の屈曲部分から下はヘラ削りされている。181は略完形に復元されるもので、口縁部外面は器面の剥落で調整不明、体部から底部の外面についてもほとんど器面が剥落しているが、所々にハケ調整の痕跡が見られる。内面については、口縁部ではハケ調整の痕跡が一部に見られ、体部はヘラ削りされている。しかし、体部内面がヘラ削りされているわりには器壁が比較的厚手である。なお、内面の底から1cmほど上がったところの体部下位内面全周には、約5cmほどの幅の焦げの痕のような帶状のものが見られる。また体部外面には、器面の剥落で微量にしか残っていないが、ススの付着が見られる。

182は、口縁部がほぼ真っすぐ開き、口縁端部は丸くおさめてあるが、肩部が直線的で張っていない。口縁部から頸部の外面は横ナデされ、体部外面はハケ調整されている。頸部の屈曲部分の直下あたりの外面については、かすかにハケ調整された痕跡も見られ、ハケ調整後に横ナデされたといえる。体部内面については、頸部の屈曲部分からやや下がったところではハケ調整されており、それより下の体部ではヘラ削りが施されている。ハケ調整とヘラ削りとの切り合いを見ると、ハケ調整後にヘラ削りを行なったことが分かる。

183・184は、口縁部が外反しながら開き、口縁端部は丸くおさめてあるが、比較的口縁部が短めである。183の体部については不明であるが、184の体部はいわば寸胴形を呈している。調整については、183が内外面とも器面の剥落で不明、184は、口縁部外面と内面すべてが器面の剥落で不明、体部外面は所々にハケ調整の痕跡が見られる。

185は、口縁部が外反しながら開き、口縁端部に面を持つ。口縁部から頸部の外面は強い横ナデがされており、口縁部から口縁端部に至る間の外面には、その強い横ナデによってできたと思われる小さな段が見られる。口縁部内面については、ハケ調整されているが、口縁部下位から頸部の屈曲部分のところまでと口縁端部については、ハケ調整後に横ナデを行なっている。また口縁端部の面にも横ナデの痕跡が見られる。

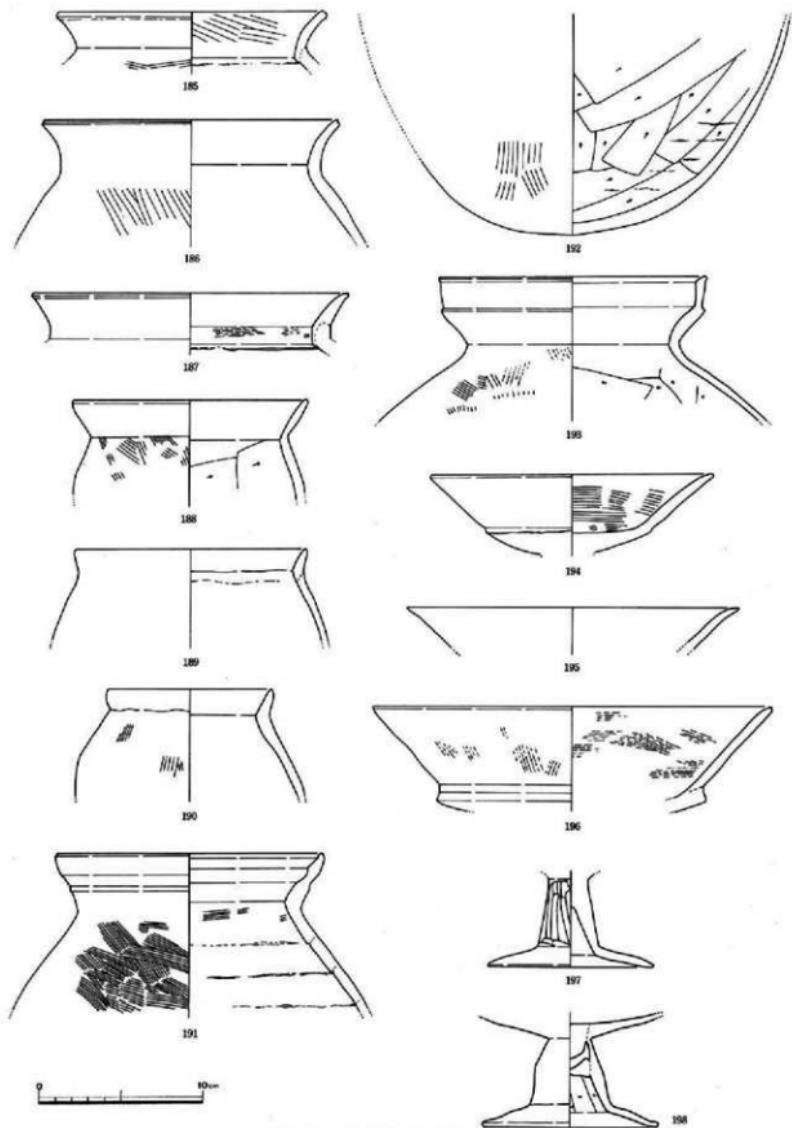
186は、頸部で外反するように開いて、口縁部もそのまま外反しながらびる。口縁端部は面を持って、その面に1条の凹線が入る。調整については、口縁部外面が横ナデ、体部外面はハケ調整されているが、その間の頸部外面ではハケ調整後に横ナデされている。また、体部外面のハケ調整については、原体が粗めのハケ状具を用いている。内面の調整については、口縁部が横ナデされており、体部は器面の剥落で調整不明である。

187は、口縁部が外反しながら開き、口縁端部は丸くおさめてあるが、頸部の屈曲部分の内面に面を持つものである。口縁部外面は強い横ナデがされており、口縁部から口縁端部に至る間の外面に段を持つ。口縁部内面については、口縁端部から頸部の面に至るところまでが横ナデされており、頸部の面はハケ調整後に横ナデがされている。

188・190はくの字口縁の小甕である。188は口縁部が真っすぐ外傾して開き、口縁端部は丸くおさめてある。口縁部内外面は横ナデされており、体部外面はハケ調整、体部内面はヘラ削りがされている。

189・190は口縁部が短いものである。190は頸部が明瞭に屈曲しているが、189については、頸部内面は屈曲によってできるラインが見えるものの、頸部外面は外反して開くようになっており、屈曲によってできるラインが見られない。調整は、189が器面の剥落で内外面不明、190については、外面が体部の一部にハケ調整の痕跡が見られる程度で、ほとんど不明、内面は、口縁部が横ナデされており、体部は不明である。

191は、山陰系と思われる甕の口縁部から肩部である。口縁部下端外面が小さく突出しているように



第81圖 2號土坑出土土器 ($S=1/3$)

なっており、山陰系甕に見られる口縁部下端外面を突出させた複合口縁が退化していくの字口縁状に近付いたものと考えられ、山陰系とした。口縁部から頸部外面と口縁部内面は横ナデされ、体部外面はハケ調整されている。また頸部内面にもハケ調整の痕跡が見られる。体部内面については、器面の剥落で調整不明である。

192は、丸底の甕の底部である。内面は底から上への方向でヘラ削りされており、所々に接合痕が見られるが、概ね消されてある印象を受ける。外面はほとんど器面が剥落しており、一部にハケ調整の痕跡が見られる。

193は山陰系甕の口縁部から肩部である。口縁端部は外方に小さく肥厚し、内傾する面を持つ。口縁部から頸部の外面は横ナデ、体部外面はハケ調整されているが、頸部の屈曲部分の直下あたりはハケ調整後に横ナデされている。内面については、口縁部から頸部の屈曲部分の下あたりまでが横ナデされ、それより下ではヘラ削りされている。

193は坏部のみ略完形に復元される高杯坏部であり、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至るものである。口縁部から坏体部の外面は横ナデされており、とくに、坏体部と坏底部との境の屈曲部分の外面にある面は強く横ナデされ、その面の下端には、強い横ナデによって生じた余分な粘土が下へはみ出したようになっている。坏底部外面については、下から見ると、円を描くようにヘラナデされている。内面については、坏体部はハケ調整されているが、口縁部については、ハケ調整後に横ナデされている。坏底部内面については、器面の剥落でかすかにしか見られないが、ハケ調整されている。

194は高杯の口縁部である。口縁部のみの破片で、かつ内外面ともに器面の剥落によって調整不明であるが、胎土自体が赤く発色している赤色土器である。

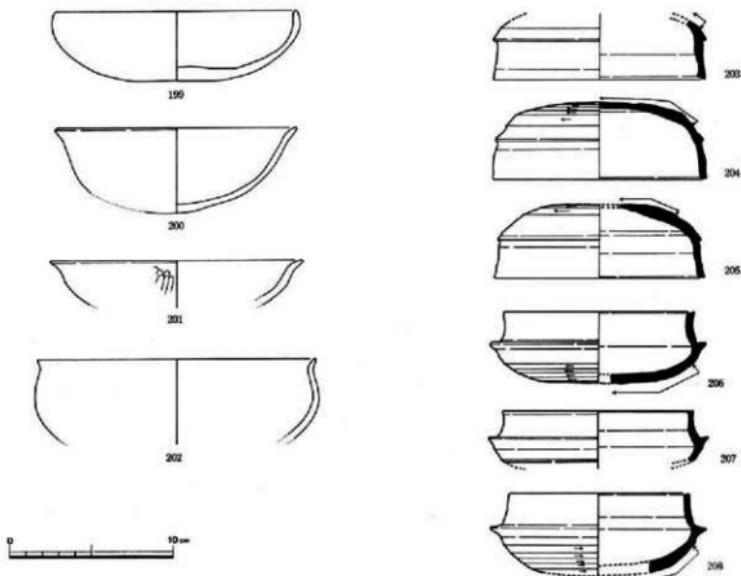
195は高杯の口縁部から坏体部である。底部から外上方に屈曲して口縁部に至るものであるが、屈曲部分の外面に稜が見られる。口縁部から坏体部の外面は横ナデされているが、坏体部外面にはかすかにハケ調整された痕跡も見られ、ハケ調整後に横ナデしたものといえる。口縁部から坏体部の内面についても、外面と同様、ハケ調整後に横ナデをしている。また、屈曲部分の外面と底部の外面は横ナデされている。

196・197は高杯の脚部である。いずれも筒状の脚柱部から途中で外方に屈曲して脚基部に至るものであるが、196は若干下方に開いただけの比較的細い筒状の脚柱部であるのに対し、197は、比較的下方に開いた形の脚柱部である。調整については、196は、脚柱部外面が縱方向のヘラ磨きがされており、その他は器面の剥落で不明である。197は、脚柱部内面でヘラ削りが施されている他は、器面の剥落で不明である。なお、197の坏部と脚部との接合についてであるが、坏部側からと脚部側からの両方から円盤充填を行なっており、その間に隙間ができる。焼成時にその隙間が膨張して破裂するのではないかと思われるが、隙間ができているのである。

199～202は碗である。

199は口縁部が若干内湾気味で、口唇部を丸くおさめている。器面の調整については内外面とも器面が剥落していて不明である。胎土自体が赤く発色しており、赤色土器である。

200～202は、口縁部を外反させているもので、200・201は体部が外上方にのびてから口縁部で外反しているのに対し、202は体部が途中で内側に湾曲したのち口縁部で外反している。調整については、いずれも内外面とも器面の剥落で不明である。200・202は胎土自体が赤く発色している赤色土器である。201については、内面が黒く、かすかに器面が剥落していない箇所が内面にあるが、その箇所に若干光沢があり、内黒土器っぽく見える。しかし、器面の剥落が著しくて詳細が不明であり、内黒土器と認めか否かについては保留としておきたい。



第82図 2号土坑出土土器 ($S=1/3$)

203～205は須恵器壺蓋である。204は略完形に復元される。203は口縁部と天井部との境の稜から約1cmほど上がったところから、204は約5mmほど上がったところから回転ヘラ削りがされ、回転ヘラ削りのされた範囲が比較的広い。また203・204のいずれも口縁端部の面には段があるが、その段は不明瞭である。これに対し、205は、天井部に施された回転ヘラ削りの範囲が比較的狭く、口縁端部の面に見られる段は比較的明瞭である。なお、口縁部についてであるが、203・205はほぼ真っすぐ外に開く形を呈しているが、204はやや内湾気味に丸みをもって口縁端部に至る形をしている。

206～208は須恵器壺身である。206は、口縁端部に不明瞭ながら小さな段が見られ、受部の付け根のところには沈線状の凹みが施されている。底部の回転ヘラ削りの範囲については比較的狭い。207は、口縁部から受部の直下までしかない破片であるが、受部直下の削れ口から判断して、器高が比較的低くて平坦な形を呈するものと思われる。口縁端部の面には段が見られるが、不明瞭で小さい段である。また、残存箇所が小さいため不明瞭ではあるが、受部の先端から約1.5cmほど下がったところでは、カキ目らしきものが見える。208は、207とは逆に、器高が比較的高い。また、他のほとんどのものの受部上面の面が内上方に向いているのに対し、この壺身の受部上面の面は外上方を向いている。口縁端部については、面があって、その面は内上方に向いている。底部の回転ヘラ削りについては、受部の先端から約1cmほど下がったところから施されており、回転ヘラ削りされた範囲は比較的広い。

5号土坑出土土器（第83図209～215）

5号土坑からは、土師器では、くの字口縁甕1点、高杯2点、碗2点があり、その他に器種不明の細片少量がある。また須恵器で壺身と甕が1点ずつ出土している。

209はくの字口縁の甕であり、口縁部が外反しながら開き、口縁端部は丸くおさめられている。口縁部内外面は横ナデされており、体部の調整については、器面の剥落で内外面とも不明である。

210・211は高杯の坏部である。210は、平坦な坏底部から途中で屈曲して口縁部に至るタイプの坏部であるが、屈曲部分の外面には下方に突出する稜が見られる。また、比較的浅い坏部である。調整については、外面は器面が剥落していて不明であるが、内面はヘラ磨きされている。211は、底部から体部へ至る屈曲部分の外面に、外下方にのびる突帯が見られるものであり、比較的大型の坏部である。調整については、内面は器面の剥落で不明、外面は、坏底部については内面と同様に不明であるが、口縁部から坏体部は横ナデされている。

212・213は楕である。いずれも口唇部は丸くおさめてある。213の内面は焼成不良によりやや黒っぽくなっているが、いずれも胎土自体が赤く発色する赤色土器である。なお調整については、いずれも器面の剥落で内外面とも不明である。

214は須恵器坏身である。5号土坑内出土の破片と5号土坑付近の包含層出土の破片との接合によって略完形に復元される。口縁端部には内傾する段が見られ、比較的明瞭な段である。底部外面の回転ヘラ削りについては、受部の先端から約1.5cmほど下がったところから施されており、比較的広い範囲に施されている。また、底部内面には不整方向のナデ調整が見られる。

215は須恵器甕である。ほとんどが5号土坑出土の破片であるが、同一個体と思われる6号土坑出土の破片もある。口縁端部は破片がなく不明であるが、口頸部外面には、断面三角形の凸線が2本あり、その凸線の間には波状文が見られる。体部外面には格子叩きが施され、頸部の屈曲部分の直下と胴部中位からやや下がったところでは、格子叩きの後に施された太く浅いカキ目の痕が見られる。内面については、体部はナデ消しされているが、所々にD a類と思われる当て具の痕跡が見られる。

6号土坑出土土器（第83図216～224）

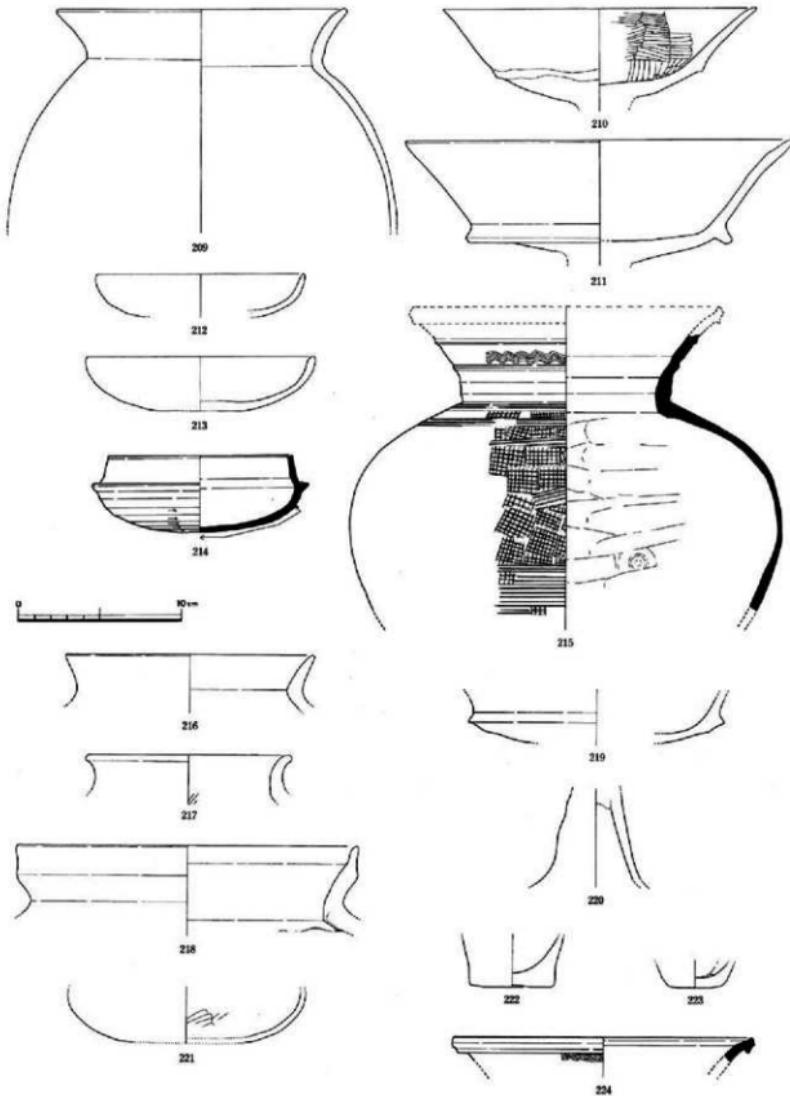
6号土坑からは、甕では、くの字口縁甕の口縁部細片2点、有段状口縁甕の口縁部細片1点、体部片パンケース半分弱（個体識別法で4個体分ほど）が出土、壺では、原形を止めていないほど摩滅が著しいため固化できなかったが、山陰系壺の口縁部細片1点、高杯では坏部片1点、脚部片1点があり、その他、楕の体部片が1点出土している。また、器種不明の平底の底部片2点、須恵器坏蓋で61号土坑（4号竪穴住居跡）出土のもの（第68図48）と接合される破片1点、須恵器甕の口縁部片1点、須恵器甕の体部片で5号土坑出土の甕（第83図215）と接合される破片1点が出土している。

216・217はくの字口縁甕の口縁部である。216は、頸部外面が外反するように開き、頸部内面は屈曲して稜を持つ。口縁部は真っすぐ開き、口縁端部は先細り気味である。調整については、内外面ともに器面が剥落して不明である。217は、頸部から外反して口縁部が開き、口縁端部が丸くおさめられている。また、口頸部外面が強く横ナデされていて、口縁端部が外側に小さく突出するようになっている。内面の調整については、口縁部が横ナデされており、頸部の直下あたりでは、器面の剥落でかすかにしか残っていないが、ハケ調整の痕跡が見られる。

218は、有段状の口縁を持つ甕の口縁部である。器面の剥落のため、調整については内外面ともに不明である。

219は高杯の坏部で、坏底部と坏体部との境の部分である。平坦な坏底部から外上方へ屈曲して口縁部に至るが、屈曲部分の外面では、外方へ突出している稜を持つ。調整については内外面ともに器面の剥落で調整不明であるが、胎土自体が赤く発色している赤色土器である。

220は、下方へやや開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方に屈曲して脚部に至る高杯の脚柱部で



第83图 5号土坑(209~215) 6号土坑(216~224)出土土器(S=1/3)

ある。比較的低脚である。調整は器面の剥落で内外面不明であるが、219と同様、胎土自体が赤く発色しており、赤色土器である。なお、219と胎土が似ており、219と220は同一個体の可能性がある。

221は楕である。外面は器面の剥落で調整不明、内面にはヘラ磨きの痕跡が見られる。また、内面には赤く発色している胎土の膜が付着しており、赤色土器といえる。

224は須恵器甕の口縁部である。口縁端部付近の外面には下方へのびる凸線が見られ、その凸線があるところから口唇部にかけては口縁部が上方へ小さく屈曲し、口縁端部内面には凹面が見られる。また口縁端部付近外面の凸線の直下には波状文がある。

14号土坑出土土器（第84図—第86図）

14号土坑からは、甕では、くの字口縁甕10点、山陰系と思われる甕1点、有段口縁甕1点の他、甕体部片がパンケースにして約1/2箱分（個体識別法で6個体分ほど）があり、小甕1点もある。その他、高杯8点、瓶1点、楕1点があり、須恵器では、甕体部細片が2点（同一個体か）出土している。また器種不明土師器細片が少量ある。

225～234はくの字口縁の甕である。

225は、頸部で屈曲後、外反してのびる口縁部を持ち、口縁端部は丸くおさめられている。口縁部内外面は横ナデされ、体部では、外面がハケ調整、内面がヘラ削りされている。体部の中位より下の外面には少量のススが付着している。

226は、頸部で屈曲後、外反してのびる口縁部を持つが、口縁部が比較的短い。口縁端部は丸くおさめられている。口縁部内外面と頸部外面は横ナデされており、体部外面にはハケ調整された痕跡が見られる。体部内面については、頸部の屈曲部分から若干下がったところより下がヘラ削りされている。また、圓化した部分の外面全体には微量のススの付着が見られる。

227～231は、頸部で屈曲後、真っすぐ開く口縁部を持ち、口縁端部が丸くおさめられている。227は半完形に復元されるもので、調整については、口縁部外面は横ナデされ、頸部以下外面は縱方向のハケ調整が施されている。内面については、口縁部が横方向のハケ調整がされ、頸部の屈曲部分から下がヘラ削りされている。228～231の調整については、228の頸部の屈曲部分以下の内面がヘラ削りされている点と231の体部外面にハケ調整の痕跡が見られる点のほかは、器面の剥落で不明である。

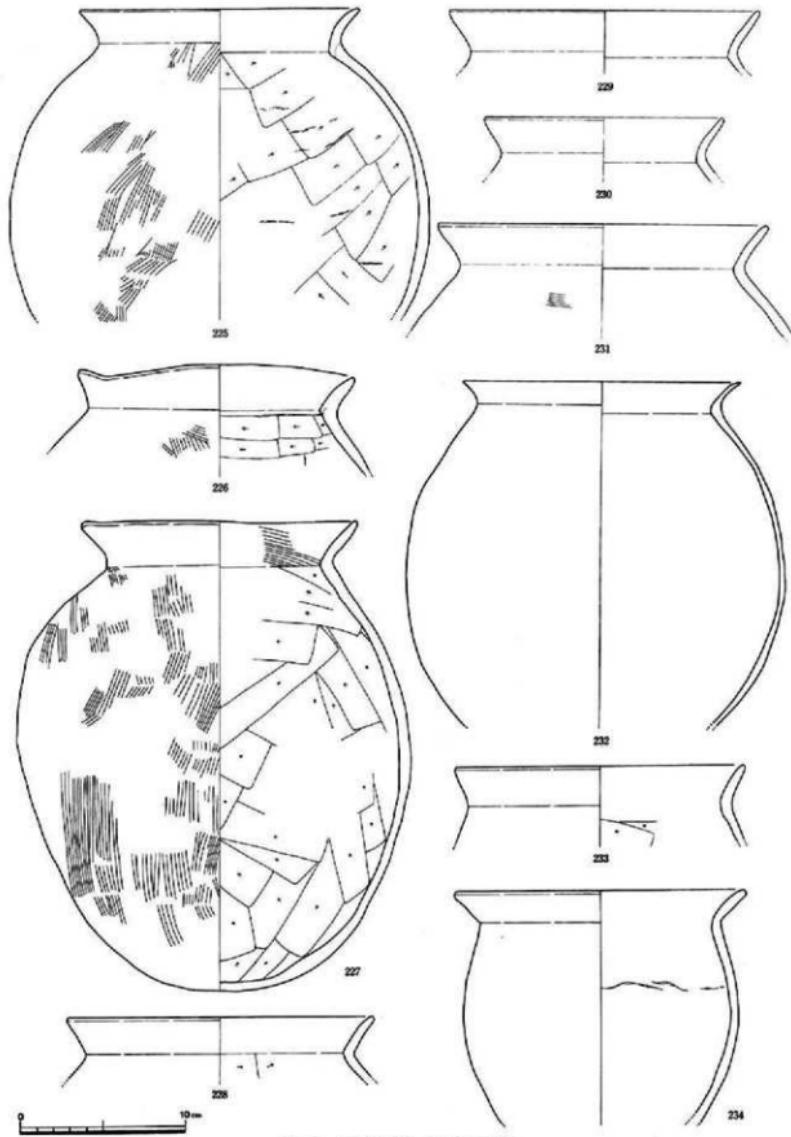
232は、頸部で屈曲したのち、外反して開く口縁部を持ち、口縁端部が先細りする。調整については内外面とも器面の剥落で不明である。体部中位以下の外面では微量のススの付着が見られる。

233は、頸部で外反するように緩やかに開いたのち、口縁部が真っすぐのびて、口縁端部は丸くおさめられている。外面すべてと口頸部内面は器面の剥落で調整不明であるが、体部内面にはヘラ削りされた痕が見られる。

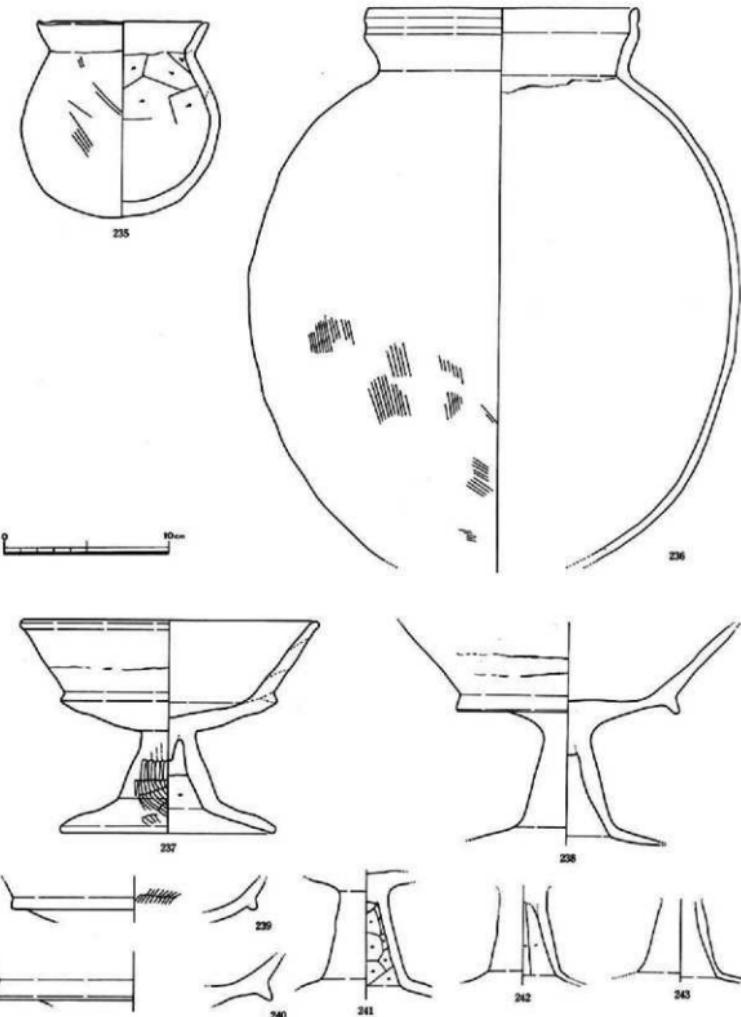
234は、胴部最大径が口径より小さいもので、頸部で屈曲したのち口縁部が真っすぐのびて口縁端部は丸くおさめられている。調整については、内面はすべて器面の剥落で不明、外面は、口縁部が横ナデされ、頸部の屈曲部分以下は、器面が剥落していないのであるが、ハケ調整等の痕跡が見られず、不整方向のナデ調整がされたものと思われる。なお、外面全体にはススが微量付着している。

235はくの字口縁の小甕である。半完形に復元される。口縁部内外面は横ナデされており、頸部以下内面はヘラ削りされている。頸部以下外面については、器面がほとんど剥落しているが、ハケ調整された痕跡がかすかに残っている。口縁部から体部上半の外面にはかすかにススの付着が見られる。

236は、山陰系と思われる甕である。底部以外はすべて復元される。口縁部は、口縁部下端外面が小さく緩やかに突出し、くの字口縁に近い複合口縁の形を呈しており、山陰系甕に見られる複合口縁が退



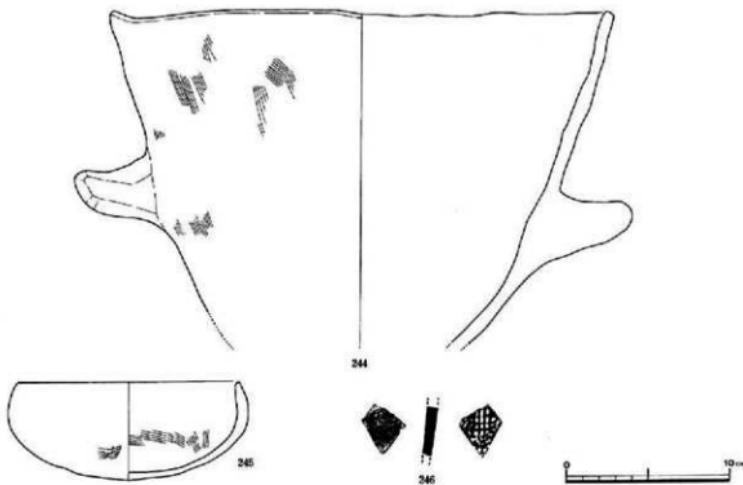
第84図 14号土坑出土土器 ($S=1/3$)



第85図 14号土坑出土土器 ($S=1/3$)

化していく字口縁状に近付いたものと思われる。調整については、内面すべてと口縁部外面が器面の剥落で調整不明。体部外面は、ほとんど器面が剥落しているが、所々にハケ調整の痕跡が見られる。なお体部中位以下の外面の所々にはスヌが少量付着している。

237は半完成形に復元される高杯である。やや平坦な杯底部から途中で外上方へ屈曲して口縁部に至る



第86図 14号土坑出土土器 (S=1/3)

坏部を持つが、屈曲部分の外面に外方へ大きく突出する稜が見られる。脚部は、下方へ比較的大きく聞く筒状の脚柱部から途中で外方へ屈曲して脚裾部に至るもので、比較的低脚のものである。調整については、坏部が内外面とも器面の剥落で不明、脚部については、外面がヘラ磨きされており、内面は、脚柱部上半がナデ調整、脚柱部下半がヘラ削りされており、脚裾部については器面の剥落で不明である。

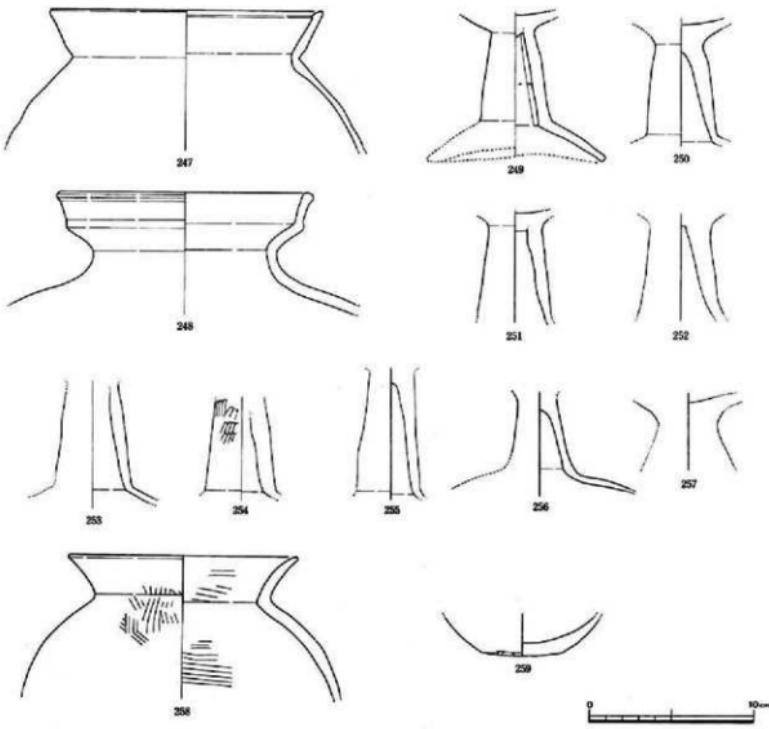
238~240は高杯であるが、平坦な坏底部から途中で外上方へ屈曲して口縁部へ至る坏部で、屈曲部分の外面に突帯を持つものである。調整については、239の内面にヘラ磨きの痕跡が見られる他は、器面の剥落で不明である。なお240は、胎土自体が赤く発色しており、赤色土器である。

241~243は高杯の脚部。下方へ開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方へ屈曲して脚裾部に至るものである。241・242の脚柱部内面がヘラ削りされている以外は、器面の剥落で調整不明である。241は比較的低脚気味、242・243は明らかに低脚である。

244は半完形に復元される瓶である。体部は砲弾状を呈しており、挿入技法によって把手が付けられている。また、把手を正面から見た断面形は上下につぶれた楕円形を呈する。底部の穿孔は復元できず不明である。調整については、ほとんど器面が剥落していて不明であるが、体部外面の所々にハケ調整の痕跡が見られる。

245は椭である。調整については、外面は、器面の剥落が著しいが、所々にヘラ磨きの痕跡が見られる。内面はハケ調整されており、上から見ると、底部の中心から外方へいわば円を描くように施されている。なお、外面には所々に赤く発色している胎土の膜が付着しており、赤色土器であるといえる。また、器形は歪んでおり、上から見ると、不整の楕円形を呈している。

246は須恵器甕の体部片である。外面は格子叩きによる叩き目が見られ、内面はナデ調整がされている。



第37図 23号土坑(247~257) 24号土坑(258~259) 出土土器(S=1/3)

23号土坑出土土器（第37図247~257）

23号土坑からは、甕では布留甕の口縁部から肩部の破片1点と甕体部片少量（個体識別法で3点ほど）が出土している。その他、山陰系甕の口縁部1点、高杯の脚部9点があり、器種不明の細片がごく少量ある。

247は口縁端部が内側に肥厚している布留甕の口縁部から肩部である。口縁部は真っすぐ開き、口縁端部の面は平坦に内傾している。また、口縁端部の肥厚は、口縁部の器壁が厚く、肥厚があまり目立たないものとなっている。なお、口縁部の器壁は厚めであるが、肩部の器壁についてはさほど厚くない。調整については、口縁部内外面は横ナデされているが、頸部以下内外面については器面の剥落で不明である。

248は山陰系甕の口縁部である。口縁部下端の突出する稜は緩やかで不明瞭であり、口縁端部はやや不明瞭ながら面を持つ。調整については内外面ともに器面の剥落で不明である。

249~256は高杯の脚部であり、下方に若干開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方へ屈曲して脚裾部に至るものである。253・255は、脚柱部が比較的細く、下方への開きも小さい。また、脚柱部の長さも長めである。254は脚柱部が細く、下方への開きも小さいが、長さは不明である。なお、調整について

は、249の脚柱部内面がヘラ削りされている点、254の脚柱部外面にヘラ磨きの痕跡が見られる点を除いては、器面の剥落で不明である。

24号土坑出土土器（第87図258・259）

24号土坑からは、甕では、くの字口縁甕の口縁部から肩部の破片1点、底部片1点、体部細片少量（個体識別法で8個体ほど）が出土しており、その他、実測できない小型甕の体部片が1点ある。

258は、くの字口縁甕で、頸部で屈曲したのち、口縁部は外反しながらび、口縁端部は丸くおさめられてある。口縁部外面は横ナデされており、頸部の屈曲部分から下の外面にはハケ調整の痕跡が見られる。ハケ調整痕とナデ調整の痕跡との切り合いを見ると、ハケ調整のち横ナデを行なったことが分かる。内面については、器面の剥落が著しいが、口縁部から体部の所々にハケ調整の痕跡が見られる。また、口縁部から肩部の外面にはススが多量付着している。

259は甕の底部である。丸底に近い形を呈しているが、底部がヘラ削りされて平底となっている。調整については、底部のヘラ削り以外は器面が剥落していて不明である。なお、外面にはススが微量付着している。

26号土坑出土土器（第88図260～264）

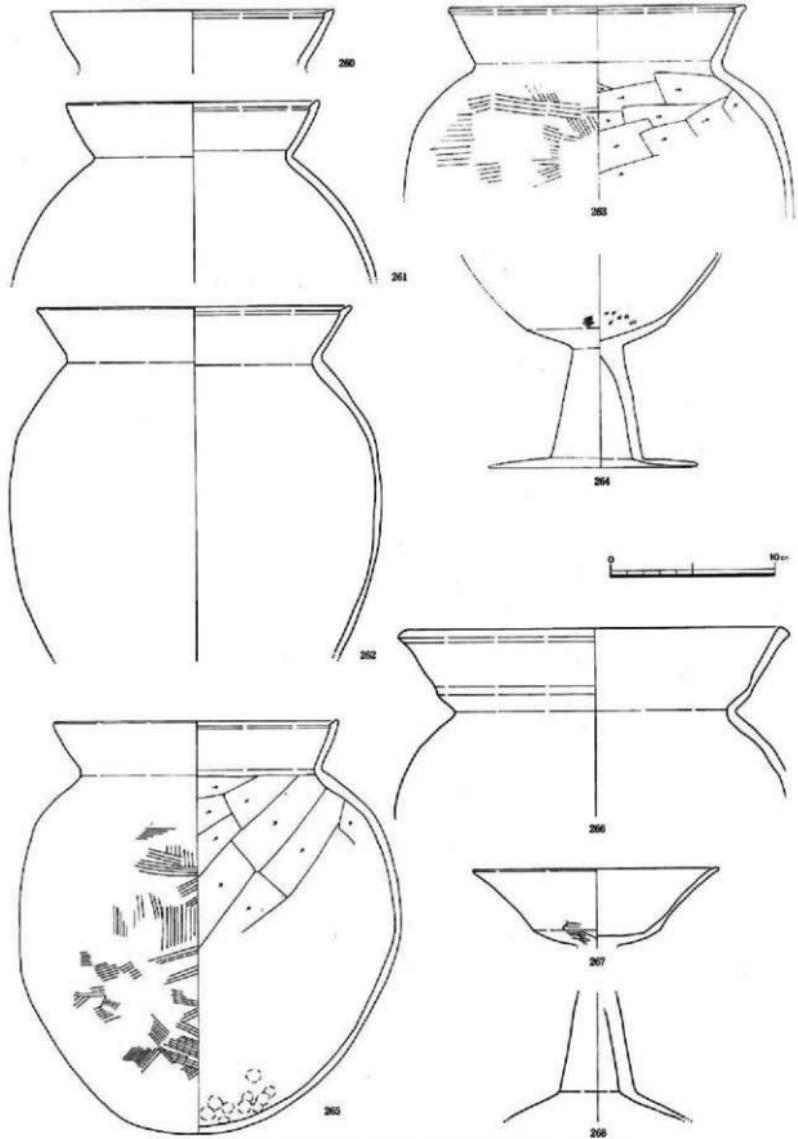
26号土坑からは、甕では、布留甕4点、体部片少量（個体識別法で5点ほど）があり、その他、半完形品に復元される高杯1点が出土している。

260～263は布留甕である。260は、頸部で屈曲後、口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾している。口縁部の内外面は器面が剥落していて調整不明である。261は、頸部で屈曲後、口縁部が内湾気味に開く。口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾している。調整については、器面が剥落していてほとんど不明であるが、肩部外面に、実測できないほどかすかで不明瞭ではあるが、横方向のハケ調整がされたと思われる痕跡が見られる。262は、口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚しているが、外側にも若干肥厚している。端部の面は平坦で内傾する。器面はすべて剥落しており、調整は不明である。263は、口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は内外ともにはっきりと肥厚している。端部の面は平坦で内傾する。口縁部から頸部の内外面は横ナデされており、体部外面はハケ調整されている。とくに肩部外面には、布留甕通有の横方向のハケ調整痕がある。ハケ調整痕と横ナデの痕跡との切り合いを見ると、ハケ調整後に横ナデをしており、頸部直下の外面はハケ調整痕を横ナデで消したようになっている。体部内面についてはヘラ削りされている。器壁は厚めである。

264は、半完形に復元される高杯である。杯部は椀形を呈しているが、杯底部と杯体部との接合によって成される杯部であり、つくりは、平坦な杯底部から途中で外上方に屈曲して口縁部に至るタイプと同じである。脚部については、下方に開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方へ屈曲して脚裾部に至るものであるが、脚柱部からの屈曲がほとんど真横に屈曲しており、平坦な脚裾部を呈している。なお調整については、ほとんど器面が剥落しているが、杯底部と杯体部との境に細かめのハケ調整痕が見られる。

35号土坑出土土器（第88図265～268）

35号土坑からは、甕では、半完形に復元される布留甕1点、山陰系甕の口縁部から肩部の破片1点のほか、体部片が少量（個体識別法で4点ほど）出土している。また、高杯の杯底部片1点、脚部片1点もある。



第88圖 26號土坑（260—264）35號土坑（265—268）出土土器（ $S=1/3$ ）

265は半完形に復元される布留甕である。口縁部は真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾する。口縁端部の肥厚の度合いは、摩滅によって分かりにくくなっているのであるが、あまり大きくなるものと思われる。調整については、口縁部から頸部の外面と口縁部内面が横ナデされており、体部から底部の外面はハケ調整が施されている。なお、器面の剥落のためかすかにしか見られないが、布留甕通有の肩部の横ハケの痕跡が見られる。しかし、その横ハケにはあまり規則性がなく、横ハケの合間に縱ハケの痕跡が見られ、粗く横ハケを施したものといえる。頸部の屈曲部分以下の内面についてはヘラ削りされているが、削りの単位が明確に見られるほど粗いもので、ヘラ削りによる凹凸が確認できる。また、底部内面には指頭痕が確認できる。外面にはススが付着しており、口縁部から体部上半では少量、体部下半ではやや多量付着している。

266は山陰系甕の口縁部である。口縁部下端の外方へ突出する稜はほとんど見られず、口縁部下端を緩やかに屈曲させた程度の複合口縁で、くの字口縁に近い複合口縁を呈する。口縁端部は外側に肥厚しており、面を持つ。調整については内外面ともに器面の剥落で不明である。

267は、平坦な坏底部から外上方へ屈曲して口縁部に至る高杯の坏部である。内外面ともに器面の剥落が著しくほとんど調整不明であるが、坏体部と坏底部との境の屈曲部分から底部にかけて、かすかに横方向のヘラ磨きの痕跡が見られる。なお、胎土自体が赤く発色しており、赤色土器である。

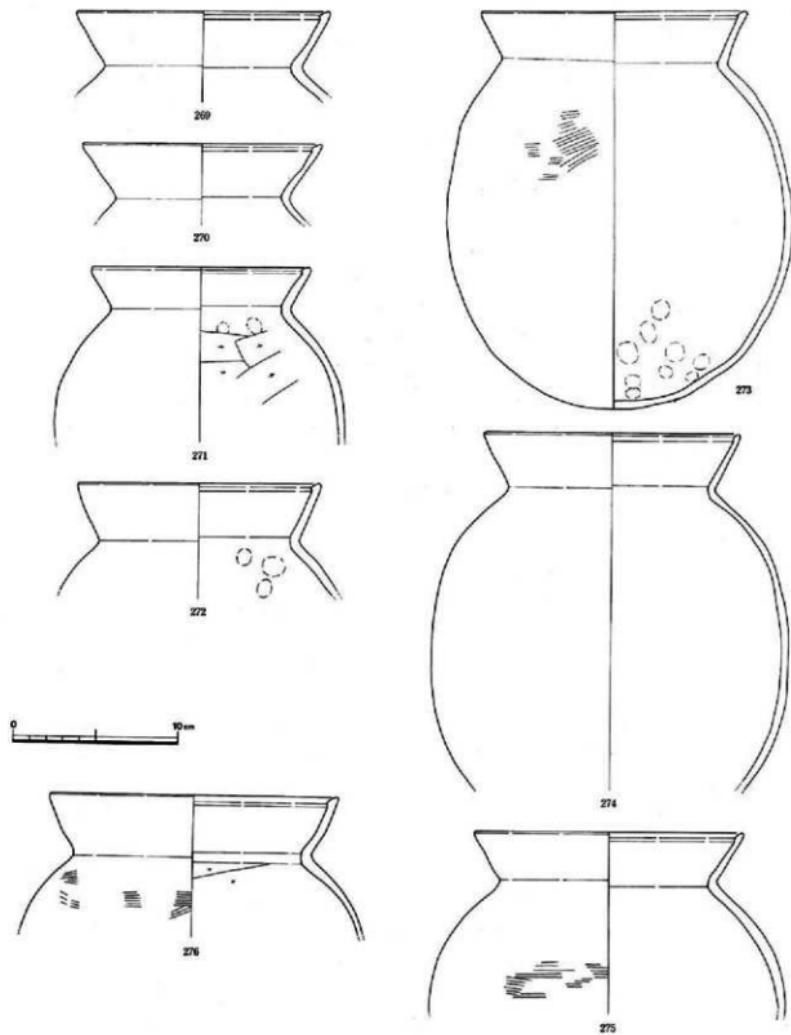
268は、下方へ開き気味の筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚据部に至る高杯坏部である。調整は器面の剥落で内外面とも不明であるが、胎土が赤い赤色土器である。なお、267と胎土が似ており、267と268は同一個体の可能性がある。

36号土坑出土土器（第89図・第90図）

36号土坑からは、甕では、布留甕11点（うち3点は図化不能の口縁部細片）、月影式甕のものと思われる有段口縁甕の口縁部細片2点があり、他に体部片がパンケースにして約1/2箱分（個体識別法で7点ほど）出土している。その他、山陰系の壺2点、小型土器5点があり、器種不明の細片もごく少量ある。

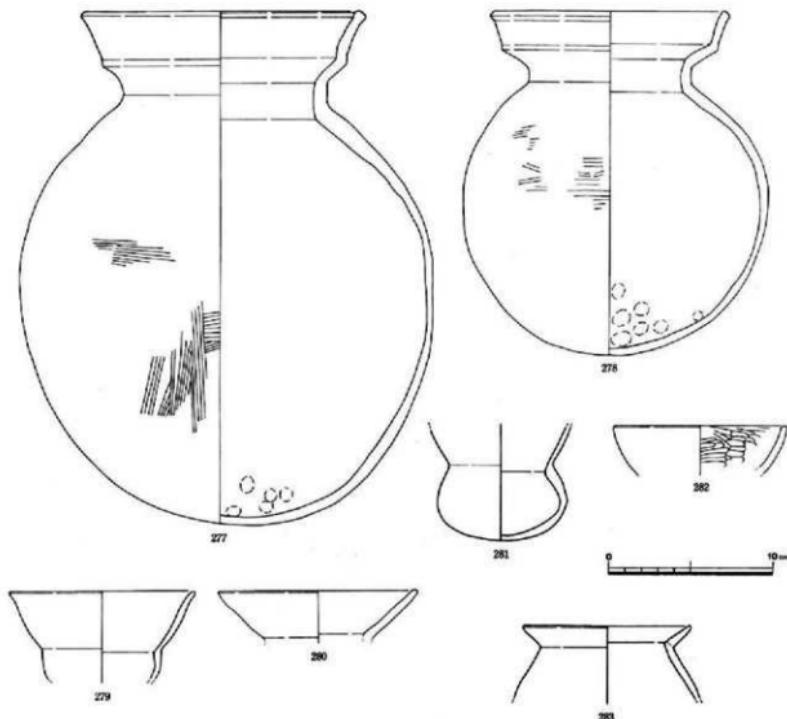
269～276は口縁端部が内側に肥厚する布留甕である。269～275は口縁部が真っすぐ開き、276は口縁部が内湾しながら開く。また、275以外は口縁端部の面が平坦に内傾しているが、275については口縁端部の面が丸みを持っている。調整については、269は、口縁部内面と口縁部から頸部外面が横ナデ、体部内面は器面の剥落で調整不明である。270は内外面とも器面の剥落で調整不明。271は口縁部から頸部外面が横ナデ、体部外面は器面が剥落している。口縁部から頸部の内面は器面が剥落して調整不明、体部内面はヘラ削りされており、肩部内面には指頭痕が見られる。272は内外面とも器面が剥落して調整不明であるが、肩部内面には指頭痕が見られる。273は内外面とも器面の剥落が著しく、ほとんど調整不明であるが、肩部外面にはかすかに横方向のハケ調整の痕跡が見られる。また、底部内面には指頭痕がある。274は内外面ともすべて器面が剥落しており調整不明。275は、内外面とも器面の剥落が著しくほとんど調整不明であるが、肩部外面には横方向のハケ調整の痕跡がかすかに見られる。276は口縁部から頸部の内外面が横ナデされており、頸部下の外面には横方向のハケ調整の痕跡が見られる。体部内面はヘラ削りされている。

277・278は山陰系の壺である。いずれも略完形に復元される。277は器高約30cmのやや大型のものであるのに対し、278は器高約20cm程度のやや小型のものである。277は、口縁端部が内側に肥厚し、面を持つ。口縁部下端外面には稜があるが、明瞭な稜を成していない。調整については、口縁部から体部上半の外面は器面の剥落で調整不明、体部下半外面は器面の剥落が著しいもののハケ調整の痕跡が見られ



第89図 36号土坑出土土器 ($S=1/3$)

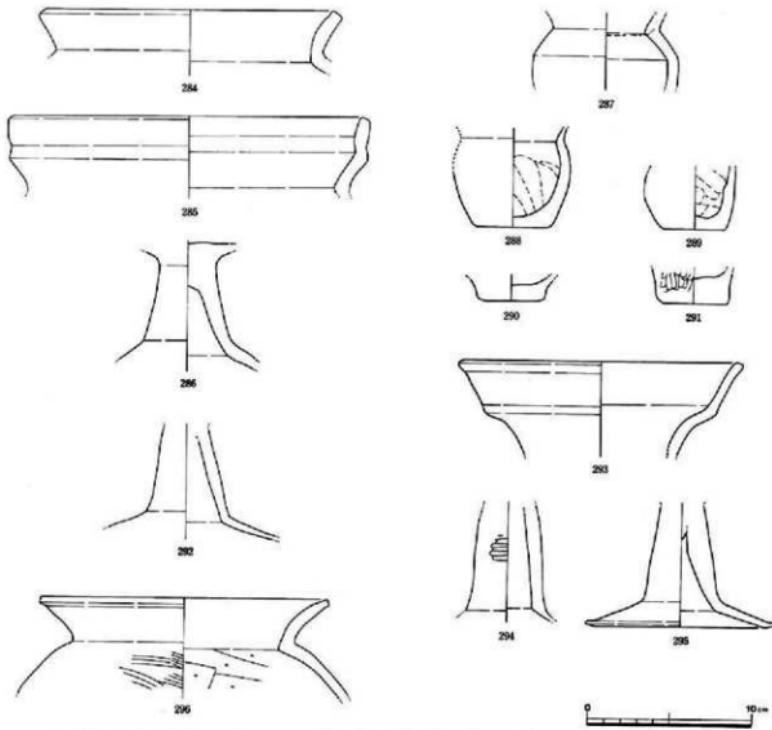
る。内面の調整については、器面の剥落でほとんど不明であるが、底部に指頭痕が見られる。278は、口縁端部が外側にやや肥厚し、面を持つ。口縁端部下端外面の稜は、277と同様、さほど明瞭な稜を成していない。調整については、口縁部から頸部の外面が横ナデされ、体部上半外面は、器面の剥落が著しいが、ハケ調整の痕跡が見られる。体部下半外面は器面の剥落で不明である。内面はすべて器面の剥



第90図 36号土坑出土土器 (S=1/3)

落で不明であるが、底部に指頭痕が認められる。

279～283は壺形の小型土器である。279～281はいわゆる小型丸底壺である。279・280は、頸部の屈曲部分から体部が外方に張らずに底部に至るもので、口縁部は大きく外上方にのびる。調整については、279は、口縁部から体部の外面が横ナデされており、内面は器面の剥落で不明。280は、口縁部外面が横ナデされており、内面は器面の剥落で不明である。283は頸部のくびれが見られるもので、体部はつぶれた球形を呈する。略完形品の状態で出土している。口縁端部は復元できなかったが、口径は体部最大径よりやや大きいものと推測される。調整については内外面ともに器面の剥落で不明である。282は、壺形の小型土器の口縁部と思われるもので、頸部から内湾しながら開くものである。外面は器面が剥落しているが、内面にはヘラ磨きされた痕が見られる。284は、くの字口縁をなす壺形の小型土器の口縁部と思われる。口縁部外面は横ナデされ、頸部の屈曲部分の直下以下の外面は縦方向のナデ調整が施されている。横ナデと縦ナデの切り合いを見ると、体部の縦ナデのち口縁部の横ナデを行なっている。内面については器面の剥落で調整不明である。



第91図 40号土坑(284~291) 53号土坑(292) 57号土坑(293~295) 60号土坑(296) 出土土器(S=1/3)

40号土坑出土土器(第91図284~291)

40号土坑では、甕口縁部片2点、甕体部片パンケース約1/2箱分(個体識別法で7個体ほど)、高杯脚部片4点、壺形の小型土器の破片2点、手づくね土器1点、器種不明の底部片2点がある。

284は、くの字口縁甕の口縁部で、厚ぼったくて短く、外反気味に開く。口縁端部は面を持つ。口縁内部面は器面が剥落して調整不明であるが、口縁部外面は横ナデされている。

285は、複合口縁甕の口縁部で、口縁帶外面の下位が若干凹み、口縁下端外面に不明瞭ながら稜があるようになっている。口縁端部には面を持つ。調整は内外面とも器面の剥落で不明である。

286は高杯の脚部で、下方へ比較的開いた筒状の脚柱部から外方へ屈曲して脚裾部に至っている。調整については内外面ともに器面の剥落で不明である。

287・288は壺形の小型土器。287は破片が小さく、調整も器面の剥落で不明である。288は、底部が平底で、外面は器面の剥落で調整不明、内面は、頸部から体部上位は横ナデ、体部中位から底部は指ナデされて指頭痕が見られ、上から見ると、底部の中心から外方へ反時計回りの方向で指ナデされている。

289は、手づくね土器で、底部は平底を呈する。内面には指ナデによる指頭痕が見られ、上から見ると、底部の中心から外方へ反時計回りの方向で指ナデされている。

53号土坑出土土器（第91図292）

53号土坑からは、布留甕の口縁部細片1点、甕体部片少量（個体識別法で2点ほど）、高杯脚部片1点、器種不明細片ごく少量が出土している。

292は高杯の脚部で、比較的下方へ開き気味の筒状の脚柱部から外方へ屈曲して脚裾部に至る。比較的低脚のものである。調整については内外面とも器面の剥落で不明である。

57号土坑出土土器（第91図292-295）

57号土坑からは、布留甕の口縁部細片1点、山陰系甕の口縁部片1点、高杯脚部2点のほか、器種不明細片が少量出土している。

293は、山陰系甕の口縁部で、口縁端部は面を持ち、若干外方に肥厚する。口縁部下端外面は屈曲している程度で、ほとんど稜は認められない。調整については内外面とも器面の剥落で調整不明である。

294・295は高杯の脚部であり、筒状の脚柱部から外方へ屈曲して脚裾部に至るものである。294の脚柱部はあまり下方に開かず、外面には横方向のヘラ磨きの痕跡が見られる。内面は器面の剥落で調整不明である。295は、脚柱部から脚裾部へ至る部分の屈曲がややなだらかであり、脚裾端部が上に跳ね上がるようになっている。調整については内外面とも器面の剥落で不明である。

60号土坑出土土器（第91図296）

60号土坑では、くの字口縁甕の口縁部片1点と甕体部片少量（個体識別法で約4点）がある。

296は、くの字口縁甕の口縁部で、頸部で強く屈曲後、外反しながら聞く口縁部を持ち、口縁端部は面を持つ。口縁部から頸部の外面は横ナデされており、それより下の外面はハケ調整が施されている。なお、体部のハケ調整のうちに口縁部から頸部の横ナデを行なっている。内面については、口縁部が横ナデされ、頸部の屈曲部分以下ではハケ調整されている。

67号土坑出土土器（第92図297-307）

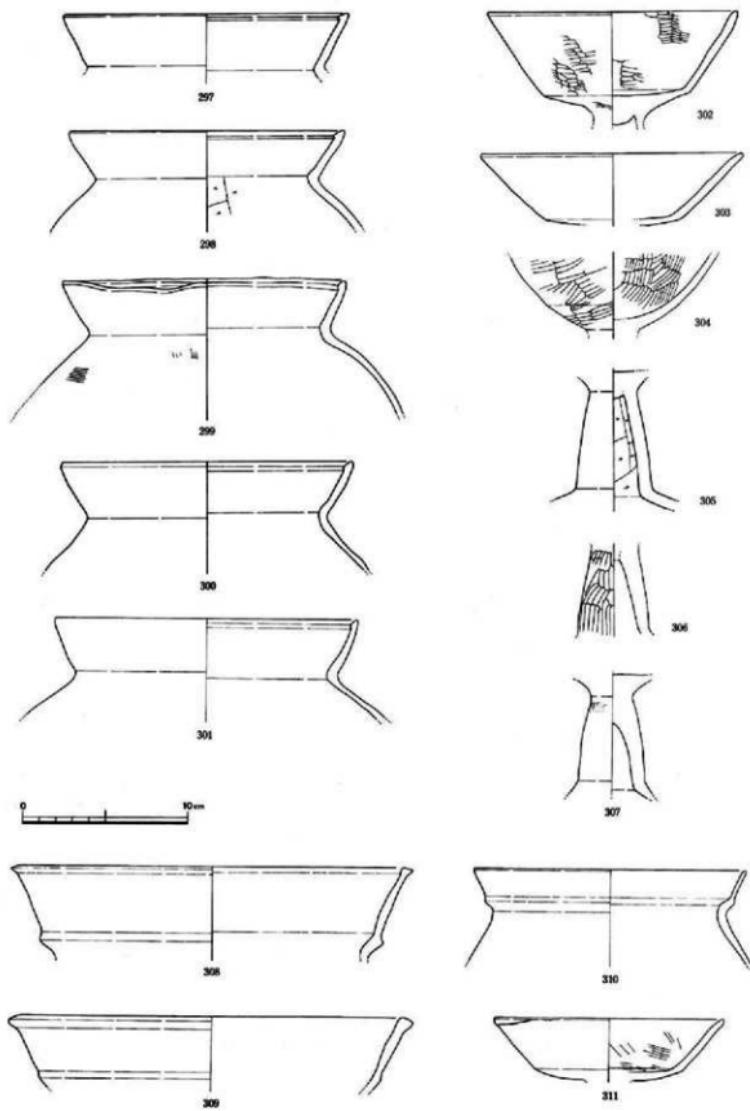
67号土坑では、布留甕の口縁部片11点と甕体部片パンケース約1/2箱分（個体識別法で7点ほど）、高杯坏部3点、高杯脚部3点がある。

297-301は、口縁端部が内側に肥厚している布留甕の口縁部である。いずれも口縁端部の面は平坦で内傾する。297・298は、頸部で屈曲後、口縁部が真っすぐ開いている。297の口縁端部の肥厚は比較的大きい。297・298とも口縁部から頸部の外面と口縁部内面について横ナデされており、298の肩部外面は器面の剥落で調整不明、298の頸部以下の内面はヘラ削りされている。299の口縁部は歪んでいて、頸部の屈曲部分から真っすぐ聞くところもあれば、内湾気味に聞くところもある。口縁部から頸部の外面は横ナデされており、それより下は、器面の剥落が著しいが、ハケ調整された痕跡が見られるところもある。内面は器面の剥落で調整不明である。300・301は、口縁部が頸部の屈曲部分から内湾しながら聞くものである。調整についてはいずれも器面の剥落で調整不明である。

302・303は、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯坏部である。302は比較的深い坏部で、内外面すべてヘラ磨きされている。303は内外面とも器面の剥落で調整不明である。

304は、橢形を呈する坏部であるが、坏底部と坏体部との境に接合痕が見られ、作りは302・303のタイプと同じものと考えられる。内外面すべてヘラ磨きされている。

305-307は、筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至る高杯脚部である。いずれも脚柱部は下方にあまり開かない。305は比較的長めの脚柱部であるが、306は低脚である。また、305・306の坏部との



第92圖 67號土坑（297~307）71號土坑（308~311）出土土器 ($S=1/3$)

接合は円盤充填を行なっているが、307については中実タイプの可能性を考えられる。なお、調整については、305の外面は器面の剥落で調整不明であるが、306・307の脚柱部外面には縱方向のヘラ削りされた痕跡が見られる。また内面については、306・307は不明であるが、305の脚柱部内面はヘラ削りされている。

71号土坑出土土器（第92図308～311）

71号土坑からは、布留甕口縁部細片2点、山陰系甕の口縁部片4点、有段口縁甕の口縁部片2点、甕体部片少量（個体識別法で4点ほど）、高杯坏部1点が出土している他、器種不明細片ごく少量が出土している。また、須恵器甕の体部細片が1点あり、3号竪穴住居跡出土の須恵器甕片（第68図47）と同一個体のものと思われる。

308・309は山陰系甕の口縁部である。口縁端部はいずれも面を持ち、308は内外に肥厚、309は外側のみに肥厚している。口縁部下端については、308は、外面の稜が明瞭に突出しており、内面の段も比較的明瞭である。それに対し309は、外面が稜を持っているというよりも緩やかに屈曲している程度のものであり、内面の段もほとんど認められない。調整については、308の外面は、口縁端部から口縁部下端の稜までが横ナデされており、稜以下のところでは器面の剥落で不明である。また内面も器面の剥落で不明である。309は口縁部内外面とも器面の剥落で不明である。

310は有段口縁甕の口縁部である。口縁帶部分は真っすぐ外傾しており、口縁端部は丸くおさめられている。調整は内外面とも器面の剥落で不明である。法仏式期のものではないかと推測される。

311は平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯坏部である。浅い坏部である割には口径が小さい。内外面とも器面の剥落が著しく調整が分かりにくいが、内面にはかすかにハケ調整された痕跡が見られる。

73号土坑出土土器（第93図312）

73号土坑では、甕体部片ごく少量（個体識別法で2点ほど）と器種不明細片少量があり、また、須恵器甕体部片1点がある。

312は須恵器甕体部片で、外面は平行叩きによる叩き目（H a類）が施され、内面にはスリ消しの痕跡が見られる。

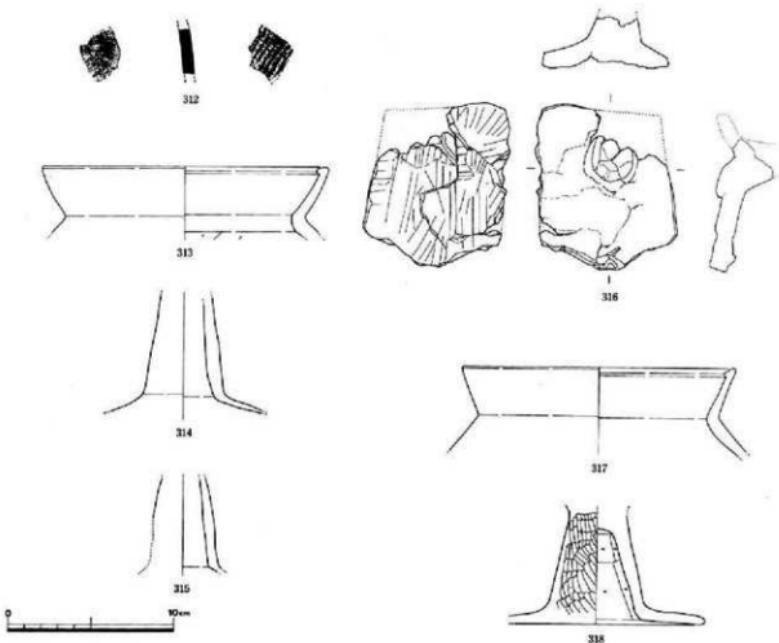
76号土坑出土土器（第93図313～316）

76号土坑からは、甕では、布留甕の口縁部片1点と甕体部片ごく少量（個体識別法で2点ほど）が出土、壺では山陰系壺の口縁部細片1点が出土している。また高杯では脚部2点がある。その他、器種不明のもの（土器とできるものか否かも不明）1点と器種不明の細片ごく少量がある。

313は布留甕の口縁部である。口縁部は内湾しながら開き、口縁端部は内側に肥厚、その肥厚度は大きい。また、口縁端部の面は水平である。調整については、外面は器面の剥落で不明、内面は、口縁部から頸部が横ナデ、頸部の屈曲部分からやや下がったところから下がヘラ削りされている。

314・315は若干下方へ開き気味の筒状の脚柱部から外方へ屈曲して脚部に至る高杯脚部である。両者とも内外面器面の剥落で調整不明である。

316は器種が分からぬものである。断面が山型を呈する板状のものに、棒状のものが付いたものと思われる。棒状のものがついた面を表とすると、裏面には、非常に粗いハケ状具で施された粗いハケ調整が施されているが、激しい凹凸が認められる。表の面には、器肉の胎土と異なる赤みのある胎土の膜



第93図 73号土坑 (312) 76号土坑 (313-316) 83号土坑 (317-318) 出土土器 (S=1/3)

が認められる。また、板状の部分の側面は横方向のヘラナデがされており、表面から板状の部分を見ると、いわばホームベース状の形を呈している。なお、胎土については、通常の土器に見られる砂礫等が見られず、また炭や植物の繊維状のものが含まれておらず、土器と認めるには怪しいものである。

83号土坑出土土器（第93図317・318）

83号土坑では、布留甕の口縁部片1点、甕体部細片少量（個体識別法で3点ほど）、高杯脚部1点があり、その他、細片のため図化できなかったが、高杯の环部で、环底部と环体部との境に稜を持つものの細片1点がある。

317は、布留甕の口縁部で、口縁部は頸部の屈曲部分から真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾している。調整については、口縁部外面で横ナデがされている以外は、器面の剥落で不明である。なお、口縁部外面にはススがやや多量付着している。

318は、下方へ比較的大きく開いた筒状の脚柱部から外方へ屈曲して脚柱部に至る高杯脚部である。脚柱部は比較的太めのもので低脚である。脚柱部からの屈曲はほぼ直角に屈曲しており、脚裾部はほぼ水平にのびて脚裾端部に至る。外面はヘラ磨きされており、脚柱部内面はヘラ削り、脚裾部内面は横ナデされている。

88号土坑出土土器（第94図319～332）

88号土坑からは、甕では、くの字口縁甕5点、有段口縁甕の口縁部細片1点、甕体部片パンケース約1/2箱分（個体識別法で約4点）が出土、その他、高杯坏部2点、脚部5点がある。また、器種不明の細片ごく少量もある。

319～323はくの字口縁の甕である。319は半完形に復元されるもので、口縁部は頸部で屈曲したのち外反しながら開き、口縁端部は丸くおさめてある。口縁部内外面は横ナデされている。頸部の屈曲部分以下の外面はハケ調整されており、そのハケ状具は粗めの原体を用いている。体部内面はヘラ削りされているが、明確に接合痕が見られる。なお、体部中位外面には少量のススが付着している。320は、口縁部が頸部で屈曲したのち真っすぐ開き、口縁端部は丸くおさめられている。内外面とも器面の剥落で調整不明であるが、体部内面には接合痕が認められる。321は、320と同様、口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は丸くおさめられているが、短く厚ぼったい口縁部である。また、口径が胴部最大径とほぼ同じである。調整は、口縁部から頸部の外面および口縁部内面は横ナデされており、体部内外面は器面が剥落して調整不明である。体部内面には接合痕が認められる。322は、口縁部が真っすぐ開いているものであるが、口縁端部は外傾する面を持つ。口縁部内外面はハケ調整されている。323は、322と同様、口縁部が真っすぐ開き、口縁端部に面を持つが、口縁端部の面は水平である。外面はほとんど器面が剥落してしまっているが、頸部の屈曲部分の直下にハケ調整の痕跡が見られる。内面については、口縁部がハケ調整され、頸部の屈曲部分以下ではヘラ削りされている。

324・325は、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯の坏部である。324は口縁部から坏体部の外面が横ナデされ、所々に接合痕が見られる。坏底部は器面の剥落で調整不明。口縁部から底部まではハケ調整後にナデ調整を行なっており、薄くハケ調整された痕跡が残っている。325は、坏底部から坏体部への屈曲が緩やかで、やや楕円形に近い形を呈する。口縁端部は若干外方へ屈曲している。外面は器面が剥落しており調整不明。内面は、器面の剥落が著しいが、所々にヘラ磨きされた痕跡が見られる。いずれも比較的浅めの坏部である。

326～329は、筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至る高杯の脚部である。327を除いては脚柱部の下方への開きはあまりないが、327の脚柱部については比較的下方に開く。また326以外は低脚の脚柱部である。調整については、326の脚柱部外面に縦方向のヘラ磨きが施され、脚柱部内面上位がナデ調整、脚柱部内面下位がヘラ削りされている点を除いては、器面の剥落で不明である。

330は、下方への字状に開く高杯の脚部である。坏部は楕円形を呈するものと思われる。坏部内面にヘラ磨きが施されている以外は器面の剥落で調整不明である。脚部には4箇所穿孔されている。

89号土坑出土土器（第94図331）

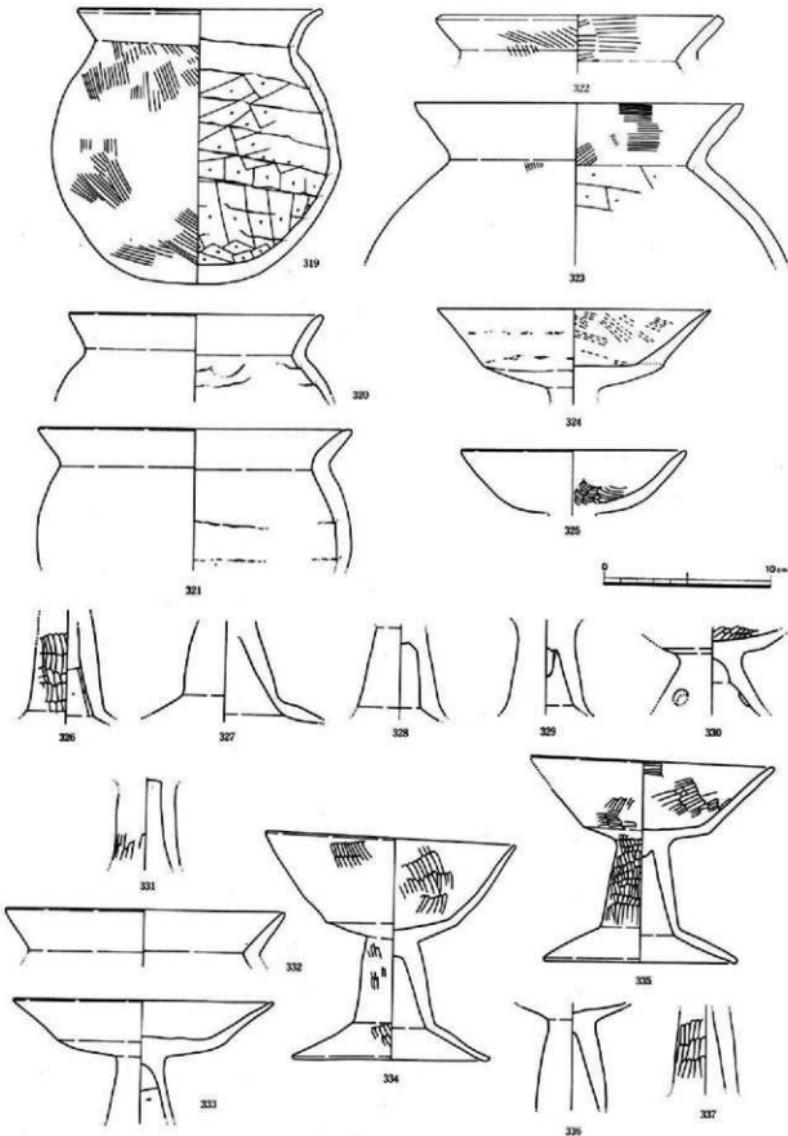
89号土坑からは、高杯の脚柱部1点と器種不明細片少量が出土している。

331は筒状の高杯脚柱部であり、途中で外方に屈曲して脚裾部に至るものと思われる。内外面とも器面の剥落が著しいが、外面に縦方向のヘラ磨きの痕跡が見られる。

90号土坑出土土器（第94図332・333）

90号土坑からは、くの字口縁甕の口縁部片1点、甕体部片少量（個体識別法で4個体ほど）、高杯の坏部片1点の他、器種不明細片ごく少量が出土している。

332はくの字口縁甕の口縁部である。頸部で屈曲後、口縁部は真っすぐ開き、口縁端部は丸くおさめられている。内外面とも器面が剥落していて調整が分からぬが、頸部の屈曲部分の直上あたりの外面



第94图 88号土坑 (319~330) 89号土坑 (331) 90号土坑 (332~333) 99号土坑 (334) 103号土坑 (335~337) 出土土器 (S=1/3)

に少量のススが付着している。

333は、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯の坏部で、非常に深い坏部である。脚部は若干開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方に屈曲して脚裾部に至るものと思われる。脚柱部内面にヘラ削りの痕跡が見られる他は、器面の剥落で調整不明である。

99号土坑出土土器（第94図324）

99号土坑からは、略完形に復元される高杯1点、高杯坏底部細片1点の他、器種不明細片ごく少量が出土している。

334は略完形に復元される高杯である。坏部は、ほぼ平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至るもので、比較的深い坏部である。脚部は、やや下方に開き気味の筒状の脚柱部から途中で外方に屈曲して脚裾部に至るもので、若干低脚気味的印象を受ける。調整については、外面は、器面の剥落が著しいが、口縁部から底部まですべてヘラ磨きされているようである。内面については、坏部はヘラ磨きされており、脚部は器面の剥落で不明である。

103号土坑出土土器（第94図335～337）

103号土坑からは、略完形に復元される高杯1点、高杯脚部片2点の他、器種不明細片ごく少量が出土している。

335は略完形に復元される高杯であり、坏部は、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至るもので、深い坏部である。脚部は、若干下方に開き気味の筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至るもので、脚柱部は比較的細くて若干長めである。脚部内外面は器面の剥落で調整不明であるが、坏部は器面の剥落が著しいが、すべてヘラ磨きされているようである。

336・337は筒状の脚柱部であり、外方に屈曲して脚裾部に至るものと思われる。両者とも脚柱部は下方にあまり開かず、細めの脚柱部である。336は内外面とも器面の剥落で調整不明。337は内面は器面が剥落しているが、外面には縱方向のヘラ磨きが施されている。

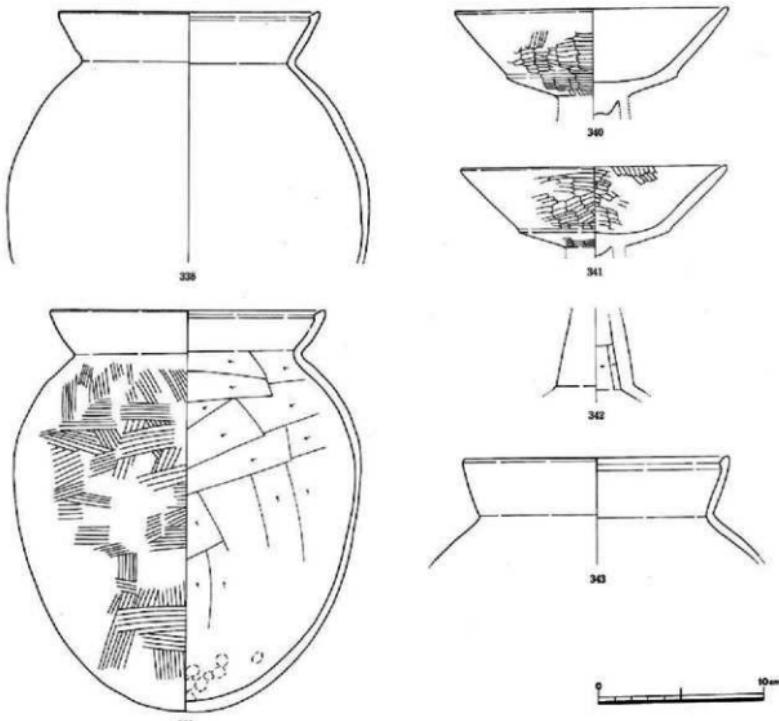
108号土坑出土土器（第95図338～342）

108号土坑からは、甕では、略完形に復元される布留甕1点、布留甕の口縁部から肩部の破片1点、布留甕口縁部細片1点、甕体部片少量（個体識別法で2点ほど）が出土、その他、高杯坏部2点、高杯脚部1点、器種不明細片ごく少量がある。

338は、布留甕の口縁部から肩部で、口縁部は頸部で屈曲したのち真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾している。口縁部外面が横ナデされている以外は、器面の剥落で調整不明である。

339は、略完形に復元される布留甕で、口縁部は頸部で屈曲したのち内湾しながら開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾する。器壁については、体部中位でやや薄くなるが、全体的に見ると厚手の器壁である。口縁部から頸部の外面と口縁部内面は横ナデされており、体部外面はハケ調整、頸部屈曲部分以下の内面はヘラ削りされている。肩部外面には布留甕によく見られる横方向のハケ調整痕があるが、規則性はない。底部内面には指頭痕が見られる。

340・341は、平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る高杯坏部で、340は比較的深い坏部であるのに対し、341は比較的浅めの坏部である。調整については、340は、内面が器面の剥落で不明であるが、外面は口縁部から坏底部まですべてヘラ磨きされている。341は坏部すべてがヘラ磨きされてい



第95図 108号土坑（338～342）109号土坑（343）出土土器（S=1/3）

る。

342は、筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至る高杯脚部で、脚柱部は比較的下方へ開く。調整は、外面が器面の剥落で不明であるが、脚柱部内面下位がヘラ削りされている。

109号土坑出土土器（第95図343）

109号土坑では、布留甕の口縁部片1点、瘦体部片ごく少量、器種不明細片ごく少量がある。

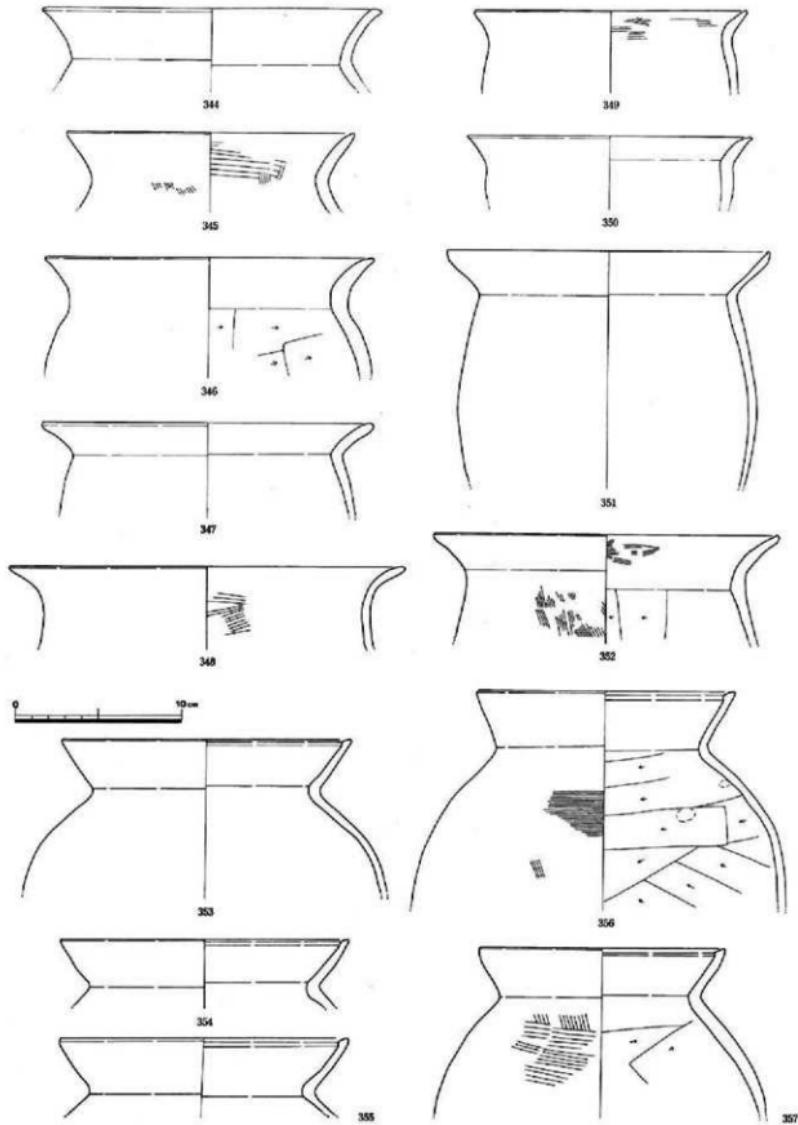
343は、布留甕の口縁部で、頸部で屈曲したのち口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内側傾する。内外面ともに器面の剥落で調整不明である。

遺構外出土土器（第96図～第98図）

ここでは、遺物包含層および古代・中世の遺構から出土した古墳時代の土器について見ていく。

344～352はくの字口縁の甕である。

344は、頸部で屈曲したのち口縁部が外反しながら開き、口縁端部は面を持つ。調整は内外面とも器面の剥落で不明。



第96図 遺構外出土土器 (S=1/3)

345・346は、頸部で緩やかに外反するように開き、口縁部は外反気味にのびている。口縁端部については先細り気味である。調整については、345は、器面の剥落が著しいが、頸部外面と口縁部内面にハケ調整痕が見られ、346は、口縁部から頸部の内外面が横ナデ、体部外面は器面が剥落しているが、体部内面はヘラ削りされている。

347～352は口径が頸部最大径よりも大きいものである。347は、頸部で屈曲したのち口縁部が若干外反気味に開き、口縁端部は丸くおさめられる。体部内外面は器面の剥落で調整不明であるが、口縁部外面は横ナデされている。348は頸部で外反するように開いて口縁部に至るもので、口縁端部は丸くおさめられている。内外面とも器面の剥落が著しいが、頸部内面にはハケ調整された痕跡が残っている。349・350は、頸部で緩やかに外反するように開いて口縁部に至っているが、口縁部が比較的短く、口縁端部は先細り気味である。両者とも器面の剥落が著しいが、349の口縁部から頸部の内面にはハケ調整された痕跡が残っており、350の体部内面は横ナデされている。なお、349の頸部内面には、焦げではないかと思われる炭化物が付着している。351・352は、頸部で屈曲したのち、351は口縁部が真っすぐ開き、352は口縁部が外反するように開いているが、両者とも口縁端部がつまみ上げられたような形を呈している。調整については、351は内外面とも器面の剥落で不明、352については、口縁部から頸部の外面が横ナデ、体部がハケ調整されており、頸部外面の屈曲部分直下のあたりは、ハケ調整されたのちに横ナデされている。内面は、口縁部がハケ調整されており、頸部の屈曲部分以下ではヘラ削りされている。なお、352は比較的重厚感がある。

353～357は布留甕である。

353は、頸部で屈曲したのち口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾する。内外面とも器面の剥落で調整不明である。

354・355は、頸部で屈曲したのち口縁部が内湾しながら開き、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦で内傾する。354は内外面とも器面の剥落で調整不明、355は、口縁部内面は器面の剥落で調整不明であるが、口縁部から頸部の外面は横ナデされている。

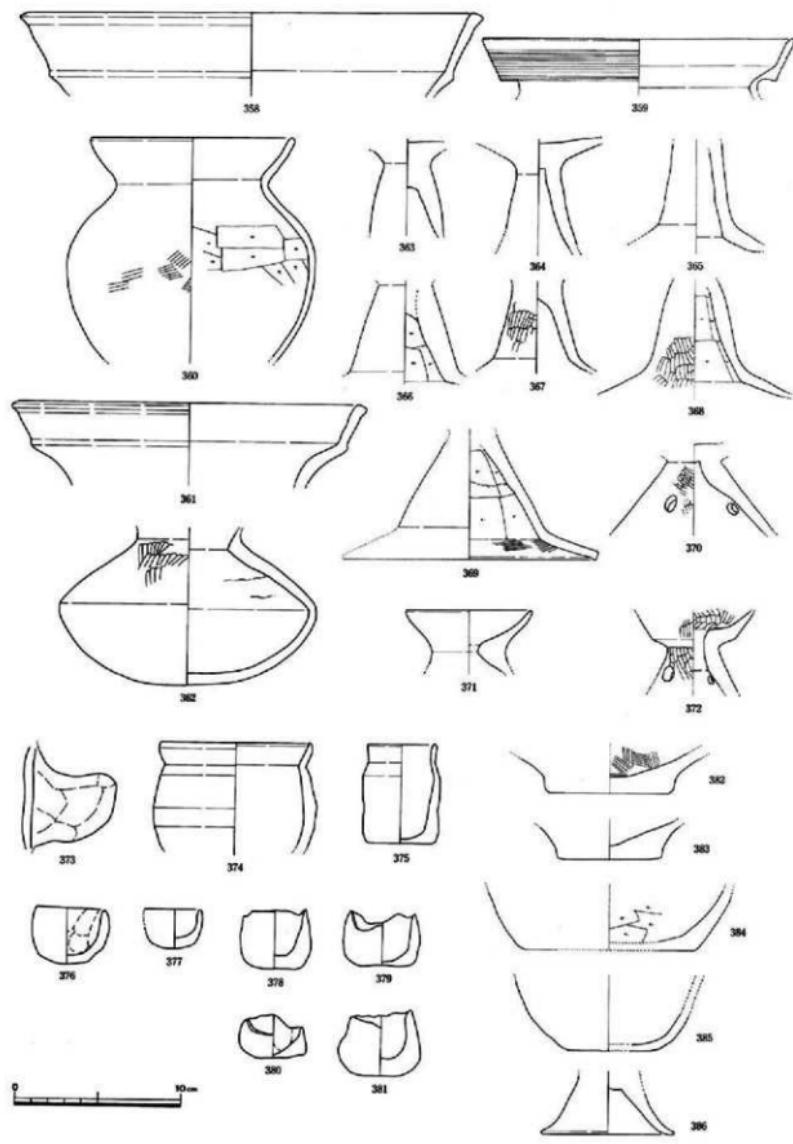
356は、頸部で屈曲したのち口縁部が真っすぐ開き、口縁端部は内側に肥厚しているが、口縁端部の肥厚度が比較的大きく、端部の面は丸みを持って内傾している。外面は、摩滅が著しいが、口縁部から頸部が横ナデされており、肩部には横方向のハケ調整痕が見られる。なお、そのハケ調整で用いられたハケ状具は非常に細かい原体である。内面については、口縁部が横ナデされ、頸部の屈曲部分以下はヘラ削りされているが、肩部に指頭痕が見られる。

357は、頸部で屈曲したのち若干内湾ぎみに開く口縁部を持ち、口縁端部は内側に肥厚、端部の面は平坦に内傾しているが、全体的に器壁が厚手である。口縁部から頸部の外面が横ナデ、体部外面はハケ調整され、肩部外面には横方向のハケ調整痕が見られる。内面は、口縁部から頸部が器面の剥落で調整不明であるが、体部はヘラ削りされている。

358は山陰系甕の口縁部である。口縁部下端外面の稜はやや不明瞭で大きくななく、口縁部下端内面段も不明瞭であり、くの字口縁状に近いものといえる。口縁端部は面を持って、外側に肥厚する。内外面ともに器面が剥落しており調整不明である。

359是有段口縁甕の口縁部である。口縁帶には6条の擬回線があり、頸部外面は横ナデされている。内面は器面の剥落で調整不明である。口縁端部は丸くおさめられていてあまり発達していないようであり、また頸部のくびれがやや強い印象を受ける。法式期のものに位置付けられると推測される。

360は、くの字口縁の小甕とも考えられたが、肩部外面と体部下位外面に、赤色土器に見られる赤い胎土の膜が付着しており、煮炊用ではなく、供獻用の土器と思われ、くの字口縁を持つ甕とした。口縁



第97図 遺構外出土土器 (S=1/3)

部外面は横ナデ、体部外面は、器面の剥落が著しいが、所々にハケ調整の痕跡が見られる。内面は、器面の剥落が著しいが、肩部より下がヘラ削りされ、それより上はナデ調整されているようである。

361は山陰系壺の口縁部である。口縁部下端にはやや不明瞭でさほど大きくはないが稜があり、口縁端部は面を持って、外側に肥厚する。口縁部から頸部は内外面とも横ナデされている。

362は算盤玉状の形を呈する壺の体部で、法仏・月影式期に見られる、長い筒状の口縁部が付いた細長類壺形土器と思われる。体部下半外面は器面の剥落で調整不明であるが、体部上半外面にはヘラ磨きの痕跡が見られる。体部内面については、器面の剥落が著しく、ほとんど調整は分からぬが、体部上半に指紋状の痕跡が見られるところがあり、おそらく体部上半は指ナデされたものと思われる。

363～368は、下方に開いた筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至る高杯脚部である。363～365は脚柱部の下方への開きが比較的小さいのに対し、366～368は比較的大きい。また366～368は比較的低脚である。調整については、366の脚柱部内面がヘラ削り、367の脚柱部外面がヘラ磨き、368の脚柱部外面がヘラ磨きで脚柱部内面がヘラ削りされている他は、器面の剥落で調整不明である。

369はハの字状に下方へ開いた脚柱部を持ち、途中で外方に開いて脚裾部に至る高杯脚部である。外面はすべて器面の剥落で調整不明。内面は、脚柱部がヘラ削りされ、脚裾部は器面の剥落が著しいがハケ調整された痕跡が見られる。

370は、ハの字状に開く高杯脚部で、3箇所に穿孔されている。内面は器面が剥落しているが、外面にはヘラ磨きされた痕跡が見られる。

371・372は器台の受部である。371は、椀状を呈する受部で口縁端部は丸くおさめてある。調整は内外面とも器面の剥落で不明である。372は、途中で段をなす受部に、ハの字状に下方へ開く脚部が付くものである。受部は、体部内外面ともヘラ磨きされており、脚部との付け根のくびれの部分から段をなすところまでの外面は、器面が剥落しているが、一部に横方向のヘラ磨きがされた痕跡が見られる。脚部は、4箇所穿孔されており、内面は器面の剥落で調整不明であるが、外面はヘラ磨きされている。

387～407は須恵器である。

387～394は坏蓋である。

387・388は、天井部が平坦に近い形を呈し、稜から下の口縁部が器高の2/3ほどを占める。口縁端部については、388は不明であるが、387は段を持たずに平坦な面をなしている。

389・390は、天井部は丸く、天井部と口縁部との境の稜ははっきりと突出する。389の天井部外面にはカキ目が施されている。口縁端部は、389が不明、390の端部内面にははっきりと段が見られる。

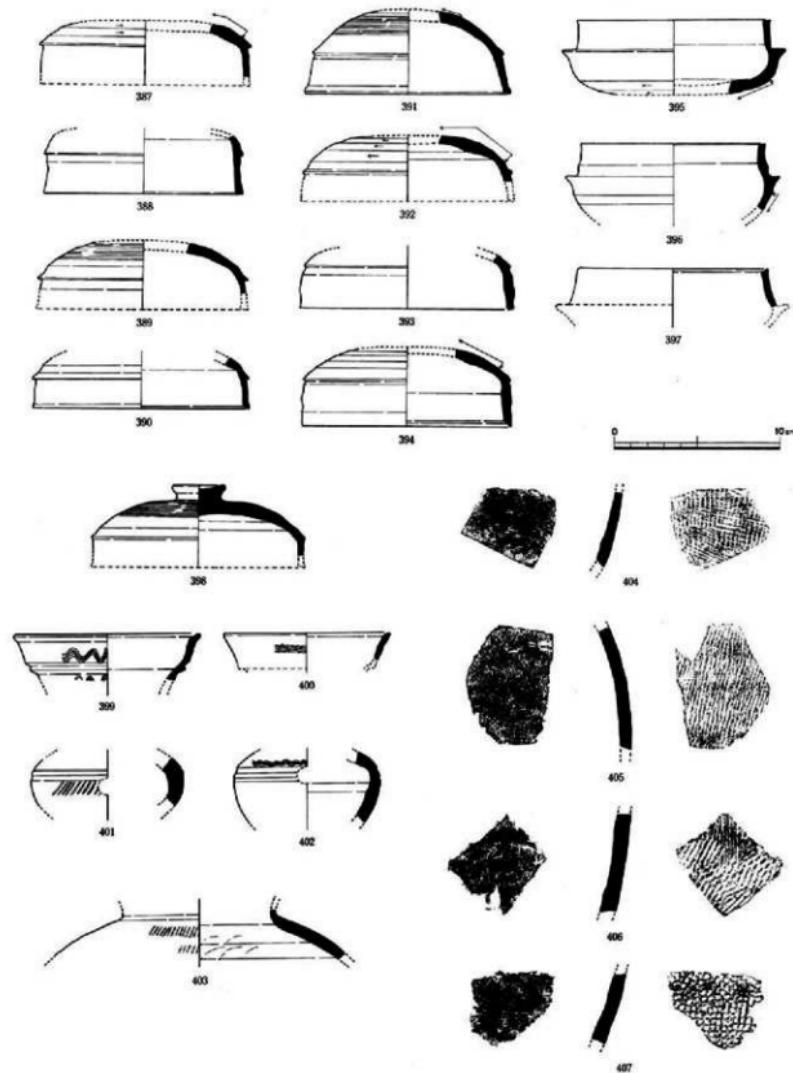
391は、天井部が丸く膨らみ、かつ高い。天井部外面にはカキ目が施されている。天井部と口縁部との境の稜は小さく、稜の直下には回線が施されている。口縁端部は外反しており、端部の内面にははっきりと段が見られる。

392は、天井部が丸く膨らみ、天井部と口縁部との境の稜ははっきりと突出しているが、天井部からやや下がった位置に稜が付いている。天井部外面の回転ヘラ削りは、稜から5mmほど上がったところからされており、回転ヘラ削りの施された範囲は広い。

393・394は、天井部と口縁部との境の稜が小さく、稜が突出するというよりも、稜の直下に回線を施すことで稜ができるというものである。口縁端部は、393は平坦な面を持ち、394は端部内面にははっきりとした段を持つ。

395～397は坏身である。

395は、平坦な底部を持ち、全体的に見ると、比較的平坦な器形を呈している印象を受ける。受部上面は平坦かつ水平な面で、口縁端部の面は中央が小さく凹んでいる。受部の先端から約2cmほど下がっ



第98圖 遺構外出土土器 (S=1/3)

たところから下の底部外面には回転ヘラ削りが施されている。

396は、底部が丸く膨らみ器高の高いもの。口縁端部の面は内傾し、不明瞭ながら小さな段を持つ。

397は、立ち上がりの部分のみであるため、全体については不明であるが、口縁端部の面は内傾し、不明瞭ではあるが、小さな段を持っている。

398は、鋲のついた蓋で、有蓋高杯の蓋である。天井部と口縁部との境の稜の先端から約2cmほど上がったところから上の天井部外面にはカキ目が施されている。天井部と口縁部との境の稜は、やや不明瞭ではあるが、小さく突出している。

399・400は、の口縁部である。399は、口縁部下端に1条の凹線があり、その凹線の下に断面三角形の稜ができているようになっている。口縁端部は外方へ小さく屈曲、口縁端部内面には段を持つ。口縁部下端の凹線から口唇部の間には、5条1組となって波状文が入っている。400は、口縁端部が不明瞭ではあるが、外方に若干屈曲し、口縁端部内面には小さな段が見られる。また、口縁部外面には、1組の线条は不明であるが、上下の振幅が小さい波状文が施されている。

401・402は、の体部である。401は、胴部最大径のところからやや上がったところに1条の沈線が入れられ、その下に右上から左下へと斜めに刻まれた刺突文が見られる。402は、胴部最大径が胴部の上位に上がり、肩が張ったような形を呈しており、その胴部最大径のところには2条の凹線が入れられ、その直上には、4条1組の振幅が小さく細かい波状文が施されている。

403は甕の肩部である。外面には、摩滅が著しいため不明瞭にしか残っていないが、平行叩きの痕跡がある。内面には当て具の痕跡がかすかに見られるが、横方向のスリ消しによって概ね消されている。

404～407は甕の体部である。404～406の外面には平行叩きの痕跡があり、404・405は細め、406は太めの叩き文様である（いずれもH e類）。なお、405には、叩きののち、その上をナデたところが見られる。407の外面には粗い格子叩きの痕跡が見られる。404～407の内面については、すべて当て具の痕跡はなく、スリ消しれている。

註

- (1) 「陶邑産須恵器」としているが、基本的には「他地域産須恵器」としたほうが正しいといえる。しかし、当該期に須恵器生産が行なわれていた地域は限られており、今回の調査で出土した当該期の須恵器の胎土を見ると、その限られたもののうち陶邑産須恵器とほぼ間違いないという点から「陶邑産須恵器」と記述した。なお今回の調査で出土した当該期の須恵器の胎土を見ると「A1：サラサラ感があって小石等の混じりなし」「A2：サラサラ感があってツルツルの白濁色の小石混じり」「B：ややサラ感があるがサラ感少なく、粘質感もある。白色砂少量含む」「C：A2に近いがややサラ感に欠ける。A2とBとの中间」の4つの胎土が見られる。
- (2) 須恵器の平行叩きと同心円文の分類については、花塚信雄氏の研究（『叩き目文の原体同定』『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会1985）における分類を引用した。なお、本書163ページにその平行叩きと同心円文についての模式分類図が掲載されているので、それを参照していただきたい。

<引用・参考文献>

田嶋明人「N考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡I』（石川県立埋蔵文化財センター 1986）

第2節 古代の遺物

第1項 概況

第2節では、古代に位置付けられる遺物のうち、土器のみを取り扱うが、他の特殊土製品などの遺物に関しては、節を改めて、章の最後でまとめて述べることとする。

古代の遺構、包含層から出土する土器は、遺物箱（内寸640×370×145cm）での換算で、40箱程度存在し、その内訳は須恵器で8割半程度、土師器で1割、その他の施釉陶器や須恵質の特殊品で5%未満である。発掘調査区域が4000m²以上あって、掘立柱建物跡が密集するにしては、遺物出土量は少ないと見え、やはり、土器を大量廃棄する溝や土坑の検出が少なかったことに要因があるようである。つまり、土器廃棄場としての遺構があたらなければ、遺物量は少ない訳で、遺跡の性格をよく表している。

遺構の種類別での出土量は、掘立柱建物跡の柱穴や建物帰属ができない柱穴ピットから7.7%、土坑から12.9%で、残りは全て遺物包含層からである。包含層は掘立柱建物跡の密集が顕著な東側区域に多く、西側区域は極めて希薄で、土坑も主に西側区域で検出される。

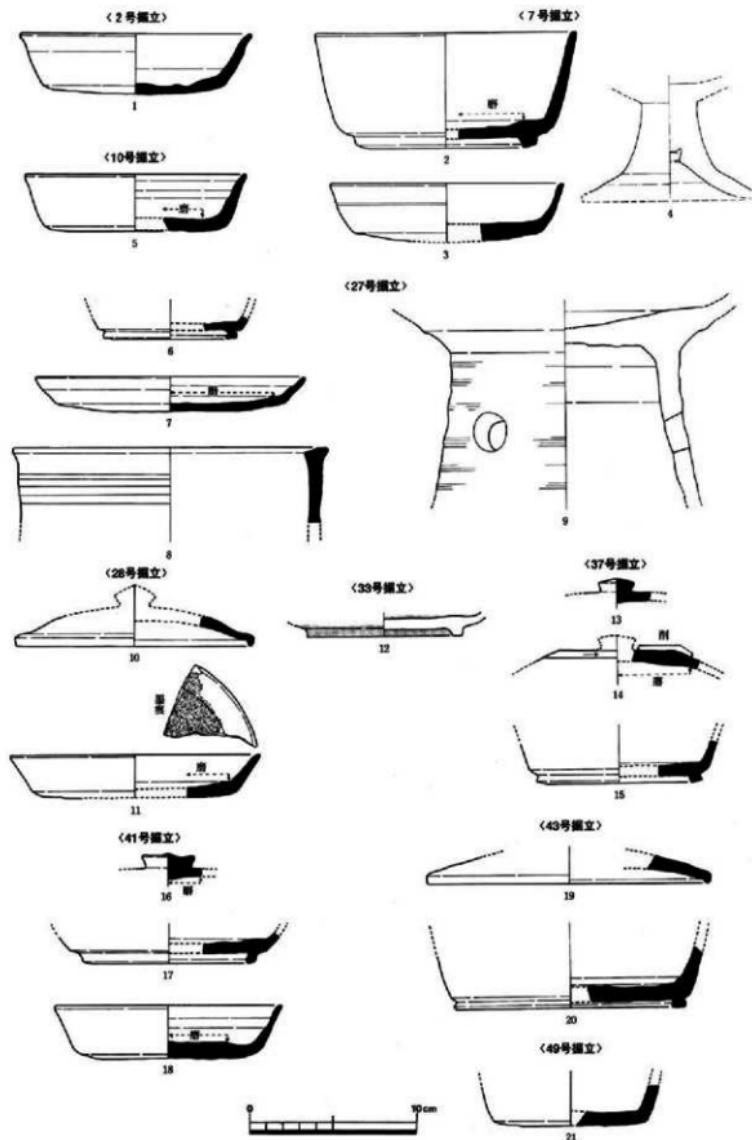
土器は、6世紀末～7世紀後半頃の須恵器が確認されるものの、50点未満の少量で、当区域内に建物が存在していたような状況は想定しにくい。7世紀後半で出土量が増えるため、この時期から建物が存在していたとも考えられるが、遺構に伴って確実に出土するわけではなく、遺跡内の隣接区域にこの時期の土器を定量出土する箇所があることを考えれば、そのような区域からの廃棄か、関連する場所として位置付けられよう。

当地に遺構が確実に存在すると思われるは、8世紀初頭、北陸古代土器編年でのⅡ3期（田嶋明人氏の提示する編年輪で、以下で述べる時期比定もこの編年案に則っている）からと言え、当期に位置付けられる土坑や掘立柱建物跡が少ないながらも存在する。中心となる時期は、8世紀中頃から9世紀前半まで（Ⅳ期～V期）で、特にⅣ期に位置付けられる土器が多く、全体出土量の9割はこの時期に位置付けられる。掘立柱建物跡や土坑もほとんどがこの時期に位置付けられるものである。9世紀後半以降（VI期以降）になると、出土量は再び減少し、10世紀中頃まで（～VII期）100個体程度の出土があるが、全体土器量の5%未満であり、当調査区域内での遺構分布はなくなる。ただ、この時期に位置付けられる近江系縁釉陶器が3点ほど出ており、遺跡自体が衰退するというよりも、当遺跡地内で居住区域を変えて行ったものと考えられ、再び12世紀に移動していく。

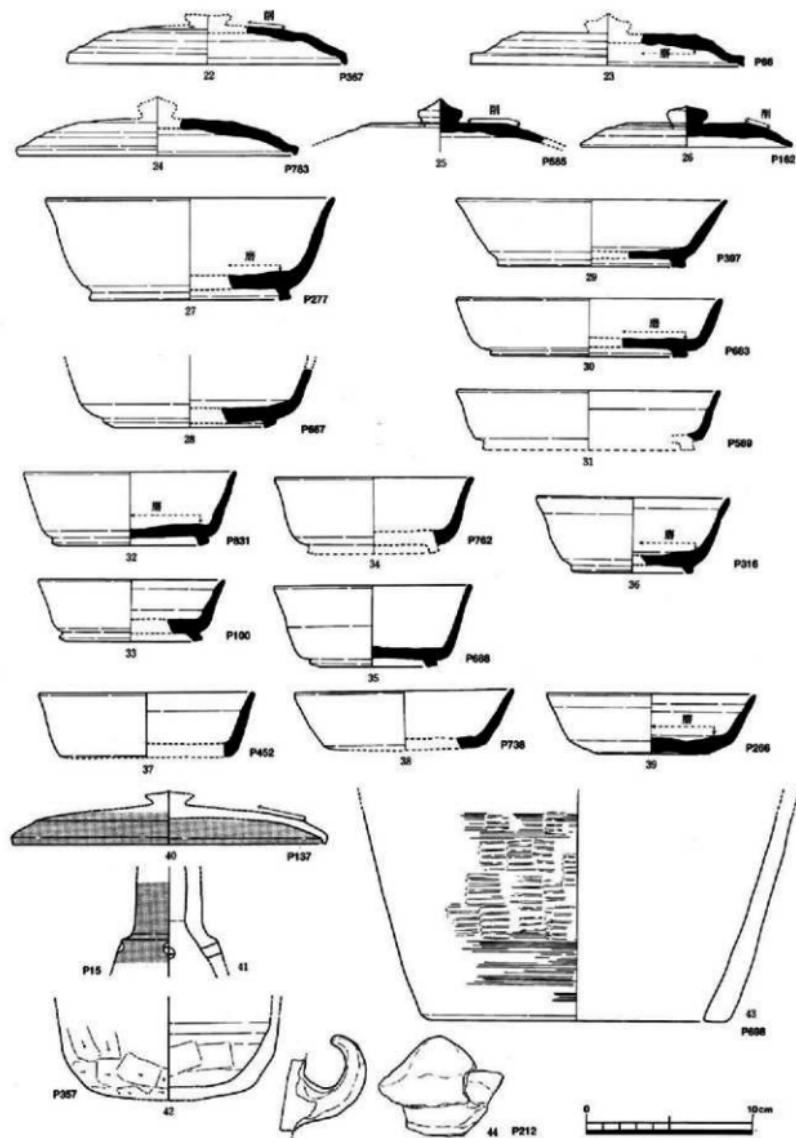
このような、居住城であるから、当然、生活用具である土器が主体を占めると予想するが、生活に密着する煮炊き行為に伴う煮炊具の出土は少なく、全体の3.5%の個体数しか確認できていない。居住城でも竪穴住居主体の遺跡とは明らかに異なる量比であり、住居内に煮炊き施設をもつ竪穴住居と戸外に煮炊き施設が存在する可能性を持つ掘立柱建物跡とでは異なる使用の状態であったとの異なる土器廃棄行為が行われていたことを示唆するかのようだ、興味深い。出土土器の主体は食膳具で、須恵器食膳具が85%、土師器食膳具が2.7%と、ほとんどを占めている。この量比は、土器が一括廃棄されるような大溝や大型廃棄土坑に類似するものであり、特殊な遺構や遺跡でなくとも、竪穴住居を伴わない集落遺跡であれば、当該時期には一般的に見られる状況ではなかったかと考える。ただ、円面鏡が3個体出土することや猿投産縁釉陶器の中でも特に優品とされている浮き彫り格子文を把手にもった手付き瓶の存在など当遺跡は一般村落レベルとは言えないものであり、当遺跡自体は格上の遺跡に位置付けられる。

第2項 各遺構の土器様相

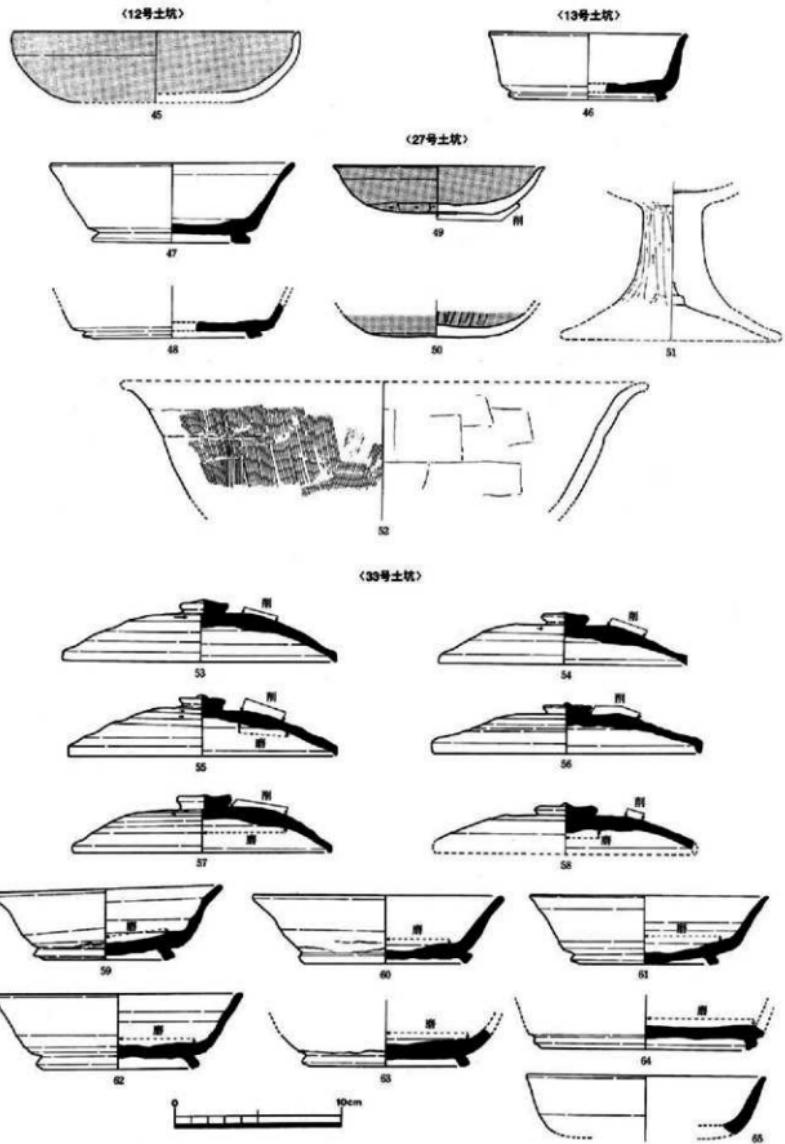
1. 掘立柱建物跡及び柱穴ピット



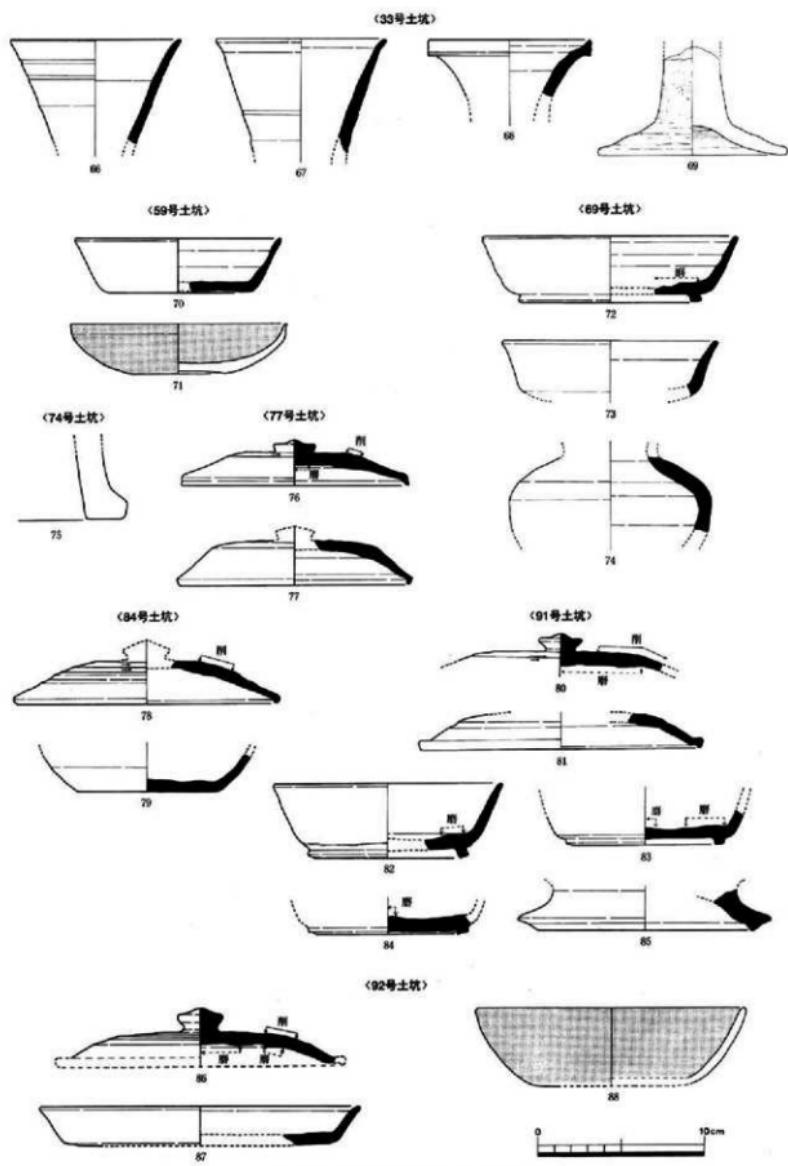
第99図 墳立柱建物跡柱穴出土土器 (S=1/3)



第100図 ピット出土土器 (S=1/3)

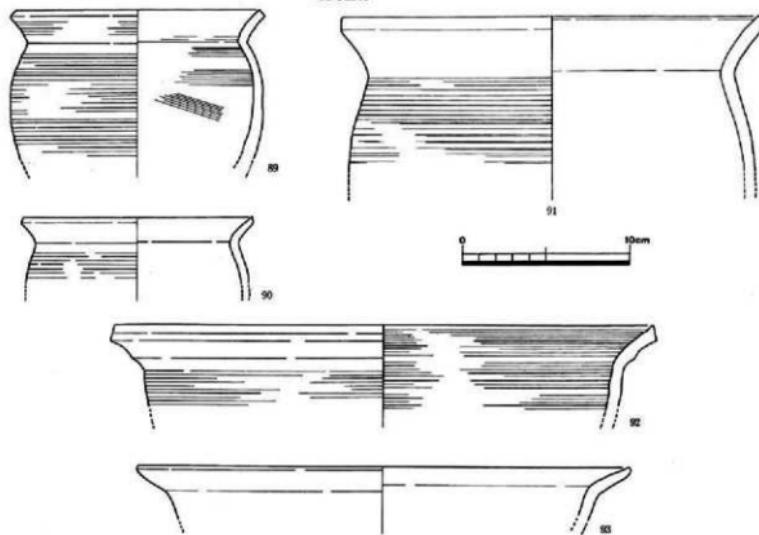


第101图 土坑出土土器 (1) ($S=1/3$)

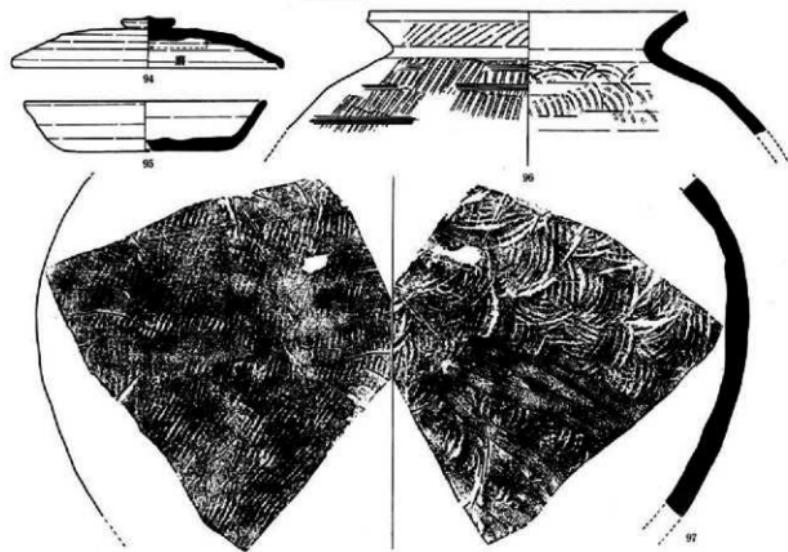


第102図 土坑出土土器（2）(S=1/3)

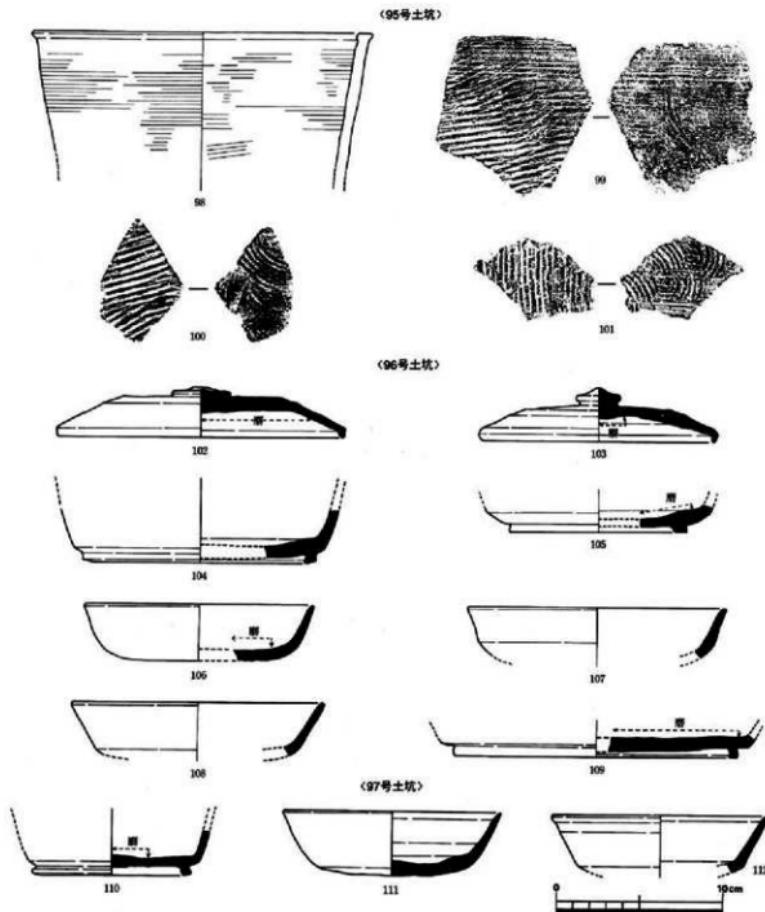
《92号土坑》



《95号土坑》



第103图 土坑出土土器 (3) ($S=1/3$)

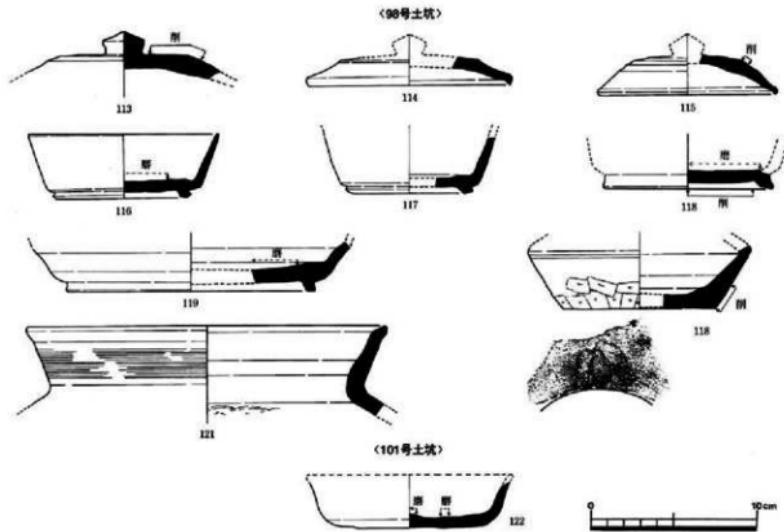


第104図 土坑出土土器 (4) (1/3)

掘立柱建物跡の柱穴と建物の縁部ができない柱穴ピットから出土する土器は、個体識別数としては、254個体あり、そのうち食膳具器種が86%を占める。比較的、土師器食膳具の割合が高く、煮炊具の率も柱穴出土としては多い傾向にある。また、須恵器貯蔵具率が低いことも特徴と言える。

時期はⅢ期～Ⅳ₂古期が4割強、Ⅳ₂新期～V₂期が5割強で、Ⅱ₃期～Ⅲ期は2%程度の出土量しかなく、Ⅵ₁期以降は確認できていない。建物の存続時期と中心的な時期を如実に物語る。

土器の出方としては、柱の抜き取り穴に流れ込んだり、投棄されたものが大半で、意図的に埋納的性格をもって埋められたものは少ない。残存率1/3以上を目安として列挙すれば、2号掘立柱建物跡出土の1、41号掘立柱建物跡出土の17、不明ピット出土の26・34・38の5個体で、いずれも須恵器環B身・



第104図 土坑出土土器 (4) (1/3)

| 土坑番号 | 時 期 | 須恵土 | 土師食 | 須恵貯 | 土師貯 |
|-------|----------------------------------|-----|-----|-----|-----|
| 27号土坑 | Ⅲ期 | 4 | 2 | 0 | 1 |
| 33号土坑 | Ⅱ・Ⅲ | 33 | 11 | 5 | 0 |
| 59号土坑 | Ⅳ ₁ ・Ⅳ ₂ 古 | 4 | 1 | 0 | 0 |
| 69号土坑 | Ⅲ・Ⅳ ₁ | 14 | 2 | 4 | 1 |
| 74号土坑 | Ⅳ ₁ ・Ⅴ ₁ | 0 | 1 | 0 | 11 |
| 75号土坑 | Ⅴ ₁ 期 | 3 | 2 | 1 | 5 |
| 77号土坑 | Ⅴ ₁ ・Ⅴ ₂ 古 | 7 | 5 | 1 | 5 |
| 84号土坑 | Ⅴ ₂ ・Ⅴ ₂ | 9 | 5 | 2 | 0 |
| 91号土坑 | Ⅳ ₁ ・Ⅳ ₂ 古 | 62 | 0 | 5 | 0 |
| 92号土坑 | Ⅳ ₁ ・Ⅳ ₂ 古 | 21 | 4 | 1 | 25 |
| 95号土坑 | Ⅲ・Ⅳ ₁ | 9 | 5 | 2 | 23 |
| 96号土坑 | Ⅲ・Ⅳ ₁ | 17 | 0 | 2 | 7 |
| 97号土坑 | Ⅳ ₂ 期 | 11 | 0 | 1 | 0 |
| 98号土坑 | Ⅴ ₂ ・Ⅴ ₁ | 78 | 0 | 10 | 0 |

第4表 主な土坑の時期と土器種別構成(数値は個体測定数)

| 土器種\遺構種 | 遺立・ピット | 土 坑 | 遺物包含層 | 計 |
|---------|------------|------------|-------------|-------------|
| 氣泡器食器具 | 197 (77.6) | 302 (70.9) | 2320 (88.2) | 2819 (85.1) |
| 土器器食器具 | 21 (8.3) | 38 (8.9) | 30 (1.1) | 89 (2.7) |
| 須恵器貯藏具 | 10 (3.9) | 35 (8.2) | 243 (9.2) | 288 (8.7) |
| 土器器蓋炊具 | 26 (10.2) | 51 (12.0) | 38 (1.4) | 115 (3.5) |
| 計 | 254 | 426 | 2631 | 3311 |

第5表 各遺構の土器種別構成(提示数値は個体測定数、括弧は種別構成率)

| 時期\遺構種 | 遺立・ピット | 土 坑 | 遺物包含層 | 計 |
|------------------------------------|------------|------------|-------------|-------------|
| Ⅲ期・Ⅳ期 | 4 (2.0) | 49 (15.7) | 50 (2.2) | 103 (3.6) |
| Ⅲ期・Ⅴ ₂ 古期 | 83 (41.9) | 166 (53.4) | 1071 (46.1) | 1320 (46.6) |
| Ⅳ ₂ 新期・Ⅴ ₂ 期 | 111 (56.1) | 96 (30.9) | 1096 (47.2) | 1303 (46.0) |
| Ⅴ ₁ 期・Ⅴ ₂ 期 | 0 | 0 | 106 (4.5) | 106 (3.7) |
| 計 | 198 | 311 | 2323 | 2832 |

第6表 各遺構の時期別構成
(提示数値は時期別可能な個体数、括弧は時期構成率)

坏Aに限られる。柱の抜き取り穴への埋納であり、どのような性格をもっていたものか興味深い。

2. 土坑

古代に位置付けられる土坑は20基程度あるが、土器を多く出土する土坑は少なく、土器出土量が20個体に満たないものが半数以上を占め、これらは上器廃棄土坑的な性格をもつものではない。廃棄土坑と言えるのは、33・91・92・95・98号土坑の5基で、器種に偏りはあるが、50個体以上の土器が廃棄されている。この器種の偏りであるが、土坑別の土器種構成表に示したように、少量の貯蔵具と8~9割の食膳具器種で構成される土師器煮炊具のほとんど入らない土坑（33・91・98号土坑）と煮炊具が5割以上の高率を占める土坑（74・92・95号土坑）とがあり、かなり性格がはっきりしている。後者は生活用具として使用した土器群の廃棄と理解されるが、前者は祭祀や儀礼行為に伴う土器群の一括廃棄的様相もあると考えており、特に33号土坑はそのような性格の土坑であると考えられる。また、掘り込みの深い長方形土坑で、46と48の食膳具の完形に近いものが出土する27号土坑については、墓坑としての性格を有する可能性がある。46の須恵器坏Bは底面摩耗痕をもたず、49の放射状暗文をもつ赤彩焼が出土していることも特殊であり、副葬品的な性格のものと考えられる。土坑は、掘立柱建物跡にどのように伴うかははっきりと掴めていないが、建て替えなどに伴って、生活用具を廃棄する性格を有する土坑が半数を占めているようで、これは全体での土器種別構成での、須恵器食膳具71%、土師器食膳具9%、須恵器貯蔵具8%、土師器煮炊具12%の土師器煮炊具割合の高さからも、想定されるものである。

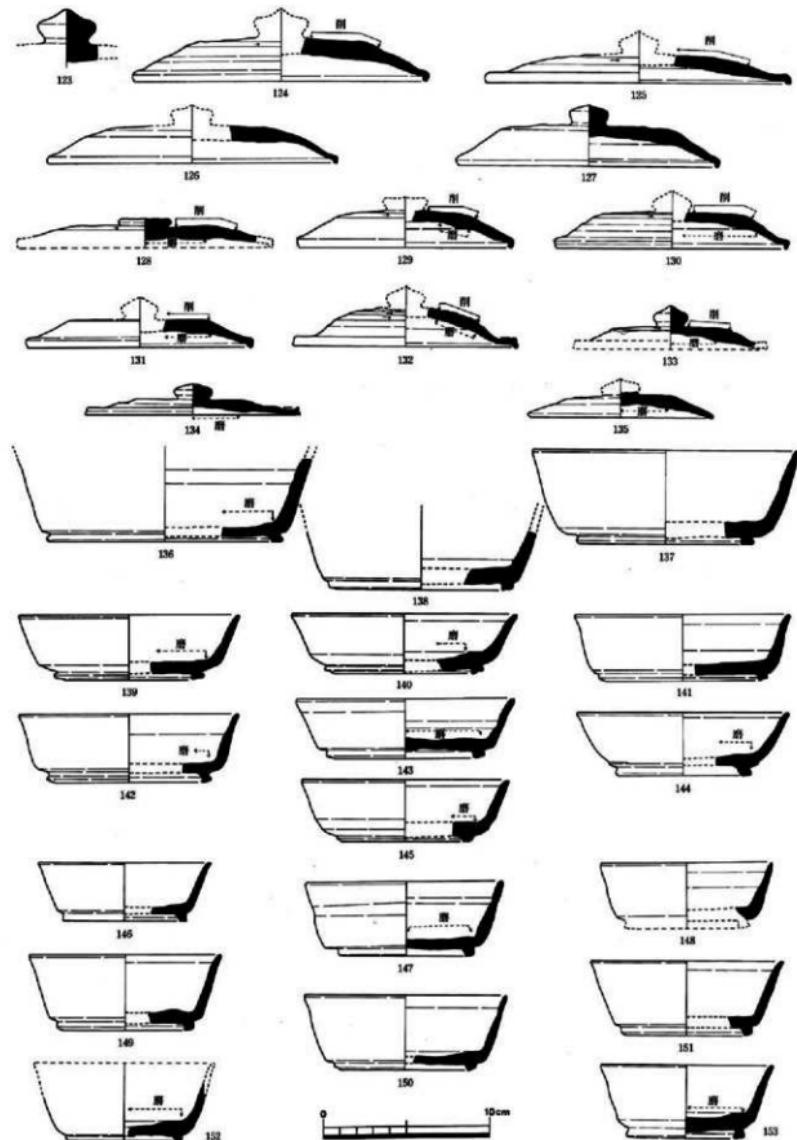
土坑の時期はⅢ期からV₁期頃まで確認できるが、それ以降の土器を出土するものではなく、Ⅲ期～Ⅳ期に位置付けられる土坑が3基、Ⅲ期～Ⅳ₂古期に位置付けられる土坑が10基、Ⅳ₂期以降に中心をもつものは4基と少ない。しかも、廃棄土坑の性格を有する上記の5基は、98号土坑を除く全てがⅣ₂古期以前に属し、特に廃棄土坑は、古い時期に主体があることが分かる。これは土坑出土の時期別構成表でも同様の結果が提示できており、Ⅲ期～Ⅲ期が15.7%、Ⅲ期～Ⅳ₂古期が53.4%、Ⅳ₂新期～V₂期が30.9%となっている。廃棄土坑的なものがⅣ₂期頃から衰退して行く状況は、この頃に出現していく溝遺構への大量廃棄と対応するものであり、木製祭祀具や墨書き土器など廃棄行為自体の変化とも合わせ、土器廃棄場所も変化していることを物語る。

以上、概要を述べたが、土坑資料の中で特に注目される33号土坑についてのみ、ここで詳しく述べておきたい。

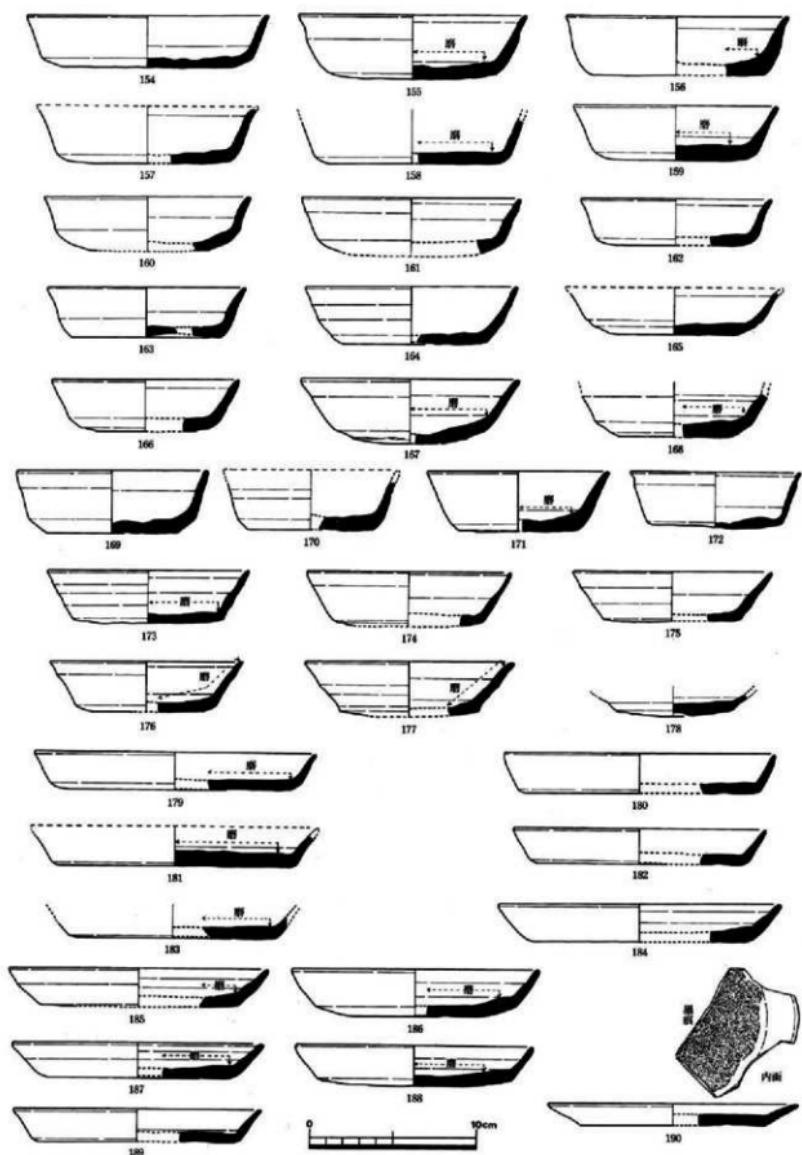
《33号土坑の土器群》図示したように、当土坑では1/2以上の残存率をもつ須恵器坏Bがまとめて出土しており、蓋と身のセット関係が推測できる。

まず、南加賀窯産のものであるが、蓋では51~53が該当し、いずれもつまみが小型の偏平宝珠形で、天井部平坦面は小さく、山傘状に開く器形をもつ。口縁端部の折り返しは三角形状に突出する形態で、削りは天井中心には入らず、肩の部分に入れられる。以上、基本的には一致した特徴をもっていると言えるが、つまみの形や天井部の厚さ、口縁端部の作りなど51・52に比べ、53はシャープな作りをしており、作り手の違いが想定される。身は57~59が該当し、体部外傾器形で口縁部でやや外に屈曲する特徴や底部が下にやや膨らむ器形、外展する高台が貼付される特徴は一致しており、法量もよくあって。ただ、蓋同様、高台貼付位置が57・58で外側に付くのに対し、59はやや内側で、前者よりも後者の方が薄くシャープな作りをしており、蓋と対応関係をもち、後者が作り手の異なる須恵器であると理解される。ただ、両者とも類似した特徴をもつものであり、いずれも一つの窯から供給されたものと考えられる。焼き具合なども考え合わせると、51と58、52と57、53と59がセット関係をなすものと言え、蓋と身のセットで焼かれたものがそのまま供給された感じである。

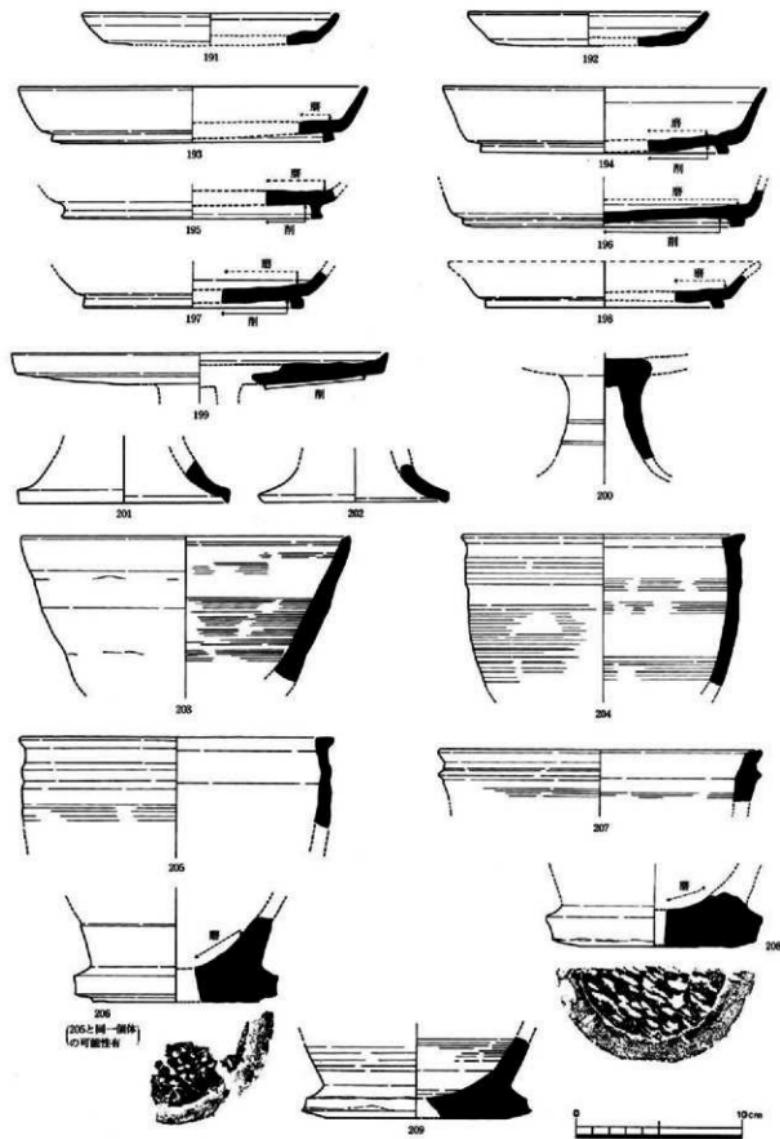
この3セット以外にも54の小型宝珠形つまみをもつ天井平坦部小さい山傘器形の蓋があり、胎土から



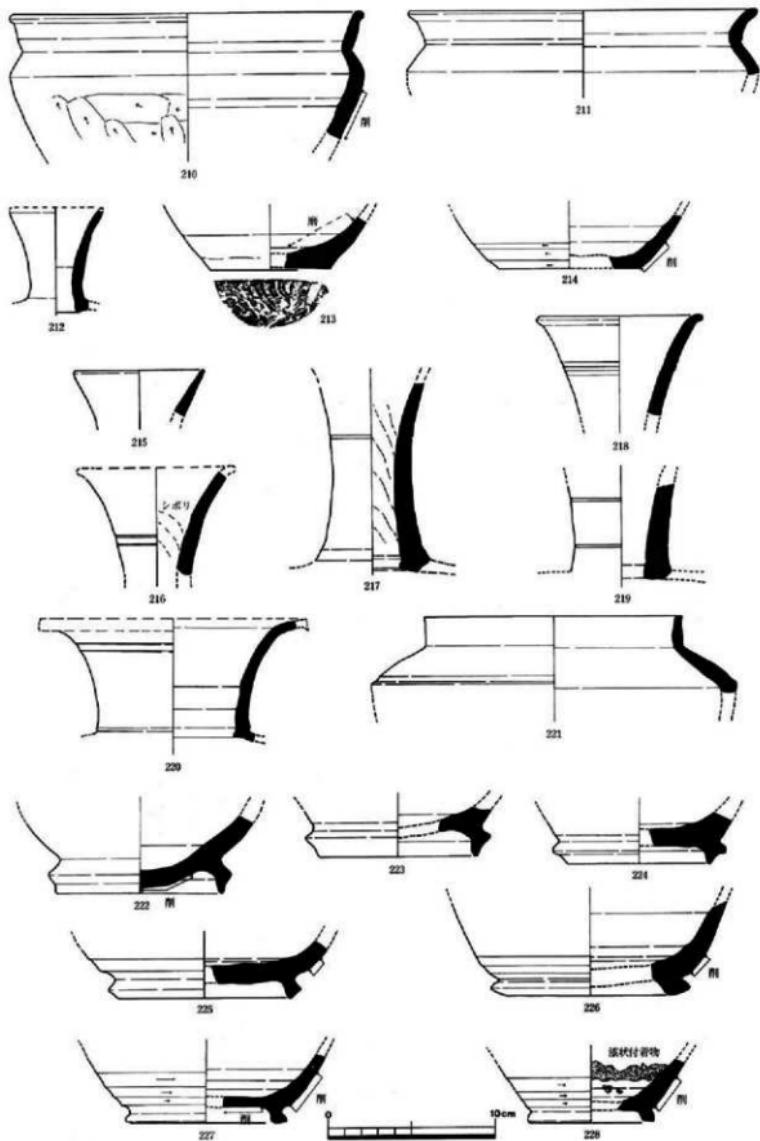
第106图 包含层出土土器 (1) (1/3)



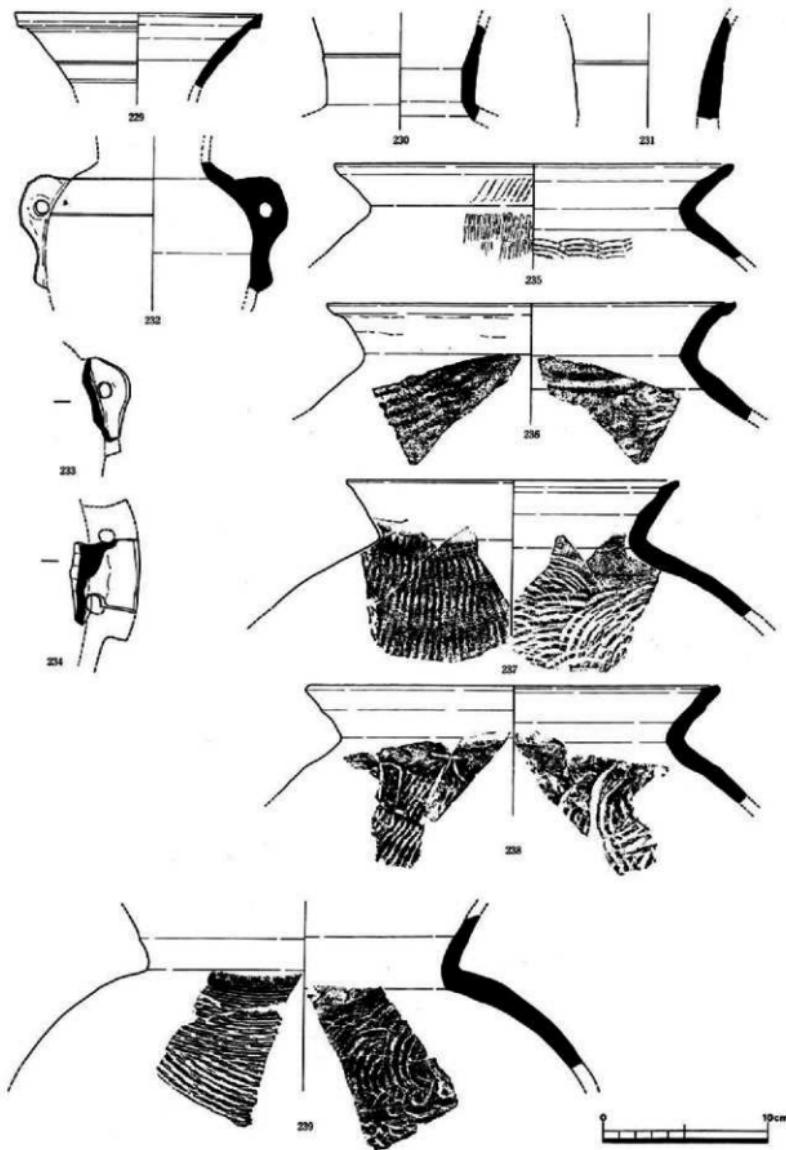
第107图 包含层出土器 (2) ($S=1/3$)



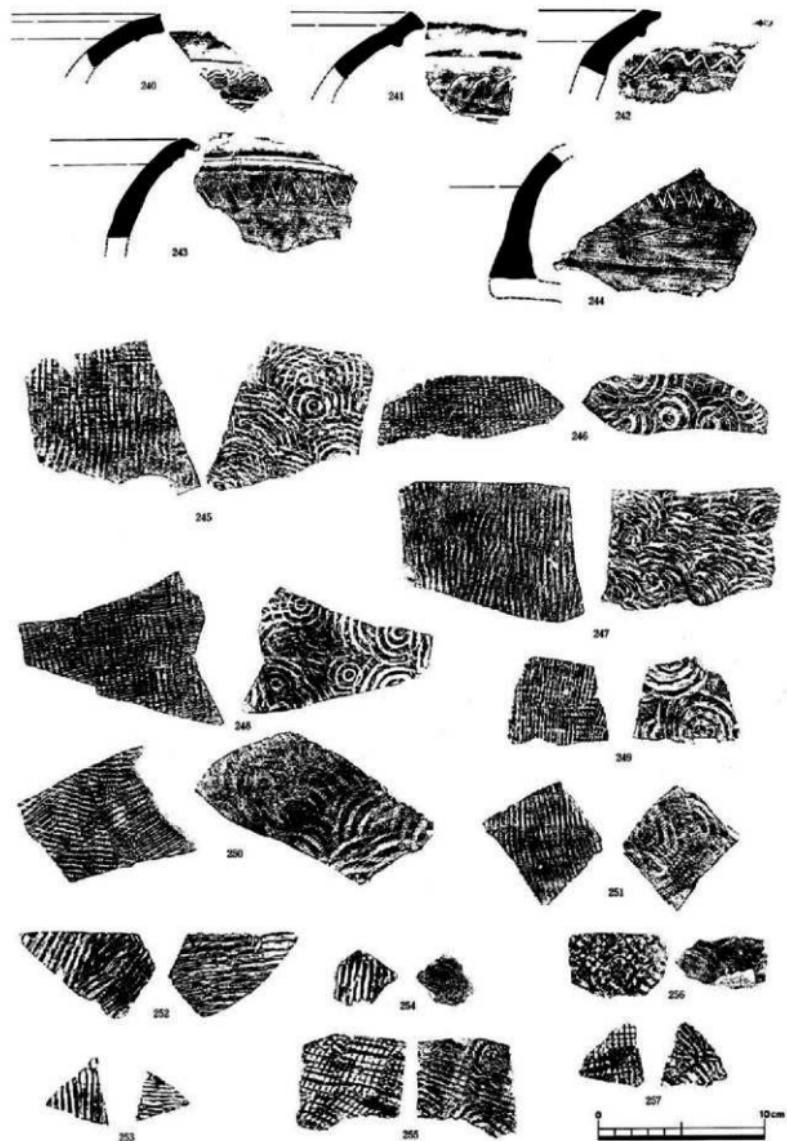
第108図 包含層出土土器 (3) (S=1/3)



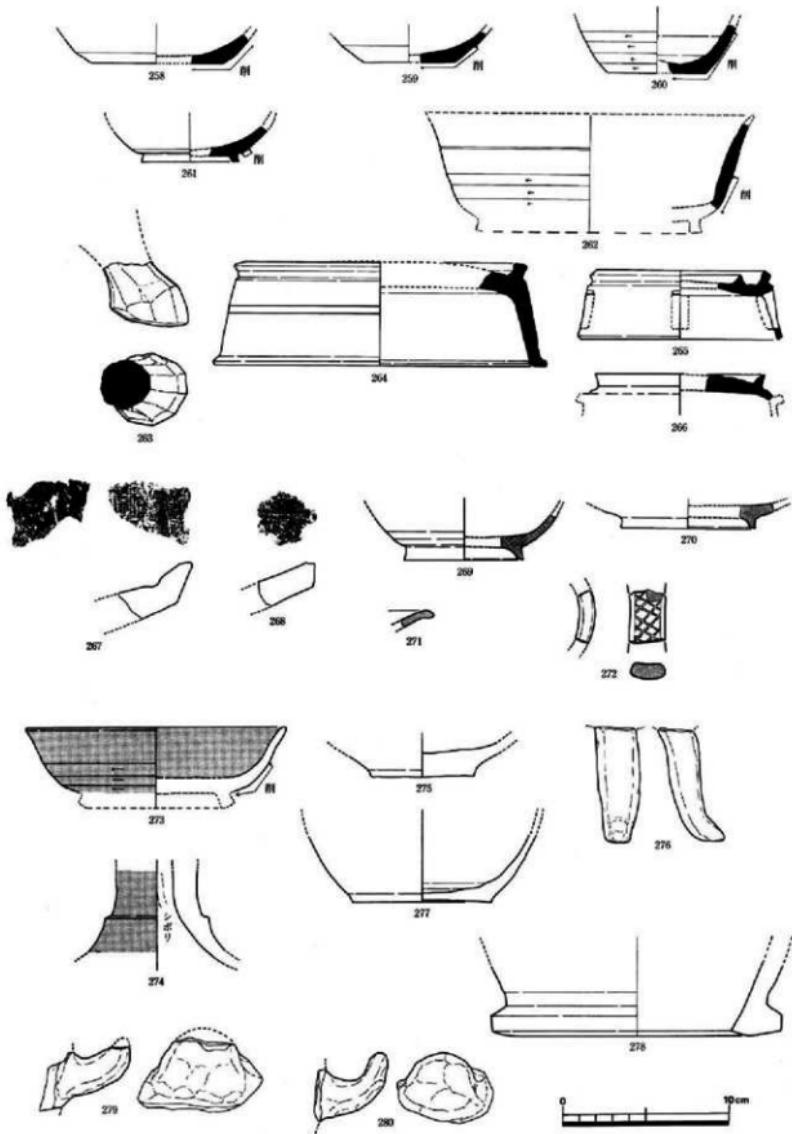
第109圖 包含層出土土器（4）(S=1/3)



第110圖 包含層出土土器（5） $(S=1/3)$



第111图 包含层出土土器 (6) ($S=1/3$)



第112図 包含層出土土器(7) (S=1/3)

見ても南加賀窯と類推されるが、南加賀窯でも前者のものよりも砂粒の混在が少なく、南群としている那谷地区の窯の胎土に類似する。器形も口縁端部折り曲げや天井部中央のヘラ削りなど作風の違いがあり、異なる窯場からの供給品と考える。ただ、これとセット関係をもつ身は確認できておらず、これ自体が破片接合の個体であることからも、これら3セットとは異なるものであると言える。

これに対し、能美窯産のものは、蓋（55）でつまみが偏平で大きく、天井部平坦面を広くとり、削りをその部位全面に施すことや、口縁端部折り返しが小さく折り曲げたものとなっている特徴をもつ。身（60）では体部外傾器形は同じだが、口縁部が開かない点や底部が平坦である点、高台が方形で薄手のシャープな作りをもつなどの特徴をもち、蓋も身も強く焼けていないが、きれいな焼き上がりをもつ。能美窯のものは焼成と胎土に若干の違いがあり、セットで焼かれた可能性は低いが、基本的には同一の窯からの供給品であると考える。

以上、4セットの坏は身の内面底部に全面にわたって顯著な摩耗痕が見られ、強く擦り減ったものも確認できる。蓋の内面天井に摩耗痕のあるものもあるが、極めて軽度であり、身底面の状況とは大きく異なる。このような顯著な摩耗痕をもつものは、頻繁な使用によってついたものと考えられるが、蓋と身のセットで使用されていたものであり（正規に坏蓋を坏身の蓋として使用している事例は案外少なく、それは蓋の内面天井部の摩耗痕検出率の高さからも言えることである）、それが一括で廃棄されたものである。蓋と身のセットで出土するものは、儀礼行為に伴う一過性の使用であったり、祭祀行為による未使用のものの埋納であったりする事例が多いのであるが、このような日常に使用していたと予想される食器具を一括廃棄する行為は珍しく、興味がもたれる。また、59の身の口縁部がギザギザに打ち欠いたような状態となっていることも興味深く、使用によって欠けたのか、わざと打ち欠いたのか、それによって廃棄行為の性格も変わってくるかもしれない。

3. 遺物包含層

遺物包含層からは、個体識別数で、2,631個体出土しており、そのうち須恵器食器具が88%の圧倒的多数を占める。比較的、須恵器貯蔵具の割合が9%程度と高いが、食器具も煮炊具も土師器は少なく、両方合わせても3%にも満たない量である。包含層では土師器の残りが悪く、個体数として提示されなかったこともあり、実際はもっと高い量比であったのだろう。

時期はⅢ期～Ⅳ₂古期が46%、Ⅳ₂新期～Ⅴ₂期が47%と、この時期だけで9割以上を占め、Ⅲ₃期～Ⅲ期（2%）とⅥ₁期以降（5%）ではかなり少なくなっている。Ⅵ₁期以降の土器は遺構では検出されておらず、建物などの遺構がこの時期まで存続するかわからないが、106個体と他から混入されたような量ではなく、細々と建物遺構が存在していた可能性はある。



第113図 包含層出土土器 (8) (S=1/3)

第7表 古代土器観察表

観察表の凡例

- 1. 器種** 器種では、須恵器、土師器、施釉陶器の大別の後、器種名を提示してあるが、分類名は基本的に北陸古代土器研究会の1988年シンポジウムで提示された分類名を使用している（「シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題」北陸古代土器研究会・石川考古学研究会1988年）。ただし、高盤やつき鉢はここで提唱したものであり、高盤は皿状の環部をもつ高杯、つき鉢は從来すり鉢と分類されているオロシ目をもたない深い鉢を示す。また、环Bについてのみ、口径により、大・中・小に細分したが、8世紀前葉の法量分化以前の1法量のものについては、中で提示し、9世紀前半以降の2法量淘汰のものについては、大・小で提示した。
- 2. 法量** 法量について、口や底などとしたものは全て口径、底径であり、径は全て省略してある。また、高は器高、○高や○長はその部位の高さ、長さを示す。
- 3. 胎土** 胎土については須恵器をアルファベットのラージ文字、土師器をスマール文字で表記し、施釉陶器は○番号で示した。なお、分類した内容は以下のとおりである。
- （須恵器胎土） A類……南加賀室跡群須恵器の胎土。素地に細かな石英系砂粒が多く含まれており、表面がザラザラしている。表面はスグ状になり、ガサガサしている。青灰色や灰褐色の発色をもち、軽い質感。
 B類……能美室跡群須恵器の胎土。素地は砂粒の混入が少なく、緻密な胎土で、白色の軟質岩粒が入る程度。表面は平滑で、真っすぐ削れることが多い。
 C類……南加賀室跡群と能美室跡群の中間に特徴を持つもので、南加賀室跡群の胎土で砂粒の混入が目立たないものである。能美室跡群産の可能性が高いが、南加賀室跡群の南端に近似した胎土があり、南群産である可能性もある。
 D類……高松坪水系跡群須恵器の胎土。素地自体に細かな石英系砂粒が極度に多く含まれているサラサラした質感をもつ胎土で、大粒の石英粒を混入させる。灰褐色や青黒い発色が目立つ。
 E類……末路跡群須恵器の胎土。D類同様、素地自体に細かな石英系砂粒が極度に多く含まれているサラサラした質感をもつ胎土で（D類よりもサラサラ感強い、セメント質）、大粒の石英粒は目立たず、やや軽い質感をもつ。灰褐色の発色をもつものが多い。
- （土師器胎土） a類……素地に細かな白色の軟質岩粒が少量含まれる胎土で、細かな白色の軟質岩粒も少量含まれる。表面はややスグ状になるものの、あまりガサガサした感じではなく、比較的滑らかな質感である。全体的に胎土質の緻密な胎土と言え。赤色無機化物を含み、赤い発色をもつものが多い。素地は能美室跡群系と言えるものであるが、窓跡の特徴は消滅的で、在地系胎土の可能性もある。a類は混入される砂粒（泥和材）からさらに、泥和材と思われる大粒砂粒をほとんど含まないa1類と、0.5~1.0mmのやや大粒の白褐色系砂粒（泥和材）を含むa2類（泥和材の多寡によってさらに細分される可能性をもつ）。1.0mm前後の赤褐色・黒褐色系砂粒（泥和材）を多く含むa3類とに分けられる。
 b類……素地に細かな石英系砂粒を多量に含む胎土で、雲母粒も少しが含まれる。表面に砂粒が浮き出でてザラザラとした質感を呈し、表面はスグ状で、軽い質感をもつ。石英系砂粒で0.5mm程度のやや大粒のものもあり、これで素地に埋め込まれたものと考える。南加賀室跡群の胎土と言えるもので、泥和材からさらに、基本的には泥和材がないb1類と0.5~1.0mmの石英系砂粒を多く含む（白褐色系の砂粒も量は少ないが混在する）b2類、0.5~1.0mmの褐色系砂粒が大量に入るb3類とに分けられる。
 c類……a1類に類似した胎土素地をもつ胎土で、a類のパリエーションとも捉えられる。a類と異なるのは、白色軟質岩粒を多めに含むことと赤褐色化を多めに含む褐色の発色をもつこと、そして雲母粒が含まれることである。泥和材のほとんど含まれないc1類と0.5~1.0mmの石英系砂粒が多量に含まれるc2類とに分けられる。
 d類……b類に類似した胎土素地をもつ胎土であるが、b類よりも細かな石英系砂粒の含有量が多く、表面のザラつきが顕著なものである。南加賀室跡群系胎土でも新しい段階の胎土であり、b1類のパリエーションと捉えられる。
 e類……素地自体はやや粉っぽい胎土質のトロッとした胎土であるが、細微な石英系砂粒が多量に胎土に含まれる胎土で、ややザラついた感じをもつ。雲母粒や角閃石などが含まれている。古代人によく見られる胎土。
 f類……胎土素地はやや粘土質であるが、細かな白色や白褐色の流紋岩系砂粒・石英系砂粒を多く素地に含む胎土で、雲母粒を目立って含む。やや滑った発色をもつものが多く、古墳時代後期~木原に在地領域で作られる胎土と共に。
- （施釉陶器） ①類……きめ細かな素地であるが、素地の中に粗微な石英粒が含まれており、ややサラサラした触感を受ける。胎土の質感は軽い感じで、薄い灰色系のやや白っぽい発色をもつ。白色はやや黄緑系で、薄い色をしている。尾張原投系の緑釉か？
 ②類……全体的には均質できめ細かな素地であるが、素地の中に粗微な石英粒が少しが含まれており、心持ちサラッとした触感がある。また、微量の白色軟質岩粒が含まれ、全体の発色としてはやや濃い色目の灰色系であるが、暗青灰色系のものからやや分化して淡灰褐色を呈するものもある。白色は濃緑色系で、薄緑色系のものもあるが、全体的に厚く施釉するもので、細かな貫入があるものもある。近江系緑釉。

4. 焼成 焼成度合いは、須恵器と陶器のみ以下の4段階で提示し、土師器はいずれも剥落が著しかったため、省略した。

堅……焼きが強く、堅密な焼き締まり。焼きあみあるものも含む。

良……堅密に焼き締まる感じはないが、焼成良好のもの。

弱……焼成良好とは言えず、全体的に焼きは弱い、一応の還元色の焼き締まりをもつもの。

生……焼成不良の生焼け品。無化粧で焼き上がるるものも含む。

5. 時期 基本的に田嶋明人氏が1988年の北陸古代土器研究会シンポ（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）」北陸古代土器研究会）で提示した編年軸に則っており、曆年代表はⅠ期を7世紀1/4～中頃、Ⅱ期を7世紀3/4～8世紀1/4、Ⅲ期を8世紀2/4、Ⅳ期を8世紀中頃～9世紀1/4、Ⅴ期を9世紀2/4～中頃、Ⅵ期を9世紀後半～10世紀1/4、Ⅶ期を10世紀2/4～11世紀前半と筆者は提している。また、縄輪陶器については、近江系を平尾改章氏の平安京編年（平尾改章1994「縄輪陶器の変質と波及」「古代の土器研究会第3回シンポジウム 施釉陶器」古代の土器研究会）に、狼投を斎藤孝正氏の編年（斎藤孝正1994「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」「古代の土器研究会第3回シンポジウム 施釉陶器」古代の土器研究会）に基づいて提示してある。

6. 参考

a. 环B蓋の重ね焼き跡 环B蓋に残る身との重ね焼き痕跡について、北野博司氏の分類（北野博司1988「重ね焼きの観察」「辰口西陵の遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター）に従って提示した。以下、分類図参照。

b. 頭部内面叩き分類 頭の頭部外側内面叩きと内面當て具について、その叩き具及び當て具文様を、花屋信雄氏の分類（花屋信雄1985「叩き目文の原体同定－生産組織の解明に向けて－」「辰口町湯屋古窯跡」辰口町教育委員会）に従って提示したが、分類項目については筆者が一部追加した。追加項目については以下のとおり。

（外側叩き文様） 格子目文叩き（K類） 格子目が正格子となるKa類と格子目が斜格子となるKb類に細分できる。
（内面當て具文様） 平面線文當て具（H類） 外面平行文叩き文様と同じように細分される。
組同心円文當て具（S D類） 同心円文が細く、Dト類の同心円間に込みがないような半輪が
そのまま現れたような文様。芯持ち材を使った本腰無文當て具と考えられる。
放射状文當て具（F類） 同心円文當て具と同様、木目の入り方によって同様に細分できる。

| | |
|-------------------------------|---|
| <p>环B重ね焼き分類図 (北野1988より転載)</p> | <p>須恵器復頭部叩き・当て具文様様式分類図 (花屋1985より転載)</p> |
|-------------------------------|---|

| 番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | 完存 | 胎土 | 焼・色 | 摩耗 | 時期 | 備考 |
|----|-------|---------|------------------------|------|----|-------|-----|------------------------------------|--------------|
| 1 | 2 振立 | 須恵坏A | 口13.8、高3.7 | 1/2 | A | 生・灰白色 | — | III~IV ₁ | |
| 2 | 7 振立 | 須恵坏B 身大 | 口15.6、高6.9、台10.9、台高0.7 | 1/10 | A | 良・青灰色 | 底 | IV ₁ | |
| 3 | * | 須恵坏A | 口14.0、高3.5 | 1/5 | B | 弱・灰褐色 | 無 | IV ₁ | 底面に「」記号 |
| 4 | * | 土師高环 | | 脚付近 | a2 | 赤肌色 | — | II ₃ ~III? | |
| 5 | 10振立 | 須恵坏A | 口13.3、高3.4 | 1/5 | A | 弱・灰白色 | 底 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 6 | 27振立 | 須恵坏B 身小 | 台8.0、台高0.5 | 底片 | A | 良・青灰色 | 無 | V ₂ ? | |
| 7 | * | 須恵盤A | 口16.2、高2.2 | 1/5 | A | 良・暗青灰 | 底全 | V ₂ ? | |
| 8 | * | 須恵つき鉢 | 口19.0 | 口片 | B | 良・灰 | — | V期 | |
| 9 | * | 土師台付鉢 | 台基部13.7 | 脚付近 | b2 | 淡灰褐色 | 無 | V~VI | 円形スカシ3方 |
| 10 | 28振立 | 須恵坏B 蓋中 | 口14.2 | 1/10 | A | 良・青灰色 | — | V期 | II b類重ね焼き |
| 11 | * | 須恵盤A | 口15.0、高2.6 | 1/10 | B | 良・灰 | 底全 | VI? | 墨痕あり、軸用規 |
| 12 | 33振立 | 土師坏B 身 | 台9.3、台高0.4 | 底片 | b | 薄肌色 | — | IV~V | 内外赤彩 |
| 13 | 37振立 | 須恵坏B 蓋中 | つまみ径2.2 | つまみ | A | 良・灰 | 無 | V期 | |
| 14 | * | 須恵坏B 蓋中 | | 天井片 | B | 弱・灰 | 天全 | V期? | |
| 15 | * | 須恵坏B 身中 | 台10.0、台高0.4 | 底片 | A | 良・青灰色 | 無 | VI? | |
| 16 | 41振立 | 須恵坏B 蓋中 | つまみ径3.2 | つまみ | A | 堅・灰 | 天 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 17 | * | 須恵坏B 身中 | 台10.4、台高0.6 | 底片 | A | 堅・暗灰色 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 18 | * | 須恵坏A | 口13.6、高3.2 | 1/3 | A | 弱・青灰白 | 底中央 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 19 | 43振立 | 須恵坏B 蓋大 | 口17.0 | 口片 | A | 良・青灰色 | — | IV ₁ ~IV ₂ 古 | II b類重ね焼き |
| 20 | * | 須恵坏B 身大 | 台14.0、台高0.5 | 1/15 | A | 弱・灰 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 21 | 49振立 | 須恵坏A | 底9.4 | 底片 | A | 生・肌 | — | VI? | |
| 22 | P 367 | 須恵坏B 蓋中 | 口16.7 | 1/4 | A | 堅・青灰色 | 無 | III期? | I類重ね焼き |
| 23 | P 66 | 須恵坏B 蓋大 | 口16.4 | 1/5 | B | 堅・青灰色 | 天全 | VI? | II a類重ね焼き |
| 24 | P 783 | 須恵坏B 蓋大 | 口16.5 | 1/4 | B | 弱・灰白色 | 無 | V期? | |
| 25 | P 585 | 須恵坏B 蓋大 | つまみ2.6 | 1/8 | B | 弱・灰 | 無 | IV ₂ ~V ₁ | |
| 26 | P 162 | 須恵坏B 蓋小 | 口12.9、高2.5、つまみ2.5 | 2/5 | A | 良・青灰色 | 無 | IV ₂ 新~V ₁ | I類重ね焼き、口縁無返し |
| 27 | P 277 | 須恵坏B 身大 | 口17.3、高6.2、台12.2、台高0.7 | 1/3 | A | 良・灰 | 底全 | IV ₂ 古? | |
| 28 | P 667 | 須恵坏B 身大 | 台10.3、台高0.4 | 1/10 | B | 弱・灰 | 無 | IV ₂ 古? | |
| 29 | P 397 | 須恵坏B 身中 | 口16.2、高4.1、台11.3、台高0.5 | 1/6 | A | 堅・灰 | 無? | III期? | |
| 30 | P 683 | 須恵坏B 身中 | 口16.0、高3.5、台11.8、台高0.5 | 1/4 | A | 堅・青灰色 | 底全 | III期 | |
| 31 | P 589 | 須恵坏B 身中 | 口15.8 | 1/12 | A | 堅・暗灰色 | — | III~IV ₁ | |
| 32 | P 831 | 須恵坏B 身中 | 口12.6、高4.4、台9.4、台高0.5 | 1/4 | B | 堅・灰白色 | 底全 | IV ₂ 古? | |
| 33 | P 100 | 須恵坏B 身小 | 口11.2、高3.8、台8.6、台高0.5 | 1/6 | B | 良・灰 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 34 | P 762 | 須恵坏B 身小 | 口11.8 | 1/8 | B | 良・灰白色 | — | IV ₂ 新? | 外面自然輪 |
| 35 | P 688 | 須恵坏B 身小 | 口11.8、高4.9、台7.6、台高0.5 | 略完形 | A | 堅・灰 | 無 | VI? | 外底面に1字不明墨書あり |
| 36 | P 316 | 須恵坏B 身小 | 口11.5、高4.5、台7.4、台高0.4 | 1/5 | A | 良・青灰色 | 底全 | VI? | |
| 37 | P 452 | 須恵坏A | 口12.8、高3.8 | 1/8 | A | 弱・灰 | — | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 38 | P 738 | 須恵坏A | 口13.1、高3.5 | 1/6 | A | 良・青灰色 | — | V期? | |
| 39 | P 266 | 須恵坏A | 口12.6、高3.7 | 1/3 | A | 生・淡褐色 | 底全 | II ₂ 期 | |
| 40 | P 137 | 土師盤B 蓋 | 口18.6 | 口片 | a1 | 薄肌色 | — | IV期? | 内外面赤彩 |
| 41 | P 15 | 土師高盤 | 脚径4.0 | 脚片 | b2 | 薄肌色 | — | IV期? | 円形スカシ方 |

| 番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | 完存 | 胎土 | 焼・色 | 摩耗 | 時期 | 備考 |
|----|-------|---------|------------------------|------|----|--------|-----|--------|-------------------|
| 42 | P 357 | 土師小型壺 | 胴13.5 | 1/12 | f | 赤味強肌色 | — | Ⅲ～Ⅳ期 | 外表面被熱 |
| 43 | P 698 | 土師瓶 | 底18.0 | 胴下片 | b2 | 潔肌色 | — | Ⅳ期？ | |
| 44 | P 212 | 土師瓶小口 | 手幅7.5 | 手片 | b2 | 薄肌色 | — | Ⅳ期？ | |
| 45 | 12土坑 | 土師壺A | □17.2、高4.3 | 1/3 | a1 | 肌色 | — | Ⅲ～Ⅳ期 | 外外面赤彩。磨き有? |
| 46 | 13土坑 | 須恵壺B身小 | □12.0、高4.0、台高0.5 | 1/8 | A | 堅・灰色 | 無 | Ⅲ～Ⅳ期 | |
| 47 | 27土坑 | 須恵壺B身中 | □14.8、高4.8、台5.0、高0.5 | 3/4 | A | 良・灰色 | 無 | Ⅳ期？ | |
| 48 | * | 須恵壺B身中 | 台10.6、台高0.4 | 底片 | B | 堅・青灰色 | 無 | Ⅲ～Ⅳ期 | |
| 49 | * | 土師壺A | □12.8、高2.9、底7.0 | 4/5 | a1 | 薄(黄)肌色 | — | Ⅲ～Ⅳ期? | 外外面赤彩、横ナデ生体? |
| 50 | * | 土師壺A | 底7.7 | 底片 | a1 | 薄肌色 | — | Ⅲ～Ⅳ期? | 外外面赤彩、内面のみ地盤状斑文 |
| 51 | * | 土師高壺 | | 脚付近 | a1 | 薄肌色 | — | Ⅳ期? | 内面黒色 |
| 52 | * | 土師鍋(古) | □復元32.0 | 1/15 | f | 薄(黄)肌色 | — | Ⅳ期? | 外側ハナ、内側ヘラナギ、外側脚付 |
| 53 | 33土坑 | 須恵壺B蓋中 | □16.5、高3.7、つまみ2.9 | 4/5 | A | 弱・灰白色 | 無 | Ⅱ3期 | 内面ノミ溝、57か58とセット? |
| 54 | * | 須恵壺B蓋中 | □15.3、高3.1、つまみ2.9 | 4/5 | A | 良・(赤)灰 | 無 | Ⅱ3期 | 天降灰、57か59とセット? |
| 55 | * | 須恵壺B蓋中 | □16.2、高3.7、つまみ2.6 | 1/2 | A | 堅・灰色 | 天緑 | Ⅱ3期 | 垂み、天降灰、57か59とセット? |
| 56 | * | 須恵壺B蓋中 | □16.0、高3.9、つまみ2.9 | 1/2 | C | 堅・灰色 | 無 | Ⅱ3期 | |
| 57 | * | 須恵壺B蓋中 | □15.5、高3.5、つまみ3.2 | 3/4 | B | 良・青灰色 | 天全 | Ⅱ3期 | 60とセット? |
| 58 | * | 須恵壺B蓋中 | □椎15.7、高3.0、つまみ3.8 | 1/4 | C | 良・灰色 | 天中央 | Ⅱ3期 | |
| 59 | * | 須恵壺B身中 | □13.9、高4.2、台8.5、台高0.6 | 4/5 | A | 堅・暗灰色 | 底全 | Ⅱ3期 | 剥離層、層構造、52か53セット |
| 60 | * | 須恵壺B身中 | □15.1、高4.1、台10.4、台高0.4 | 4/5 | A | 良・灰焼斑 | 底全 | Ⅱ3期 | 垂みあり、51とセット? |
| 61 | * | 須恵壺B身中 | □15.0、高4.1、台8.8、台高0.5 | 9/10 | A | 堅・灰色 | 底全 | Ⅱ3期 | □場引次ギザギザ、52か53セット |
| 62 | * | 須恵壺B身中 | □14.9、高4.5、台9.7、台高0.7 | 2/5 | B | 弱・灰色 | 底全 | Ⅱ3期 | 55とセット? |
| 63 | * | 須恵壺B身中 | 台10.0、台高0.5 | 1/3 | B | 良・灰色 | 底全 | Ⅱ3期 | 底面削り、摩耗顯著 |
| 64 | * | 須恵壺B身大? | 台13.4、台高0.7 | 1/5 | B | 弱・灰白色 | 底全 | Ⅳ期? | 大型深舟器種?転用窯? |
| 65 | * | 須恵壺A | □14.4、高椎3.8 | 1/6 | B | 弱・灰白色 | — | Ⅱ3～Ⅲ | 身重ね焼きの痕跡 |
| 66 | * | 須恵長頭瓶 | □10.3 | □預片 | A | 堅・灰色 | — | Ⅲ～Ⅳ期? | |
| 67 | * | 須恵長頭瓶 | □10.2 | □預片 | A | 堅・青灰灰 | — | Ⅲ～Ⅳ期? | 透み、窓土付着 |
| 68 | * | 須恵瓶類 | □9.8 | □預片 | B | 良・青灰灰 | — | Ⅲ～Ⅳ期? | 通路の長頭瓶ではない特異瓶類 |
| 69 | * | 土師高壺 | | 脚付近 | a1 | 濃肌色 | — | Ⅱ3～Ⅳ期? | 脚内面黒色 |
| 70 | 59土坑 | 須恵壺A | □12.4、高3.3 | 1/3 | A | 良・青灰色 | 無 | N1～N2古 | |
| 71 | * | 土師壺A | □13.0、高3.0、底5.6 | 4/5 | b1 | 薄肌色 | — | Ⅳ期? | 外外面赤彩、米切り? |
| 72 | 69土坑 | 須恵壺B身中 | □15.3、高4.0、台11.0、台高0.5 | 1/6 | A | 堅・灰色 | 底全 | Ⅲ～Ⅳ期 | |
| 73 | * | 須恵壺A | □12.8 | 1/5 | B | 良・灰色 | — | Ⅲ～Ⅳ期? | |
| 74 | * | 須恵小型瓶 | 胴12.2 | 1/8 | A | 良・青灰灰 | — | Ⅳ期? | |
| 75 | 74土坑 | 土師瓶? | | 底片 | c2 | 灰褐色 | — | ? | 内面黒色により赤度、置置かも? |
| 76 | 77土坑 | 須恵壺B蓋中 | □14.0 | 1/10 | B | 良・青灰色 | 無 | N1～N2古 | |
| 77 | * | 須恵壺B蓋中 | □13.7、高2.7、つまみ2.5 | 1/3 | B | 良・灰色 | 天中央 | N1～N2古 | 天降灰、I類重ね焼き |
| 78 | 84土坑 | 須恵壺B蓋大 | □15.6 | 1/5 | A | 良・青灰色 | 無 | V2期? | I類重ね焼き |
| 79 | * | 須恵壺A | 底8.4 | 1/4 | B | 良・灰色 | 無 | V2期? | |
| 80 | 91土坑 | 須恵壺B蓋大 | つまみ2.6 | 1/2 | A | 良・灰色 | 天全 | Ⅳ期? | I類重ね焼き |
| 81 | * | 須恵壺B身中 | □16.5 | 1/15 | B | 良・灰白色 | — | N2～V1? | I類重ね焼き |
| 82 | * | 須恵壺B身中 | □13.6、高4.5、台9.8、台高0.7 | 1/8 | B | 弱・灰色 | 底全 | N1～N2古 | |

| 番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | 完存 | 胎土 | 焼・色 | 厚耗 | 時期 | 備考 |
|-----|-------|--------|-----------------------|--------|----|-------|-----|------------------------------------|--------------------------------|
| 83 | 91土坑 | 須恵環B身中 | 台9.6、台高0.4 | 底片 | B | 良・灰白色 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 84 | 〃 | 須恵環B身中 | 台9.6、台高0.3 | 底片 | A | 良・灰色 | 底中央 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 85 | 〃 | 須恵長颈瓶 | 台5.2 | 台片 | A | 生・薄肌色 | — | V期? | |
| 86 | 92土坑 | 須恵環B蓋大 | 口推17.5、高推3.5、つまみ2.7 | 2/5 | B | 生・灰白色 | 底全 | IV ₂ ~V ₁ ? | |
| 87 | 〃 | 須恵盤A | 口19.2、高2.4 | 1/10 | B | 生・灰白色 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 88 | 〃 | 土師壇A | 口16.2、高推4.7 | 1/5 | b1 | 肌色 | — | IV期? | 内外面赤彩、脛き有り? |
| 89 | 〃 | 土師小型壇 | 口15.2、肩15.3 | 1/15 | a2 | (赤)肌色 | — | IV期? | |
| 90 | 〃 | 土師小型壇 | 口14.0、肩13.6 | 1/12 | a2 | 薄肌色 | — | V期? | |
| 91 | 〃 | 土師長颈甕 | 口25.4、肩24.5 | 1/20 | a2 | 薄肌色 | — | V期? | |
| 92 | 〃 | 土師甕 | 口33.2 | 1/20 | a2 | 肌色 | — | V期? | |
| 93 | 〃 | 土師甕(古) | 口30.0 | 口付近片 | a2 | 黒褐色 | — | II ₃ ~III? | |
| 94 | 95土坑 | 須恵環B蓋中 | 口16.2、高3.1、つまみ3.2 | 3/4 | A | 堅・暗灰色 | 天中央 | II ₃ ~III | 天井障灰 |
| 95 | 〃 | 須恵環A | 口14.6、高3.1 | 1/4 | A | 弱・灰色 | 無 | Ⅳ期? | |
| 96 | 〃 | 須恵中甕 | 口19.2 | 上半1/5 | B | 良・灰色 | — | Ⅲ期前後? | 外H ₂ 郎後カ日、内Da当後ナデ |
| 97 | 〃 | 須恵中甕 | 肩43.0 | 肩1/8 | A | 良・青灰色 | — | Ⅲ期前後? | 外H ₂ 郎後ナデ、内Da当後ニビナデ |
| 98 | 〃 | 土師甕 | 口20.5 | 上半1/10 | a2 | 肌色 | — | Ⅲ期前後? | |
| 99 | 〃 | 土師長颈甕 | | 胴片 | b2 | 薄肌色 | — | III~IV ₁ | 外H ₂ 郎後カ日、内Da当後カ日 |
| 100 | 〃 | 土師長颈甕 | | 胴片 | b2 | 薄肌色 | — | III~IV ₁ ? | 外H ₂ 郎後カ日、内Da当後カ日 |
| 101 | 〃 | 土師長颈甕 | | 胴片 | b2 | 薄肌色 | — | III~IV ₁ ? | 外H ₂ 郎後カ日、内Da当後カ日 |
| 102 | 96土坑 | 須恵環B蓋中 | 口17.2、高2.9、つまみ3.5 | 2/3 | A | 堅・灰色 | 底全 | Ⅲ期 | 外面赤彩有温灰有灰斑 |
| 103 | 〃 | 須恵環B蓋中 | 口14.0、高3.2、つまみ2.6 | 1/3 | A | 良・灰色 | 天中央 | IV ₂ 期? | II _a 類重ね焼き |
| 104 | 〃 | 須恵環B身大 | 台12.0、台高0.5 | 底片 | A | 良・灰色 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 105 | 〃 | 須恵環B身中 | 台10.6、台高0.4 | 底片 | A | 良・青灰色 | 底全 | Ⅲ期? | |
| 106 | 〃 | 須恵環A | 口13.8、高3.4 | 1/5 | A | 弱・青灰白 | 底全 | III~IV ₁ | |
| 107 | 〃 | 須恵環A | 口15.6 | 1/15 | A | 生・灰白色 | — | Ⅲ期? | |
| 108 | 〃 | 須恵環A | 口15.2 | 1/10 | A | 堅・灰色 | — | Ⅲ期? | |
| 109 | 〃 | 須恵盤B | 台17.0、台高0.4 | 底片 | B | 良・青灰色 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 110 | 97土坑 | 須恵環B身中 | 台9.6、台高0.6 | 底片 | A | 堅・灰色 | 底中央 | IV ₂ ~V ₁ | |
| 111 | 〃 | 須恵環A | 口13.1、高3.9 | 1/2 | A | 良・灰色 | 無 | IV ₂ 期 | |
| 112 | 〃 | 須恵環A | 口13.2 | 1/10 | B | 良・灰白色 | — | IV ₂ ~V ₁ ? | |
| 113 | 98土坑 | 須恵環B蓋大 | つまみ2.5 | 1/10 | A | 良・灰色 | 無 | IV ₂ 期前後 | I類重ね焼き |
| 114 | 〃 | 須恵環B蓋小 | 口12.2 | 1/8 | A | 弱・灰色 | 無 | IV ₂ 期 | II _a 類重ね焼き |
| 115 | 〃 | 須恵環B蓋小 | 口10.8 | 1/8 | B | 弱・青灰色 | 無 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 116 | 〃 | 須恵環B身小 | 口11.5、高3.9、台8.3、台高0.5 | 5/6 | B | 良・暗灰色 | 底中央 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | 口縁端のみ欠ける |
| 117 | 〃 | 須恵環B身小 | 台7.5、台高0.4 | 1/8 | B | 弱・灰白色 | 無 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 118 | 〃 | 須恵有輪鏡 | 台10.3、台高0.5 | 底のみ | B | 良・灰色 | 底全 | ? | 掌托著、底部の再利用かも? |
| 119 | 〃 | 須恵盤B | 台15.0、台高0.6 | 1/25 | B | 弱・青灰白 | 底中央 | IV ₂ 新~V ₁ | 高台に切り込み入る |
| 120 | 〃 | 須恵小型甕 | 肩13.5、底9.2 | 1/6 | A | 良・灰色 | — | III~IV ₂ 期 | 肩下半焼成前輪組、輪向的(東?) |
| 121 | 〃 | 須恵中甕 | 口21.7 | 口片 | A | 良・青灰色 | — | III~IV ₂ 期 | 内面Da当具 |
| 122 | 101土坑 | 須恵環A | 口推12.5、高推3.3程度 | 2/5 | A | 弱・灰白色 | 底一部 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 123 | D-14 | 須恵環B蓋大 | つまみ3.5 | つまみ | A | 堅・灰色 | — | V期 | 大型特殊、環状突起タイプ? |

| 番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | 完存 | 胎土 | 焼・色 | 撲耗 | 時期 | 備考 |
|-----|---------|--------|------------------------|------|----|-------|-----|------------------------------------|-----------------------|
| 124 | B-13 | 須恵壺B蓋大 | □17.6 | 1/5 | A | 良・灰色 | 無 | IV ₂ 古~V ₁ | |
| 125 | B-6 | 須恵壺B蓋大 | □18.3 | 1/4 | A | 良・灰色 | 無 | V ₁ ~V ₂ | |
| 126 | F-12 | 須恵壺B蓋大 | □17.4 | 1/10 | A | 良・暗青灰 | 無 | V ₁ ~V ₂ | II _a 類重ね焼き |
| 127 | K-12 | 須恵壺B蓋大 | □15.6、高3.7、つまみ2.3 | 1/3 | A | 堅・灰色 | 無 | V ₁ ~V ₂ | I類重ね焼き |
| 128 | 43瀬混 | 須恵壺B蓋中 | つまみ3.2 | 1/5 | A | 良・暗青灰 | 天中半 | II ₃ ~III | I類重ね焼き |
| 129 | K-8 | 須恵壺B蓋中 | □12.6 | 1/8 | A | 良・灰色 | 天綠 | IV ₁ 期? | I類重ね焼き |
| 130 | 5住混 | 須恵壺B蓋中 | □13.9 | 1/6 | B | 良・青灰色 | 天全 | IV ₂ 新前後 | I類重ね焼き |
| 131 | F-8 | 須恵壺B蓋中 | □13.6 | 1/4 | B | 弱・灰褐色 | 天金 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 132 | 18瀬混 | 須恵壺B蓋中 | □13.5 | 1/8 | B | 良・灰白色 | 天全 | V ₁ 期? | II _b 類重ね焼き |
| 133 | C-10 | 須恵壺B蓋小 | つまみ2.1 | 1/3 | B | 弱・灰色 | 天中半 | IV ₂ 新~V ₁ | II _a 類重ね焼き |
| 134 | M-11 | 須恵壺B蓋小 | □12.9、高1.9、つまみ2.3 | 2/3 | B | 堅・暗青灰 | 天中半 | IV ₂ 新~V ₁ | II _b 類重ね焼き |
| 135 | F-13 | 須恵壺B蓋小 | □11.2 | 略完形 | A | 堅・青灰色 | 天中半 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | I類重ね焼き |
| 136 | 試掘 | 須恵壺B身大 | 台14.2、台高0.4 | 台片 | B | 堅・灰色 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | 作りシャープ |
| 137 | 43瀬混 | 須恵壺B身大 | □16.0、高5.6、台10.7、台高0.4 | 1/8 | C | 弱・灰色 | 無 | IV ₁ 期 | |
| 138 | 44瀬混 | 須恵壺B身大 | 台11.0、台高0.4 | 台片 | B | 良・灰色 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ | 濃いタイプ? |
| 139 | H-8・9 | 須恵壺B身中 | □13.3、高3.9、台9.0、台高0.4 | 1/8 | B | 弱・暗赤灰 | 底全 | III~IV ₁ | G-9接合 |
| 140 | F-11 | 須恵壺B身中 | □13.6、高3.6、台9.6、台高0.3 | 1/6 | B | 良・灰色 | 底全 | IV ₁ 期? | |
| 141 | G-8 | 須恵壺B身中 | □13.0、高4.1、台10.2、台高0.4 | 2/5 | A | 堅・暗灰色 | 無 | IV ₁ 期 | |
| 142 | 3住混 | 須恵壺B身中 | □13.2、高4.2、台9.8、台高0.6 | 1/10 | A | 良・青灰色 | 底全 | IV ₁ 期 | |
| 143 | H-10 | 須恵壺B身中 | □13.1、高3.6、台9.5、台高0.4 | 2/5 | B | 弱・青灰色 | 底全 | IV ₁ 期 | |
| 144 | H-7 | 須恵壺B身中 | □12.9、高3.8、台8.2、台高0.6 | 1/8 | A | 生・灰白色 | 底全 | III~IV ₁ | |
| 145 | F-5・6 | 須恵壺B身中 | □12.5、高4.6、台8.2、台高0.3 | 1/8 | B | 弱・暗赤灰 | 底全 | III~IV ₁ | J-8・12と接合 |
| 146 | K-11 | 須恵壺B身小 | □10.4、高3.5、台7.6、台高0.4 | 1/3 | A | 良・青灰色 | 無 | III~IV ₁ | 作りシャープ |
| 147 | 60上規混 | 須恵壺B身小 | □12.0、高4.5、台8.2、台高0.5 | 4/5 | A | 良・灰白色 | 底全 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 148 | 3住混 | 須恵壺B身小 | □10.4 | 1/8 | A | 良・青灰色 | — | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 149 | 5住混 | 須恵壺B身小 | □11.5、高4.5、台8.3、台高0.4 | 1/5 | A | 良・青灰色 | 無 | IV ₂ 古? | |
| 150 | M-11 | 須恵壺B身小 | □12.1、高4.5、台10.5、台高0.4 | 1/3 | A | 良・青灰色 | 無 | IV ₂ 古? | L-10と接合 |
| 151 | K-12 | 須恵壺B身小 | □11.6、高4.5、台8.0、台高0.5 | 1/6 | A | 弱・灰白 | — | IV ₂ 期 | |
| 152 | P-6 | 須恵壺B身小 | 台7.0、台高0.3 | 1/5 | B | 弱・灰色 | 底全 | V ₁ 期前後 | |
| 153 | K-13 | 須恵壺B身小 | □10.4、高4.3、台7.2、台高0.5 | 3/5 | A | 弱・青灰白 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 154 | G-12・13 | 須恵壺A | □14.5、高3.1 | 1/3 | B | 堅・暗青色 | 無 | III~IV ₁ | E-12・14、F-14と接合 |
| 155 | D-12 | 須恵壺A | □13.7、高3.9 | 1/2 | A | 良・灰色 | 底全 | IV ₁ 期 | B-9と接合 |
| 156 | H-6 | 須恵壺A | □13.4、高3.6 | 1/8 | A | 弱・灰色 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 157 | G-14 | 須恵壺A | □10.4、高3.5 | 1/15 | A | 良・青灰色 | 無 | IV ₁ 期 | |
| 158 | 5住混 | 須恵壺A | □12.0、高4.5 | 1/10 | A | 弱・青灰白 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 159 | H-6 | 須恵壺A | □12.3、高3.3 | 1/5 | B | 弱・青灰白 | 底全 | IV ₂ 古期 | |
| 160 | 1溝混 | 須恵壺A | □12.9、高3.8 | 1/10 | A | 弱・青灰白 | — | IV ₂ 期 | |
| 161 | J-13 | 須恵壺A | □13.2 | 1/10 | A | 弱・青灰白 | — | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 162 | E-12 | 須恵壺A | □11.5、高2.9 | 1/8 | C | 良・青灰色 | 無 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 163 | 43土塗混 | 須恵壺A | □12.0、高4.5 | 1/5 | B | 良・灰白色 | 無 | V ₁ 期? | 内面陶灰、H-4と接合 |
| 164 | I-13 | 須恵壺A | □12.0、高4.5 | 1/4 | A | 良・灰色 | 無 | IV ₂ 新~V ₁ | |

| 番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | 定存 | 胎土 | 焼・色 | 摩耗 | 時期 | 備考 |
|-----|---------|-------|------------------------|-------|----|---------|-----|------------------------------------|---------------------------|
| 165 | 5住瀬 | 須恵壺A | 口徑13.0 | 1/4 | A | 生・薄肌色 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 166 | J-6-9 | 須恵壺A | 口11.2、高3.2 | 1/2 | B | 弱・青灰白 | 無 | IV ₂ 古~V ₁ | D-4, F-4-11, H-6, I-12と接合 |
| 167 | F-7 | 須恵壺A | 口13.1、高3.9 | 1/3 | A | 弱・灰褐色 | 底全 | V ₁ ? | C-9と接合 |
| 168 | A-10 | 須恵壺A | | 1/6 | B | 良・灰褐色 | 底全 | V ₁ ? | |
| 169 | 3住瀬 | 須恵壺A | 口11.4、高3.8 | 2/5 | A | 堅・灰白色 | 無 | II ₂ 期 | |
| 170 | G-9 | 須恵壺A | 底7.6 | 1/3 | B | 良・青灰褐色 | 無 | V ₁ 期 | 3井戸と接合 |
| 171 | C-9 | 須恵壺A | 口10.9、高3.6 | 1/5 | A | 良・青灰褐色 | 底全 | V ₁ 期? | 85土坑と接合 |
| 172 | 3住瀬 | 須恵壺A | 口10.4、高3.3 | 2/3 | B | 堅・暗青灰褐色 | 無 | II ₂ 期? | 内底面「」記号 |
| 173 | 5住瀬 | 須恵壺A | 口12.1、高3.2 | 2/3 | B | 良・青灰褐色 | 底全 | V ₁ 期? | |
| 174 | E-11 | 須恵壺A | 口11.3、高3.4 | 1/10 | A | 堅・青灰褐色 | — | V ₁ 期? | |
| 175 | 5住瀬 | 須恵壺A | 口12.0、高3.1 | 1/5 | B | 弱・灰白色 | — | V ₂ 期? | |
| 176 | 24土塁 | 須恵壺A | 口11.6、高4.0 | 1/8 | B | 良・青灰色 | 内全 | V ₂ 期? | |
| 177 | H-12 | 須恵壺A | 口12.6、高3.3 | 1/5 | B | 弱・青灰色 | 内全 | V ₂ 期? | |
| 178 | K-11 | 須恵壺A | 底7.0 | 1/4 | B | 良・灰褐色 | 無 | V ₂ 期? | D-6と接合 |
| 179 | 88土塁 | 須恵盤A | 口17.0、高2.3 | 2/5 | A | 良・青灰色 | 底全 | IV ₂ 古? | |
| 180 | D-7 | 須恵盤A | 口16.3、高2.4 | 1/10 | B | 良・青灰白 | 無 | IV ₂ 古? | 15溝・20溝と接合 |
| 181 | L-10 | 須恵盤A | | 1/3 | B | 弱・灰白色 | 底全 | IV ₂ 古? | M-11と接合 |
| 182 | G-11 | 須恵盤A | 口15.2、高2.1 | 1/15 | B | 弱・灰白色 | 無 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 183 | L-7 | 須恵盤A | | 1/8 | A | 良・青灰白 | 底全 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 184 | 55土塁 | 須恵盤A | 口17.1、高2.3 | 1/5 | A | 生・灰白色 | — | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 185 | 55土塁 | 須恵盤A | 口15.4、高2.4 | 1/5 | A | 弱・青灰色 | 底全 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 186 | F-5 | 須恵盤A | 口14.9、高2.8 | 1/6 | A | 良・青灰色 | 底全 | V ₁ 期? | |
| 187 | 43溝 | 須恵盤A | 口15.2、高2.1 | 1/8 | A | 良・青灰色 | 底全 | V ₁ 期? | |
| 188 | D-9 | 須恵盤A | 口14.2、高2.4 | 1/4 | A | 堅・灰褐色 | 底全 | V ₁ 期? | 43溝と接合 |
| 189 | C-11 | 須恵盤A | 口15.0、高2.0 | 1/15 | B | 生・灰白色 | 無 | IV ₂ 新~V ₁ | |
| 190 | L-13 | 須恵盤A | 口15.1、高1.3 | 1/8 | C | 良・灰褐色 | 底全 | V ₁ 期? | 内底厚鈍圓著、壓痕、軋印 |
| 191 | 33溝 | 須恵盤A | 口15.6、高1.9 | 1/15 | A | 良・青灰色 | — | V ₁ 期? | |
| 192 | K-10 | 須恵盤A | 口14.5、高2.1 | 1/12 | A | 良・青灰色 | 無 | V ₁ 期? | |
| 193 | 43溝 | 須恵盤B | 口20.8、高3.3、台高0.6 | 1/16 | A | 良・灰褐色 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 194 | H-12 | 須恵盤B | 口19.4、高4.0、台15.0、台高0.5 | 1/3 | A | 良・灰褐色 | 底中半 | IV ₂ 古? | 底削り |
| 195 | L-12 | 須恵盤B | 台15.7、台高0.9 | 底片 | A | 弱・灰褐色 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | 底削り |
| 196 | F-II-12 | 須恵盤B | 台17.0、台高0.6 | 底片 | A | 弱・青灰白 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | 底削り |
| 197 | B-13 | 須恵盤B | 台13.4、台高0.5 | 底片 | B | 良・灰白色 | 底全 | IV ₁ ~IV ₂ 新 | 底削り |
| 198 | G-11 | 須恵盤B | 台14.4、台高0.5 | 1/15 | B | 良・灰褐色 | 底全 | V ₁ 期? | |
| 199 | E-9 | 須恵高盤 | 口22.7 | 坏部1/5 | A | 良・灰褐色 | 無 | IV ₁ ~IV ₂ 古 | B-8-12, D-11と接合 |
| 200 | G-5 | 須恵高盤 | 脚基部径4.3 | 脚盤2/5 | A | 生・灰白色 | — | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 201 | J-11 | 須恵高盤 | 脚邊径12.8 | 脚片 | A | 弱・灰白色 | — | IV ₁ 期? | |
| 202 | D-12 | 須恵高盤 | 脚邊径11.6 | 脚片 | A | 弱・青灰白 | — | IV ₁ 期? | |
| 203 | 5住瀬 | 須恵つき鉢 | 口19.8 | 1/8 | A | 良・青灰褐色 | — | II ₂ 期? | |
| 204 | 47溝 | 須恵つき鉢 | 口17.1 | 1/4 | B | 良・暗灰褐色 | — | IV ₁ ~IV ₂ 古 | |
| 205 | L-10 | 須恵つき鉢 | 口19.0 | 体半片 | A | 堅・灰褐色 | — | IV ₂ 古~V ₁ | 202と同一個体か? |

| 番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | 光存 | 胎土 | 焼・色 | 摩耗 | 時期 | 備考 |
|-----|--------|--------|-------------------|-------|----|-------|----|------------------------------------|---------------------|
| 206 | D-4 | 須恵つき鉢 | 底12.2 | 下半1/3 | A | 堅・灰色 | 底 | IV ₂ 古～V ₁ | 外底面刺突、3溝と接合 |
| 207 | E-6 | 須恵つき鉢 | 口19.5 | 口片 | B | 良・灰色 | — | IV ₂ 古～V ₁ | |
| 208 | H-13 | 須恵つき鉢 | 底13.0 | 底1/2 | A | 良・灰色 | 底 | ? | 外底面刺突 |
| 209 | 25土坑 | 須恵つき鉢 | 底13.8 | 下半1/5 | B | 堅・灰白色 | 無 | II ₃ ～IV ₁ ? | 外底面釉付蓋 |
| 210 | B-5 | 須恵広口鉢 | 口21.3、体21.3 | 1/15 | A | 良・青灰色 | — | V ₁ ～VI ₁ | |
| 211 | E-9 | 須恵広口鉢 | 口21.0、体21.2 | 上半片 | A | 弱・青灰色 | — | V ₁ ～VI ₁ | |
| 212 | 1溝混 | 須恵小型瓶 | 口幅5.5、頸長径5.6 | 口頸片 | B | 弱・灰白色 | — | IV ₁ ～IV ₂ 新 | |
| 213 | L-10 | 須恵小型瓶 | 底7.1 | 下半片 | A | 良・灰色 | 底全 | IV ₁ ～V ₁ 期? | 底部糸切り |
| 214 | A-10 | 須恵小型瓶 | 底8.4 | 下半片 | A | 良・青灰色 | 無 | III～IV ₁ ? | 底部頸腹なく、成型台痕 |
| 215 | F-13 | 須恵長頸瓶 | 口7.8 | 口頸片 | A | 良・灰色 | — | III～IV ₁ ? | |
| 216 | I-7 | 須恵長頸瓶 | — | 口頸片 | A | 良・灰色 | — | IV ₁ ～IV ₂ 新 | しばり有り |
| 217 | 43溝混 | 須恵長頸瓶 | 頸4.8 | 口頸片 | A | 良・灰色 | — | III～IV ₁ ? | しばり有り |
| 218 | 25土坑 | 須恵長頸瓶 | 口10.0 | 口頸片 | A | 良・青灰色 | — | IV ₁ 期前後 | |
| 219 | E-7 | 須恵長頸瓶 | 口5.6 | 口頸片 | D | 良・暗青灰 | — | IV ₁ ～V ₂ ? | 断面セビアの焼き方 |
| 220 | E-11 | 須恵広口瓶 | 頸9.0 | 口頸片 | A | 堅・灰色 | — | III～IV ₁ ? | 71土坑と接合 |
| 221 | G-3・6 | 須恵短頸瓶 | 口15.4、頸21.8 | 上半片 | A | 良・灰色 | — | III～IV ₂ ? | 無縫器系、A-5,F-6,L-3と接合 |
| 222 | J-10 | 須恵有台面瓶 | 台11.0、端10.0、台高1.5 | 底部片 | A | 良・灰色 | 無 | III～IV ₂ 古 | 底面割り |
| 223 | F-6 | 須恵有台面瓶 | 台10.5、端8.5、台高1.5 | 底部片 | A | 堅・灰色 | — | III～IV ₂ 古 | |
| 224 | K-11 | 須恵有台面瓶 | 台11.2、端9.3、台高1.0 | 底部片 | C | 良・灰色 | 無 | III～IV ₂ ? | 底面成型台痕 |
| 225 | C-5 | 須恵有台面瓶 | 台11.6、端10.4、台高1.0 | 底部片 | A | 良・灰色 | 無 | III～IV ₂ ? | 底面成型台痕 |
| 226 | 23溝混 | 須恵有台面瓶 | 台12.0、端9.5、台高0.8 | 底部片 | A | 良・灰色 | — | III～IV ₂ ? | |
| 227 | D-8 | 須恵有台面瓶 | 台9.8、台高1.0 | 底部片 | D | 良・暗青灰 | 無 | IV ₂ ～V ₂ ? | 断面セビアの焼き方、8溝と接合 |
| 228 | E-6 | 須恵有台面瓶 | 台7.6、台高0.7 | 底部片 | B | 弱・青灰色 | — | IV ₂ 新～V ₂ | 内面下位に漆状付着物の帶 |
| 229 | B-12 | 須恵双耳瓶 | 口15.0 | 口頸片 | A | 堅・青灰色 | — | V ₁ ～VI ₁ 期 | |
| 230 | F-9 | 須恵双耳瓶 | 頸9.0 | 口頸片 | A | 堅・灰色 | — | V ₁ ～VI ₁ 期 | |
| 231 | J-10 | 須恵双耳瓶 | 頸8.5 | 口頸片 | B | 良・灰色 | — | V ₁ ～VI ₁ ? | 25土坑と接合 |
| 232 | 25土坑 | 須恵双耳瓶 | 頸6.5、肩13.2 | 胴中片 | A | 良・灰色 | — | V ₁ ～VI ₁ ? | 25土坑と接合 |
| 233 | J-8 | 須恵双耳瓶 | — | 耳片 | B | 良・灰色 | — | V ₁ ～V ₂ ? | |
| 234 | F-2 | 須恵双耳瓶 | — | 耳片 | A | 良・灰色 | — | VI ₃ 前後 | |
| 235 | J-9・10 | 須恵中壺 | 口24.2 | 口頸片 | C | 堅・灰白色 | — | II ₃ ～IV ₁ 期 | 外輪輪、内Db当、I-3と接合 |
| 236 | B-5 | 須恵中壺 | 口24.8 | 口頸片 | A | 堅・青灰色 | — | II ₃ ～IV ₁ 期 | 外Hm即、内Db当、D-5と接合 |
| 237 | B-5 | 須恵中壺 | 口20.2 | 口頸片 | A | 堅・灰色 | — | II ₃ ～IV ₁ 期 | 外Hm即後カキ目、内Db当 |
| 238 | F-6・10 | 須恵中壺 | 口25.2 | 口頸片 | B | 生・灰褐色 | — | II ₃ ～IV ₁ 期 | 内Db当さき目、PfDa5、肩にヘラ |
| 239 | 1溝混 | 須恵大壺 | 頸18.8 | 腹付近片 | A | 良・青灰色 | — | IV ₁ ～V ₁ | 外Hm即後カキ目、PfDa5当後カキ目 |
| 240 | 16溝混 | 須恵大壺 | — | 口頸片 | A | 良・青灰色 | — | II ₃ ～IV ₁ | 輪摺波状文帯が2段 |
| 241 | 表探 | 須恵大壺 | — | 口頸片 | A | 堅・暗灰色 | — | II ₃ ～IV ₁ | 輪摺波状文帯が2段? |
| 242 | L-9 | 須恵大壺 | — | 口頸片 | A | 良・灰色 | — | IV ₁ ～V ₁ | 1条の輪摺波状文 |
| 243 | 43溝混 | 須恵大壺 | — | 口頸片 | A | 良・灰色 | — | IV ₁ ～V ₁ | 1条の輪摺波状文 |
| 244 | E-5 | 須恵大壺 | — | 口頸片 | A | 良・灰色 | — | IV ₁ ～V ₁ | 1条の輪摺波状文 |

244～257は包含層出土の須恵器壺胴部叩き片。叩き具、当て具の明瞭なものや特殊な叩き具、当て具をもつものを拓影図として提示した。詳しく述べ以下のことである。

245・246は外面Ha類叩き（木目直交の平行線文叩き）、内面Da類当て具（凹部分に木目なしの同心円文当て具）。241はHaの木目間隔粗く、246は細かい。247～249は外面Ha類叩き、内面Db類当て具（凹部分に同心円に沿った年輪状木目をもつ芯もち材を使った同心円文当て具）をもつもので、同心円文当て具の木目は247で粗く、248・249で細かい。250・251は外面Ha類叩き、内面Dc類当て具（凹部分に直線的な年輪状木目が見られる板木板材に同心円文を彫り込んだ当て具）をもつもので、255も平行線文当て具と重複しながら、Dc類当て具が見られる。252・253は外面He類叩き（木目の見られない平行線文叩き）、内面He類当て具（木目の見られない平行線文当て具）で、252の内面にはDb類当て具が重複しているようである。254は外面He類叩き、内面SD類当て具（芯もち材の年輪のみが見える木製無文当て具）、256の内面にも同様のSD類当て具が見られる。255～257は外面K類（格子目文）叩きをもつもので、正格子となる256・257のKa類叩きと斜格子状となる255のKb類叩きに分けられ、257の内面には芯持ち材年輪状木目を凹部分に持つ放射状当て具（Fb類）が見られる。

| 番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | 完存 | 胎土 | 焼・色 | 摩耗 | 時期 | 備考 |
|-----|------|-------|----------------------|------|----|--------|----|------------------------------------|------------------------------|
| 258 | 72土坑 | 須恵精製鏡 | 底7.8 | 1/15 | B | 良・灰白色 | 無 | IV ₂ 古～V ₁ | 削り離形か崩き次、丁寧な作り |
| 259 | J-11 | 須恵精製鏡 | 底5.3 | 1/10 | A | 良・灰色 | 無 | IV ₂ 古～V ₁ | 削り、ナガとともに丁寧 |
| 260 | D-13 | 須恵精製鏡 | 底6.0 | 1/6 | B | 弱・灰白色 | 無 | IV ₂ 古～V ₁ ？ | 外削り、コップ形 |
| 261 | I-2 | 須恵精製鏡 | 台8.5、高0.4 | 1/10 | A | 良・灰白色 | 無 | IV ₂ 古～V ₁ | 小型精製有台鏡、作り丁寧 |
| 262 | I-7 | 須恵精製鏡 | | 1/25 | B | 弱・灰白色 | — | IV ₁ ～V ₁ | 部体に沈線もち、縦削形 |
| 263 | D-11 | 須恵精製鏡 | 脚端面4.3×4.7 | 脚片 | A | 堅・灰白色 | — | III～V ₁ 期 | ヘラで面取り成形、緑色釉膏着 |
| 264 | 85土坑 | 須恵円面鏡 | 鏡部径17.5、青筋径21.0、高6.3 | 1/8 | A | 良・灰白色 | — | III～V ₁ 期 | 裏面保護のため迷走して焼成、県調査のX13と同一個体？ |
| 265 | F-10 | 須恵円面鏡 | 鏡部径10.8、青筋径12.3、高4.1 | 1/5 | B | 堅・薄青灰 | — | III～V ₁ 期 | 方形スカシミ方、内蔵有、逆進焼成 |
| 266 | F-2 | 須恵円面鏡 | 鏡部径10.2 | 鏡部片 | B | 弱・青灰白 | — | III～V ₁ 期 | |
| 267 | H-1 | 平瓦 | | 側端片 | A | 良・青灰色 | — | VI期？ | 凹面粗い布目、凸面は削り |
| 268 | D-10 | 平瓦 | | 側端片 | A | 弱・灰白色 | — | VI期？ | 凹面粗い布目、凸面は削り |
| 269 | J-2 | 縦捨崩壊 | 台7.2、台高0.7 | 底片 | ② | 良・薄灰色 | — | 平安Ⅲ期古？ | 近江系崩壊、釉色は濃緑色 |
| 270 | D-5 | 縦捨崩壊 | 台8.1、台高0.6 | 底片 | ② | 良・薄青灰 | — | 平安Ⅲ期古？ | 近江系崩壊、釉色は薄緑色 |
| 271 | H-2 | 縦捨崩壊 | | 口片 | ① | 良・薄灰色 | — | ？ | 釉色は薄黄緑色、施設か？ |
| 272 | G-8 | 縦捨崩壊 | 手幅2.1 | 手片 | ① | 良・薄灰色 | — | 墨籠14窟式？ | 施設跡か？釉色は薄黄緑色、施設か？把手斜角子が浮遊の豪品 |
| 273 | E-4 | 土師环B身 | 口15.4 | 1/3 | b1 | 薄肌色 | — | III～IV ₂ ？ | 内外面赤彩、磨きなし？ |
| 274 | G-7 | 土師高盤 | 脚径4.8 | 脚片 | a1 | 薄肌色 | — | III～IV ₂ ？ | 内外面赤彩 |
| 275 | B-9 | 土師壇A | 底6.2 | 1/5 | e | 薄肌色 | — | VI ₂ ～？ | 底面余切り、内面ラセン状工具痕 |
| 276 | K-7 | 土師三足鍋 | 足長6.7 | 足片 | d | 薄肌色 | — | Ⅳ期？ | |
| 277 | 試掘 | 土師小型壺 | 底8.3 | 1/7 | a2 | 肌色 | — | IV ₁ ～？ | 強く被熱、内面コゲ、底面剥落 |
| 278 | C-8 | 土師瓶 | 底17.4、内径11.4 | 底片 | a2 | 濃肌色 | — | IV ₁ ～V？ | |
| 279 | 25土坑 | 土師瓶か鍋 | 手幅5.7 | 手片 | a2 | 濃肌色 | — | ？ | |
| 280 | I-9 | 土師瓶か鍋 | 手幅5.0 | 手片 | b3 | 肌色 | — | ？ | |
| 281 | D-13 | 土師長胴壺 | | 胴片 | a2 | 薄肌色 | — | ？ | 外He叩、内Da当 |
| 282 | 93満泥 | 土師長胴壺 | | 胴片 | a2 | 灰(黄)白色 | — | ？ | 外He叩、内Da当 |
| 283 | I満泥 | 土師瓶？ | | 底片 | a3 | 黄褐色 | — | ？ | 極めて厚手、直唇の変形部分かも？ |
| 284 | 77土坑 | 焼粘土塊 | 3.1×2.5～2.0 | — | a1 | 肌色 | — | ？ | |
| 285 | + | 焼粘土塊 | 2.5×1.6 | — | a1 | 肌色 | — | ？ | 糞状の圧痕あり |
| 286 | 92土坑 | 焼粘土塊 | 2.7×2.3～2.1 | — | a1 | 濃肌色 | — | ？ | |

第3節 古代末～中世の遺物

第1項 土師器

1.はじめに

荒木田遺跡で検出された中世の集落跡より、多量の土器・陶磁器及び木製品等が出土している。そのなかで土師器は最も出土量が多く、特に皿形態を示すものが圧倒的に多い。また、11世紀～15世紀頃までの比較的長期にわたる資料が得られている。しかし、まとまった資料を得られた時期は、12世紀中頃～末頃までに限定される。よって、その時期の検討は次章に譲るものとし、ここでは、加賀地域における当該期を扱った論文（田嶋1988、藤田1993）に基づき、若干の私見も交えて、荒木田遺跡出土土師器の概要を提示する。

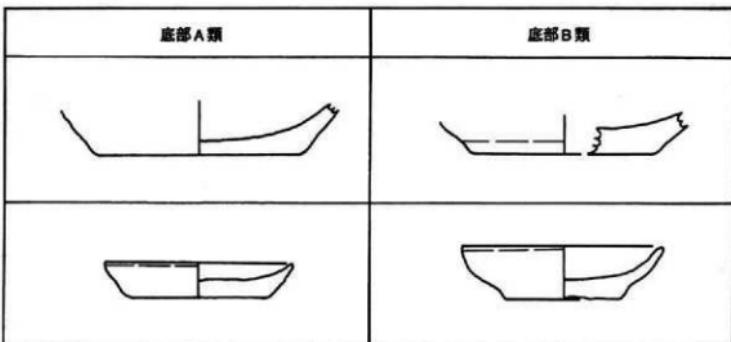
2.分類

土師器は技法的に大きく古代のロクロ土師器の系譜を引き、13世紀前半で消滅するロクロ土師器（R系）と、12世紀後半に出現し近世まで続く、てづくね成形で作られる非ロクロ土師器（T系）に大別される。

ロクロ土師器は、これまでの分類に基づき形態で、楕、有台楕、皿、小皿、柱状高台皿に分類した。また、楕、小皿については、底部の形状についても器型を特徴付ける一要素と考え、分類を行った。

底部A類 底部と胴部との間に明瞭な境がない。底部よりそのまま立ち上がっているもの。

底部B類 底部を回転ナデによって作り出しており、底部と胴部との間に明瞭な境がある。底部を示す意識があるもの。



第114図 底部分類図（R系）

また、胎土についても肉眼観察により分類している。大きく a 系統、b 系統に分類し、さらに a 系統を 2 つに、b 系統を 3 つに細分した。

a 類 やや粗い胎土で、器表面はザラつく。

a-1 白色粒を含む。粗い砂粒等を多く含む

a-2 白色粒を少量含む。粗い砂粒等を多く含む

b 類 繊密で締まっている胎土で、器表面はザラつかない。

b-1 繊密で締まっている。焼成も堅緻。細かい砂粒等もほとんど含まない。

b-2 繊密で締まっているが、b-1 よりやや粗く、細かい砂粒等も含む。

b-3 黏土そのものが極粒砂粒を凝縮したように器表面がサラサラする。但し、胎土は非常に緻密。

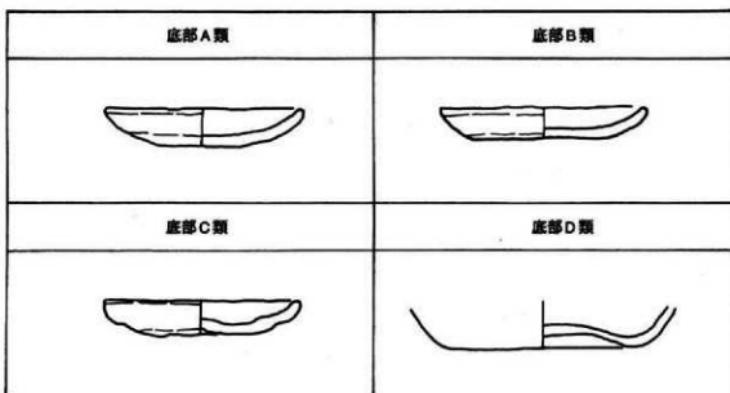
非クロ土師器は、その製作技法上の特性から、個人の手法（癖）が器型に反映されやすく、よって、厳密な分類は難しい。一方で、中世土師器の生産供給体制を解明するには、個人レベルに至る細分することの必要性も提唱されている（望月1993）。ここでは、全体的な概要提示を主眼に置いているため、一地域における型式レベルの規則性を見出した分類及び編年が有効であり、その点で器型分類は藤田編年に従い記述している。但し、法量で大型土師皿を I 類、小型土師皿を II 類に分類した。底部形状についても、器型及び成形技法の特徴を示す箇所であるため、細分類を行った。

底部 A 類 丸底状を呈す。

底部 B 類 平底状を呈す。

底部 C 類 中央部分が凹んだ底部

底部 D 類 意識的な上げ底の底部



第115図 底部分類図 (R系)

また胎土についても、ロクロ土師器と同様に肉眼観察により、a ~ c 類に分類した。

a類 胎土は非常に緻密。赤色粒、石英（細かい粒）を少量含む。

b類 胎土はやや緻密。胎土そのものが（極粒砂粒を凝縮したように）器表面がサラサラする。

c類 胎土はやや粗め。白色粒を含む。砂粒もやや大きめであり、器表面はザラつく。

ロクロ土師器・非ロクロ土師器両者に関して、その色調は、焼け具合や、胎土に混入される物質などに影響されるため、変化に富むが、6系統に分類した。

灰色系 白味が強い。

灰黄色系 灰色味が強い。

浅黄橙系 黄色味が強い。

淡橙色系 やや赤みがかる。

橙色系 純粋な橙色

赤橙色系 赤みが強い。

これらの分類は、観察表にまとめてあるので、参照して頂きたい。それでは、以下各造構出土遺物から、その概要について述べていく。

3. 土坑出土遺物

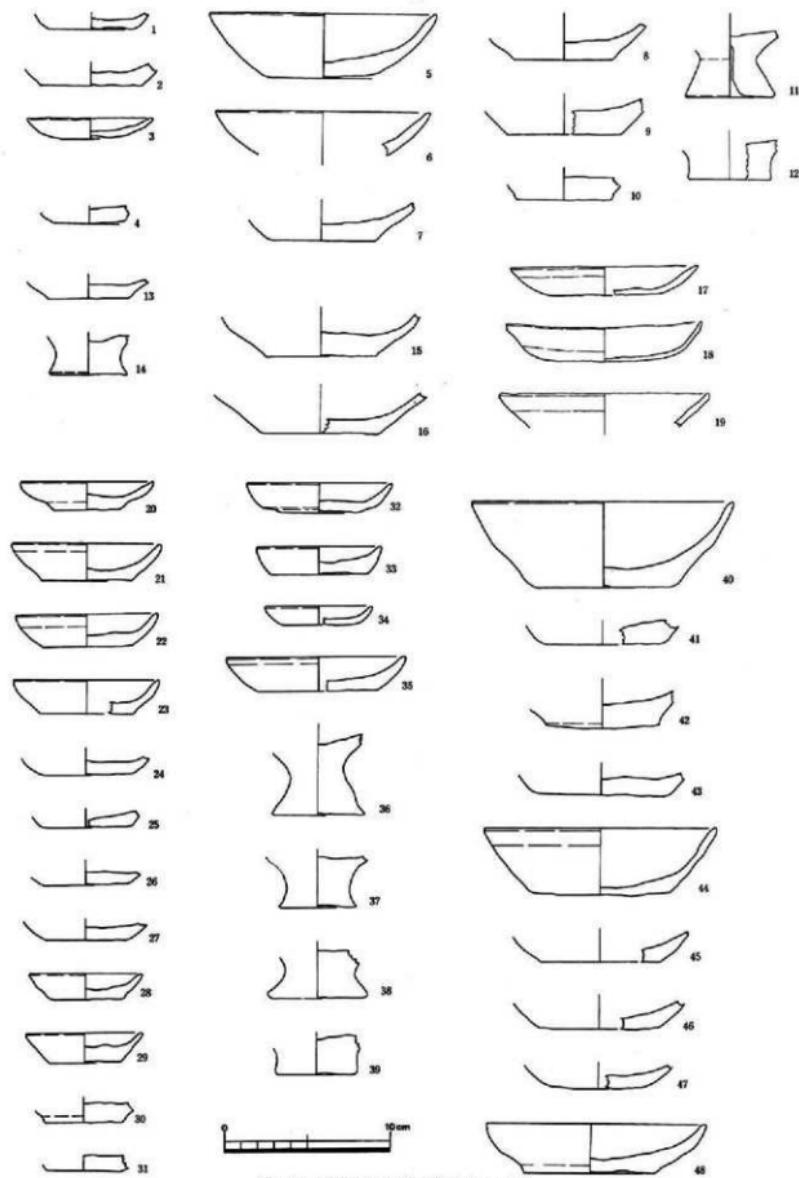
3号土坑（図116、1～3） ロクロ系と非ロクロ系より構成される。全体的に出土量は少ない。1は、ロクロ系の小皿で、外底部全体が押し上げられている。2は、ロクロ系の楕と考えられる。3は、非ロクロ系土師皿II類である。（藤田分類Aタイプ、以下タイプのみ記述）13世紀前半頃に比定される。（藤田編年I-II期）

9号土坑（図116、4～12） ロクロ系のみで構成される。全体的に出土量は少ないと、楕形態の占める割合が非常に高い。4は、小皿、5～10は楕で、5は、外方にやや内湾しながら立ち上がるもので、胎土も精良で焼成は良い。6、8は、同タイプと考えられ、胎土が非常に精良である。9、10は、分厚い底部を有するものである。11、12は、柱状高台皿で、11は、台が高くハの字に開くもので中央が孔状に空洞になっている。12は、台が低く真っ直ぐ立つものである。12世紀中頃に比定される（藤田編年I-I期）。

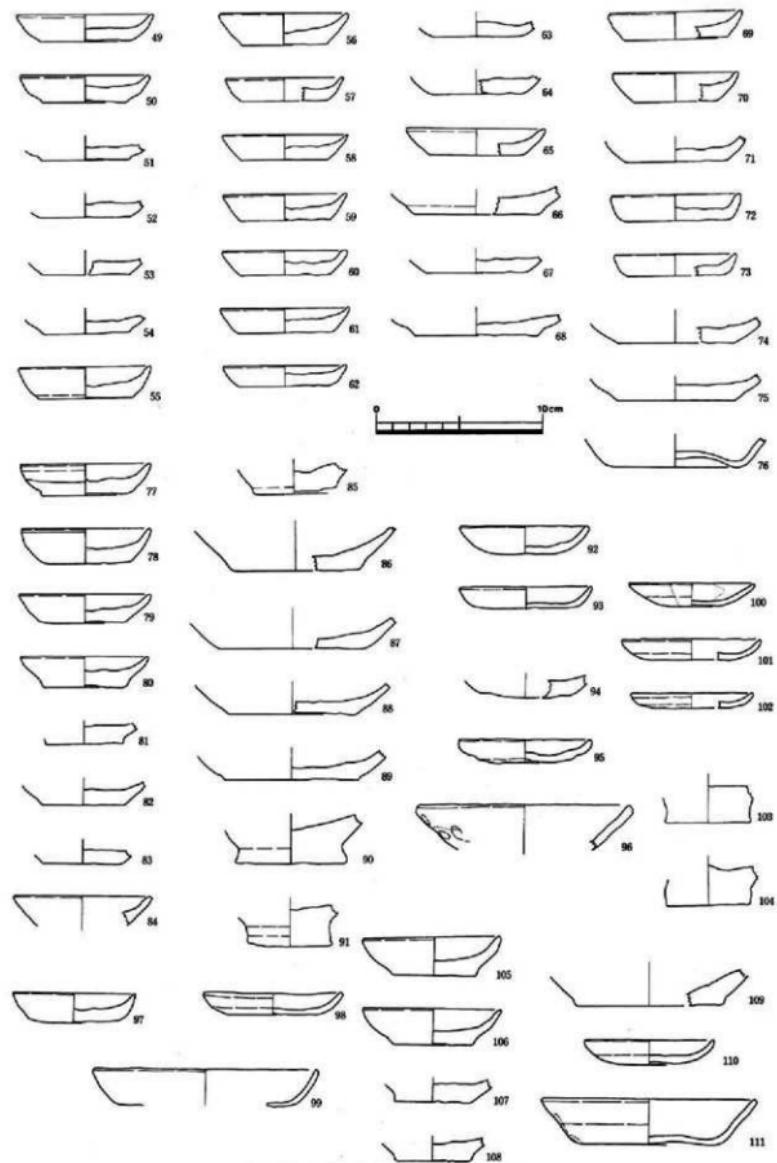
10号土坑（図116、13～16） ロクロ系のみで構成される。全体的に出土量は少ない。13は、小皿で、14は、柱状高台皿で、ハの字に開くものである。15、16は、楕で、15は、やや内湾して立ち上がり、内面の見込みが胴部内面のナデによって一段高くなっている。底部に若干の糸切り痕を残す。16は、外傾状に立ち上がるものであり、底部の薄いものである。底部に若干の糸切り痕を残す。12世紀前半頃に比定される（藤田編年I-II期）。

18号土坑（図116、17～19） 非ロクロ系のみで構成される。17は、I類で、口縁端部のナデが2段施されている（Aタイプ）。18は、I類で、口縁端部を面取りするタイプであるが、場所によっては、しっかりと面取りされておらず、形骸化が進んだ段階と言える。19も、I類で、口縁端部を面取りするタイプであるが、器形の歪みが著しい（Cタイプ）。14世紀前半頃に比定される（藤田編年III-I期）。

25号土坑（図116、20～48） ロクロ系のみで構成される。上、中、下層と分層されているが、資料に時期差はない。多量にまとまって出土している。20は、しっかりと底部を作り出し、やや外傾状に立ち上がる。中央見込み部分が膨らんでいる。21～23は、やや内湾気味に立ち上がるもので、21は、内面にナデ痕、外底部に糸切り痕が残る。27は、胎土が精良である。28、29は、やや小ぶりな法量で、直線的に立ち上がる。28は、底部を作り出している。32は、やや上げ底状を呈する底部から、内湾気味に立ち上がる。内部に煤が付着していた痕跡が残る。34は、薄手で非常に小型のものである。35は、内湾気



第116圖 造構出土土師器實測圖 ($S=1/3$)
(1~3 3号土坑, 4~12 9号土坑, 13~16 10号土坑, 17~19 18号土坑, 20~48 25号土坑)



第117図 遺構出土土師器実測図 ($S=1/3$)

(49~68 28号土坑, 69~76 32号土坑, 77~91 39号土坑, 92·93 41号土坑, 94~96 43号土坑, 97~99 44号土坑)
 (100~102 52号土坑, 103·104 56号土坑, 105~108 102号土坑, 109~111 1号竖穴状遗構)

味に立ち上がるるもので、底部に糸切り痕を若干残す。小皿よりも大きく、中皿とも言える。36~39は、柱状高台皿で36~38は、底部がハの字に開くタイプである。37は、胎土が精良である。39、底部が直線的なものである。40~48は、楕であり、40は、大型品で厚い底部より内湾して立ち上がるものである。42は、胎土精良で焼成も良く、硬質である。底部に糸切り痕を残す。44は、やや小型で、薄い底部から内湾気味に立ち上がるものである。底部に糸切り痕を若干残す。48は、浅い器形で内湾して立ち上がるものである。12世紀中頃に比定される（藤田編年Ⅰ—Ⅲ期）。

28号土坑（図117、49~68） ロクロ系のみで構成される。まとまった資料が得られており、特に小皿の占める割合が非常に大きい。49~65は、小皿である。49、50は、両者とも内湾気味に立ち上がるものである。50は、焼成よく、硬質である。51は、器型の歪みが著しい。55は、内湾気味に立ち上がるもので、低いが底部が作られている。57~62は、底部から直線的に立ち上がる器型で、見込みの浅いものである。63は、内面見込み部分が盛り上がり、内部のナデ痕が明瞭に残る。底部に糸切り痕を残す。非常に焼成も良く、硬質である。65は、底部からそのまま内湾気味に立ち上がるものである。66~68は、楕で、66は、分厚い底部のものである。68は、薄い底部から立ち上がるものである。底部に明瞭な糸切り痕を残す。12世紀後半に比定される（藤田編年Ⅱ—Ⅳ期）。

32号土坑（図117、69~76） ロクロ系と非ロクロ系より構成される。69~73は、ロクロ土師器小皿である。69、70は、内湾して立ち上がるるもの。72~73は直線的に立ち上がるものである。72は、明瞭な糸切り痕を若干残す。74、75は、楕で分厚い底部を呈するもので、75には、糸切り痕を若干残す。76は、非ロクロ土師皿Ⅰ類で、意識的な上げ底状を呈す。胎土は非常に精良で、焼成も良く硬質である（Cタイプ）。12世紀後半~末頃に比定される（藤田編年Ⅱ—Ⅳ期）。

39号土坑（図117、77~91） ロクロ系のみで構成される。比較的まとまった資料が得られた遺構である。上、中、下層と分層されているが、資料にほとんど時期差はない。77~85は、小皿である。77、78は、内湾して立ち上がるもので、ナデ工具の関係か、痕跡が明瞭に残る。特に口縁端部付近に強く出ている。両者とも底部に明瞭な糸切り痕を残す。79、80は、内湾気味に立ち上がるもので、見込みは浅めである。79は、焼成良好く硬質である。83、84は、非常に焼成良好く硬質である。83は、外面に煤の付着が確認出来る。85は、2回に分けて糸切りされており、1回位目とは反対方向から2回目が施されている。86~89は、楕で、比較的薄手の底部を有するものである。87は、底部に糸切り痕を若干残す。焼成良好く硬質である。90は、皿で、底部はハの字状に開く。91は、柱状高台皿で、直線的な底部のものである。底部に糸切り痕を若干残す。12世紀中頃に比定される（藤田編年Ⅰ—Ⅲ期）。

41号土坑（図117、92~93） 非ロクロ系のみで構成される。全体的な出土量は少ない。両者とも土師皿Ⅱ類である。92は、口縁端部を面取りするタイプで、見込みは比較的深めである（Cタイプ）。93は、平底から内湾して立ち上がるもので、口縁端部をそのままつまみ出している（Aタイプ）。13世紀中頃に比定される（藤田編年Ⅱ—Ⅳ期）。

43号土坑（図117、94~96） 43号土坑は、上層と下層に非常に時期差を持つ遺構である。下層は非ロクロ系が主体だが、若干ロクロ系が残っている。上層は、非ロクロ系のみで構成される。94、95が下層資料で、94は、ロクロ系の楕、95は、非ロクロ系の土師皿Ⅱ類であり、器壁が凸凹している。外面のナデ調整は粗いが、内面は、ナデ調整の後で刷毛状工具で仕上げてある（Aタイプ）。96は、上層資料で、土師皿Ⅰ類である。全体的に指頭圧痕が目立ち、器壁が凸凹している。粘土帶貼り付け痕が残る。口縁端部を面取りするタイプである（Cタイプ）。時期は、下層が13世紀初頭（藤田編年Ⅱ—Ⅳ期）に、上層が13世紀後半に比定される（藤田編年Ⅲ—Ⅳ期）。

44号土坑（図117、97~99） ロクロ系と非ロクロ系より構成される。97は、ロクロ系の小皿で、内

湾気味に立ち上がるるものある。糸切りの際、粘土が片方に寄ってしまっている。98は、非クロ系土師皿Ⅱ類で、口縁端部を面取りするタイプであるが、面取りがやや甘くなっている印象を受ける。99は、非クロ系土師皿Ⅰ類で、口縁端部を面取りするタイプであるが、同様に面取りがやや甘くなっている。器高の低いものである（Cタイプ）。13世紀前半頃に比定される（藤田編年Ⅱ—Ⅱ期）。

52号土坑（図117、100～102） 非クロ系のみで構成される。全て土師皿Ⅱ類である。全体的に出土量は少ない。100は、小さめの底部から外方に開いて立ち上がるもので、口縁端部をそのままつまみ出している。内外面とも煤が付着している。101は、平底の底部から内湾して立ち上がるもので、口縁端部はそのままつまみ出している（Aタイプ）。102は、口縁端部を面取りするタイプで、器高は若干低めである（Cタイプ）。13世紀後半頃に比定される（藤田編年Ⅲ—Ⅰ期）。

56号土坑（図117、103～104） ロクロ系のみで構成される。103、104とも柱状高台皿で、直線的なものである。12世紀中頃に比定される（藤田編年Ⅰ—Ⅲ期）。

102号土坑（図117、105～108） ロクロ系のみで構成される。105、106は、小皿で、ナデによりしっかり作り出された底部から内湾気味に立ち上がるものである。両者とも底部に糸切り痕を残す。106、108は、焼成も良く硬質である。12世紀中頃に比定される（藤田編年Ⅰ—Ⅲ期）。

4. 穫穴状遺構

1号竪穴状遺構（図117、109～111） ロクロ系と非クロ系より構成される。109は、ロクロ系の椀で、厚い底部を持つ。110は、非クロ系土師皿Ⅱ類で、内湾して立ち上がるもので、口縁端部はそのままつまみ出している（Aタイプ）。111は、非クロ系土師皿Ⅰ類で、口縁端部を面取りするタイプで、底部が全体的に上げ底気味になっている。両者とも、胎土は精良で、焼成も良く硬質である。12世紀末～13世紀初頭頃に比定される（藤田編年Ⅱ—Ⅰ3期）。

5. 井戸

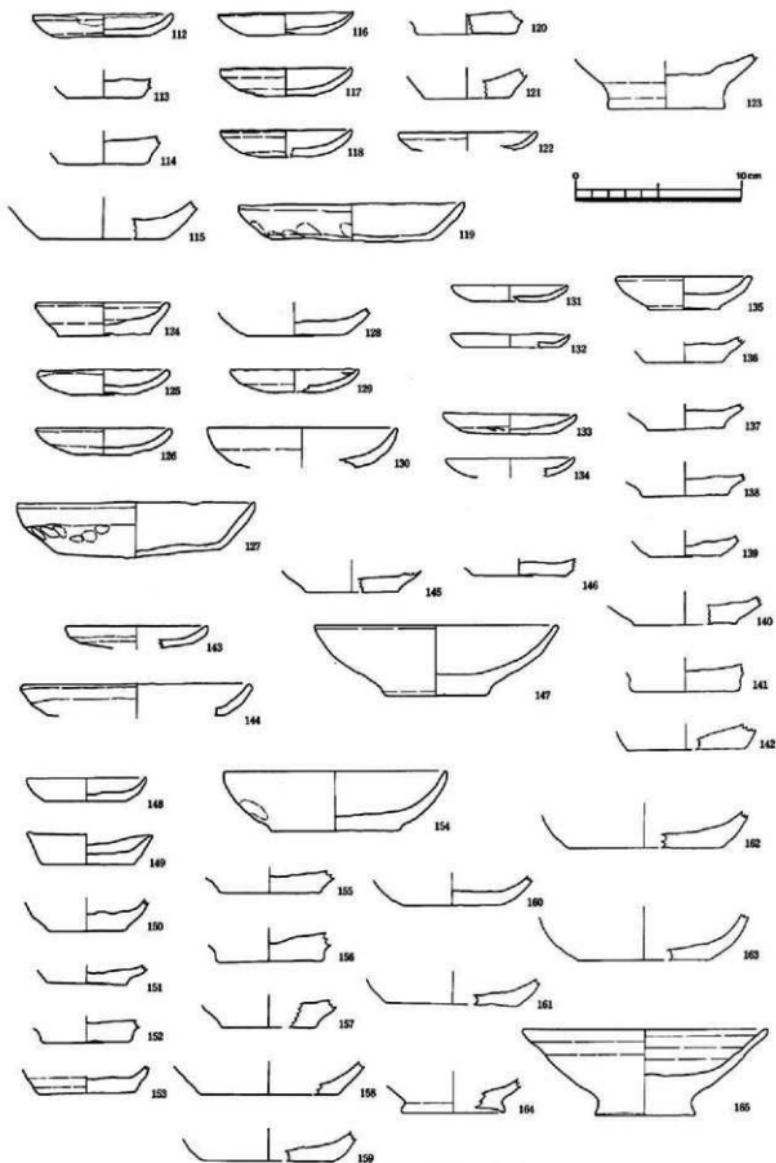
相対的に井戸より出土した資料は非常に少ない。荒木田では、井戸に土師器を多量に投棄する行為は行われていなかたようである。

2号井戸（図118、112～115） ロクロ系と非クロ系より構成される。112は、非クロ系土師皿Ⅱ類で、口縁端部を面取りするタイプである。内外面とも煤けている（Cタイプ）。113、114は、ロクロ系小皿で焼成良く硬質である。115は、椀で、分厚い底部を持つものである。12世紀後半頃に比定される（藤田編年Ⅱ—Ⅰ1期）。

3号井戸（図118、116～122） 上、中、下層と分層されているが、中、下層資料にほとんど時期差はない。これらと上層資料間にには時期差がある。上、中、下層ともロクロ系と非クロ系より構成される。

下層遺物 116～119は、非クロ系土師皿Ⅱ類である。116は、内湾気味に立ち上がるもので、口縁端部はそのままつまみ出るものである。底部に指頭圧痕が明瞭に残る（Aタイプ）。117、118は、直線的に立ち上がるもので、口縁部は、ナデの仕方により屈曲した状態になっている（Aタイプ）。三者とも焼成良く硬質である。119は、非クロ系土師皿Ⅰ類で、口縁端部を面取りするタイプで、器高が低くナデ幅の広いものである。底部付近に指頭圧痕が明瞭に残る（Cタイプ）。

上層遺物 120、121が、ロクロ系の椀で、焼成は良い。122は、非クロ系土師皿Ⅱ類で、直線的に立ち上がるもので、口縁部は、ナデの仕方により屈曲した状態になっている（Aタイプ）。13世紀前半頃に比定される（藤田編年Ⅱ—Ⅲ期）。



第118図 進岡出土土師器実測図 (S=1/3)

(112~115 2号井戸、116~122 3号井戸、123 4号井戸、124~127 埋納ビット、128~130 8号掘立、131~132 11号掘立
133~134 14号掘立、135~142 18号掘立、143~144 25号掘立、145~147 35号掘立、148~165 1号溝)

4 井戸（図118、123） ロクロ系のみで構成される。122は、皿である。焼成は良い。内面にナデを施した時に粘土が寄ってしまい、その部分が突起状を呈しているが、そのまま焼成されている。底部に糸切り痕を若干残す。12世紀中頃に比定される（藤田編年I—III期）。

6. 埋納ピット（図118、124—127）

土師器を収めた埋納ピットである。ロクロ系と非ロクロ系が完全に共存する資料である。ロクロ系小皿1枚、非ロクロ系土師皿I類が1枚、非ロクロ系土師皿II類2枚で構成される。124は、ロクロ系小皿で内外面とも作りは粗く、回転ナデ痕を明瞭に残している。但し、焼成は良く硬質で、ムラなく橙色に発色している。125、126は、非ロクロ系土師皿II類で、口縁端部を面取りするタイプである。124は、器型がやや歪む。底部中央が凹むものである。127は、非ロクロ系土師皿I類で、口縁端部を面取りするタイプである。見込みが深く、ナデ幅は狭い。胴部下半には、指頭圧痕が明瞭に残る。12世紀後半頃に比定される（藤田編年II—I期）。

7. 捩立柱建物跡

8号掘立（図118、128—130） ロクロ系と非ロクロ系より構成される。128は、ロクロ系の楕の底部である。129は、非ロクロ系土師皿II類である。口縁端部をそのままつまみ出すものだが、調整の際に口縁端部内面に粘土が寄ってしまい、帯になっている（Aタイプ）。130は、非ロクロ系土師皿I類である。内楕して立ち上がり、口縁端部をそのままつまみ出すものである（Aタイプ）。13世紀初頭頃に比定される（藤田編年II—I期）。

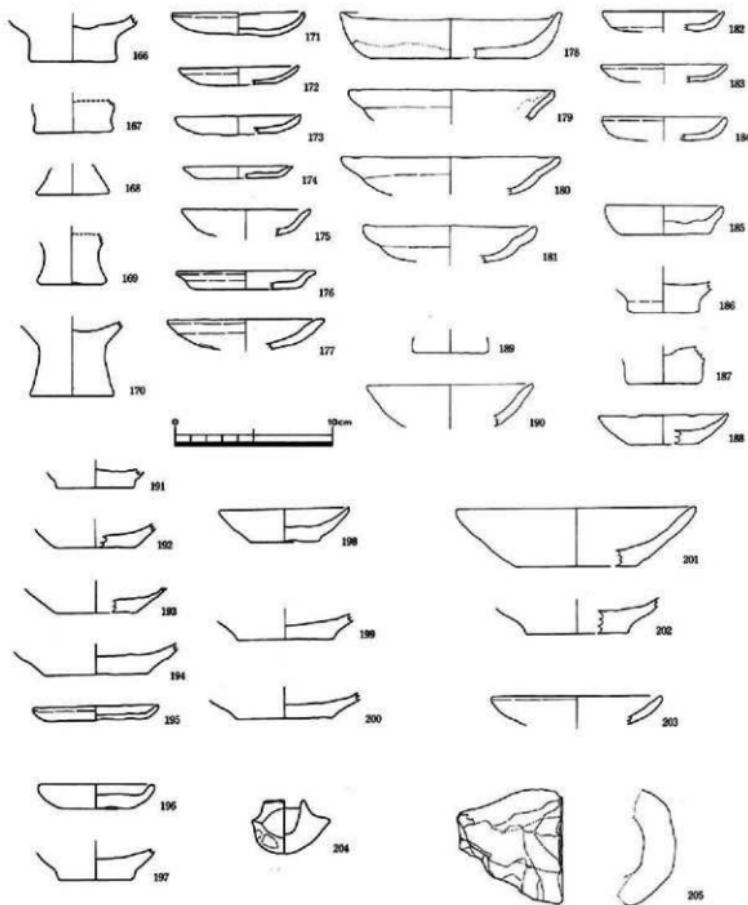
11号掘立（図118、131—132） 非ロクロ系のみで構成される。両者とも土師皿II類で、見込みの浅い小型のものである。131は、丸底から内湾して立ち上がるものの、132は、平底の底部から屈曲して内湾気味に立ち上がるものである（Aタイプ）。14世紀中頃に比定される（藤田編年III—I期）。

14号掘立（図118、133—134） 非ロクロ系のみで構成される。両者とも土師皿II類で、133は、平底の底部から直線的に立ち上がるものである。口縁端部をそのままつまみ出す（Aタイプ）。134は、平底の底部からやや屈曲して立ち上がるもので、見込みは浅い。口縁端部を面取りするタイプである（Cタイプ）。13世紀中頃～後半頃に比定される（藤田編年III—I期）。

18号掘立（図118、135—142） ロクロ系のみで構成される。135—138は小皿で、135は、底部しっかり作り出しており、内湾して立ち上がる、見込みの浅いものである。底部に糸切り痕を若干残す。136は、底部中央がやや凹む。137は、この資料のなかで唯一、胎土焼成とともに良いものである。底部に糸切り痕を若干残す。140—142は、楕の底部である。137は、ナデにより底部をしっかり作り出している。137は、内面見込み部分中央からそのまま立ち上がるもので、その部分の器壁が薄い。12世紀中頃に比定される（藤田編年I—III期）。

25号掘立（図118、143—144） 非ロクロ系のみで構成される。土師皿I類、II類がある。143は、I類で、口縁部は2段ナデで屈曲しているが、口縁端部はそのままつまみ出す。口縁部付近が煤ける（Aタイプ）。144は、II類で、口縁端部を面取りするタイプである。面取りはしっかり施されている。身の浅いものである（Cタイプ）。12世紀末頃に比定される（藤田編年II—I期）。

35号掘立（図118、145—147） ロクロ系のみで構成される。145、146は、小皿底部である。145は、ナデによりしっかりと作り出された底部から内湾して立ち上がるもので、口径に対し底径の占める割合が小さいものである。底部に糸切り痕を若干残す。12世紀前半頃に比定される（藤田編年I—I期）。



第119図 造構出土土器実測図 (S=1/3)

(166~181 1号溝、182~184 2号溝、185~188 5号溝、189~190 8号溝、191~195 15号溝、196~197 16号溝)
 (198 21号溝、199~200 25号溝、201~202 43号溝、203 44号溝、204 25号土坑、205 43号溝)

8. 溝

1号溝（図118、148~165）（図119、166~180） 大溝資料であり、ロクロ系と非ロクロ系が混在している。資料は、古代末～中世後期までかなりの時期幅をもって存在する。148~153は、ロクロ系小皿である。148は、内湾して立ち上がるるもので、見込みは浅い。149は、直線的に立ち上がるもので、器型の歪みが著しい。底部に糸切り痕を残す。151は、内部にナデ痕が残るが、焼成は良い。153は、底部を比較的厚めに作り出している。底部に糸切り痕を残す。154~162は、楕である。154は、薄い底部から内湾して立ち上がるもので、器高の低いタイプである。外面が煤ける。底部に糸切り痕を若干残す。160、162は、底部に糸切り痕を若干残している。163は、内湾して立ち上がるもので、底部に一部煤が付着している。164は、有台楕である。165は、皿で、内楕気味に立ち上がる器型で、内外面ともに回転

ナデの痕跡が残る。底部に糸切り痕を残す。166～170は、柱状高台皿で、166、167が、直線的なもので、168、170がハの字に開くものである。163は、底部中央が凹む。これらのロクロ系土師器の年代は、157、164、165が、11世紀末頃（藤田編年Ⅰ—Ⅱ期）、151、159、160、161、162、163、167が、12世紀前半頃（藤田編年Ⅰ—Ⅱ期）、149、150、152、153、155、156、165、168、170が12世紀中頃（藤田編年Ⅰ—Ⅲ期）、154、158は、12世紀後半頃（藤田編年Ⅱ—Ⅰ期）、148が、13世紀前半頃（藤田編年Ⅱ—Ⅱ期）に比定される。

171～181は、非ロクロ系土師皿で、171～176がⅠ類で、177～181がⅡ類である。171は、口縁端部を面取りするタイプで、器型はやや歪む。底部中央付近が凹む（Cタイプ）。172は、直線的に立ち上がり、口縁端部はそのままつまみ出す。器肉が非常に薄く白色を呈す。173も、口縁端部はそのままつまみ出すタイプで、内面に煤が付着していたと思われる（Aタイプ）。174は、小ぶりで見込みも浅いもので平底から外反して立ち上がるるものである（Eタイプ）。175は、丸底から外反気味に立ち上がっている（Aタイプ）。176は、平底から外反して立ち上がるものの、全体に煤けている。焼成も良い（Eタイプ）。177は、丸底から外反気味に立ち上がるものの、器肉は厚い（Aタイプ）。178は、口縁端部はそのままつまみ出すもので、器肉は厚い。器型に歪みがあり、胴部下半に粘土帶貼り付け痕を残す（Aタイプ）。179、180は、外反気味に立ち上がり、口縁端部を面取りするタイプである。面取りはかなり甘く形態化が進んだ段階と言える。179は、内面に煤の付着が認められる（Cタイプ）。181は、丸底から外反気味に立ち上がっている。器肉は厚い（Aタイプ）。これらの非ロクロ系土師皿の年代は、178が、12世紀後半頃（藤田編年Ⅱ—Ⅰ期）、171が、13世紀前半～中頃（藤田編年Ⅱ—Ⅲ期）、172が13世紀後半頃（藤田編年Ⅲ—Ⅰ期）、174は、14世紀前半頃（藤田編年Ⅲ—Ⅱ期）、179、180が、14世紀前半～中頃（藤田編年Ⅲ—Ⅱ期～Ⅳ期）、173は、14世紀中頃（藤田編年Ⅲ—Ⅱ期）、175、177は、14世紀後半頃（藤田編年Ⅳ—Ⅰ期）、176、181は、15世紀前半～中頃（藤田編年Ⅳ—Ⅱ期）に比定される。

2号溝（図119、182～184） 非ロクロ系のみで構成される。全て、土師皿Ⅱ類で、182は、直線的に立ち上がるるもので、口縁端部はそのままつまみ出すものである（Aタイプ）。183、184は、口縁端部を面取りするタイプで、183は、直線的に立ち上がるもの。184は、内反気味に立ち上がるもので、器肉は厚い（Cタイプ）。13世紀前半～中頃（藤田編年Ⅱ—Ⅲ期）に比定される。

5号溝（図119、185～188） ロクロ系のみで構成され、資料に時期幅がある。185～187は小皿で185は、作りが粗雑である。186は、しっかりとした底部を作り出す。187は、やや小さい底部より、直線的に外方に開いて立ち上がる。188は、柱状高台皿で、直線的なもので、見込み中央部分が凹む。186、187、188は、12世紀前半頃（藤田編年Ⅰ—Ⅱ期）、185は、12世紀後半頃（藤田編年Ⅱ—Ⅰ期）に比定される。

8号溝（図119、189～190） ロクロ系と非ロクロ系より構成される。資料に時期幅がある。189は、柱状高台皿である。190は、非ロクロ系土師皿Ⅱ類で、丸底から、外反気味に立ち上がる。189が、12世紀中頃（藤田編年Ⅰ—Ⅲ期）、190は、15世紀前半～中頃（藤田編年Ⅳ—Ⅱ期）に比定される。

15号溝（図119、191～195） ロクロ系と非ロクロ系より構成される。資料に時期幅がある。191～193は、ロクロ系小皿で191は、しっかりとした底部を持ち、焼成も良く、硬質である。193は、直線的に外方に開いて立ち上がるもので、胴部の器肉が非常に薄い。195は、非ロクロ系土師皿Ⅱ類で、口縁端部を面取りするタイプで器高の非常に低いものである（Cタイプ）。191～193は、12世紀前半頃（藤田編年Ⅰ—Ⅱ期）、194は、12世紀中頃（藤田編年Ⅰ—Ⅲ期）、195は、13世紀前半～中頃（藤田編年Ⅱ—Ⅲ期）に比定される。

16号溝（図119、196～197） ロクロ系のみで構成される。196、197は、小皿で、196は、底部より屈曲して立ち上がり、肥厚した胴部を持つ。197は、しっかりとした底部を作り出すものである。197は、12世紀前半（藤田編年I—I期）、196は、12世紀中頃（藤田編年I—III期）に比定される。

21号溝（図119、198） ロクロ系のみで構成される。直線的に外方に開いて立ち上がるもので、底部に糸切り痕を若干残す。12世紀前半頃（藤田編年I—I期）に比定される。

25号溝（図119、199～200） ロクロ系のみで構成される。199、200とも楕底部で、199が、胎土焼成とともに良い。12世紀中頃（藤田編年I—III期）頃に比定される。

43号溝（図119、201～202） ロクロ系のみで構成される。201、202とも楕で、201は、やや内湾して立ち上がるもので、器高の低いタイプである。202は、非常に分厚い底部を持つ。12世紀前半（藤田編年I—I期）に比定される。

44号溝（図119、203） ロクロ系と非ロクロ系より構成され、資料に時期幅がある。図示出来たの非ロクロ系土師皿のみである。土師皿I類で、内湾して立ち上がるものである。肥厚した器肉を持つ（Aタイプ）。14世紀後半（藤田編年IV—I期）に比定される。

9. 特殊遺物

耳皿（図119、204） 手づくねにより成形される。指頭圧痕を残す。25号土坑出土。

フィゴ羽口（図119、205） 送風孔が先端へ行くほど細くなる。未使用と思われる。43号溝出土。

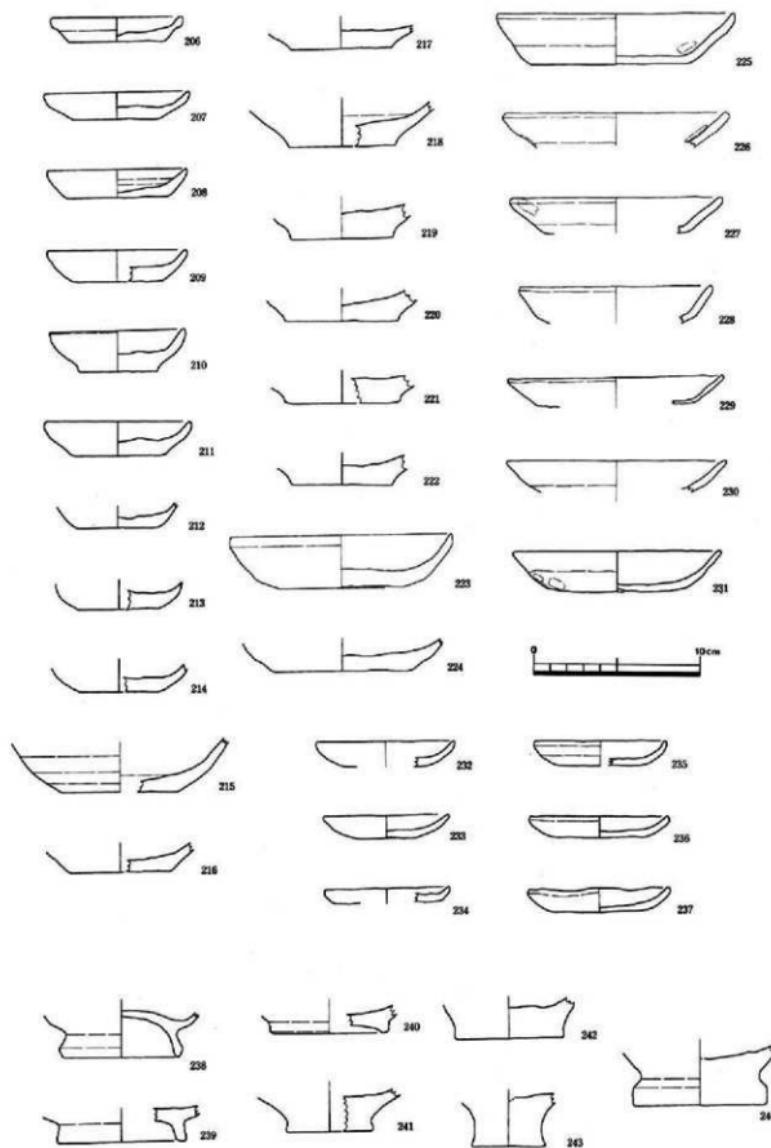
10. ピット出土遺物（図120、206～238）

ピット出土遺物は、概要を略述するに止めたい。206～214は、ロクロ系土師器小皿で、208は、胎土が良い。210は、しっかりした底部より、内湾気味に立ち上がるるものである。底部に糸切り痕を残す。215～224は、ロクロ系土師器楕である。215～216が、比較的薄い底部を呈すタイプで、217～224が厚い底部を呈すタイプである。215は、胎土、焼成とともに良い。222、224は、底部に糸切り痕を残す。223は、内湾して立ち上がるもので、器高の低いタイプである。底部に糸切り痕を残す。

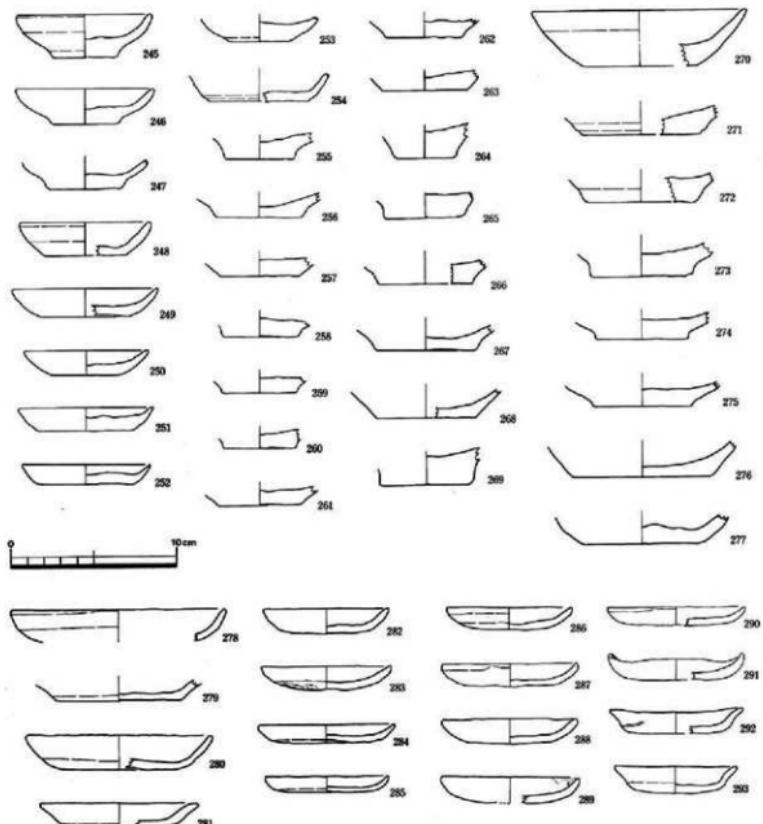
225～231は、非ロクロ系土師皿I類で、225～229が、口縁端部を面取りするタイプで、225は、横ナデ調整後に縱方向ナデを外面に施している（Cタイプ）。227は、内外面ともに指頭圧痕が目立つ。226は、外面に煤が付着している。230、231は、口縁端部はそのままつまみ出すタイプで、231は、底部中央が凹むもので、指頭圧痕が目立つ。煤の付着も確認出来る（Aタイプ）。232～237は、非ロクロ系土師皿II類で、232～233は、口縁端部をそのままつまみ出すタイプで、233は、直線的に立ち上がるもので、底部中央が凹むタイプである。胎土、焼成とともに良い。234～237は、口縁端部を面取りするタイプで、234は、非常に器高、見込み高の低いものである。235は、内湾気味に立ち上がるタイプ。236、237は、直線的に立ち上がるタイプである。12世紀前半～14世紀後半頃までの資料がある。（藤田編年I—I期～IV—I期）に比定される。12世紀後半～13世紀前半頃までの資料が多い。

11. 包含層出土遺物（図120、238～244、図121、245～293）

包含層出土遺物も、概要を略述するに止めたい。238～240は有台楕である。238は、いわゆる足高高台のもので、10世紀末～11世紀初頭の頃のものである。239も古代末の資料で、11世紀後半代のものである。241～242は、皿の底部である。243は、柱状高台皿で、ハの字に開くものである。244は、灯明台として定義されているものだろう。但し、煤の痕跡はない。245～266までは、小皿で、245～247は底部をしっかりと作り出してから立ち上がるもので、245は胎土焼成が非常に精良なもの。248～252は底部



第120図 遺構出土及び、調査区出土土器等実測図
(206-237 ピット出土遺物、238-245 包含層出土遺物)



第121図 調査区包含層等出土土師器実測図 (S=1/3)

266～277は、ロクロ系土師器楕である。268は、直線的に立ち上がる、器高の低いタイプである。

278～281は、非ロクロ系土師Ⅲ類で、282～294は、非ロクロ系土師Ⅳ類である。Ⅲ類で278が、口縁端部を面取りするタイプである（Cタイプ）。279は、全ての破片と共通性がなく、平底から外反して立ち上がる様から、藤田分類で言うEタイプに該当すると思われる。280は、口縁端部はそのままつまみ出すタイプである（Aタイプ）。281は、丸底から外反気味に立ち上がるものである（Aタイプ）。Ⅳ類は、282～285は、口縁端部をそのままつまみ出すタイプで、282は、精製品で、底部中央が凹むタイプである。283は、指頭圧痕が目立つ。286～291は、口縁端部を面取りするタイプで、289は、内面に煤が付着している（Cタイプ）。292は、平底から外反して立ち上がり、底部と胴部の境に明瞭なスジが残る。内面に煤が付着している（Eタイプ）。293は、丸底から外反気味に立ち上がるものである。焼成良く硬質である（Aタイプ）。11世紀前半～15世紀中頃までの資料がある。（古代末～Ⅳ—Ⅱ期）に比定される。12世紀中頃～13世紀前半頃までの資料が多い。

第8表 古代末～中世土器観察表

| 図版 No. | 遺構 層位 | 器種 | 胴部外面 | 胴部内面 | 底部 | 高台 | 口径 | 器高 | 見込み高 | 底径 | 高台径 高さ | 色調 胎土 | 備考 |
|-----------|----------|------------|----------------------|-------------|--------------|----|------|-----|------|------|-----------|----------|-----|
| 116 | 3号土坑 | R系 小瓶 | | | 底部A | | | | | 5.0 | | 灰色 | |
| 1 | " | " | | | 底部A | | | | | | | a-2 | |
| 2 | " | T系 II-A | | | 底部C | | 7.6 | 1.3 | 0.9 | | | 灰色 | |
| 3 | " | " | | | 底部A | | | | | 4.5 | | b-1 | |
| 4 | 9号土坑 | R系 小瓶 | | | 底部A | | | | | 13.8 | 3.9 | 3.0 | 浅黄橙 |
| 5 | " | " | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | | | | 6.9 | | b-3 | 浅黄橙 |
| 6 | " | " | " | " | | | 13.0 | | | | | b-1 | 浅黄橙 |
| 7 | " | " | " | " | 底部A | | | | | 6.6 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 8 | " | " | " | " | 底部B | | | | | 6.8 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 9 | " | " | " | " | 底部A | | | | | | | a-2 | 浅橙 |
| 10 | " | " | " | " | 底部B | | | | | 5.7 | | b-3 | 浅黄橙 |
| 11 | " | " | 柱高瓶 | | 柱状高台 中央孔? | | | | | 5.3 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 12 | " | " | 柱高瓶 | | 柱状高台 | | | | | 3.6 | | b-1 | |
| 13 | 10号土坑 | R系 小瓶 | | | 底部B | | | | | 5.0 | | b-1 | |
| 14 | " | " | 柱高瓶 | | 柱状高台 | | | | | 2.1 | | b-1 | |
| 15 | " | " | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | | | | 4.8 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 16 | " | " | " | " | 底部A | | | | | 4.7 | | b-2 | 浅黄橙 |
| 17 | 18号土坑 | T系 I-A | | | 底部B | | 11.2 | 1.7 | 1.4 | | | b | 浅黄橙 |
| 18 | " | T系 I-C | 捺压-ヨコ ナデ-ヨコ ナデ | ナデ-ヨコ ナデ | 底部B | | 11.8 | 2.3 | 1.8 | | | b | 浅橙 |
| 19 | " | T系 I-C | | | | | 12.8 | | | | | b | 浅橙 |
| 20 | 25号土坑 | R系 小瓶 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 8.0 | 1.7 | 0.7 | 4.0 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 21 | " | " | " | " | 底部A 上底気味 | | 8.8 | 2.2 | 1.4 | 5.4 | | b-2 | 浅黄橙 |
| 22 | " | " | " | " | 底部A | | 8.5 | 2.0 | 1.6 | 5.4 | | b-2 | 浅黄橙 |
| 23 | " | " | " | " | 底部A | | 8.8 | 2.1 | | 5.6 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 24 | " | " | | | 底部A | | | | | 5.4 | | b-2 | |
| 25 | " | " | | | 底部A | | | | | 5.6 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 26 | " | " | | | 底部A | | | | | 4.8 | | b-2 | 浅黄橙 |
| 27 | " | " | | | 底部A | | | | | 4.8 | | b-1 | 赤橙 |
| 28 | " | " | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 6.8 | 1.6 | 0.9 | 4.6 | | b-2 | 浅黄橙 |
| 29 | " | " | " | " | 底部A | | 7.0 | 1.8 | 0.8 | 4.3 | | b-1 | 浅黄橙 |
| 30 | " | " | " | " | 底部B | | | | | 4.8 | | b-3 | 灰色 |

| No. | 遺構 番号 | 器種 | 副部外面 | 副部内面 | 底 部 | 高 台 | 口 径 | 器 高 | 見 达 水 高 | 底 径 | 高 台 径 高さ | 色 調 | 胎 土 | 備 考 |
|-----|----------|----------|------|------|-------------|------|------|-----|------------|-----|-------------|------------|-----|-----|
| 31 | 25号土坑 | R系 小皿 | | | 底部A | | | | | 4.5 | | 灰色 b-3 | | |
| 32 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B 上底気味 | | 8.8 | 1.8 | 1.1 | 4.4 | | 淡橙 b-2 | | |
| 33 | * | * | * | * | 底部A | | 7.5 | 1.6 | 0.9 | 5.8 | | 灰色 a-3 | | |
| 34 | * | * | * | * | 底部A | | 6.6 | 1.1 | 0.75 | 4.2 | | 灰色 b-3 | | |
| 35 | * | * | | | 底部A | | 10.7 | 2.1 | 1.5 | 7.0 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 36 | * | * | | | | 柱状高台 | | | | | 4.6 3.1 | 灰色 b-2 | | |
| 37 | * | * | | | | * | | | | | 5.4 4.2 | 淡橙 b-1 | | |
| 38 | * | * | | | | * | | | | | 6.0 2.9 | 灰色 a-2 | | |
| 39 | * | * | | | | * | | | | | 4.8 2.0 | 浅黄橙 b-2 | | |
| 40 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A 上底気味 | | 15.6 | 5.2 | 3.7 | 8.0 | | 淡橙 b-2 | | 深付着 |
| 41 | * | * | | | 底部A | | | | | | 7.0 | 灰色 b-1 | | |
| 42 | * | * | | | 底部B | | | | | | 6.8 | 浅黄橙 b-3 | | |
| 43 | * | * | | | 底部A | | | | | | 7.6 | 灰色 a-2 | | |
| 44 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 13.8 | 4.1 | 3.6 | 8.2 | | 灰黄 a-1 | | |
| 45 | * | * | | | 底部A | | | | | | 7.0 | 浅黄橙 b-2 | | |
| 46 | * | * | | | 底部A | | | | | | 7.2 | 灰色 b-1 | | |
| 47 | * | * | | | 底部A | | | | | | 5.4 | 浅黄橙 b-2 | | |
| 48 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 13.4 | 3.6 | 2.1 | 7.6 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 49 | 28号土坑 | R系 小皿 | * | * | 底部A | | 8.2 | 1.6 | 0.75 | 5.4 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 50 | * | * | * | * | 底部B | | 7.7 | 1.6 | 0.65 | 5.1 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 51 | * | * | | | 底部B | | | | | | 5.2 | 浅黄橙 b-2 | | |
| 52 | * | * | | | 底部A | | | | | | 5.4 | 浅黄橙 b-2 | | |
| 53 | * | * | | | 底部A | | | | | | 5.2 | 浅黄橙 b-2 | | |
| 54 | * | * | | | 底部B | | | | | | 5.2 | 淡橙 a-2 | | |
| 55 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 7.6 | 1.9 | 1.2 | 5.2 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 56 | * | * | * | * | 底部B | | 7.8 | 1.9 | 1.2 | 5.4 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 57 | * | * | * | * | 底部A | | 7.2 | 1.4 | 0.8 | 5.1 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 58 | * | * | * | * | 底部A | | 7.6 | 1.5 | 0.8 | 5.6 | | 浅黄橙 b-2 | | |
| 59 | * | * | * | * | 底部A | | 7.4 | 1.6 | 0.7 | 5.4 | | 灰黄 b-1 | | |
| 60 | * | * | * | * | 底部A | | 7.4 | 1.5 | 0.65 | 5.4 | | 浅黄橙 b-1 | | |
| 61 | * | * | * | * | 底部A | | 7.6 | 1.5 | 0.7 | 5.6 | | 灰黄 b-2 | | |

| 図版 No. | 構 成 部 位 | 器 種 | 脚部外面 | 脚部内面 | 底 部 | 高 台 | 口径 | 器高 | 見 込 み高 | 底径 | 高台径 高さ | 色 調 胎 土 | 備 考 |
|-----------|---------------------|------------|------|------|--------|--------|------|------|--------------|------------|-----------|------------------|--------|
| 62 | 28号土坑 R系 小皿 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 7.4 | 1.25 | 0.45 | 5.4 | | | 浅黄橙 b-2 | |
| 63 | * | * | * | 底部A | | | | | | 5.2 | | 淡橙 b-1 | |
| 64 | * | * | * | 底部A | | | | | | 5.2 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 65 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 8.4 | 1.6 | 0.9 | 5.5 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 66 | * | * | * | 底部B | | | | | | 7.5 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 67 | * | * | * | 底部A | | | | | | 5.8 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 68 | * | * | * | 底部A | | | | | | 7.4 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 69 | 32号土坑 R系 小皿 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 7.9 | 1.65 | 0.8 | 6.2 | | | 灰色 b-3 | |
| 70 | * | * | * | * | 底部A | | 7.5 | 1.8 | 0.8 | 6.0 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 71 | * | * | * | 底部A | | | | | | 6.0 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 72 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 7.8 | 1.6 | 0.7 | 6.6 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 73 | * | * | * | * | 底部A | | 7.4 | 1.3 | | 5.9 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 74 | * | * | * | 底部A | | | | | | 7.1 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 75 | * | * | * | 底部A | | | | | | 7.1 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 76 | * | T系 I-C | * | 底部D | | | | | | 7.2 | | 淡橙 a | |
| 77 | 39号土坑 R系 小皿 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 7.8 | 1.9 | 0.9 | 5.3 | | | 浅黄橙 a-2 | |
| 78 | * | * | * | * | 底部B | | 7.8 | 2.1 | 1.1 | 5.1 | | 浅黄橙 a-2 | |
| 79 | * | * | * | * | 底部A | | 7.8 | 1.8 | 1.0 | 5.4 | | 浅黄橙 a-2 | |
| 80 | * | * | * | * | 底部B | | 7.5 | 1.9 | 0.9 | 4.8 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 81 | * | * | * | 底部B | | | | | | 4.6 | | 灰色 b-3 | |
| 82 | * | * | * | 底部A | | | | | | 4.9 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 83 | * | * | * | 底部A | | | | | | 4.8 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 84 | * | * | 回転ナデ | 回転ナデ | | 8.1 | | | | | | 淡橙 b-2 | |
| 85 | * | * | * | 底部B | | | | | | 4.9 | | 淡橙 b-2 | |
| 86 | * | * | * | 底部B | | | | | | 7.6 | | 灰黄 a-1 | 内面浅黄橙 |
| 87 | * | * | * | 底部A | | | | | | 8.6 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 88 | * | * | * | 底部A | | | | | | 7.3 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 89 | * | * | * | 底部B | | | | | | 8.0 | | 灰黄 b-3 | |
| 90 | * | * | * | 底部B | | | | | | 6.7 | | 灰黄 a-1 | |
| 91 | * | * | 柱高皿 | | 柱状高台 | | | | | 5.1 2.2 | | 灰色 a-1 | |
| 92 | 41号土坑 T系 II-C | 掌厚ニコ ナデ | ヨコナデ | 底部A | | 7.6 | 1.7 | 0.9 | | | | 浅黄橙 b | |

| 固版 No. | 造 構 層 位 | 器 種 | 胸部外面 | 胸部内面 | 底 部 | 高 台 | 口 径 | 器 高 | 見 込 み 高 | 底 径 | 高 台 径 高 さ | 色 調 胎 土 | 備 考 |
|-----------|------------------|------------|-------------|-------------|--------|--------|--------|--------|------------------|--------|-----------------------|------------------|--------|
| 93 | 41号土坑 II-A | T系 II-A | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部B | | 7.8 | 1.3 | 1.0 | | | 淡橙 c | |
| 94 | 43号土坑 下層 | R系 輪? | | | | | | | | 5.4 | | 淡橙 b-3 | 内面灰黄 |
| 95 | * | T系 I-A | 草厚-ヨコ ナデ | ヨコナデ- ハケ | 底部C | | 7.8 | 1.4 | 0.7 | | | 淡橙 b | |
| 96 | * | T系 I-C | ヨコナデ 指压 | ヨコナデ | | | 12.0 | | | | | 淡橙 b | 煤付着 |
| 97 | 44号土坑 小皿 | R系 小皿 | | | 底部A | | 7.3 | 1.8 | 0.9 | 5.6 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 98 | * | T系 II-C | | | 底部B | | 8.2 | 1.3 | 0.9 | | | 橙 b | |
| 99 | * | I-C | | | | | 13.4 | 2.2 | | | | 淡橙 b | |
| 100 | 52号土坑 II-A | T系 II-A | | | 底部C | | 7.5 | 1.4 | 1.0 | | | 淡橙 b | |
| 101 | * | II-A | | | 底部B | | 8.4 | 1.25 | 0.8 | | | 浅黄橙 b | |
| 102 | * | * | | | 底部B | | 7.4 | 0.8 | 0.5 | | | 橙 b | |
| 103 | 56号土坑 柱高盤 | R系 柱高盤 | | | | 柱状高台 | | | | | 5.0 | 灰色 | |
| 104 | * | * | | | | * | | | | | 2.4 | b-1 | |
| 105 | 102号土坑 小皿 | R系 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 8.1 | 2.4 | 1.4 | 5.0 | | | 浅黄橙 a-2 | |
| 106 | * | * | * | * | 底部B | | 8.2 | 2.2 | 1.3 | 4.8 | | 淡橙 b-1 | 内面灰黄 |
| 107 | * | * | | | 底部B | | | | | 4.6 | | 浅黄橙 a-2 | 内面灰黄 |
| 108 | * | * | | | 底部B | | | | | 4.6 | | 灰黄 b-1 | |
| 109 | 1号鑿穴 輪 | R系 輪 | | | 底部B | | | | | 8.4 | | 浅黄橙 a-1 | |
| 110 | * | T系 II-C | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部C | | 7.8 | 1.5 | 0.9 | | | 淡橙 a | |
| 111 | * | I-C | * | * | 底部D | | 12.8 | 2.9 | 2.3 | | | 浅黄橙 a | |
| 112 | 2号井戸 II-C | T系 II-C | * | * | 底部B | | 8.2 | 1.3 | 0.9 | | | 淡橙 C | 煤付着 |
| 113 | * | R系 小皿 | | | 底部B | | | | | 4.6 | | 浅黄橙 b-1 | 内面灰黄 |
| 114 | * | * | | | 底部B | | | | | 5.6 | | 浅黄橙 b-3 | |
| 115 | * | * | | | 底部A | | | | | 7.4 | | 浅黄橙 a-2 | |
| 116 | 3号井戸 下層 | T系 II-A | 草厚-ヨコ ナデ | ナデ-ヨコ ナデ | 底部C | | 8.0 | 1.3 | 1.0 | | | 浅黄橙 b | |
| 117 | * | * | ヨコナデ | * | 底部B | | 7.8 | 1.7 | 1.2 | | | 浅黄橙 b | |
| 118 | * | * | * | * | 底部B | | 7.8 | 1.6 | 1.1 | | | 浅黄橙 b | |
| 119 | 中層 | I-C | * | * | 底部B | | 13.4 | 2.3 | 1.8 | | | 淡橙 C | |
| 120 | 上層 | R系 輪 | | | 底部B | | | | | 6.0 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 121 | * | * | | | 底部B | | | | | 5.2 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 122 | * | T系 II-A | | | | | 8.2 | | | | | 灰黄 b | |
| 123 | 4号井戸 | R系 皿 | | | 底部B | | | | | 7.0 | | 灰色 b-1 | |

| No. | 造 構 層 位 | 器 種 | 胴部外面 | 胴部内面 | 底 部 | 高 台 | 口径 | 器高 | 見込 み高 | 底径 | 高台径 高さ | 色 調 土 | 備 考 |
|-----|------------------------|------------------|------------------|------|-----|------|-----|------|----------|----|-----------|-------------------|---------------|
| 124 | 埋納ヒット R系 小皿 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部C | | 7.8 | 2.1 | 1.35 | 5.6 | | | 橙 a-2系 b-2系 | a-2より やや精良 |
| 125 | " T系 II-C | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部B | | 7.6 | 1.5 | 0.95 | | | | 淡橙 b | |
| 126 | " T系 I-C | " ナデ-ヨコ ナデ | " ナデ-ヨコ ナデ | 底部A | | 8.0 | 1.6 | 1.15 | | | | 灰色 b | |
| 127 | B号掘立 R系 盤 | | | 底部B | | 14.2 | 3.4 | 3.0 | | | | 灰色 b | |
| 128 | " T系 III-A | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部A | | | | | 6.0 | | | 浅黄橙 b-1 | |
| 129 | " I-A | " " | " " | | | 7.6 | 1.4 | | | | | 灰黄 a | |
| 130 | " II-A | " " | " " | | | 11.4 | | | | | | 浅黄橙 a | |
| 131 | 11号掘立 T系 II-A | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部B | | 6.8 | 1.0 | 0.7 | | | | 淡橙 b | |
| 132 | " II-C | " " | " " | | | 7.0 | | | | | | 淡橙 b | |
| 133 | 14号掘立 T系 II-A | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部B | | 7.8 | 1.2 | 1.0 | | | | 浅黄橙 C | |
| 134 | " II-C | " " | " " | | | 7.6 | | | | | | 浅黄橙 C | |
| 135 | 18号掘立 R系 小皿 | | | 底部B | | 7.9 | 2.0 | 1.0 | 4.5 | | | 灰黄 b-1 | |
| 136 | " " | | | 底部A | | | | | 4.6 | | | 灰黄 b-3 | |
| 137 | " " | | | 底部B | | | | | 4.7 | | | 浅黄橙 b-1 | |
| 138 | " " | | | 底部B | | | | | 5.2 | | | 浅黄橙 b-2 | |
| 139 | " " | | | 底部B | | | | | 4.4 | | | 橙 b-2 | |
| 140 | " 植 | | | 底部B | | | | | 6.3 | | | 橙 b-2 | |
| 141 | " " | | | 底部A | | | | | 6.5 | | | 橙 b-2 | |
| 142 | " " | | | 底部A | | | | | 8.6 | | | 灰黄 a-2 | |
| 143 | 25号掘立 T系 I-A | ヨコナデ | | | | 13.6 | | | | | | 浅黄橙 b | 煤付着 |
| 144 | " II-C | " " | | | | 8.4 | | | | | | 浅黄橙 c | |
| 145 | 35号掘立 R系 小皿 | | | 底部B | | | | | 5.6 | | | 灰黄 a-2 | |
| 146 | " " | | | 底部A | | | | | 5.6 | | | 浅黄橙 b-2 | |
| 147 | " 植 | 回転ナデ | | 底部B | | 14.8 | 4.3 | 3.0 | 6.2 | | | 浅黄橙 a-2 | |
| 148 | 1号溝 F下層 R系 小皿 | | | 底部A | | 7.0 | 1.4 | | 5.0 | | | 浅黄橙 a-2 | |
| 149 | " D下層 | " " | | 底部B | | 7.4 | 1.9 | 1.1 | 5.4 | | | 浅黄橙 a-2 | |
| 150 | E下層 | " " | | 底部A | | | | | 4.4 | | | 灰黄 b-2 | |
| 151 | C下層 | " " | | 底部B | | | | | 4.8 | | | 浅黄橙 b-1 | |
| 152 | C下層 | " " | | 底部B | | | | | 5.3 | | | 浅黄橙 a-2 | |
| 153 | E下層 | " " | | 底部B | | | | | 5.8 | | | 浅黄橙 a-2 | |
| 154 | C下層 | " 植 | | 底部B | | 13.2 | 3.6 | 2.7 | 7.6 | | | 灰黄 b-2 | |

| 断面 No. | 造構 層位 | 器種 | 胴部外面 | 胴部内面 | 底 部 | 高 台 | 口 楽 | 器 高 | 見达 み高 | 底 楽 | 高 台 楽 高さ | 色 調 胎 土 | 備考 | |
|-----------|-------------|----------|------|------|-------------|------|------|------|----------|-----|-------------|------------|-----------------|--------------|
| 155 | 1号構 D下層 | R系 輪 | | | 底部B | | | | | 6.1 | | 灰黄 b-2 | | |
| 156 | タ E | * | | | 底部B | | | | | 6.4 | | 浅黄橙 b-3 | | |
| 157 | タ B | * | | | 底部B | | | | | 5.8 | | 灰色 b-1 | | |
| 158 | タ D下層 | * | | | 底部A | | | | | 8.4 | | 灰黄 a-2 | | |
| 159 | タ D下層 | * | | | 底部A | | | | | 8.8 | | 灰黄 a-2 | | |
| 160 | タ E下層 | * | | | 底部A | | | | | 6.0 | | 橙 a-1 | | |
| 161 | タ D | * | | | 底部A | | | | | 8.8 | | 灰黄 a-2 | | |
| 162 | タ I下層 | * | | | 底部A | | | | | 9.0 | | 浅黄橙 a-2 | | |
| 163 | タ C下層 | * | | | 底部A | | | | | 8.0 | | 灰黄 a-2 | | |
| 164 | G下層 有台輪 | * | | | | | | | | 6.0 | | 浅黄橙 a-2 | | |
| 165 | K下層 圓 | 回転ナデ | 回転ナデ | | | | | 14.6 | 5.2 | 2.7 | 6.0 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 166 | D下層 柱高圓 | * | | | | 柱状高台 | | | | | 5.4 | | 浅黄橙 a-2 | |
| 167 | C下層 | * | | | | * | | | | | 4.6 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 168 | H上層 | * | | | | * | | | | | 4.6 | | 淡橙 b-1 | |
| 169 | B | * | | | | * | | | | | 4.0 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 170 | J下層 | * | | | | * | | | | | 5.2 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 171 | A下層 II-C | T系 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部C | | 8.4 | 1.5 | 0.8 | | | | 淡橙 C | |
| 172 | D | * | II-A | * | 底部B | | 7.6 | 1.1 | 0.8 | | | | 灰色 b | |
| 173 | D下層 II-A | * | * | * | 底部A | | 7.8 | 1.2 | | | | 浅黄橙 b | 爆付著 | |
| 174 | C下層 II-E | * | * | * | 底部B | | 6.8 | 0.8 | 0.5 | | | | ? | |
| 175 | H上層 II-A | * | ヨコナデ | ヨコナデ | | | 8.0 | | | | | 浅黄橙 b | | |
| 176 | C上層 II-E | * | * | * | | | 8.6 | 1.2 | | | | | 石英目立つ 程 b | |
| 177 | B | * | I-A | * | 底部A | | | | | | | | | |
| 178 | C下層 I-A | * | * | * | ナデ-ヨコ ナデ | | | 13.8 | 2.9 | 2.0 | | | 淡橙 b | 粘土帶貼 り付け痕 |
| 179 | E下層 I-C | * | * | * | | | | 12.8 | | | | | 淡橙 b | |
| 180 | E下層 I-C | * | * | * | | | | 13.6 | | | | | 淡橙 b | |
| 181 | J上層 I-A | * | * | * | | | 10.2 | | | | | | 砂粒を多く 含む | |
| 182 | 2号構 II-A | T系 | | | 底部B | | 7.8 | 1.3 | | | | | 淡橙 b | |
| 183 | タ II-A | * | | | 底部B | | 7.8 | 1.1 | | | | | 橙 b | |
| 184 | タ B | * | II-C | | 底部B | | 7.7 | 1.5 | 1.1 | | | | 浅黄橙 b | |
| 185 | 5号構 C上層 | R系 小皿 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 7.4 | 1.9 | 1.0 | 5.7 | | | 浅黄橙 b-2 | |

| 図版 No. | 地 層 位 置 | 岩 種 | 洞部外 面 | 洞 部内 面 | 底 部 | 高 台 | 口 径 | 器 高 | 見 込 み 高 | 底 径 | 高 台径 高さ | 色 調 地 土 | 備 考 |
|-----------|------------------|-----------|----------|--------------|--------|--------|--------|--------|------------------|--------|---------------|------------------|--------|
| 186 | 5号溝 B上層 | R系 小層 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 8.1 | 1.85 | 1.0 | 4.4 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 187 | " H上層 | " 柱高層 | | | | | | | | | | 灰色 a-2 | |
| 188 | F上層 | " 柱高層 | | | 柱状高台 | | | | | | | 浅黄橙 b-1 | |
| 189 | 8号溝 B | R系 柱高層 | | | 柱状高台 | | | | | | 4.8 | 浅黄橙 b-1 | |
| 190 | " C | T系 I-A | ヨコナデ | ヨコナデ | | | 10.4 | | | | | 淡橙 b | |
| 191 | 15号溝 D | R系 小層 | | | 底部B | | | | | | 4.8 | 淡橙 b-1 | |
| 192 | " B | " " | | | 底部A | | | | | | 5.0 | 浅黄橙 b-1 | |
| 193 | " 4 | " " | | | 底部A | | | | | | 5.0 | 橙 b-1 | |
| 194 | A上層 | " 輪 | | | 底部A | | | | | | 6.6 | 浅黄橙 a-1 | |
| 195 | C上層 | T系 I-C | | | 底部B | | 7.8 | 0.9 | 0.5 | | | 浅黄橙 b | |
| 196 | 16号溝 | R系 小層 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 7.1 | 1.5 | 0.6 | 4.5 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 197 | " " | " " | | | 底部B | | | | | | 4.6 | 浅黄橙 b-3 | |
| 198 | 21号溝 | R系 小層 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 8.1 | 2.2 | 1.1 | 4.2 | | 灰黄 a-2 | |
| 199 | 25号溝 | R系 輪 | | | 底部B | | | | | | 6.0 | 淡橙 b-1 | |
| 200 | " " | " " | | | 底部B | | | | | | 6.0 | 浅黄橙 a-2 | |
| 201 | 43 | R系 輪 | | | 底部A | | | | | | 3.7 | 灰色 a-1 | |
| 202 | " " | " " | | | 底部B | | | | | | 6.5 | 浅黄橙 b-1 | |
| 203 | 44号溝 | T系 I-A | | | | | 10.8 | | | | | 浅黄橙 b | |
| 204 | 25号土坑 下層 | T系 直理 | | | | | | | | | | 灰色 b | |
| 205 | 43号溝 | ハイゴ 羽口 | | | | | | | | | | 浅黄橙 b-1 | |
| 206 | Pit-1 | R系 小層 | 回転ナデ | 底部B | | 7.8 | 1.5 | 1.1 | 5.8 | | | 浅黄橙 b-3 | |
| 207 | Pit-560 | " " | | | 底部A | | 8.6 | 1.65 | 0.8 | 5.0 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 208 | Pit-365 | " " | | | 底部A | | 8.2 | 1.7 | 1.3 | 6.0 | | 淡橙 b-1 | |
| 209 | Pit-560 | " " | | | 底部A | | 8.2 | 1.9 | 1.1 | 5.4 | | 灰色 b-2 | |
| 210 | Pit-947 | " " | | | 底部B | | 8.0 | 2.5 | 1.4 | 4.8 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 211 | Pit-560 | " " | | | 底部A | | 8.6 | 2.1 | 1.1 | 5.0 | | 灰色 b-2 | |
| 212 | Pit-239 | " " | | | 底部A | | | | | | 4.8 | 灰色 b-2 | |
| 213 | Pit-321 | " " | | | 底部B | | | | | | 4.8 | 灰色 a-2 | 内面淡橙 |
| 214 | Pit-387 | " " | | | 底部A | | | | | | 4.8 | 浅黄橙 b-2 | |
| 215 | Pit-238 | R系 輪 | | | 底部A | | | | | | 7.0 | 赤橙 a-1 | |
| 216 | Pit-390 | " " | | | 底部A | | | | | | 6.0 | 浅黄橙 b-1 | |

| 回数 No. | 遺構 部位 | 器種 | 胸部外面 | 胸部内部 | 底部 | 高台 | 口径 | 器高 | 見込 み高 | 底径 | 高台径 高さ | 色調 胎土 | 備考 |
|-----------|----------|-----------|------|------|------|------|------|-----|----------|-----|-----------|------------|-----|
| 217 | Pt-123 | R系 輪 | | | 底部B | | | | | 6.0 | | b-2 | |
| 218 | Pt-38 | " | | | 底部B | | | | | 6.4 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 219 | Pt-38 | " | | | 底部B | | | | | 6.2 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 220 | Pt-392 | " | | | 底部B | | | | | 6.8 | | 灰黄 b-2 | |
| 221 | Pt-212 | " | | | 底部B | | | | | 7.0 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 222 | Pt-523 | " | | | 底部B | | | | | 6.0 | | 灰黄 b-2 | |
| 223 | Pt-946 | " | | | 底部A | | 13.2 | 3.1 | 2.0 | 7.4 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 224 | Pt-277 | " | | | 底部A | | | | | 8.2 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 225 | Pt-946 | T系 I-C | | | 底部B | | 13.2 | 3.1 | 2.0 | 7.4 | | 灰黄 b | |
| 226 | Pt-408 | " | | | | | 13.2 | | | | | 橙 b | |
| 227 | Pt-408 | " | | | | | 12.6 | | | | | 橙 c | |
| 228 | Pt-429 | " | | | | | 11.4 | | | | | 橙 c | |
| 229 | Pt-319 | " | | | | | 13.0 | | | | | 浅黄橙 c | |
| 230 | Pt-1 | I-A | | | | | 13.2 | | | | | 浅黄橙 b | |
| 231 | Pt-360 | " | | | 底部C | | 12.4 | 2.5 | 2.0 | | | 橙 c | |
| 232 | Pt-319 | " | | | | | 8.2 | 1.5 | 1.0 | | | 浅黄橙 c | |
| 233 | Pt-270 | II-A | | | 底部C | | 7.6 | 1.4 | 1.0 | | | 浅黄橙 b | |
| 234 | Pt-294 | " | | | 底部B | | 7.4 | 0.9 | | | | 洪橙 c | |
| 235 | Pt-36 | " | | | 底部B | | 7.8 | 1.5 | 1.1 | | | 橙 c | |
| 236 | Pt-320 | " | | | 底部B | | 8.2 | 1.3 | 0.9 | | | 浅黄橙 c | |
| 237 | Pt-33 | " | ヨコナデ | | | | 8.2 | 1.5 | 1.2 | | | 灰色 b | |
| 238 | E-4 | R系 有台輪 | | | 足高高台 | | | | | 6.8 | | 橙 b-1 | 古代末 |
| 239 | L-10 | " | | | | | | | | 7.8 | | | |
| 240 | H-7 | " | | | | | | | | 1.2 | a-1 | | |
| 241 | K-3 | " | | | 底部B | | | | | 5.2 | | 橙 b-1 | |
| 242 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 6.3 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 243 | L-3 | " | | | | 柱状高台 | | | | 4.4 | | 浅黄橙 a-2 | |
| 244 | H-7 | " | 灯明台 | | | | | | | 2.8 | | 橙 b-1 | |
| 245 | 包含層 | " | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部B | | 8.0 | 2.6 | | 3.9 | | 浅黄橙 b-1 | |
| 246 | C-8 | " | " | " | 底部B | | 8.2 | 2.1 | 1.2 | 4.0 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 247 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 4.3 | | 浅黄橙 b-2 | |

| No. | 固版 透 構 層 位 | 器 種 | 側部外面 | 側部内面 | 底 部 | 高 合 | 口径 | 器高 見込 基高 | 底径 | 高台径 高さ | 色 調 脂 | 備 考 |
|-----|------------------------|-----------|------|------|--------|--------|------|----------------|-----|-----------|-------------|-------------|
| 248 | 包含層 R系 小皿 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 7.6 | 2.0 | 1.5 | 4.9 | | 灰黄色 b-2 | |
| 249 | I-J-9-10 | " | | 底部A | | 8.8 | 1.7 | 1.0 | 5.4 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 250 | F-8 | " | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 7.4 | 1.5 | 0.9 | 4.0 | | 灰黄色 b-1 |
| 251 | F-7 | " | " | " | 底部A | | 8.0 | 1.4 | 0.6 | 5.8 | | 浅黄橙 b-2 |
| 252 | 包含層 | " | | | 底部A | | 7.6 | 1.2 | 0.6 | 5.6 | | 浅黄橙 b-2 |
| 253 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 3.8 | | 浅黄橙 b-1 |
| 254 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 6.0 | | 浅黄橙 b-1 |
| 255 | KLM-9 | " | | | 底部B | | | | | 4.0 | | 浅黄橙 a-2系 |
| 256 | J-3 | " | | | 底部B | | | | | 5.0 | | 灰色 a-2 |
| 257 | 陶土 | " | | | 底部A | | | | | 4.8 | | 浅黄橙 b-2 |
| 258 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 4.5 | | 灰黄色 a-2 |
| 259 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 4.4 | | 浅黄橙 b-1 |
| 260 | 包含層 | " | | | 底部A | | | | | 4.4 | | 浅黄橙 b-2 |
| 261 | 陶土 | " | | | 底部A | | | | | 4.8 | | 浅黄橙 b-2 |
| 262 | G-7 | " | | | 底部B | | | | | 4.6 | | 浅黄橙 b-3 |
| 263 | 包含層 | " | | | 底部A | | | | | 5.0 | | 深橙 a-2 |
| 264 | KLM-9 | " | | | 底部B | | | | | 3.8 | | 浅黄橙 b-2 |
| 265 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 4.6 | | 浅黄橙 b-2 |
| 266 | 包含層 | " | | | 底部A | | | | | 5.7 | | 浅黄橙 b-1 |
| 267 | K-2 | " | | | 底部A | | | | | 6.0 | | a-1 |
| 268 | K-2 | " | | | 底部A | | | | | 6.0 | | |
| 269 | K-4 | " | | | 底部B | | | | | 5.6 | | 浅黄橙 a-2 |
| 270 | H-10 | " | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部A | | 12.8 | 3.4 | 6.6 | | 浅黄橙 b-2 | |
| 271 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 7.2 | | |
| 272 | 包含層 | " | | | 底部B | | | | | 6.6 | | 浅黄橙 a-2 |
| 273 | I-11 | " | | | 底部A | | | | | 6.1 | | 灰黄 b-2 |
| 274 | D-1 | " | | | 底部B | | | | | 5.6 | | 浅黄橙 b-3 |
| 275 | E-9 | " | | | 底部B | | | | | 6.0 | | 浅黄橙 b-2 |
| 276 | 包含層 | " | | | 底部A | | | | | 8.2 | | 浅黄橙 b-2 |
| 277 | 包含層 | " | | | 底部A | | | | | 6.8 | | a-2 |
| 278 | 包含層 | T系 I-C | | | | | 12.8 | | | | 赤橙 C | |

| 図版 No. | 通 構 層 位 | 器 種 | 腹部外筋 | 腹部内面 | 底 部 | 高 台 | 口径 | 器高 | 見込 み高 | 底径 | 高台径 高さ | 色 調 胎 土 | 備 考 |
|-----------|------------------|--------------------|------|------|--------|--------|------|------|----------|----|-----------|------------------|--------|
| 279 | K-2 | T系 I-E | | | 底部B | | | | | | | 浅黄粒 b系 | |
| 280 | I-2 | " | | | 底部C | | 11.0 | 2.1 | 1.3 | | | 粗 b | |
| 281 | I-A | " | | | 底部A | | 9.4 | 1.5 | 1.1 | | | 粗 b | |
| 282 | K-4 | " | | | 底部B | | 7.3 | 1.65 | 1.1 | | | 浅黄粒 b | |
| 283 | 包含層 B 下層 | 厚一ヨコ II-A ナデ | | | 底部C | | 7.7 | 1.5 | 1.0 | | | 浅黄粒 b | |
| 284 | H-8 | " | | | 底部C | | 8.2 | 1.1 | 0.6 | | | 淡粒 c | |
| 285 | H-8 | " | | | 底部B | | 7.3 | 1.0 | 0.6 | | | 淡粒 c | |
| 286 | 包含層 II-C | " | | | 底部A | | 7.6 | 1.4 | 0.9 | | | 赤粒 c | |
| 287 | 包含層 | " | | | 底部B | | 8.0 | 1.4 | 1.0 | | | 浅黄粒 b | |
| 288 | G-8 | " | | | 底部B | | 7.8 | 1.5 | 1.1 | | | 浅黄粒 c | |
| 289 | I-3 | " | | | 底部A | | 8.2 | 1.6 | 1.1 | | | 灰色 b | 煤付着 |
| 290 | | " | | | 底部B | | 8.2 | 1.1 | 0.6 | | | 淡粒 c | |
| 291 | 4区 | " | | | 底部B | | 7.8 | 1.6 | | | | 灰色 b | |
| 292 | L-5 | " | | | 底部B | | 8.0 | 1.5 | 0.8 | | | 浅黄粒 b系 | |
| 293 | 包含層 II-A | " | | | 底部A | | 7.3 | 1.65 | 1.1 | | | 灰色 b系 | |

第2項 国産陶磁器（第122図～125図）

本遺跡より出土の中近世の国産陶磁器は、加賀古窯（以下、「加賀」と呼称する。）、越前焼（以下、「越前」と呼称する。）、珠洲焼（以下、「珠洲」と呼称する。）、常滑焼（以下、「常滑」と呼称する。）、瀬戸・美濃系陶器（以下、「瀬戸・美濃」と呼称する。）の中世陶器、唐津焼（以下、「唐津」と呼称する。）、再興九谷の若杉焼（以下、「若杉」と呼称する。）の近世陶磁器が見られる。以下各々について述べる。

加賀（第122図）

1～6は壺である。1・2は口縁部は外へ引き出しただけで端部は押さえず、擴んでナデている。3は端部は押さえて上に引き上げたものである。4・5は端部を押さえ、上下に張り出させたものでいわゆるN字状口縁の初期のものであろう。

7は口径11.0cmを測る壺で、頭より外へ引き出しただけの口縁端部である。

8～14は鉢である。8は口径30.5cmを測るもので、片口及びおろし目が認められる。14は底径17.0cmを測るもので、おろし目が交差している。8と同一個体の可能性がある。

15は壺の胴部下半であるが、外面にハケ目が認められる。この加賀におけるハケ調整の製品は、最近消費地で確認例が増えてきていたが、生産地における那谷カミヤ窯において鉢の外面にハケ調整の製品が採集されていて、同窯との関連が指摘されている。

16～22は押印が認められる破片である。16は花文と格子を組み合わせたもので、湯上ユノカミダニ窯のⅡ類201であろう。17は花文に斜格子を組み合わせたもので、生産地は現在のところ不明であるが、同窯の製品ではなかろうか。18は花文と輪線二本の斜格子が見られ、本品では不明であるが花文が中央で右に斜格子がある那谷ダイテンノウダニ窯Ⅱ類121である。19は右は不明であるが左に斜格子が認められる。生産地は現在のところ不明。20も生産地は不明である正格子の押印である。21・22は織子風の継格子である。両者とも湯上ユノカミダニ窯のV類で22は101であり、21は番号不明である。

これらの時期については、1・2は第Ⅱ期の所産と考えられ、つきつめれば那谷カナクソダニ窯期で、13世紀前半代と考えられるものである。いづれもグリッド出土である。3は3号溝出土であるが、第Ⅲ期あるいは第Ⅳ期の所産ではなかろうか。この口縁形態について加賀では現在のところ長期にわたって生産を行っていた湯上ユノカミダニ窯の製品に認められるが、厳密に形態差における時期比定がなされていない。4・5はN字状口縁の形成段階のものと考えられ、第Ⅲ期の後半からⅣ期の前半の所産、13世紀後半から14世紀初め頃と考えている。4は1号竪穴、5は43号土坑の出土である。尚、18も43号土坑の上層出土であり、第Ⅲ期、13世紀後半代に位置付けられる。4・5と矛盾しないものであろう。

越前（第123図）

23～28までは壺である。23は口径29.4cmを測るものであり、24と同じく端部を引き出しただけと考えられる。26は端部を押さえたものでN字状の前段階のものと考えられる。28はN字状がくずれたものと考えられ、端部上面が水平となっている。27はさらにN字状がくずれたものであろう。

29は口径10.0cmを測る壺である。頭より外へ引き出しただけの口縁端部である。

30～33は鉢である。縦でおろし目が認められる。

34～37は押印が見られる破片である。34・35は「本」であり、36は継格子で、37は正格子である。

これらの時期については、23・24は第Ⅰ期の所産と考えられ、12世紀後半代を考えている。26は第Ⅱ期で13世紀中頃と考えている。27は第Ⅳ期新で15世紀末頃、28は第Ⅳ期古で15世紀前半代を考えている。いづれもグリッドの出土である。

常滑（第123図）

38~40は鉢である。38は端部を引き上げてナデ、内側をやや平らにしている。39は端部引き上げてナデ、上面を平らにしている。40は端部外面にやや深い凹線が認められる。いづれもグリッドの出土である。

42~46は押印のある破片である。41は綾格子が見られる。42~45は単位が不明であるが、幾重かの菱形の中に対角線が見られる。46は上半がはっきりしないが正格子と考えられるものである。

これらの年代であるが、浅学な筆者では不明といわざるを得ない。

珠洲（第124図）

47は最大径16.0cmを測る双耳壺である。耳の下部より左下がりから縦にハケ状具によるナデが見られる。48は底径8.3cmを測る壺の下部であり、50は底径10.2cmを測る壺の底部である。48・50いづれも回転糸切り痕が見られる。

49・51~66は鉢である。54は口径30.2cm、底径15.2cm、器高15.0cmを測るもので、内面には7条1単位のおろし目が見られる。底部切り離し静止糸切りである。55から61までは、口縁端部に柳目波状文帯が巡らされている。

これらの時期について、47は第Ⅰ期の所産ではなかろうか。12世紀中頃と考えたい。グリッドの出土である。49は39号土坑下層の出土であるが、やはり第Ⅰ期の所産と考える。51・52・54は第Ⅱ期で、13世紀前半代と考える。52は1号溝より、54は1号溝上層及び3号土坑よりの出土である。口縁に柳目波状文帯をもつ55から61までは第Ⅴ期の所産で14世紀後半から15世紀前半代と考えている。この中で遺構出土は56が3号溝である。他はグリッド出土である。

瀬戸・美濃（第125図）

67~71は天目茶壺である。68は口径13.1cmを測るもので、69は口径11.0cmを測る。

72は浅壺あるいは平壺と考えられるもので、高台径5.0cmを測る。73・74は水注で、73は底径5.3cmを測る。水ビキ痕が明瞭に残っている。

75は口径4.2cmを測る双耳小壺と考えられるものである。

76は口径8.2cm、底径3.5cm、器高2.8cmを測る腰折皿であろう。77は口径6.2cm、底径3.0cm、器高1.9cmを測る小皿である。78~80も小皿と考えられるものである。

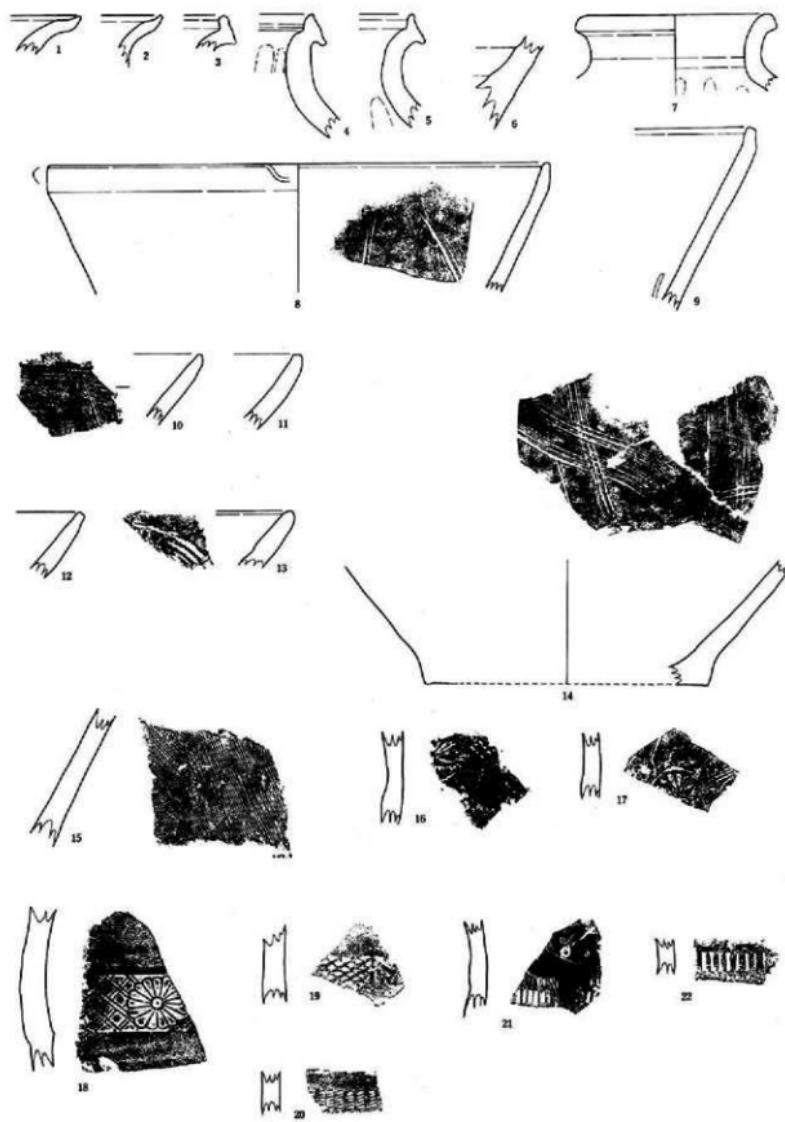
81は胴部下半の破片であり、瓶口あるいは壺であろう。

82~85はおろし皿である。

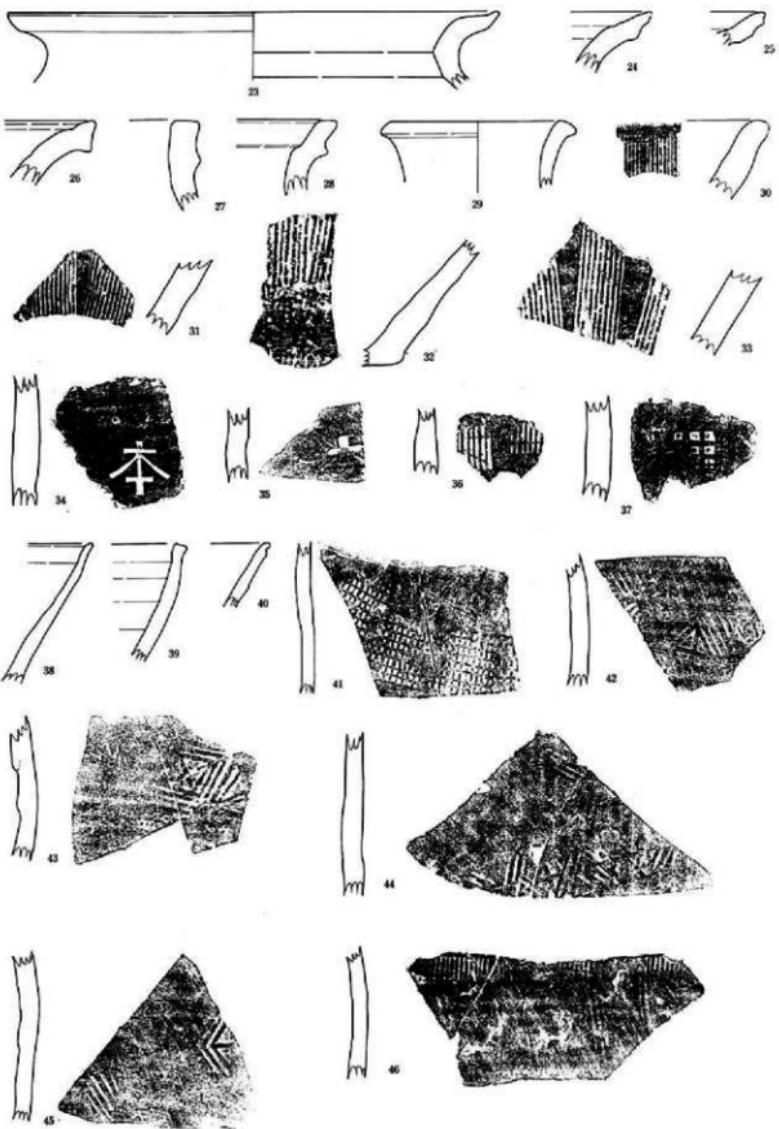
これらの時期であるが、古瀬戸の編年によれば、67が後Ⅱ期（15世紀初め）、68・75が後Ⅲ期（15世紀前半）、69・70が後Ⅳ期古（15世紀中頃）、71・76が後Ⅳ期新（15世紀後半）と考える。おろし皿のうち84は後Ⅲ期か後Ⅳ期古で、85は後Ⅳ期古と考えている。

唐津（第125図）

89は本例では破片で見られないが、胎土目の付く皿である。口径10.4cmを測る。17世紀前半ころの所産と考えられる。

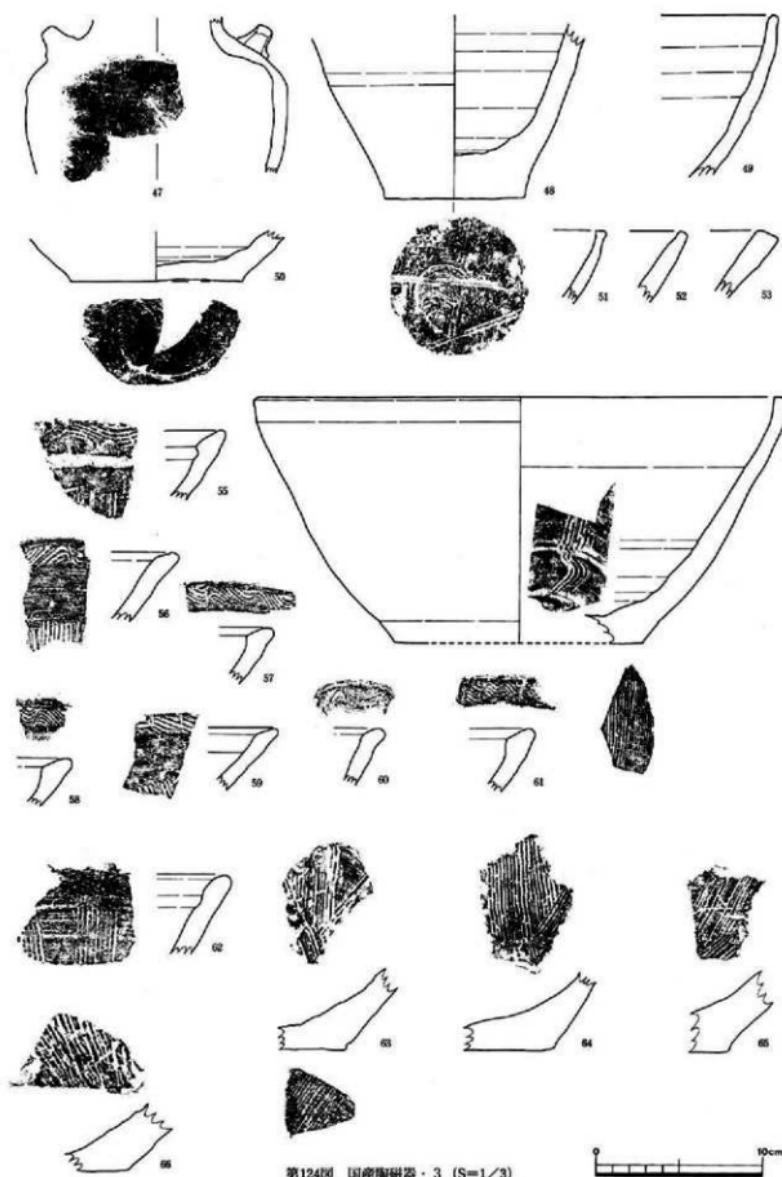


第122図 国產陶磁器・1 (S=1/3)



第123図 国產陶磁器・2 (S=1/3)





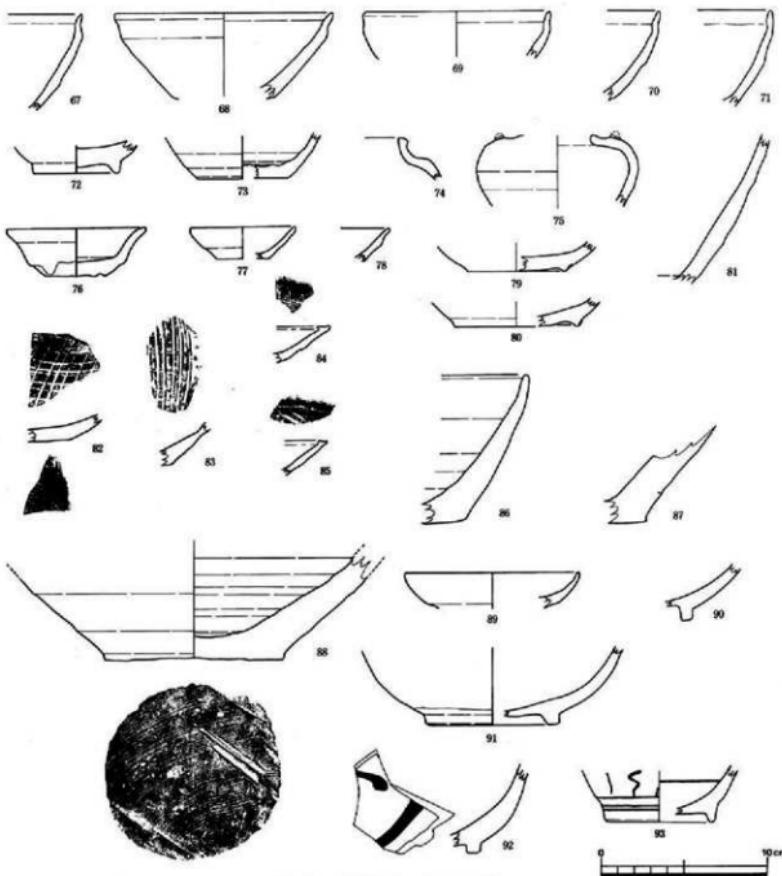
第124図 国産陶器・3 (S=1/3)

不明中世陶器（第124図）

86は鉢であり瓦質陶器のような焼きのあまいものである。88は甌の底部であり、静止糸切り痕がみられる。加賀であるか越前であるか断定できないものである。87も甌であるが、加賀の可能性があるものの、不明とした。

若杉（第125図）

90～92は陶器製の塊である。91は高台径8.0cmを測る。水ビキ痕が外面に残る。92は内面に絵が描かれている。93は磁器で、染付徳利の底部である。若杉は再興九谷の中核的存在で文化8（1811年）開窯であり、藩窯となった。天保年間に火災で隣村の八幡に移り、明治初めまで操業を行った。



第125図 国産陶磁器・4 (S=1/3)

第9表 国産陶磁器観察表

| 番号 | 器種 加質 | 法量(cm) | 器形・調整等 | 胎土 | 色調・焼成 | 出土地点 | 備考 |
|------|----------|--------|--------------------------|--------------------------|------------------|-------------------------|------|
| 122回 | 盤 | | 内外口縁部ヨコナデ | 0.5mm以下の砂粒含む | 外淡灰色・内酒灰色、良好 | H-9区 | |
| ~ | ~ | | 内外口縁部ヨコナデ | 1mm大の石粒含む | 淡灰色 | J-1 I区 | |
| 2 | ~ | | 内外口縁部ヨコナデ | 微砂粒やや含む | 白色 | 3号溝 | |
| 3 | ~ | | 内外口縁部ヨコナデ | 白灰色 | 良好 | | |
| ~ | ~ | | 内外口縁部ヨコナデ・外縁部ヨコナデ・内面指押さえ | 1mm大の石粒含むが比較的緻密 | 灰褐色 | 1号豊穴 | |
| 4 | ~ | | 内外口縁部ヨコナデ・外縁部ヨコナデ・内面指押さえ | 良好 | | | |
| 5 | ~ | | 内外口縁部ヨコナデ・外縁部ヨコナデ・内面指押さえ | やや粗い砂粒含むが比較的緻密 | 灰褐色・一部白灰褐色、良好 | 4-3号土坑上層 | |
| ~ | ~ | | 内面ヨコナデ | 緻密な砂粒 | 白色 | 5号掘立 | |
| 6 | ~ | | 口径11.0 | 微砂粒やや含むが比較的緻密 | 白色 | | |
| 7 | 壺 | | 内外口縁部ヨコナデ・外縁部ヨコナデ・内面指押さえ | 外銀灰褐色・内黄褐色、良好 | | E13号残存半 6/24 | |
| 8 | 鉢 | 口径30.5 | 内外ヨコナデ | 微砂粒やや含むが比較的緻密 | 外灰褐色・内淡灰褐色、良好 | 3-3号溝 片口 | |
| ~ | ~ | | 内外上半部ヨコナデ | 0.5~2mm大の石粒若干含むが比較的緻密 | 外淡灰色・内白灰褐色、良好 | 1号溝E区 下層 | |
| 9 | ~ | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の石英若干含むが比較的緻密 | 外黄褐色・内白黄色 | E-9区 | |
| 10 | ~ | | 外ヨコナデ | 長石やや含むが緻密 | 淡灰色 | H-10区 | |
| 11 | ~ | | 内外ヨコナデ | 微砂粒やや多く含む | 外淡白色・内白灰色、良好 | E-2区 | |
| 12 | ~ | | 内外ヨコナデ | 0.5mm大の石英若干含むが比較的緻密 | 外灰褐色・内體灰色、良好 | 4-4号溝C区 | |
| 13 | ~ | | 底径17.0 | 微砂粒やや含むが比較的緻密 | 外灰褐色・内白灰褐色、良好 | 64号土坑- I号土坑上口区 試掘 | |
| 14 | 壺 | | 外ハケ目 | 0.5mm大の石粒やや含むが緻密 | 0.5mm大の石粒やや含むが緻密 | D-9区 | 押印あり |
| 15 | 壺 | | | 0.5mm大の石粒やや多く含む | 淡灰褐色 | | |
| 16 | ~ | | | 砂粒やや含むが緻密 | 灰褐色 | 1号溝F区 上層 | " |
| 17 | ~ | | | 微砂粒やや含むが緻密 | 灰褐色 | 4-3号土坑 上層 | " |
| 18 | ~ | | | 砂粒やや多く含む | 外淡褐色・内灰褐色、良好 | D-7区 | " |
| 19 | ~ | | | 微砂粒やや含むが緻密 | 外灰色・内灰褐色 | I-J-1区 | " |
| 20 | ~ | | | 砂粒やや含む | 外黄褐色・内白黄色 | M-5区 | " |
| 21 | ~ | | | 微砂粒やや含む | 外黄褐色・内白灰色、良好 | H-3区 | " |
| 22 | ~ | | | 微砂粒やや含む | 外黄褐色・内白灰色、良好 | | |
| 123回 | 越前 壺 | 口径29.4 | 内外ヨコナデ | 2mm大の小石若干含む、微砂粒やや含む | 外黄褐色・内灰褐色、良好 | K-10区 | |
| ~ | ~ | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の石英・長石やや含むが比較的緻密 | 外白灰色・内灰褐色、良好 | G-8区 | |
| 24 | ~ | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の石英・長石やや含むが比較的緻密 | 外白灰色・内灰褐色、良好 | G-8区 | |
| 25 | ~ | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の石英・長石やや含む | 外白灰色・内灰褐色、良好 | K-4区 | |
| 26 | ~ | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の長石やや含む | 外白灰色・内灰褐色、良好 | D-7区 | |
| 27 | ~ | | | 1~2mm大の砂粒やや含むが緻密 | 外體灰色・内淡赤灰褐色、良好 | I-3区 | |
| 28 | ~ | | 内外ヨコナデ | 微砂粒やや含むが緻密 | 外體灰色・内淡赤灰褐色、良好 | | |
| ~ | ~ | 口径10.0 | 内外ヨコナデ | 砂粒やや多く含む 発泡している | 外白灰色・内白黄色、良好 | K-10区 | |
| 29 | 壺 | | 内外ヨコナデ | 0.5mm大の石英若干含むが比較的緻密 | 外灰褐色・内體灰褐色、良好 | J-1 I区 | |
| 30 | 鉢 | | 外ヨコナデ | 緻密 | 外體灰褐色・内灰褐色、良好 | J-6区 | |
| 31 | 鉢 | | | 微砂粒含む | 白色 やや不規 | J-3区 | " |
| 32 | 鉢 | | 内外ヨコナデ | えんじ色 | L-1区 | | |
| 33 | 鉢 | | | 良好 | | | |
| 34 | 壺 | | | 外灰褐色・内褐色、良好 | F-1 I区 | 押印あり | |
| 35 | 壺 | | | 外灰褐色・内黑褐色、良好 | J-1 I区 | " | |
| 36 | ~ | | | 外白灰色・内黑褐色、良好 | I-9区 | " | |
| 37 | ~ | | | 0.5mm大の石英若干含むが緻密 | 外灰黑色・内褐色 良好 | 4-3号溝上層 | " |

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器面調整等 | 胎上 | 色調・焼成 | 出土地点 | 備考 |
|------------|----------------------------|------------|---------------|-------------------------|------------------|------------------------|---------|
| 123回 38 | 常滑 鉢 | | | 小石若干含むが緻密 | 外褐色・内黄灰色 良好 | L-4区 | |
| " " | 内外ヨコナデ | | | 微砂粒含むが緻密 | 外白灰色・内淡灰色、良好 | K-11区 | |
| " " | | | | 砂粒や多く含む | 外灰褐色・内黄灰色、良好 | F-7区 | |
| 40 | " | | | 微砂粒含むが緻密 | 外黑褐色・内黄灰色、良好 | F-424 | 押印あり |
| 41 | 甌 | | | 0.5~1mm大の石英粒子やや含むが比較的緻密 | 外淡褐色・内白灰色、良好 | 8号溝下層 | " |
| 42 | " | | | 0.5~1mm大の石英粒子若干含むが比較的緻密 | 外黄褐色・内灰褐色、良好 | 25号土坑下層・C-9区-D-11区 | " |
| 43 | " | | | 石英粒・砂粒若干含むが緻密 | 外淡褐色・内黄灰色、良好 | 1号井戸上層 | " |
| 44 | " | | | 1mm大の石粒若干含むが緻密 | 外褐色・内灰褐色、良好 | 明治33年1月上 坑下層 | " |
| " " | | | | 0.5~1mm大の石英粒子若干含むが比較的緻密 | 外褐褐色・内白灰色、良好 | 8号溝下層 | " |
| 45 | " | | | 石英粒・砂粒若干含むが緻密 | 外淡褐色・内黄灰色、良好 | 1号井戸上層 | " |
| 46 | " | | | 1~3mm大の小石や含む、砂粒や多く含む | 外墨灰色・内白灰色、良好 | F-8区-F-9区 G-8区-G-9区 | |
| 47 | 双耳壺 | 16.0 | ハケ状具によるナデ | 0.5~3mm大の石英・長石粒含む砂粒多く含む | 白灰色一部墨灰色、やや良好 | 39号土坑下層 5号溝上層 | 底部回転糸切り |
| " | 底径8.3 | 内外ヨコナデ | | 3~5mm大の小石若干含砂粒含む | 外濃黒褐色・内淡墨灰色、やや良好 | 3~9号土坑 下層 | |
| 48 | 甌 | | 内外ヨコナデ | 微砂粒含む | 外淡灰色・内にぶい緑色、良好 | 25号土坑下層 G-8区 | |
| " | " | 底径10.2 | | 0.5mm大の石英粒やや含むが緻密 | 淡墨灰色 | 表床 | |
| 50 | 甌 | | 内外ヨコナデ | 0.5~2mm大の小石含む | 淡墨灰色 | 3号土坑 1号溝上層 | 底部静止糸切り |
| " | " | | 内外ヨコナデ | 5mm大の石英粒子若干含むが緻密 | 白灰色 | K-10区 | |
| 52 | " | | 内外ヨコナデ | 4mm大の小石若干含むが緻密 | 外淡褐色・内墨灰色、良好 | 3号溝 | |
| " | " | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の石英粒含むが比較的緻密 | 外墨灰色・内淡白 | E-1区 | |
| 54 | 口徑30.2 底径15.2 高さ14.8 | 内外ヨコナデ | 外ヨコナデ | 微砂粒含む | 外黑灰色・内白灰色、良好 | K-4区 | |
| " | " | | 内外ヨコナデ | 0.5mm大の長石粒やや含むが比較的緻密 | 灰白色 | J-9区 | |
| 56 | " | | 内外ヨコナデ | 0.5mm大の石英粒若干含む | 白灰色 | G-4区 | 片口 |
| " | " | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の石英粒含むが比較的緻密 | 褐色がかった灰色 | I-6区 | 片口 |
| 58 | " | | 内外ヨコナデ | 0.5~2mm大の石英粒やや含む | 灰褐色 | D-1区 | |
| " | " | | 内外ヨコナデ | 0.5mm大の長石粒やや含むが比較的緻密 | 良好 | E-8区 | |
| 60 | " | | 外ヨコナデ | 0.5mm大の石英粒若干含む | 白灰色 | D-2区 | |
| " | " | | 内外ヨコナデ | 0.5~1mm大の石英・長石粒含む | 良好 | D-1区 | |
| 62 | " | | 内外ヨコナデ | 0.5~2mm大の石英粒含む | 良好 | D-1区 | |
| " | " | | 微砂粒含む | 外白灰色・内灰白色、良好 | E-8区 | | |
| 64 | " | | 0.5mm大の砂程やや含む | 淡灰色 | D-2区 | | |
| " | " | | 緻密 | 外白灰色・内褐色がかった灰色、良好 | D-1区 | | |
| 65 | " | | 微砂粒やや含む | 白灰色 | L-4区 | | |
| " | " | | 緻密 | 外褐色輪・内褐色がかった灰色、良好 | G-7区 K-6区 | | |
| 67 | 円筒 皿 | | | 微砂粒含むが緻密 | 灰褐色輪・一部褐色、良好 | E-2区 | |
| " | 口径13.1 | | | やや微砂粒含むが緻密 | 黑褐色輪・一部白灰色、良好 | H-2区 K-7区 | |
| 68 | " | | | やや微砂粒含むが緻密 | 褐色輪 | D-6区 | |
| " | 口径11.0 | | | 緻密 | 褐色輪・一部黄白色、良好 | E-10区 | |
| 70 | " | | | 緻密 | 灰褐色輪・内白灰色、良好 | G-8区 | |
| " | " | | | 緻密 | 外褐色輪・内墨褐色輪、良好 | K-12区 | |
| 71 | " | | | 緻密 | | | |
| 72 | 甌 | 高台径 5.0 | | 緻密 | | | |
| " | 水注 | 底径5.3 | 水ピキ痕 | 緻密 | | | |
| 73 | " | | | 緻密 | | | |

| 番号 | 器種 | 法量(cm) | 器面調査等 | 胎土 | 色調・焼成 | 出土地点 | 備考 | |
|------------|------------|-------------------------|------------------------|-------------------------------|--------------------------|-------------|-----------------|--|
| 1254 74 | 衝口直通 水注 | | | 緻密 | 外黒褐色・内濃黒 褐色釉・良好 | F-7区 | | |
| ~ 75 | 豆皿小皿 | 口径4.2 | | 緻密 | 黄褐色釉・一部黒褐 色釉・良好 | K-4区 | | |
| ~ 76 | 腰折皿 | 口径8.2 高さ2.8 | | 緻密 | 黄緑灰色釉・一部白 色釉・良好 | N-8区 | | |
| ~ 77 | 小皿 | 口径6.2 底径3.0 高さ1.9 | | 微砂粒含むが緻密 | 外黄白灰色 内黒褐色 良好 | KLM-7 | | |
| ~ 78 | " | | | 緻密 | 外白灰色・内灰褐色 釉・良好 | 91号土坑 | | |
| ~ 79 | " | 高台径 5.8 | | 緻密 | 灰緑色釉 良好 | H-2区 | | |
| ~ 80 | " | 高台径 7.3 | | 緻密 | くすんだ灰緑色釉・ 良好 | M-5区 | | |
| ~ 81 | 瓶子壺 | | | 緻密 | 灰緑色釉・一部白灰 色・良好 | D-5区 | | |
| ~ 82 | おろし皿 | | | 緻密 | 灰褐色 良好 | H-8区 | | |
| ~ 83 | " | | | 比較的緻密 | 黄白灰色・一部銀灰 色釉・良好 | 1号溝上層 | | |
| ~ 84 | " | | | 緻密 | 黄灰褐色・一部銀白 色釉・良好 | G-3区 | | |
| ~ 85 | " | | | 緻密 | 黄緑灰色・一部淡灰 色・良好 | G-1区 | | |
| ~ 不明 | 林 | | | 微砂粒含む | 外赤灰色・内白灰褐 色・やや不良 | H-11区 | | |
| ~ 87 | 壺 | | 1~4mm大小の小石・砂粒 や多く含む | 4mm大小の小石1個見られ るが緻密 | 外褐色がかかった灰色・ 内灰褐色・やや良好 | 43号土坑 下層 | 右回りの回転 台を使用か | |
| ~ 88 | 底径10.8 | 外ヨコナデ | 4mm大小の小石1個見られ るが緻密 | 外褐色がかかった灰色・内 えんじがかかった灰色・良好 | 2.5号土坑 上層 | | | |
| ~ 89 | 唐津 | 口径10.4 | | 比較的緻密 | 綠褐色釉 良好 | J-4区 | | |
| ~ 90 | 若杉 碗 | | | 緻密 | 外綠黃土色釉・内灰 黄土色・良好 | G-12区 | 陶器 | |
| ~ 91 | 高台径 8.0 | | 微砂粒含む | 黄緑灰色釉・一部灰 色釉・良好 | 117号土坑 | " | | |
| ~ 92 | " | | | 緻密 | 白っぽい肌色・一部 黄褐色・良好 | 117号土坑 | " | |
| ~ 93 | 高台径 6.3 | | | 緻密 | にごった白色釉 良好 | カクラン | 織器 染付 | |

第3項 輸入陶磁器

輸入陶磁器には、青磁、白磁、染付皿がある。ほとんどが包含層出土遺物であるため、細片が多く、接合出来たものは非常に少ない。また、中世全体を通した分類および編年は存在しないため、青磁は、横田、森田分類（横田、森田1978）と上田分類（上田1982）を、白磁は山本分類（山本1993）と森田分類（森田1982）を併用した。染め付け皿は、小野分類（小野1982）を使用した。

1. 青磁

遺構出土遺物

10号土坑（図126、1） 龍泉窯系青磁碗I-5類（横田、森田分類）で、外面に錦連弁文が刻まれる。釉に非常に透明感があり、優品と言える。

32号土坑（図126、2） 下層より出土。龍泉窯系青磁碗I-2類（横田、森田分類）で、口縁部内面に沈線がめぐり、内面に草花文が籠書きされている。

1号豊穴状遺構（図126、3） 龍泉窯系青磁碗I-7類（横田、森田分類）で、胴部内面に草花文が籠書きされ、見込みには、円圏が施されている。

1号溝（図126、4-7） 4は、龍泉窯系青磁碗B-I-a類（上田分類）で、高台外面より豊付付近にまで釉が垂れている。5は、龍泉窯系青磁碗B-I-1類（上田分類）で、外面に連弁文が施されている。6は、龍泉窯系青磁碗B-I-1類かII類（上田分類）で、外面に連弁文が施されている。細かい貫入が入る。7は、龍泉窯系青磁碗I-4a類（横田、森田分類）で、内面を2本沈線によって5分割するタイプのものである。

8号溝（図126、8） 下層より出土。龍泉窯系青磁碗I-5類（横田、森田分類）で、外面に錦連弁文が刻まれる。

25号溝（図126、9） 龍泉窯系青磁碗B-I-1類（上田分類）と考えられる。釉が厚いためはつきりしないが、外面に連弁文が施されている。

2号ピット（図126、10） 龍泉窯系青磁碗I-2a類（横田、森田分類）で、胴部内面と見込みには、草花文が籠書きされ、円圏が施されている。高台は釉垂れ以外は露胎である。

106号ピット（図126、11） 龍泉窯系青磁碗III-2類（横田、森田分類）で、外面に細い錦連弁文が刻まれる。釉調も良く優品であると言える。釉は厚く施されている。

678号ピット（図126、12） 青磁碗か浅鉢の底部と考えられる。一部釉が外底部までかかっている。14世紀代のものと考える。

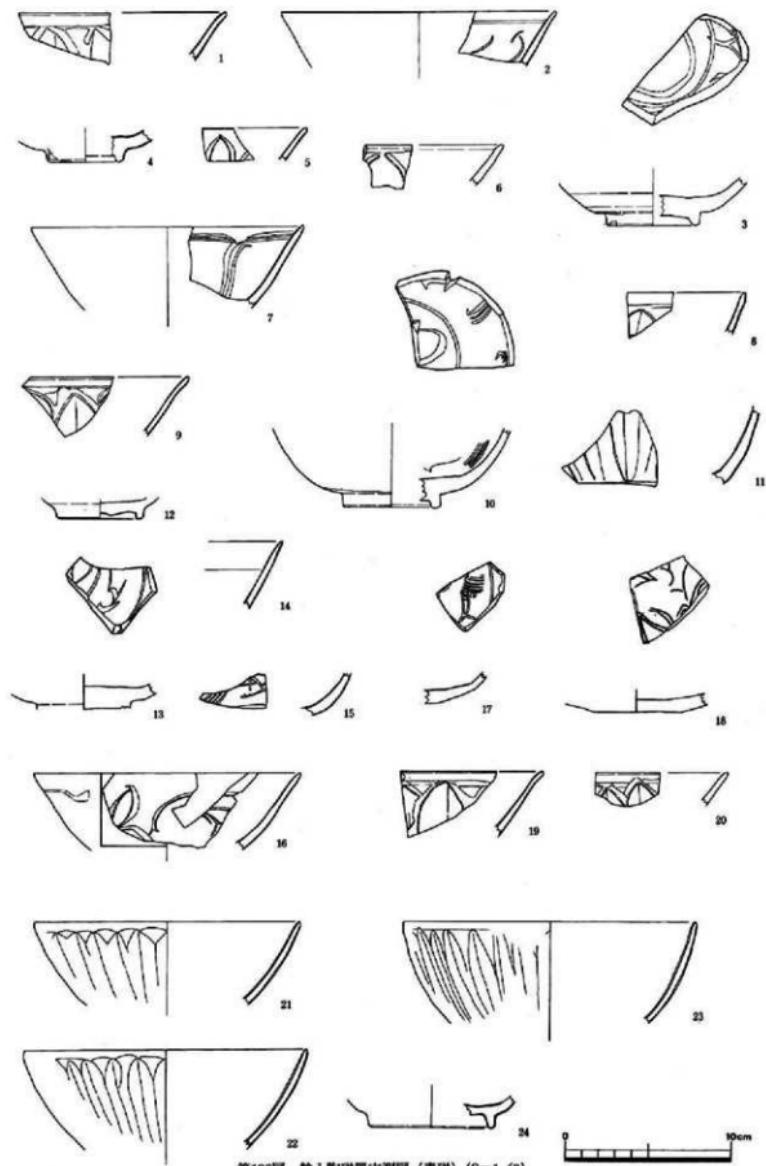
包含層出土遺物

龍泉窯系青磁碗・皿I類（横田、森田分類）（図126、13-20）

13は、龍泉窯系青磁碗I-2類で、胴部内面に草花文が片切り彫りされ、見込みには、円圏が施されている。14は、龍泉窯系青磁碗I-1類で、胴部内面に一条の沈線が施されている。釉に透明感がある。15は、龍泉窯系青磁碗I-2a類で、胴部内面に草花文と思われる文様が籠書きされ、見込みには、円圏が施されている。16は、龍泉窯系青磁碗I-2類で、胴部内面に草花文が施されている。17は、龍泉窯系青磁皿I-2類で、見込みには、円圏が施され櫛書きで魚文が施されている。18は、龍泉窯系青磁皿I-2類で、内面に櫛書きで文様を施している。19は、龍泉窯系青磁碗I-5類で、外面に錦連弁文が刻まれる。釉は厚くかけられている。20は、龍泉窯系青磁碗I-5類で、外面に錦連弁文が刻まれる。やや小ぶりなもので、釉は薄くかけられている。

龍泉窯系青磁碗III類（横田、森田分類）（図126、21-24）

21-23は、龍泉窯系青磁碗III-2類で、外面に細い錦連弁文が刻まる。胎土、釉調も良く優品であ



第126图 轮入陶器尖测图(青瓷) ($S=1/3$)

ると言える。釉がかなり厚くかけられており、特に、21は、下の連弁文が見えないほどである。21~23とも、粗い貫入が入る。24は、龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2類の底部と考えられ、高台内面まで施釉されている。粗い貫入が入る。

同安窯系青磁皿（横田、森田分類）（図127、25~26）

25、26は、同安窯系青磁皿I-1b類で、両者とも内面見込みに、櫛書きでジグザグ文が施されている。25は、2重の円圈を施している。26の円圈は、線描きである。

龍泉窯系青磁碗B類（上田分類）（図127、27~31）

27は、龍泉窯系青磁碗B-I類で、外面に鋸連弁文を施している。28は、龍泉窯系青磁碗B-I'類で、外面に縦連弁文が刻まれるが、開弁の表現はない。29は、龍泉窯系青磁碗B-I''類で、外面に縦連弁文を丸彫りしている。30は、龍泉窯系青磁碗B-II類で、外面に鋸連弁文を施す。釉は厚く、細かい貫入が入る。31は、龍泉窯系青磁碗B-IV類で、外面に線描き連弁文を施す。

龍泉窯系青磁碗C類（上田分類）（図127、32~33）

32は、龍泉窯系青磁碗C-II'a類で、外面に雷文帯を施している。33は、龍泉窯系青磁碗C-II'a類の底部で、内面に円圈を施し、見込みにスタンプ花文を施す。

龍泉窯系青磁碗D類（上田分類）（図127、34~40）

34~38が、龍泉窯系青磁碗D-I類で、34、35は、やや釉が薄めで、36、38は、釉が厚めである。37は、龍泉窯系青磁碗D-II類の底部と考えられ、破片であるため全面施釉かどうかは不明だが、底部まで釉がかかっている。特に、38は釉調が良い。35には、貫入が入る。39は、龍泉窯系青磁碗D-III類で、釉に透明感があり、細かい貫入が入る。40は、龍泉窯系青磁小碗D-II類と考えられ、粗い貫入が入る。

不明・特殊品（図127、41~45）

41は、香炉の破片と考えられ、釉調が良く、口縁内部と屈曲部に貫入が入る。42も香炉で、龍泉窯系と考えられる。外面のみ施釉され、貫入が入る。内面と底部に黒い物質が一面に付着している。43は、青磁合子の身で、受け部外面と、胴部下半より下は、露胎である。44は、青磁碗の底部片で、非常に厚い底部をしており、高台内面まで施釉されている。45は、青磁碗の底部片で、割れ口を漆によって補修した痕跡がある。内外面に粗い貫入が入る。15世紀~16世紀代の明代のものと考える。

2. 染付皿（小野分類）（図127、46）

皿C群で、文様から皿C-I類と考えられる。いわゆる碁笥底を持つものである。

3. 白磁（図128、47~86）

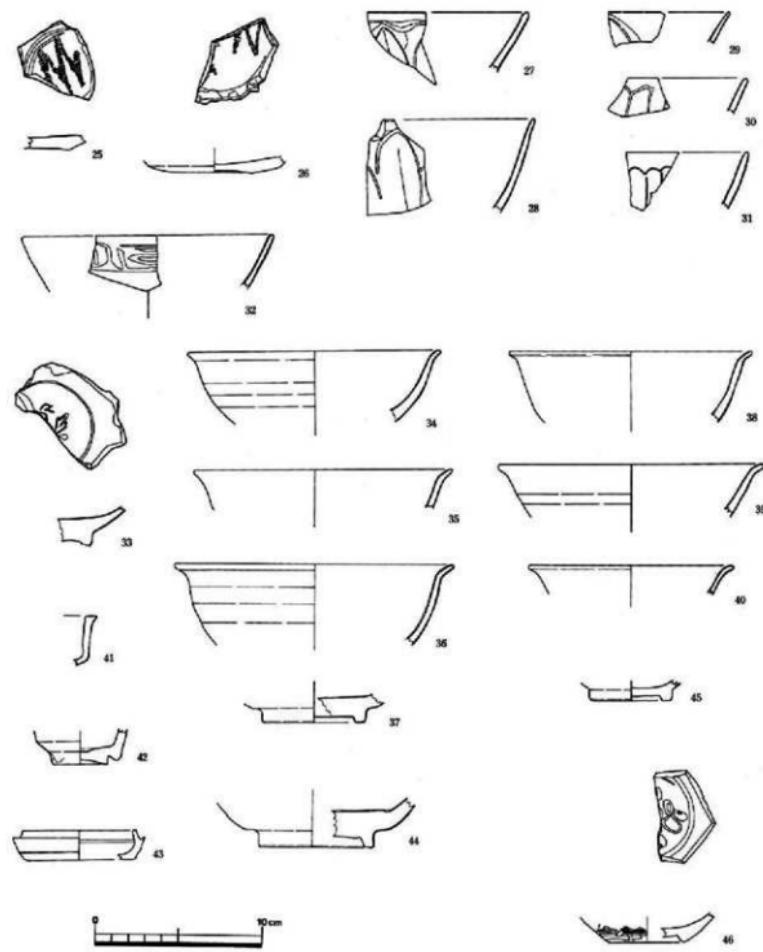
遺構出土遺物

25号土坑（図128、47） 下層より出土白磁皿IV-2b類（山本分類）で、胴部外面下半より露胎である。

28号土坑（図128、48） 白磁皿V-C類（山本分類）で、胴部外面下半より露胎である。内面に花文と、櫛状工具による刺突文を施す。底部のみ露胎である。

39号土坑（図128、49） 白磁皿V-1類（山本分類）で、内面に一条沈線が施されている。胴部外面下半より露胎で、その部分に煤が付着している。

1号溝（図128、50~52） 50は、白磁碗IV-2類（山本分類）で、中位の玉口口縁のものである。釉調も良い。51は、白磁皿V-2a類（山本分類）の底部で、厚みがあり、胴部外面下半より露胎であると思われるが、底部にまで釉が垂れている。52は、白磁皿IV-1b類（山本分類）で、中位の玉



第127図 輸入陶磁器実測図 (25~45 青磁、46 染め付け組) (S=1/3)

口口縁のものである。

15号溝 (図128、53) 上層より出土。白磁Ⅳ-2 b類 (山本分類) で、胴部外面下半より露胎である。内面胴部中位に段がある。

25号溝 (図128、54) 白磁Ⅳ-1 b類 (山本分類) で、内面胴部中位に段があり、口縁部内面を

突帯で分割している。

包含層出土遺物

白磁碗・皿Ⅱ類（山本分類）（図128、55～60）

55は、白磁碗Ⅱ-1類で、小さい玉口口縁のものである。56は、白磁碗Ⅱ-1a類で、内面胴部中位に段がある。釉調は良い。胴部外面下半より露胎である。57は、白磁皿Ⅱ-1b類で、三角高台を持つ。胴部外面下半より露胎である。58も同じタイプのものと思われるが、碗の可能性もある。59は、白磁碗Ⅱ-1Ⅲ類で、現存部位で、外面は露胎である。釉調は良く、細かい貫入が入る。60は、白磁碗Ⅱ-1Ⅲ類で、胴部外面より露胎だが、一部に釉が垂れる。細かい貫入が入る。

白磁碗Ⅳ類（山本分類）（図128、61～65）

61は、白磁碗Ⅳ-1b類で、大きい玉口口縁のものである。釉調は良い。62は、白磁碗Ⅳ-1b類で、中位の玉口口縁のものである。釉調は良く、比較的厚めに施される。63は、白磁碗Ⅳ-1b類で、中位の玉口口縁のものである。64は、白磁碗Ⅳ-1b類の底部で、胴部外面下半まで施釉されていると思われる。細かい貫入が入る。65は、白磁碗Ⅳ-2類で、大きい玉口口縁のもので、細かい貫入が入る。

白磁碗・皿Ⅴ類（山本分類）（図128、66～71）

66は、白磁碗Ⅴ-1a類で、外面の発色が白色なのに対し、内面は黒ずんで発色している。67は、白磁碗Ⅴ-1a類の底部で、胴部外面下半より露胎である。細かい貫入が入る。68は、白磁皿Ⅴ-1a類の底部で、胴部外面下半より露胎である。細かい貫入が入る。69は、白磁碗Ⅴ-1b類の底部で、胴部外面下半より露胎である。細かい貫入が入る。対土も粗い。70は、白磁碗Ⅴ-2類で、胴部外面下半まで施釉されており、一部高台外面にまで垂れている。粗い貫入が入る。71は、白磁碗Ⅴ-2類と考えられる。胴部外面下半より露胎だが、一部高台外面にまで垂れている。細かい貫入が入る。

白磁皿Ⅵ類（山本分類）（図128、72～73）

72は、白磁皿Ⅵ-1a類で、高台外面にまで施釉されている。73は、白磁皿Ⅵ-2b類で、胴部外面下半より露胎である。細かい貫入が入る。

白磁碗・皿Ⅶ類（山本分類）（図128、74～77）

74は、白磁碗Ⅶ-1類で、胴部外面下半より露胎である。内面の胴部と見込みの境に段がある。貫入が入る。75は、白磁皿Ⅶ-1c類で、胴部外面下半より露胎である。釉調は良い。76は、白磁碗Ⅶ-4類で、胴部外面下半より露胎である。内面の胴部と見込みの境付近の幅約1.5cmの釉を帯状にカキ取っている。77も白磁碗Ⅶ-4類と考えられ、高台の形態が異なるが、76と同様に釉を帯状にカキ取っている。釉は胴部外面下半にまで垂れている。

白磁碗Ⅷ類（山本分類）（図128、78）

78は、白磁皿Ⅷ-1a類で、外底部も全面施釉されている。内面には、沈線により円圈が施されている。釉調は良い。

白磁碗Ⅸ類（山本分類）（図128、79～80）

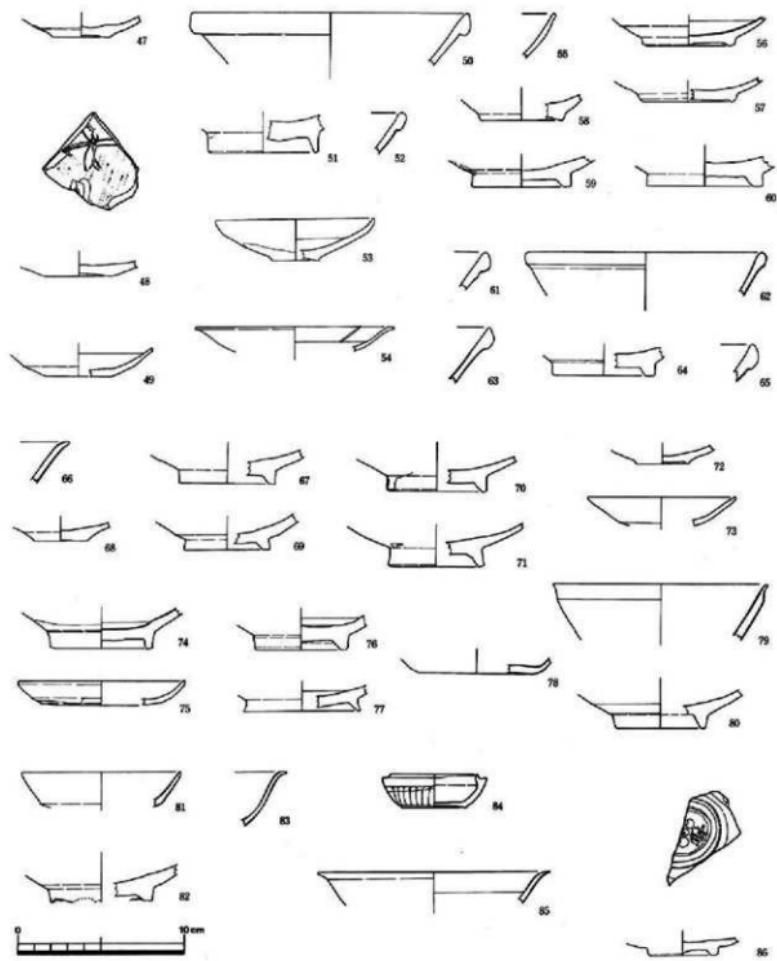
79は、白磁碗Ⅸ-1類と考えられ、釉調は良い。内面にのみ貫入が入る。80は、白磁碗Ⅸ-1類の底部と考えられ、胴部外面下半より露胎である。

白磁碗D群（森田分類）（図128、81～82）

81は、白磁碗D群と考えられる。釉調は良く、比較的厚めに施される。82は、白磁碗D群と考えられ、内外面とも既に釉が剥落しており、釉調等は不明だが、高台部分に抉り入れられている。

白磁碗E群（森田分類）（図128、83）

83は、白磁碗E群と考えられる。胎土、釉調共に良い。



第128図 輸入陶磁器実測図(白磁)(S=1/3)

不明・特殊品(図128、84~86)

84は、合子の身で、内面の受け部付近までと、外面の一部に施釉される。外面には菊花文を施す。12世紀後半~13世紀前半のものと考えられる。85は、口縁端部で屈曲する大型品で、釉には透明感があり、胴部内面の線の上と下で、発色が異なっている。86は、外底に朱書があり、「勝」の文字が書かれている。高台径から皿の底部と推察するが、不明である。胴部外面下半より露胎である。

第10表 輸入陶磁器観察表

| 図版 No. | 通構 層位 | 器種 | 腹部外面 | 腹部内面 | 底 部 | 高 台 | 口径 | 器 高 | 見込 み高 | 底径 | 高台径 高さ | 色調 胎土 | 備 考 |
|------------------------|---------------|------------|--------------|--------------|--------------|------|------|-----|------------|-------------|-----------|--------------|--------------|
| 126 1 | 10号土坑 下層 | 青磁碗 I-5 | 丸ア色 輪邊弁文 | | | | 14.8 | | | | | 灰白 緻密 | 龍泉窯系 釉透明感 |
| 32号土坑 2 | | 青磁碗 I-2 | 青緑色 | 草花文 (ヘラ) | | | 16.4 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 釉透明感 |
| 1号竪穴 11 | 青磁碗 I-7 | 青-ア黄色 | 草花文 (ヘラ) | 厚みあり 内面円凹 | 断面台形 | | | | | 5.6 0.8 | 灰白 緻密 | 〃 釉透明感 | |
| 1号溝 4 | 青磁小瓶 B IIa | 青-ア灰色 | | 厚みあり | 外側面取 | | | | | 5.6 0.7 | 灰 やや粗 | 〃 | |
| 1号溝 5 | 青磁碗 B-1' | 緑色 | | | | | | | | | 灰白 緻密 | 〃 釉透明感 | |
| 1号溝 6 | 青磁碗 B-1' | 緑灰色 | | | | 13.6 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| 1号溝 7 | 青磁碗 I-4a | 緑色 | 2本沈線で 5分割 | | | 16.4 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| 8号溝 8 | 青磁碗 I-5 | 灰色 | | | | 14.8 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| 25号溝 9 | 青磁碗 B-1' | 緑色 | | | | 13.4 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 釉透明感 | |
| PI-2 10 | 青磁碗 I-2a | 灰-ア色 | 草花文 (ヘラ) | 内面円凹 草花文 | 断面方形 外側面取 | | | | | 5.8 0.8 | 灰白 やや粗 | 〃 | |
| PI-106 11 | 青磁碗 III-2 | 明緑灰色 | | | | | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| PI-678 12 | 青磁碗 ? | 橙灰色 | | | 断面方形 | | | | | 5.0 0.65 | 灰 緻密 | 浅鉢の可能 性 | |
| L-2 13 | 青磁碗 I-2 | 緑灰色 | | 内面円凹 | 外側面取 | | | | | | 灰白 緻密 | 龍泉窯系 | |
| J-10 14 | 青磁碗 I-1 | 緑灰色 | | | | | | | | | 灰白 やや粗 | 〃 | |
| | 青磁碗 I-2 | 緑色 | 草花文 (箇) | 内面円凹 | | | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| G-6,H-7, E-5等 16 | 青磁碗 I-2 | 青緑色 | 草花文 (箇) | | | 16.0 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| D-1 17 | 青磁碗 I-2 | 緑色 | | 内面円凹 魚文 | | | | | 4.1 | | 灰白 緻密 | 〃 釉透明感 | |
| K-1 18 | 青磁碗 I-2 | 丸ア色 | | 内面墨書文 | | | | | 5.4 | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| F-6 19 | 碗 | 純い緑色 | | | | 16.0 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| K-7 20 | 青磁碗 I-5 | 緑灰色 | | | | 12.0 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| | 青磁碗 II-2 | 明緑灰色 | | | | 15.8 | | | | | 白 緻密 | 〃 | |
| I-J-9 21 | 青磁碗 II-2 | 明緑灰色 | | | | 17.4 | | | | | 白 緻密 | 〃 | |
| I-J-9 22 | 青磁碗 II-2 | 明緑灰色 | | | | 16.8 | | | | | 白 緻密 | 〃 | |
| I-J-9 23 | 青磁碗 II-2 | 明緑灰色 | | | | | | | | | 白 緻密 | 〃 | |
| I-2 24 | 青磁碗 III | 丸ア灰色 | | 薄い底部 | 断面長方形 高台 | | | | 7.6 0.7 | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| D-1 127 | 青磁碗 I-1b | 灰-ア色 | | 内面シラフ ダ文 | | | | | 4.6 | | 灰白 緻密 | 同安窯系 釉透明感 | |
| | 青磁碗 I-1b | 青緑色 | | 内面シラフ ダ文 | | | | | 5.4 | | 灰白 粗 | 釉透明感 | |
| L-10 27 | 青磁碗 B-1 | 淡青緑色 | | | | 13.4 | | | | | 灰白 やや粗 | 龍泉窯系 | |
| I-9 28 | 青磁碗 B-1' | 黄緑色 | | | | 17.0 | | | | | 灰白 やや粗 | 〃 | |
| H-6 29 | 青磁碗 B-1' | 緑灰色 | | | | 13.0 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |
| G-9 30 | 青磁碗 B-III | 青緑色 | | | | 13.0 | | | | | 灰白 緻密 | 〃 | |

| 図版 No. | 遺構 層位 | 器種 | 側部外面 | 側部内面 | 底部 | 高台 | 口径 | 器高 | 見込 高さ | 底径 | 高台径 高さ | 色調 胎土 | 備考 |
|-----------|---------------|--------------|--------------|----------------|--------------|------|------|-----|------------|------------|-----------|-----------|------|
| 31 | F-7 | 青磁碗 B-II | 緑色 透かし文 | | | | 12.6 | | | | | 灰白 粗 | 龍泉窯系 |
| 32 | I-8 | 青磁碗 C-IIa | 純い緑色 雷文帯 | | | | 14.8 | | | | | 灰白 緻密 | " |
| 33 | F-D-4 | 青磁碗 C-IIa | リーフ? 灰色 | 内面スラップ 花 | 外側面取 | | | | | 6.0 | 灰白 やや粗 | " | |
| 34 | H-6 | 青磁碗 D-I | 純いリーフ? 灰色 | | | | 15.0 | | | | | 灰 粗 | " |
| 35 | H-3 | 青磁碗 D-I | リーフ? 灰色 | | | | 16.4 | | | | | 灰白 密 | " |
| 36 | I-9 | 青磁碗 D-I | 純い緑色 | | | | 16.3 | | | | | 灰白 緻密 | " |
| 37 | 廐上 | 青磁碗 D-II | 灰リーフ? 色 | | 断面方形 厚め | | | | | 6.2 0.8 | 灰白 密 | " | |
| 38 | G-2 | 青磁碗 D-II | 明緑灰色 | | | | 14.4 | | | | | 灰白 密 | 釉透明感 |
| 39 | I-9 | 青磁碗 D-II | 青緑色 | | | | 15.8 | | | | | 灰 密 | " |
| 40 | E-2 | 青磁碗 D-II | 明緑灰色 | | | | 12.2 | | | | | 灰白 密 | 釉透明感 |
| 41 | | 青磁 香炉 | | | | | | | | | | | 釉透明感 |
| 42 | | 青磁 香炉 | 灰緑色 外側のみ | 黒色 | 外底黒色 | | | | 3.4 | | | 灰 緻密 | |
| 43 | D-8 | 青磁合子 (舟) | 青緑色 | 露胎 | | 6.8 | 1.8 | 6.4 | | | | 灰白 やや粗 | |
| 44 | G-9 | 青磁碗 | 橙灰色 | 削れ口接縫 修 | 外面露胎 | 断面方形 | | | | 5.0 0.6 | 灰白 緻密 | | |
| 45 | J-3 | 青磁碗 | 緑色 | 厚め 外面露胎 | 断面台形 内面施釉 | | | | | 7.4 1.0 | 黄褐色 粗 | | |
| 46 | J-7 | 染め付 け皿C | | | 基盤 | | | | 4.5 | | | 灰白 やや粗 | |
| 47 | 25号土坑 下層 | 白磁皿 IV-3b | 灰黄色 | 外面露胎 | | | | | 3.4 | | | 灰白 やや粗 | |
| 48 | 26号土坑 下層 | 白磁皿 IV-c | 白色(空色 味) | 外露胎、内 花文、刻文 | | | | | 4.0 | | | 灰白 緻密 | 釉透明感 |
| 49 | 39号土坑 V-1 | 白磁皿 V-1 | 灰黄色 | 一条沈線 桺付着 | 外面露胎 | | | | 3.8 | | | 灰白 緻密 | |
| 50 | 1号溝c 下層 | 白磁皿 IV-2 | 灰白色 玉口口縫 | | | | 16.6 | | | | | 灰白 緻密 | 釉透明感 |
| 51 | 1号溝D 上層 | 白磁皿 V-2a | 灰白色 | 外面露胎 厚い底盤 | 断面八の字 露胎 | | | | 6.6 1.2 | | | 灰白 粗 | |
| 52 | 1号溝D 上層 | 白磁皿 IV-1b | 緑灰色 玉口口縫 | 外面露胎 | | | | | | | | 灰白 緻密 | |
| 53 | 15号溝B 上層 | 白磁皿 IV-3b | 灰白色 | | 断面三角 露胎 | 9.6 | 2.4 | | | 2.8 0.3 | 灰白 緻密 | | |
| 54 | 25号溝 II-1b | 白磁皿 II-1b | 灰白色(黄 色味) | | | | 12.0 | | | | | 白 密 | |
| 55 | B-11 下層 | 白磁皿 II-1 | 灰白色 玉口口縫 | | | | | | | | | 灰白 やや粗 | |
| 56 | F-4 | 白磁碗 II-1a | 灰白色 | 外面露胎 内面凹槽 | 台面台形 露胎 | | | | 5.5 0.5 | | | 灰白 緻密 | |
| 57 | I-3 | 白磁皿 II-1b | 灰白色 | 外面露胎 | 断面三角 露胎 | | | | 5.6 0.4 | | | 灰白 やや粗 | |
| 58 | 廐土 | 白磁皿 II-1b | 内白色外 淡灰白色 | 外面露胎 | 断面三角 露胎 | | | | 5.3 0.5 | | | 灰白 緻密 | |
| 59 | G-11 | 白磁碗 II-3 | 灰白色(空 色味) | 外面露胎 | 台面台形 露胎 | | | | 7.0 0.7 | | | 灰白 緻密 | |
| 60 | G-5 | 白磁碗 II-3 | 灰白色 | 外面露胎 | 台面台形 露胎 | | | | 6.0 0.8 | | | 灰白 緻密 | |
| 61 | I-E-3 | 白磁碗 IV-a | 白色 玉口口縫 | | | | | | | | | 灰白 緻密 | 釉透明感 |

| 版面 | 透構 層位 | 器種 | 側部外面 | 側部内面 | 底 部 | 高 台 | 口 径 | 器 高 | 見込 み高 | 底径 | 高台径 高さ | 色調 胎土 | 備 考 |
|----|----------|-------------|--------------------|-------------|--------------|----------------|------------|-----|------------|----|------------|------------|---------|
| | G-4 | 白磁輪 Ⅳ-1b | 灰白色 玉口口縫 | | | | 14.0 | | | | | 灰白 密 | 輪透明感 |
| 62 | E-1 | 白磁輪 Ⅳ-1b | 綠灰色 玉口口縫 | | | | | | | | | 灰白 緻密 | 輪透明感 |
| 63 | H-7 | 白磁輪 Ⅳ-1b | 灰白色 | | 外面露胎 | 台面台形 露胎 | | | | | 6.2 0.8 | 灰白 密 | |
| 64 | K-4 | 白磁輪 Ⅳ-2 | 黄灰色 玉口口縫 | | | | | | | | | 乳白色 やや粗 | |
| 65 | K-7 | 白磁輪 Ⅴ-1a | 純い白色 墨ずんで発 色 | | | | | | | | | 灰白 緻密 | |
| 66 | E-8 | 白磁輪 Ⅴ-1a | 灰白色 | | 厚い底部 | 台面台形 露胎 | | | | | 5.8 0.8 | 灰白 密 | 輪透明感 |
| 67 | F-9 | 白磁輪 Ⅴ-1a | 明灰紗-7 色 | | 外面露胎 | | | | | | 3.2 | | 灰 緻密 |
| 68 | D-3 | 白磁輪 Ⅵ-1b | 灰白色幾々 「目立」 | | 外面露胎 | 断面台形 露胎 | | | | | 5.2 0.6 | 灰白色 やや粗 | 輪透明感 |
| 70 | G-9 | 白磁輪 Ⅵ-2C | 灰白色 | | 外面露胎 厚い底部 | ハの字、費 付一露胎 | | | | | 6.0 0.9 | 灰白 密 | 輪透明感 |
| 71 | G-2 | 白磁輪 Ⅵ-2C | 灰白色 | | 外面露胎 厚い底部 | ハの字、費 段段、露胎 | | | | | 5.8 1.1 | 灰白 やや粗 | 輪透明感 |
| 72 | L-9 | 白磁輪 Ⅵ-2b | 灰白色(空 色味) | | | ハの字、費 付一露胎 | | | | | 3.0 0.2 | 灰白 密 | 輪透明感 |
| 73 | K-M-9 | 白磁輪 Ⅶ-1 | 灰白色 | | 外面露胎 | 台面長方形 露胎 | | | | | 6.2 1.1 | 灰白 密 | |
| 74 | I-2 | 白磁輪 Ⅷ-1C | 灰白色 | | 外面露胎 | | 9.8 | 1.5 | 5.0 | | | 灰白 緻密 | |
| 75 | K-10 | 白磁輪 Ⅸ-4 | 灰白色(空 色味) | 帶状物カキ トリ | 外面露胎 厚い底部 | 外側面取 露胎 | | | | | 5.6 0.9 | 白色 やや粗 | |
| 76 | I-J-9 | 白磁輪 Ⅹ-4 | 灰白色 | 帶状物カキ トリ | 外面露胎 | 断面ハの字 露胎 | | | | | 6.6 1.2 | 灰白 密 | |
| 77 | E-6 | 白磁輪 Ⅺ-4 | 灰白色(空 色味) | | 全面施釉 | | | | 7.0 | | | 灰白 緻密 | 輪透明感 |
| 78 | H-IJ-2 | 白磁輪 Ⅻ | 灰白色 | | | | 13.0 | | | | | 灰白 密 | |
| 79 | G-3 | 白磁輪 Ⅼ-1 | 灰黃白色 | | 外面露胎 | 断面白形 露胎 | | | | | 5.4 0.8 | 灰白 やや粗 | |
| 80 | | 白磁輪 D群 | 灰白色 | | | | 9.4 | | | | | 灰白 粗 | |
| 81 | D-14 | 白磁輪 D群 | | | 外面露胎 厚い底部 | 抉り 露胎 | | | | | 6.2 0.8 | 灰白 密 | |
| 82 | 魔土 | 白磁輪 E群 | 灰白色 | | | | | | | | | 灰白 緻密 | |
| 83 | L-? | 合子 (身) | 灰白色 | | やや上げ 底状 | | 5.2 6.2 | 2.0 | 1.7 3.9 | | | 灰白 緻密 | |
| 84 | K-L-5 | ? | 灰白色 | 継下黄灰 色 | | | | | | | | 灰 粗 | 輪透明感 |
| 85 | I-3 | 白磁輪 ? | 灰白色 | | 外面朱青 「轉」 | 断面白形 露胎 | | | | | 4.2 0.5 | 白色 やや粗 | |
| 86 | | | | | | | | | | | | | |

第4項 木製品

1. 井戸側（隅柱・横桟・縦板）

1号井戸 上部を欠くが、隅柱・横桟・縦板が組み合ったままほぼ完全な形で出土した。隅柱は4点全て出土。どれも上部が腐蝕しており、1・2・3は全長110cm前後、4は上段の枘孔より先を欠き全長93.3cm。断面はほぼ正方形で、太さは1・2が約8cm角、3・4は約10cm角。1・3・4には、摩滅してはっきりしないが、下部側面に一部工具痕が残る。また、4点とも底部に、工具痕が残る。下段の枘孔は下端から40cm前後の所で、隣接する2面に上下に5cm程ずらしてあけられる。大きさ6.5×3.5cm前後の長方形。深さは5.5cm程。枘孔内部には工具痕が残る。上段の枘孔は腐蝕が著しく、存在は確認できるが形ははっきりしない。大きさも不明。横桟は6点、隅柱と組み合った状態で出土。上下2段にわたりて組まれており、下段は4点全て、上段は2点のみが出土した。5・6・7・8は、長さ57cm前後、断面長方形で厚さ4cm程。9・10は、長さ53cm前後、これらも断面長方形で厚さ2.5cm程、5～8に比べ一回り小さい。いずれも両端を削り枘にする。8は、枘部分の削りだしが明瞭である。縦板は16点出土。どれも上部は腐蝕しており欠損する。幅10cm前後、厚さ1cm程のものが多い。端部が平坦なもの、斜めに切られ尖るものがある。端部が尖る縦板は、打ち込み用とも考えられる。24のみ柱目材、その他は全て板目材を用いる。

3号井戸 1号井戸と同様に、隅柱・横桟・縦板が組み合ったままほぼ完全な形で出土した。隅柱は4点全て出土。4点とも上部が腐蝕し欠けている。全長73cm前後。太さ約5cm角で、断面はほぼ正方形。枘孔は下端から35cm前後の所で、隣接する2面に上下に5cm程ずらしてあけられる。下段のみ残存。大きさ7×3cm前後の長方形。深さは3cm程。横桟は4点、隅柱と組み合った状態で出土。32・33は断面長方形で長さ69cm前後。34・35、断面はほぼ正方形で長さ67cm前後。いずれも両端を削り枘にする。横桟の枘に比べ、隅柱の枘孔の方が大きく、枘と枘孔はしっかりとまらない。縦板は44点出土。どれも上部は腐蝕により欠損する。幅10cm前後、厚さ1cm程のものが多い。端部が平坦なもの、斜めに切られ尖るもの(42・51・67・68・74)、V字型に尖るもの(47・64・70)がある。端部が尖る縦板は、打ち込み用とも考えられる。全て板目材を用いる。

2. 柱根・礎盤

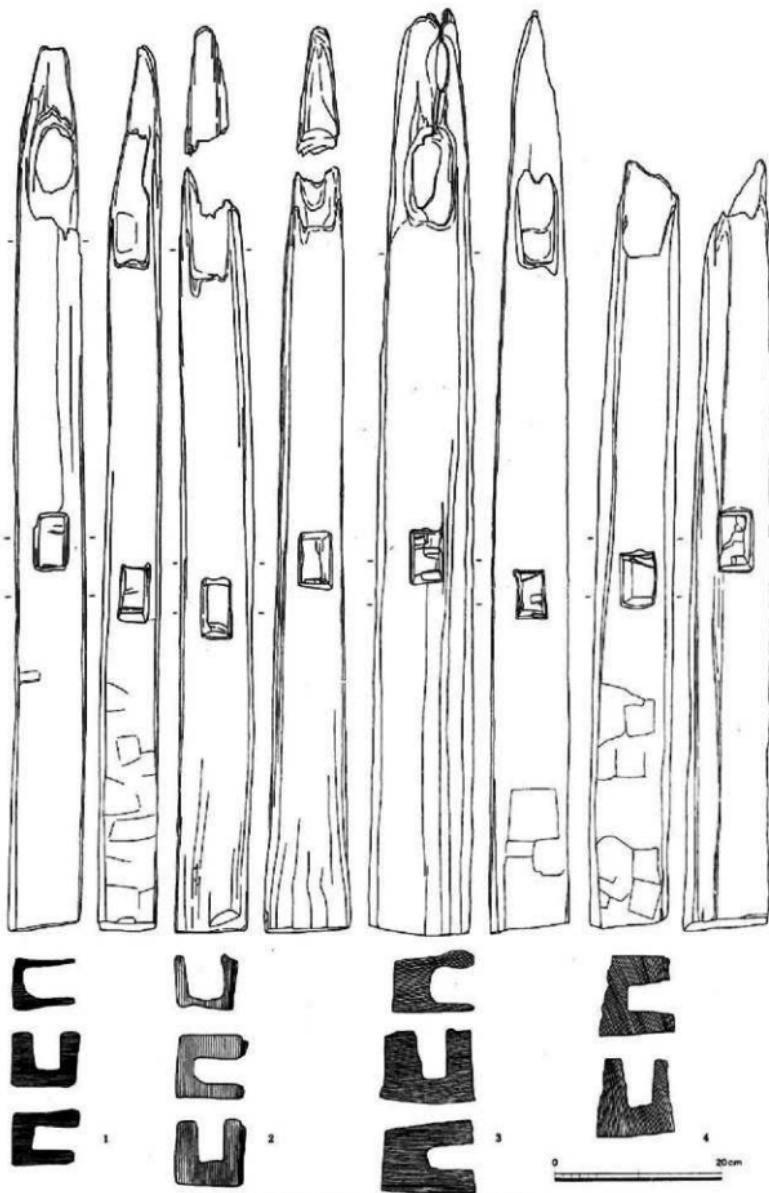
7号掘立柱建物 80は、P4から出土。長さ19.6cm、径3.7×2.5cm、柱根の可能性あり。81は、P7から出土。これもはっきりしないが、形状から判断して礎盤と思われる。82・83は、ともにP7から出土する。同一個体とも考えられる。柱根か。

8号掘立柱建物 85・86・87・88・89は、P7から出土する。接合出来なかったが、同一個体と思われる。礎盤か。90はP9から出土。長さ11.1cm。断面は10×7cmの長方形、柱根。91・92もはっきりしないが、形状から判断すると礎盤とも考えられる。

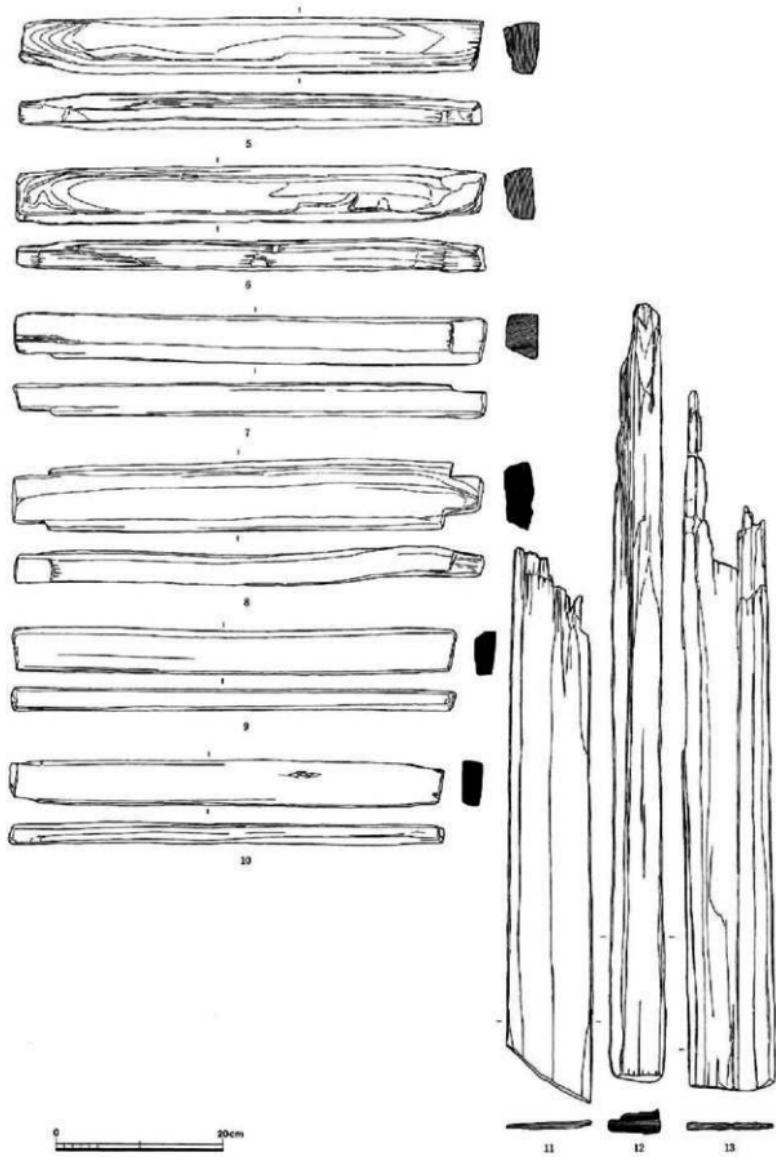
11号掘立柱建物 P2・3・9・12・15で柱根が出土。93・95はP9からの出土で、同一個体と考えられる。96はP2からの出土、ミカン割りの材を用いる。底部は切り落としたままで尖り、工具痕が残る。97はP12からの出土、断面は16.6×10.0cmの長方形で、長さ57.7cm。底部は平坦で工具痕が残る。98はP15からの出土。断面は径15.8cmの円形、長さ68.8cm。心持材。樹種は97がスギ、98がクリ。

12号掘立柱建物 P2・3で柱根と礎盤、P8で礎盤が出土する。100・102・103、いずれもコの字型の礎盤。101は柱根。心持材を用いる。長さ33.2cm、径5.1cm。

14号掘立柱建物 P1・4・5で柱根が出土。いずれも周囲が腐蝕しており、比較的堅い中心部と節の部分が残存する。実際の径は、残存径よりもさらに大きいと考えられる。104・105・106、いずれ



第129図 木製品 1号井戸隔柱 (S=1/6)



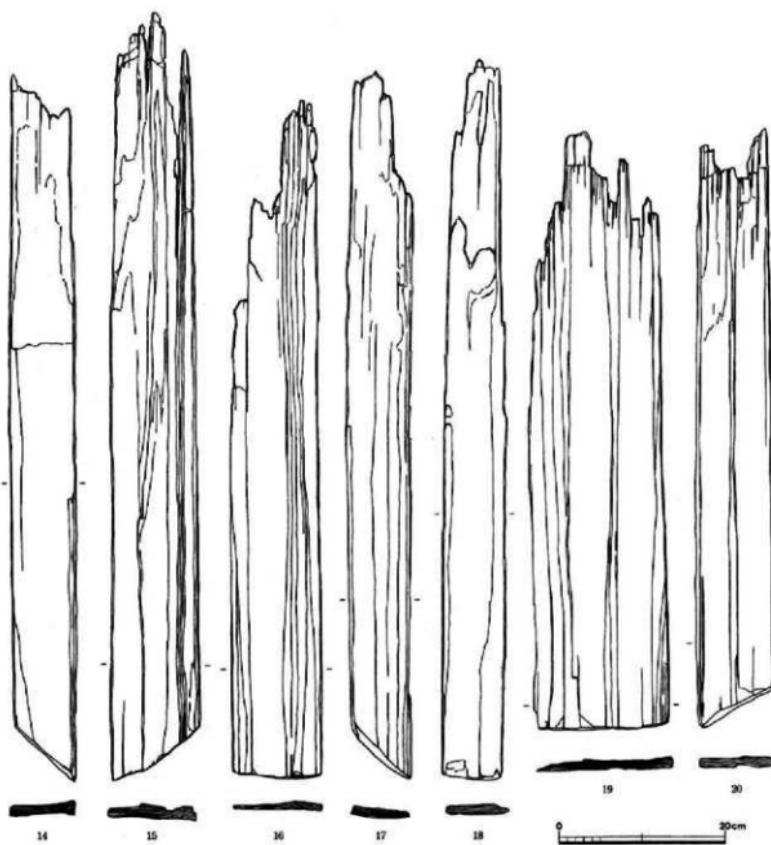
第130図 木製品 1号井戸横桟・板 (S=1/6)

も心持材。樹種は104・105がスギ。

18号掘立柱建物 P 1・8で柱根が、P 7で柱根と礎盤が出土。108は、礎盤と考えられる。中央がわずかにくぼんだ平坦面が上面と思われる。107・109・110は柱根。

30号掘立柱建物 P 5・8から柱根が出土する。111は、P 5から出土。断面が15.5×8.6cmの長方形で、長さ49.2cm。112は、P 8から出土。断面は12.4×12.3cmの割丸方形、長さは53.2cm。111・112とも底部に工具痕が残る。

その他、P 849・264・312・273から、それぞれ113・114・115・116が出土している。いずれも柱根と考えられる。113は断面台形、長さ22.4cm。115はミカン割り材を用いる。114・116は心持材、ともに周囲が腐蝕しており、中心部と節の部分が残存する。

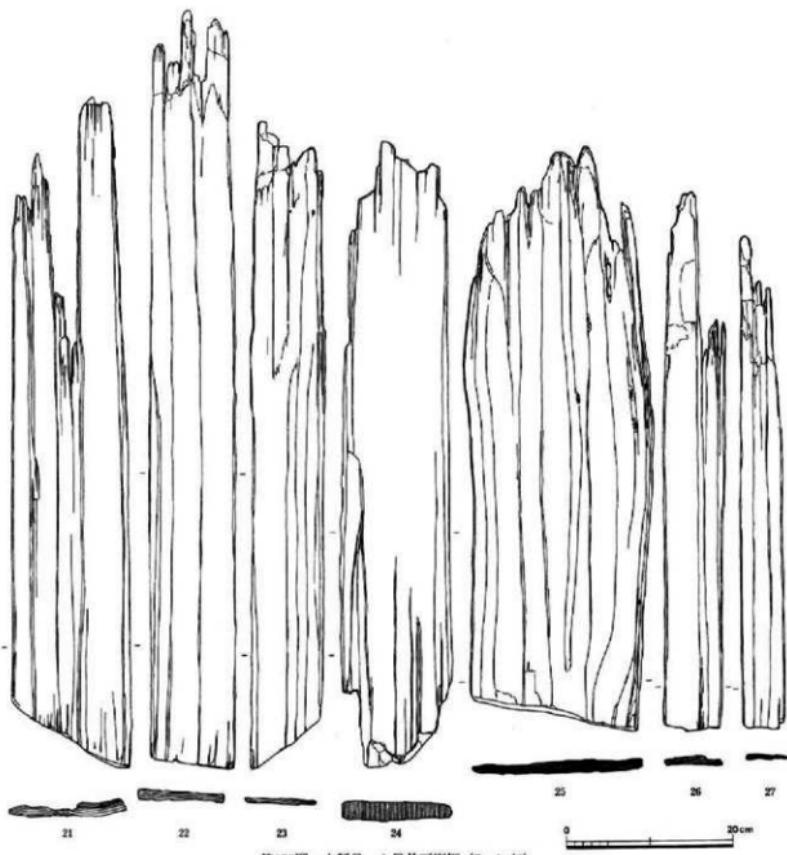


第131図 木製品 1号井戸板 (S=1/6)

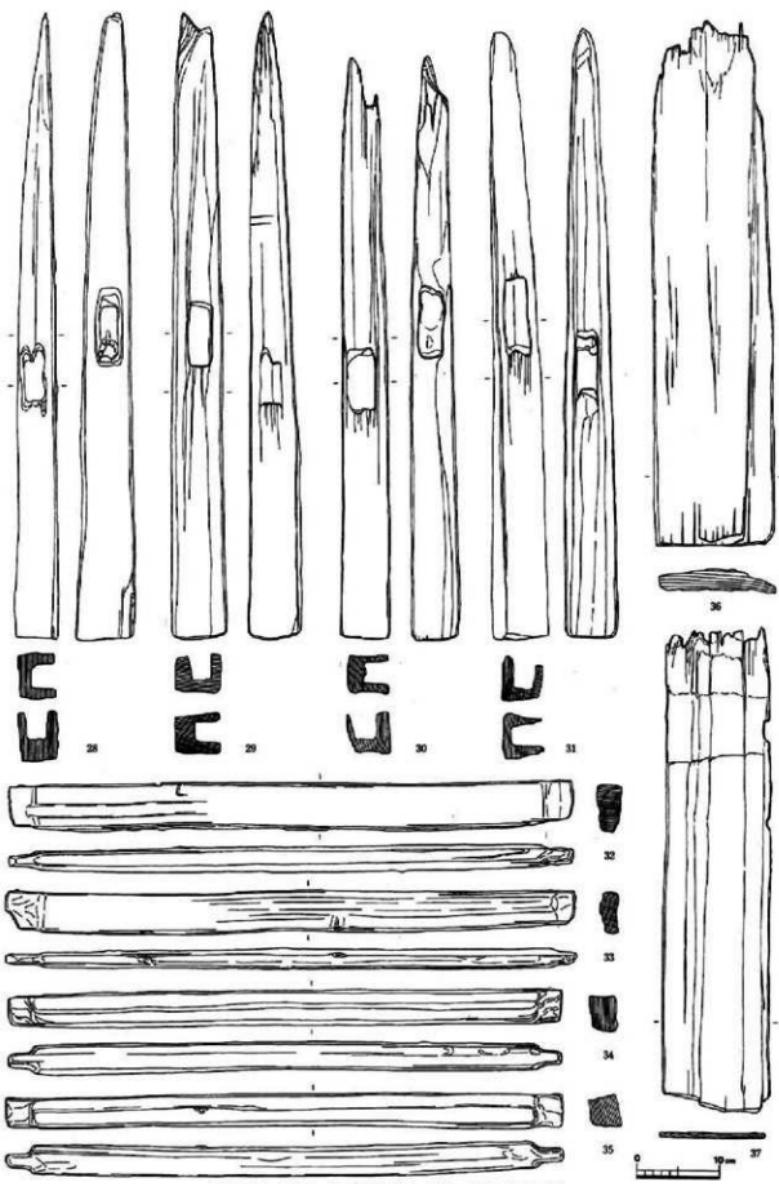
3. 曲物

117は、柄杓。杓部径12.2cm・同高9.2cmで、柄部は根元から折れているが杓部はほぼ完形。側板は二重に周り、樹皮で縫じ合わせる。側板内面には縦平行線のケビキがはいる。側板重合せ部分の上寄りに長方形の柄孔があけられる。柄の先端を挿入する孔は貫通する。底板との結合には木釘等は用いず、そのままはめ込まれている。側板下部の内側および底板の側面は、結合のためなのか若干斜めに削られる。柄は先端を尖らせた角棒で、側板内側にあたる位置に孔をあけ木釘を打ち込んで身に固定する。樹種は、杓部がヒノキ、柄部がスギ。

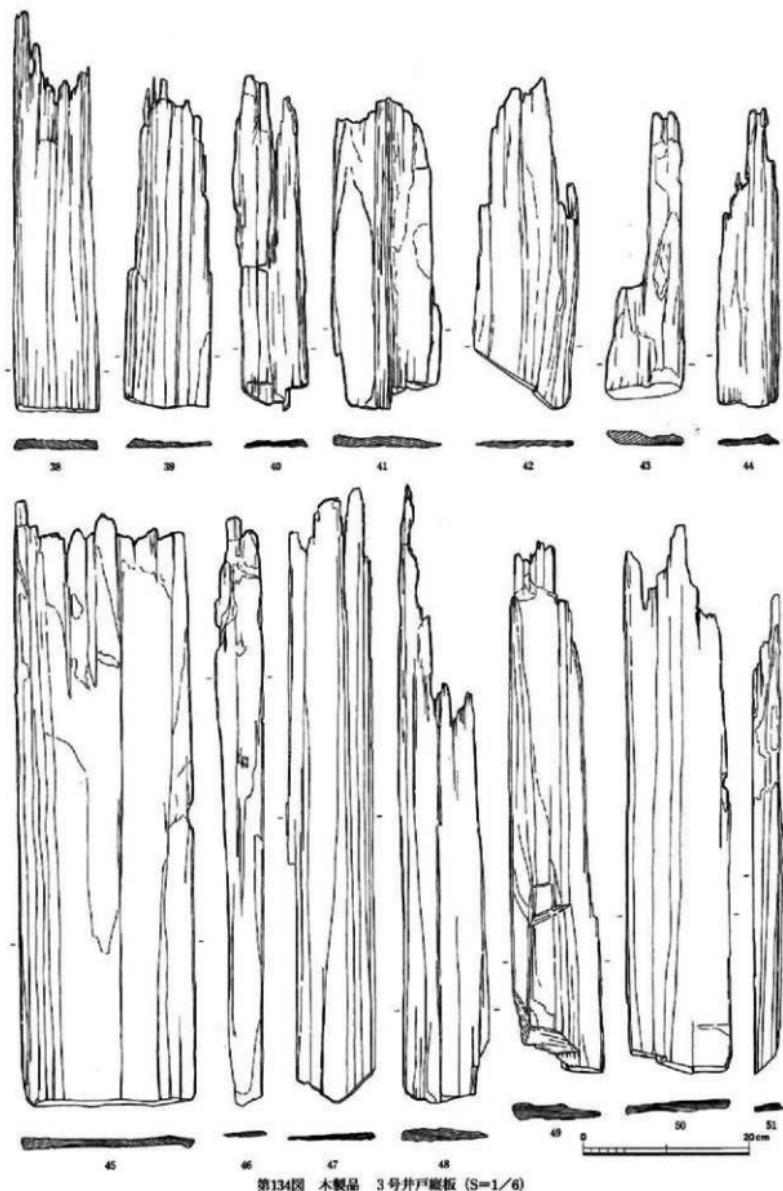
118は、底板と側板残片。底板は径15.4cm、厚さ0.9cm。側板とは木釘で結合、結合木釘は3カ所。側板は高さ4.6cm、内面に縦平行線のケビキをいれる。側板の継合せ方法は不明。側板下部に、木釘の孔が確認できる。底板・側板とともに、内面と考えられる面全体に漆が塗られる。



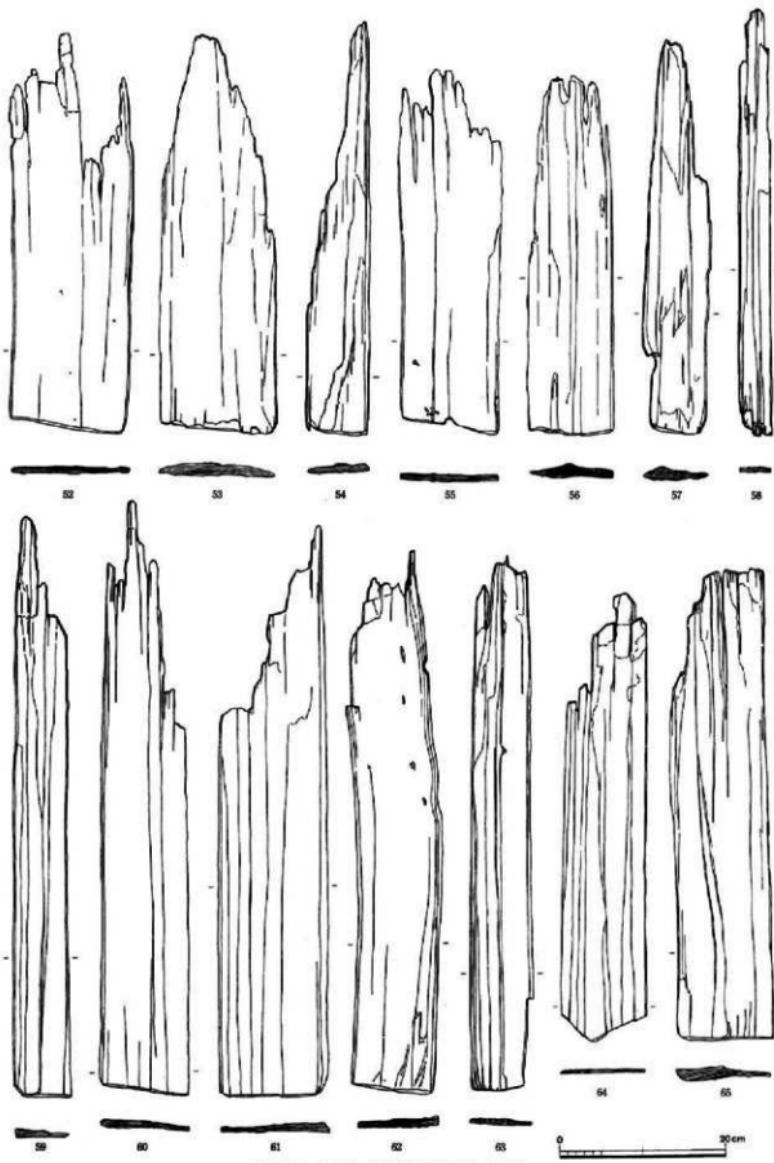
第132図 木製品 1号井戸底板 (S=1/6)



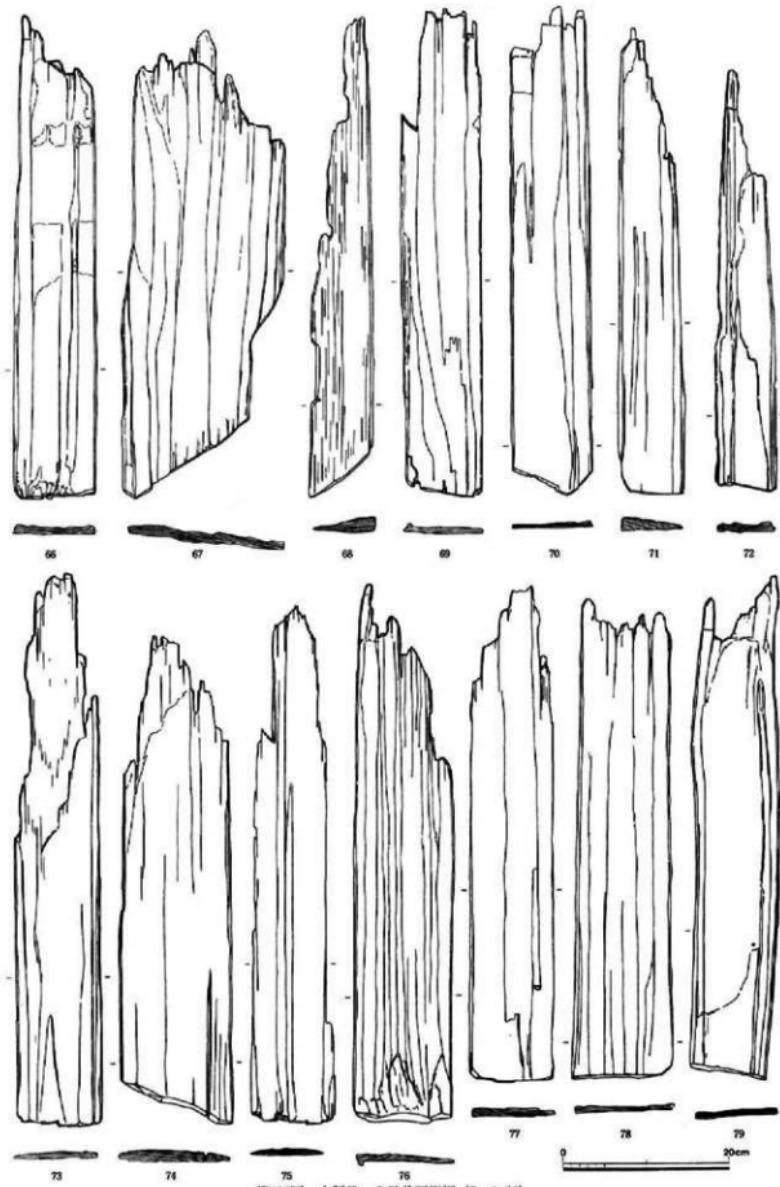
第133図 木製品 3号井戸構柱・横桟・縦板 ($S=1/6$)



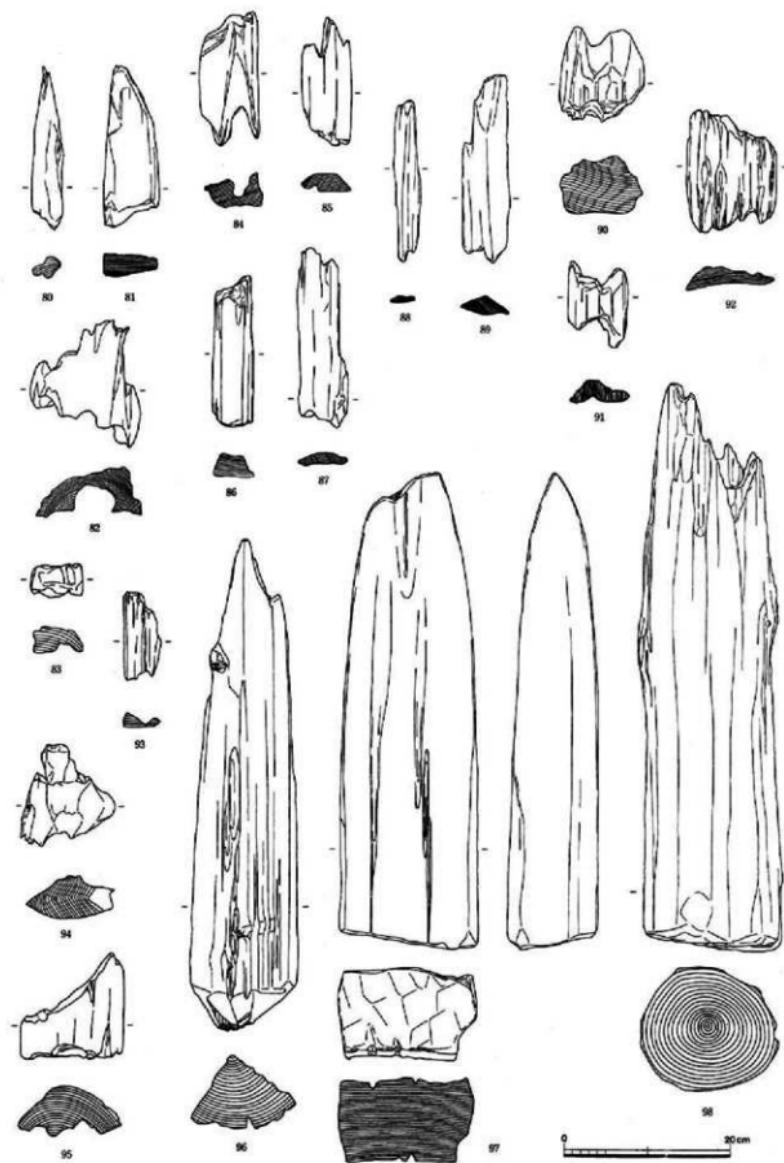
第134図 木製品 3号井戸板 (S=1/6)



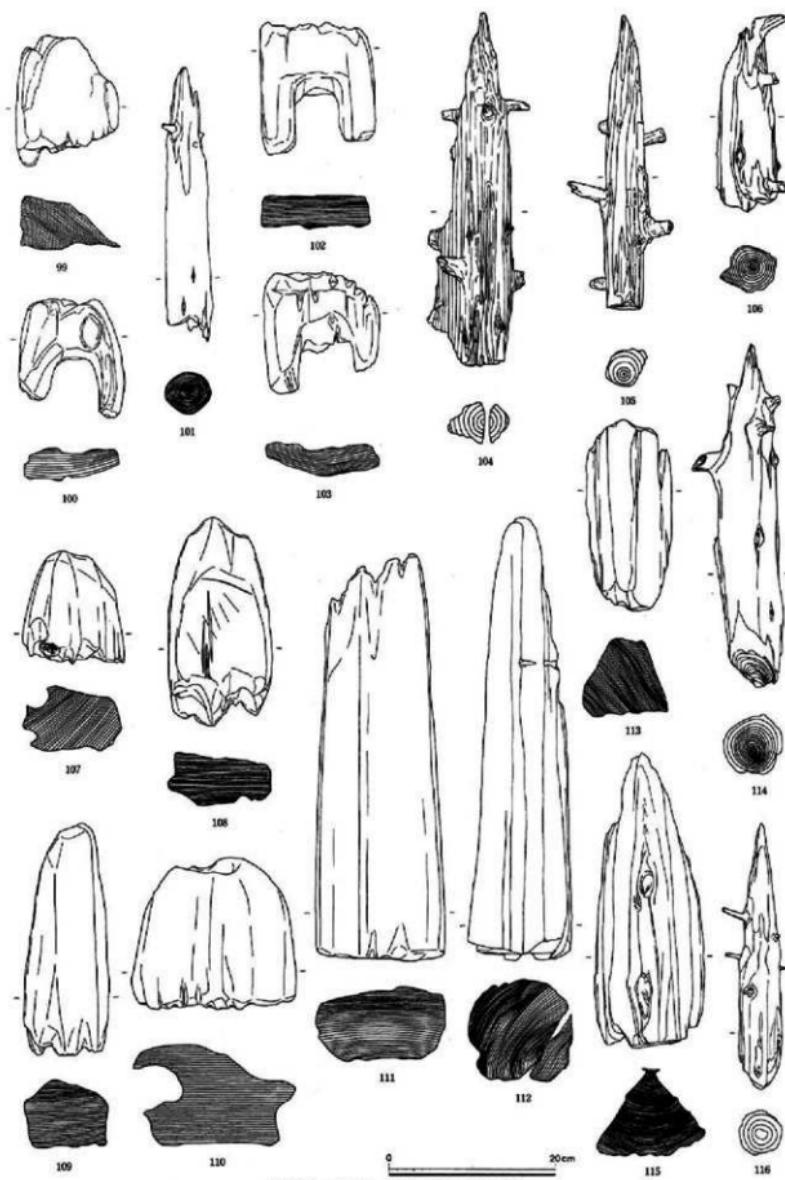
第135図 木製品 3号井戸板 (S=1/6)



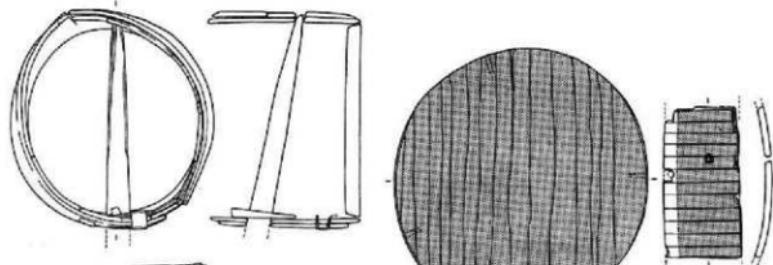
第136図 木製品 3号井戸板 (S=1/6)



第137図 木製品 柱根・棟板 (S=1/6)

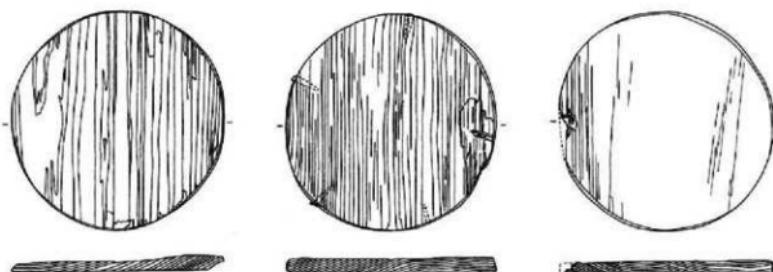


第138図 木製品 柱根・礎板 (S=1/6)



117

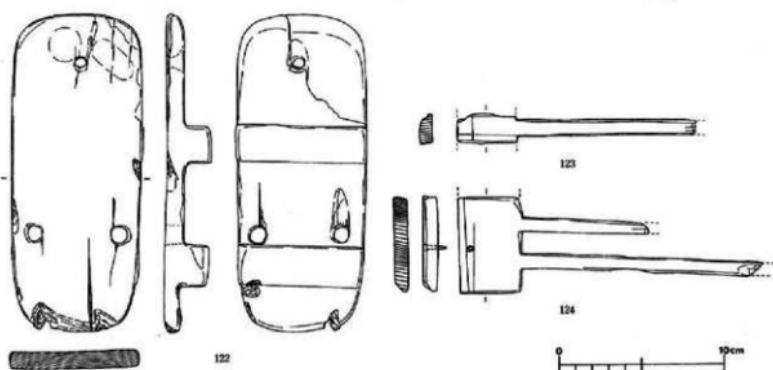
118



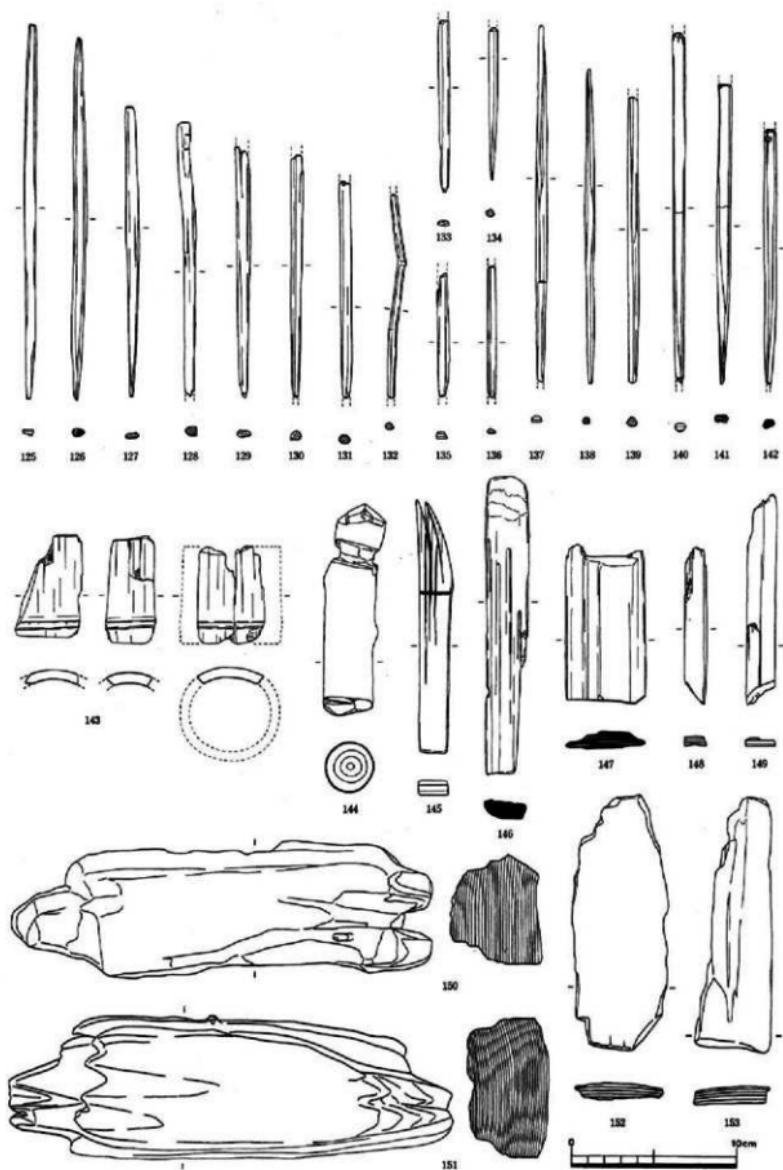
119

120

121



第139図 木製品 曲物容器・下駄・用途不明品 (S=1/3)



第140図 木製品 著状木製品・用途不明品 (S=1/3)

119・120・121は側板を欠き、底板のみ出土。どれも径は13cm前後、厚さは1cm程。120、側板との結合は木釘による。結合木釘は5カ所で、不均等に配する。内面と考えられる面に漆(?)の痕跡が残る。119・121は、側面がわずかに斜めに削られており、断面形が台形となる。側板との結合方法は、117と同様と考えられる。

4. 下駄

包含層より出土。平面隅丸長方形の連體下駄。台後部を少し欠くがほぼ完形。前壺を台の中央にあけ、後壺を後脚の前側にあけるタイプ。前壺はかなり後ろに位置する。前壺、後壺ともに使用により摩耗する、特に左側の摩耗が著しい。また、台の前側下面も摩耗する。台の上面、前壺両側に残された足指の痕跡から、右足用と考えられる。樹種はモミ。

5. 箍状木製品

25号土坑から12点(125~136)、43号土坑から2点(137・138)、39号土坑から1点(139)、2号井戸から3点(140~142)、総数18点が出土する。完形のものは少なく、ほとんどが両端、もしくは一端を欠いている。同一個体のものがある可能性もある。断面長方形で両端を尖らせたもの(125・137)、断面長方形で一端を尖らせたもの(127)、断面円形または多角形で両端を尖らせたもの(126・138)等がある。削りは粗雑。使用的痕跡は不明。18点のうち5点(125・126・140・141・142)について樹種鑑定をおこなったが、5点ともスギ。

6. その他の木製品

123と124、接合しないが同一個体と考えられる。用途不明品。124には、長さ1.4cmの木釘が打ち込まれている。143は、タケの節をそのまま利用した容器。残片が3点出土する。接合しないが、同一個体と考えられる。144は、径3.0cmの樹皮付きの心持丸木を加工した木製品。一方を尖らし、その基部に溝をめぐらす。つくりは粗雑。陽物とも考えられる。145は、長さ15.3cm、断面長方形の角棒状の木製品。弧を描くように先端が細くなる。先端は切り込みがはいり3つに分かれ、切り込みの根元部分に浅い溝が掘られる。146は、長さ17.9cmの角棒状の木製品。一方の端部は先端に向かって斜めに摩滅する。

その他、破損が激しく図示できなかったが、85号土坑下層より漆器の残片が出土。器形・法量は不明、厚さ0.4cm程度で、内外面ともに黒漆がかけられる。また、4号井戸下底から剣物容器(?)が出土。これも器形・法量は不明、厚さは中央部で1.5cm程。白木作り。端部に焼焦げた痕跡がある。

第11表 木製品観察表

| 番号 | 出土地点 | 名称 | 法量(cm) | 備考 |
|----|------|------|--------------------------|----|
| 1 | 1号井戸 | 井戸構柱 | 長さ107.3 径 6.4×7.6 | |
| 2 | ~ | ~ | 長さ92.8+15.8 径 8.1×8.2 | |
| 3 | ~ | ~ | 長さ111.8 径 10.6×11.2 | |
| 4 | ~ | ~ | 長さ93.3 径 9.4×9.7 | |
| 5 | ~ | 井戸構柱 | 長さ 56.1 幅 6.7 厚さ 4.3 | |
| 6 | ~ | ~ | 長さ 56.9 幅 6.7 厚さ 3.4 | |
| 7 | ~ | ~ | 長さ 57.2 幅 5.6 厚さ 3.8 | |
| 8 | ~ | ~ | 長さ 56.9 幅 8.6 厚さ 3.5 | |
| 9 | ~ | ~ | 長さ 53.8 幅 5.4 厚さ 2.4 | |
| 10 | ~ | ~ | 長さ 52.2 幅 5.3 厚さ 2.4 | |
| 11 | ~ | 井戸板 | 長さ 66.7 幅 10.0 厚さ 0.7 | |
| 12 | ~ | ~ | 長さ 94.0 幅 5.8 厚さ 2.5 | |
| 13 | ~ | ~ | 長さ 84.5 幅 10.4 厚さ 0.8 | |
| 14 | ~ | ~ | 長さ 85.3 幅 7.9 厚さ 1.2 | |
| 15 | ~ | ~ | 長さ 93.0 幅 10.7 厚さ 1.5 | |
| 16 | ~ | ~ | 長さ 82.1 幅 10.8 厚さ 0.9 | |
| 17 | ~ | ~ | 長さ 85.6 幅 7.9 厚さ 1.1 | |
| 18 | ~ | ~ | 長さ 87.2 幅 7.5 厚さ 1.2 | |
| 19 | ~ | ~ | 長さ 72.3 幅 16.3 厚さ 1.1 | |
| 20 | ~ | ~ | 長さ 72.5 幅 9.2 厚さ 1.0 | |
| 21 | ~ | ~ | 長さ 81.2 幅 14.1 厚さ 1.5 | |
| 22 | ~ | ~ | 長さ 91.5 幅 10.3 厚さ 1.2 | |
| 23 | ~ | ~ | 長さ 78.3 幅 8.8 厚さ 0.8 | |
| 24 | ~ | ~ | 長さ 75.6 幅 13.1 厚さ 2.2 | |
| 25 | ~ | ~ | 長さ 70.6 幅 22.0 厚さ 1.6 | |
| 26 | ~ | ~ | 長さ 65.1 幅 7.0 厚さ 1.0 | |
| 27 | 1号井戸 | 井戸縦板 | 長さ 59.5 幅 5.1 厚さ 0.6 | |
| 28 | 3号井戸 | 井戸構柱 | 長さ 75.9 径 5.4×7.0 | |
| 29 | ~ | ~ | 長さ 75.8 径 6.5×6.4 | |
| 30 | ~ | ~ | 長さ 70.6 径 5.9×5.9 | |
| 31 | ~ | ~ | 長さ 73.4 径 6.7×6.4 | |
| 32 | ~ | 井戸構柱 | 長さ 68.6 幅 5.7 厚さ 3.1 | |
| 33 | ~ | ~ | 長さ 69.2 幅 4.9 厚さ 2.2 | |
| 34 | ~ | ~ | 長さ 67.0 幅 4.3 厚さ 3.2 | |
| 35 | ~ | ~ | 長さ 67.5 幅 3.8 厚さ 3.5 | |
| 36 | ~ | 井戸縦板 | 長さ 63.4 幅 14.0 厚さ 2.5 | |
| 37 | ~ | ~ | 長さ 58.4 幅 12.8 厚さ 0.7 | |
| 38 | ~ | ~ | 長さ 48.2 幅 10.1 厚さ 1.1 | |
| 39 | ~ | ~ | 長さ 40.2 幅 10.2 厚さ 1.0 | |
| 40 | ~ | ~ | 長さ 40.7 幅 7.4 厚さ 0.8 | |
| 41 | ~ | ~ | 長さ 37.7 幅 12.9 厚さ 1.2 | |
| 42 | ~ | ~ | 長さ 40.3 幅 11.7 厚さ 0.7 | |
| 43 | ~ | ~ | 長さ 39.6 幅 9.2 厚さ 1.6 | |
| 44 | ~ | ~ | 長さ 36.2 幅 7.3 厚さ 1.2 | |
| 45 | ~ | ~ | 長さ 73.5 幅 20.7 厚さ 1.4 | |
| 46 | ~ | ~ | 長さ 71.8 幅 5.2 厚さ 0.5 | |
| 47 | ~ | ~ | 長さ 74.2 幅 10.5 厚さ 0.8 | |
| 48 | ~ | ~ | 長さ 75.0 幅 10.3 厚さ 1.5 | |
| 49 | ~ | ~ | 長さ 64.5 幅 15.5 厚さ 2.0 | |
| 50 | ~ | ~ | 長さ 66.5 幅 12.5 厚さ 1.2 | |
| 51 | ~ | ~ | 長さ 58.0 幅 3.5 厚さ 0.8 | |
| 52 | ~ | ~ | 長さ 48.3 幅 14.2 厚さ 0.9 | |

| 番号 | 出土地点 | 名称 | 法量(cm) | 備考 | 番号 | 出土地点 | 名称 | 法量(cm) | 備考 |
|----|------|-----|--------------------------|----|-----|------------------|-------|--------------------------|-------|
| 53 | 3号井戸 | 井戸板 | 長さ 48.1 幅 13.8 厚さ 1.4 | | 79 | 3号井戸 | 井戸板 | 長さ 60.8 幅 9.8 厚さ 0.8 | |
| 54 | 〃 | 〃 | 長さ 50.2 幅 12.4 厚さ 0.9 | | 80 | 7号掘立柱建物 P 4 | 柱根? | 長さ 19.6 径 3.7×2.5 | |
| 55 | 〃 | 〃 | 長さ 44.2 幅 11.7 厚さ 0.9 | | 81 | 7号掘立柱建物 P 7 | 礎盤? | 長さ 19.5 幅 6.7 厚さ 2.7 | |
| 56 | 〃 | 〃 | 長さ 43.4 幅 10.0 厚さ 1.5 | | 82 | 〃 | 柱根? | 長さ 15.6 幅 13.0 厚さ 5.5 | |
| 57 | 〃 | 〃 | 長さ 23.5 幅 2.4 厚さ 0.9 | | 83 | 〃 | 柱根残片? | 長さ 3.8 幅 6.2 厚さ 3.1 | |
| 58 | 〃 | 〃 | 長さ 51.7 幅 3.7 厚さ 0.5 | | 84 | 8号掘立柱建物 P 1 | 柱根? | 長さ 16.4 幅 7.1 厚さ 4.1 | |
| 59 | 〃 | 〃 | 長さ 70.5 幅 6.4 厚さ 1.1 | | 85 | 8号掘立柱建物 P 7 | 礎盤残片? | 長さ 15.6 幅 6.0 厚さ 2.2 | |
| 60 | 〃 | 〃 | 長さ 72.4 幅 10.6 厚さ 0.9 | | 86 | 〃 | 〃 | 長さ 18.3 幅 5.0 厚さ 2.7 | |
| 61 | 〃 | 〃 | 長さ 69.4 幅 13.1 厚さ 1.1 | | 87 | 〃 | 〃 | 長さ 21.7 幅 5.9 厚さ 1.3 | |
| 62 | 〃 | 〃 | 長さ 66.2 幅 9.7 厚さ 1.2 | | 88 | 〃 | 〃 | 長さ 19.7 幅 3.0 厚さ 0.8 | |
| 63 | 〃 | 〃 | 長さ 65.0 幅 7.3 厚さ 0.9 | | 89 | 〃 | 〃 | 長さ 22.9 幅 5.7 厚さ 2.2 | |
| 64 | 〃 | 〃 | 長さ 55.6 幅 10.3 厚さ 0.5 | | 90 | 8号掘立柱建物 P 9 | 柱根 | 長さ 11.1 径 10.0×7.0 | |
| 65 | 〃 | 〃 | 長さ 57.1 幅 11.3 厚さ 1.4 | | 91 | 8号掘立柱建物 P 19 | 礎盤? | 長さ 10.7 幅 7.2 厚さ 1.8 | |
| 66 | 〃 | 〃 | 長さ 58.7 幅 9.8 厚さ 1.1 | | 92 | 8号掘立柱建物 P 20 | 〃 | 長さ 14.9 幅 10.8 厚さ 2.3 | |
| 67 | 〃 | 〃 | 長さ 56.2 幅 18.7 厚さ 1.4 | | 93 | 11号掘立柱建物 P 9 | 柱根残片? | 長さ 10.8 幅 4.5 厚さ 1.7 | |
| 68 | 〃 | 〃 | 長さ 58.1 幅 7.4 厚さ 1.8 | | 94 | 11号掘立柱建物 P 3 | 柱根? | 長さ 12.3 幅 11.2 厚さ 5.1 | |
| 69 | 〃 | 〃 | 長さ 59.0 幅 9.6 厚さ 1.0 | | 95 | 11号掘立柱建物 P 9 | 柱根 | 長さ 12.8 径 12.4×5.8 | |
| 70 | 〃 | 〃 | 長さ 59.2 幅 9.6 厚さ 0.6 | | 96 | 11号掘立柱建物 P 2 | 〃 | 長さ 59.8 径 13.0×8.7 | |
| 71 | 〃 | 〃 | 長さ 56.5 幅 7.3 厚さ 1.6 | | 97 | 11号掘立柱建物 P 12 | 〃 | 長さ 57.7 径 16.6×10.0 | 樹種:スギ |
| 72 | 〃 | 〃 | 長さ 51.1 幅 7.0 厚さ 1.1 | | 98 | 11号掘立柱建物 P 15 | 〃 | 長さ 68.8 径 15.8 | 樹種:クリ |
| 73 | 〃 | 〃 | 長さ 66.9 幅 10.0 厚さ 0.8 | | 99 | 12号掘立柱建物 P 2 | 柱根 | 長さ 15.7 幅 12.4 厚さ 6.0 | |
| 74 | 〃 | 〃 | 長さ 59.3 幅 13.3 厚さ 1.5 | | 100 | 〃 | 礎盤 | 長さ 14.0 幅 13.2 厚さ 4.0 | |
| 75 | 〃 | 〃 | 長さ 62.7 幅 8.6 厚さ 0.8 | | 101 | 12号掘立柱建物 P 3 | 柱根 | 長さ 33.2 径 5.1 | |
| 76 | 〃 | 〃 | 長さ 65.1 幅 11.6 厚さ 1.3 | | 102 | 〃 | 礎盤 | 長さ 16.0 幅 13.2 厚さ 4.0 | |
| 77 | 〃 | 〃 | 長さ 59.9 幅 9.9 厚さ 1.0 | | 103 | 12号掘立柱建物 P 8 | 〃 | 長さ 14.4 幅 13.8 厚さ 3.5 | |
| 78 | 〃 | 〃 | 長さ 58.0 幅 11.9 厚さ 0.7 | | 104 | 14号掘立柱建物 P 4 | 柱根 | 長さ 42.7 径 5.3 | 樹種:スギ |

| 番号 | 出土地点 | 名称 | 法量 (cm) | 備考 |
|-----|-----------------|--------------|--------------------------|--------|
| 105 | 14号獨立柱建物 P 5 | 柱根 | 長さ 35.7 幅 4.4 | 樹種:スギ |
| 106 | 14号獨立柱建物 P 1 | ~ | 長さ 23.7 幅 5.7 | |
| 107 | 18号獨立柱建物 P 1 | ~ | 長さ 13.3 径 12.0×7.6 | |
| 108 | 18号獨立柱建物 P 7 | 壁盤 | 長さ 25.2 幅 12.3 厚さ 6.0 | |
| 109 | 18号獨立柱建物 P 8 | 柱根 | 長さ 28.0 径 10.1×7.9 | |
| 110 | 18号獨立柱建物 P 7 | ~ | 長さ 18.4 径 19.8×12.1 | |
| 111 | 30号獨立柱建物 P 5 | ~ | 長さ 49.2 径 15.5×8.6 | |
| 112 | 30号獨立柱建物 P 8 | ~ | 長さ 53.2 径 12.4×12.3 | |
| 113 | P849 | ~ | 長さ 22.4 径 10.1×9.1 | |
| 114 | P264 | ~ | 長さ 41.4 幅 7.0 | |
| 115 | P312 | ~ | 長さ 35.4 径 12.9×10.4 | |
| 116 | P273 | ~ | 長さ 32.1 幅 5.1 | |
| 117 | 25号土坑 | 曲物柄内 | 径 12.2 高さ 9.2 樹種:ヒノキ | |
| 11 | ~ | 曲物底板 側板残片 | 径 15.4 高さ 4.6 内面漆塗り | 樹種:ヒノキ |
| 119 | ~ | 曲物底板 | 径 12.8 厚さ 0.9 | 樹種:スギ |
| 120 | ~ | ~ | 径 12.7 厚さ 0.9 | 樹種:ヒノキ |
| 121 | ~ | ~ | 径 13.2 厚さ 1.1 | 樹種:ヒノキ |
| 122 | 包含層 | 下駄 | 長さ 19.2 幅 7.8 高さ 2.6 | 樹種:モミ |
| 123 | 85号土坑下層 | 用途不明品 | 長さ 14.4 幅 1.8 厚さ 0.8 | |
| 124 | ~ | ~ | 長さ 18.6 幅 5.6 厚さ 1.4 | 木釘有 |
| 125 | 25号土坑 | 着状木製品 | 長さ 22.6 幅 0.6 厚さ 0.3 | 樹種:スギ |
| 126 | ~ | ~ | 長さ 21.9 幅 0.7 厚さ 0.5 | 樹種:スギ |
| 127 | ~ | ~ | 長さ 17.5 幅 0.8 厚さ 0.3 | |
| 128 | ~ | ~ | 長さ 16.5 幅 0.7 厚さ 0.5 | |
| 129 | ~ | ~ | 長さ 15.1 幅 0.7 厚さ 0.4 | |
| 130 | ~ | ~ | 長さ 14.6 幅 0.6 厚さ 0.5 | |

| 番号 | 出土地点 | 名称 | 法量 (cm) | 備考 |
|-----|---------|-------|--------------------------|-------|
| 131 | 25号土坑 | 着状木製品 | 長さ 13.1 幅 0.7 厚さ 0.5 | |
| 132 | ~ | ~ | 長さ 12.5 幅 0.5 厚さ 0.4 | |
| 133 | ~ | ~ | 長さ 10.3 幅 0.6 厚さ 0.3 | |
| 134 | ~ | ~ | 長さ 9.2 幅 0.6 厚さ 0.5 | |
| 135 | ~ | ~ | 長さ 7.5 幅 0.5 厚さ 0.4 | |
| 136 | ~ | ~ | 長さ 7.9 幅 0.4 厚さ 0.3 | |
| 137 | 43号土坑 | ~ | 長さ 20.5 幅 0.6 厚さ 0.3 | |
| 138 | ~ | ~ | 長さ 18.9 幅 0.4 厚さ 0.4 | |
| 139 | 39号土坑下層 | ~ | 長さ 17.2 幅 0.6 厚さ 0.6 | |
| 140 | 2号井戸 | ~ | 長さ 22.1 幅 0.7 厚さ 0.6 | 樹種:スギ |
| 141 | ~ | ~ | 長さ 18.1 幅 0.8 厚さ 0.4 | 樹種:スギ |
| 142 | ~ | ~ | 長さ 15.2 幅 0.7 厚さ 0.5 | 樹種:スギ |
| 143 | 25号土坑 | 容器? | 径 5.9 高さ 5.4 | 樹種:タケ |
| 144 | 85号土坑下層 | 陽物? | 長さ 12.7 幅 3.0 | |
| 145 | 25号土坑 | 用途不明品 | 長さ 15.3 幅 1.8 厚さ 0.9 | |
| 146 | ~ | ~ | 長さ 17.9 幅 2.5 厚さ 1.0 | |
| 147 | ~ | ~ | 長さ 9.6 幅 4.7 厚さ 1.0 | |
| 148 | ~ | ~ | 長さ 9.5 幅 1.3 厚さ 0.6 | |
| 149 | ~ | ~ | 長さ 12.7 幅 1.7 厚さ 0.5 | |
| 150 | 85号土坑下層 | ~ | 長さ 25.4 幅 7.5 厚さ 5.4 | |
| 151 | 32号土坑 | ~ | 長さ 26.2 幅 8.5 厚さ 4.9 | |
| 152 | 85号土坑下層 | ~ | 長さ 15.6 幅 5.3 厚さ 1.0 | |
| 153 | ~ | ~ | 長さ 15.3 幅 14.3 厚さ 1.0 | |

第4節 土器・木器以外の特殊遺物

第1項 金属関連遺物

1. 銅錢

銅錢は、全部で9種11枚出土している。そのうち、7枚が北宋錢であった。その他、唐錢2枚と明錢1枚がある。No.11は腐食が進んでおり通寶以外の文字を判読することが出来なかった。また、ほとんどが包含層出土遺物で、遺構出土のものは、19号溝出土のNo.2開元通寶のみである。

初鋳年代で一番古いものは、No.1の唐錢（612年）の開元通寶である。No.2も開元通寶であるが、背面左に文字の痕跡が確認出来るため、845年（唐）に補鋳され、紀地鐵や会昌開元と称されたものと思われる。背文字は腐食により潰れていて判読できないが、位置と表の書体から判断すれば「潭」の字と思われる。背文字は錢の鋳造地を表しており、この場合は江南道潭州、現在の地名で湖南省長沙で鋳造されたものと言える。また、一番新しいものは、No.10の明錢（1408年）の永樂通寶である。

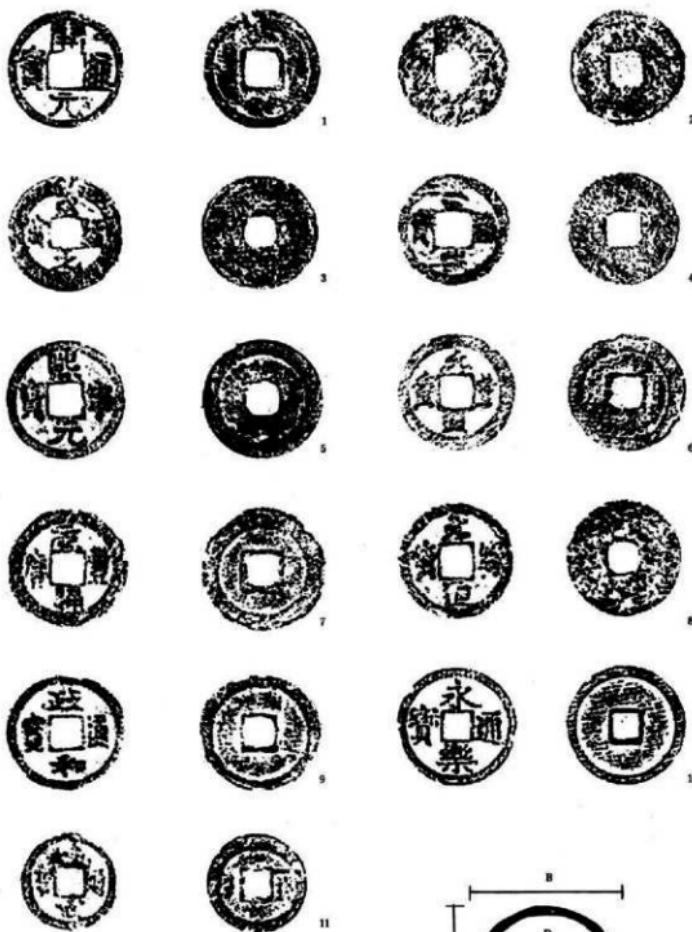
北宋錢のなかでは、初鋳年代の最も古いのは至道元寶（955年）で、最も新しいものは、政和通寶（1111年）である。

参考文献

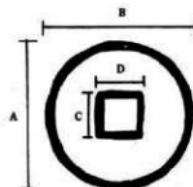
永井久美男編 1994年「中世の出土錢—出土錢の調査と分類—」 兵庫埋蔵錢調査会

| No. | 地 区 | 貨銭名 | 書体 | 重量 (g) | A (cm) | B (cm) | C (cm) | D (cm) | 初 鋳 年 代 |
|-----|---------|------|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 1 | G-3包含層 | 開元通寶 | 楷書(無頭 元字大元) | 2.1 | 2.37 | 2.35 | 0.75 | 0.73 | 唐 612年 |
| 2 | 19号溝 | 開元通寶 | 行書 | 1.7 | 2.27 | 2.28 | 0.69 | 0.68 | 唐 845年 |
| 3 | G-3包含層 | 至道元寶 | 行書 | 2.2 | 2.39 | 2.37 | 0.75 | 0.73 | 北宋 955年 |
| 4 | H-6包含層 | 至和通寶 | 真書 | 2.4 | 2.30 | 2.28 | 0.61 | 0.66 | 北宋 1054年 |
| 5 | M-6包含層 | 熙寧元寶 | 楷書 | 2.2 | 2.46 | 2.66 | 0.71 | 0.71 | 北宋 1068年 |
| 6 | G-6包含層 | 元豐通寶 | 行書 | 2.4 | 2.38 | 2.41 | 0.64 | 0.66 | 北宋 1078年 |
| 7 | H-12包含層 | 元豐通寶 | 篆書 | 2.3 | 2.49 | 2.40 | 0.53 | 0.66 | 北宋 1078年 |
| 8 | F-2包含層 | 元符通寶 | 真書 | 3.3 | 2.60 | 2.61 | 0.71 | 0.71 | 北宋 1098年 |
| 9 | K-1包含層 | 政和通寶 | 分楷 | 2.2 | 2.36 | 2.46 | 0.61 | 0.60 | 北宋 1111年 |
| 10 | K-1包含層 | 永樂通寶 | 楷書 | 3.7 | 2.45 | 2.45 | 0.53 | 0.54 | 明 1408年 |
| 11 | H-1包含層 | ? 通寶 | ? | 3.1 | 1.94 | 2.02 | 0.53 | 0.52 | ? |

第12表 出土古錢計測表



0 5 cm



第141回 出土銅錢 (S=1/1)

2. 鉄製品及び鉄滓

以下に図示したものが、古代と中世に位置付けられる鉄製品と鉄滓である。

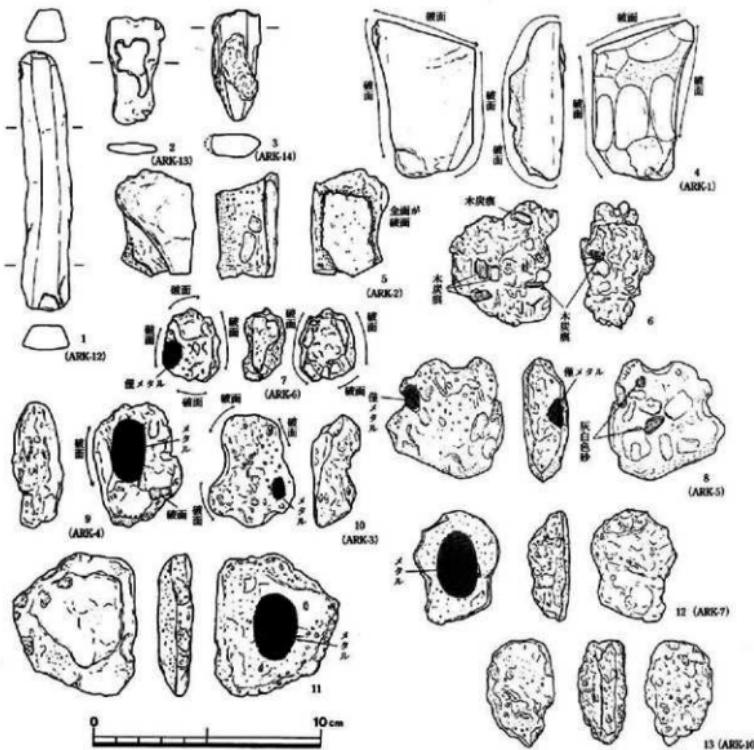
鉄製品（1～3）2は3号土坑、3は12号土坑より出土しており、中世遺構に伴うものと予想できる。

1は整状鉄製品、3も整状のものと予想される。

古代の鉄滓（4～7）4・5は7号掘立柱建物跡ピット、6は23号掘立柱建物跡ピットから出土している。4・5は黒灰色を呈す重量感をもつ緻密な滓で、表面に流れ出した際の皺をもつ。砂鉄製錬に伴う炉外流出滓と思われる。6は墨青灰色を呈す重量感のある滓で、木炭痕が多くもつ。鍛練鍛冶滓と思われる。7は暗青灰色を呈す重量感をもつ滓で、小さな気泡があく。メタル反応（穴澤義功氏のメタルチェックー最大値で反応）が有り、砂鉄製錬に伴う炉内滓の可能性をもつ。他のものは磁着もしない。

中世の鉄滓（8～13）10は1号竪穴状遺構、12は1号溝下層、13は2号井戸から出土している。いずれもくすんだ青灰色を呈す磁着する滓で、メタル反応を示すものが多い。やや赤サビ状のものが表面に浮き出、細かな気泡が多くあく、やや軽い質感をもつ。鍛練鍛冶滓と思われる。

尚、これらの詳細については、第7章の大澤正己氏の分析を参照されたい。



第142図 古代・中世の鉄製品及び鉄滓(S=1/2)

第2項 土錘

出土したものは全て、土製品の中心に貫通孔を穿った管状土錘であり、総数111点を数え、未製品1点を含む。

遺跡は当時も現在も蛇行を繰り返し小松平野を形成してきた梯川に隣接しているため、これらを漁網錘と考えるのが適当であろう。

ただし、遺跡が古墳時代初頭から中世にまたがる複合遺跡であることから、出土地点が包含層であったり、たとえ時代・時期の確定した造構出土資料であっても混入遺物である可能性は否定できないため、これら土錘の時期を断定することは非常に困難である。

ここでは出土した111点のうち、実測可能な90点について形態による分類を行なうこととする。管状土錘は形態によりI～IV類に分けられ、さらに長さと幅の関係によりa～d類に細分される。

I類一側縁部が膨らむ形態のもの

II類一側縁部が直線的で円柱状をなし、平面形態が正方形・長方形をなすもの。

III類一側縁部が直線的で円柱状をなし、平面形態が隅丸正方形・隅丸長方形をなすもの。

IV類一球状を呈するもの。

a類一長さと幅のほぼ等しいもの。

b類一長さが幅の2倍より短いもの。

c類一長さが幅の3倍より短いもの。

d類一長さが幅の3倍より長いもの。

これらの組み合わせると16通りの形態を考えられるが、当遺跡から出土しているのは、I b類4点、I c類45点、I d類6点、II c類1点、III b類5点、III c類7点、III d類7点、IV b類1点、細分できないものがI類13点、II類1点、III類3点、その他23点である。計測部位は長さ、幅、孔径、重量である。残存長は()を用いて示した。孔径については金沢市桂遺跡の報告にない、両端の孔径をa、bで示す(ただし aはbより大)。孔径cは途中で欠損している場合における、その箇所での孔径である。

ところで、土錘の役割は、漁網を水中に沈めたり、あるいは浮子と併用して、魚網を水中に直立させたりする点にある(和田晴吾1982)。したがって從来から指摘されているように、重量という要素は、土錘にとって非常に重要な属性であると考える。よって重量については、欠損品についても、完形時の重量が推定できるものについて、その推定重量も〔 〕内に示すこととした。この数字は残存率から割り出したものであり、あくまでも目安としていただきたい。なお欠損品の場合、重量によるグルーピングには、この推定重量を用

| | a | b | c | d |
|-----|---|---|---|---|
| I | | | | |
| II | | | | |
| III | | | | |
| IV | | | | |

第143図 管状土錘形態分類図

いた。

I b 類 (No.1~4) は4点、10g前半のもの2点と20g後半のものが2点である。これらは全て丸棒に粘土を巻き付けて製作されている。1は孔が穿たれた一方の端部が摩滅している。14は丸棒に粘土を巻き付けた痕跡と、丸棒を抜き取った痕跡が認められる。18は陶製。焼成前に穿孔された両端部が面取りされている。

I c 類 (No.5~49) 最も点数が多く45点、10g未満のものと40g台のものがそれぞれ8点、5点でグループを成す。そしてその他が15g~35gの範囲に段階的に存在している。49が際立って大きい。7は一方の端部が擦り減って、面ができる。15は他のI c 類のものと若干異なり、側縁部中央の膨らみがやや算盤玉状を呈している。18は胎土に雲母を多く含有する。26は陶製、焼成前に両端部面取りされている。36、42も一方の端部が擦り減って、面ができる。つある。全て丸棒に粘土を巻き付けて製作されているが、40は丸棒を抜いた後、孔が楕円形に変形するような力を側縁部に受け、そのまま焼成されたものである。45は粗砂ではなく比較的細かな砂を混和剤として用いているため、他と比べて細かな印象を受ける。

I d 類 (No.50~55) 10g未満のものが2点と、18g~30gの範囲に4点で全6点ある。50、51には水簾されたきめ細かな粘土が用いられている。一方52、53、29は粗砂を混和させた同一の胎土をもち、焼成がややあまい。54の胎土には細かな雲母が多量に含まれている。他、I 類では、58、61、63にも胎土に細かな雲母が極少量含まれている。これら3点については孔径もほぼ等しい点が注目される。

II c 類 (No.64) は1点のみ、このタイプの県内における出土は稀である。あらかじめ両端部に面がつくられている。

III b 類 (No.66~70) は5点。66を除き、大型のものばかりである。67には51同様、水簾したきめ細かな粘土が用いられている。これもあらかじめ両端部に面がつくられているタイプ。67の残存する端部は摩滅し、もう一端は欠損している。

III c 類 (No.71~77) は7点、うち10g台が4点を占める。75は胎土に細かな雲母を極少量に含むものである。穿孔後、側面部が押され孔が潰れてしまったようである。その後、焼成されている。75を除くものの全ての両端部が欠損しているか、摩滅痕跡が観察される。

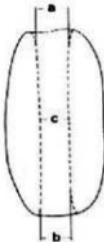
III d 類 (No.78~84) は7点、78は須恵器である。80から83までの4点は比較的規格が揃っている。やはり全てのものが両端部欠損しているか、摩滅痕跡が観察される。100g前後の大型品 (69、70) が含まれる。

IV b 類 (No.88) は1点のみ。形態から時代が限定されるタイプである。わずかに両端部に摩擦痕が認められる程度である。

基本的には全て丸棒に粘土を巻き付けて、抜き取った後、焼成という工程で製作されている。また土師質のものには、端部が欠けていたり、面を取ったかのように擦り減ったものが多い。「沈子綱」に直接装着した結果であろう。陶製のものはあらかじめこれを予測してか、焼成前の成形の段階で面取をするようである。

弥生時代から平安時代の漁網錘は石川県内においては、ほとんど管状土錘のみが認められる状況であり、当遺跡もその例に漏れない。

これらの時期を比定することは先述のように困難であるが、土器の胎土に照らして、時期的なものと



第144回
管状土錘孔径
測定期位図

思われる顕著な特徴を示してみる。

まずIV b類の88はその形状からも古墳時代前半に比定してよいだろう。

そして古代以降と思われるがIII b類の大型品（76.7-104.2g）が現れてくる。III b類の小型品は、それ以前から存在し、中世まで残らない。一方、5（I c類）や50、51（I d類）のように4g未満のものが一定の割合を占めるようになる。

形式的な特徴としては、中世にみられる側縁部中央の膨らみが算盤玉のように角張ってくる点があげられる。I c類（15）中型、I d類（50、51）小型のものにもこの傾向がみられる。

なおこれらは当遺跡出土の資料を俯瞰的に観察した際に得られる特徴であり、これが本当に時代的な変遷を表しているのかは今後検証されなくてはならない。

管状土錘の漁網への装着方法としては一般的に「浮子綱」に直接、一定の間隔でいくつも連続して装着する方法が知られている。

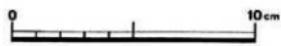
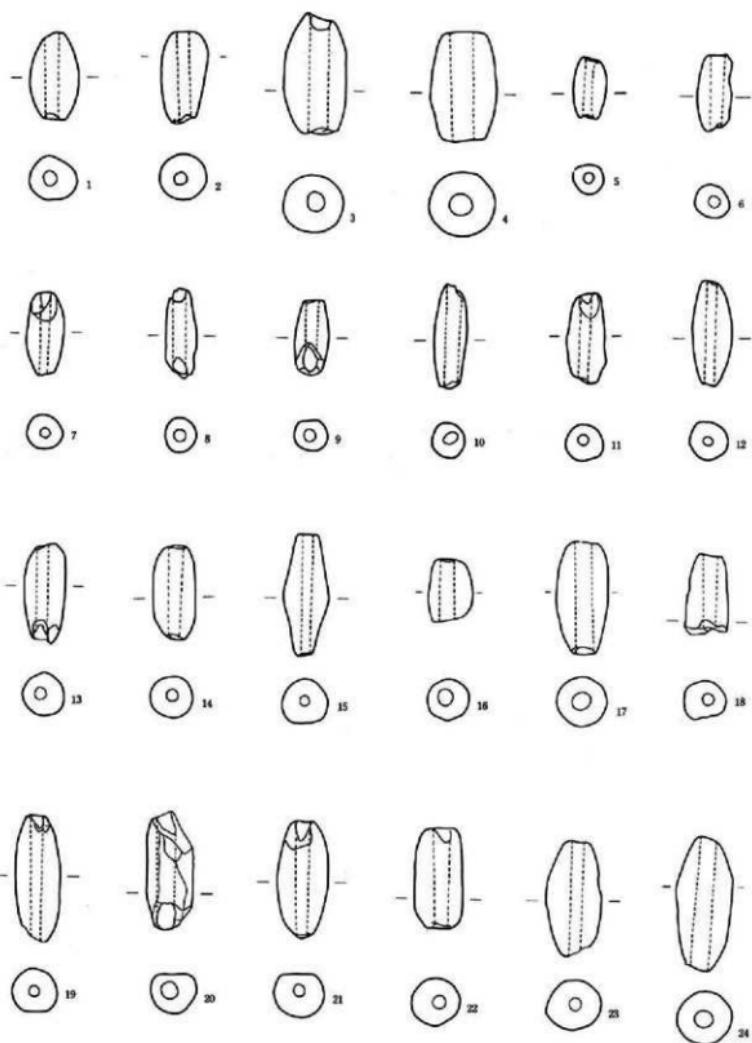
今回出土した土錘は破損したもの、ほぼ完形のものでも孔が穿たれた両端部が摩滅しており、いわゆる「沈子綱」に直接装着した痕跡が認められるものなど、未製品を除きほぼすべて使用されたものと考えても大過はないであろう。

当遺跡は梯川に隣接した環境からも、消費遺跡であることは間違いないが、焼成前に孔が潰れた未製品（失敗品？）が検出されたことや、付近から比較的良質の粘土が採集されることから、自給的に土錘を生産していたことも考えられる。

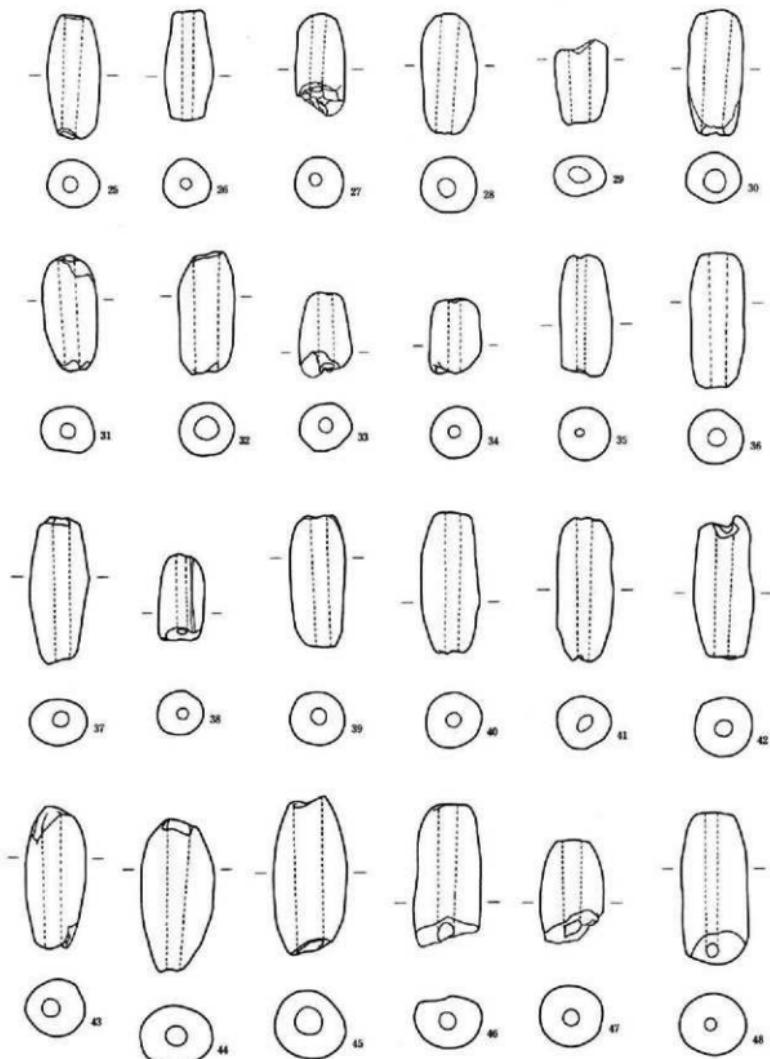
粗い胎土のものを水に浸してみた。すると沈むことはもちろんであるが、一時的に表面がサッと溶けて落ちていた。ほとんど使い捨ての道具ではなかったか。中世でも粗い胎土のものがまま見受けられるのはそこに理由が求められるのだろうか。そうであれば自給自足的に土錘がつくられていたことも十分に考えられる。

参考文献

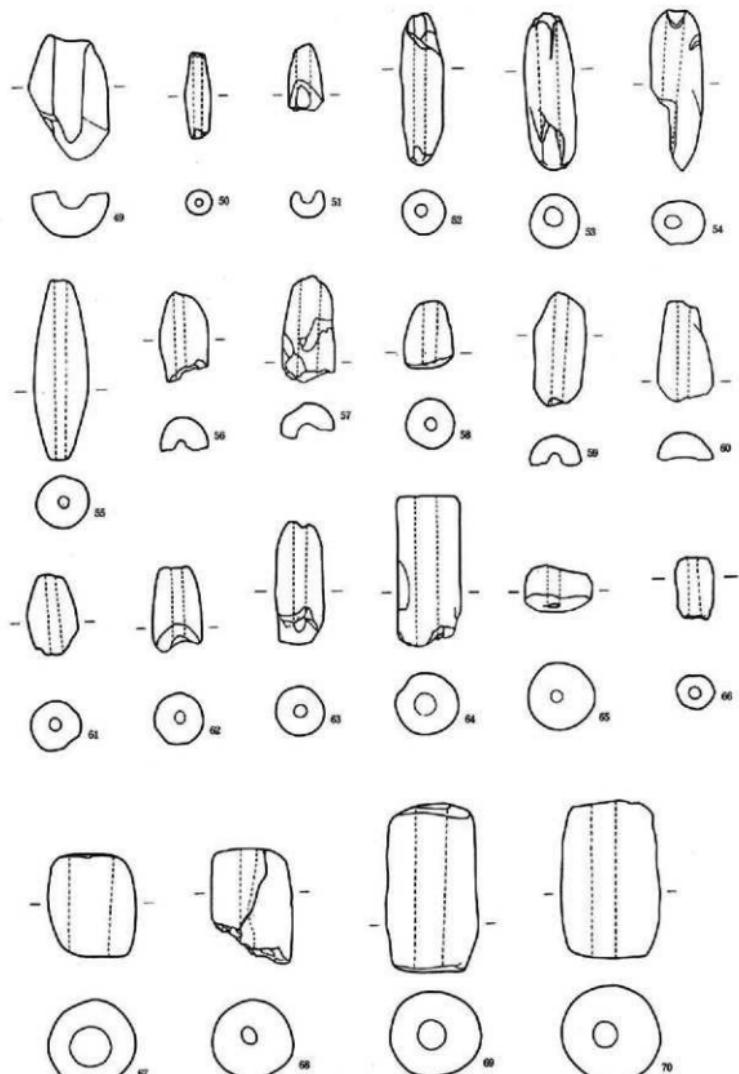
- 山本直人 1986 「石川県における古代中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会誌』29 石川考古学研究会
米沢義光 1985 「金沢市桂遺跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報』5 石川県立埋蔵文化財センター
和田晴吾 1982 「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』(小林行雄博士古稀記念論文集)



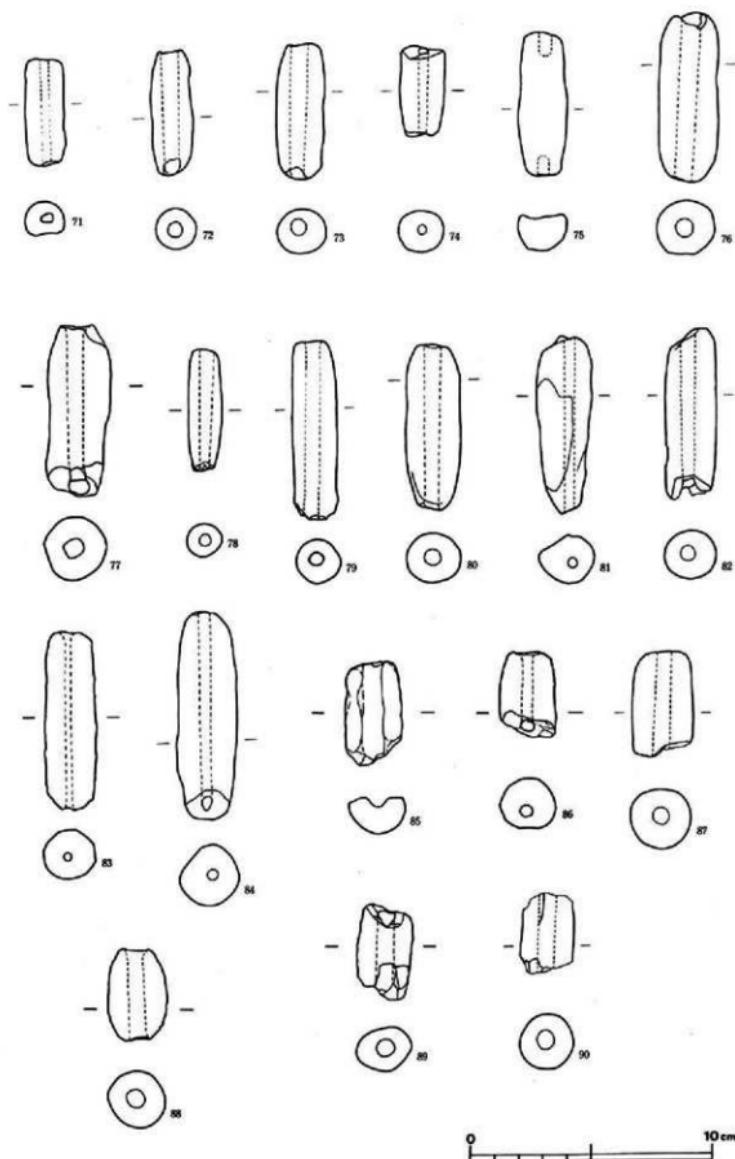
第145図 土縫実測図(1) ($S=1/2$)



第146図 土鐘実測図（2）(S=1/2)



第147図 土縫実測図(3) ($S=1/2$)



第148図 土鍵実測図 (4) ($S=1/2$)

第13表 荒木田遺跡出土土錐一覧表

単位はcmおよびg。()内は残存値、[]内は推定完形重量である。

| 番号 | 出土地点 | 残存率 | 形態分類 | 長さ | 幅 | 孔径a | 孔径b | 孔径c | 重量 | 備考 |
|----|---------|------|------|-------|-----|-----|-----|-----|-------------|----|
| 1 | 5号溝F | 1 | I b | 3.6 | 2.0 | 0.6 | 0.5 | | 10.0 | |
| 2 | 29号掘立P2 | 1 | I b | (3.8) | 1.9 | 0.5 | | 0.5 | 12.0 | |
| 3 | 39号土坑下層 | 1/1 | I b | 5.0 | 2.6 | 0.8 | 0.8 | | 25.5 [25.0] | |
| 4 | L3 | 1 | I b | 4.5 | 2.8 | 1.0 | 0.9 | | 28.4 | 陶質 |
| 5 | 18号掘立P4 | 1 | I c | 2.6 | 1.3 | 0.4 | 0.4 | | 3.4 | |
| 6 | E-11 | 1/1 | I c | 3.1 | 1.4 | 0.6 | 0.5 | | 4.6 [4.8] | |
| 7 | 耕土 | 1/1 | I c | 3.4 | 1.6 | 0.4 | 0.3 | | 4.9 [5.2] | |
| 8 | 18号土坑 | 8/10 | I c | 3.7 | 1.8 | 0.6 | 0.5 | | 4.2 [5.3] | |
| 9 | E-11 | 4/5 | I c | (3.1) | 1.4 | 0.6 | | 0.5 | 4.6 [5.8] | |
| 10 | 18号土坑 | 1/1 | I c | 4.3 | 1.4 | 0.6 | 0.6 | | 5.8 [6.2] | |
| 11 | B-13 | 1/1 | I c | 3.7 | 1.6 | 0.5 | 0.4 | | 6.9 [7.3] | |
| 12 | 25号土坑 | 1 | I c | 4.3 | 1.6 | 0.4 | 0.4 | | 7.9 | |
| 13 | K-13 | 1/1 | I c | (4.1) | 1.7 | 0.5 | | 0.5 | 9.7 [10.0] | |
| 14 | 98号土坑 | 1 | I c | 3.9 | 1.8 | 0.6 | 0.4 | | 10.9 | |
| 15 | J-7 | 1 | I c | 5.0 | 1.9 | 0.5 | 0.4 | | 13.0 | |
| 16 | 91号土坑 | 1/2 | I c | (2.6) | 1.8 | 0.6 | | 0.7 | 6.9 [13.8] | |
| 17 | 不明 | 1 | I c | 4.7 | 2.1 | 0.8 | 0.7 | | 14.6 | |
| 18 | 64号土坑 | 2/3 | I c | (3.4) | 1.8 | 0.6 | | 0.5 | 9.7 [14.6] | |
| 19 | 69号土坑 | 1/1 | I c | (5.2) | 1.9 | 0.5 | | 0.4 | 14.4 [15.0] | |
| 20 | E-11 | 8/10 | I c | 4.8 | 1.9 | 0.8 | | 0.7 | 12.8 [16.0] | |
| 21 | 10号土坑 | 9/10 | I c | 4.8 | 2.1 | 0.6 | 0.5 | | 15.0 [16.7] | |
| 22 | 98号土坑 | 1/1 | I c | 4.1 | 2.0 | 0.7 | 0.6 | | 17.3 [18.0] | |
| 23 | P203 | 1/1 | I c | (4.7) | 2.3 | 0.5 | | 0.5 | 17.4 [18.0] | |
| 24 | F-12 | 1 | I c | 5.5 | 2.3 | 0.7 | 0.7 | | 18.6 | |
| 25 | L-10 | 1 | I c | (5.1) | 2.2 | 0.7 | 0.6 | | 19.0 | |
| 26 | E-11 | 1 | I c | 4.5 | 2.0 | 0.5 | 0.5 | | 19.1 | 陶質 |
| 27 | K-10 | 3/4 | I c | (4.2) | 2.1 | 0.6 | | 0.5 | 14.4 [19.2] | |
| 28 | 5往A埋土上層 | 1 | I c | 4.9 | 2.3 | 0.8 | 0.7 | | 19.4 | |
| 29 | 5往D上層 | 1/2 | I c | (3.5) | 2.1 | 0.8 | | 0.8 | 9.8 [19.6] | |
| 30 | 1号溝I上層 | 9/10 | I c | 5.2 | 2.3 | 1.0 | 0.9 | | 19.1 [21.2] | |
| 31 | 5往A埋土上層 | 2/3 | I c | 4.8 | 2.3 | 0.7 | 0.7 | | 14.6 [21.9] | |
| 32 | F-11 | 1 | I c | 5.1 | 2.3 | 1.1 | 1.0 | | 22.2 | |
| 33 | 15号溝A | 1/2 | I c | (3.5) | 2.2 | 0.6 | | 0.6 | 11.8 [23.6] | |
| 34 | F-13 | 1/2 | I c | (3.1) | 2.1 | 0.5 | | 0.5 | 11.9 [23.8] | |
| 35 | E-4 | 1/1 | I c | (4.9) | 2.1 | 0.4 | | 0.4 | 22.7 [24.0] | |
| 36 | F-12 | 1 | I c | 5.5 | 2.2 | 0.8 | 0.6 | | 24.5 | |
| 37 | P300 | 1/1 | I c | 6.0 | 2.4 | 0.7 | 0.6 | | 24.3 [25.0] | |
| 38 | 91号土坑 | 1/2 | I c | (3.6) | 1.9 | 0.4 | 0.4 | | 12.5 [25.0] | |

| 番号 | 出土地点 | 残存率 | 形態分類 | 長さ | 幅 | 孔径a | 孔径b | 孔径c | 重量 | 備考 |
|----|----------|------|-------|-------|-----|-----|-----|-----|-------------|-----|
| 39 | F-9 | 1 | I c | 5.4 | 2.3 | 0.7 | 0.6 | | 26.0 | |
| 40 | M-10 | 1 | I c | 5.8 | 2.4 | 0.6 | 0.6 | | 27.2 | |
| 41 | 84号土坑 | 1/1 | I c | 5.9 | 2.4 | 0.7 | 0.5 | | 28.0 [29.0] | |
| 42 | P119 | 9/10 | I c | 5.9 | 2.9 | 0.7 | 0.6 | | 30.5 [33.9] | |
| 43 | 92号土坑 | 4/5 | I c | (5.9) | 2.5 | 0.8 | | 0.7 | 27.7 [34.6] | |
| 44 | 10号土坑 | 1/1 | I c | 6.2 | 3.0 | 0.9 | 0.6 | | 38.8 [40.0] | |
| 45 | P119 | 1 | I c | 64.5 | 3.0 | 1.2 | 1.1 | | [43.6] | |
| 46 | 24号土坑 | 3/4 | I c | (5.8) | 2.8 | 0.8 | | 0.6 | 34.1 [45.5] | |
| 47 | 7号掘立P1 | 1/2 | I c | (4.2) | 2.6 | 0.8 | | 0.7 | 23.4 [46.8] | |
| 48 | 75号土坑 | 4/5 | I c | 6.2 | 2.7 | 0.5 | | 0.5 | 37.5 [46.9] | |
| 49 | 25号土坑下層 | 1/4 | I c | (5.2) | 3.2 | 1.3 | | 1.2 | 20.9 [83.6] | |
| 50 | F-3 | 1 | I d | 3.6 | 1.1 | 0.4 | 0.3 | | 3.1 | |
| 51 | M-9 | 3/7 | I d | (2.8) | 1.4 | 0.6 | 0.6 | | 2.7 [6.3] | |
| 52 | F-4 | 1/1 | I d | 6.3 | 1.7 | 0.5 | 0.5 | | 16.7 [18.0] | |
| 53 | 6号掘立P2 | 9/10 | I d | (6.4) | 2.0 | 0.8 | | 0.7 | 22.2 [24.7] | |
| 54 | P189 | 3/7 | I d | (6.6) | 2.2 | 0.7 | | 0.7 | 22.4 [28.0] | |
| 55 | 84号土坑 | 1 | I d | 7.3 | 2.2 | 0.5 | 0.4 | | 29.5 | |
| 56 | 19号土坑 | 破片 | I | (3.6) | 2.0 | 0.4 | | 0.4 | 8.0 | |
| 57 | E-5 | ~ | I | (4.3) | 2.2 | 0.9 | | 0.9 | 10.8 | |
| 58 | P189 | ~ | I | (2.8) | 2.0 | 0.6 | | 0.5 | 11.1 | |
| 59 | 97号土坑下層 | ~ | I | (4.6) | 2.1 | 0.5 | | 0.5 | 11.1 | |
| 60 | 30号溝D | ~ | I | (4.1) | 2.3 | 0.5 | | 0.5 | 11.8 | |
| 61 | 91号土坑 | ~ | I | (3.4) | 2.1 | 0.5 | 0.4 | | 12.2 | |
| 62 | 5号E埋土上層 | ~ | I | (3.5) | 2.0 | 0.5 | | 0.5 | 12.6 | |
| 63 | G-7 | | I | (5.0) | 2.0 | 0.5 | 0.4 | | 22.5 | |
| 64 | 19号土坑 | 1/1 | II c | (6.2) | 2.6 | 0.9 | | 0.9 | 44.1 [46.5] | |
| 65 | K-11 | 破片 | II | (1.9) | 2.7 | 0.5 | | 0.5 | 13.3 | |
| 66 | 43号溝D区下層 | 1 | III b | 2.6 | 1.6 | 0.5 | 0.4 | | 6.0 | |
| 67 | 不明 | 8/9 | III b | 4.2 | 3.6 | 1.8 | | 1.6 | 34.4 [38.7] | |
| 68 | 33号土坑 | 3/5 | III b | (4.7) | 3.4 | 0.7 | | 0.6 | 46.0 [76.7] | |
| 69 | B-7 | 1 | III b | 6.9 | 3.8 | 1.3 | 1.2 | | 97.4 | |
| 70 | P367 | 1 | III b | 6.4 | 4.1 | 1.0 | 1.0 | | 104.2 | |
| 71 | E-2 | 1 | III c | 4.4 | 1.6 | 0.4 | | | 12.0 | |
| 72 | P152 | 1/1 | III c | 5.1 | 1.6 | 0.7 | 0.6 | | 12.4 [13.0] | |
| 73 | F-12 | 1 | III c | 5.6 | 2.0 | 0.7 | 0.6 | | 17.0 | |
| 74 | C-11下層 | 2/3 | III c | (3.7) | 1.9 | 0.4 | 0.3 | | 12.0 [18.0] | |
| 75 | P290 | 5/7 | III c | 5.9 | 2.1 | 0.6 | 0.5 | | 17.8 [25.0] | 未製品 |
| 76 | 43号溝D | 1/1 | III c | (7.0) | 2.5 | 0.8 | 0.7 | | 38.7 [40.0] | |
| 77 | 25号土坑下層 | 4/5 | III c | (7.0) | 2.6 | 0.8 | | 0.6 | 42.4 [53.0] | |
| 78 | L-9 | 1 | III d | 4.9 | 1.4 | 0.5 | 0.4 | | 9.0 | 須複質 |

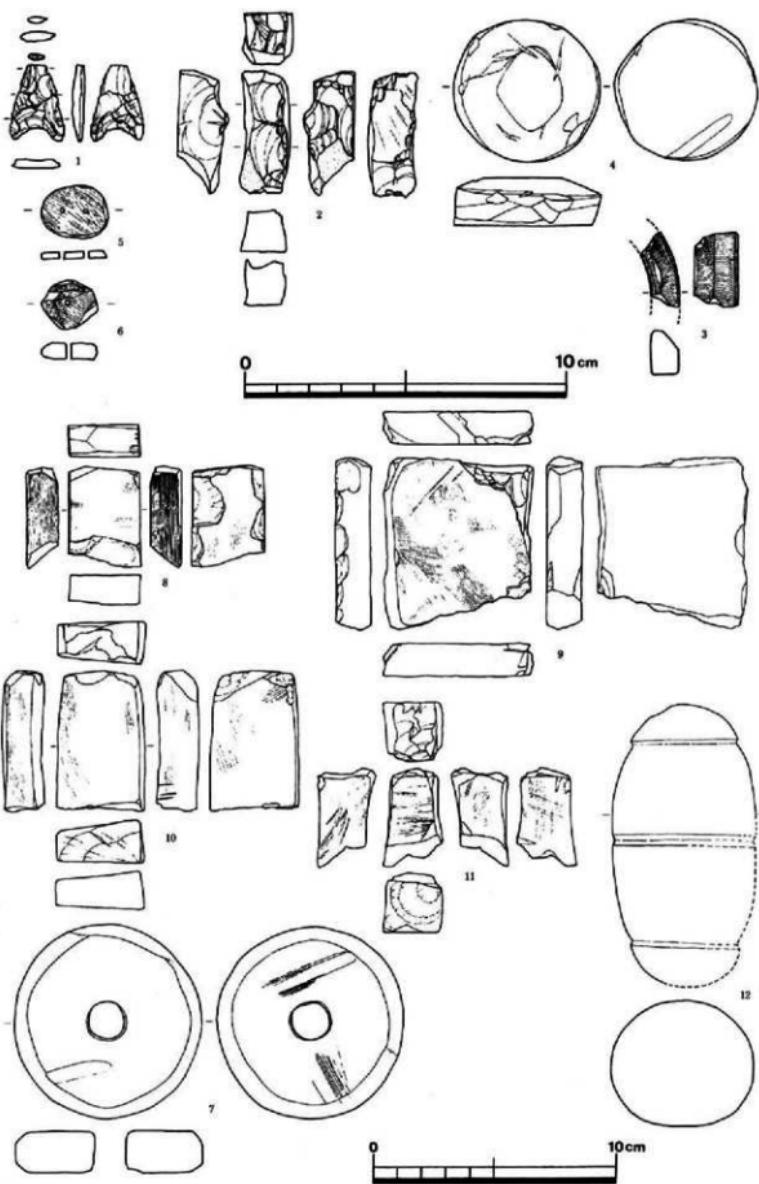
| 番号 | 出土地点 | 残存率 | 形態分類 | 長さ | 幅 | 孔径a | 孔径b | 孔径c | 重量 | 備考 |
|----|----------|------|------|-------|-----|-----|-----|-----|-------------|----|
| 79 | 43号溝A上層 | 1 | Ⅲd | (7.6) | 1.9 | 0.6 | 0.6 | | 24.3 | |
| 80 | B-11 | 1 | Ⅲd | 6.8 | 2.2 | 0.7 | 0.5 | | 30.9 | |
| 81 | 43号溝D区 | 8/10 | Ⅲd | 7.3 | 2.3 | 0.5 | 0.4 | | 26.6 [33.3] | |
| 82 | 2井戸 | 9/10 | Ⅲd | (7.0) | 2.1 | 0.6 | | 0.5 | 30.2 [33.5] | |
| 83 | P804 | 1 | Ⅲd | 7.3 | 2.1 | 0.3 | 0.3 | | 34.5 | |
| 84 | 43号溝B下層 | ≈1 | Ⅲd | (8.5) | 2.5 | 0.5 | | 0.4 | 51.3 [55.0] | |
| 85 | 43号溝D区下層 | 破片 | Ⅲ | (4.3) | 2.3 | 0.8 | | 0.8 | 14.2 | |
| 86 | 17号土坑 | ~ | Ⅲ | (3.5) | 2.3 | 0.4 | | 0.5 | 16.0 | |
| 87 | P68 | ~ | Ⅲ | (4.4) | 2.5 | 0.7 | 0.6 | | 27.4 | |
| 88 | 106号土坑 | 1 | Ⅲ'b | 3.8 | 2.5 | 0.7 | 0.7 | | 17.9 | |
| 89 | 2号墳穴 | 破片 | | (3.9) | 2.2 | 0.7 | | 0.7 | 11.1 | |
| 90 | K-11 | ~ | | (3.3) | 2.2 | 0.7 | | 0.7 | 13.8 | |

第3項 石製品（第149図）

- 1は石鏡である。チャート製の回基無基鏡であり、先端がおれている。
- 2は管玉未成品と考えられる。側面打製段階の形制品であり、二面に施されている。いずれの面にも風化部分が看取される。最終打削面に施溝が認められず、無施溝分割の加賀技法によるものであろう。石材は碧玉質のチャートか。
- 3は石鏡の破片である。装飾は施されず、研磨による擦痕が明瞭に残る。石材は緑色凝灰岩である。
- 4は、石製腕飾類の製作に伴うものとされる、いわゆる割り抜き円板と考えられる。しかし、側縁の部分に擦痕は認められない。石材は緑色凝灰岩である。
- 5・6は円板形の滑石製模造品である。5は二孔、6は一孔を穿ち、いずれも円柱形の穿孔具を用いている。
- 7は中央に一孔を穿った円板状石器である。舞錐などの回転力をつけるための弾み車の一種であろう。石材は凝灰岩質の流紋岩である。
- 8～11は砥石である。8・9は板状を呈し、珪質頁岩製である。8と同様の形態のものは、8も含めて4点出土している（第14表参照）。10も板状を呈するが、一面に弱いくぼみが看取される。石材は砂岩である。11は角柱状を呈し、一面が弓なりに大きくくぼむ。
- 12は不明石製品である。中央に浅い溝を施し、両端を削りだして亀頭状にする。全体の三分の一程度を欠損している。石材は凝灰岩質の流紋岩である。

| 図 | No | 出土位置 | 器種 | 石材 | サイズ(cm) | 重量(g) | 備考 |
|-----|----|-----------|--------|-------|--------------------------------|----------|--------|
| 149 | 1 | I K-3 | 石鏡 | チャート | 長：(2.40)、幅：1.64厚：0.37 | (1.35) | 回基無基 |
| ~ | 2 | I P-1 | 管玉未成品 | 碧玉質 | 長：3.78、幅：1.55、厚：1.57 | 12.53 | 側面打製工程 |
| ~ | 3 | II 97坑C区 | 石鏡 | 緑色凝灰岩 | 内径：(4.4)、外径：(6.0)、高：1.3 | (2.83) | 破片 |
| ~ | 4 | II 5住A区下層 | 割り抜き円板 | 緑色凝灰岩 | 径：4.4、高：1.5 | 31.53 | |
| ~ | 5 | II 5住E区上層 | 円板形模造品 | 滑石 | 長径：2.05、短径：1.60、厚：0.28、孔径：0.15 | 1.68 | 二孔 |
| ~ | 6 | II F-12 | 円板形模造品 | 滑石 | 長径：1.78、短径：1.63、厚：0.46、孔径：0.15 | 2.03 | 一孔 |
| ~ | 7 | I 10坑 | 円盤状石器 | 流紋岩 | 径：7.7、高：1.7、孔径：1.5 | 126.7 | |
| ~ | 8 | I I-2 | 砥石 | 珪質頁岩 | 長：(4.13)、幅：4.02、厚：1.32 | (29.84) | 板状 |
| ~ | | II E-10 | 砥石 | 珪質頁岩 | 長：3.46、幅：3.26、厚：1.18 | 29.15 | 板状 |
| ~ | | I 1溝 | 砥石 | 流紋岩 | 長：(4.37)、幅：3.38、厚：0.75 | (23.63) | 板状 |
| ~ | | I I-5 | 砥石 | 流紋岩 | 長：(3.17)、幅：4.50、厚：1.13 | (26.07) | 板状 |
| ~ | 9 | II 85坑下層 | 砥石 | 珪質頁岩 | 長：(6.88)、幅：6.10、厚：1.39 | (107.43) | 板状 |
| ~ | 10 | I M-9 | 砥石 | 砂岩 | 長：(5.79)、幅：3.66、厚：1.77 | (54.37) | 板状 |
| ~ | 11 | I G-9 | 砥石 | 砂岩 | 長：(4.01)、幅：(2.46)、厚：2.40 | (27.96) | 角柱状 |
| ~ | 12 | II 1住下層 | 不明 | 流紋岩 | 長：(11.4)、長径：5.9、短径：5.1 | (326.9) | |

第14表 出土石器計測表（括弧は欠測値）



第149圖 出土石器實測圖 (1~6 S=2/3、7~12 S=1/2)

第6章 まとめ

第1節 遺構

第1項 古墳時代の遺構分布とその変遷

1. 時期区分と帰属遺構

古代では、遺構の時期帰属を出土土器と建物の主軸方位から求めていたが、古墳時代遺構では土器を出土する遺構が大半であり、建物の主軸でグルーピングできる訳ではないため、遺構内に廃棄された土器の編年区分に基づいて、時期の帰属を試みる。古墳時代の土器編年は、南加賀地域の柳川流域の集落資料に基づいて編年を組まれた田嶋明人氏の漆町遺跡編年案（田嶋1986）を使用するが、漆町7群から11群の時期については、出土量が少なく、ストレートに漆町編年に対比できなかっただため、やや時期幅をもたせて区分している。

土器の時期は、僅かに包含層等から出土している弥生時代後期の土器を除いては、漆町7群以降のものであり、在地産須恵器が出現する14群以前まで確認される。既存の型式名で、古府クルビ式から宮地式に該当する時期で、古墳時代前期後半から古墳時代中期末にあたる。

1期……漆町7群から8群頃に位置付けられる（古府クルビ式に該当）。当期に位置付けられる包含層資料は少なく、遺構も1号土坑でまとまった資料が得られたに過ぎない。24号土坑は破片1点であり、確実に当期の資料とは言い難い。

2期……漆町10・11群に位置付けられる。1期から空白期をはさんで存在する、当地区的本格的な遺構出現期である。遺物分布、遺構の分布を見ても、1期とは一線を画す。土器廃棄土坑としたA類土坑が中心で、23号・26号・35号・36号・67号・71号・76号・89号・99号・103号・108号土坑の他、5号竪穴住居内土坑も当期に位置付けられる（5号竪穴住居に伴う土坑の可能性をもつが、5号竪穴の埋土下層土器と明らかに時期差をもっていることを重視すれば、5号竪穴が掘られる以前の土坑内覆土遺存土器として評価するのが妥当であり、別時期の遺構重複と考える）。また、遺物は少ないが、53・57・109号土坑も当期に位置付けられる可能性をもつ。

3期……漆町12群に位置付けられる（宮地式に該当）。竪穴住居跡が営まれる点、土器出土の増加などから見て、当遺跡の盛行期前半に位置付けられる。1号竪穴住居跡・5号竪穴住居跡、88号土坑の他、40・83・90号土坑も当期に位置付けられる可能性をもつ。

4期……漆町13群に位置付けられる。3期に継続して、竪穴住居跡が営まれる当遺跡の盛行期後半にあたる。竪穴住居跡は2・3・4号の他、竪穴住居の可能性をもつ2号竪穴や73号も当期に位置付けられるものと予想する。土坑は、西側に移動して、2号・5号・6号・14号が掘られる。

以上、当遺跡で区分可能な各時期の編年的な位置付けと該当する遺構を提示したが、当期に数棟存在すると予想している掘立柱建物跡はこの中に示されていない。時期の認定が基本的に不可能であったこととこの時期区分に当てはまるものであるかという不安もあって、以下に述べる主要遺構の分布と変遷では一応除外して扱った。

2. 主要遺構の分布とその変遷

1期 調査区の南西隅に1号土坑が
1基存在するのみで、他に遺構の分布は確認されていない。集落の出現期として位置付けられるものではなく、遺跡の縁がかかった程度のものと評価している。ただ、土器としてまとまった資料であり、この調査区から南側ないしは南西側に本体的な集落が存在する可能性はある。しかし、当調査区の2期以降の遺構と比べると、その間に若干の時間的のブランクをもつことは確かであり、遺跡として連続性は感じられない。

2期 本調査区における本格的な遺跡の出現期である。遺構はいずれも土坑であり、小型の土坑が多いが、比較的まとまった土器廃棄が見られる。1期に比べて包含層中の遺物出土量は増し、遺構分布もかなり広範囲にわたる。主に、調査区の東側半分の区域で分布する特徴が見られる。住居等の検出ができなかったため、集落としては不明であるが、いわゆる土器廃棄土坑が大半を占めており、何らかの集落痕跡を示すものと評価される。

3期 当調査区に竪穴住居が営まれる時期で、遺跡の盛行期前半に位置付けている。調査区中央東寄りの2期の土坑が分布していた区域に重複して遺構分布している。竪穴住居跡2軒とも竪穴規模6~7mの中型のもので、東から僅かに南に主軸を振って東西に2軒並んで建てられている。2軒の竪穴住居の周辺には、比較的小規模な土坑が分布している。主に2期の土坑が存在していた東側区域内に分布しており、2期から遺構の分布域はほとんど変わっていない。

4期 しっかりした4本柱をもつ竪穴住居は3号のみであるが、柱穴未確認の竪穴が他に4軒存在している。竪穴住居の主軸は、3号竪穴住居の主軸を見た限りではやや3期の竪穴よりも南に振っているが、他の竪穴を見るとほぼ同主軸と言えるものである。竪穴住居は3期の竪穴住居同様、主に調査区の東側に分布するが、1号・5号竪穴住居があった部分を境に北東側と南東側に別れて分布している。北

1期の遺構分布



2期の遺構分布



第150図 古墳時代1期・2期の遺構分布 (S-1/800)

東側には3号竪穴住居と73号土坑が東西に並んで、そして2号竪穴がその南側に分布。南東側には2号竪穴住居と4号竪穴住居が東西に並んで分布している。先も述べたように、竪穴住居の分布する区域は、3期と同様東側区域であるが、この周辺には土坑は分布せず、当期の土坑は全て西側区域に片寄って分布する。土器を大量に廃棄する土坑が多く、いわゆる土器廃棄土坑であり、3期の竪穴住居と土坑の位置関係と同様に、どのような因果関係で存在する遺構であるか興味深い。両遺構間での土器接合も少ないながら確認されており（4号竪穴住居と6号土坑）、ほぼ同一時期の埋没遺構と言えるものである。

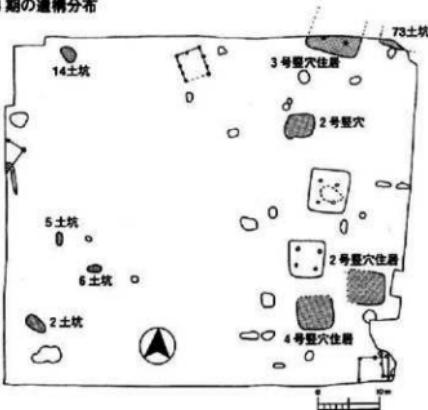
3期の遺構は、基本的に須恵器や土師器塊類が組成の中に入る以前と位置付けているが、4期の土器組成には須恵器食器と土師器塊類が定量含まれてくる。この時期の須恵器はいずれも和泉陶邑窯産と推察されるもので、坏日を初めとして、小型壺・甕の貯蔵具類などTK208型式前後のものが定量含まれる。一般的な集落遺跡でこの時期の陶邑産須恵器が定量含まれることは例外的であり、石製腕輪具や石製模造品などが出土することも考え合わせれば、一般的な集落遺跡とは言えないだろう。調査区の北東に位置する8~9mの竪穴規模をもつ大型竪穴の存在をもってその裏付けとはならないが、格上の建物が存在するような遺跡であると予想する。

当地区の集落遺跡は、4期をもって急激に衰退し、漆町遺跡14群の時期には終焉すると予想している。周辺の遺跡も含めてであるが、6世紀代へは継続して行かない様相をもっており、一度途絶える感がある。大規模な集落遺跡が多い梯川中流域でもこの時期の集落遺跡は衰退期にあり、大規模な遺跡間の異動があった時期と考えている。梯川左岸流域の遺跡の動向も踏まえて考えるべき規模の集落移動と予想する。

3期の遺構分布



4期の遺構分布



第151図 古墳時代3期・4期の遺構分布 (S-1/800)

第2項 古代の集落景観復元

1. 古代遺構の時期区分と建物の主軸方位

a. 時期区分

古代遺構の年代帰属は出土遺物から主に行うが、掘立柱建物跡の出土遺物は少ないものが主であるため、年代帰属する場合には若干幅を持たせて考えており、古代土器編年軸をそのまま当てはめて述べるのは困難である。古代土器編年軸に基づいては述べるが、当遺跡で使用する時期区分を以下に設定し、出土遺物をもつ遺構の帰属も併せて述べる。

0期……建物遺構が明確に確認されないが、土坑資料のある時期であるため、0期とした。Ⅱ₃期を主体とし、Ⅲ期まで含む。33号土坑、27号土坑が該当。

1期……建物遺構が伴う時期で、包含層資料でも確実に遺物量は増える。Ⅲ期からⅣ₁期までで、どちらを主体にするか明確には判断できない。掘立柱建物跡では2号・4号、土坑では69号・75号・95号・96号が該当。

2期……遺物量も増え、遺構数も増えるピーク前半の時期。Ⅳ₁期～Ⅳ₂古期が該当する。また、この時期は遺構数も多いため、前半、後半に細分も可能である。掘立柱建物跡では5号・9号・33号・42号・43号、土坑では77号・91号・92号・101号が該当。

3期……2期同様、当遺跡のピークに位置し、その後半期に属す。Ⅳ₂新期～Ⅴ₁期頃が該当するが、ここでも前半と後半に細分できる可能性をもつ。掘立柱建物跡では19号・28号、土坑では97号・98号が該当。

4期……遺構数がやや減少傾向にある時期で、Ⅴ₁期～Ⅴ₂期が該当する。掘立柱建物跡では37号、土坑では84号が該当。

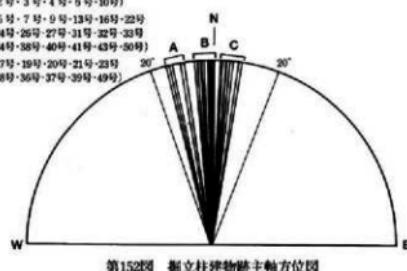
5期……明確に当期に位置付けられる遺構を確認しておらず、包含層遺物量は激減するが、定量の土器が出土しており、ピットからも当期の土器が出土する。Ⅴ₂期～Ⅵ₁期頃が該当する。

また、明確に帰属できないが、1期か2期と推定される7号・10号・41号掘立、3期か4期に位置付けることができる21・23・24・27・34・49号掘立がある。

b. 掘立柱建物跡の主軸方位区分

以上の出土遺物による時期を念頭に置いて、掘立柱建物跡の主軸方位を重ね合わせ、時期の帰属を試みる。

掘立柱建物跡の同時性を考える上で、主軸方位が有効な手段であることは周知のことであるが、当遺跡の掘立柱建物跡の主軸方位を見るところ、いずれも真北に近い方位を向き、北から西と東へ15度ずつ振った範囲で収まる。つまり、いずれもほぼ類似した主軸方位となるわけであるが、建物の配列や間隔、柱筋を通す方向性などを加味し、主軸方位を分けて行くと、西へ9度以上振るA群と、東へ主軸を振るC群、そしてその中間に位置するB群に分けられる。



第152図 掘立柱建物跡主軸方位図

A群の掘立柱建物跡は2号掘立・4号掘立が1期に位置付けられるのに対し、B群掘立柱建物跡は2期、C群の掘立柱建物跡は19・28号掘立の3期、37号掘立の4期と新しく位置付けられ、西から東へと主軸方位を漸次移動させる様相が看取できる。また、C群の3期の掘立柱建物跡は、比較的北寄りに方位をもつ傾向があり、B群・C群掘立柱建物跡の多くが3期か4期かに位置付けられる土器を出土する傾向は、B群及びC群の北寄りの一群で2期と3期を構成することが予想される。

これらをまとめ、掘立柱建物跡の柱筋や重複、建物の配列などを加味し、復元したのが第154・155図の時期別の遺構配置図である。なお、この内容については、村落景観の復元もあわせ、後述する。

2. 掘立柱建物跡の規模と構造について

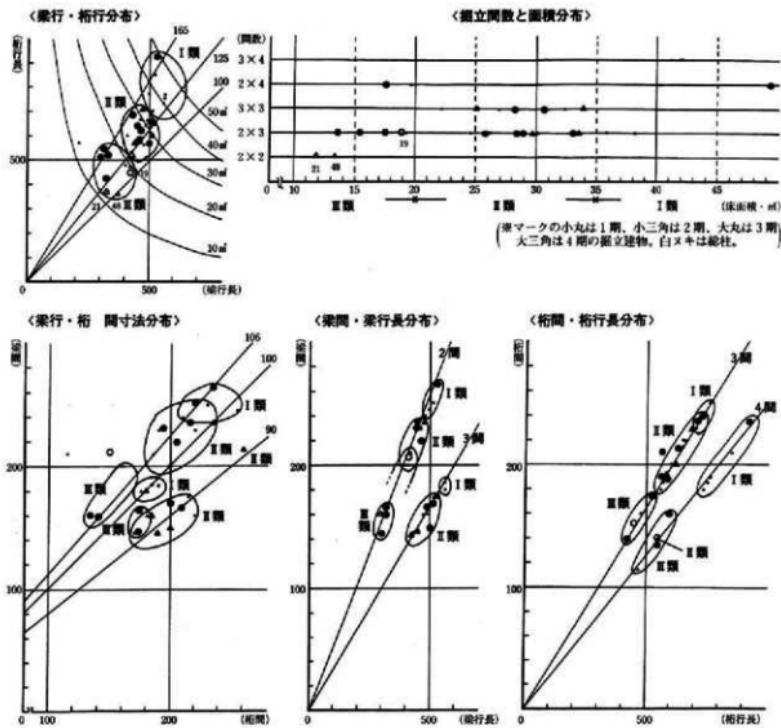
掘立柱建物跡の構造と性格について、規模や柱配置の構造から若干の考察を述べておきたい。

まず、掘立柱建物跡には側柱建物と縦柱建物があり、規模や柱穴掘り方、柱間隔から明らかに性格の異なる建物と判断できる。

a. 側柱建物

面積分布・梁／桁分布 面積分布及び梁行・桁行分布を見ると、主に建物を3つに分類可能で、13~20m²で梁3~4m・桁4~5.5mのⅢ類と、22~35m²で梁4~5.5m・桁5~7mのⅡ類、35~45m²で梁5~5.5m強・桁7~9.5mのⅠ類となる。分布域はⅡ類が25~33m²でまとまりをもち、特に28~30m²に集中する傾向をもつ。桁/梁比でも、1.15~1.40によくまとまりがあり、時期的な偏りはない。これがⅠ類になると面積は40~42m²に中心があるが、ややばらけ、桁/梁比は1.30前後と1.65前後に別れる。前者は比較的1期・2期の古手の建物で、後者の方が新しい傾向をもつ。建物の大型化を桁行で延ばすものであり、これはⅡ類の梁行とⅠ類の梁行に大きな差がない、Ⅰ類の梁行に幅がないことからも言えることである。また、Ⅲ類についても、この傾向はあり、桁/梁比が1.20前後の分布するものがやや古手、1.65前後に分布するものが3期にまとまる。Ⅲ類の2つの分布は、Ⅰ類のような理解ではなく、基本的には1.65前後の建物がひとまとまりあり、1.20前後のものはⅡ類からの流れで捉えられるものである。

柱間数と面積分布 面積と梁行・桁行分布は相関関係にあり、柱間数とも対応関係にあるはずであるが、必ずしもそうとはならず、梁間と桁間の寸法にかなり幅があることからもそれが判る（梁間寸法は建物面積によってかなりまとまりがあるが、桁間寸法は幅広に分布する）。掘立柱間数構成は、2間×3間が16棟（疑わしいものや9号掘立も含める）。なお、以下の掘立棟数も同じ扱い）、3間×3間が7棟、2間×4間が4棟、3間×4間が3棟で、2間×3間と3間×3間はⅡ類によくまとまるが、問題はⅠ類とⅢ類で、Ⅰ類に2間×3間が一部入り、3間×4間と2間×4間の構成をもつ。2間×3間はⅠ類でも小型のものであり、3間×4間と2間×4間とは別に考える必要はあるが、桁間も梁間も広がった感じがあり、面積の拡大を柱間本数の増加ではなく、柱間寸法の拡大で行っている（川畑b手法、川畑1995）。また、Ⅲ類は2間×3間が主体であるが、2間×4間も存在し、2間×4間はⅡ類を除き、Ⅰ類とⅢ類で存在することとなる。これを時期別で見ると、1期はⅠ類が2間×3間2棟、3間×4間2棟、Ⅱ類が2間×3間1棟。2期はⅠ類が2間×4間1棟、3間×4間1棟、Ⅱ類が2間×3間が3棟、3間×3間が3棟、Ⅲ類が2間×3間1棟、2間×4間1棟。3期はⅠ類が2間×4間1棟、Ⅱ類が2間×3間4棟、3間×3間2棟、Ⅲ類が2間×3間3棟、2間×4間1棟。4期はⅡ類が2間×3間2棟、3間×3間3棟となる。いつの時期もⅡ類が主で、2間×3間と3間×3間とが均衡して存在。Ⅱ類規模での3間×3間の率は時期変動なく高く、目を見張るものがあり、当建物群の特質とも言える。Ⅲ類は2期と3期のみであるが、目立つ傾向をもち、2間×4間の存在は注目される。Ⅰ類は1期で3間×4間が主であったが、次第に2間×4間へ主体を移すものと見られる。川畑誠氏の言うc手法に該



第153図 挖立柱建物跡寸法：面積分布図（単位はcm、面積のみm²）

当しようか。

柱穴掘り方と規模 掘り方の規模と平面プランは、径40~50cmが中心で、60cm程度を大型、30cm程度を小型とすれば、大型は5号・42号・24号だけで、24号以外はI類建物となる。他のI類建物も50~60cmの径をもち、また、方形掘り方もこのI類でのみ見られる（方形掘り方自体少なく、I類の2棟で確認されだけで、他は円形掘り方である）。ただ、I類でも最も大きな規模を有する13号掘立は径40cm前後と小ぶりで、円形掘り方である。また、大型掘り方をもつ24号掘立と近い規模の掘り方をもつものに26号掘立があるが、これらはII類建物であり、傾向としてはいずれのII類も比較的平均より大型の掘り方をもつ。しかし、50号掘立のような小型掘り方を呈す例外もある。このように見て行くと、大きめの柱穴掘り方はI類とII類に主体的に見られ、特に方形掘り方をもつものはI類に限られる傾向がある。II類は中間規模かやや小さめの掘り方で、これは建物の性格に関連するものと予想する。

建物の性格 挖立柱建物跡を規模によりI類からIII類まで区分したが、基本的にそれらは建物の性格を反映していると考える。I類は柱穴掘り方プランや規模、柱筋の通り具合など最もしっかりした建物であり、居住用でも上級クラスの建物であろう。ただ、この中でも40m以下はランクは下がり、また、小ぶりの柱穴掘り方をもつ13号掘立は規模や柱間寸法から通常の居住用ではなく、別の性格を有する可能性をもつ。II類は一般的居住用建物と理解している。梁間2間と3間があるが、性格に差はないもの

と思われ、何に起因するかは判断しかねる。Ⅲ類は面積や柱穴掘り方の大きさ、柱間寸法から考えて、Ⅱ類のような一般的居住用建物とは考え難く、雑舎や倉庫の機能が想定される。ただ、この中でも企画性をもち桁・梁比1.65に分布する24・26号掘立と1.20前後に分布するⅡ類建物に近い38・40号掘立とは別に考えたく、前者はより倉庫的、後者は小型の居住用か雑舎的なものと考える。また、50号掘立は雑舎的建物と言っても小屋的なものと予想する。

b. 縦柱建物

縦柱建物は、いずれも20m²以下のⅢ類建物で、柱間数では、21号掘立・48号掘立が2間×2間、19号掘立が2間×3間となる。規模としては後者がやや大きいが、20m²以内であり、基本的には同一機能を有した建物と考えられる。ただ、19号掘立は柱穴掘り方が100cm前後と特大で、方形プランを呈する特徴があり、同一機能をもつとは言え、さらに上のランクの建物として位置付けられよう。また、2間×2間の建物についても、側柱建物に比べて、大きく深い柱穴掘り方をもつ傾向があり、類似した面積をもつ建物であっても、側柱建物とは基本的に性格を異にするものと言えよう。側柱建物のⅢ類の倉庫的機能を有するものと区別する意味で、縦柱建物は米蔵とは言い切れないが、穀倉的機能が想定される。

3. 古代の建物配置と集落景観

これまで述べた内容をまとめ、土器廃棄土坑の分布を加味し、当遺跡の建物配置と集落の景観について述べてみたい。

1期の建物と土坑

0期に位置付けられる建物の存在も可能性としてはあるが、建物群として捉えられるのは間違いなく当期からであり、明確な形での集落形成は当期からと言える。これは出土遺物の増加期に呼応することで、集落形成期と位置付けたい。

1期の建物は北西にまとまる建物配列で、そこから東へ伸び、その延長上に土坑が分布する。北西区域を核とした東西配列の建物分布と言える。北西隅に位置する2・3・4号掘立は4号の方形掘り方をもつ3間×4間のI類側柱（大）建物を核にして、2間×3間のI類側柱（小）建物の2・3号掘立が崩れた「L」字形配置をとるもので、3号と4号掘立の西側には雨落ち溝がついている。また、3間×4間でI類側柱（大）建物がもう1棟南西に配置され、その東の平行位置に10号掘立がある。上器廃棄土坑は建物の中心がある区域から離れて東寄りに分布するが、69・75号土坑は土器も少なく、95・96号土坑が中心と言える。当期の建物は倉庫や雑舎的建物が多く、大型の居住用建物で構成されるのが特徴で、建物間に大きな格差は見られない。2・3・4・6号掘立で一つのまとまりを形成しており、建物群と捉えられるが、この中で明瞭に小群を形成する様子はない。

2期の建物と土坑

2期は、建物数や遺物量で確実に1期よりも増加しており、集落全盛期の前半期と位置付けられる。建物は重複が確認されるため、確実に2時期あり、出土土器と主軸方位（西から東への時間的推移）、建物の配列から前半と後半に細分している。そう見ると、建物の位置が前半から後半へ主体が東へ移動する様子が見られる。

まず、前半期の建物配置であるが、1期の建物群があった場所で大型方形掘り方をもつ3間×4間の5号掘立が1棟存在する。この掘立はI類側柱（大）建物で、北側に廟状の柱列があり、その先に「田」字の縦柱建物（48号）が1棟存在する。この2棟の建物はセット関係をもつものと予想する。この東側一部区域外にかかる、比較的Ⅱ類でも小型の43号掘立とⅢ類の38・40号掘立が3棟東西に並んで存在する。3棟とも類似した面積をもつ側柱建物で、小群を形成する。つまり、前半期はI類（大）

居住用建物十Ⅲ類倉庫とⅡ類小一Ⅲ類の居住用又は雑合的建物の小群で構成される建物群と判断できる。ただ、2つの「建物小群」で構成される建物群との理解はし難く、5号掘立を中心とした建物配置という感じを受ける。

これが後半期になると、大型のⅠ類側柱（大）建物は2間×4間の柱間配置になって、さらに東へ移動し、東側の小群の場所に重複して存在する。この建物は北東に位置するⅡ類側柱（小）建物の41号掘立と西側に並列する変則的9号掘立、前半期で大型建物のあった場所に存在する中型側柱Ⅱ類の7号掘立と、若干間隔を開けて並び、一つのまとまりを感じさせる。これらの建物は前半期からの東西に配列する流れにあるが、1期に存在した土器廐棄土坑の区域に、当期も土坑が形成され、それを囲むように、南北配列で2棟のⅡ類側柱建物が存在する。3間×3間の33号掘立と2間×3間の31号掘立は前者がやや大きいが、格差がある建物ではなく、この2棟で小群を形成する。つまり、後半期はⅠ類（大）居住用建物とそれに付属するような3棟のⅡ類（小）居住用建物で構成される東西配列する建物群と、そして南北配列する2棟セットのⅡ類居住用建物とで構成され、それが逆「L」字形の配置となる。南北配列の2棟は小群形成し、南北配列の建物とは別れているように見えるが、前半期の大型居住用建物を中心とした配列は守られており、明確に「建物小群」として分離した形とは思われない。

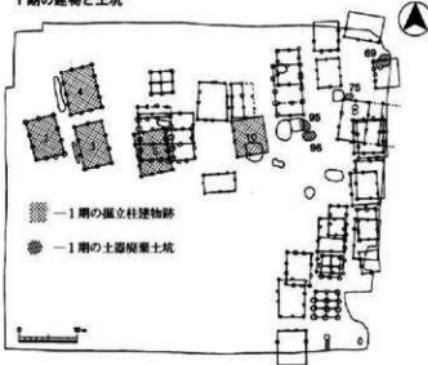
廐棄土坑は前述したように、1期の土坑が存在した場所で形成され、「L」字のコーナー内側部分に位置する。1期よりも建物の数が増えた分だけ、土坑が増えた様子はないが、遺物出土量は増加している。1期から継続して土坑形成される91・92号土坑周辺区域には建物の重複ではなく、1・2期はこの区域が一つの空間として存在していたことを物語る。

3期の建物と土坑

3期は、2期同様、集落全盛期にあたり、その後半期に位置付けられる。建物は、2期までの東西を軸とする建物配列から、南北を軸とする建物配列へ転換する画期になるが、それは2期後半の31・33号掘立の南北配列をする小群で既に兆候が見られている。南北配列はこの2期後半の2棟から派生したと言えるもので、建物は2期同様、前半期と後半期に主に建物の主軸方位から細分できる。

前半期は2期後半の南北配列の2棟の

1期の建物と土坑



2期の建物と土坑



第154図 1期と2期の掘立柱建物跡と土器廐棄土坑分布 (S-1/800)

建て替えた重複をして、同規模の3間×3間と2間×3間のⅡ類側柱建物がセットで建てられる。そして、2棟の桁柱を合わせて南へ小型Ⅲ類側柱建物が2棟南北に並び、そしてその西側に並列して2間×3間のⅡ類側柱建物が1棟存在する。居住用Ⅱ類建物が2棟南北配列するまとまりと居住用Ⅱ類建物1棟と雜舎又は倉庫のⅢ類建物2棟が変形「L」字形を呈するまとまりの2群で構成されるが、33号から22号まで南北に配列する構成は、明確な「建物小群」を形成する建物群と性格付けできるものではなく、建物の単位はそうであったとしても、一律の規制の元で、建物が配列していた様子が窺われる。また、2期前半に中心的建物が存在した区域のやや南側に横向き建物が1棟出現する。この50号掘立は2間×4間の側柱Ⅲ類建物で、柱穴掘り方は小型の貧弱な建物である。雜舎的機能が想定されるが、横向き且つ孤立した配置であることなどⅢ類側柱建物でも特に性格が異なる可能性がある。共同の作業小屋的なものだろうか。

後半期の建物も南北配列であることに変わりなく、前半期の建物の西側に並列して、全体的に区域が南へ移動する。24号掘立は26号掘立と、27号掘立は28号掘立と、規模や柱間配置などで互換性をもち、前半期と同様にこの2棟がセットをなすと思われる。また、この南西側に南北に並列して2間×3間と3間×3間のⅡ類側柱建物が2棟存在し、同様に32号・33号掘立と互換性をもつものと理解される。この二つの建物のまとまりは「建物小群」を形成するものではなく、その中間に2間×3間のⅢ類総柱建物が存在する。かなり柱穴掘り方のしっかりした倉庫であり、この建物の帰属が問題となるが、周辺建物に個別に帰属するようなものではなく、これでひとまとまりの建物群と言えるだろう。

また、前半期同様、横向き且つ孤立した側柱建物が類似した区域に建てられている。ただ、前半期と異なるのはその建物規模が50m²近い大型Ⅰ類建物である点で、卓越した格上の建物とも捉えられるが、柱穴掘り方は小型で、居住用建物というよりも、前半期同様、作業場の機能を想定したい。

廐棄土坑は、2期同様、1期から継続する場所でのみ形成され、他の地域や以前の建物と重複する区域には形成されない。土坑形成される区域を意識して設定している感があり、作業場の機能が想定される横向き建物の配置を意識すれば、

3期の建物と土坑



4期の建物と土坑



第155図 3期と4期の掘立柱建物跡と土器廐棄土坑分布 (S=1/800)

作業場的建物の存在する区域を含めて、この空間の共同的な場としての位置付けが想定される。ただし、当期の主体的な建物の配列は南北を軸としたものであり、東側へ中心を移していること、そして2期に見られたような大型I類建物がこの区域では確認されていないことを考えると、中心的な建物は東の調査区域外に展開している可能性も想定される。そうなれば、土器廃棄土坑もそれに伴って、東の区域へ移動した可能性もあり、1期から継承する建物を形成しない共同の空間は維持されていると言え、その性格は変化した可能性はある。それは当期の土器廃棄土坑の少なさが物語ると言えるが、一方では、廃棄行為の方法や廃棄行為の意識・性格が変容した可能性もある。

4期の建物と土坑

4期は時間幅の問題もあるうが、建物の減少など、集落衰退期にある。ただ、本当の衰退期は次の5期にあり、5期には他の地域か遺跡内の別区域へ建物群が移動していると予想する。

建物は3期と同様、東側区域で形成されることには変わりないが、これまで最も東へ主軸を振り、3期の南北配列（縦列）された構成から、建物が分散する傾向をもつ。まず、縦柱建物は、類似した場所で北へ移動し、「田」字の倉が建てられる。その西側に並列して3間×3間の側柱II類建物、北東側に2間×3間の側柱II類建物が存在し、3期後半から全体的に北へ移動、3棟で小群を形成するよう見える。また、そのさらに北側に2間×3間の側柱II類でも大きめの規模をもつ37号掘立と同規模をもつと予想される36号掘立が横に並列して2棟存在し（36号掘立の柱列は37号掘立の扇部分になる可能性もある）、さらにその北側、北東コーナーに横向きと思われる3間×3間の側柱II類建物が1棟存在する。いずれも調査区域外にかかるため、明確に建物のまとまりを捉えることはできないが、3期後半から確実に建物が分散する傾向があり、小群を形成している可能性はある。ただ、倉の帰属が本当に20号や23号のような建物でいいのか疑問であり、建物が分散するそれぞれのまとまりがどのような性格をもって存在していたのか、明確に見えてこない。9世紀後半～10世紀代への「建物小群」の独立化に傾斜する動きの可能性はあるが、明確な形では分離していないものと理解する。

3期に顕在化した調査区中央付近に位置する横向きの孤立した建物であるが、当期も疎んだ柱筋の整わない建物として1棟存在する。ただ、建物は南北主軸をもつものであり、3間×3間であるなど、3期の建物とは性格を異にする可能性はある。土坑形成される区域は当期も建物が建たない空間を維持し、これまでの土坑形成される空間よりやや北側に移動して、土器廃棄土坑が1基形成される。建物の存在する区域が東側区域に偏ることと孤立した建物が調査区中央付近に存在すること、土坑形成区域の継承は、3期の流れで存在するものであるが、建物群構成自体はそれぞれの建物が分散傾向にあり、3期から変化した様相と位置付けられるだろう。

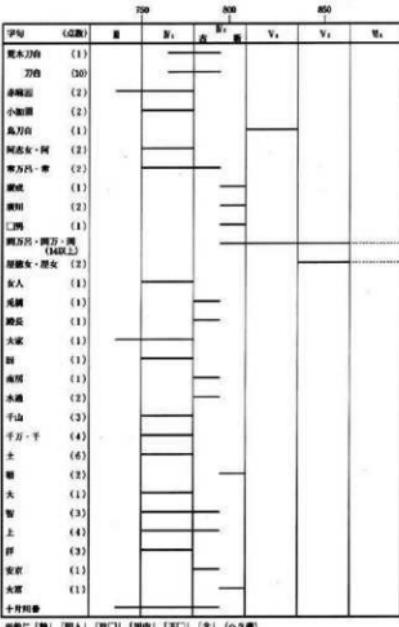
4.まとめ

古代の集落遺跡の性格を考える場合、何をもって評価を下すか重要である。本来は建物自体の内容に依存される部分が強いが、その部分があたらなければ、遺物で評価する以外にない。今回の調査では、建物が存在する主に居住域があたっているが、極めて出土遺物は少なく、生活用具はどこに廃棄したのかと首をひねりたくなるような状況であった。このような遺跡の状況は、古代の特に当遺跡がピークを迎える8世紀後半～9世紀前葉に顕在化し、建物区域から土器廃棄の場が姿を消すような状況が見られる。これは土器廃棄の場が集約されて行ったものとも考えられるが、生活用具自体の廃棄場はさほど変化はなく、祭祀行為に伴うような土器廃棄などが居住地域内から特定の場所へ集約されて行った可能性を考えたい。これは当期頃に顕在化していく溝内への祭祀行為を伴った大量廃棄行為と対応するものであり、土器生産自体も当期には大量生産型の古代土器生産体制が完成される時期にある。また、当期

の土器大量廃棄には、墨書き行為が伴い、木製祭祀具も大量に使用される。このような大量廃棄はその行為によって、いろんなランクがあり、いずれも一律と評価できるものではないが、廃棄行為自体の意味よりもその前提にある年中行事や神事・仏事などの儀礼行為に強く関連する行為であると理解されている。溝などの水が関連する遺構で行われている意義については、生産・生活・生命の根幹である水を司る神聖なる水場としての理念がその根底にあったはずであり、それが村落の中で特殊な空間を形成していたものと予想する。

当調査地区から東側20m程離れた区域行われた石川県立埋蔵文化財センターの調査では、水場遺構とされる水に関連する祭祀遺構が検出されており、出土する遺物群から溝への大量廃棄と同様の性格を有した遺構と理解されている。この水場遺構では、大量の墨書き土器と木製祭祀具が出土しており、時期は建物のピークに呼応する状況を呈す。また、墨書き内容であるが、8世紀末～9世紀初頭に大きく入れ替わっており、前半は「刀自」、後半は「岡万呂」の人名が主体を占める。前半の「刀自」は「荒木刀自」の略とされており、越前国に広く分布した荒木氏との関連が想定され、他に「小加須」、「女人」の人名、「大家」、「厨」、「南房」などの施設名、「兎橋」の地名、「千万」、「千山」、「拝」などの祭祀的字句、「水通」、「殿長」、「安京」などの遺跡の性格を示しそうな字句もある。これに対し、後半は「廣成」、「廣川」、「屋徳女」などの人名、「福」、「大富」などの祭祀的字句と、内容は大きく変化しており、前半の「大家」、「厨」、「南房」などの施設名や「兎橋」、「殿長」がどのような意味をもっているかによって変わってくるが、当遺跡の性格を示すものと仮定すれば、前半がより公的な性格を有する内容となっている。ただ、県埋文の報告では、水場遺構としての性格はそうであったろうが、直接的に当遺跡の集落としての性格や位置付けを示すものではないと判断しており、祭祀の場として、村落レベルを超えた有力者が関わっていた可能性を提示するに止めている。

しかし、水場遺構の墨書き内容の転換時期と、建物群の構成が大きく変容する時期とが8世紀末～9世紀初頭という時期に一貫的に行われていることや、水場遺構で出土する土器の時期と建物の存続時期が一致することを考えれば、水場遺構の祭祀行為の実質的主体者は村落構成に強い影響力をもっていた人間であり、強い権限を有していたと考えられよう。当村落内にそのような有力者が存在したのか、問題となるが、前半期の墨書きの主体を占める「刀自」に冠せられる「荒木」



第15表 石川県埋文調査区SX-13(水場遺構)
出土墨書き土器の時期(北野1995より転載)

の氏名は、越前に広く分布する在地氏族であり、「刀自」を全て「荒木氏」の略称とすれば、当村落内での存在も想定できる。また、そうすれば、「殿長」や「厨」、「大家」などの墨書きも当村落内にそのような施設があった可能性を示唆し、「兎橋」墨書きも直接的に関連する可能性を考えたい。しかし、当地区の建物構成では、在地の有力豪族を抱えるような卓越した建物は確認できず、現段階での遺跡資料ではそれを肯定する状況ではない。村落という単位をどのように捉えるかによって考え方は異なるが、広義での村落における居住域のブロックは、微高地ごとに分離独立した様相を呈し、その集合体が村落として機能していたとすれば、当地区の集落が比較的均一の中規模な居住用建物を主とする建物群であってもよいわけである。

当地区の1期から形成されて行く建物構成は、強い規制の元で配置された様子が看取でき、単なる独立經營的な農村の様相は呈していない。建物が全く立地しない区域を頗るに確保する様相や、東西配列と南北配列を敢然と行う点なども、村落構成員が強い規制の元で、この地区的建物配置を行ってきた様子を物語る。村落の中での一般構成員の居住地域として当地区を設定すれば、理解しやすく、広義の村落内で計画的に配置されたものなのである。ただ、このような一般居住域ブロックでも、当地区では大型居住用建物のⅠ類のような格上の建物は存在し、倉を保有するなど、それぞれ一つの共同体的組織は存在していたものと予想する。

また、当地区的建物は、4期にその規制が崩れ、小群単位（「建物小群」と明確に呼べるものではない）で分離する方向性も見られてくるが、これが水場遺構の放棄段階と一致することは興味深く、当村落を結束させる強い統制力が弛緩した状況とも考えられる。この時期を最後に、当地区的集落は建物の形成がないが、遺物は少ないものの継続して出土しているため、村落としての性格は異なるが、細々と存続していた可能性はある。また、この時期は梯川流域の村落遺跡に変動が見られる時期にあたり、当村落の盛衰である8世紀後半～9世紀前半に衰退期にあった同じ梯川左岸流域の漆町遺跡や佐々木遺跡は、逆に9世紀後半以降、村落が再興されて行く。このような村落の動向は、823年の加賀国立国と無関係とは言えないだろうし、9世紀後葉か10世紀になって当地域（荒木田遺跡の梯川を挟んだ対岸にある古府台地周辺は国府推定地となっている）へ移動していくと考えられている国府とも連動した動きなのである。梯川流域の古代村落遺跡の動向は、まだまだ掘めていない状況にあるが、加賀国府がこの時期になって移動してきた要因を秘めた可能性はあるように思う。国府所在地の埋蔵文化財行政を携わるものとしては、今後も取り組んで行かなければならない課題である。

引用・参考文献

- 川畠 誠 1995 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報』6 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
- 北野博司 1996 「水場遺構S X13の概要」「荒木田遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1983 「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡—加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした観察—」『北陸の考古学』 石川考古学研究会

第3項 中世村落の景観復元

1. 中世遺構の時期区分と遺構の帰属

a. 中世遺構の主軸方位

掘立柱建物跡など、土器の出土が少ない遺構での時期認定において、主軸方位と建物間隔が有力な判断材料となることは周知のことである。しかし、当遺跡の中世建物の柱筋を見ると、平面形が歪んで台形気味や菱形を呈するものが目立ち、しっかりした主軸方位を計測しにくく、なおかつ、当遺構の主軸方位が一部の遺構を除いては、真北から東西5度前後、特に真北から東へ5度程度の範囲に集中する状況にある。つまり、掘立柱建物跡をはじめとして、各遺構がほぼ同一の主軸方位をもって存在しており、誤差を伴う建物主軸方位では、柱筋を合わせるような時期認定ができないような状況にある。ただ、先述したように、一部の遺構、北から西へ15度振る52号掘立や斜行する30・33・34号溝は、基本的に真北を軸に据える区画形成に該当しないものであり、他の時期に位置付けられるものと考えられる。

以上、一部の他の時期に位置付けられる可能性をもつ遺構を除いては、真北に軸を据える遺構配置を行っているものであり、それが當中世遺構の特徴とも言えるものである。同一主軸での遺構配置は、軸となる溝が東西・南北に真っすぐ走ることによるものであるが、この東西・南北の溝によって形成された方形区画は、「村落」としての地割区画に基づくものと予想される。

b. 遺構出土土器の帰属時期

古代では、遺構の年代帰属を出土土器と主軸方位から想定したが、中世遺構では主軸方位からのグレーピングは不可能であるため、出土土器からその年代帰属を試みる。出土土器は、国産陶器や中国磁器、土器器皿があるが、国産陶器や中国磁器は伝世する確率が高く、年代比定には若干信憑性に欠けるため、ここでは土器器皿の編年観（藤田邦雄1992「加賀における様相—土師器」）『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料）から求められる年代帰属を提示する。ただ、遺構から出土する土器自体が少なく、年代帰属する場合には若干幅を持たせて考えており、藤田編年をそのまま当てはめて述べるのは困難である。編年軸に基づいては述べるが、当遺跡で使用する時期区分を以下に設定し、出土遺物をもつ遺構の帰属も併せて述べる。

1期……遺構が確実に伴う時期で、包含層資料でも確実に遺物量は増える。藤田編年のⅠ-Ⅱ期からⅠ-Ⅲ期までが該当し、曆年代観では12世紀前半代が当てられる。掘立柱建物跡では18・35号、土坑では9号・10号・25号・39号・56号・102号、溝では15号・24号・25号・43号が、そして4号井戸も該当する。また、1号溝からも当期の遺物を出土するが、主体は2・3期である。

2期……遺物量が最も多く、遺構数も増える時期で、当遺跡の全盛期前半にあたる。Ⅱ-Ⅰ期からⅡ-Ⅲ期が該当し、曆年代では12世紀後半が当てられるが、一部13世紀初頭頃まで下るかもしれない。掘立柱建物跡では8号・25号、土坑では28号・32号、井戸では2号・3号、1号竪穴、溝では1号・5号・16号が該当し、1号井戸も可能性をもつ。

3期……2期から継続する遺構もあり、2期とあわせて一つの時期設定も可能である。2期同様、当遺跡の全盛期にあたり、その後半期に位置付けられる。Ⅱ-Ⅲ期からⅡ-Ⅳ期が該当し、曆年代では13世紀前半から中頃までを想定する。掘立柱建物跡では11号・14号、土坑では3号・43号、溝では1号・2号・23号・26号が該当する。

4期……遺物量が減少していく時期で、遺構数も減少傾向にある。Ⅲ-Ⅳ期からⅢ-Ⅴ期までが該当し、曆年代では13世紀後半から14世紀前半頃が当てられる。土坑では18号・52号・85号、

溝では8号・9号・44号が該当する。また、1号溝については、当期の土器も出土しており、埋め戻された感はないが、機能していたかは疑問である。

以上の土器による時期区分に加え、各遺構間での切り合いや層位から求められる同時併存や前後関係、そして遺構としての位置関係を参考に、時期別の遺構配置を復元したのが第158・159図の配置図である。これらは土器による編年観に基づく時期区分であるが、遺構の切り合いがはっきりしている場合は、それを優先して配置している。大きくは1期と2・3期、4期に区分でき、2・3期においては継続する遺構もあると想定する。なお、この内容については、村落景観の復元もあわせ、後述する。

2. 挖立柱建物跡の規模と構造について

掘立柱建物跡の構造と性格について、規模や柱配置の構造から若干の考察を述べておきたい。

まず、掘立柱建物跡は全て総柱建物であり、側柱建物は未確認である。加賀地域における総柱居住用建物の出現は、10世紀代に求められるが、通常の建物として普及するのは、11世紀以降であり、11世紀後半から末には、側柱建物から総柱建物へ主体を移すようになる。側柱建物は梁間1間の小型建物のみ存続し、従来の梁間2間の側柱建物は総柱建物にほぼ置き換える。これは加賀地域に限られた現象ではなく、北陸一円で見られる建物様式の転換で、「中世前期建物様式」の確立期と位置付けられている（川畠1995）。この総柱建物は13世紀中頃まで全盛時期を迎えるが、14世紀には再び側柱建物が増加し、側柱建物主体となる。当遺跡の掘立柱建物跡は、そのような建物様式の時代的様相を反映したものであり、総柱建物に統一される様相として提示可能である。ただ、古代掘立柱建物跡と重複する区域であるため、側柱建物が存在したとしても、抽出しきれていないことも事実である。

a. 建物の寸法分布と構造

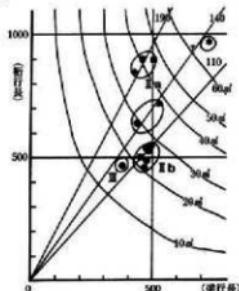
柱間数と面積及び梁行・桁行分布　柱間数は梁間2間の建物が主体で、特に2間×2間が8棟で全体の6割を占める。2間×3間は2棟、2間×4間は2棟であり、梁間3間のものは3間×4間の1棟のみとなる。主体となる2間×2間建物は、20m²以下のものも1棟あるが、面積20~30m²にほぼまとまり、梁行・桁行分布でも桁/梁比が110の正方形に近い平面形にまとまる。一部140に分布する桁に長い建物もあるが、桁を長くして面積増を計る建物は例外的で、2間×3間、2間×4間と柱の数を増やすことによって単純に面積増を計る。基本的に、梁行は変わらずに桁行だけ柱間数が増えた分だけ延びるもので、面積も比例して増加しており、2間×3間は2間×2間の約1.5倍、2間×4間は約1.8倍、3間×4間についても2間×2間建物の約2.8倍の面積をもつ。これは平均柱間間隔の分布図を見ると、より明確で、特に桁行3間以上の建物は梁間/桁間比100前後に分布し、梁間、桁間とも220~270cmの極近い寸法をもつ。2間×2間は、梁間が220~240cmに集中するものの、桁間は230~280cmと幅をもち、桁に長い建物は300cm以上を測るが、ここまでが限界のようである。建物の構成、組み立ては2間×2間を基本としていることが理解でき、各建物に共通した規格の柱間寸法が存在していることは注目される。11世紀に普及していく居住用総柱建物の規格化によるものであろうか。

面積分類では主体となる2間×2間建物の20~30m²を一般的な建物とすれば、35~45m²前後の2間×3間や2間×4間は大型建物となるが、特殊建物として位置付けられるものではなく、ここまでを一般的な建物の範疇とし、前者を中小型（Ⅱb類）、後者を中大型（Ⅱa類）と分類したい。また、70m²以上の3間×4間の建物は一般的な居住用の建物としても、中型とは別のランクであり、特殊建物として位置付け、大型建物（Ⅰ類）と分類。小型建物（Ⅲ類）は20m²以下を当てたいが、ここでは2間×2間の25号掘立が該当しそうである。

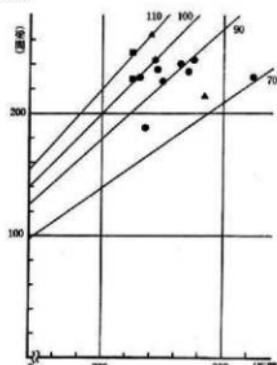
柱穴掘り方と柱建て方法　柱穴掘り方の平面プランは全て円形であるが、規模や形態については、二通

りあり、それが柱建て方法と関連するものと予想できる。遺構本文でも述べたことだが、当遺跡の柱建て方法には、礎板を柱穴掘り方底面に敷いて柱を建てる方法（a方法）と掘り方底面からさらにも地中へ柱を打ち込む方法（b方法）とがあり、これによって、掘り方の規模や深さ、柱痕跡が異なってくる。まず、a方法であるが、掘り方径50~60cm前後と大きいのに対し、深さは30~45cm前後と比較的浅いもので、柱穴底面の広く平坦なバケツ形を呈す。浅くとも、しっかりと掘られるのが特徴で、底面に2段ピット状の柱痕跡を残すものは少ない。土層断面では礎板部分での柱痕土と周辺の掘り方埋め戻し土が確認される。これに対し、b方法は掘り方径30~50cm前後の比較的小型のものが主体で、深さは50cm程度と深いものが目立つ。柱穴形態は底面狭い円錐形のものが目立ち、柱痕跡と思われる2段ピットの存在が目立つ。柱根の残る例が多く、先を削った柱根を柱穴底面からさらに地山へ深く打ち込んでいる。

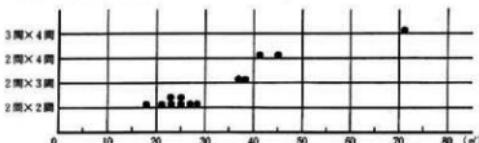
〈梁行・桁行分布〉



〈梁間・桁間寸法分布〉



〈掘立柱建物跡寸法面積分布図〉

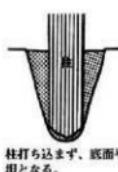
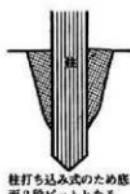


第156図 掘立柱建物跡寸法面積分布図（単位はcm。面積のみ m^2 。マークは2×2が丸、2×3が三角、2×4が四角、3×4が星）

〈a方法〉



〈b方法〉



第157図 掘立柱建物跡柱穴断面と柱建て方法の模式図

柱穴掘り方の深さにもよるが、打ち込んでいないものも定量あり、打ち込みの度合いは柱の長さによって調節し、高さを揃えるために行われたものと予想する。主体は b 方法であり、特に中小型建物はほとんどこの方法で、a 方法のみで柱建てを行う建物は大型の 8 号掘立と中大型の 12 号掘立のみである。ただ、a 方法と b 方法とを併用する建物も定量あり、柱の長さによって使い分けされていたのであろう。古代に比べて、中世掘立の柱穴は細く深い傾向があるが、これは b 方法が主体的であることに関連するものと思われ、柱建て方法の転換が、柱穴形態を変えていったものと理解する。

建物と竪穴状土坑 竪穴状土坑が掘立柱建物跡に伴う施設であることは、遺構本文で指摘しているが、竪穴状土坑の位置と建物の規模の相關関係について、ここで述べておきたい。竪穴状土坑自体の確認例が少ないため、他の遺跡にも当てはまるものとは言い切れないが、8 号掘立や 12 号掘立の大型ないしは中大型の建物に伴う竪穴状土坑は、建物内に組み込まれて柱穴配置に対応して存在している傾向があるに対し、1 号掘立や 15 号掘立の 2 間 × 2 間建物は柱の配列された建物内には存在せず、柱穴配置に対応する位置に存在するものの、基本的に外に存在する。これは 2 間 × 2 間建物が柱穴の並ぶ範囲のみが、建物範囲ではないことを物語るものと思われ、張り出しになるのか、2 間 × 3 間様建物となるのかはわからないが、通常の中小型建物とは異なる建物と言える。この竪穴状土坑を伴う中小型建物はいずれも北東側に木組み井戸をもつ点で共通している。

b. 建物の機能と性格

掘立柱建物跡の構造について述べてきたが、建物規模は、基本的に建物の性格を反映していると言える。大型 I 類は柱穴が壁板敷きで建てられる a 方法の柱建てで、横向き建物である点や卓越した面積をもつ点で、一般的な建物とは思えず、居住用建物でも村落構成員の上に立つような上級層の建物であろう。この I 類建物の西隣りには 2 間 × 2 間の II b 類建物があるが、その中でも小型の建物であり、I 類建物の付属屋の機能を想定したい。次に、中大型 II a 類建物であるが、一般的居住用建物を想定する。柱建てが I 類同様の a 方法に主体をおくものもあることは、注意する必要はあるが、特殊な性格を帯びるような建物とは言えない。また、2 間 × 2 間の II b 類建物であるが、竪穴状土坑との組み合わせで、II a 類に類する規模や機能を想定できる建物があり、これは II a' 類建物としておきたい。木組み井戸とのセットをどのように理解すればいいか難しいが、建物としては I 類と大きな格差があり、下級層とするのが妥当だろう。主体を占める II b 類建物であるが、I 類建物の付属屋の建物の存在から、全て一般居住用建物とは思っていないが、III 類建物の区別は微妙であり、一部のものを除いては、居住用の建物と理解している。農耕に直接從事する下級層の村落構成員の居住建物だろうか。これ以外の II b 類と III 類建物は、複合的機能や倉庫の機能を想定される。実質的にはこの下に梁間 1 間の建物が存在するものと予想されるが、そのような類いのものを小屋の建物とすれば、III 類は倉庫的な建物と言えるかもしれない。

3. 中世遺構配置と村落景観

これまで述べた内容をまとめ、建物の形態や性格を加味し、当遺跡の中世遺構配置と村落の景観について述べてみたい。ただ、ここで村落景観と題したが、これまでの村落史研究では、「村落景観」における「村落」は「集落十耕地 + a (林野・水・道等々多数)」としての小地域の統一体を意味しており、居住地域のみを示す用語としては「集落」を用いる(木村 1988) ようで、用語的には集落内景観とすべきものであるが、調査区域外に存在するであろう「耕地」や「+ a」部分も視野に含めた集落景観の復元であり、あくまでも小地域の統一体としての「村落」を念頭に置いた空間復元を目指す意味でも、あえて村落景観の用語を使った。

1期の遺構

9世紀後半に衰退した当区域の集落は、少量の遺物が継続して出土することから、村落域内での移動など、場所を移しながら、継続して営まれた可能性ももつが、11世紀代までは衰退期にあることは間違いないく、1期である12世紀前半に新たな形で、村落が編成されたものと予想する。

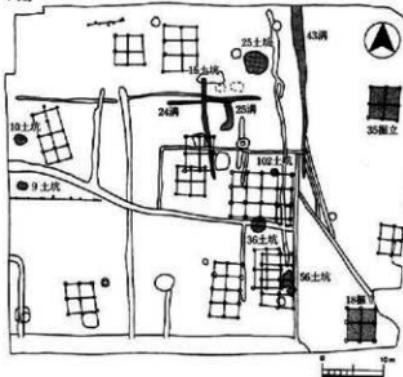
遺物の出土に偏りは感じられないが、遺構分布は東側半分に多く、掘立柱建物跡は北東側に1棟、南東側に1棟、いずれも北に主軸を向けて同軸線上に離れて建てられる。両建物とも中小型のⅡ b類で、付属施設は伴わず、建物だけが孤立して建てられている。この建物から15m西側には井戸と思われる素掘りの大型土坑が2基、同軸線上に掘られており、建物との関連も想定されるが、それぞれ孤立した位置にあり、建物と付属する施設との生活空間が見えてこない。また、水溜め状土坑など小規模土坑も散在する様相で、散村的様相を呈す。

集落（村落）の地割を示すような南北に真っすぐ走る大型の溝は存在するが、明確な屋敷割を意識したような方形区画溝はない。また、当集落の核的存在となる壠状遺構とした1号溝からは、当期の遺物は出土するが、出土量が少ないと、これから派生する小溝がまだ出現していないことから、当期にはまだ掘られていなかったものと考えられ、当期を壠状遺構の掘削以前の段階と位置付ける。当中世村落形成初期の様相であろう。

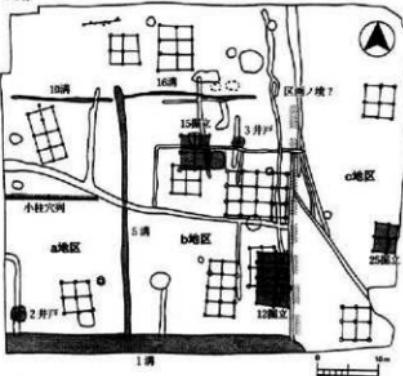
2期の遺構

2期は、壠状遺構が掘られる段階と予想され、壠状遺構を軸とした方形区画が形成される。方形区画は壠状遺構から北に真っすぐ伸びた5号溝と東西に直交した10・16号溝によって形成され、西が40×18m、東が40×22mの長方形区画となる。東西の溝が途中で切れた部分での面積であるため、長い東側を参考にし、壠状遺構の曲がる区域（26号溝が3期で掘られる区域）までを区画内として見れば、南北40m、東西25mの約1,000m²となる。条里制半折型の1段は54.5m×22mの約1,200m²であるから、同じとは言えないが、類似した規模であり、東西に3区画が並ぶ様子はそれを連想させる。東西に並ぶ3つの方形区画内には、a区画で2号井戸、b区画で15号掘立と3号井戸のセットと12号掘立、c区画で25号掘立が分布し、a区画には井戸とセットをな

1期



2期



第158図 中世1期・2期の遺構分布 (S=1/800)

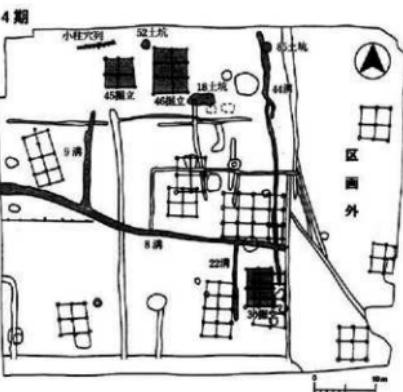
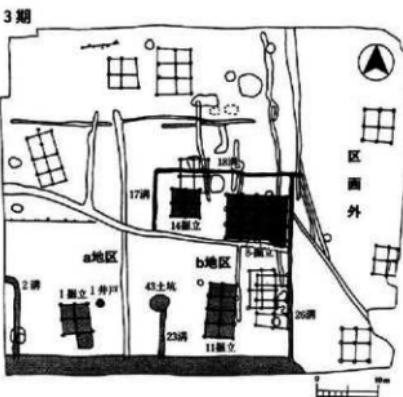
す建物も存在していたと予想する。c区画の建物は小型Ⅲ類建物で、倉庫的機能が想定されるが、区画は区域外に伸びており、対応するような居住用建物が存在する可能性もある。b区画は木組み井戸とセットをなす竪穴状土坑付設の居住用Ⅱa'類建物（15号掘立）とⅡa類建物（12号掘立）が存在する。一つの区画の中で前者は横向き、後者は縦向きで存在するが、2棟対で建てられた建物とは思えず、上下で別れていた可能性もある。東西小溝の北側には遺構の分布ではなく、ここまでが屋敷地とされ、東西の堀状遺構を中心軸として、この南側にも同様の集落が展開していたものと予想する。集落内建物分布は、1期から区画された中に入る点で異なるが、散村的様相は変わらない。

3期の遺構

3期は、2期で形成された方形区画を継承する段階で、東西の堀状遺構を軸として区画溝が北側へ伸びる。2期の区画溝として存在した5号溝と10・16号溝は埋められ、2号溝、23号溝、26号溝の南北溝が堀状遺構から伸びる。特に、26号溝は17・18号溝と連結して、23号溝とともに方形区画を形成する。この方形区画は2期の1段程度の区画割から26号溝を基点として南東へ縮小し、 $30 \times 22\text{m}$ の 660m^2 程度の区画割となる。この区画割は23号溝と2号溝の間隔が同じ 22m であることから、2期同様に、堀状遺構を軸として同じ幅の区画が東西に並ぶ区画割を想定できる。区画には1号木組み井戸とセットをなす竪穴状土坑付設のⅡa'類建物（1号掘立）が、多分、b区画から移動して建てられ、b区画にはその場所に大型Ⅰ類建物（8号掘立）が出現する。この大型建物は西側に並列して建てられる14号掘立を付属屋の建物として伴い、26号溝に梁の柱筋を合わせて建てられる。大型建物は当区域の建物の中では卓越したものであるが、村落領主級の建物とは言い難い。また、この2棟の建物の南側には12号掘立の建て替えと思われるⅡa類建物（11号掘立）が存在し、その西には大型の井戸状土坑が存在する。b地区は2期から、南北で2区画に細分されていた可能性があり、当期でもそのような意識は継続していた可能性をもつ。2期から区画が縮小し、建物が集まる傾向が見えるが、基本的な区画割は継承しており、区画内での建物配置も継承する動きにある。

4期の遺構

4期は3期までの方形区画が崩れる段階



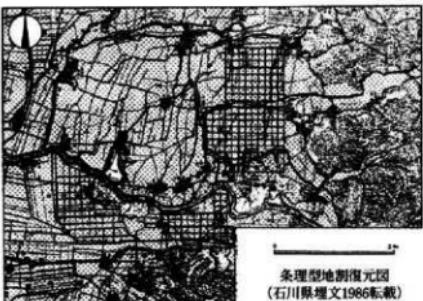
第159図 中世3期・4期の遺構分布 (S=1/800)

で、壠状遺構はこれから派生する溝が存在しない所から見て、機能していない段階と予想する。4期も含め、これ以降の遺物も出土しているため、埋め戻された可能性は低いが、3期の壠状遺構としての役割は完了しているものと予想する。当期の主要な溝は東西にやや蛇行して走る8号溝で、これに直交して走る南北の9号・22号・43号溝とで区画を形成するが、3期の区画割は継承せず、軸はややずれて存在する。建物は南側にも存在するが、北側へ移動しているようで、竪穴状土坑や井戸状土坑も北側で多く分布する。3期に比べて、貧弱な建物が目立ち、遺物の出土量から見ても、確実に当期は衰退期に入っている。

4.まとめ

北陸における中世村落の成立は、北陸北東部では12世紀後半でないしは13世紀前半に主体をおくに對し、北陸南西部では11世紀後半から12世紀前半に主体をおくことは、從来より指摘されていることがある（坂井1996）、梯川流域の村落も大体11世紀末から12世紀前半に成立の初期があるよう、当遺跡を初めとして、白江梯川遺跡、漆町遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡など、梯川左岸中流域の中世集落の出現はこの時期に集中している。また、この時期出現する集落の特徴として、広い地域で確認される状況があり、古代集落の分布の様相（時期ごとに地域が集中しやすい）とは趣を異にしている。これは中世集落の形態が散村的形態をとることと関連する可能性があり、広範囲を対象として行われる水田開発に伴って、計画的に分散していたものと予想する。この12世紀前半の村落形成は、大規模な水田開発を前提とする灌漑水路の整備や耕地整備に基づいたものであり、面的に施行された条里型地割内で行われたものと言える（山川1995）。

南加賀地域の条里地割については、遺存する史料はないが、古地形からの類推方法で、吉岡康暢氏が当地域の条里地割を復元している（吉岡1976）。それを参考にして、現地形に条里地割をトレースし、当荒木田地域まで拡張して地割復元を試みたものが第160図である。また、図には佐々木ノテウラ遺跡の方形区画溝と当遺跡の壠状遺構をプロットし、その位置関係を示した。これを見ると、荒木田遺跡の壠状遺構とそれが南へ「L」字上に曲がる点が、坪境にライン上に乗っていることが分かる。また、佐々木ノテウラ遺跡とは西へ1町、北へ1町離れており、ノテウラ遺跡の方形区画溝も東溝のラインと北側の溝の切れる区域とが坪境のラインに乗っている。方形区画の南側の溝はちょうど坪の半分の区画であり、緯の区画溝の幅が21m前後の単位であることは、横12歩、緯30歩の半折型地割であることを想像させる。荒木田遺跡

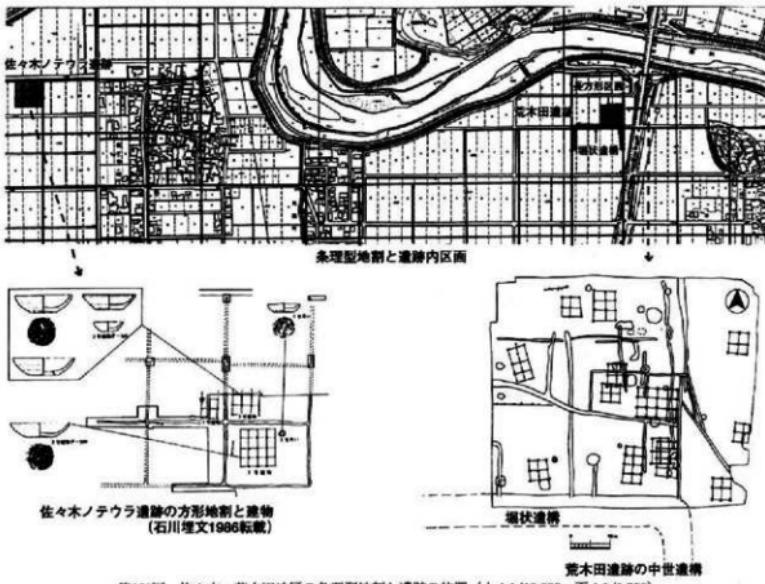


第160図 梶川中流域の条里地割と中世遺構分布

の2期に見られる長方形区画もこの半折型地割に近いものであることは前述したとおりであり、条里型地割に忠実に則った屋敷割がなされていたことを示すものであろう。

また、荒木田遺跡の堀状遺構が「L」字に曲がる地点に坪境が存在することは、当調査区域内でちょうど26号溝あたりにその境があることになる。この部分の坪境を示すような南北の堀状遺構は存在しないが、この部分には、時代の異なる南北に直線的に伸びる溝が多数存在し、同じ主軸で溝が密集する区域にあたっている。さらに、この南北溝を境にして、東西で遺構分布の仕方に大きな差があり、時期もずれるなどの特徴が見られる。特に堀状遺構と長方形区画溝が出現する2・3期には、東側区域での遺構分布が希薄となることは注目される。条里型地割に則った区画溝の整備は、單一時期に一齊に行われたものではなく、漸次拡大していったものと予想する（佐々木ノテウラ遺跡の方形区画溝は当遺跡の1期に併行している。石川埋文1986）。当遺跡の1期は中世条里型地割の面的施行開始期であり、2期、3期と、拡大整備されていったものであろう。また、4期の13世紀後半から14世紀前半頃は、中世村落に新たな動きが始める時期であり、建物域の移動や地割の変動など、転換の前兆とも言える動きがある。大きく転換する時期は14世紀中頃で、掘立柱建物跡の倒柱建物化や方形堀区画をもつ領主居館を中心とする新たな地割と集村形態への転換など見られる時期に当たるが（川畠1994、山川1995）、当地区では集落の消滅という形で、新たな地割と村落形態に呼応した動きを示している。

基本的に中世の条里型地割は、農地整備が前提であって、集落域の区画割はそれに則ったものであったはずである。小溝などは難しいが、大型の堀状遺構は灌漑水路であったはずであり、灌漑水路の整流化に条里型地割の目的があったはずである。しかしながら、このような堀状遺構に付随して水田の畦跡や畠の畝溝跡が検出されることは少なく、農地の所在が不明確である。唯一農業經營を推測される資



第161図 佐々木・荒木田地区の条理型地割と遺跡の位置（上：1/10,000、下：1/1,200）

料に佐々木アサバタケ遺跡がある。ここでは井戸内覆土の土壤分析による植物遺体検出から検証しているもので、かなりの割合を畑作が占めていたことが報告されている（石川埋文1988）。屋敷地割の中で盛んに畑作が行われていたことは新潟県の一之口遺跡西地区（新潟県1986）の事例でも明らかであり、散村的な様相を呈す条理型地割の屋敷地は、高い確立で閑宅地としての機能を有していたものと予想する。散村の景観を考える時、越中砺波の散居村をイメージしてしまうが、一つの地割り中の一角に屋敷地が存在するような村落形態が、中世の散村形態に当てはめられるのだとすれば、かなり、水田地と屋敷地は密着していたはずであり、大きな意味での屋敷地割の中での農地經營がなされていたものと予想する。越中砺波の散居村をそのままトレースすることはできないが、屋敷地周辺の地割内が水田ではなく、畠地であれば、かなり近い形のものであったろう。近世の村落絵図や田・畠構成率を見ると、かなり高い割合で畠が広がっており、率としては地形などもありばらばらであるが、近世初期のデータでは間違いなく、畠の占める量が多かったようである。また、絵図では集落域に近接して水田經營されているものは少なく、村落の一角に比較的まとまって存在しているようである。近世の集村形態と直接対比はできないが、参考となるだろう（木村1988）。散村形態とは言っても、水田地は比較的まとまりをもち、畑作地が地割に沿って、屋敷地の周辺に存在する様相を想定したい。また、灌漑水路と思われる堰状遺構より派生するような小溝については、当然、所有権を示すような土地地割であろうが、このような畑作にも関連する水路だったのだろう。

ここで示してきた条里型地割は、梯川右岸中流域で復元された条里型地割とは地割線がずれて存在していることは間違いなく（主軸は合うが、区画ははずれている）、梯川を北端として南側へと展開しているものと考える。また、この平野部の南側には若杉・八幡・輕海の丘陵部が迫っており、川と丘陵に挟まれた東西に細長い平野（輕海から荒木田、佐々木、漆、白江、打越まで）で展開して行ったものと予想する。12世紀前半代の集落遺跡の出現や平野としてまとまった地形を呈していることは、これらを一つの村落として考えることに違和感はなく、現存する道の配置や田畠の区画からも東西軸にきれいに乗った配置がしてある。当地域一帯は江戸期では「輕海郷」に包括された地域であり、中世においても「輕海郷」内に属していたものと予想されている。ただ、「輕海郷」は梯川を上流へと遡り、大杉谷川流域と津上川流域の山間部へと広がっているため、郷域をそのまま村落域と捉えることは、若干イメージが狂ってくる。中世村落領域論では、「初期中世村落は原理的に、①集落、②田畠、③近隣山、④奥山の4領域が同心円的に配置される構成」（田村1990）と言われているが、「輕海郷」にそれを当てはめた場合、各流域単位で独立した領域構成を行っているものと評価でき、梯川左岸中流域の平野部とその南側に存在する丘陵部とで一つの村落領域を形成していたものと予想する。ただ、この村落の中でも、当然、集落単位は存在していたもので、主軸的な東西に走る灌漑用水路（堀）を軸として、分散して

| （1）埼玉県近世初期事例 | | | | | （2）埼玉県中世後期事例 | | | | | （3）（低地下水位） | | | | | |
|--------------|---------|--------|--------|---------|--------------|---------|---------|---------|---------|------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 地名 | 面積 | 上田 | 中田 | 下田 | 田畠 | 上畠 | 中畠 | 下畠 | 田畠 | 面積 | 地名 | 面積 | 上田 | 中田 | 下田 |
| 1304(立原) | — | — | — | — | 0.00522 | 0.01260 | 0.01580 | 0.00620 | — | — | — | — | — | — | — |
| 1306(新井) | — | — | — | — | 1.72014 | 1.30625 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 1321(荒井) | 1.81325 | 540.16 | 422.20 | 80.02 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 1324(荒井) | 2.30715 | 719.31 | 719.16 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 | 0.00523 |

* 1 ハーベスト面積、耕地面積に面積が付く、面積によって耕地面積を算出した面積を示す。また、耕地面積は耕地面積と面積を示す。また、耕地面積は耕地面積と面積を示す。

（参考）（3）（低地下水位）

（参考）（3）（低地下水位）

第16表 近世初期村落における田・畠の構成率（木村1988より転載）

た様子をイメージしたい。集落域は微高地に点在し、その周辺に畠地、水田は灌漑水路に沿って存在していたであろう。灌漑水路は、梯川の合流前の軽海側から取水し、東西軸の基幹水路を通し、それぞれ南側に存在する梯川へ排水して行ったものと予想する。

補注

梯川左岸中流域が「軽海郷」に属する考えがある一方、関東下知状案に「得橋郷長恒名内荒木田内島式所富岡島森島」「佐々木宿田荒木田」とあることから、「軽海本郷」と思われる軽海周辺以外は、「得橋郷」に含まれるとする考えがある。「得橋郷」は寺井町牛島・佐野間辺から梯川右岸流域までの広い平野部に分布する郷で、国衙や總社府南社も所在している。荒木田遺跡の古代器物土器に「鬼横」とあることもあり、北野博司氏は梯川の水運を考えた場合、流域単位に郷編成される考えが妥当であると述べている（北野1995）。『得橋郷』と『軽海郷』は隣接する郷であり、郷境は度々移動したこととも考えられる。この郷境でもごとが度々あったことが記事で示されているように、一部佐々木や荒木田の区域まで「得橋郷」の郷域が食い込んだこともある。灌漑水路や条理型地割、そして中世道路の分布状況を見ると、梯川右岸中流域から左岸流域へ郷域が広く伸びていた状況は感じられない。上記の記事は一部の区域のみの飛び地的なものであったと予想する。

引用・参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 「佐々木ノテウラ遺跡」
石川県立埋蔵文化財センター 1988 「佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ」
川畑 誠 1994 「石川県内の古代・中世の獨立柱建物の推移」第4回村落遺跡研究会資料
川畑 誠 1995 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報』6 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
北野博司 1995 「水場遺構S-X13の概要」「荒木田遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
木村健他 1995 「村落景観の史的研究」明治大学人科学研究所双書
坂井秀介 1996 「遺跡が語る開発と村の歴史—古代・中世を中心として—」『月刊文化財』396号
田村憲美 1990 「村落と開発」「日本村落史講座」2
新潟県教育委員会 1986 「一之口遺跡西地区」
橋口定志 1991 「中世居館研究の現状と問題点」「考古学と中世史研究」帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告書
北陸中世土器研究会 1993 「中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり」
山川 均 1995 「条里制と村落」「歴史評論」No.538
吉岡康暢 1976 「平安前期の地方政治と国分寺（上）—加賀国分寺をめぐる問題—」「金沢大学日本海城研究所報告」第8号

第2節 遺 物

第1項 古墳時代の土器

第5章第1節においては、当調査において出土した古墳時代の土器について見てきたのであるが、ここでは、とくに出土量の多かった土師器を中心に論を進めながら、当該時期の土器の編年的考察を行なっていくこととする。なお、第5章第1節では弥生時代後期後半～末の法仏式期・月影式期の土器も見てきたが、ここではそれらを除外しておく点を断っておく。

以下、第5章第1節で見てきた土師器の分類を行なってから、当調査で出土した土器の編年的位置付け等について述べていく。

土師器の分類

今回の調査で出土した当該期の土師器には、器種が分かるものでは、甕、壺、高杯、器台、瓶、小型土器、碗、手捏ね土器が出土している。以下、器種ごとに、大きく分類できるものについてはA・B・C…と大分類をし、さらに口縁部や口縁端部などの形態差等からの細分を行なっていくこととする。但し、ここで行なう分類は、今回の調査で出土した当該期の土師器を対象にしてはいるものの、残存部分が小さいことなどの理由からいざれに分類できるか分からないというものもあるため、第5章第1節で掲載したものの中には、以下の分類に当てはまらないものもあるという点を断っておきたい。

甕（第162図）

甕については、大きな分類として、くの字口縁甕、布留甕（C）、山陰系甕（D）、小甕（E）に分類でき、くの字口縁甕については、痕跡程度の小さな平底を持っていていわば最終段階に近い庄内系甕と認められるもの（A）と、それ以外の丸底のもの（ないしは丸底と想定されるもの）（B）に分類される。合計5つに大きく分けられる。

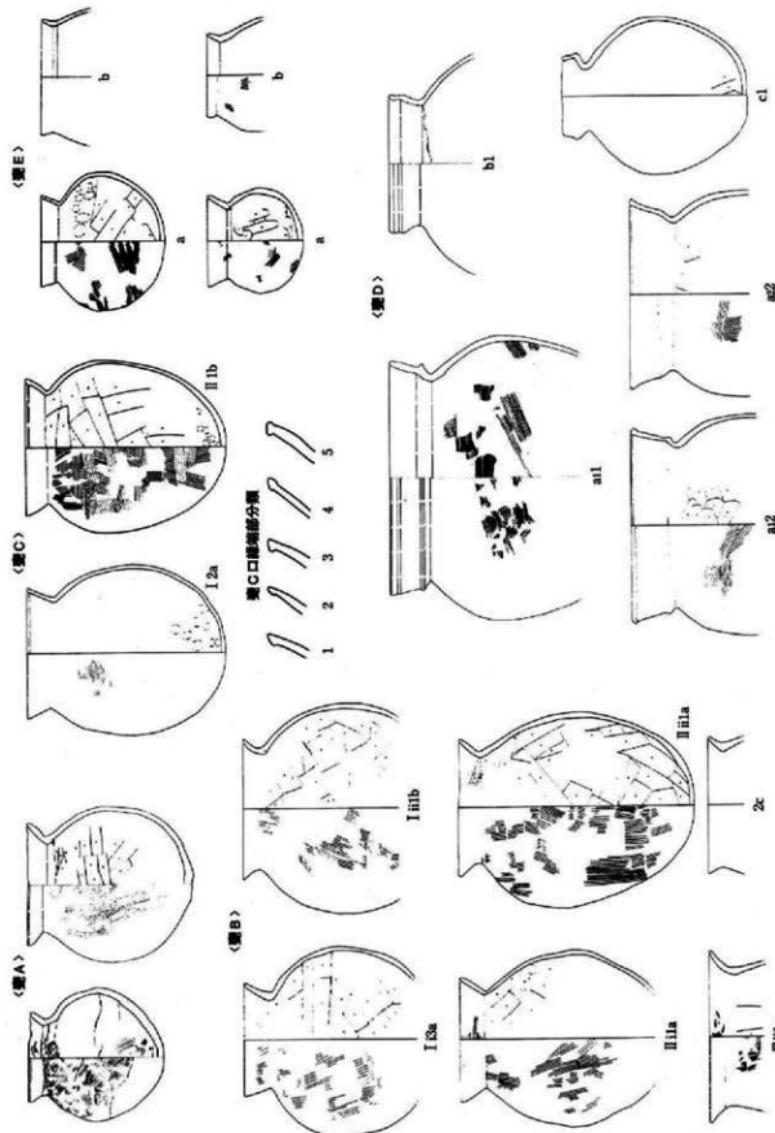
甕A

くの字口縁甕のAについては、1号土坑出土の2点（第76図139・140）がこれに当たり、24号土坑出土の258・259（第87図）（両者は同一個体か）もこれに分類される可能性がある。器面調整等によってさらに細分することができるかもしれないが、点数が少ないと細分することは避ける。

甕B

くの字口縁甕のBについては、実測できたもので70点ほどあり、体部のプロボーション、器面調整、口縁端部および口縁部の形態の違いからさらに細分される。体部のプロボーションについては、球胴のもの（I）、長胴気味のもの（II）、口径が体部最大径より大きく、いわば鉢形に近い形を呈するもの（III）に分けられ、器面調整では、調整が粗く、体部内面に接合痕が明瞭に見られたり、体部外面のハケ調整が粗いもの（i）、調整が比較的良くされており、体部内面の接合痕が見られない、ないしは概ね消されているもの（ii）に分けられる。口縁端部の形態については、丸くおさめるもの（1）、先細りするもの（2）、面をもつものの（3）、つまみ上げた形を呈するもの（4）に分けられ、口縁部の形態では、真っすぐ外傾して開くもの（a）、外反しながら開くもの（b）、断面が三角形に近い形を呈して短いもの（c）に分けられる。

第162图 榆木田组砾石土的分层剖面图



甕C

口縁端部が肥厚している丸底のくの字口縁の甕で、布留甕と呼ばれるものである。実測可能なもので50点あまりあり、器壁の厚さ、口縁端部および口縁部の形態差からさらに細分される。まず器壁の厚さについては、ごく普通に見られる厚さのもの（I）と比較的厚手のもの（II）との2つに分けられる。口縁端部の形態では、内側に肥厚して端部の面が平坦で内傾するもの（1）、内側に肥厚して端部の面が丸みをもって内傾するもの（2）、内側に肥厚して端部の面が平坦で水平なもの（3）、内外に肥厚して端部の面が平坦で内傾するもの（4）、内外に肥厚して端部の面が平坦で水平なもの（5）の5つに分けられる。口縁部の形態では、真っすぐ外傾して開くもの（a）と内湾しながら聞くもの（b）との2つに分けられる。なお器面調整については、肩部外面に施される横ハケの規則性の有無などが編年的な考察を行なう上で重要になってくるのであるが、器面の剥落によって調整の詳細が分からぬものが多くあるため、ここでは器面調整の分類は行なわない。

甕D

山陰系甕と呼ばれるもので、口縁部下端外面が突出している複合口縁を持つものである。実測できたもので13点あり、口縁部、口縁端部の形態から細分される。まず口縁部の形態については、口縁部が外反ないしは外傾するもの（a）、複合口縁が退化してしまっているもの（b）、口縁部が内屈するもの（c）の3つに分けられ、aの外反ないし外傾するものについては、口縁部下端外面の突出が明瞭で、口縁部下端内面の屈曲も明瞭なもの（a₁）と口縁部下端外面の突出が不明瞭で、口縁部下端内面の屈曲も不明瞭なもの（a₂）とに細分される。口縁端部については、丸くおさめるもの（1）と面をもつもの（2）との2つに分けられ、面をもつものについては端部の肥厚によってさらに細分されるようである。

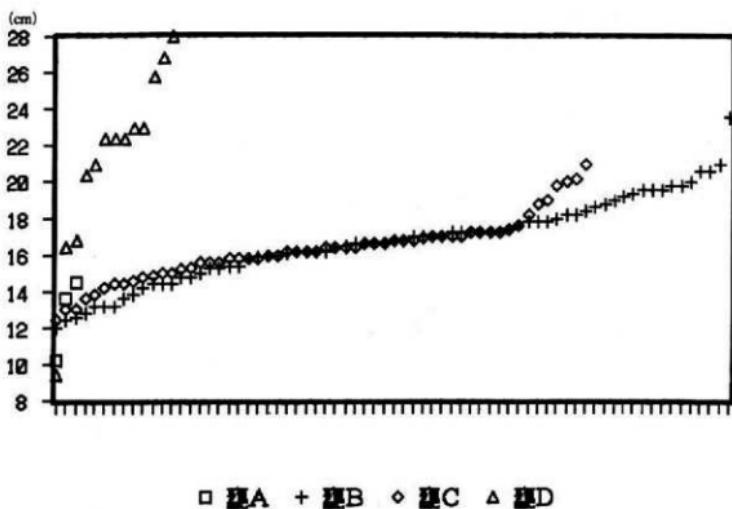
甕E

器高15cm以下の甕（ないしは器高15cm以下と想定されるもの）を小甕として分類した。口縁部と頸部の形態差から以下の2つに細分できる。まず1つは、頸部の屈曲が明瞭なくくの字口縁を持って、口縁部が比較的長めのもの（a）。もう1つは、頸部の屈曲が不明瞭なくくの字口縁を持ち、口縁部が比較的短いもの（b）である。

甕の法量分類（第163図）

甕Eとした小甕を除いた甕の法量について分類を行なってみる。甕の法量については、口径よりも器高によって分類したほうが容量を反映していると思われるが、器高が明確に分かるものが、甕Aでは3点、甕B3点、甕C3点、甕D1点と少なく、器高による分類ができなかった。そこで、参考までに、口径が分かるもの143点（甕A3点、甕B71点、甕C56点、甕D13点）を対象に、口径による分類を行なってみた。

第163図は甕A～Dの口径分布図である。縦軸は口径、横軸は口径の小さいものから順に個体を並べたことを示している。これを見ると、まず甕Aについては、10cmあたりのところで1点、14cmあたりのところで2点が分布している。甕Bについては、23cmあたりのところで1点が突出しているが、12cmから20cmを少し越えたところまでほとんど切れ目なく分布しており分類しづらくなっている。甕Cは、12cmのところから約18cmのところまでほとんど切れ目なく分布しているが、18cm以上から21cmあたりのところまで7点が散布しており、18cmあたりのところで分類できるものと思われる。甕Dについては、10cmあたりで1点、16cmあたりで2点、22cm～23cmあたりで5点が分布、さらに25cm以上で3点が分布しており、5つに分類することができる。なお、甕Dの10cmあたりの1点は、中型法量で口縁部が内屈するDcで、他の大型法量のものとは一線を画することは当然といえよう。



第163図 壺口径分布図

以上の点から、壺Bについては難しいのではあるが、壺A～Dをまとめた口径による分類を行なってみると、12cm未満 (α)、12cm以上18cm未満 (β)、18cm以上22cm未満 (γ)、22cm以上25cm未満 (δ)、25cm以上 (ϵ) の5つに分類できるものと思われる。

壺（第165図）

壺については、くの字口縁壺（A）、二重口縁壺（B）、東海系壺（C）、山陰系壺（D）の4つに大きく分類した。

壺A

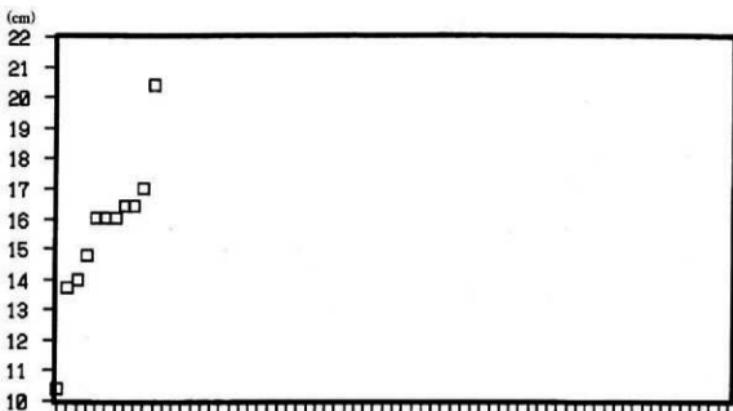
くの字状の口縁を持つ壺で、1号竪穴住居跡下層出土の2点（第66図3・4）、1号土坑出土のもの（第78図154）、遺構外出土のもの（第97図360）の4点が見られる。口縁部等の形態に差が認められ、形式差に及ぶ程の違いがあるとも思われるが、4点と点数が少なく、全形が分かるものがないため、これ以上細分することはしなかった。

壺B

ほぼ直立した頸部に強く外傾した二重口縁を持つ壺で、体部と頸部との境、頸部と口縁部との境、口縁部の段のところの3箇所で接合されている点で特徴がある。1号土坑出土の2点（第78図155・156）のみ認められるが、同じ1号土坑出土の157（第78図）は、この二重口縁壺の体部と想定される。

壺C

口縁端部が下方に拡張され、その拡張された部分の外面が加飾されているもので、東海系と呼ばれているものである。5号竪穴住居跡上層出土の1点（第72図109）のみが認められる。



第164図 壺D口径分布図

壺D

口縁部下端外面が突出している複合口縁をもつ壺で、山陰系壺と呼ばれるものである。実測できたもので11点あり、口縁部の違いから次のa～cに分類できる。aは、口縁部が外傾ないしは外反した複合口縁をなし、口縁端部に外傾する面をもつもの。bは、aの複合口縁がくずれたもので、口縁端部は丸みのある内傾する面を持ったり、つまみ上げたような形を呈する。cは、直立ぎみの口縁部を持つ複合口縁で、口縁端部は丸みのある内傾する面を持つものである。

壺の法量分類（第164図）

壺の法量についてあるが、壺A～Cは全形が分かるものではなく、点数が非常に少ないので、ここでは、壺A～Cを除外して、壺Dのみを対象に法量分類を行なうこととした。

壺Dの法量については、器高が分かるものが36号土坑出土の2点（第90図277・278）のみであったため、壺と同様、口径による分類を行なってみた（口径が分かる11点を対象）。第164図は壺Dの口径分布図で、縦軸・横軸は壺の場合と同様である。それを見ると、10cm～11cmのところで1点が分布し、13cm以上15cm以下のところで3点がまとまっている。また16cm以上17cm以下のところで6点が1つのまとまりを成しており、20cm以上で1点見られる。以上の点から口径によって4つに分類でき、11cm以下をα、13cm以上15cm以下をβ、16cm以上17cm以下のものをγ、20cm以上のものをδとする。

高杯（第165図）

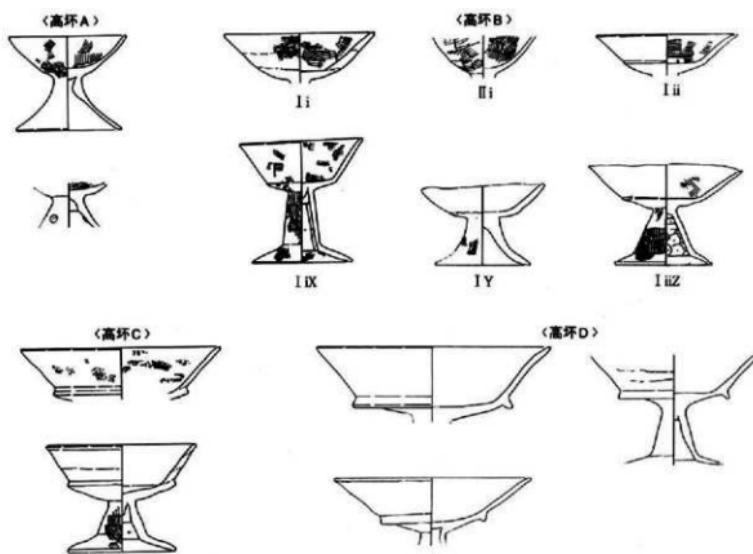
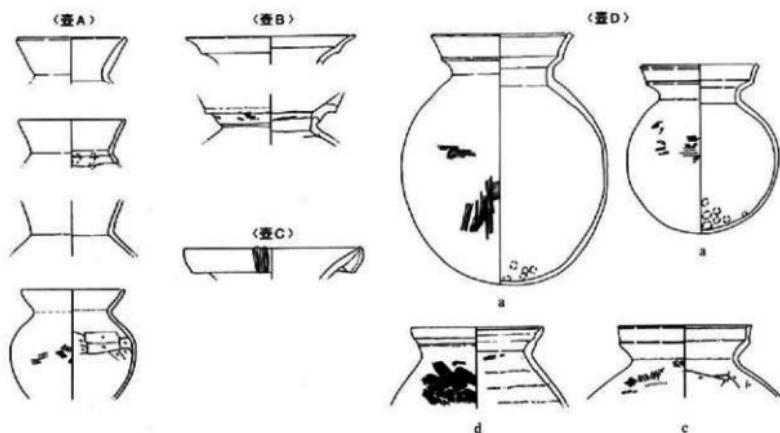
高杯については、大きな分類で以下のA～Dの4つに分類できる。

高杯A

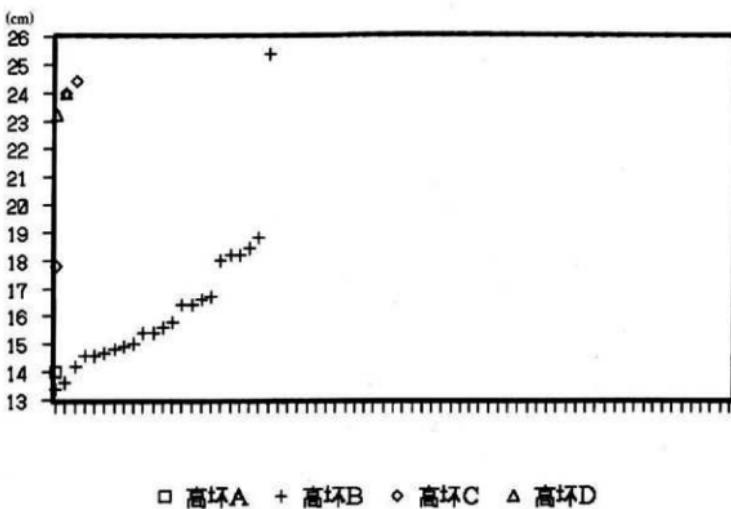
壺底部外面に小さな稜を持つ楕円形の壺部を持つもので、東海系高杯と呼ばれるものである。脚部については、ハの字状に下方に開くもので、穿孔の有無により形態上の差が見られるようである。

高杯B

平坦な壺底部から外上方に屈曲して口縁部に至る壺部を持つもので、畿内系（布留式）高杯と呼ばれるものである。67号土坑出土の304（第92図）は、楕円形の壺部であるが、壺底部と壺体部との境に接



第165図 荒木田遺跡出土土師器壺・高环分類図



第168図 高基口径分布図

合痕が見られ、作りがBと同じであり、これもBに含まれるものとする。よって、平坦な坏底部から外上方に屈曲するものをI、Bに含まれる楕形のものをIIとする。また坏部の器面調整については、器面が剥落しているものが多く、すべてが器面調整によって分類できるわけではないが、坏部が磨き調整主たるもの(i)と坏部にハケ調整痕を残すもの(ii)とに分類できる。なおB Iの坏部については、深い坏部と浅い坏部というような形態上の差からさらに細分できると思われたが、あいまいなものが多く、明確な分類が困難であったため、さらに細分することはしなかった。脚部については、筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至るものが一般的のようであるが、1号竪穴住居跡下層出土の8(第66図)のようにハの字状に下方に開く脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至るもの、5号竪穴住居跡下層出土の74(第71図)のように外反しながら下方にハの字状に開くものも見られる。よって、筒状の脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至るものをX、ハの字状に下方に開く脚柱部から外方に屈曲して脚裾部に至るものをY、外反しながらハの字状に下方に開くものをZとする。なおXについては、脚柱部の下方への開き具合、脚柱部の長さから細分できるように思えたが、坏部B Iと同じように、あいまいなものが多く、明確な分類が困難であったため、細分することはしなかった。

高杯C

平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る坏部であるが、屈曲部分の外面に稜が見られるものである。脚部については、高杯Bの脚部の分類で行なったXないしはYが付くようである。

高杯D

平坦な坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る坏部であるが、屈曲部分の外面に突帯が見られるものである。脚部については、高杯Bの脚部の分類で行なったXないしはYが付くようである。

高杯の法量分類（第166図）

高杯の法量については、口径の大小が高杯の全体的な大きさを反映しているようであるので、口径が分かるもの29点（高杯A 1点、高杯B 23点、高杯C 3点、高杯D 2点）を対象に、口径による分類を行なってみた。

第166図は高杯の口径分布図である。まず高杯Aは、対象としたものが1点だけであるが、14cmのところに分布する。高杯Bについては、13cm以上14cm未満で2点がまとまり、14cm以上16cm未満では、15cmあたりで若干切れ目が見られるが、さほど大きな開きではなく、この間で11点がまとまっているといえよう。そして、16cm以上17cm未満で4点、18cm以上19cm未満で5点がまとまっており、25cm以上のところで1点が突出している。高杯Cについては、17.8cmで1点、24cmあたりで2点分布、高杯Dの2点については、23cm以上24cm未満のところに分布している。

以上の点から、高杯A～Dをまとめて口径による分類を行なうと、14cm未満（*a*）、14cm以上16cm未満（*b*）、16cm以上17cm未満（*c*）、17cm以上19cm未満（*d*）、23cm以上（*e*）の5つに分類することができる。

器台（第167図）

今回の調査で、器台は、1号土坑から4点、遺構外から2点の計6点のみ出土している（5号竪穴住居跡下層出土の92（第71図）を器台としていたが、高杯の可能性もあるため、ここではそれを除外することとする。）。その6点のうち、全形が分かるものではなく、脚部が明確に分かるものについては1号土坑出土の1点（第79図168）のみである。そこで、受部のみによってa～cの3つに分類する。*a*は楕円形の受部を有する小型器台、*b*は直線的に開く受部で口縁端部がつまみ上げたような形をした小型器台、*c*は途中で上方へ屈曲する受部を持つ小型の器台である。

瓶

瓶については、今回の調査で、14号土坑から半完形に復元されるもの1点、遺構外から把手の部分1点が出土しているのみである。よって、分類は行なわず、瓶という器種があるだけに止めておく。

小型土器（第167図）

いわゆる小型丸底土器またはその系譜上にあるものではないかと思われるもの、ないしは口径10cm以下の小型のもので手捏ね土器以外のものを小型土器とした。以下のA～Eの5つに大きく分類する。

小型土器A

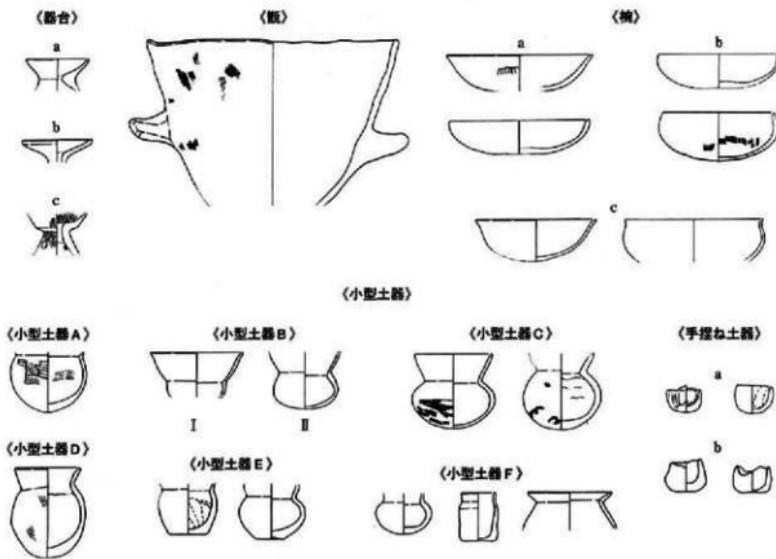
1号土坑出土の169（第79図）の壺形のもので、体部が倒卵形に近い形を呈し、底部はほとんど丸底であるが、痕跡程度の平底があり、自立する。口縁部については不明であるが、あまり長くはないようと思われる。次のBとされる小型丸底土器と同じ系譜上にあるのではないかとも思われたが、底部が明確に丸底を呈していない点から別に分類した。

小型土器B

小型丸底土器と呼ばれるものをBとする。36号土坑出土の3点（第90図279・280・281）がこれに当たり、以下のI・IIに細分できる。Iは頸部径が体部最大径を上回って頸部がくびれないもの。IIは頸部径が体部最大径を下回って頸部がくびれるものである。

小型土器C

比較的長い口縁部に、球形ないしはつぶれた球形の体部を持った壺形のもので、体部外面にハケ調整



第167図 荒木田遺跡出土土師器 器台・底・椀・小型土器・手捏ね土器分類図

の痕跡を残すもの。5号竪穴住居跡下層出土の3点（第72図93・94・95）がこれに当たる。

小型土器D

くの字状口縁を持ち、体部が長胴を呈する壺形のもので、底部は丸底。5号竪穴住居跡下層出土の96（第72図）の1点がこれにあたる。

小型土器E

底部が平底ないしは凹底で、体部は丸みを持つ壺形のもの。1号竪穴住居跡下層出土の11（第66図）と40号土坑出土の288（第91図）の2点がこれにあたるが、口縁部は詳細不明である。

小型土器F

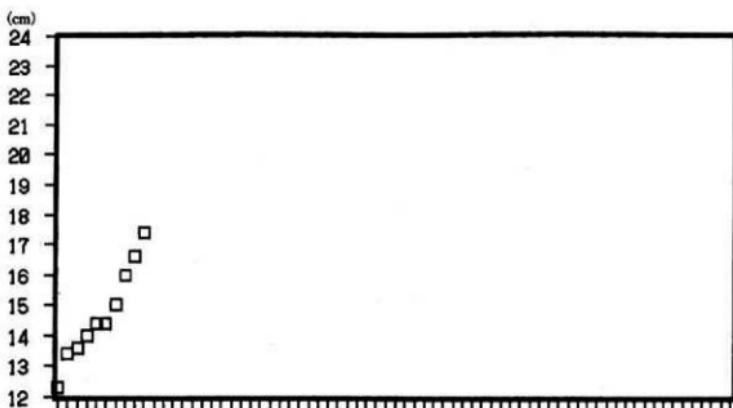
A～Eに当てはまらないものを一括してFとする。

椀（第167図）

椀については、合計11点出土しており、口縁部の違いからa～cの3つに分類する。aは口縁部が体部からそのまま外へ開くもの、bは口縁部が内湾して内へそばまるもの、cは口縁部が途中で外反して外へ開くものである。

椀の法量分類（第168図）

椀の法量についてであるが、口径が分かるもの10点を対象に、口径で分類を行なってみた。第168図は椀の口径分布図であるが、13cm未満のところで1点が分布し、13cm以上15cm以下で6点がまとまっている。そして、16cm以上に3点が存在する。以上により3つに分類することができ、13cm未満を α 、13cm以上15cm以下を β 、16cm以上を γ とする。



第168図 楕口径分布図

手捏ね土器（第167図）

手捏ね土器については、合計9点出土しており、遺構出土のものとしては、2号竪穴状遺構出土のもの（第75図138）と40号土坑出土のもの（第91図289）の2点のみで、他はすべて遺構外出土のものである。丸底のもの（a）、平底のもの（b）の2つに分類できる。

荒木田遺跡出土土器の縦年の位置付け（第169図～第172図）

今回の荒木田遺跡の調査で出土した当該時期の主要な土器は、時期的にはⅠ～Ⅵ期に分けられる。ただし、Ⅰ期の土器群は田嶋明人氏による塗町編年（田嶋1986）の7群土器、Ⅱ～Ⅴ期の土器群は10～14群土器に対比され、Ⅱ～Ⅵ期については連続性が認められるが、Ⅰ期とⅡ期との間には連続性がないという点を断っておく。以下、各期の土器の概要を述べていく。

荒木田Ⅰ期

1号土坑出土の土器群を主要資料とする。このⅠ期は遺構のまとめ（第6章第1節第1項）のところで述べられていたⅠ期に当たり、集落の出現期として位置付けられるものではなく、この段階の集落の縁がかかったと評価される。つまり、今回の調査で出土したⅠ期の土器は、当期の土器様相のすべてを表したものではないという点を断っておきたい。

壺では、いわば最終段階に近い庄内系壺の壺Aが存在している。布留壺の壺Cについては、1号土坑からは口縁部片のみが出土しており、壺CがⅠ期に存在しているのかは、はっきりとしない。山陰系の壺Dについては、大型法量（口径分類e）の1号土坑出土のもの（第77図144）がある。口縁端部は丸くおさめられ、口縁部下端の稜は大きく突出するものである。また同じく壺Dでは、中型法量（口径分類a）のDcも存在しており、Ⅱ期以降、壺Dは大型法量のみで占められるのとは一線を画する。

壺では、二重口縁の壺Bがあり、東海系の壺C（第170図編年図の19）は、5号竪穴住居跡上層出土であるが、当期のものであろう。Ⅱ期以降、主体となる山陰系の壺Dについては、確認されなかった。

高杯については、東海系の高杯Aが存在している。II～IV期に主体となる高杯Bは、1号土坑から环部片2点が出土しているが、相対的に浅い环部で、型式的に問題があり、混入品と考えるのが妥当と思われるため、高杯Bは確認されなかつたとしておきたい。

その他には、器台と小型土器Aが認められる。

以上の点から、I期については、今回の調査で出土した土器群が当期の土器様相のすべてを表したものではないと先述したが、畿内系（庄内系）、東海系・山陰系といった外來系の土器が混在しながら主体を占めていることは確実といえよう。また、布留甕や小型精製三点セット（小型丸底甕・小型有段鉢・小型器台）といった布留系の土器群はまだ確実には浸透していない段階である。田嶋明人氏による漆町編年の7群期に対比される。

荒木田Ⅱ期

5号豊穴住居跡内土坑および36号土坑の出土土器群が主要資料である。また23号土坑・67号土坑・76号土坑の出土土器もⅡ期に位置付けられる。

甕では、甕Cが主体であり、器壁が通常の厚さのC Iで占められる。口縁端部は内側に肥厚するもののみで、口縁端部の面については、ほとんどが平坦で内傾する1であるが、丸みをもって内傾する2、平坦で水平な3もわずかに認められる。器面調整については、器面の剥落で不明のものが多いが、分かるものについては、肩部外面の横方向のハケ調整に比較的規則性が認められるものが目立つ。また山陰系の甕Dについては、口縁部下端の稜が比較的明瞭なa1と不明瞭なa2が認められ、いずれも口縁端部は面を持つ。甕の法量については、甕Cはほとんどすべてが口径分類のβである。甕Dについては、明確に当期の甕Dといえるものが5号豊穴住居跡内土坑出土の2点のみであるのだが、いずれも口径分類のαとなる。つまり、甕Cで中型品を占め、甕Dで相対的な大型品を占めるかたちとなっている。

壺では、山陰系の壺D aで占められる。法量については、口径分類のβとγの2つが見られる。

高杯については、高杯Bで占められ、平坦な环底部のB Iが主体を成し、その他に橢形のB IIが1点見られる。器面調整はヘラ磨き主体の1であり、深みのある环部を有する。脚部はXが付き、比較的脚柱部が外に開かず高脚のものである。法量については、明確に当期のものと認められる高杯Bで口径が分かるものは3点しかないが、いずれも口径分類のβに当たる。なお、99号土坑と103号土坑からは、それぞれ1点ずつ当期に位置付けられそうな高杯Bが出土しているが、相対的に环部が浅く、脚柱部がやや低くなっている点から、Ⅲ期に位置付けられたとしても、やや新しい段階のものと思われる。

小型土器では、小型丸底土器のBが見られる。しかし、いわゆる小型三点セットというかたちでは確認されなかつた。

以上の点をまとめると、甕では中型法量の布留甕と相対的に大型法量の山陰系甕、壺では山陰系、高杯では畿内系（布留式）となっており、いわば畿内系（布留式）と山陰系という土器組成からなっている。また、小型丸底土器が見られるものの、小型三点セットというかたちでは確認できなく、布留式を代表する小型三点セットの衰退が見られると思われる。漆町編年の10群期に対比されるであろう。

荒木田Ⅲ期

III期の資料としては、比較的まとまった資料が少ないのであるが、26号土坑・35号土坑・71号土坑・108号土坑の出土土器が位置付けられる。

甕では、II期と同様、甕Cが主体を成しているが、器壁が厚手のC IIが新たに見られる。C IとC IIのいずれが主体を成しているかについては、資料数が比較的少ないためあまりはっきりしないのである

が、ややC Iのほうが多いようである。器面調整においては、器面の剥落しているものが多く、明確には言えないものもあるが、II期とは異なり、肩部外縫の横方向のハケ調整には規則性が見られないようである。口縫端部については、II期と同様、内側に肥厚して内傾する平坦な面を持つIが主体を占めているが、口縫端部が内外に肥厚している4・5もわずかに見られる。山陰系の壺Dについては、II期とあまり変わらず、a1・a2が存在している。また壺の法量については、II期と同様であり、中型法量の壺Cと相対的に大型法量の壺Dというかたちになっている。

壺については、当期のものは明確には認められなかったのであるが、V期までの流れで考えれば、山陰系の壺Dが存在しているものと思われる。

高杯では、II期と同様、B Iが主体を成すが、相対的に坏部が浅くなり、脚部は比較的低脚で、脚柱部がやや開いたものが目立ってくる。また、器面にハケ調整痕を残しているIIが見られてくる。

III期については、複数器種がまとめて出土した遺構が少なく、上記以外の器種についてはほとんど不明である。壺・壺・高杯については、II期と同様、畿内系（布留式）と山陰系との土器組成からなっており、土器組成の上では、II期とあまり変化していない。しかし、壺において器壁が厚手のC IIが新たに見られ、高杯では坏部が相対的に浅くなり、器面にハケ調整痕を残しているIIが新たに見られる点など、形態上の変化が見られ、その点でII期とは区別される。漆町編年11群期に対比される。

荒木田II期

1号竪穴住居跡下層および5号竪穴住居跡下層の出土土器群が主要資料として挙げられる。

壺においては、II・III期に主体を成していた壺Cに代わり、壺Bが出現して主体を成す。壺Bについては球胴のIと長胴気味のIIの2タイプが見られ、器面調整は粗めのIである。壺Cについては、III期で見られたC IIが残存しているが、出土量が急減しており、IV期を最後に壺Cは消滅する。山陰系の壺Dについては、5号竪穴住居跡下層より3点見られるが、いずれも口縫部下端の突出が不明瞭のa2である。壺Dの口径については、II・III期では β であったが、IV期においては β ないしは γ となり、やや小さくなっている。また、新たに小壺の壺Eが出現しており、E aが見られる。

壺については、くの字口縫の壺のみが明確に認められたが、III期と同様に、V期までの流れで考えれば、山陰系の壺Dが存在しているものと思われる。

高杯は、II期から主体を占めていたB Iが主体を占めている。しかし、器面調整において、II・III期ではヘラ磨き主体のIがほとんどであったが、IV期に至り、ハケ調整痕を残すIIが多く見られてくる。脚部はXが主体を占めているようであるが、Y・Zも見られる。また新たに高杯C・Dが出現する。高杯Dは、漆町編年で高杯I 2類に当たるもので、漆町編年12群ではI 2類は共伴するが明らかでないとされている（田嶋1986）。当期は漆町編年12群期に対比されるのであるが、当期に位置付けられる1号竪穴住居跡下層では、坏底部の屈曲部分の外面に、断面が三角形に近いが、稜ではなく、明らかに突帯といえるものが付いているもの（第66図9）が共伴しており、当期において高杯D（漆町編年12類）が共伴するものと考える。なお法量については、1号竪穴住居跡下層および5号竪穴住居跡下層出土の口径が分かる8点を対象に見てみると、口径分類で β のもの1点、 γ のもの1点が見られるが、 α 3点、 ϵ 3点とII・III期に比べて大型のものが多く、IV期に高杯は大型化の傾向を示している。

その他には、小型土器でC・D・Eが見られる。なお小型土器Cは、漆町編年において小型壺形土器Fに当たるもので、漆町編年12群に盛行し、その後の型式ではほとんど認められないとされている（田嶋1986）。今回の資料においても、漆町編年12群期に対比される当期に3点（5号竪穴住居跡下層出土）が見られるのみとなっており、IV期以外では認められなかった。

Ⅳ期については、壺では、Ⅱ・Ⅲ期に主体を成していた壺Cが残存するが、それに代わり壺Bが出現して主体を成し、高杯においては高杯C・Dが出現するなど、Ⅱ・Ⅲ期に見られた旧来の土器組成からの変化が見られる。また小壺の壺Eが出現し、壺の容量分化が見られ始めている点も特筆される。

荒木田Ⅴ期

2号土坑、14号土坑の出土土器群が主要資料であり、その他に2・3・4号竪穴住居跡、5号土坑、6号土坑からの出土土器も挙げられる。

壺では、壺Cが完全に消滅し、Ⅳ期で主体となった壺Bが主体を成す。壺Bの器面調整については比較的良くされたⅡとなる。山陰系の壺Dについては、複合口縁が退化したD bが認められる。小壺の壺Eは、Ⅳ期からのE aに加え、E bも認められる。

壺については、山陰系の壺Dのうち、複合口縁が退化したD bと口縁部が直立しているD cの2点が2号土坑より確認された。

高杯では、B・C・Dが認められるが、今回の資料を見たかぎりでは、Ⅳ期まで主体を成していた高杯Bよりも、高杯C・DのほうがⅤ期では多く見られるようである。法量については、明確にⅤ期にあって口径が分かるもの（第171図の編年図に掲載した5点）を対象に見てみると、口径分類のγ 1点、δ 2点、ε 2点となっており、Ⅳ期と同様、大型のものが目立つ。

その他については、この段階から瓶・榠・須恵器が確認される。榠は、定型化したものであり、今回の調査で出土したものすべてがこの段階に属する。須恵器はTK208型式のものが主体を占めており、TK216型式でないかと思われるもの1点（2号竪穴住居跡土坑（62号土坑）出土（第67図27））、TK23型式と思われるもの若干も含まれている。器種としては、明確に当期に位置付けられるものでは、壺蓋・壺身・壺が認められ、造構外出土遺物のTK208型式ないしはTK23型式のもので高杯蓋・小型碗も見られる。なお、手捏ね土器については、今回の調査で出土したほとんどすべては造構外からの出土であり、明確に編年上に位置付けできたものは2号竪穴状造構出土の1点のみであった。そのため、今回の資料からは手捏ね土器についてはほとんど不明である。

Ⅳ期は、Ⅴ期で新たに見られた土器組成を基本的にはそのまま受け継ぎ、その土器組成が定着・明確化した段階である。とくに、瓶・榠・須恵器が確認される点は「機能の転換をともなった形式の転換」（田嶋1995）を示すもので、いわゆる5世紀の画期に当たる。しかし、Ⅳ期と対比する漆町編年12群期（永町ガマノマガリ遺跡の報告では土師器3様式Ⅰ期）においては、榠については加賀では一般的ではないが（田嶋1987）、瓶・須恵器は共伴するものと考えられている（田嶋1986）。この点については、Ⅳ期（漆町編年12群期=土師器3様式Ⅰ期）において「機能の転換をともなう形式の転換」が始まったのであるが、まだ定着していない段階で、瓶・榠・須恵器が確認できず、Ⅴ期（漆町編年13群期=土師器3様式Ⅱ期）の段階に至り、Ⅳ期に始まった新たな土器組成が定着・明確化し、瓶・榠・須恵器が確実に認められるようになったと考えるのが妥当と思われる。小壺の出現に伴う壺の容量分化が見られ始める点は「機能の転換をともなう形式の転換」の1つを示すものであり（田嶋1995）、Ⅳ期ですでにその「形式の転換」が始まっていたと考えられる。なお、田嶋明人氏は永町ガマノマガリ遺跡の報告の中で、土師器3様式Ⅰ期（漆町編年12群期）は榠形土器など3様式（漆町編年12・13群期）を代表する器種が確認できない段階であるとされている（田嶋1987）。漆町編年13群期に対比される。

荒木田Ⅵ期

当期は、造構からの出土土器は認められず、当調査区における集落は終焉ないしは移動を迎てしま

っており、遺構外遺物の中に当該期の遺物が少量認められる程度となっている。

焼では、甕Bのうち、体部のプロボーションが鉢形に近い形を呈するBⅢが認められる。その他、BⅠ・BⅡの流れからのものや山陰系の甕Dからの流れのもの等が存在すると思われるが、遺構に伴う当期の資料がなく、其伴関係が分からぬという点もあって、今回の資料から見た場合、当期の土器様相は不明とせざるを得ない。また、壺・高杯等の他の土師器器種についても同様に不明である。なお、須恵器ではTK47型式の壺蓋・壺身が認められる。漆町編年14群期に対比されるであろう。

結語

荒木田Ⅰ期～Ⅵ期までの土器の概要を見てきたが、再度、各期のまとめを述べておく。

まずⅠ期は、漆町編年7群期に対比され、畿内系（庄内系）・東海系・山陰系といった外来系土器が混在しながら主体を占め、布留系の土器群はまだ確実に浸透していない。

Ⅱ期は、漆町編年10群期に対比され、畿内系（布留式）と山陰系という土器組成を成しているが、布留式を代表する小型三点セットの衰退が見られる。

Ⅲ期は、漆町編年11群期に対比され、Ⅱ期に見られた土器組成を受け継ぐが、形態上の変化によってⅡ期と区別される。

Ⅳ期は、漆町編年12群期に対比され、Ⅱ・Ⅲ期の旧来の土器組成から機能の転換を伴う新たな土器組成への変化が見られる。いわば新たな土器組成への変革期といえる。

Ⅴ期は、漆町編年13群期に対比され、Ⅳ期で見られ始めた新たな土器組成が定着し、明確化する。いわば新たな土器組成の完成期である。

Ⅵ期については、漆町編年の14群期に対比されるが、すでに当調査区における集落の終焉・移動を迎えており、今回の資料からは、土器様相を伺うことはできない。

以上のように荒木田Ⅰ期～Ⅵ期の各期をまとめることができるが、とくにⅢ期～Ⅵ期においては、Ⅱ・Ⅲ期では畿内系（布留式）と山陰系という土器組成を成し、Ⅳ期でⅡ・Ⅲ期の旧来の土器組成から機能の転換を伴う新たな土器組成への変革が行なわれ、Ⅴ期でⅣ期に始まった新たな土器組成への変革が完成するという流れが見られる。そして、機能を伴う新たな土器組成への変革は、弥生時代以来の土器推移を破る大変期に当たるとして5世紀の画期と呼ばれるものであるが、この画期を、田嶋明人氏の論考（田嶋1995）に従い、新たな土器組成への変革が始まったⅣ期（漆町編年12群期=土師器3様式Ⅰ期）に位置付けるものと考えたい。

さて最後に、機能の転換を伴う新たな土器組成が完成された段階の土師器3様式Ⅱ期（漆町編年13群期=荒木田Ⅵ期）における当遺跡の土器群と南加賀地域の他の集落遺跡の土器群との比較を、若干ではあるが、見ておきたい。

土師器3様式Ⅱ期に位置付けられる南加賀地域の主な資料としては、まず荒木田遺跡と同じく梯川流域に所在する漆町遺跡金屋・サンバンワリ地区157号土坑・同97号土坑出土土器が挙げられる（田嶋1986・1988）。また加賀市大型寺川流域の永町ガマノマガリ遺跡の11号土坑・16号土坑・その他遺構出土土器（田嶋1987）、さらに、基本的には土師器3様式Ⅰ期に位置付けられるが、3様式Ⅱ期に限りなく近い段階の資料とされているもので、小松市月津台地上に立地している念佛林南遺跡の27号住居跡および周辺土坑出土土器が挙げられる（望月1995）。

以上の他遺跡の資料と当遺跡のⅥ期の資料とを比較すると、まず当遺跡では須恵器の出土量が他に比べて多い。Ⅵ期の土器の概要で掲げた遺構からは必ず1点は須恵器片が出土しており、とくに2号土坑

からは环蓋と坏身が個体識別法で計9点出土している。そして、遺構外出土遺物まで換算すると、壺体部片を含めた個体識別法で計30点以上の出土量となる。とくに念仏林南遺跡では、基本的には土師器3様式Ⅰ期に位置付けられる資料ではあるが、1点も須恵器が出土していない点とは対照的である。

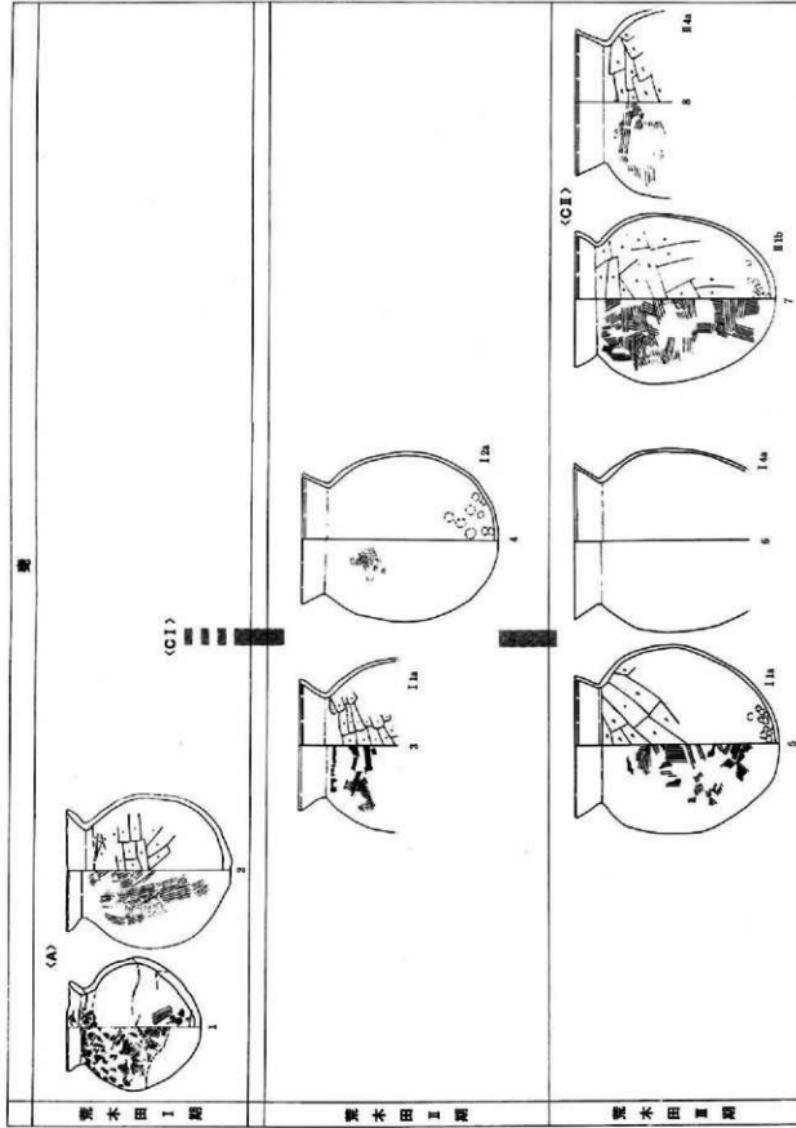
しかしその反面、土師質の埴形土器になると、当遺跡においては、遺構外出土においてすらも1点も見られず、上記の3遺跡とは対照的である。また手捏ね土器については、永町ガマノマガリ遺跡の報告では、土師器3様式Ⅱ期においては、手捏ね土器が多く、祭式土器かと推定される小型壺（本稿の分類で小型土器Cとされるもの）は手捏ね土器に置き換えられるとしており（田嶋1987）、漆町遺跡の報告では、13群（土師器3様式Ⅱ期）にはさわめて量が多くなり、13群を象徴する器種とされている。また念仏林南遺跡では、基本的には土師器3様式Ⅰ期に位置付けられるものの、27号住居跡からは手捏ね土器（報告ではミニチュア土器とされている）が個体識別法で6点出土している。これに対し、当遺跡においては、土師器3様式Ⅱ期に明確に位置付けられるものでは、2号竪穴状遺構からの1点のみであり、また遺構外出土のもので編年上位置付けが難しいものを含めても9点が確認される程度である。土師器3様式Ⅱ期に当集落の盛行期後半（本書第6章第1節第1項の遺構のまとめの4期にあたる）を迎えるわりには、手捏ね土器の量が少ない感がする。

以上のように、当遺跡のⅤ期の土器群と上記3遺跡の土師器3様式Ⅱ期の土器群とを比較すると、当遺跡の土器群は、須恵器の量の多さ、土師質の埴形土器の皆無、手捏ね土器の少なさという点に特徴が見られるようである。ただし、手捏ね土器の少なさについては、当遺跡の未調査箇所もあって、何らかの祭祀遺構に手捏ね土器が多量にまとまっている可能性も考えられる点から、今回の資料においては、手捏ね土器が少ない傾向にあったということで止めておきたい。しかし須恵器の量の多さは否めない。これは遺跡間の格差によるものなのかは判断としないが、当該期の須恵器の相対的な多さを考えれば、当遺跡を一般的な集落遺跡と位置付けることはできないであろう。

以上で当該期の土器の編年的考察を終わりとしたいが、弥生時代以来の土器推移を破る5世紀の西期を考察する上でせっかくの良好な資料を持ちながら、筆者の力不足によって、その資料を用いて先学の研究成果を確認した程度に止まった感は否めなく、筆者の最大限の力は出してはみたものの、今回の資料に正しい評価を与えていないところもあるかもしれない。厳しいご指摘、ご教示を賜れば幸いに存じる。また、筆者の要領の悪さから報告書作成の時間的余裕がなくなり、当該時期の土器の観察表と組成表を掲載することができなくなってしまった。お詫び申し上げたい。最後に今回の考察の作成に際してご協力していただいた方々に感謝申し上げる。

<引用・参考文献>

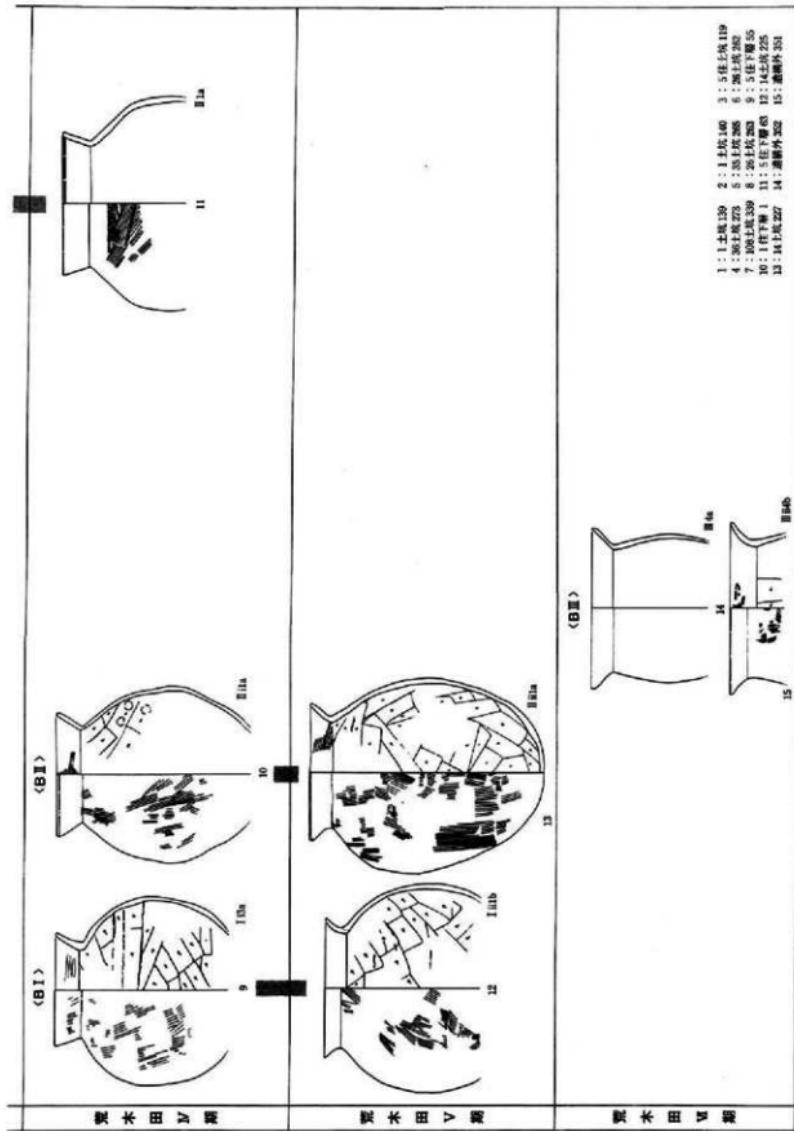
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1987 「遺構・遺物の検討」『永町ガマノマガリ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1988 「遺構・遺物」『漆町遺跡Ⅱ』 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1995 「土器と「古墳時代」」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
望月精司 1995 「古墳時代中期の遺構と遺物」『念仏林南遺跡Ⅱ』 小松市教育委員会



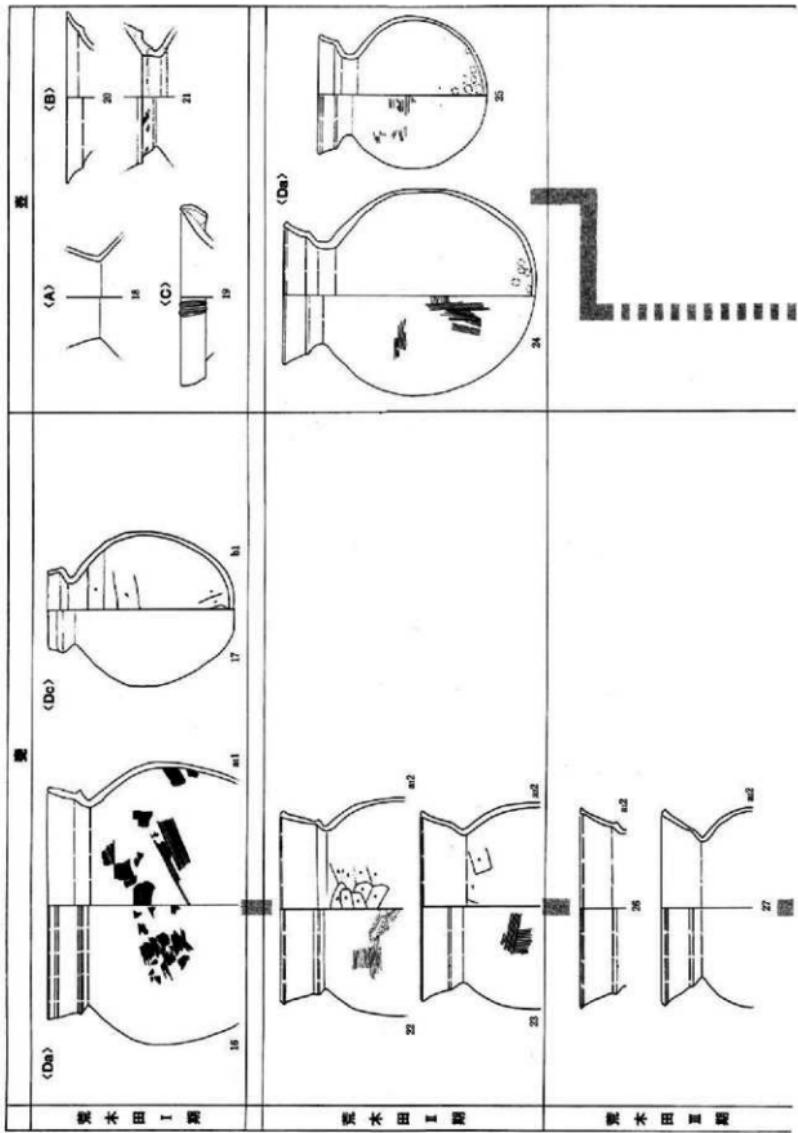
武木田工場

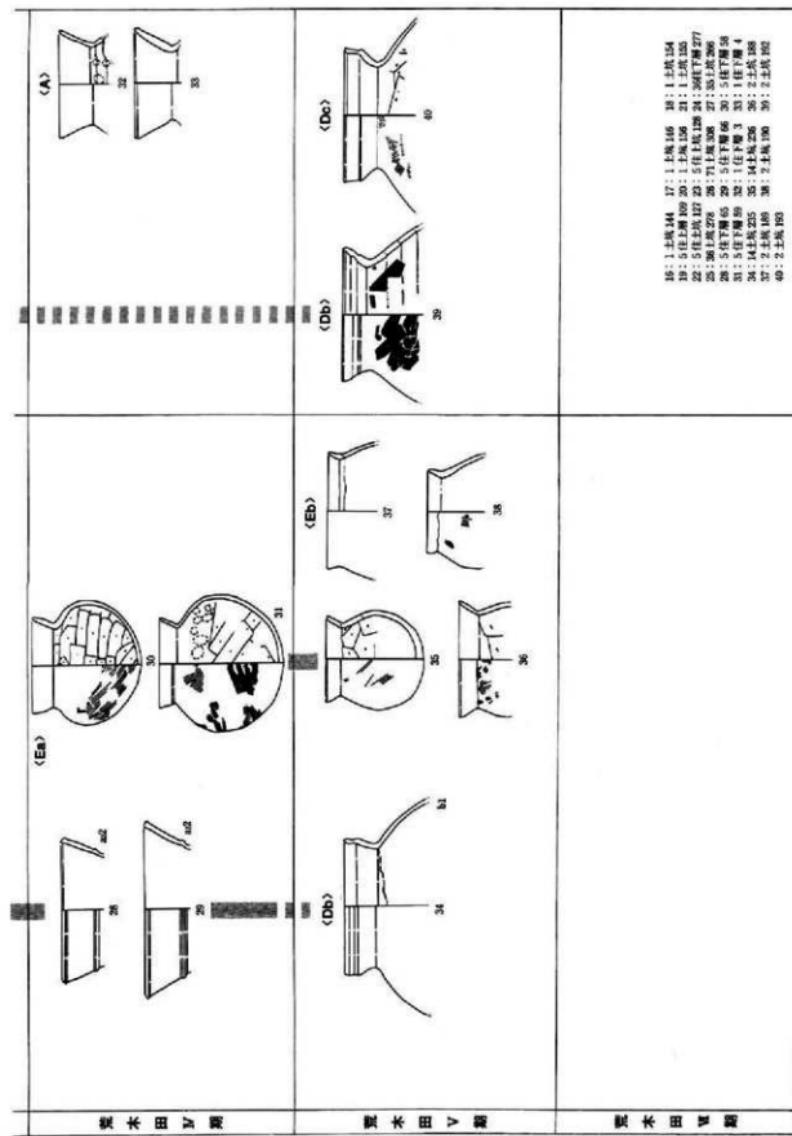
武木田工場

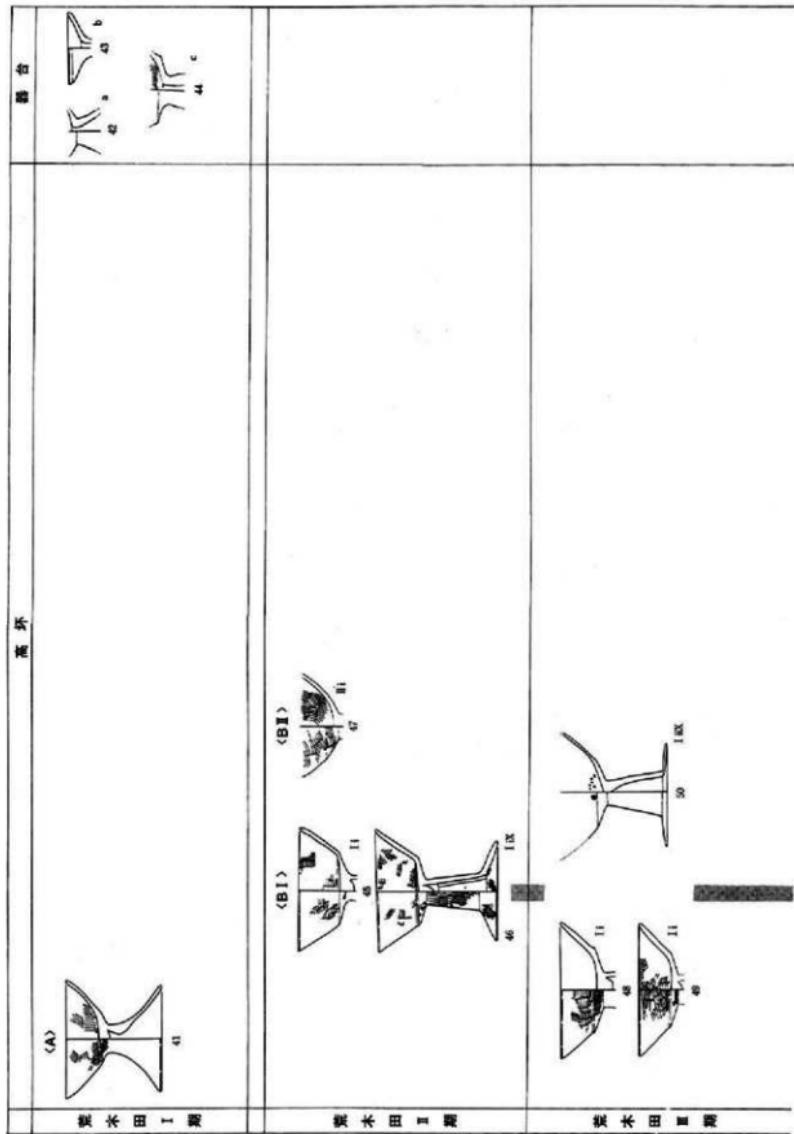
武木田工場



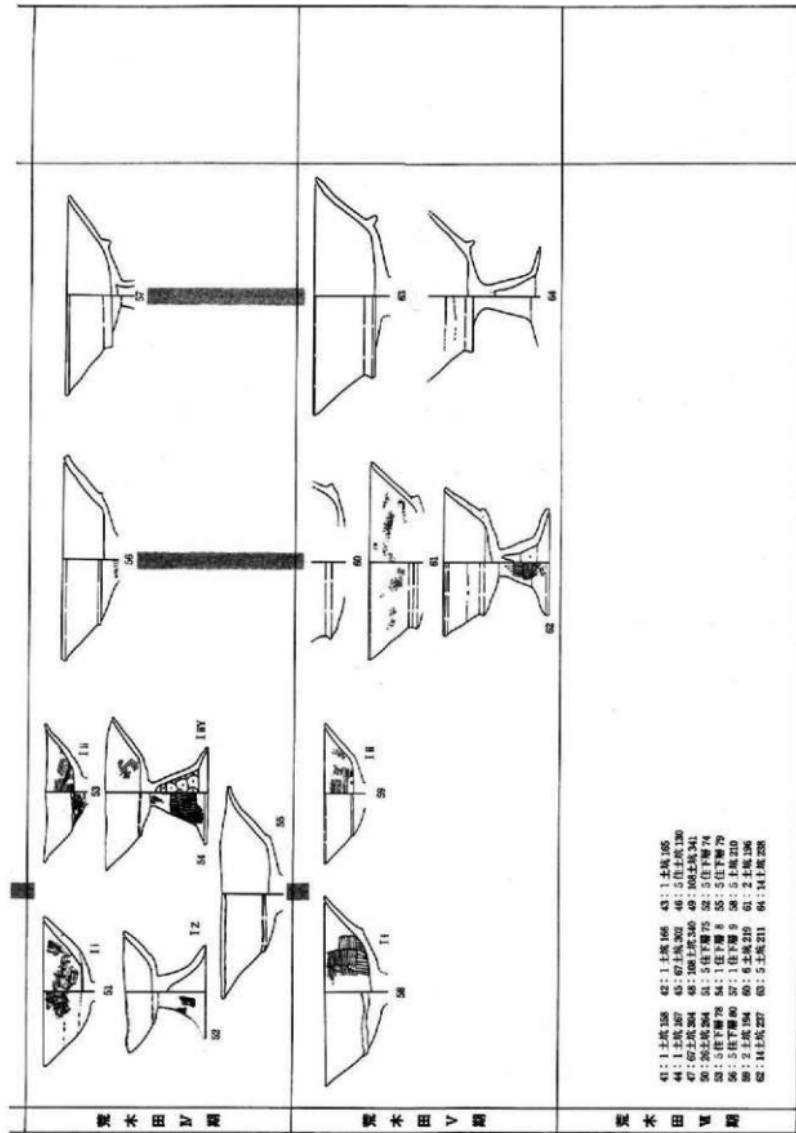
第169図 水田遺跡出土土器断面図(1) (S=1/6)

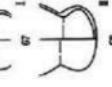


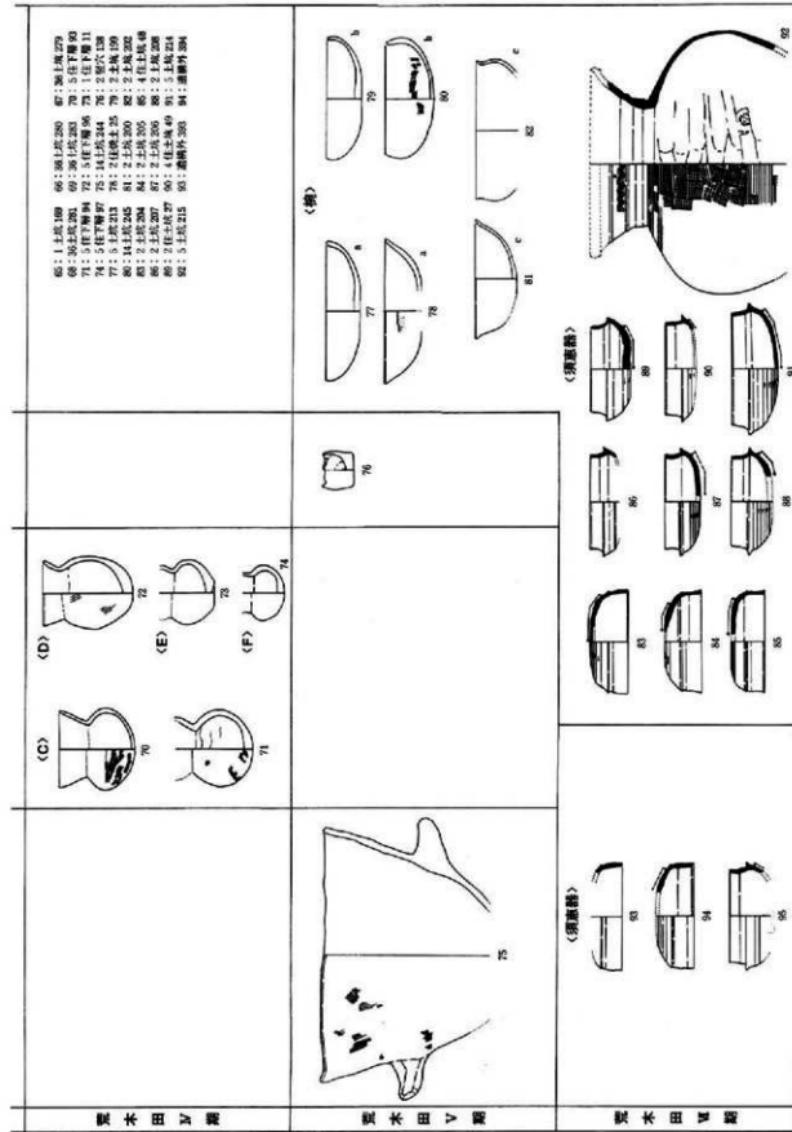




第171図 桑木田遺跡出土土器編年図(3) (S=1/6)



| 説 | 小型土器 | 手捏ね土器 | 板・須・束器 |
|------|---|---|---|
| 木田一輝 | (A) | (B) | (C) |
| |  |  |  |
| 木田三郎 | | | |



第172回 落木田遺跡出土器物年表(4) (S=1/6)

第2項 古代の土器様相

1. 荒木田遺跡出土土器の様相と性格

①器種構成について

全体の構成率 本文でも述べたが、須恵器食膳具と土師器食膳具、土師器煮炊具、須恵器貯蔵具（つき鉢や広口鉢などの調理具も含めた数）の構成比率は、85.1%、2.7%、3.5%、8.7%であり、食膳具が全体の9割近くを占める。食膳具の高さは土師器煮炊具の少なさと対応し、日常の炊飯用具が主体を占めない一般的な村落的様相ではない、特殊な性格を有する遺跡として位置付け可能なものである。しかし、造構の様相からは、それほど卓越した状況ではなく、一般的な規模の建物が密集する。土器の出土量自体が少なく、食膳具の量の多さということよりも、土器出土の少なさを特徴として上げるべきものなのかも知れない。当遺跡は、分布域が広く、今回の調査はその一部に過ぎないが、土器類を廃棄する場所が集約されてゆく時期であることから、そのような大量に土器廃棄される場所も遺跡内に存在し（石川県立埋蔵文化財センター調査の水場遺構からは大量の墨書き土器を含む土器群が集中廃棄されて出土している。石川埋文1995）、煮炊具も比較的まとめて使われて廃棄されることもあったと予想する。

須恵器食膳具の器種構成 構成比率を時期別に表に呈示しているが、これを見ると、Ⅱ3期～Ⅲ期は坏B蓋37.9%、坏B身37.9%、坏A24.2%で構成され、坏Bが蓋と身を1セットとすれば、坏Bが61%、坏Aが39%となる。坏B、坏Aともに1法量を基本とするが、坏Bの大法量が先駆け的に出現しているようである。

Ⅲ期～Ⅳ2古期は、盤A・盤B・高盤が組成に加わり、少ないながらも一定量存在する。器種の主体は坏Bから坏Aへ代わり、坏Aが全体の41.8%（坏Bセット換算では52.3%）を占める。坏Bは蓋と身でだいぶ偏りがあるが、坏B身換算では34%程度と立場が逆転する。坏Bは確実に法量分化し、主に大・中・小の3法量となる。Ⅲ期～Ⅳ期の中法量は漸時小型化し、Ⅳ1期以降は、偏平器形に加えて深身器形も存在し、後者が主体となってゆく。大と小は金属器的な器形を一部導入した優品として出現するが、Ⅳ1期以降は在地の中で還元され、一つの器種として定着する。蓋も身と同様の様相を呈し、Ⅳ1期を前後する時期に以前のタイプから新タイプへと徐々に転換していく。

Ⅳ2新期～Ⅴ2期も、坏A主、坏B從であることには変化はないが、どちらもやや減少し、その分、盤

| 時期＼器種名 | 坏B蓋 | 坏B身 | 坏A | 盤A | 盤B | 高盤 | 新型塊組 | 計 |
|---------------------|------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-------------------------|
| Ⅱ3期～Ⅲ期 (A/B/C) | 39(37.9) (53/32/15) | 39(37.9) (47/42/11) | 25(24.2) (50/50/0) | 0 | 0 | 0 | 0 | 103(3.6) (50/40/10) |
| Ⅲ期～Ⅳ2古期 (A/B/C) | 263(20.0) (62/38/0) | 357(27.1) (63/37/0) | 550(41.8) (58/42/0) | 62(4.7) (73/27/0) | 54(4.1) (67/33/0) | 29(2.2) (79/21/0) | 0 | 1315(46.5) (62/38/0) |
| Ⅳ2新期～Ⅴ2期 (A/B/C) | 245(18.8) (63/37/0) | 332(25.5) (56/44/0) | 527(40.4) (51/49/0) | 163(12.5) (63/37/0) | 35(2.7) (57/43/0) | 1(0.1) (100/0/0) | 0 | 1303(46.1) (56/44/0) |
| Ⅵ1期～Ⅶ3期 (A/B/C) | 0 | 0 | 81(7.9) (52/48/0) | 0 | 0 | 0 | 23(22.1) (96/4/0) | 104(3.7) (62/38/0) |
| 計 (A/B/C) | 547(19.3) (62/37/1) | 728(25.8) (59/40/1) | 1183(41.9) (55/45/0) | 225(7.9) (66/34/0) | 89(3.2) (63/37/0) | 30(1.1) (66/20/0) | 23(0.8) (56/4/0) | 2825 (59/40/1) |

第17表 須恵器食膳具の時期別器種構成と胎土構成
(左上提示数値は個体識別数、右上括弧は時期別器種構成率、下括弧は須恵器胎土構成率)

Aの量が増加し、12.5%（坏Bセット換算で15.4%）となる。盤B・高盤は減少傾向にあり、特に高盤は皆無に等しい。坏B法量は中と小の区別がつきにくくなり、融合する形で大・小の2法量に淘汰される。それとともに、主体は大法量となり、小は徐々に減少していく。

Ⅳ期以降は、量が少なく、盤Aを抽出しきれないことから、構成率として提示しにくい。ただ、坏Aが主体となりうることと新型の底部糸切りの埴皿器種が定量存在することが特徴と言える。

土師器食膳具の構成 赤彩土師器はⅡ期以降確認されており、V2期頃までは存続するが、その頃には内黒土師器が併存するかもしれない。赤彩土師器の主体は器形や器種などから見て、Ⅲ・Ⅳ期であり、V期にはかなり少くなると予想する。Ⅵ期以降、内黒土師器が定量存在するが、この時期以降の土器自体が少なく、無垢土師器も含め、出土量は少ない。

赤彩土師器については、塊が77.9%、坏Bが11.8%（個体数の多い坏B身で換算）、盤Bが4.4%、盤Aが1.5%、高盤が4.4%存在する。塊の過半数は当然であるが、坏Bや盤類・高盤が少ないながらも、定量存在することは評価されるものである。

須恵器貯蔵具 須恵器貯蔵具は鉢類の調理具、壺・瓶類の中型貯蔵具、甕類の大型貯蔵具に分けると、11.5%、51.0%、37.5%で構成される。鉢類はつき鉢が目立つ器種であり、時期的にもⅡ期～V期頃と比較的長期にわたって確認され、定量使用された器種と言える。壺瓶類と甕の比率については、窯によっても差があり、なんとも言い難いが、Ⅳ期の二ッ梨横川1号窯での甕比率8割前後やⅢ期頃の矢田野向山1号窯の5割程度と比べると、確実に壺瓶類の割合が高い傾向をもつ。ただ、V期以降の窯では、新型壺瓶類出現によって、増産傾向が見られ、甕の比率が確実に低下するようであり、当遺跡の資料が時期的に新しい段階のものも含むため、そのような様相を反映している可能性が高いとも言える。が、図示したものや破片ではⅣ期以前に主体があると見え、比較的ランクの上の遺跡ではこのような壺瓶類の出土が多く、高い比率をもつ傾向があることを考えれば、当資料の壺瓶の高率もこのような様相を反映したものではないかと考えられよう。また、壺瓶類の中で、長頭瓶や短頭瓶など有台瓶と直口壺や双耳瓶など平底瓶を分けて提示しているが、前者が7割半を占める状況は、後者がV期以降に増加して行く器種であることとも関連し、貯蔵具については比較的古手の様相を残す傾向が見られる。これは食膳具類に比べて長期使用が可能であることに起因するものと思われ、土器組成においてもその点を念頭においておく必要があろう。

土師器煮炊具 包含層でほどんど拾い上げることができなかつたため、やや率としては偏りがあるかもしないが、やはり長胴甕が58.8%と主体的に存在する。小型甕も23.7%と定量存在し、鍋は10.3%、瓶も少ないながら確認されている。比較的長胴甕が多く、小型甕が少ない傾向にあるが、これは小型甕がV期以降に増加して行く器種であるためであり、長胴甕が主体となるのは当然と言えよう。

②胎土構成と土器の供給形態について

胎土については、観察表において分類しているため、それを参照願いたいが、おおまかに産地分類を行うと、須恵器ではA類が南加賀窯産、B類が能美窯産、C類が能美窯産か南加賀窯産の南群、D類が高松押水窯産、E類が木窯産の5つに、土師器ではa類が能美窯産系（地元産の可能性もあり）、b類が南加賀窯産、c類が能美窯産系の亞種、d類が南加賀窯周辺新型系産地、e類が北部新型系産地、f類が地元古参系、g類が北加賀（金沢）系産地の7つに分けられる。この分類を基準として算出した胎土構成表に基づいて、以下に須恵器と土師器の供給形態について述べる。

a. 須恵器の胎土構成と供給形態

須恵器全体での胎土構成は、A類53.5%、B類39.0%、C類0.9%、D類0.2%、E類0.1%で、A類とB

| 胎土・器種 | つき鉢 | 広口鉢 | 小型壺 | 有台壺瓶 | 平底壺瓶 | 横瓶 | 中型壺 | 大型壺 | 計 |
|-------|----------|----------|---------|----------|----------|---------|----------|----------|-----------|
| A類 | 13(65.0) | 11(84.0) | 7(58.3) | 57(60.6) | 24(75.0) | 7(77.8) | 57(69.5) | 19(73.1) | 195(67.7) |
| B類 | 7(35.0) | 2(15.4) | 4(33.3) | 33(35.1) | 6(18.7) | 2(22.2) | 23(28.0) | 7(26.9) | 84(29.2) |
| D類 | 0 | 0 | 1(8.3) | 4(4.3) | 0 | 0 | 2(2.4) | 0 | 7(2.4) |
| E類 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2(6.2) | 0 | 0 | 0 | 2(0.7) |
| 計 | 20(6.9) | 13(4.5) | 12(4.2) | 94(32.6) | 32(11.1) | 9(3.1) | 82(28.5) | 26(9.0) | 288 |

第18表 須恵器貯蔵具の器種構成と胎土構成
(数値は器種別個数、右括弧は器種ごとの胎土構成率、但し、下段計の括弧は全体での器種構成率)

類でほぼ構成されるとえ、C類も在地窯産であるから、0.3%を除くものは南加賀窯能美窯で生産されたことになる。D類とE類は高松押水窯産、末窯産であるが、貯蔵具の特に瓶類において存在し、高松押水窯は一部中型壺でも認められる。北加賀特に金沢周辺を中心に供給圈をもつ両窯の須恵器が、手取川を越えて南加賀へ供給されることには異例であるが、特に、末窯の存在はこれまで小松市域の消費地では確認されなかったものであり、注目される。瓶類を主とした供給であり、特殊容器として供給された可能性もあるが、内容物の流通に伴う容器として持ち込まれた可能性や、人に伴って持ち込まれた可能性の方が高いと考える。また、金沢産と思われる内黒土師器塊が1点ではあるが、出土していることも注目される。

在地産須恵器の供給について、まず、器種別では、貯蔵具でA類に僅かに偏在性があるが、全体的に突出した感じではなく、平底壺と広口鉢、新型壺皿類にA類が目立つこととB類が全時期を通じてB類高めに推移する傾向を提示できる。前者はいずれもV-VI期以降に定型・増産される器種であり、この時期に衰退へと向かう能美窯を示唆するものである。また、後者は能美窯全盛期の主体的器種を示すものであろう。

次に、食膳具のみではあるが、A類とB類の時期別構成表を見ると、IIa期～III期は、A類50%、B類40%、C類10%で構成されている。器種別ではC類がB類のみで見られ、B類はA・B類同率で存在している。南加賀窯の南群の生産は、この時期をもって終焉の様相を呈すが、それは次期以降、C類が確認されない状況と対応しており、また、B類の多さもC類との誤認による可能性をもつ。III期～IV2古期はA類62%、B類38%で、A類が増加。IV2新期～V2期ではB類がA類に拮抗する程度まで増加し、A類56%、B類44%となる。全時期を通じてA類が主、B類が従の関係にあることは変わりないが、IV2新期～V2期のB類増加は、能美窯の生産増加（全盛）に伴うものであろう。当遺跡出土能美窯産須恵器の40%前後の率は、梯川流域に存在する古代の集落遺跡の中でも、比較的高い率と言えるが（松梨遺跡IV2古期～V1期資料では南加賀窯6割半、能美窯3割半）、能美窯と南加賀窯との距離を比較すれば（前者が1km強の目の前の山に窯場があるのに対し、後者は10km近くも離れた窯場）、逆に能美窯産が主体を占めて不自然ではない位置にある。これは、南加賀窯と能美窯の生産規模の違いによる事も確かであるが、だからといって、南加賀窯から4～5kmに立地する念佛林南遺跡（I1期）でも能美窯産須恵器が17%入っており、単なる生産地から消費地までの距離や交通に起因するものではないことを示す。窯場に近接すれば、そこからの直接的な供給も確実にあったであろうが、遠隔地にある窯場からの供給が常に定量行われている状況は、窯場と消費地との直接的な供給形態が主体的でなかったことを示すものであろう。消費地における常に寄せ集め的土器様相は、生産地からの中間に、共同の場、例えば市などの存在を示唆するものと評価し、一部管理下におかれる官的施設や寺院などへの直接的供給（生産者と消費者が直接的流通経路をもつ）は別として、一般的消費地への須恵器供給は、案外、市場経済的

様相を呈していたと考える。

b. 土師器の胎土構成と供給形態

土師器全体での胎土は、a類59.1%、b類24.7%、c類6.5%、d類8.1%、f類1.1%、g類0.5%で構成されるが、このうち、d類・e類はⅣ期以降出現してくる胎土であるため、除外して考え、また、f類は古墳時代後期に主体的に見られる古い土師器胎土であることを考えれば（f類胎土をもつ器種は煮炊具に限られるが、いずれも刷毛調整をもつ長胴壺や鍋類で、Ⅱ・Ⅲ期にのみ見られる。これ以後は所謂「北陸型煮炊具」に転換しているが、同時に土師器煮炊具の胎土もa・b類系統に転換している）、Ⅲ期頃からⅥ期頃までの古代の土師器の胎土は、a類、b類、c類となる。3つの胎土の構成率は、a類65.5%、b類27.4%、c類7.1%であるが、さらに、a類とc類が類似した系統の胎土であることから、能美窯系胎土が7割強、南加賀窯系胎土が3割弱となる。この能美窯系であるが、表にも記したように、素地としては共通する点をもつものの、石英系細砂粒が含まれる点で、須恵器胎土とは異なっており、地元産である可能性ももつ。ただ、荒木田遺跡周辺の採取した粘土には砂の混入が多く、比較できるものか判らないが、地元産の可能性は低いと思え、地元産が7割強という占有率をもつことも疑問であるし、やはり能美窯産と考えるのが妥当だろう。

| 胎土\器種 | 赤堀A | 赤堀B蓋 | 赤堀B身 | 赤盤B | 赤盤A | 赤高盤 | 内黒堀B | 無堀A | 計 |
|-------|----------|---------|---------|---------|--------|---------|---------|----------|----------|
| a類 | 32(60.4) | 4(80.0) | 2(25.0) | 1(33.3) | 0 | 2(66.7) | 0 | 0 | 41(46.1) |
| b類 | 13(24.5) | 1(20.0) | 5(62.5) | 2(66.7) | 1(100) | 1(33.3) | 0 | 0 | 23(25.8) |
| c類 | 8(15.1) | 0 | 1(12.5) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 9(10.1) |
| d類 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4(80.0) | 11(100) | 15(16.9) |
| g類 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1(20.0) | 0 | 1(1.1) |
| 計 | 53(59.6) | 5(5.6) | 8(9.0) | 3(3.4) | 1(1.1) | 3(3.4) | 5(5.6) | 11(12.3) | 89 |

第19表 土師器食膳具の器種別構成と胎土構成
(数値は識別個体数、右括弧は器種ごとの胎土構成、但し、下段計の括弧は全体での器種構成率)

能美窯系胎土と南加賀窯系胎土の構成比率

について、食膳具と煮炊具とでは若干異なって構成されている。つまり、食膳具では能美系68.5%、南加賀系31.5%に対し、煮炊具では能美系75.8%、南加賀系24.2%と、食膳具での南加賀窯の率が高くなり、それは環Bや盤類での南加賀窯主体の様相と繋がっている。しかし、食膳具の主体となる壺Aは75%が能美系であり、能美系胎土が過半数を占める状況には変わりはない。この胎土構成は、能美窯の土師器生産の高

さを物語るものと言え、特にこの時期の能美窯における土師器生産の隆盛を想定したい。ただ、これは須恵器同様の供給形態の中で考えられるものであり、仮に、須恵器とは異なる供給形態が土師器にあつたとすれば、別の考え方もある。須恵器のところでも述べたが、当遺跡と能美窯との距離関係や交通の利便性は、南加賀窯と比べるまでもなく、直接的に供給されているなら、能美窯主体であるのが当然である。須恵器とは異なる供給形態、つまり、生産地からの直接的供給を受ければ、この数値は決し

第20表 土師器煮炊具の器種別構成と胎土構成
(数値は識別個体数、右括弧は器種別胎土率、下段計括弧は器種構成率)

| 胎土\器種 | 小型壺 | 長胴壺 | 鍋 | 瓶 | 計 |
|-------|----------|----------|----------|---------|----------|
| a類 | 17(73.4) | 42(73.7) | 7(70.0) | 3(42.9) | 69(71.1) |
| b類 | 5(21.7) | 14(24.6) | 1(10.0) | 3(42.9) | 23(23.7) |
| c類 | 0 | 1(1.7) | 1(10.0) | 1(14.3) | 3(3.1) |
| f類 | 1(4.3) | 0 | 1(10.0) | 0 | 2(2.1) |
| 計 | 23(23.7) | 57(58.8) | 10(10.3) | 7(7.2) | 97 |

て高いものではなく、南加賀窯は須恵器と同様の供給経路で入ったものであると考え、能美窯は直接的な供給経路で入ってきたものとも考えることも可能である。筆者は、基本的に後者の考えに立たないが、今後資料検討して行くうえでの視点となるものと言えよう。

③須恵器食膳具の摩耗痕について

食膳具をはじめとして土器には使用に伴う痕跡が多く、特に食膳具では摩耗痕として、煮炊具ではススやコゲの付着として現れている。煮炊具の使用痕は資料も少なく、ここで述べる材料がないが、今回の資料で主体を占める食膳具の特に須恵器について、内面摩耗痕から、使用の実態について考えてみたい。

以下の表に須恵器食膳具の内面摩耗痕をA～Dの4段階に分けて、器種別、時期別に提示してある。Aランクは内面が底部ないしは天井部全体にツルツルした摩耗を確認できるもので、この中には墨の付着するものも含まれている。Bランクは内面底部・天井部の平坦面中心に摩耗が確認できるもので、Aほど顕著でないが、摩耗を確実に確認できるものである。Cランクは一部突出した部分で摩耗が確認されたり、極めて軽度の摩耗が見られるもの、Dランクは摩耗痕の確認されないものである。以上の摩耗痕ランクは、以前松井遺跡の古代須恵器食膳具で行ったものと同様であり、基本的に同じ基準で観察を行ったつもりである。この表から見ると、やはりAランクに入るものは少なく、全体の7%、転用鏡に使った盤Aと壺B蓋、つまり打ち欠いて転用した132の壺B蓋（転用鏡の可能性が高い）、それと本文でも述べた33号土坑の体部打ち欠きの壺B身底部転用で、これだけ摩耗する使用は転用鏡以外は極稀のようである。摩耗というよりも擦り減りといった感じである。Bランクになると29%に増加する。軽度の摩耗については、個体によって摩耗痕の確認しやすいものとそうでないものとがあり、確実なBランクとは別に取り扱うべきもので、Dについても全く使用しなかった訳ではないであろうから、BとDの中間的な使用頻度にあると考える。よって、ここでは中間的なCを除外し、B（Aも参考として含める）とDの比較を行うことで使用頻度の傾向を出してみよう。

まず、時期別ではⅡ₃～Ⅲ期がB23%に対し、D45%であるが、ここではAが23%もあり、かなり高い頻度の使用が想定される。Ⅲ～Ⅳ₂古期はB33%、D36%とここでも使用頻度は高いと言えるが、Aランク僅少はやや低下傾向か。Ⅳ₂新～Ⅴ₂期はBが26%、Dが57%と確実に低下し、その傾向は特に壺Aで顕著である。これは、時期が新しくなるにつれ、食膳具1個あたりの使用頻度（回数）が減少したとも捉えられるが、これは器種によって異なるものであり、一概には言えない。ただ、Ⅳ₁期以降、須恵器食膳具の生産量が増加し、消費地で大量に消費される傾向はあり、1個あたりの使用頻度が低下したとしてもおかしくない状況にはある。

| 摩耗\器種 | 壺B蓋 | 壺B身 | 壺A | 盤A | 盤B | 合計 |
|-------|----------------|-----------------|-----------------|---------------|---------------|-------------------|
| Aランク | 2(±1,b:1,c:0) | 5(±4,b:1,c:0) | 2(±0,b:0,c:2) | 2(±0,b:0,c:2) | 0(±0,b:0,c:0) | 11(±5,b:2,c:4) |
| Bランク | 6(±1,b:3,c:2) | 16(±3,b:9,c:4) | 9(±0,b:6,c:3) | 8(±0,b:4,c:4) | 4(±0,b:3,c:1) | 43(±4,b:25,c:14) |
| Cランク | 11(±2,b:7,c:2) | 10(±1,b:8,c:1) | 4(±0,b:2,c:2) | 0(±0,b:0,c:0) | 4(±0,b:4,c:0) | 29(±3,b:21,c:5) |
| Dランク | 21(±5,b:7,c:9) | 20(±3,b:12,c:5) | 19(±2,b:6,c:11) | 7(±0,b:2,c:5) | 0(±0,b:0,c:0) | 67(±10,b:27,c:30) |

第21表 須恵器食膳具の内面摩耗痕頻度（数値は実測図を掲載した全ての個体数で換算）
〔・摩耗ランクはA—顕著な摩耗、B—中間的摩耗度合、C—部ないしは軽い摩耗、D—摩耗なし
・括弧内は時期別個体数で、a—Ⅱ₃期～Ⅲ期、b—Ⅲ期～Ⅳ₂古期、c—Ⅳ₂新期～Ⅴ₂期〕

次に、器種別の摩耗率であるが、最も高いのは盤類で、盤AではB47%、D41%、盤BではDはなく、B・Cで占められる。無蓋浅身器形であることと関連するかもしれないが、同様の無蓋器種である壺AについてはB26%、D56%となっている。ただ、Ⅲ～Ⅳ₂新期のみ、B・Dとともに43%となっており、その使われる状況によって、性格を大きく変える器種なのであろう。これに対し、器形的に使用痕は付きにくいだろうと予想していたのが壺B身であるが、案外、壺Aよりも使用頻度が高く、B31%、D39%で、Aランクにおいても壺Aよりも高い頻度で存在する。これは時期別でもほぼ似通った傾向が見られ、壺Bの存在は日常的な使用に伴うものだったのだろう。

そこで気になるのが、壺蓋の存在である。器種としては壺B身とセットで存在するものであるが、出土状況を見ると、決してそうとは言えない。ただ、古墳時代の壺Hタイプの壺蓋（蓋をひっくりかえして身として使用することは日常的に行われていたよう）で、特に6世紀後半～7世紀前半のものは身とセットで用いられことの方が少なく、保管の段階で、蓋も一つの容器として扱えられていた可能性が高い。望月1995）とは、全体的な器形やつまみの存在から、単体では食器として適した形とは言い難く、特殊な使用状況でない限り、身の蓋としての使用が想定される。ここで、蓋の内面摩耗痕頻度がそれを解明する視点と言えるものであるが、やはりDランクが主体で、52.5%を占める。ただ、Bが15%、Cが27%も存在し、内面が摩耗されるものが少ないと言え、定量見受けられる。壺蓋の逆転した形での使用については、Aランク痕跡をもつ転用窓のように、身の上に逆さにした蓋を乗せ、円面現状に使うもの、つまみを打ち欠いて皿状にして使うもの（転用窓の可能性高い）などが想定されるが、転用でない限り、故意につまみを打ち欠く行為は想定できず、再利用のイメージがある。また、身の上に逆さの乗せて使うにしても、それは付属的な使い方であり、身とセットで使われてこそ機能をもつものと考えたい。

以上、須恵器食器の使用痕について述べたが、当遺跡全体の頻度としては、半数程度をDランクが占め、決して高い使用頻度とは言えない。これは松原遺跡の溝内集中廐棄資料・包含層資料と比較しても言えることである。ただ、当資料が単なる包含層資料ではなく、掘立柱建物跡の柱穴内のものや土坑出土のものを含めて提示していることもあり、一概に比較できるものではなく、本来は遺構別に細かく提示することが重要である。今回はできなかったが、良好な資料があれば、試みてみたい。

参考・引用文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1995 「荒木田遺跡」
- 木立雅朗 1987 「第3章 第6節奈良時代 4.土器（1）須恵器」「宿東山遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 木立雅朗 1994 「能美（長口）窯跡群における8世紀中葉の画期について」「北陸古代土器研究」第4号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 1983 「須恵器・土師器の产地と供給体制について」「鉢窓遺跡II」小松市教育委員会
- 望月精司 1994 「南加賀古窯跡群における8世紀中葉の画期」「北陸古代土器研究」第4号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 1994 「墨青土器と溝内廐棄について」「松原遺跡」小松市教育委員会
- 望月精司 1995 「食器と煮炊具の使用痕跡について」「念仏林南遺跡II」小松市教育委員会
- 望月精司 1995 「加賀地域における7世紀後半の須恵器・土師器生産」「北陸古代土器研究」第5号 北陸古代土器研究会

2. 古代土製獸脚小考

(1) はじめに

当遺跡では1点のみであるが、獸脚が出土している。南加賀窯産の須恵質のもので、外面に自然釉が掛かり、硬質に焼き上っている。脚の端部のみのため、脚がどのように本体に接合されているか判らないが、接地面前方部を平坦にして脚の角度を見ると、かなり外側に踏ん張って付けられている。脚内側が上に向かって反っていることから、あまり脚部は高くなく、低く踏ん張る形態であったと予想する。脚は中実の粘土棒で、接地面足部分のみ広がる形態の、重厚な作りをする。整形は全面ヘラによる面取り仕上げで、指や爪等の表現はされていないシンプルなものである。時期は包含層資料のためよく判らないが、8世紀代～9世紀前半のものと予想する。

このような獸脚は、全国的に出土例があるが、その実態は不明なところが多く、これに関する論考も皆見ではないようである。県内では比較的の出土例があり、時期もある程度推察可能なことから、古代の土製獸脚について、足付き容器も含めて、若干の私見を述べてみたい。

(2) 「足」の付く容器又は土製品の分類と概要

獸脚も含め、台脚ではない「足」の出現は、縄文時代の土偶や古墳時代の動物埴輪を除けば、5世紀後半からであり、土器に普及を見せるのは7世紀代になってからと言える。その系譜については朝鮮半島や中国大陆との関連性が想定されるが、この問題については後述することとし、「足」の付く土製品の分類をここで提示する。

まず、機能面で分類すると、容器としての機能を有するものに装飾ないしは付属的に「足」が付けられるもの（Ⅰ類）、容器ではない別の機能をもつものに付属的・装飾的に「足」が付けられるもの（Ⅱ類）、土製品全体が動物の形態的機能をもつもので、「足」はあくまでもその脚部として付けられるもの（Ⅲ類）、何かに付属的に付く「足」ではなく、獸脚のみを形どった土製模造品（Ⅳ類）の4つに分けられる。以下に各類型の内容を提示する。

〈1類〉

丸底の貯蔵具に「足」が付けられるA類と平底の盤・鉢類に「足」が付けられるB類、鍋や釜などの丸底煮炊具に「足」が付けられるC類に分けられる。

A類 貯蔵具特に壺形のもので、短頸壺ないしはそれに類する丸底の壺の下位斜め方向に貼り付けの足が付くものである。以下のように、3細分できる。

a類…面取り整形を施す足高の棒状脚を三足胴部下位に貼り付けされる口頸部長目に直立する壺で、有蓋三足壺と呼称される（嶋田1993）。6世紀末から7世紀初頭の短期間に存在する須恵器種で、北部九州（10例）を中心として関東（1例）、北陸（七尾1例、小松2例）、東海（5例）、近畿中四国（3例）に広く分布する。主に墳墓の副葬品として出土しており、墓前祭祀に伴う特殊な須恵器と考えられている。蓋はつまみをもつ深い短頸壺状のものと円盤に軸棒の付いたような特殊なものの2種類がある。

b類…足の形を面取り整形し、爪や指の表現を切り込みによって行う、写実的な獸脚装飾を施すもので、低く踏ん張る獸脚を三足付ける須恵器短頸壺、獸足壺と呼称される（嶋崎1974）もので、獸足部に獸面装飾を施すものもある（兵庫県西ノ池窯）。7世紀末から8世紀初頭頃に出現し、9世紀前半頃まで存続するようである。分布は東海（猿投窯、美濃洲衛窯、湖西窯など）を中心にあり、畿内や北陸、関東をはじめとして広い地域で確認される。獸脚のみの破片は出土事例が少なくないが、壺本体を遺存する例はほぼ墓跡に限られる。

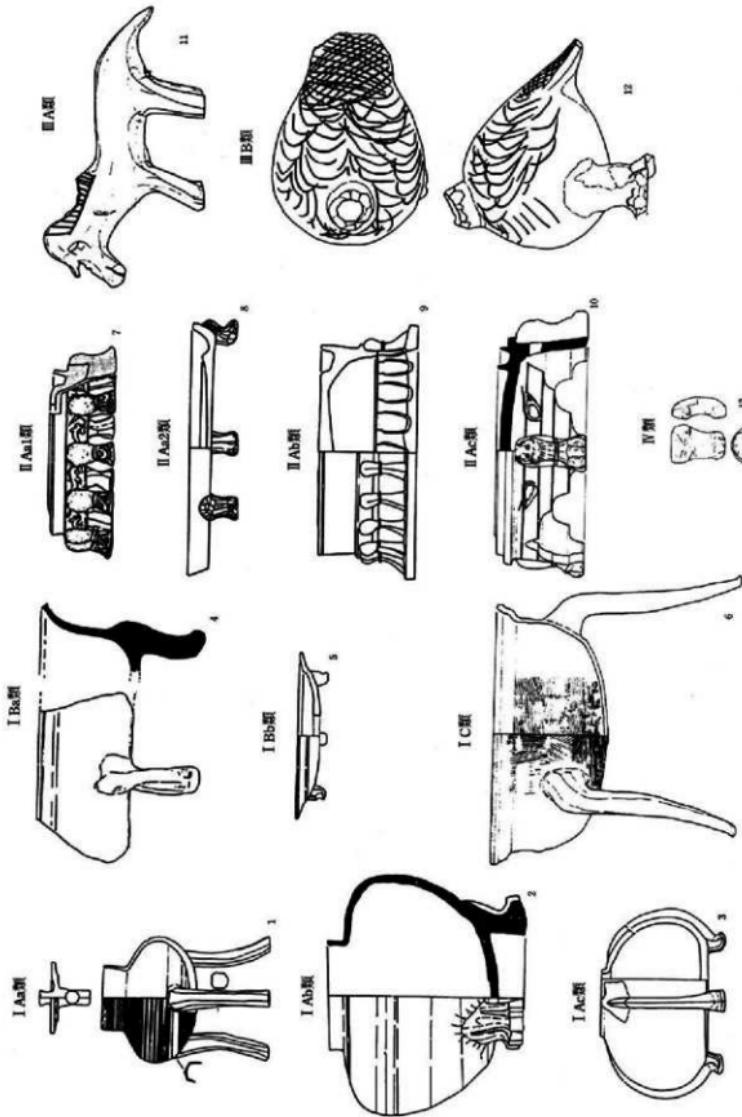
- c類……壺本体に縦4区画の突帯が付され、そのままの延長で足部（四足）となる短頸壺である。四足壺と呼称される灰釉陶器・綠釉陶器の施釉陶製品で、施釉陶器の中でも特殊品。胴部に横3区画の沈線や突帯が巡るものが多く、装飾性に富む。9世紀後半頃～10世紀前半頃に尾張窯で生産されている。
- B類 平底の盤や鉢類などの容器に「足」が付けられるもので、以下に細分できる。
- a類……獸足壺のような爪や指の写実的な獸脚装飾を施すもので、しっかりと高く立つ獸脚を腰の部分に三足付ける比較的大型の容器である。脚部接合には腰を切るものもあり、獸足壺の脚部接合とは異なっている。大型の盤か鉢状の器形のものに付くと思われるが、かなり特殊なもので、須恵器と土師器の両方がある。8世紀代を中心として、近畿、東海、北陸、関東で確認される。必ずしも、模倣対象となるモデルが存在しているとは限らないが、奈良三彩に見られる三足の付いた火舎は類似する器種と言え、これを模した可能性が高い。奈良三彩の火舎とほぼ同一器形をもつもの以外に浅鉢状や深い鉢状を呈すものがあるが、ここでは分けずに、同様の性格をもつ仏器の器種として考える。また、同様のものは形態を変えながらも、10世紀以降も存続する。
- b類……棒状の低い足が3方に貼り付く盤で、三足盤と呼称される。綠釉陶・灰釉陶の施釉陶製品で、9世紀前半から後半にかけて、東海・京都で生産され、全国的に流通している。これら、施釉陶器を模倣して在地でも須恵器や土師器で生産されており、加賀地域でも同時期頃に確認例がある。
- C類 鍋や釜、甕など丸底気味の小型煮炊具に棒状足が三方付けられるもので、以下に細分できる。
- a類……丸底ないしは平底の甕や鍋の底部又は胴部下位付近に足高の棒状足が3本付く土師器で、三足鍋や三足甕と呼ばれるものである。棒状の足は比較的太く、しっかりとまっすぐ立つもので、数は少ないが、広い地域で確認されているようである。出現の時期は8世紀末頃で、獸脚付きの鉄製鍋を模倣した器種と予想される。新しくなると、b類に変化して定型化されるものと予想する。
- b類……丸底の鍋や羽釜の底部に長い棒状の足が3本付くもので、棒状足は先細り気味となり、やや外反する。a類同様、鉄製三足鍋や三足釜を模した器種で、中世に西日本で定型化される。瓦質土器や陶質土器に見られる。

〈Ⅰ類〉

陶硯の脚として付けられるA類とその他の仏具や祭祀具類の脚として付けられるB類に分けられるが、陶硯であるA類以外は確認例がなく、A類のみ提示する。

A類 円面硯の脚として獸脚が付けられるもので、以下の3つに細分できる。

- a類……平板な硯面を3個以上の獸脚で支える円面硯で、獸脚硯と言われているものである。硯面の形態と脚部形態からさらに、硯面の海深く、脚部幅に型押しによる横線と三角文を施すものないしは水滴状を呈するもの（a1類）、浅い硯面のものに面取り整形で指を刻みで表現するような獸脚が低く踏ん張って付けられるもの（a2類）とに分けられる。a1類は綠釉陶ないしは多彩釉陶製品も存在しており、基本的には全て外国（百濟・新羅・唐）からの舶載品とする見解が提示されている（千田1995）。時期は7世紀前半のものもあるが、大半は7世紀後半頃に位置付けられるようで、北部九州（4例）と宮都周辺（4例）を中心として分布している（埼玉県末野窯でも1例あるが、末野窯産）。これに対し、a2類は近畿や東海の窯場での確認例があり、ほぼ国産品と判断されるもので、時期もa2類よりは後出し、8世紀代が主体



第173図 「足」の付く容器、または土製品分類図 (S=1/5)
 1.越後國糸島郡鶴瓶町出土。2.三重県松阪市長良美出土。3.宮城県多賀町出土。4.愛媛州南宇和郡山川13号窯出土。5.宮城県山王下田田中遺跡出土。
 6.京都府左京区六条三条出土。8.鹿児島県光明池60号窯出土。9.鹿児島県出土。10.石川県芦原市水C遺跡出土。
 11.石川県能美郡能美町出土。12.高知県木野波町出土。13.石川県鶴来町遺跡出土。

のようである。

b類……円面鏡に多数の獸脚が付けられ、さらに圓台で下端を固定したもので、獣脚鏡と呼ばれているものである。8世紀代、宮都を中心として主に西日本で検出されている。

c類……透脚円面鏡の台脚部に獸脚装飾をもつ突帯（獸脚）が貼り付けられるもので、獸脚に獸面意匠が施されるものもある。円面鏡の脚部以外に獸脚が貼り付けられている点で、あくまでも装飾的なものであり、獸脚装飾付き円面鏡と呼称して、a類と区別するとともに、両者に直接的な系譜は存在しないものと予想する。時期は8世紀後半から9世紀前半頃に加賀地域で2例ほど確認されている。

〈Ⅲ類〉

馬形や人形のような中実の土製形代であるA類と容器として使用された可能性をもつ中空のB類に分けられる。

A類 土製形代は馬形が大半であるが、鹿形なども少數例見られるようである。土師質のものを土馬、須恵質のものを陶馬として区別する。畿内（宮都）を中心として全国的に分布が広がっており、律令祭祀具的性格をもつ。出現時期は5世紀後半まで遡る可能性が指摘されているが、祭祀具として各地に伝播するのは7世紀中頃以降であり、10世紀代まで存続する。

B類 中空で、内面が容器類同様調整痕が見られるもので、横瓶状に作られた容器に水搔き状ないしは爪状に広がった台座状の獸脚が貼り付く鳥を形どった鳥形須恵器と呼称されるものである。尾は板状粘土を貼り付け、羽は線刻するものが主体であるが、羽を粘土板貼り付けで表現するものもあり、容器としてはかなり写実性に富む。頭部の検出例がなく、口が塞がっていた可能性は低いが、容器としてよりも形代としての性格が強かったものと予想され、祭祀的性格を有する土製品であると考える。中国地方で7世紀代に存在する鳥形瓶との関連性も想定されるが、より写実的になっており、別の系譜上有るものと予想する。分布地域は北陸と東北南部のみで、時期は8世紀後半から9世紀前半の期間に見られる。北陸・東北南部の中核的須恵器窯群での生産が確認されており、供給地は公的な色彩をもつ上級集落遺跡である。また、四足の獸を形どったものもあり、注目される。

〈Ⅳ類〉

I A b類、I B a類、II A類のような獸脚装飾をもつ「足」を模倣対象として、獸脚部分のみを模倣した土製品である。性格や時期は不明であるが、このような獸脚装飾をもつ「足」の盛行に伴うものと理解でき、興味深い。

（3）装飾的獸脚の分布・時期

以上述べた「足」を大まかに分けると、爪や指などの獸脚装飾をもつ装飾性に重きを置いた「足」、いわゆる「獸脚」と本体の「足」としての機能面に重きを置いた「棒状脚」となる。後者は本体に直接的に関連するものであり、棒状脚を付けることによって容器として機能が変化し、一つの器種として存在するもので、棒状脚が付く行為自体には統一的な意識はないものである。これに対し、前者の装飾的意識の中で容器に貼付された獸脚は、出現・盛行の時期や獸脚の形態に類似性をもち、連動する動きが見られる。前項で大まかな分布と時期の提示をしてあるが、ここでこの装飾的な獸脚のものだけを取り上げ、さらに詳しく検討する。

ここで扱う獸脚は、分類の獸足壺（I A b類）、瓶足盤・鉢（I B a類）、獣脚鏡（II A 2類・II A c類）である。これらは形態、装飾性で共通性があるが、容器に装飾性をもたせる点では鳥形須恵器（III B類）も同様である。が、鳥形須恵器については、容器としてよりも写実的な形代としての機能が

優先しているものであり、関連性はあるが、同一の性格をもつとは言えない。また、Ⅳ類の獸脚形土製品は、容器に付く獸脚ではないが、獸脚の盛行によって出現した土製模造品であり、獸脚装飾が単なる脚部ではない、畏敬・崇拜の対象となっていることを物語るものと言えよう。

A. 獣足壺

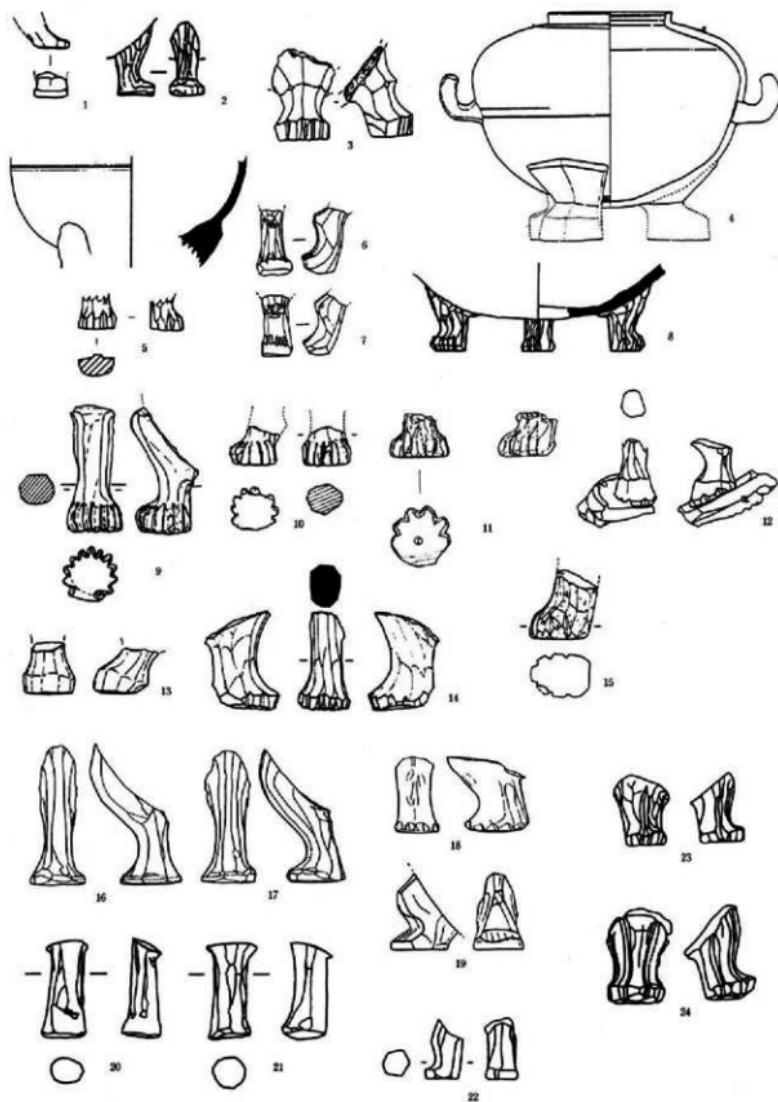
九州 太宰府で確認される。②の8世紀後半のものは確実であるが、7世紀末に位置付けられる①は獸足壺となるか確証に欠ける。九州は6世紀末~7世紀初頭に棒状脚を三足付した有蓋三足壺の主要な分布域であり、福岡の在地の窯跡で生産されたと考えられている。そのような素地がある地域である割りには、検出例は少なく、北部九州最大の須恵器窯跡群である牛頭窯跡群では当期の須恵器窯を多数調査している割に、1点も確認例はない。半島や大陸とのつながりが想定されがちな器種であるが、主体的な分布域から外れた可能性をもつ。また、福岡県立明寺跡から獸足壺が出土しているが、これは越州窯系青磁の三足壺であり、舶載品である。

中四国 中国地方で2例確認されている。生産地では山口県末田2号窯③（8世紀前半）、消費地では広島県府中市中須町墓跡④（8世紀）がある。末田窯のものは脚端に刻みを入れて指を表現するものであり、中須町のものは脚部下半が消失するも、容器部分がほぼ完存する把手付き薬壺型のものである。藏骨器として使用されたものであるが、脚部消失しても容器部分を使用する事例として注目しておきたい。

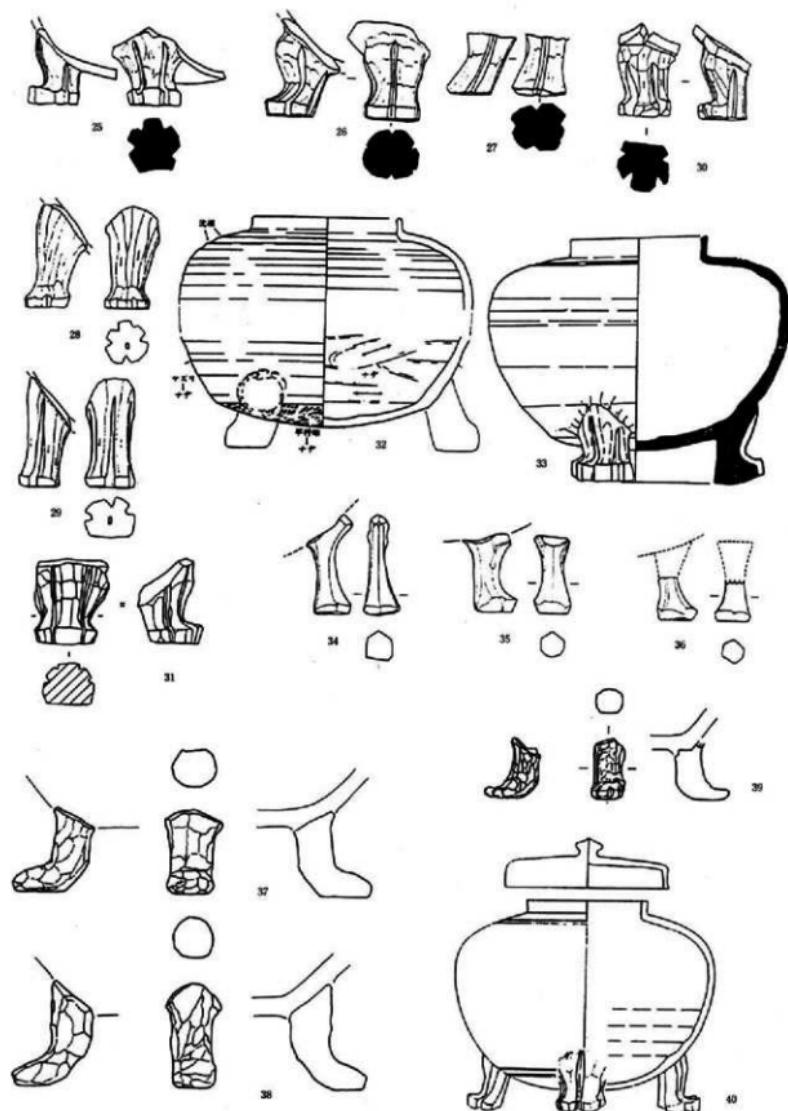
近畿 陶邑窯跡群のTG216窯⑤（8世紀前半）と兵庫県の川端窯⑥（8世紀前半）、西ノ池窯⑦（8世紀後半）の生産地のみで確認される。時期は8世紀を通して確認例があると言える。いずれも脚端に刻みを入れるタイプであるが、西ノ池窯のものは屈曲部に獸面を施す（西ノ池窯は硯の可能性もある）。生産地で3遺跡確認は、東海に次いで多いと言えるが、窯跡調査例の多さから考えれば、その数は決して多くなく、畿内中核窯である陶邑窯で1例というのはやはり少ない数である。

北陸 加賀地域のみであるが、集落遺跡を中心として篠原遺跡で2点⑨⑩（8世紀前葉頃）、下開発遺跡⑪（8世紀後葉）、北安田北遺跡⑫（8世紀後半か？）、荒木田遺跡⑬（8世紀後半）、高堂遺跡（9世紀前半頃）で各1点、生産遺跡である能美窯跡群の和気岬山1号窯⑭（8世紀後葉）と末窯跡群の浅川3号窯⑮（8世紀中頃）で各1点確認している。いずれも脚部破片で、容器部分の出土はない。脚端部の作りはやや古手のものが刻みを丁寧に入れて足の指を表現するのに対し、8世紀終りから9世紀に入りそうなものは指の表現を省略する方向性をもつ。時期は8世紀前葉より存在するが、8世紀中頃から後半が主体的で、確実に9世紀に下りそうなものも存在する。当地域の出土の特徴は、集落遺跡で出土することである。必ずしも突出した官衙的な遺跡ではなく、単なる格上程度の遺跡が半数を占め、本当に本体容器が付いた状態で使われていたのか疑問に感じるものである。当地域ではⅣ類とした獸脚装飾を施した土製品が出土しているため、そのような獸脚崇拜的な行為が存在し、獸脚破片單体で移動並びに使われていた可能性がある。なお、荒木田遺跡や北安田北遺跡、篠原遺跡、高堂遺跡のものはいずれも南加賀窯産であり、南加賀窯を中心として加賀地域の須恵器窯で盛んに生産されていたことがわかる。

東海 最も検出例の多い地域である。猿投窯で鳴海289号窯⑯⑰⑱（8世紀後葉）、鳴海32号窯⑲（8世紀後葉）、鳴海65号窯⑳㉑（8世紀末）、黒笹7号窯㉒（8世紀末）の4カ所、豊橋で一里山窯第三支群㉓㉔（8世紀前半）、瀬西窯で古見第16地点2号窯㉕㉖（8世紀前半）、吉美中村遺跡A地点㉗㉘（7世紀末~8世紀初頭）、東笠子43地点窯㉙（8世紀後半）の3カ所、清ヶ谷窯跡群で水ヶ谷奥窯㉚（8世紀中頃）の計9カ所での生産が確認されており、東海地域では集落遺跡でも脚部片が散見されるようである。また、松阪市長楽の墓跡㉛と浜松市瓦屋西古墳群内の墓跡㉜から骨蔵器として出土し



第174図 足盤集成図(1) (S-1/4) (1・2は九州、3・4は中四国、5-8は近畿、9-15は北陸、16-24は東海)

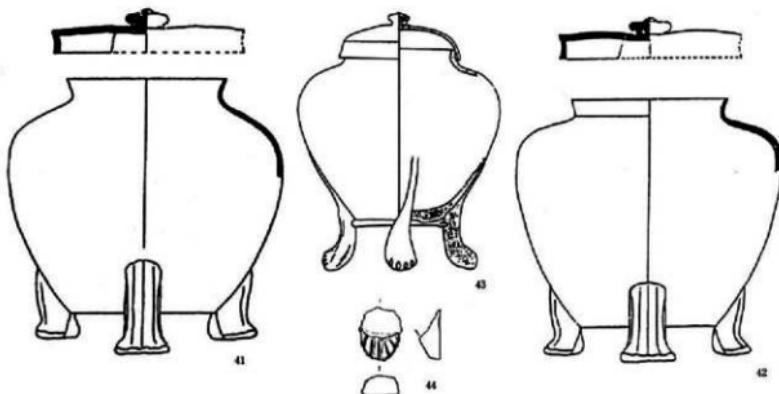


第175図 概足壺集成図(2)(S=1/4)(25~33は東海、34~36は甲信、37~40は関東)

ている。時期は吉美中村遺跡のものが7世紀末に遡りそうであるが、ほぼ8世紀初頭段階と見てよく、生産は8世紀末頃でほぼ終焉を迎える。(原始)灰釉陶器でも生産されるものであり、特殊器種としての位置付けがなされている。猿投窯と湖西窯を中心として生産が行われているが、湖西窯及びその周辺にある豊橋・清ヶ谷では8世紀前半に多く確認例があり、猿投窯では8世紀後半に確認例が多いようである。東海地域としては8世紀を通してまんべんなく確認例があるが、窯によって時期的な偏りが存在したかもしれない。藏骨器として確認される容器部分ではいずれも薬壺型の短頸壺で、やや大型である点以外は通常の短頸壺と変わらない。脚部は前半に位置付けられる湖西窯及び豊橋一里山窯、清ヶ谷窯で指の表現を端部刻みから連続して脚部上半まで線刻する共通した特徴が見られ、それは後半に位置付けられる東笠子窯でも確認される。湖西窯の特徴と言えるものである。これに対し、8世紀後半に主体をおく猿投窯製品は後半に位置付けられる鳴海289窯で指の刻みを施すものがあるが、他は刻みをもたないものであり、後半の特徴を表しているものと予想する。これら東海諸窯で生産された獸足壺は、通常の須恵器がそうであるように、東京都玉川の藏骨器を始めとして東日本へ流通している。なお、浜松の藏骨器使用のものは脚部を欠いたものであり、脚部欠損しても藏骨器として使用されていたことが分かる。

甲信 窯跡調査例が少ない地域であることも理由と考えられるが、長野県牛出窯3号灰原③⑤⑥(8世紀後半)で脚部破片が確認されるのみである。形態はやや足高の端部に刻みをもたない後半によく見られるタイプと言える。東海地域と接觸の多い地域であるため、実数はもっと多いと予想している。

関東 南関東を中心として分布している。生産地としては南北企窯跡群の小谷B7号窯⑩(8世紀2/4期)と広町B11号窯⑦⑩(8世紀中頃)で確認されているのみで、8世紀中頃を中心として生産が行われている。8世紀中頃の時期は関東に律的な器種が出現していく時期にあたり、特殊器種が多く生産されることから、この頃を当器種の導入期とみたい。脚部形態は脚が容器の下に付く(通常は丸底のため横斜めに貼り付く)タイプで、端部に刻みをもつものともたないものが存在する。生産地での確認例はこれだけであるが、神奈川県川崎市有馬⑧、東京都東村山市八国山⑨、昭島市玉川⑩、埼玉県所沢市山口新田⑫の計4カ所の墓跡で藏骨器として使われているが、東村山のものと所沢のものは実測図を



第176図 獣足壺集成図(3)(S-1/4) (41~43は関東、44は東北)

見る限り同一品であり、資料混在による実測図の重複だろう。玉川のものは美濃州衛窯産であると予想されているが、他の2個体は在地産である可能性をもつ。有蓋の薺壺型短頭壺に脚の付く通常のものであるが、いずれも底部が平底となっており、特に川崎市有馬のものは丸底風の底部さらに底部円盤状のものが付いている。脚は有馬のものが刻みをもち、他のものは刻みもたず、脚の付く霧開気が南北企窯のものと類似する。これらの時期については確証はないが、短頭壺の形態や脚部形態から南北企窯の時期から8世紀後半頃とするのが妥当であろう。

東北 宮城県五本松窯跡④で端部刻みをもつ獸脚片が1点確認されているが、獸足壺となるかは不明である。時期も9世紀後半に位置付けられるものであり、異なる器種である可能性をもつ。基本的に分布域から外れた地域であると予想している。

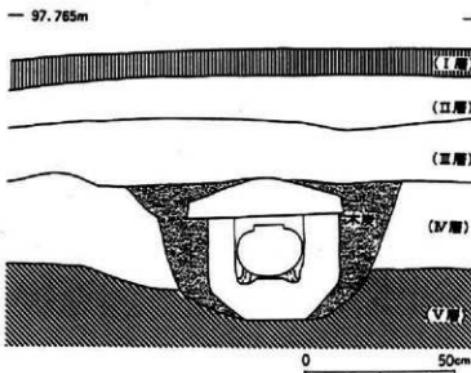
まとめ

(分布域と中心地) 確実に生産が確認される地域をあげると中国地方から南関東地方であり、北陸北東部及び北関東より以北は区域外にある。九州は太宰府で確認されるが、流通品である可能性をもっており、主体的な分布域からは外して考える。中心は東海にあり、そこから同心円状に広がっている。須恵器生産においても影響下にある信濃や南関東を初めとして、北陸加賀地域や畿内についても、東海からの影響で生産を開始した可能性がある。

(時期と形態変化) 湖西窯で8世紀前半に主体をおくるのが古く、この地域で確認される7世紀末から8世紀初頭がこの器種の出現期と考えて妥当である。中心は8世紀にあり、地域によって違うが第2四半期頃から後半にかけてが盛期と予測する。終焉期は8世紀末から9世紀前半で、9世紀中頃以下るものは存在しないと予想する。出土例が脚部のみであるものが大半で、脚部の形態変化はおよよそつかめる。古手のものは刻みをしっかりと入れて指の表現を丁寧に作る底面が円形に近い形となるのにに対し、新手のものは刻みが欠落するものが多く、刻みを入れても粗雑な指表現をする。底面形も梢円形に近いものが多く、やや足高になる傾向をもつ。8世紀第3四半期頃を境に変化しているものと予想するが、地域差はある。地域差と言えば、湖西窯の脚端部刻みの拡大する線刻状となることと南関東の容器部の平底化は特徴的であり、生産地識別に使用できるかもしれない。

(消費地での使用) 藏骨器として

の使用が確実で、藏骨器の中でも玉川墓跡の出土例のように、八角形の石櫃内に埋納してさらに周りを木炭で充填する特定階層の、薺壺型短頭壺よりも格上の特殊藏骨器に位置付けられる。脚部欠いた丸底短頭壺状態で藏骨器に使われる例があり、脚が欠落したものも生産地から消費地へと供給されていた可能性をもつ。藏骨器以外では集落跡から獸脚片として出土する事例がある。特に加賀地域で集中してみられる現象で、当地域における獸脚型土製品の出土から考えて、容器の脚部としてではなく、獸脚単体としても使われた可能



第177図 玉川墓跡藏骨器埋納状況（松崎1995より転載）

性をもつ。獸脚型土製品には獸面装飾もされており、崇拜の対象となっていた可能性をもつ。シンボリックなもののようだ。

(系譜) 国内ではIAa類とした有蓋三足壺が類似する。6世紀末から7世紀前半にかけて北部九州や東海、北陸で確認される棒状脚の付く短頸壺で、在地での生産も確認されている。獸足壺との関連では主体的な分布域が異なることと、獸脚形態が異なることから直接的な系譜は迫れないが、三足壺という概念では同一の地域に系譜が求められるかもしれない。獸脚が三足付く壺は7世紀後半から8世紀前半に位置付けられる中国の唐三彩と新羅の縁軸單彩陶器に確認例がある。丸底球胸形の胴部に獸足装飾をした脚が三足付けられるもので、新羅のものは脚の膝にあたる部分に獸面が施されている。国内の獸足壺と極めて類似性をもつが、半島・大陸のものは有蓋であるものの口縁部外反する広口壺的な器形を呈しており、忠実な模倣対象となっていない。強いて系譜を求めるなら、半島・大陸の施釉陶製品となるが、国内のものは、獸脚装飾という要素のみ受け入れた日本独自のものとなる。

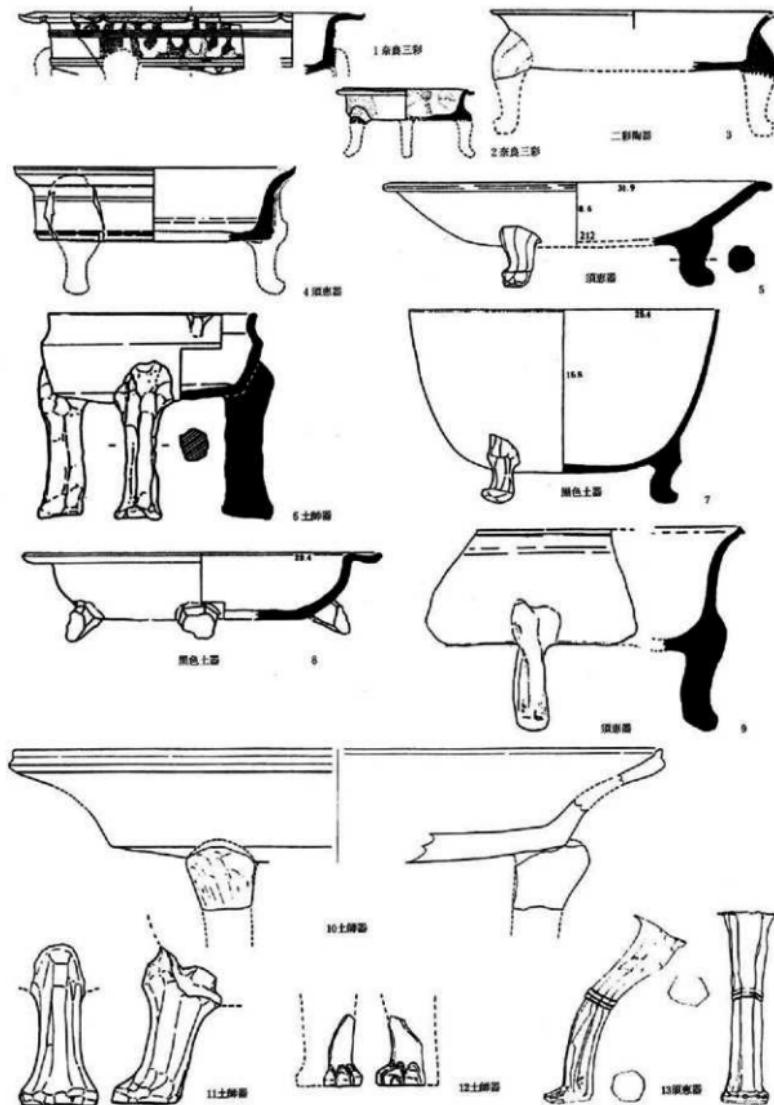
《獸足盤・鉢》

獸足盤・鉢は須恵器の他に土師器、黒色土器でも焼かれているが、最も多く報告されているのは奈良三彩の火舎である。奈良三彩の火舎は平城宮・京の10例以上をはじめとして、京都府3例、千葉県・兵庫県の各2例、埼玉県・群馬県・滋賀県・大阪府・和歌山県・兵庫県・広島県の各1例と各地に普及しており（黄淳一郎氏の全国奈良三彩出土品名表による。黄1985）、獸足盤・鉢の原型となっている。以下に各地で作られた須恵器・土師器・黒色土器の状況について述べる。

九州・中四国 太宰府から黒色土器の獸足盤が出土しているが、時期はよくわからない。生産地資料を見る限り、須恵器の確認例はなく、8世紀代に位置付けられるようなものはない予想する。獸足盤同様、基本的には分布域から外れる地域であると予想する。

近畿 奈良三彩の火舎は先述したとおりであるが、須恵器では兵庫県白沢3号窯（8世紀前半）で獸足片1点が、和歌山県内池窯④（8世紀後半）で獸足盤（火舎形）が、平城宮SE311B⑤（9世紀前半）で獸足盤（浅鉢形）が出土している。土師質では長岡京⑥（8世紀末）で片口の獸足盤が、黒色土器では史跡大安寺旧境内宛院推定地第64次SK14⑦（9世紀後半）で火舎形のものが、薬師寺西僧坊床面⑧（10世紀後半）で深い鉢形の獸足鉢が確認される。須恵器から土師器、黒色土器という流れであるが、須恵器も土師器も時期的には重複しており、黒色土器のものが後出するものと言えよう。須恵器・土師器は8世紀代を中心とし、黒色土器は9世紀代そして10世紀へと継続するものであろう。主に容器部分が残存する事例が多く、容器部分の形態変化はおよそ見当がつく。基本的には奈良三彩の火舎に見られる平底のタライ状器形で、口縁部が外反・外屈する。体部への金属器的な沈線も重要な装飾であり、8世紀の須恵器のものは火舎とほぼ同じような器形をしている。これが9世紀頃より底部の角が丸くなっているので丸底化していくわけで、10世紀の薬師寺のものは深鉢型になっている。獸脚の残る例が少ないため、予測でしかないが、8世紀前半の白沢窯の獸脚例や8世紀末の長岡京の土師器を見る限りでは、かなりしっかりした獸脚が付いており、8世紀代のものは長く真っすぐ立つ形態ではなかったかと予想する。9世紀代以降は短く小型化しており、丸底化に伴う変化であろう。奈良三彩を初めとして、宮都や寺社などを中心に確認例があり、須恵器から土師質のものへという流れは、火舎に通じるものである。特殊な仏事や祭事に使われる容器だったと予想する。

北陸 石川県でのみ確認例がある。須恵器と土師器の両方があるが、土師器が主体的である。須恵器は能美窯跡群と氣後山谷1号窯（8世紀後半）で確認される獸脚片のみである。長く真っすぐ立つ作りの精緻なもので、指の表現は丁寧に作られている。土師質は南加賀窯跡群二ッ梨一貫山窯⑨⑩（8世紀



第178図 猿足盤・鉢集成図 (S=1/4) (1~8は近畿、9は東海、10~12は北陸、13は関東)

後半）と二ッ梨グミノキバラ窯（9世紀前葉）の土師器焼成坑からそれぞれ脚部のみ4例、1例（3本有り）と小松市荒木田遺跡⑩（8世紀後半？）、羽咋市大町C遺跡（9世紀後半？）で確認される。荒木田の容器部と二ッ梨一貫山窯の脚部が接合するような器形を予測しており、かなりしっかりと大型品を想定している。容器部は平底の火舎型のやや崩れたような器形で、脚部はしっかりと真っすぐ立つ。脚端部の面取り整形するものと⑪のような線刻で指を丁寧に表現するもの、刻みを入れて表現するものがある。南加賀に主体的に確認されるもので、時期は8世紀後半を中心として9世紀前半頃まで存在する。能登のものは指を粘土作り出したもので、二ッ梨一貫山窯同様、大型の脚である。

東海 獣足壺を多く生産する湖西窯では確認例がなく、美濃洲衛窯の稻田山13号窯⑫（8世紀後半）と各務寒洞1・2号窯（9世紀前葉）で須恵質の獣足盤、猿投窓の黒笛89号窯（9世紀後半）でも類似した獣足盤が確認される。また、八事堂跡でも黒笛と類似したものが1点確認され、8世紀後半から9世紀代までの時間幅で生産される容器であることがわかる。形態はいずれも内池窓にあるような火舎型のものに近い平底タライ状器形の盤に、脚端に指装飾のない比較的高い獣足が付くものである。8世紀後半に三彩の影響で生産が開始され、9世紀に入ってから灰釉陶器として生産された器種であろう。

関東・東北 東北は未確認であるが、関東では埼玉の南比企窓跡群の石田2・3号窯⑬（9世紀中頃）で須恵質の獣足が確認される。外側にやや踏ん張った長い脚で、丸底気味の容器底に横斜めに付くものと予想する。脚端に刻みを入れて指を表現しており、丁寧な作りをしている。

まとめ

（分布） 多彩釉陶器は各地に広く分布しているが、生産地での確認は近畿、東海、北陸、関東で獣足壺の分布に類似している。ただ、消費の中心は宮都であり、特殊な祭事・仏事に使われる容器として存在していたものと予想される。東海は湖西窯と美濃洲衛窯のように、獣足壺と獣足盤の生産する窯が別れており、猿投窓では9世紀の灰釉陶器生産以降、生産されるようになる。これに対し、北陸ではかなり近い位置で両方を生産しており、これは当器種が土師器と施釉陶器に主体的な器種であることに関連することである。土師器生産を須恵器窯に取り込む加賀地域においては、両方の器種を一体性高く生産されたものと推察する。

（時期） 奈良三彩の時期がよくわからないが、出現期は8世紀前葉と言われており、須恵器窯での最古事例にあたる白沢窯の8世紀前半とも符合する。生産・消費の中心は、宮都では早いであろうが、地方では8世紀後半代であろうと予想され、9世紀代へとやや形を変えながらも継続して生産・消費された器種である。北陸の事例を見る限り、獣脚が最も装飾性を帯びるのは8世紀後半のものであり、9世紀になると棒状化てくる。多彩釉陶器が生産停止する9世紀代には猿投窓で古い火舎型のものを施釉陶器として継続して生産されるが、宮都では黒色土器への移行とともに形態変化して行ったものと予想する。

（系譜） 必ずしも須恵器や土師器が奈良三彩を模倣したものとは限らないが、もしそうでないにしても奈良三彩で製作した原型のものに須恵器も土師器も原型が求められるはずである。奈良三彩は唐三彩の影響下で成立した多彩釉陶器であり、唐三彩に系譜が迫れる可能性は残されるが、唐三彩が貴族・官僚層の墓に納める明器であったのに対し、奈良三彩は宮殿や寺院における供養具に使われたものであり、その器形の由来は仏花器・仏食器にあるとされている（西1986）。つまり、仏具である金属器にその原型が求められる訳で、これは初期のころの容器部の平底の盤器形や体部沈線を考えれば想像がつく。

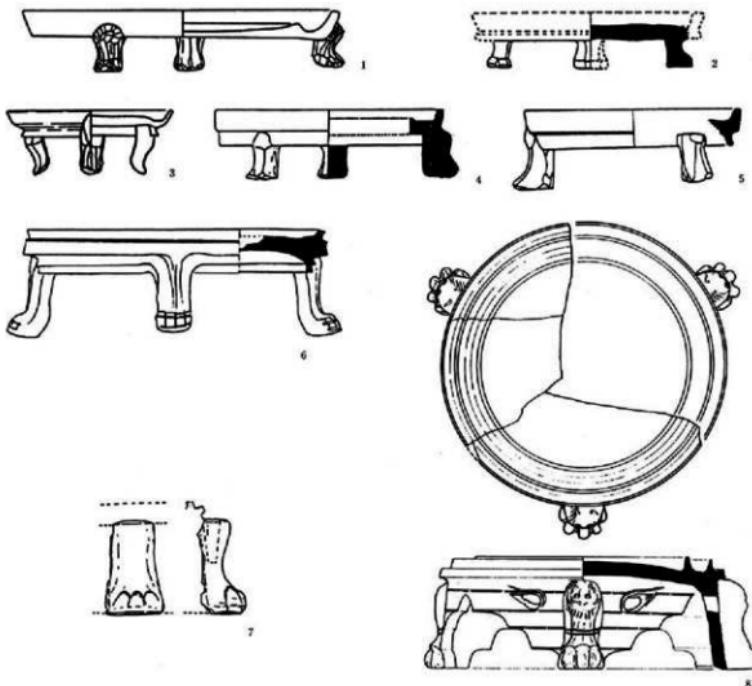
《獣脚硯及び獣脚装飾付円面硯》

舶載品の可能性が高いものが大半であり、時期的に古く上記の獣脚装飾のものとは異なる多足獣脚硯

であるII A a 1類は除外して考える。ここで扱う獸脚硯は三足獸脚硯（II A a 2類）と獸脚裝飾付円面硯（II A c類）であり、両者とも分布域が異なっているため、分けて提示する。

三足獸脚硯（II A a 2類） 消費地からの出土は少なく、平城宮・京からの出土例は確認されていない。主な消費地事例は岐阜県の長者屋敷遺跡、三重県の西高山C遺跡などに加えて、大阪でも數例確認されるようである。消費地からは東海と近畿に分布しているようで、それは生産地の出土例にもあらわれている。東海地域では尾北窯の藤岡66号窯④（8世紀前葉）、藤岡81号窯⑤（8世紀中葉）、美濃洲衛窯の稻田山13号窯⑥（8世紀後半）の3窯跡、近畿地域でも陶邑窯の光明池60号窯①（8世紀前半）、京都府西門窯（8世紀中葉）③、篠窯跡群の西長尾奥第1窯跡群1号窯②（8世紀中葉）の3窯跡が確認される。

生産時期は8世紀を通じて見られ、獸足壺と同様の盛行期をもつ。分布域も東海と近畿に主に分布する点で、近いものを感じるが、獸足壺生産の中心と言える湖西窯での出土事例はなく、尾張でも尾北窯での確認が多いこと、獸足壺出土例の多い加賀地域で未確認であることなど、積極的に獸足壺との関連を提示しにくい。ただ、東海と近畿において出現してきた器種であり、盛行時期などを考えると、連動したものだと言える。この硯は無脚円面硯に三足付いたものであり、硯部分は硯としての形態変化があるが、規則的な脚部の変化は見られない。



第179図 獣脚硯及び獸脚裝飾付円面硯集成図 (S-1/4) (1~6は獸脚硯 II A a 2類、7・8は獸脚裝飾付円面硯 II A c類)

当類型と類似するものを上げれば、最も形態の近いもので、中国の晋代（6世紀）に確認できる獸脚意匠をもった三足円硯がある。時代に1世紀以上の開きがあることと、この三足円硯は後に獸脚スタンプないしは滴足型の多足円硯に形態変化していることから、8世紀代の当類型のモデルとなったとは到底考え難い。国内で獸脚硯が生産されるのは一度7世紀後半にあり、主体は舶載品（綠釉单彩陶器を含む）であるが、それを忠実に模倣ないしは渡来系工人によって須恵器窯で生産される。しかし、この獸脚硯は多足獸脚硯（II A a 1類）であり、獸脚意匠が幾何学的なスタンプ文様であることと、多足が基本であることなどから、当類型とは大きく異なる。ただし、これ以外に系譜の辿れるものではなく、当時盛行する三足の獸脚装飾に影響を受けて、7世紀後半の円硯に獸脚が付くという基本的理念を継承しつつ、国内の独自の形態として出現してきたものと予想する。

獸脚装飾付円面硯（II A c 類） 円面硯に獸脚装飾を加えた獨特のもので、加賀地域の南加賀窯産のみの事例である。南加賀窯跡群二ッ梨グミノキバラ窯⑦（8世紀後葉～9世紀初頭）と金沢市戸水C遺跡⑧（9世紀前半代？）の南加賀窯産のものとがある。形態的に三足獸脚硯（II A a 2類）とは別物であり、通常の透脚円面硯に獸脚装飾を施した突帯を3カ所付したものである。戸水C遺跡のような獸面装飾や顔面意匠も加えた、特別な意味をもたせる目的で付けられたものであり、この地域の獸足壺にあるような特殊な獸脚崇拜が生み出した器種であろう。時期は獸足壺や獸足盤の盛行する8世紀後半よりもやや下る資料であることは注意を要するが、意識としては一連のものであり、獸脚の指の表現は獸足盤のものによく似ている。

（4）まとめ

これまで、獸足壺、獸足盤、獸脚硯を個別に検討してきたが、各器種のまとめでも述べたように、三足の獸脚装飾という意味で強く連動するものであったことは間違ひなさそうである。しかし、出現時期については、獸足壺が8世紀初頭頃まで上るが、獸足盤に関しては奈良三彩の出現期が8世紀前葉頃であることを考えれば、若干遅れて出現しており、三足獸脚硯も獸足壺出現以後と見るのが妥当である。つまり、出現の契機に関しては、必ずしも連動したものではなく、異なるモデルや意識のもとで出現してきたものと言えよう。ただ、獸脚装飾の盛行時期が8世紀の中頃前後で重複する様相をもつことは重視したく、器種や用途は異なっても、同様の意識で獸脚を付け、装飾して行ったものと考える。獸脚装飾の地域的な中心というのは本当に存在するか分からぬが、獸足壺においては東海地域がそうであつたことは間違ひなく、獸脚硯の出現にも大きく関与したと予想する。

獸脚装飾の意味を考えるうえで重要な地域は加賀地域である。加賀地域の土器生産が須恵器・土師器一体型であることから、獸足盤が土師器で作られても極めて連動した動きを示しており、獸脚装飾円面硯も含め、共通する理念の元で各器種が生産されていたことが予想される。獸脚・獸面のもつ畏敬の力を容器に宿す、そしてそれが崇拜の対象物として昇華することを集落跡での獸脚片出土や獸脚型土製品は物語っている。単なる付加価値ではない特別な力を獸脚に感じていたのであろうか。

一方、獸脚をもつ容器自体は、金属製の鉢物にあり、獸脚を付ける意識は、もとを正せば、仏教文化の導入に伴って半島や大陸からもたらされた仏具に根柢があると思われる。古代前半期の土器生産のモデルは、金属器を頂点とする「金属器指向」であり、その根柢には優れた金属器に対する強いあこがれがあったわけである。当時の奈良三彩が、唐三彩を模倣せず、金属器をモデルとして主に祭事・仏事に使用される特殊容器類を製作したのはこのためであり、在地での祭事・仏事に使われる道具類として、それらを模倣して製作していくものと言える。これらの器種の生産が在地で開始される時点では、金属器模倣が前提にあったものであり、特別に獸脚への意識はなかったかもしれない。しかし、獸足壺の

脚部を模倣したような三足の獸脚意匠をもった獸脚窯が出現したように、獸脚装飾の盛行する時期においては、獸脚を付することが特別な意味をもっていたであろうし、加賀地域の例のように崇拜の対象として昇華した場合もあったと予想する。

この獸脚装飾も9世紀に入ると急激に流行は廃れ、獸足壺をはじめとして、獸脚窯も消滅傾向をもつ。獸足盤は火舎としては存続するものの、獸足の装飾は欠落して行き、足が小型化する。この時期の獸脚装飾の衰退で考えられることは、まず古代の土器生産が、それまでの「金属器指向型」から中国磁器を頂点とする「磁器指向型」へ転換したことである。奈良三彩などの多彩釉陶器から綠釉单彩陶器へ変化したことその「磁器指向型」の現れであり、綠釉硬陶の出現による量産化はさらに須恵器・土器の金属器模倣離れを促進することとなつただろう。陶窯における円面窯から風字窯への転換、須恵器における短頸壺の減少も、当然獸脚離れを促進する要因であり、大きな流れとしては須恵器生産の漸次衰退も関連することと予想する。

これまでには、獸脚装飾盛行が何に基づいたものであったのかを考えてきたが、もう一つ注目される点で、分布の偏りの問題がある。生産と消費の状況を見る限り、東海、近畿、北陸西部が分布の中心で、甲信、南関東、中国はその周辺にあり、北陸東部及び関東北部から東北と九州は分布区域外となる。北陸西部の状況はたぶん東海か近畿の影響によるものだろうと考えられるため、それほど重視する必要はなく、近畿の分布密度の高いのも予測できることである。東海における獸脚容器導入の早さと生産量の多さは注目されるが、これについても、金属器模倣の一つとして考え、優品を生産し、宮都をはじめ畿内や甲信、関東の広い地域に供給してきた東海諸窯であれば、それほど不思議ではなく、後に施釉陶器生産を行う地域であれば、納得ゆくことである。ここで問題としたいのは、生産の中心地ではなく、基本的な分布域からはずれる九州、特に北部九州の状況である。単に生産地の地域差ということもあるが、7世紀代に多足獸脚窯が舶載品も含め多数確認されたり、半島の三足器種の影響と思われる有蓋三足壺を古墳の副葬品として在地で生産しているなど、三足や獸脚に対する意識は7世紀において既に生まれていたと言える。6世紀末～7世紀初頭の有蓋三足壺のもう一つの生産地の核である尾張周辺の須恵器生産地が8世紀に活発に獸足壺を生産する状況とは対照的である。北部九州で、足付きの容器類の在地生産が主体的に行われなかつたことについては、現段階では結論を導き出し得ないが、半島や大陸からの唐三彩や綠釉製品の搬入が古代において定量行われていたことと関連するだろう。10世紀以下に下る事例ではあるが、青磁の獸足壺が藏骨壺として使用されている事例はその傍証となろうし、東日本での出土量よりも西日本での出土量が全般的に少ないこともそれが要因として考えられるだろう。

以上、獸脚装飾をもつ土製品を集成し、その性格を論じてきたが、資料収集においては、国立歴史民族博物館教授吉岡康輔氏をはじめとして、埼玉県鶴山町教育委員会渡辺一氏、長野県豊科町教育委員会山田真一氏、石川県教育委員会北野博司氏、石川県埋蔵文化財保存協会川畠誠氏、石川県辰口町教育委員会橋場和彦氏、愛知県史編纂室城ヶ谷和宏氏、佛教大学埋蔵文化財調査員藤田有紀氏、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所森内秀造氏、福岡県大野城市教育委員会舟山良一氏よりご教示及び資料提供いただいた。ご芳名を記して厚く感謝申し上げる。

参考・引用文献

- 愛知県教育委員会 1983 「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)一尾北地区・三河地区ー」
石川県立埋蔵文化財センター 1987 「藤原遺跡」
石川県立埋蔵文化財センター 1988 「辰口西部遺跡群」

- 石川県立埋蔵文化財センター 1989 「漆町遺跡Ⅳ」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1993 「戸水C遺跡－平成2・3年度発掘調査報告書－」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1995 「荒木田遺跡」
- 大阪文化財センター 1978 「陶邑Ⅱ」
- 福原考古学研究所附属博物館編 1993 「貿易陶磁－奈良平安の中國陶磁－」
- 金沢市教育委員会 1989 「金沢市末京跡群」
- 加茂町教育委員会 1981 「西門跡」
- 齊炳三 1974 「統一新羅の土器」「世界陶磁全集」第17巻
- 瀬戸市教育委員会 1991 「加賀山第1～3地点・古見第14・16地点古窯跡発掘調査報告書」
- 古代の土器研究会 1992 「古代の土器 I 郡城の土器集成 I」
- 古代の土器研究会 1992 「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東－」
- 古代の土器研究会 1993 「古代の土器 2 郡城の土器集成 II」
- 古代の土器研究会 1994 「古代の土器 3 郡城の土器集成 III」
- 古代の土器研究会 1994 「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器－」
- 斎藤孝正・後藤達一編 1995 「須恵器集成図録(窯跡編)」第3巻 東日本編(東海・中部・北陸地方) 雄山閣出版
- 嶋田光一 1993 「須恵器有蓋三足壺考」「古文化談叢」第30集 九州古文化研究会
- 千田 剛道 1995 「獸脚鏡にみる百濟・新羅と日本」「文化財論叢」II 奈良国立文化財研究所
- 井 淳一郎 1985 「陶磁(原始・古代編)」日本の美術235 至文社
- 東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会 1992 「古代仏教東へ—寺と窯—(2. 窯編)」第9回東海埋蔵文化財研究会
- 富山県教育委員会 1984 「小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要」
- 中村浩・藤原厚編 1995 「須恵器集成図録(窯跡編)」第2巻 近畿編II(和泉を除く近畿地方) 雄山閣出版
- 名古屋市教育委員会 1993 「N N288号窯跡・N N289号窯跡発掘調査報告書」
- 柄崎彰一 1974 「日本の陶磁 古代中世編」I
- 柄崎彰一 1981 「日本古代の陶器ーとくに分類についてー」「考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集」
- 西 弘海 1986 「土器様式の成立とその背景」真陽社
- 西ノ池古窯跡群発掘調査団 1979 「西ノ池古窯跡群発掘調査報告書」
- 橋場和彦 1993 「辰口町和気山1号窯の発掘調査について」「北陸古代土器研究」第3号 北陸古代土器研究会
- 鳴山町教育委員会 1989 「鳴山窯跡群I－窯跡編①－」
- 鳴山町教育委員会 1990 「鳴山窯跡群II－窯跡編②－」
- 鳴山町教育委員会 1995 「竹之城・石田・皿沼下遺跡」
- 東日本埋蔵文化財研究会 1996 「第5回埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制」
- 兵庫県教育委員会 1987 「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」
- 舟山良一・松本敏三・池田栄史編 1996 「須恵器集成図録(窯跡編)」第5巻 西日本編(中国・四国・九州地方) 雄山閣出版
- 向田裕始 1975 「広島県府中市中須出土の獸脚骨器」「考古学ジャーナル」ニュー・サイエンス社
- 村上吉郎 1981 「出土土馬から見た小牧・外遺跡の性格－律令制に於ける土馬祭祀の分析から－」「中島町小牧・外遺跡」中島町教育委員会
- 松任市教育委員会 1994 「松任市北安田北遺跡」
- 中山敏史 1983 「陶器関係文献目録」「埋蔵文化財ニュース」41号 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

第3項 中世土師器の様相

1.はじめに

中世土師器は、各中世遺跡において普遍的に出土している資料で、中世の編年を位置付ける資料として研究されている。特に加賀地域は、その初段階では比較的存続期間の長い遺跡での編年研究及び組成的変遷過程を追ったものが多い（田嶋正和1981、1986、垣内1984、越坂1987等）。これらの遺跡の資料は、その後示された加賀地域全体の編年の中で、各時期の標識となっているものばかりであり、その検討が基礎となっている。1986年になり、漆町遺跡での発掘調査の成果により、田嶋 明人氏により中世前半期までの加賀地域における編年が示された（田嶋明人1986）。それを受け、ついに藤田氏により中世全般を対象とした編年が提示された（藤田1988、1992）。資料の絶対量の不足により、厳密な意味での型式の変遷過程はいまだ追うことは出来ないが、加賀地域における大きな流れは、この研究によって確立された。これ以後の研究の柱となっており、学史的意義は非常に大きい。その後、中世土師器の生産体制を明らかにしようと言う研究もなされている（望月1993）。しかし、加賀地域における土器様相を明らかにするには、今なお、一国単位よりもさらに狭域な地域における研究により、編年・分類案を充実させ、それらを集積せざると中世土器研究における基本が必要とされているのが現状である。

2. 荒木田遺跡の中世土師器

中世の遺物の中で最も多く出土しているのが中世土師器であり、11世紀後半より15世紀中期に至る、多期にわたる資料を抽出することが可能である。しかし、資料を見ていく上で一括性を抽出出来る資料は少ない。さらに、それらの出土量、完形率を見ると2~3の遺構を除けば、低いと言わざるを得ない。それが非クロ形土師皿となると、さらに抽出し辛くなる。これらの資料的制約により、ロクロ土師器については、12世紀中期~13世紀中期頃までを、非ロクロ形土師皿については、13世紀~14世紀前期までの資料を、検討対象とし、その大流を述べることを主眼としている。一方で、肉眼による胎土分類も行っているので、各型式との関りについても検討をおこなった。また、その点で三辻氏に蛍光X線分析を依頼し、検討して頂いているので、その結果も合わせて考えてみたい。

3. 土師器の分類

検討を行えたのは、当然資料を得ることが出来たものに限られる。ロクロ土師器では、小皿が中心で、ついで、楕、柱状高台皿である。非ロクロ形土師皿では、結果的に藤田氏の分類で言うAタイプとCタイプのみであった。なお、胎土分類については、前章を参照して頂きたい。出来る限り器形の分かるものを載せたが、資料的制約により編年図に適さないものまで載せる結果となったことは、お詫び申し上げる次第である。

楕は、全形を判別出来る資料が少なく、底部のみを多く示す結果となった。よって、その器形によって3型式に分類した。

楕A 厚い底部より、内湾して立ち上がるるもの。

楕B 薄い底部より、やや直線的に立ち上がるものの。

楕C 内楕して立ち上がるもので、口径に対し器高の低いもの。

小皿はA~Gまでの7型式に分類した。

小皿A やや高めに作り出した底部より、外傾状に立ち上がるもの。

- 小皿B 内湾して立ち上がるるもの。比較的器高の高いもの。
- 小皿C 直線的に立ち上がるもの。口径に対し底径の占める割合が小さく逆台形状を呈す。
- 小皿D 外傾状に立ち上がる器高の低いもの。外底部に特徴があり、低いが、はっきり分かるよう作り出されている。
- 小皿E 外傾状に立ち上がっているもので、器高が低く、見込みの浅いもの。この型式の底部はAのみである。(前章参照)
- 小皿F 非常に薄手で小ぶりなものとして載せたが、型式として設定するには疑問が残る。
- 小皿G 内湾気味に立ち上がる器型で、この中では、中型とも言える大きさを示している。
- 柱状高台皿は、胴部以上の器型は欠損していて分からぬが、残存部の器形により3型式に分類した。
- 柱状高台皿A 直線的に立つもの
- 柱状高台皿B 底がハの字に開いて立つ型式で、器高の低いもの。
- 柱状高台皿C 底がハの字に開いて立つ型式で、器高の高いもの。
- 非ロクロ土師器皿は前章で、大型品をI類、小型品をII類に大別し、基本的な器形分類は藤田分類に基づきAタイプとCタイプに分類した。ここではさらに細分を試みている。
- 土師皿I-A1 I類でAタイプはこの器形しか提示出来なかった。土師皿II-A1と対応関係にあると考える。
- 土師皿II-A1 内湾ないし内湾気味に立ち上がるもの。
- 土師皿II-A2 内湾して立ち上がり底部中央を曲ますタイプ。器肉は厚く胴部と底部の境がナデによる屈曲によりはっきりしている。
- 土師皿II-A3 薄手のもので内湾気味に立ち上がり、口径に対し底径占める割合の小さいもの。
- 土師皿I-C1 外傾状に立ち上がり、器高が高く、見込みの深いもの。初期のタイプは意識的な上げ底状を呈す。
- 土師皿I-C2 外傾状に立ち上がり、器高が低く、見込みの浅いもの。ナデ幅が広く胴部全体に及ぶ。
- 土師皿I-C3 外傾状に立ち上がるが、器型はやや丸みを帯びて見える。胴部中位に屈曲が見られる。
- 土師皿II-C1 内湾気味に立ち上がるもので、器高が高く、見込みの深いもの。土師皿I-C1と対応関係にあると考える。
- 土師皿II-C2 外傾状に立ち上がるもので、器高が低く、見込みの浅いもの。ナデ幅が広く胴部全体に及ぶ。土師皿I-C2と対応関係にあると考える。

4. 荒木田遺跡における中世土師器の様相

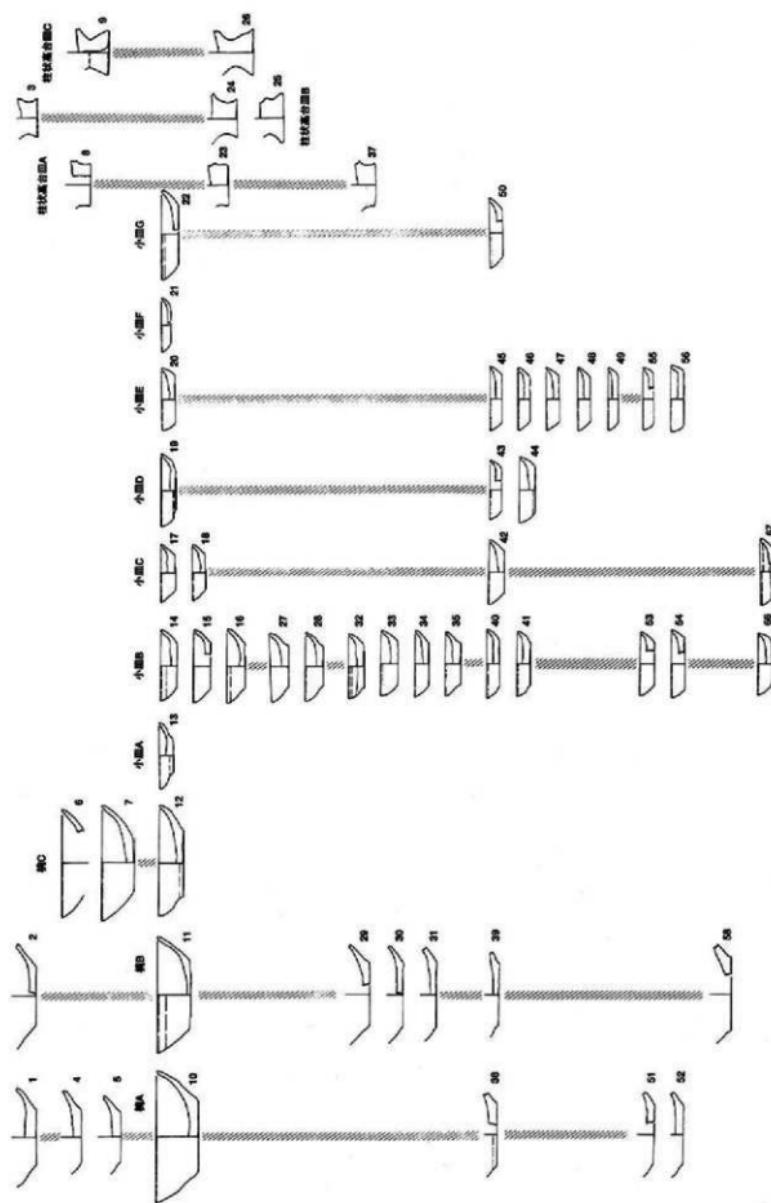
1期(12世紀前半頃) 10号土坑を標識とする。椀、柱状高台皿のみを図示したが、小皿もある。しかし、口縁部形態が不明瞭なため割愛した。

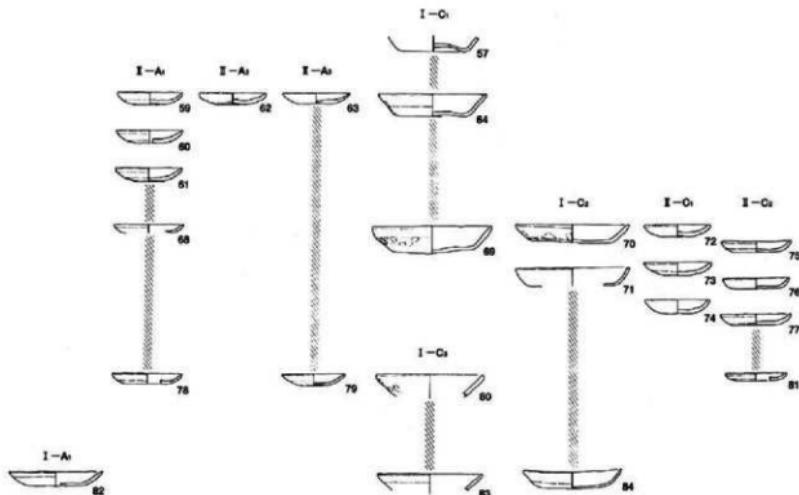
椀A 底径で6.6cmを測る。内輪する器型を保持している段階である。胎土はb-1である。

椀B 底径で7.7cmを測る。立ちあがりの外傾がきつい段階である。胎土はb-2である。

柱状高台皿B 高台外面端部ナデしていることからも分かるように、しっかりした作りをしている。胎土はb-1である。

この段階では、椀A、B共に粗型の特徴を保持している最後の段階と言える。藤田編年でI-II2期の様相にあたる。





第181図 非クロロ土器変遷図 (1/6)

2-1期(12世紀中期頃) 9号土坑を標識とする。楕、柱状高台皿を確認している。

楕A-4は、底径で6.6cmを測る。5は、底径で6.0cmを測る。立ちあがりの内湾度がやや緩くなっている。1が、a-2胎土、2が、b-1胎土で、底部Bである点で1とは若干異なる。

楕C-6は、口径で13.0cmを測る。7は、口径13.8cm、器高3.9cm、見込み高3.0cm、底径6.9cmを測る。この段階では、口径に対し底径の割合が小さく楕形態を保っている。1が、b-1胎土で、2が、b-3胎土である。

柱状高台皿A 高台外面端部に面があり、全体的にシャープな作りと言える。胎土はb-1である。

柱状高台皿C 高台外面端部ナデや、くびれ部の角度が直角に近く急である。胎土はb-1で、図示したものは中央に孔がある。

この段階では、楕Aにおいて、内湾するというタイプとしての特徴が失われてくる最初の段階と言える。底部もやや薄くなっている、粗雑化が始まっている。柱状高台皿は依然としてしっかりした器型を保っている。藤田編年でI-III期の初め様相と考えられる。

2-2期(12世紀中期頃) 25号土坑を標識とする。まとまった資料の得られた造構で、荒木田遺跡の中では、好資料と言える。器形のバリエーションが豊富で、楕はA-C、小皿はA-G、柱状高台皿A-Cが確認出来る。

楕A 口径15.6cm、器高5.2cm、見込み高3.7cm、底径8.0cmを測る。大型のものである。底径がより拡大し、内湾が緩く立ち上がりも急になる。図示したものは、a-1胎土だが、他の胎土のものもある。

楕B 口径13.8cm、器高4.1cm、見込み高3.6cm、底径8.2cmを測る。立ちあがりがやや急になり、内湾傾向見られるようになる。楕Aに対し一回り小さい器種として位置付けられる。胎土はa-1で、この胎土の製品の特徴は、見込み部において水平部分が小さく、途中から斜めに立ち上がることである。

楕C 口径13.4cm、器高3.6cm、見込み高2.1cm、底径7.6cmを測る。さらに内湾気味に外傾して立ち上がり、器高も低く見込みも浅くなる。口径に対し底径の占める割合が大きくなる。胎土はa-2である。この型式は荒木田では、これ以降確認出来なくなるが、錢畠5号溝でさらに底径が拡大し、立ちあがりが急になったものが出土している。少なくとも加賀地域では12世紀末頃までは存続していたと考えられる。

小皿A 口径8.0cm、器高1.7cm、見込み高0.8cm、底径4.8cmを測る。これ以降は確認出来ない。

小皿B 12世紀中期頃において、小皿の中で主体をなしている型式である。14は、口径8.5cm、器高2.0cm、見込み高1.6cm、底径5.4cm、15は、口径8.8cm、器高2.1cm、底径5.6cm、16は、口径8.8cm、器高2.2cm、見込み高1.4cm、底径5.4cmを測る。内傾して立ち上がる。この段階では底部が薄く見込みの深い器形である。14は、a-2胎土、15は、b-1胎土、16は、b-2胎土である。

小皿C 17は、口径7.0cm、器高1.8cm、見込み高0.8cm、底径4.3cm、18は、口径6.8cm、器高1.6cm見込み高0.9cm、底径4.6cmを測る。口径に対し底径の占める割合の小さいタイプで、この段階では他の小皿より一回り小さい法量を示している。17が、b-1胎土で、18が、b-2胎土である。17が厚めの底部を持つ点、18がナデにより外底を作り出している点で、両者は若干異なる。しかし、外見は全く同じものを意識して作っているのは明かで、使用側もこれを使い分けていたとは考えにくい。両者は肉眼では胎土が異なるため、異なる土器作り集団が同じ器形を製作したときに生じる型式より下のレベルの差として理解したい。

小皿D 口径8.8cm、器高1.8cm、見込み高1.1cm、底径4.2cmを測る。見込みは若干高めで、口径に対し底型の占める割合は小さい段階である。胎土は、b-2胎土である。

小皿E 口径7.5cm、器高1.6cm、見込み高0.9cm、底径5.8cmを測る。この段階ではやや小さい法量を示している。胎土は、b-2胎土である。

小皿F 口径6.6cm、器高1.1cm、見込み高0.75cm、底径4.2cmを測る。この段階以降は確認出来ない。胎土は、b-3胎土である。

小皿G 口径10.7cm、器高2.1cm、見込み高1.5cm、底径7.0cmを測る。他の小皿よりも大きく中皿とも言える。胎土は、b-2である。

柱状高台皿A 高台外面端部が丸くなり、全体的にシャープな感じがなくなっている。胎土は、b-1である。

柱状高台皿B 器形が左右対称でなくなり、歪む。24は、a-2胎土、25は、b-1胎土で、1の方方が広くハの字に開くのが特徴である。高さは、ほぼ同じである。

柱状高台皿C 高さはより高くなり、くびれ部の屈曲する角度が開き甘くなる。胎土は、b-2である。前代と同じ胎土だが中央の孔はなくなっている。

この段階では、楕3型式、小皿7型式、柱状高台皿3型式が確認出来、多種多様な法量のものが供給されていた様相を示す。小皿に関して言えば大きさで、口径10.7cmのもの、8.5cm~8.8cm、7.5cm前後、7cm以下のものと、4つの大きさを使い分けていたようである。また、小皿B、C、柱状高台皿Bに見られるように、異なる胎土（集団）でも、同じ器形を製作し荒木田へ供給していた様相が想定される。藤田編年では、I-III期にあたる。

2-3期（12世紀中期頃） 102号土坑を標識とする。小皿Bのみ確認している。図示したものの他に同じ型式で同じ胎土のものを1点ずつ確認している。

小皿B 27は、口径8.2cm、器高2.4cm、見込み高1.4cm、底径5.0cm、28は、口径8.2cm、器高2.2cm、見込み高1.3cm、底径4.8cmを測る。前代より口径、底径が一回り小さくなり、内湾度がやや弱くなる。

器高はさほど変化はないが、底部が厚くなつた分、見込みが浅くなつてゐる。27は、a-2胎土、28は、b-1胎土で、前代からの特徴で、b-1胎土は器肉が薄いと言う特徴を保持しており、底部中央を問ますと言ふ点で、a-2胎土とは若干異なつてゐる。

この段階で、立ちあがりが急に、法量が小さくなる傾向が発現する。また、この例からも、胎土（集団）が違つても、同じ器形を製作し供給している状況がみてとれる。

2-4期（12世紀中期頃） 39号土坑を標識とする。椀、小皿、柱状高台皿を確認している。この時期は、12世紀中期頃の最終段階であり、柱状高台皿はこれ以降確認出来なくなる。

椀B 29は、底径7.6cm、30は、底径7.3cm、31は、底径8.0cmを測る。底径はやや小さくなつてゐる。29は、a-1胎土で、この胎土の特徴である見込み部において水平部分が小さく、途中から斜めに立ち上がる角度がやや急になり、段が出来る。30は、b-2胎土で、31は、b-3胎土である。29、30は底部Bである。

小皿B 32は、口径7.8cm、器高1.9cm、見込み高0.9cm、底径5.3cm、33は、口径7.8cm、器高2.1cm、見込み高1.1cm、底径5.1cm、34は、口径7.8cm、器高1.8、見込み高1.1cm、底径5.4cm、35は、口径7.5cm、器高1.9、見込み高0.9cm、底径4.8cmを測る。器高がやや低くなり、見込みは底部が肉厚になることから浅くなつてゐる。立ちあがりはさらに急になり、内湾も弱くなる。口径に対し底径の占める割合はさらに多くなつてゐる。32、33、34は、a-2胎土で、35は、b-2胎土である。32-33のうち32、33は、ナデすじが強く残る点で、製作技法は共通するが、残る位置が異なる。これは同一生産集団内の工人差を表すのか、単に偶然ナデ位置が上になつたのかは、各1個体づつしかないため断言は出来ない。34は、やや偏平化した器形で、それは次期で主流となる特徴が出現し出したものと理解する。35（b-2胎土）は、前代の器形を色濃く残している点が特徴である。しかし、見込みが浅くなり、口径に対し底径の占める割合が多くなつてゐる点など、全体の中での器形変化の大きな流れの中にあり、例外ではない。また各集団で、外見が異なるにも拘わらず、口径が7.5cm-7.8cm付近（a-2胎土では、全て7.8cm）と同じ大きさが意識されている点も特徴である。

柱状高台皿A 前代に比べ、法量がやや大きくなり、粗雑な作りになる。ナデ痕が明瞭で角が立ち、緩いカーブ状を呈さなくなる。胎土は、a-1である。これ以降確認出来なくなる。

この段階では、小皿Bにおいて、3のタイプの出現や、底部が厚く見込みが浅くなる等、次代へ繋がる特徴が目立つが、器形的には前期のプロポーションを維持する。その点で、12世紀中期頃-後半期頃の変化の中で、過渡期の様相を示していると考えられる。藤田編年では、I-I期の終わり頃にあたる。

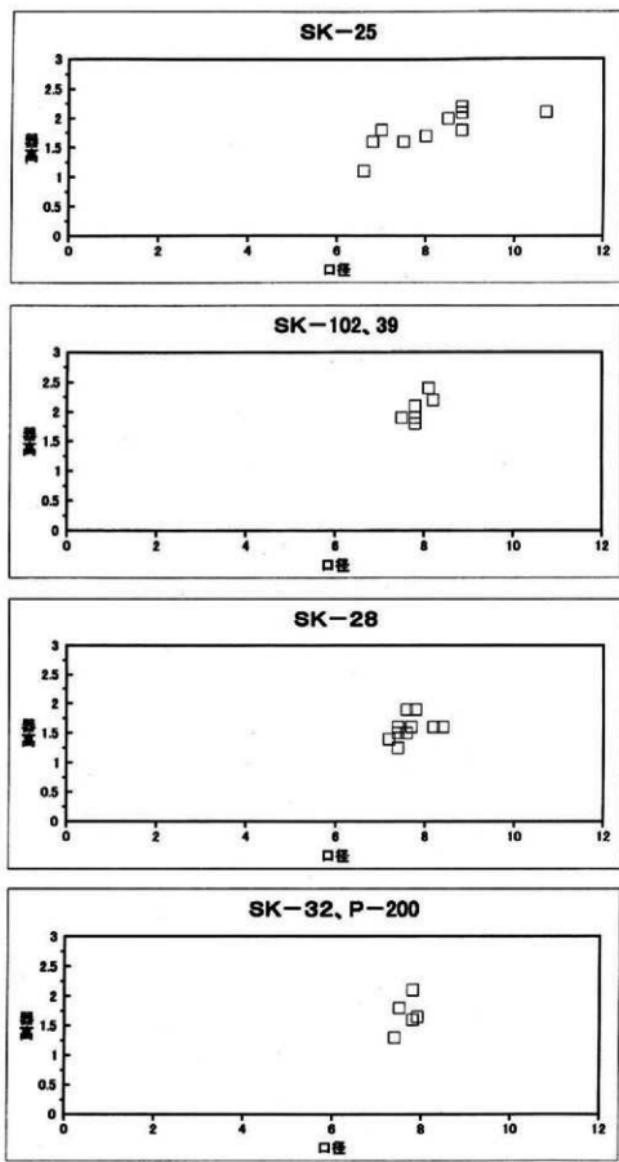
3期（12世紀後半頃） 28号土坑を標識とする。これもまとまった資料の得られた遺構で、荒木田遺跡の中では、好資料と言える。椀と小皿を確認している。12世紀後半に入ると中世土師器の様相に大きな変化が起る。その1つが京都系の非クロロ土師皿の出現である。ここでは確認出来なかつたが、全出土資料の中では、この時期と考えられる資料が確認出来る。もう1つの変化が小皿の器形に現れる。

椀A 底径7.5cmを測る。若干器肉が薄くなつてゐる以外は不明である。胎土は、b-1である。

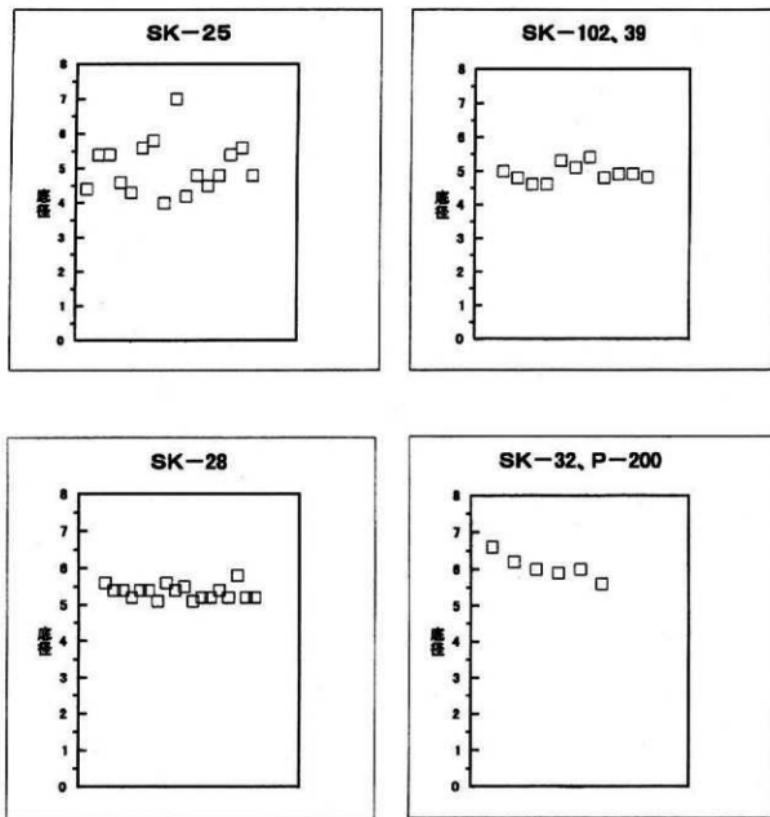
椀B 底径7.4cmを測る。胎土は、b-1である。

小皿B 40は、口径8.2cm、器高1.6cm、見込み高0.75cm、底径5.4cm、41は、口径7.7cm、器高1.6cm、見込み高0.65cm、底径5.1cmを測る。立ちあがりがより急になり器高か低く見込みが浅くなり器形が偏平化する。口径に対し底径の占める割合がより増す。しかし、底部よりS字状に立ち上がる外形を持つと言うタイプとしての特徴を維持している。40、41とも、胎土は、b-2である。

小皿C 口径7.6cm、器高1.9cm、見込み高1.2cm、底径5.2cmを測る。立ちあがりが急になり、口径に対し底径の占める割合がより増す。内部にナデ痕が目立ち、見た目が台形状を呈する点は変わらない。



第182図 口径／器高時期別分布図



第183図 底径時期別分布図

法量が前代では他の型式より一回り小さかったものが、ここでは、ほぼ同じになっている点が特徴である。胎土は、b-2である。

小皿D 43は、口径7.2cm、器高1.4cm、底径5.1cm、44は、口径7.8cm、器高1.9cm、見込み高1.2cm、底径5.4cmを測る。立ちあがりがより急になり、口径に対し底径の占める割合がより増す。法量が他の型式とほぼ同じになっているため、外見が似るが、2-2期と同じように見てはっきりそれと分かる低い底部を作り出している点でタイプとしての特徴を維持している。43、44とも、胎土は、b-2である。

小皿E 45は、口径7.6cm、器高1.5cm、見込み高0.7cm、底径5.6cm、46は、口径7.4cm、器高1.5cm、見込み高0.65cm、底径5.4cm、47は、口径7.4cm、器高1.6cm、見込み高0.7cm、底径5.4cm、48は、口径7.6cm、器高1.5cm見込み高0.8cm、底径5.6cm、49は、口径7.4cm、器高1.25cm、見込み高0.45cm、底径5.4cmを測る。器高が低くなり、偏平化している。見込みも若干浅くなっている。かなり見込みの浅いタイプもある。45は、a-2胎土で、46、47は、b-1胎土、48、49は、b-2胎土である。3種類と

もほぼ同じ法量、型になっているのが特徴で、この時期の主体となっている。

小皿G 口径8.4cm、器高1.6cm、見込み高0.9cm、底径5.5cmを測る。2-2期では中型の法量だったものが、他の型式のものとほぼ同じになっている。胎土は、b-2である。

この段階では小皿において、器型を偏平化し、立ちあがりを急にすることで、全ての型式が小皿Eに似た外観を呈するようになる。法量でも、見込みで若干差をつけているものの、口径、器高、底型が2-2期と異なり、ほぼ大差なく集中してくる（表1、2参照）。このことから、この時期に各生産集団内に、変化が起きたことが推察出来る。それは、各生産集団の各工人が同じような大きさの、同じような外観を呈するものを製作するようになったと言うことである。小皿B、Cが法量拡大、小皿Gが法量縮小していることからも分かる。しかし、その変化は、新たに生産集団を再編し、新しい器形を生み出すものではなく、各工人がそれまでの製作していた器形を、その求められた形に合わせたという状況が推察される。胎土においても、b-2が多くなるものの、他がないわけではなく、主な供給先をb-2としつつも他からも納入されていた状況がある。これは、ロクロ土師器消滅期まで変わらない。藤田編年II-I期の様相にあたる。

4期（12世紀後半～末頃） 32号土坑を標識とする。この時期になると、荒木田でも同一遺構内で、ロクロ土師器と非ロクロ土師皿の共存を確認出来るようになる。椀、小皿、土師皿I類を確認している。

椀A 51は、底径7.1cm、52は、底径7.1cmを測る。底部はさらに薄くなっている。51、52とも、胎土は、b-2だが、51は、内面にナデ痕が強く残る点で、異なっている。

小皿B 53は、口径7.5cm、器高1.8cm、底径6.0cm、54は、口径7.9cm、器高1.65cm、底径6.2cm、を測る。立ちあがりがより急になり、底径が大きくなり、口径に対し底径の占める割合が増す。胎土は、53は、b-2、54は、b-3である。

小皿E 55は、口径7.4cm、器高1.3cm、底径5.9cm、56は、口径7.8cm、器高1.6cm、見込み高0.7cm、底径6.6cmを測る。小皿Bと同様に屈曲したような急な立ちあがりを示し、底径が大きくなり、口径に対し底径の占める割合が増す。胎土は、55は、b-1、56は、b-2である。

土師皿I-C1 この段階では、意識的な底上げが見られる。胎土は、aである。

この段階では、小皿の立ちあがりがさらに急になることで、両者の外観がさらに似てくる。非ロクロ土師皿と両者で組成をなす。藤田編年II-I期の様相にあたる。

5期（13世紀初頭頃） 1号竪穴状遺構を標識とする。43号土坑下層、3号井戸下層の資料が同時期である。椀、土師皿I類、II類を確認している。この時期より非ロクロ系土師皿の方が、定量を占めるようになる。

椀B 底径8.4cmを測る。胎土は、a-1で、特徴である見込み部において水平部分が小さく、途中から斜めに立ち上がる角度が急になっている。

土師皿II-A1 59は、口径7.8cm、器高1.5cm、見込み高0.9cm、60は、口径7.8cm、器高1.7cm、見込み高1.3cm、61は、口径7.8cm、器高1.7cm、見込み高1.2cmを測る。胎土は59がa、60、61がbである。59では、底部中央を回す点で若干異なる。60、61は、同じb胎土でも61には指頭圧痕が強く残る点が若干異なる。

土師皿II-A2 口径7.8cm、器高1.4cm、見込み高0.7cmを測る。胎土はb。内部を刷毛調整している。これ以降は確認出来なかった。

土師皿II-A3 口径8.0cm、器高1.3cm、見込み高1.0cmを測る。胎土はb。この段階では他型式と同じくやや偏平な器形である。

土師皿I-C1 口径12.8cm、器高2.5cm、見込み高2.3cmを測る。立ちあがりがやや外傾し底部の上

げ底も目立たないものとなる。外面に指頭圧痕が目立つようになる。

この段階は、前述の通り、非ロクロ系土師皿が、定量出現してくることが特徴である。また土師皿Ⅱ類では、胎土が異なっても法量がほぼ同一であり、特にⅡ-A-1類の例に見られるように全く同じものを意識して製作している。また、その法量が前期のロクロ土師器の小皿と似たような大きさで出現している点が興味深い。藤田編年Ⅱ-I 3期の様相にあたる。

6期（13世紀前半～中期頃） 1号埋納ピット（P-200）を標識とする。41号土坑、44号土坑、3号井戸中層の資料が同時期である。この段階以降ロクロ土師器は確認出来なくなる。ロクロ系の小皿と、非ロクロ系土師皿はⅠ類とⅡ類を確認している。

小皿B 口径7.3cm、器高1.8cm、見込み高0.9cm、底径5.6cmを測る。口径、底径が縮小し立ち上がりはさらに急になる。口径に対し底径の占める割合が増す。器形が歪み粗雑化している。しかし、底部よりS字状に立ち上がると言う、タイプとしての特徴は最後まで保持されている。胎土は、b-2である。

小皿C 口径7.8cm、器高2.1cm、見込み高1.35cm、底径5.6cmを測る。立ちあがりがより急になり、口径に対し底径の占める割合が増す。調整も粗雑化して、内外面にナデ痕が明瞭に残る。台形状を呈すタイプとしての特徴は最後まで保持されている。胎土は、a-2である。

土師皿Ⅱ-A 1 口径8.2cmを測る。器高がやや低くなっているものと観察できる。胎土は、bである。

土師皿Ⅱ-C 1 口径14.2cm、器高3.4cm、見込み高3.0cmを測る。さらに立ちあがりが外傾し、底部は上げ底状を呈さなくなる。外面に指頭圧痕を多く明瞭に残す。これ以降は確認出来なかった。胎土はbである。

土師皿I-C 2 70は、口径13.4cm、71は、口径13.4cm、器高2.3cm、見込み高1.8cm、を測る。70は、b胎土、71は、c胎土である。71は、ナデ幅が広く、指頭圧痕が残る。

土師皿Ⅱ-C 1 72は、口径7.6cm、器高1.5cm、見込み高0.95cm、73は、口径8.0cm、器高1.6cm、見込み高1.15cm、74は、口径7.6cm、器高1.7cm、見込み高1.2cmを測る。72、73は、b胎土、74は、c胎土である。b-c胎土間では、口縁端部を面取りする幅と、立ちあがりの内湾度が異なる。bにおいても1と2では底部の形が異なっている。これ以降は確認出来ない。

土師皿Ⅱ-C 2 75は、口径8.2cm、器高1.3cm、見込み高0.9cm、76は、口径7.8cm、器高1.3cm見込み高1.0cm、77は、口径8.2cm、器高1.3cm、見込み高0.9cmを測る。この段階では、やや外傾状に立ち上がる。75はb胎土、76、77はc胎土で76、77を見れば分かるように胎土が異なっても、同じ器形を製作している。

この段階では、非ロクロ系土師皿の口縁端部を面取りするCタイプの型式が増え、主体を占める。ロクロ土師器は、粗雑化が進み消滅する。胎土で言えば、非ロクロ系で、b胎土を主としながら、c胎土も存在している。これまでのa-bの組み合わせから、b-cの組み合わせに変わっている。藤田編年Ⅱ-2期の様相にあたる。

7期（13世紀後半頃） この段階より非ロクロ系土師皿のみとなる。土師皿Ⅰ類、Ⅱ類を確認している。

土師皿Ⅱ-A 1 口径8.4cm、器高1.25cmを測る。立ちあがりが急になり、口径に対し底径の占める割合が増す。胎土はbである。

土師皿Ⅱ-A 3 口径7.5cm、器高1.4cm、見込み1.0cmを測る。薄い器肉は変わらないが、口縁部の立ち上がり幅を大きく作り出すようになる。胎土はbである。

土師皿 I - C 3 口径12.0cmを測る。この段階では器肉は厚く、外面に指頭圧痕が残る。胎土は b である。

土師皿 II - C 2 口径7.4cm、器高0.9cmを測る。相対的に法量は小さくなり、立ち上がりは急になっている。胎土は b である。

この段階では、C タイプの面取りがやや丸くなっている。胎土は b のみとなる。荒木田遺跡では、遺構が減少し土師器自体の出土量が減少する。藤田編年 III - I 期の様相にあたる。

8 期（14世紀前半頃） 18号土坑を標識とする。土師皿 I 類を確認している。これ以降も資料は散発的に出土する。胎土も変化すると考えられるが、資料不足ではっきりとは分からぬ。

土師皿 I - A 1 口径11.2cm、器高1.7cm、見込み1.4cmを測る。胎土は b である。

土師皿 I - C 2 口径11.8cm、器高2.3cm、見込み1.8cmを測る。器肉はさらに薄く、器形も歪み始める。面取りも形骸化しており、はっきり確認出来ない箇所もある。胎土は b である。

土師皿 I - C 3 口径12.8cmを測る。器形の歪みが大きく、器肉も薄くなり、面取りが甘くなっている。内外面に凸凹が目立つ。胎土は b である。

この段階では、C タイプの口縁端部の面取りに形骸化が見られ、器形に歪みが生じる。胎土は b のみである。藤田編年 III - II 1 期の様相にあたる。

5.まとめ

資料的に制約があり、連續性を追えたのは、小皿 B のみであり、その他は欠損が生じたが、全体の流れをまとめてみた。大きな画期を見出せたのは、12世紀中期頃～12世紀後半頃での変化である。25号土坑で見られた多種多様な型式、法量をもった組成が、28号土坑においては、それぞれの型式の特徴を持ちながらも、ほぼ同じ法量、外観を呈する器形を一齊に作り出している。これは、タイプとしての特徴を残し、しかも胎土も限定されるわけではないので、再編と言ふよりは、大きさ、法量に対する消費者側の欲求に合わせての変化とは考えられないだろうか。またこの時期は加賀国において非ロクロ系の土師皿の出現期と重なる。それは、藤田氏の編年で言えば I - III 期～II - I 1 期の変化にあたる。しかし、両者の関係を述べるには、非ロクロ系土師皿の出現期の資料が少なすぎる。よって、今後の課題としたい。

次に胎土と各型式の関係について述べてみたい。肉眼による胎土分類に基づき、三辻氏に蛍光X線分析を依頼した結果、ロクロ土師器については、b - 2、b - 3 以外は、非ロクロ土師器については、a - c 以外は、いずれかの因子で分けられるとしている。しかし、分けられるとしても、差ほど離れた位置ではなく、ほぼ同じ地域に在るとしている。よって各胎土間にある地域差は、小さいものであると結論付けられている。この状況について、考古学的に見てみたい。

まず、ロクロ土師器について検討する上で、表 3 を見て頂きたい。これは、検討を行った遺構について、図示しなかった資料も含めて、各形式と胎土間の関係を見たものである。ロクロ土師器については見て分かるように、組み合わせに時代差はないことを述べておく。次に、a 類について見てみると、a - 1 は、三辻氏のおっしゃる通り、Fe量が少ないためか、白の強い色調がほとんどであるが、a - 2 に関して言えば、橙色を強く発するものが存在する。また、両者には作り分けが存在する。a - 2 胎土は、碗、小皿、柱状高台皿を全て製作しているにもかかわらず、a - 1 胎土に限っては小皿を製作していない。そして、b 類について見てみると。まず発色の違いを見ると、b - 2 胎土では黄色味の強い発色が主体である。b - 3 は白味の強い発色が主体で、b - 1 胎土に関しては b - 2 胎土と似る。しかし、b - 1 は、焼成が良く堅緻である特徴を唯一持っている。科学的知識に乏しい筆者が述べるのは危険を

第22表 時期・型式別地土相調査表

伴うが、Rb-Sr値表を見てみると、b-2胎土、b-3胎土に関しては、三辻氏のおっしゃる通り分けることは出来ないが、b-1胎土のみまとめて他のどの胎土よりも外れた位置にある。このことからもb-1胎土は1つの独立した集団とは言えないだろうか。一方で、b-2胎土、b-3胎土に関して言えば、あくまでも肉眼観察の上での話だが、b-3胎土は、その器表面の特徴から、触れた感触が他の胎土とは異なっており、b-1胎土、b-2胎土を分けるより、b-2、b-3を分ける方が容易であった。しかし、分析値を見る限り、筆者も異なる胎土とは考えにくい。同じ胎土を使用しながらも、出来あがった製品を肉眼観察すると異なって見えると言う状況は何を意味するのだろうか。考察で述べた通り、共通の型式を複数の胎土（集団）で、さらには下のレベルの型式差を持ちながら、製作していた状況からも、荒木田遺跡に土器を納入していた集団は、複数であったと言えるのではないか。しかし、それは、三辻氏のおっしゃる通りさほど離れた位置に存在するのではなく、ほぼ同じ地域に存在したのではないだろうか。

これらの結果を基に、1つの可能性を想定しておきたい。同じ地域の粘土を使用し同じ製品を作る1つの集団には違いないが、それは小さい集団（これまで便宜上これらの小集団を集団と呼んでいたが、それは工房単位の集団か、工人個人であったのかは、これだけの資料ではなんとも言えない）の集合体であったのではないか。そして、製品を肉眼観察すると異なって見えると言うのは、採掘した素の粘土を土器作り用に加工する方法が、各集団毎に異なっていたのではないかと考えられる。かけ離れ過ぎていて例にならないかもしれないが、銭畠遺跡の須恵器の胎土分析において、粘土に混和材を入れる等の通常の加工を行っても分析値には影響がないことが報告されている（望月1993）。

一方で非クロロ土師器については、肉眼観察でクロロ土師器と非クロロ土師器の胎土は異なっており、両者が同時期に並存することからも、新しい土器作り集団と考える点で、三辻氏の分析値と一致するものである。まずは表3を見て頂きたい。b胎土は、4期以外は、一貫して出土しており、型式の作り分けも存在せず、7期以降はb胎土のみとなることからも1つの独立した集団と考えたい。三辻氏の分析値でa、cとbは区別出来る可能性があると言う結果を積極的に受止めるものである。aとcに関して言えば、aは非常に精良な胎土で、cはやや粗い胎土であり見た目はやはり異なると言わざるを得ない。しかし、表3を見ると、5期は、a-b胎土の組み合わせで存在し、次の6期ではb-c胎土の組み合わせに変わり、7期以降はb胎土のみとなる。この状況から見れば、a-c胎土は対応しており、精良な胎土が粗雑化したと言う時代差と見る解釈も存在する。一方で、集団内ではクロロ土師器と同じ状況が想定出来、時代と共にa胎土からc胎土へ供給先が移動したと見ることも出来る。筆者には現時点ではどちらか断定することは出来ないが、少なくともa-cとbと言う二者は存在していたわけで、規模は小さいが、クロロ土師器と同じ状況が存在する点は興味深い。

また、今回このような集団を想定するに至ったが、これを束ね、まとめた人物が存在したはずである。それが土器作り集団内の人物なのか、仲買を行った商的な人物なのか、それとも土師器を消費した荒木田遺跡の住人かを考えることは、考古学的にアプローチするには限界があるかもしれないが、中世流通史を考察する上で重要な課題である。

もっとも、これは荒木田遺跡の様相に限ったことである。各集落遺跡の階層差等を考えると、全ての遺跡が同一とは考えにくい。よって最後に、荒木田遺跡と距離的に近い松梨遺跡の資料との比較結果について述べたい。分析値では、荒木田遺跡の資料とは異なり、古代の产地の資料とも異なる結果が出ている。荒木田遺跡の資料と比較すると、口径が大きくて、立ち上がり幅を大きく作り出して成形しており、口径に占める底径の割合が小さい。これは荒木田遺跡以前の資料と言え、型式的には厳密に比較出来ないが、小皿Bの系譜は追えそうである。しかし、時代差があるので断定は出来ない。また、松梨遺

跡の小皿においては、古手の要素をもつ d 胎土（加賀南部型）と e 胎土（新産地、非加賀南部地域型？）が共存している。しかし、産地が異なっても同じ器形を意識して製作され、産地差が器形に現れている。既に荒木田遺跡での様相が松梨遺跡の段階で観察出来るが、荒木田遺跡では、松梨遺跡の d 類胎土のような加賀南部型に合致するものではなく、新産地である e 類胎土と似ているが、他地域と考えられる資料で構成される。その点でも松梨遺跡は古代的様相が残ると言えるのだが、古代末～中世前期において製作地域が異なっても、その時代に製品として求められているものが共通していたことは言える。これらのことから、三辻氏の分析結果と合わせて考えると、筆者もその生産地は多数であると考える。また、遺跡の距離が近接していても、荒木田遺跡と松梨遺跡では土師器の供給先は異なっており、異なる生産地（土器作り集団）との繋がりをもっていた。この事実が加賀地域の全ての村落に共通するのかどうかは、現時点では不明だが、その生産地と集落が近い、遠いに関係なく、集落との別の関係で供給が行われている。それは、生産組織自体は 1 つで、この生産地で作らせた土器は松梨へ、荒木田へというように振り分けていたのか、生産組織自体も多数存在したのか両者の可能性があり、一国単位より小さい地域の中での、流通圈の存在も考えらる。中世土師器の流通の解明には前述の課題と同様に、同じ器形を意識して多数の生産地で製作している意味やその背景をさらに追求していくことが課題と考える。

引用・参考文献

- 藤田邦雄1988年「中世」『辰口西部遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
藤田邦雄1989年「中世土器素描」『北陸の考古学』石川県考古学研究会
藤田邦雄1992年「加賀における様相—土師器—」『中世前期の遺跡と土器、陶磁器、漆器』北陸中世土器研究会
田嶋寅人1986年「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
塙内光次郎1984年「曾正寺遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
越坂和也1987年「中世集落の変遷と土器の組成」『永河町マグナガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
田嶋正と1981年「中世土師器」「勅使館跡発掘調査報告」石川県加賀市教育委員会
田嶋正と1986年「勅使館跡」石川県加賀市教育委員会
宮下幸大1992年「遺物」「錢畠遺跡Ⅰ」石川県小松市教育委員会
望月精司1993年「遺物」「錢畠遺跡Ⅱ」石川県小松市教育委員会
望月精司、三辻利一1994年「考察」「松梨遺跡」石川県小松市教育委員会
松本洋明1988年「十六面・薬王寺遺跡の中近世土器に関する考察」「十六面・薬王寺遺跡」奈良県立橿原考古学研究所
森田 勉、横田賀次郎1978年「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」「研究論集 4」九州歴史資料館
上田秀夫1982年「14-16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究 2」日本貿易陶磁研究会
森田 勉1982年「14-16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究 2」日本貿易陶磁研究会
小野正敏1982年「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究 2」日本貿易陶磁研究会

第7章 自然科学の調査と分析

第1節 荒木田遺跡出土土師器の蛍光X線分析

三辻利一

1)はじめに

元素分析による古代土器の産地問題の研究の難しさは1)素材粘土そのものもつ不確定性と、2)土器生産地の余りにも多過ぎることの2点にある。筆者は1)の難点を避けるため、製品の土器から研究を進めるにした。窯跡出土須恵器から分析を開始したのも、このような考え方があったからである。しかし、1)の難点を避けることは出来ても、2)の問題は避けることはできない重要問題である。この点を突破する唯一の道はこれまで誰も経験したことのないような大量の窯跡出土須恵器を分析することである。これに対応できる分析法は蛍光X線分析法しかない。従来、蛍光X線分析法は酸やアルカリで容易に溶解できない、難溶性の資料の非破壊分析という点に着目されて使用してきた。もちろん、土器の分析でもこの点は重要な意味をもっているが、この他に、大量の資料を迅速に分析できない限り、2)の問題を解決することはできない。ところが、1970年代から、コンピューターの制御によって完全自動分析ができる装置が市販されることになった。この装置は大量の資料を従来的分析していく上にきわめて有用である。安定性の良いX線管球や性能の良い分光結晶や検出器の開発に伴って、最近の完全自動式蛍光X線分析装置は土器や石器の産地同定の研究には不可欠の分析装置となっている。筆者は過去20年以上にわたって、エネルギー分散型、波長分散型の両型式の完全自動式蛍光X線分析装置を使用して、古代土器の産地問題の研究を続けてきた。

当然データ処理法もこの装置に対応させて、大量の資料を容易に処理できるように改良しておかなければならぬ。それが筆者によって提案されたJG-1（標準試料）による分析値の標準化表示法である。さらに、多数の元素を分析するのではなく、有効性を確認された少數元素の分析である。筆者の場合、全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、K、Ca、Rb、Srの4元素が選択された。他の元素は地域差を示すことが示された段階で補足的に使用することにしている。過去20年の研究で、これらの4元素を中心にして、古代土器の産地問題の研究は十分可能であることが示された。K-Ca分布図やRb-Sr分布図における定性的な検索、K、Ca、Rb、Srの4因子を使った2群間判別分析の導入によって古代・中世土器の産地推定法はでき上がっている。

産地とは土器の生産地、すなわち窯跡のことである。須恵器、瓦、中世陶器のように堅く焼成する土器類では窯窓で焼成される。堅固に作られた窯窓は土器片とともに残っており、産地同定の研究には最適の研究対象となった。しかし、これらの土器の研究成果は拡張され、窯跡が残っていない軟質土器（土師器、弥生土器、縄文土器）の胎土研究にも活用され、考古学的に有意な情報が引き出されている。

以上を前置きとして、本報告では荒木田遺跡から出土した土師器の蛍光X線分析の結果を、考古学的な土器型式の分類結果を対応させて考察した結果について述べる。

2) 分析結果

分析値は表2にまとめられている。数値のままではわかり難いので、これらの数値を使って図を作成し、図上で比較することにした。

図1には、K因子を比較してある。ロクロ土師器はa-1、a-2、b-1、b-2、b-3の5系式に細分されているが、大部分の資料はKの値が0.5-0.6の間に分布することがわかる。a-1、a-

2でK量の少ないものが3点、b-2で多いものが1点あるが少數であるため、これだけではなんともいえない。むしろ、大部分の資料が0.5~0.6の間に分布するという点で、ロクロ土師器のK量は細分化された形式に無関係であると考えられる。これに対して、非ロクロ土師器ではa、c類に比べて、b類にはK量が多く、胎土に違いがあることがわかる。a類の1点がb類と対応しているところから、今後、数多く分析した場合、もう少し異なる傾向がでるかは不明である。

図2にはRb因子を比較してある。一般に、微量元素、Rbは主成分元素、Kと正の相関性をもつ。したがって、Rb因子にはK因子と同じ傾向をもつことが予想される。図2をみると、ロクロ土師器の大部分の資料は0.3と0.45の間に分布しており、K因子と同様、Rb因子にも土器の型式分類の差異は反映されていないことがわかる。これに対して、非ロクロ土師器ではa類とc類の区別はできないが、b類にはRb量が多い傾向があることがわかる。K、Rbの両因子で、b類はa、c類とは異なるのである。したがって、型式分類の結果は反映されているのである。

図3にはCa因子が比較されている。ロクロ土師器ではb-2、b-3にCa量が多い傾向があり、両者の相互識別はCa因子では困難であろう。a-2の半数以上にもb-2、b-3に対応するが、a-1、b-1にはa-2、b-2、b-3に比べて、Ca量が少ない傾向があり、型式による差があるように見える。他方、非ロクロ土師器ではb類、c類に差異はないが、a類にはCa量が少ない傾向がある。

図4には、Sr因子を比較してある。一般に、微量元素、Srも主成分元素、Caと正の相関性をもっており、Ca因子で得られた結果と同じような傾向がSr因子でもみられることが予想される。図4をみると、ロクロ土師器のa-1類では含有量が多い2点と、少ない3点の試料に分かれ。図3のCa因子でも、既に、この傾向は認められていたのであるが、図4のSr因子では両者の差は増幅されて明確にグループに分かれることになった。同様に、a-2でも2グループに分かれることがわかる。Sr因子の結果を優先させると、a-1、a-2にはそれぞれさらに2つのグループに細分化されることになる。b-1類はSr量の少ないa-1、a-2グループと対応しているように見える。b-2、b-3は両者の違いはCa、Sr因子ではほとんど認められないが、a-1、a-2、b-1とは異なるといえようである。

一方、非ロクロ土師器ではCa因子の場合と同様、b類とc類の区別はできず、a類とは若干の違いがありそうである。

図5にはFe因子を比較してある。ロクロ土師器ではa-1、a-2とb-1、b-2、b-3で明らかに異なる。a-1、a-2はb-1、b-2、b-3に比べてFe量が少なく、幾分白味を帯びているはずである。これに対して、非ロクロ土師器ではFe量に差異は認められない。

以上の結果をまとめたのが表2である。どの因子でもペアとなって離れないロクロ土師器のb-2とb-3は土器形式からは区別できても、元素分析では区別できないことを示している。例えば、K因子ではロクロ土師器のa類とb類を区別できても、a-1とa-2、b-1、b-2とb-3の区別はできないことがわかる。非ロクロ土師器では、a類、c類とb類の区別は出来ても、a類とc類の区別は難しいことをしめしている。このようにして、ロクロ土師器のb-2、b-3以外の土器はいずれかの因子で分ける可能性があることがわかった。ただ、分けられるといっても、大きな差異はなく、いずれも近辺で作られた土師器とみられる。

ロクロ土師器は12世紀代、非ロクロ土師器は13~14世紀代と推定されており、年代も違うように、製作場所、したがって、粘土の採取地も異なると考えられる。そうであれば、K-Ca、Rb-Srの分布では両者ははずれて分布するはずである。図6には、ロクロ土師器と非ロクロ土師器の両分布図を示してあるが、予想どおり、両者ははずれて分布することがわかる。両土師器の分布範囲の内で、形式分類された土師器の地域差がある訳であるから、その地域差は小さいことが理解できる。

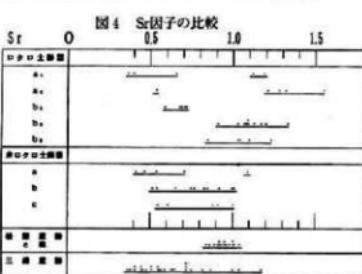
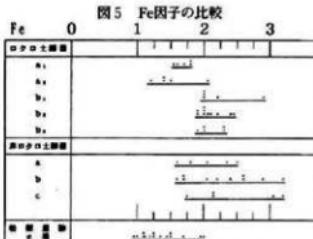
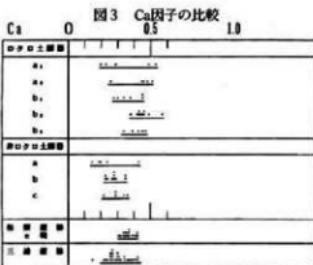
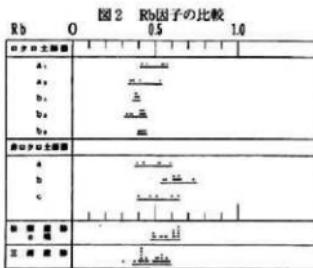
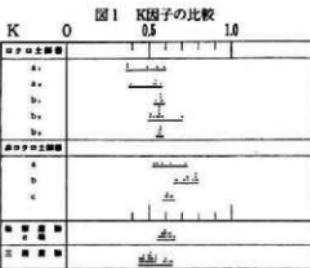


図6 ロクロ土鋸器と非ロクロ土鋸器の両分布図

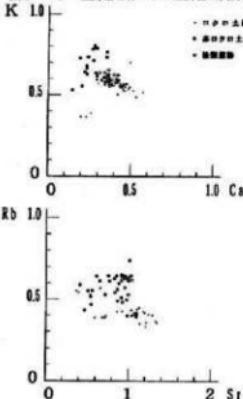


表1 各因子による土鋸器の分類

| | ロクロ土鋸器 | 非ロクロ土鋸器 |
|----|------------------------|---------|
| K | a-1, a-2/b-1, b-2, b-3 | a, c/b |
| Rb | a-1/a-2, b-1, b-2, b-3 | a, c/b |
| Ca | a-1, b-1/a-2, b-2, b-3 | a/c, b |
| Sr | a-1, a-2, b-1/b-2, b-3 | a/c, b |
| Fe | a-1, a-2/b-1, b-2, b-3 | No |

最後に、荒木田遺跡に近い松梨遺跡から出土した、ほぼ同時期とみとめられる土師器 e 梗との比較の結果を説明する。図1～5には、松梨遺跡出土の e 梗の分析値もプロットしてある。荒木田遺跡のロクロ土師器と対比すると、K因子では松梨遺跡のものがやや多い目に、また、Rb因子でも同様の傾向があることを示す。他方、Ca、Srでは荒木田遺跡のものが多い目であることがわかる。その結果、図6では荒木田遺跡のロクロ土師器と松梨遺跡の e 梗はほぼ分離し、素材粘土の異なることを示している。これまでの窯跡出土の古代土器の分析データを見ていると、一般的には、一箇所では1種類の粘土を素材として使用していることがわかる。このことを前提とすると、荒木田遺跡のロクロ土師器と松梨遺跡の e 梗はそれぞれ、別場所の製品と推察される。

また、念仏林南遺跡や松梨遺跡の古い土師器胎土はCa、Sr量が少なく、所謂、加賀地域南部地域型の特徴をもっており、荒木田遺跡の土師器とは胎土は異なる。松梨遺跡ではa～d類までの土師器胎土はe類とは異なっており、前者は加賀南部型胎土であるのに対し、後者は荒木田遺跡の土師器胎土に似ているがびつたりと一致している訳ではない。

以上のことから、加賀地域では土師器の製作場所は何箇所もあること、そして、素材粘土は南加賀地域に均質に分布している訳でもなく、化学特性が微妙に異なる粘土が分布していることがわかる。その結果、土師器の一大生産センターなるものはこの地域ではなく、小規模な生産地がいくつもあり、そのことが元素分析による土師器の流通の解明を難しくしているように思われる。

表2 荒木田遺跡出土土師器の分析データ

| ロクロ土師器 | | 年代 | K | Ca | Fe | Rb | Sr | Na |
|---------|------|--------|-------|-------|------|-------|-------|-------|
| a-1類 | NO.1 | 12C | 0.372 | 0.226 | 1.56 | 0.536 | 0.398 | 0.160 |
| | 2 | ~ | 0.351 | 0.486 | 1.81 | 0.45 | 1.12 | 0.403 |
| | 3 | ~ | 0.365 | 0.200 | 1.73 | 0.545 | 0.371 | 0.157 |
| | 4 | ~ | 0.494 | 0.525 | 1.76 | 0.423 | 1.19 | 0.468 |
| | 5 | ~ | 0.586 | 0.291 | 1.34 | 0.567 | 0.655 | 0.213 |
| a-2類 | 6 | ~ | 0.569 | 0.461 | 2.04 | 0.363 | 1.210 | 0.380 |
| | 7 | ~ | 0.537 | 0.483 | 1.41 | 0.405 | 1.280 | 0.431 |
| | 8 | ~ | 0.535 | 0.453 | 1.35 | 0.372 | 1.320 | 0.390 |
| | 9 | ~ | 0.533 | 0.509 | 1.48 | 0.352 | 1.550 | 0.405 |
| | 10 | ~ | 0.388 | 0.26 | 1.23 | 0.534 | 0.535 | 0.151 |
| b-1類 | NO.1 | ~ | 0.566 | 0.445 | 2.17 | 0.478 | 0.683 | 0.377 |
| | 2 | ~ | 0.537 | 0.451 | 2.03 | 0.384 | 0.719 | 0.374 |
| | 3 | ~ | 0.570 | 0.303 | 2.92 | 0.376 | 0.594 | 0.396 |
| | 4 | ~ | 0.573 | 0.38 | 1.96 | 0.384 | 0.713 | 0.380 |
| | 5 | ~ | 0.580 | 0.339 | 2.00 | 0.384 | 0.686 | 0.352 |
| b-2類 | NO.1 | ~ | 0.529 | 0.455 | 1.9 | 0.347 | 1.130 | 0.395 |
| | 2 | ~ | 0.559 | 0.433 | 1.97 | 0.417 | 1.070 | 0.410 |
| | 3 | ~ | 0.514 | 0.419 | 2.21 | 0.435 | 1.030 | 0.384 |
| | 4 | ~ | 0.549 | 0.457 | 1.94 | 0.419 | 1.09 | 0.421 |
| | 5 | ~ | 0.578 | 0.385 | 2.01 | 0.427 | 0.912 | 0.326 |
| b-3類 | NO.1 | ~ | 0.56 | 0.442 | 2.08 | 0.407 | 1.090 | 0.473 |
| | 2 | ~ | 0.564 | 0.432 | 2.42 | 0.334 | 1.206 | 0.373 |
| | 3 | ~ | 0.557 | 0.448 | 1.96 | 0.406 | 1.080 | 0.417 |
| | 4 | ~ | 0.701 | 0.489 | 2.05 | 0.426 | 1.170 | 0.326 |
| | 5 | ~ | 0.572 | 0.566 | 2.45 | 0.354 | 1.330 | 0.389 |
| 非ロクロ土師器 | NO.1 | ~ | 0.57 | 0.341 | 2.27 | 0.364 | 1.060 | 0.397 |
| | 2 | ~ | 0.571 | 0.471 | 1.92 | 0.419 | 1.230 | 0.385 |
| | 3 | ~ | 0.565 | 0.428 | 1.96 | 0.412 | 1.040 | 0.378 |
| | 4 | ~ | 0.562 | 0.447 | 1.95 | 0.438 | 1.100 | 0.376 |
| | 5 | ~ | 0.558 | 0.387 | 2.32 | 0.425 | 0.848 | 0.382 |
| a類 | NO.1 | 13～14C | 0.715 | 0.187 | 2.52 | 0.591 | 0.417 | 0.177 |
| | 2 | ~ | 0.579 | 0.426 | 2.04 | 0.387 | 1.09 | 0.395 |
| | 3 | ~ | 0.553 | 0.201 | 1.83 | 0.524 | 0.537 | 0.210 |
| | 4 | ~ | 0.526 | 0.145 | 1.61 | 0.426 | 0.473 | 0.170 |
| | 5 | ~ | 0.632 | 0.244 | 2.35 | 0.528 | 0.767 | 0.283 |
| B類 | NO.1 | ~ | 0.757 | 0.346 | 1.60 | 0.731 | 1.010 | 0.437 |
| | 2 | ~ | 0.776 | 0.28 | 2.58 | 0.620 | 0.767 | 0.409 |
| | 3 | ~ | 0.789 | 0.282 | 2.24 | 0.538 | 0.848 | 0.421 |
| | 4 | ~ | 0.714 | 0.271 | 3.18 | 0.553 | 0.524 | 0.347 |
| | 5 | ~ | 0.781 | 0.277 | 2.39 | 0.633 | 0.83 | 0.401 |
| C類 | NO.1 | ~ | 0.664 | 0.228 | 1.67 | 0.544 | 0.752 | 0.308 |
| | 2 | ~ | 0.728 | 0.352 | 2.6 | 0.503 | 1.000 | 0.473 |
| | 3 | ~ | 0.674 | 0.239 | 1.72 | 0.610 | 0.659 | 0.310 |
| | 4 | ~ | 0.732 | 0.241 | 2.91 | 0.557 | 0.554 | 0.329 |
| | 5 | ~ | 0.780 | 0.292 | 2.04 | 0.649 | 0.918 | 0.406 |
| D類 | NO.1 | ~ | 0.605 | 0.359 | 1.75 | 0.401 | 0.995 | 0.432 |
| | 2 | ~ | 0.639 | 0.223 | 3.23 | 0.468 | 0.552 | 0.268 |
| | 3 | ~ | 0.605 | 0.288 | 2.17 | 0.599 | 0.880 | 0.292 |
| | 4 | ~ | 0.601 | 0.335 | 3.04 | 0.508 | 0.914 | 0.284 |
| | 5 | ~ | 0.625 | 0.290 | 2.13 | 0.638 | 0.814 | 0.306 |

第2節 荒木田遺跡出土鉄滓と鉄製品の金属学的調査

大澤正己

概要

古代と中世に属する層位から出土した荒木田遺跡の鉄滓と鉄製品を調査して、次の点が明らかになった。

<1> 古代の7号掘立柱建物跡の柱穴の抜き取り穴から出土した鉄滓は、砂鉄製鍊滓であった。鉱物組成はウルボスピニル ($2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) とイルミナイト ($\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) を晶出し、化学組成の二酸化チタン (TiO_2) は20%台、バナジウム (V) 0.19~0.21%、酸化マンガン (MnO) 0.61%など脈石成分が多い。塩基性砂鉄原料である。

<2> 同じく古代に比定される23号掘立柱建物跡の柱穴抜き取り穴出土の鉄滓は、鉄素材の折り返し曲げ鍛接の高温作業 (1,250~1,400°C) で排出された鍛錬鍛冶滓であった。形状は鍛冶炉の炉底に堆積形成された椭形状を呈し、鉱物組成は、ヴスタイト ($\text{Wustite} : \text{FeO}$) を晶出し、二酸化チタン (TiO_2) は0.22%、バナジウム (V) 0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.40%などと製鍊滓と比較して脈石成分は低減する。

<3> 中世に属する鉄滓は、何れも鍛錬鍛冶滓に分類される。鉱物組成はヴスタイトを晶出し、化学組成の二酸化チタン (TiO_2) は0.18~0.29%、バナジウム (V) 0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.14~0.56%など脈石成分は低目である。古代鍛冶滓組成に近似する。

<4> 時期不詳のノミ状鉄器は、低炭素鋼 (C: 0.12%前後) と高炭素鋼 (C: 0.8%以下) の貼り合わせ鍛接の「合わせ鍛え」であった。該品は鉄中の非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物、つまり鉄やマンガン、珪素及び構などの酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称）にウルボスピニル ($2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) が存在するので、製鉄原料は砂鉄系が想定される。つまり、在地製作の可能性をもつ。

また、他の不明鉄器 (ARK-13) の鉄中非金属介在物からもウルボスピニル系が検出された。こちらは更に酸化バナジウム (V_{2}O_5) を17%と高値を含み、砂鉄特有成分が2成分となり、砂鉄系原料を不動のものとする。なお、該品は心金に、焼入れ、焼もどし組織のソルバイト (α 鉄と微粒セメントイトの機械的混合物) をもつ。皮金は軟質鋼の使用が予測されるが腐食消滅して、その実態は不明となる。

他にもう1点不明鉄製品があるが、こちらは過共晶組成 (C: 4.23%以上) の白鉄であり、非金属介在物は硫化鉄 (FeS) であった。不明鉄器としたが、下げる鍛冶原料鉄かも知れぬ。

<5> 以上、荒木田遺跡からは、直接鍛冶構造は検出されなかったが、鉄滓や鉄製品からみて遺跡周辺の何處かに鍛冶工房の操業域があった事が想定される。また、掘立柱建物跡の柱穴に遺存した鉄滓は、単なる紛れ込みというよりは、祭祀的埋納の意味合いが濃厚と考えられる。

1. いきさつ

荒木田遺跡は、小松市に所在する弥生時代後半から室町時代までの複合集落遺跡である。遺跡の主体は、古墳時代、古代、中世であるが、古墳時代を除く時期の層位から鉄滓や鉄製品が出土する。

今度、鉄開連遺物を通して、当時の鉄生産や鍛冶技術の実態を把握する目的から金属学的調査の運びとなった。

Table.1 供試材の履歴と調査項目

| 行 号 | 种 名 | 科 | 出 土 位 置 | 断 代 | 特征年代 | | 特征层 位 | 特征层 面 | 特征层 下限 | 特征层 上口标高 | 特征层 厚度 (m) | 特征层 描述 | C14 年代 | 化学性质 |
|--------|-------------|---|--------------------|-------------------------|-------------|----------|----------|----------|-----------|-------------|---------------|-----------|--------|------|
| | | | | | 年代 (B.C. 年) | 年代 (P-1) | | | | | | | | |
| ASR-1 | 砂质粉砂土 (颗粒状) | | 7 号墓 II 号建筑基址 P-1 | 西代 (B.C. 年) | 6.6±0.4×3 | 1.0±3 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 2 | - | - | - | P-4 | 4.4±3.2×5 | 6.1 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 3 | 小砾石粉砂土 | | 1 号墓 II 号建筑基址 | 中世 (B.C. 年) | 5.0±4.0×6 | 3.7±1 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4 | F10G r 陶罐 | | - | 中世? | 5.4±3.5×7 | 5.0±0 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 5 | - | - | L1 G r 陶罐 | - | 5.0±5.3×2 | 6.5±5 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 6 | 含砾土 | | 3 号柱 I 层 (占墓室) | 古近? | 3.0±2.3×6 | 1.6±3 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 7 | 小砾石粉砂土 | | 1 号墓 J 区 墓 | 中世 (B.C. 年)-晚商 (B.C. 年) | 5.0±3.6×5 | 2.9±2 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 10 | Z 陶盆 | | - | 中世? | 4.2±2.8×8 | 3.5±5 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 11 | - | - | 21 号墓 II 号建筑基址 P-4 | 西代 (9 C) | 5.0±4.2×9 | 6.7±7 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 12 | J1 G r 陶罐 | | - | 时间不详 | 1.1±2.0×11 | 8.6±3 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 13 | J1 长颈瓶 | | 3 号柱 | 时间不详 | 4.8±2.6×9 | 1.0±2 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 不明器物 | | 12 号柱 | 时间不详 | 4.8±2.6×9 | 1.0±2 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

Table 2 供試材の化学組成

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table. 1 に示す。鉄津 8 点、含鉄鉄津 1 点、鉄製品 3 点で合計 12 点の調査である。

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) マクロ組織

顕微鏡埋め込み試料の全体像を捉るために投影機を使って 20 倍の撮影を行った。

- (3) 顕微鏡組織

供試材は水道水で充分に洗浄・乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1,000 と順を追って研磨し、最後に被研磨面をダイヤモンドの 3 μm と 1 μm で仕上げ、光学顕微鏡観察を行った。なお、金属性鉄の炭化物はピクルル（ピクリン酸鉄アルコール液）で、フェライト結晶粒はナイタル（5% 硝酸アルコール液）で腐食（Etching）した。

- (4) ピッカース断面硬度

鉄津の鉱物組成と金属鉄の組織同定を目的として、ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Test）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンド押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

- (5) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査

EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名、X線マイクロアナライザとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に、標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組成の微小域の組織同定が可能である。

- (6) 化学組成分析

鉄津の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第 1 鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法。燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化磷 (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

3-1. 古代の鉄津

(1) ARK-1 : 砂鉄製鍊津

① 肉眼観察：平面は不整台形状で、表面は黒色流動状で滑らか肌をもつ流出津である。裏面は粘土との反応痕と砂粒を付着する。破面は気泡少なく緻密質。流出先端部の一部を残して全て破面である。表面裏とも風化現象を起こし、扱うと黒粉がおちる。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 の①～③に示す。鉱物組成は、白色雪花状結晶のウルボスピネル

(Ulvöspinel : 2FeO · TiO₂)、白色針状結晶のイルミナイト (Ilmenite : FeO · TiO₂) 淡灰色木ずれ状微細結晶のファイヤライト (Fayalite : 2FeO · SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。製鉄原料にチタン分の高い (TiO₂ : 10% 前後) 塩基性砂鉄を充当した製錬滓の品癖である。

③ ピッカース断面硬度 : Photo. 1 の③に白色雪花状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、661 Hv であった。白色多角形結晶のマグネタイト (Magnetite : FeO₄) の文献硬度値が 500~600 Hv であり、これより硬質で、チタン分固溶が考えられて、ウルボスピネルと同定される。

④ 化学組成分析 : Table. 2 に示す。鉄分少なく脈石成分の多い傾向をもつ。全鉄分 (Total Fe) は 35.18% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 含まず (0%)、酸化第 1 鉄 (FeO) 41.81%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 3.83% の割合である。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は 32.36% と多く、このうちで鐵と津の分離を促進する塩基性成分 (CaO+MgO) を 5.08% とこれも高値を含む。また、砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) は 20.36%、バナジウム (V) 0.19% も高めであって、更に脈石成分である酸化マンガン (MnO) も 0.61%、酸化クロム (Cr₂O₃) が 0.14% と多い。銅 (Cu) は 0.008% 留まりなので、砂鉄製錬滓に分類される。

(2) ARK-2 : 砂鉄製錬滓

① 肉眼観察 : 平面は不整長方形の流出津で前述 ARK-1 と同系の津である。側面は全て破面で、気泡をまったく発生しない破面とそうでない面をもつ。表面は黒褐色で滑らか肌、裏面は黒灰色を呈し、該品も表面肌はザラつき風化現象で粉っぽい津である。

② 顕微鏡組織 : Photo. 1 の④に示す。鉱物組成は、白色雪花状結晶のウルボスピネルと、淡灰色微細結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。砂鉄製錬滓である。

③ CMA 調査 : Photo. 7 の SE (2 次電子像) の白色雪花状結晶と、白色針状結晶及び淡灰色木ずれ状結晶、基地の暗黒色ガラス質スラグなどの高速定性分析結果が Table. 3 である。

POS. NO. 4

COMMENT : ARK-2

ACCELERATOR (KV) : 15

PROBE CURRENT (A) : 5.0000-08(A)

STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

124DEC-95

| EL | WL | COUNT | CH(0) | TAP | EL | WL | COUNT | PET | INTENSIT(Y LOG) | EL | WL | COUNT | CH(0) | LP | INTENSIT(Y LOG) |
|-----|----|-------|-------|-------|-----|----|-------|------|-----------------|-----|----|-------|-------|-------|-----------------|
| Y | 4 | 645 | 220 | ***** | GFI | 4 | 275 | 6472 | ***** | HI | 4 | 114 | 64 | ***** | |
| RE | 5 | 333 | 205 | ***** | BA | 4 | 185 | 6473 | ***** | PB | 4 | 64 | 60 | ***** | |
| SX | 4 | 886 | 205 | ***** | CS | 4 | 289 | 80 | ***** | TI | 4 | 121 | 60 | ***** | |
| W | 4 | 698 | 215 | ***** | SC | 4 | 305 | 84 | ***** | HG | 4 | 124 | 61 | ***** | |
| CSI | 4 | 7.13 | 7602 | ***** | TE | 4 | 315 | 68 | ***** | AU | 4 | 128 | 49 | ***** | |
| TA | 4 | 2.50 | 255 | ***** | CA | 4 | 325 | 50 | ***** | PT | 4 | 131 | 55 | ***** | |
| KH | 4 | 7.32 | 155 | ***** | QCA | 4 | 336 | 67 | ***** | IR | 4 | 135 | 58 | ***** | |
| Hf | 4 | 7.34 | 156 | ***** | CSR | 4 | 344 | 67 | ***** | OS | 4 | 139 | 51 | ***** | |
| LU | 4 | 7.84 | 85 | ***** | CR | 4 | 360 | 40 | ***** | ZN | 4 | 144 | 57 | ***** | |
| YH | 4 | 1.51 | 155 | ***** | CSL | 4 | 364 | 34 | ***** | CU | 4 | 146 | 54 | ***** | |
| QAL | 4 | 8.34 | 182 | ***** | IN | 4 | 377 | 35 | ***** | NI | 4 | 156 | 33 | ***** | |
| BR | 4 | 8.37 | 244 | ***** | U | 4 | 391 | 41 | ***** | TM | 4 | 173 | 33 | ***** | |
| ER | 4 | 8.85 | 56 | ***** | CD | 4 | 395 | 32 | ***** | CO | 4 | 179 | 33 | ***** | |
| SE | 4 | 8.85 | 56 | ***** | TR | 4 | 414 | 32 | ***** | GD | 4 | 205 | 19 | ***** | |
| SH | 4 | 9.20 | 38 | ***** | AG | 4 | 415 | 24 | ***** | OMN | 4 | 210 | 75 | ***** | |
| DY | 4 | 8.99 | 44 | ***** | PD | 4 | 437 | 24 | ***** | EU | 4 | 212 | 15 | ***** | |
| AS | 4 | 3.67 | 44 | ***** | BFR | 4 | 460 | 18 | ***** | SM | 4 | 237 | 14 | ***** | |
| CO | 4 | 2.89 | 800 | ***** | CL | 4 | 535 | 15 | ***** | CR | 4 | 239 | 15 | ***** | |
| TB | 4 | 10.00 | 39 | ***** | KU | 4 | 545 | 15 | ***** | ND | 4 | 237 | 10 | ***** | |
| GE | 4 | 10.44 | 26 | ***** | S | 4 | 537 | 14 | ***** | PR | 4 | 240 | 4 | ***** | |
| GA | 4 | 1.21 | 26 | ***** | M | 4 | 541 | 11 | ***** | Y | 4 | 236 | 23 | ***** | |
| COA | 4 | 11.91 | 49 | ***** | N | 4 | 542 | 8 | ***** | CE | 4 | 256 | 7 | ***** | |
| ** | 4 | 14.72 | 12 | ***** | ZK | 4 | 567 | 28 | ***** | LA | 4 | 267 | 5 | ***** | |
| F | 4 | 18.32 | 5 | **** | ○ZK | 4 | 587 | 28 | ***** | | | | | | |
| | | | | | P | 4 | 616 | 10 | ***** | | | | | | |

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA MG AL SI K CA TI MN FE ZR SB - 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
P ND

Photo.7(SE (2 次電子像)) に示したウルボスピネル (Ulvöspinel 2FeO · TiO₂) と針状結晶のイルミナイト (Ilmenite: FeO · TiO₂)、それに灰色木ずれ状のファイヤライト (2FeO · TiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグの組成を示す。検出元素を強度順に並べると次の様になる。珪素 (Si) 7,602、チタン (Ti) 6,472、鉄 (Fe) 3,916、アルミニウム (Al) 1,823、マグネシウム (Mg) 800、カルシウム (Ca) 497、カリウム (K) 394、マンガン (Mn) 75、アンチモン (Sb) 67、ナトリウム (Na) 49、ジルコニウム (Zr) 28 となる。製鉄原料が砂鉄であるので、チタン (Ti) 強度が高く、カフジルコニウム (Zr) も含まれる。チタン (Ti)、ジルコニウム (Zr) は砂鉄特有元素であって製錬滓の傾向を最も示すものである。各鉱物組成に見られた検出元素である。

Table.3 製錬滓 (ARK-2) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

検出元素を強度(Count)順に並べると次の通りである。硅素(Si) : 7.602、チタン(Ti) : 6.472、鉄(Fe) : 3.916、アルミニウム(Al) : 1.823、マグネシウム(Mg) : 800、カルシウム(Ca) : 497、カリウム(K) : 394、マンガン(Mn) : 75、アンチモン(Sb) : 67、ナトリウム(Na) : 49、ジルコニウム(Zr) : 28となる。

この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像をPhoto. 7に示す。分析元素の存在は、白色輝点の集中度によって読み分ける手法である。まず、雪花状結晶は、鉄(Fe)とチタン(Ti)に白色輝点が集中し、ウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と同定される。また、白色針状結晶は、同じく鉄(Fe)とチタン(Ti)に白色輝点が集中するが、こちらのチタン(Ti)濃度が高く、白色輝点より鮮明に表れてイルミナイト(Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と判別される。砂鉄特有成分の濃度が高く、かつ、砂鉄特有成分のジルコニウム(Zr)が高速定性分析で検出されていることから、該品は砂鉄製鍊滓の鉱物相と推定される。

④ 化学組成分析: Table. 2に示す。前述したARK-1製鍊滓に準じた成分系である。すなわち、全鉄分(Total Fe) 35.40%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は含まれず、酸化第1鉄(FeO) 40.50%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 5.6%の割合である。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は31.61%あり、このうちの塩基性成分(CaO+MgO)を4.5%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は20.63%、パナジウム(V) 0.21%と多く、また酸化マンガン(MnO) 0.61%など脈石成分の多い成分系となっている。また、銅(Cu)は0.008%が含有されて、砂鉄製鍊滓の成分系と判断される。

(3) ARK-6: 含鉄鉄滓

① 肉眼観察: 平面が不整六角形を呈する16 g 強の含鉄鉄滓である。表裏ともに淡茶褐色から暗青灰色を呈し、表側は酸化土砂に覆われて肌荒れは隠されるが、一部に亀裂が走る。各側面は破面となり、小割り破片であろう。裏面は緩く弯曲し反応痕を残す。

② 顕微鏡組織: Photo. 2の③~⑦に示す。表層スラグの鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイト(Wüstite: FeO)で、粒内には微小茶褐色斑点状のヘーシナイト(Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)を析出する。含鉄は金属鉄を残さず、錆化鉄のゲーサイト(Goethite: $\alpha - \text{FeO(OH)}$)となるが、辛うじてペーライト(Pearlite: フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)の痕跡が残り、これから炭素含有量は0.1%前後の極低炭素鋼と推定された。

(4) ARK-11: 楕形鍛冶滓(鍛鍊鍛冶滓)

① 肉眼観察: 平面が不整台形を呈する楕形鍛冶滓である。表裏共に暗青灰色で木炭痕を深く刻み、気泡を多発する。鍛冶炉の炉底に堆積形成された楕形滓で、ほぼ完形品である。68 g の小型品。なお、表皮は風化で消滅している。

② 顕微鏡組織: Photo. 3の⑦に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイトが大量に晶出し、その粒間を淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトと、基地の暗黒色ガラス質スラグが埋める。鉄素材の折り返し曲げ鍛鍊の高温作業で排出された鍛鍊鍛冶滓に分類される。なお、ヴスタイト粒内には、微小析出物のヘーシナイト(Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)が認められて、高温化(1,250~1,400°C)が推定された。

③ 化学組成分析: Table. 2に示す。製鍊滓に比べて、鉄分多く脈石成分の少ない成分系となる。全鉄分(Total Fe)は、60.08%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は含まれず、酸化第1鉄(FeO) 67.48%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 10.91%の割合である。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は16.58%で、このうちの塩基性成分(CaO+MgO)が1.03%含有される。また、砂鉄特

有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.22%、バナジウム (V) 0.01%と製錬滓に比べて激減し、酸化マンガン (MnO) も0.40%と少なくなる。銅 (Cu) の0.005%はバラツキの範囲であって低減とはならないであろう。脈石成分由来の塩基性成分 ($CaO+MgO$)、二酸化チタン (TiO_2)、バナジウム (V)、酸化マンガン (MnO)、酸化クロム (Cr_2O_3) などは、すべて製錬滓と比較すると低下するのが鍛錬滓の傾向であり、成分調整の精錬鍛錬滓よりも、更に減少する。

3-2. 中世の鉄滓

(1) ARK-3: 梱形鍛錬滓 (鍛錬鍛錬滓)

① 肉眼観察：平面は不整梢円形状で小型楕形鍛錬滓 (37 g)。側面3箇所を僅かに欠損するが、大略原形を留める。表皮は風化で無くなり、濃緑色粘土状の肌となる。気泡は多く露出して、木炭痕を微かに残す。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 の⑤～⑦に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイトと、淡灰色盤状結晶のファイアライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛錬滓の晶癖である。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 1 の⑥・⑦に、白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、両方とも376 Hv であった。この白色粒状結晶は、ヴスタイトと考えられて、硬度値も本来ならば450～500 Hv の範囲に収まる筈である。ところが、外観的にも風化を受けて、本来の性状を留めていない。他遺跡においても起こっている現象である。

④ 化学組成分析：Table. 2 に示す。鍛錬鍛錬滓特有の鉄分多く脈石成分の少ない成分傾向である。すなわち、全鉄分 (Total Fe) 64.15%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は含まれず、酸化第1鉄 (FeO) 60.50%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 24.48%の割合である。ガラス質成分 ($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$) は11.32%で、そのうち塩基性成分 ($CaO+MgO$) を0.67%を含有する。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) は0.29%、バナジウム (V) 0.01%と少なく、酸化マンガン (MnO) 0.39%、銅 (Cu) 0.005%であった。以上の如く、脈石成分少なく最終仕上げ工程の鍛錬鍛錬滓に分類される。

(2) ARK-4: 梱形鍛錬滓 (鍛錬鍛錬滓)

① 肉眼観察：平面は不整平行四辺形状で偏平気味の楕形鍛錬滓である。色調は、一見黄褐色の酸化被膜があるが、その下地は風化肌の濃緑色粘土状滓である。表面の肌荒れは酸化被膜で隠されるが、裏面は炉底粘土との反応痕と、木炭痕、これに気泡の露出が認められた。ほぼ完形品で、メタルチェックで僅かに反応したが、顕微鏡試料で押さえられなかった。

② 顕微鏡組織：Photo. 2 の①に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイト、その粒間の淡灰色木ずれ状結晶のファイアライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鍛錬鍛錬滓の晶癖である。

③ 化学組成分析：Table. 2 に示す。前述ARK-3鉄滓に近似した成分系である。全鉄分 (Total Fe) 62.38%に対して、金属鉄は含まれず、酸化第1鉄 (FeO) 32.28%、錆化鉄を多く含むので酸化第2鉄 (Fe_2O_3) が53.32%と高めとなる。ガラス質成分 ($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$) は低減し、6.92%で、このうちの塩基性成分 ($CaO+MgO$) は0.45%留まりである。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) は0.29%、バナジウム (V) 0.01%であった。酸化マンガン (MnO) 0.14%、銅 (Cu) は、錆化鉄に含有されて、高めの0.010%であった。該品も鍛錬鍛錬滓の最終時排出滓となる。

(3) ARK-5 : 楕形鍛治津（鍛鍊鍛治津）

① 肉眼観察：平面は不整三角形状もしくは、先端を欠損した鎌を想わせる形状の椭形鍛治津である。表裏共に基地は濃緑色粘土質津で、局部的に黄褐色錆を発する。該品も風化を受け、肌荒れではなく、気泡の露出と、僅かに木炭痕を残す。

② 顕微鏡組織：Photo. 2 の②に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のベスタイト大粒が多量に晶出し、粒間に淡灰色結晶のファイアライトと、暗黒色ガラス質スラグが埋める、鍛鍊鍛治津の晶癖である。

③ 化学組成分析：Table. 2 に示す。鉄分が多く、ガラス質スラグや軽石成分の少ない成分系でARK-3 鍛津に準ずる。全鉄分 (Total Fe) は 62.53% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.95%、酸化第 1 鉄 (FeO) 65.15%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 17.07% の割合である。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は 11.66% あり、このうちにも塩基性成分 (CaO+MgO) を 0.66% と低値を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.20%、バナジウム (V) 0.01% と少なく、酸化マンガン (MnO) 0.40%、酸化クロム (Cr₂O₃) 0.01% など少ない。銅 (Cu) は 0.005% であった。鍛鍊鍛治津に分類される。

(4) ARK-7 : 楕形鍛治津（鍛鍊鍛治津）

① 肉眼観察：平面は不整楕円形状の超小型椭形鍛治津 (29 g) である。表裏共に濃緑色粘土質の表面被膜風化津で、局部的に黄褐色錆を付着する。表面荒れは少なく、気泡を散在させ、木炭痕はあまり残さない。

② 顕微鏡組織：Photo. 3 の①に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のベスタイトと、淡灰色木ずれ状結晶のファイアライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成されて、鍛鍊鍛治津に分類される。

③ 化学組成分析：Table. 2 に示す。顕微鏡組織のベスタイト晶出量に対して、鉄分がやや低め傾向を有する津である。全鉄分 (Total Fe) は 47.93% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) が 0.15%、酸化第 1 鉄 (FeO) 33.30%、鍛鍊鉄含みの酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) が 31.31% と高めの割合であった。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) はさほど多くなく 14.59% で、このうちにも塩基性成分 (CaO+MgO) は 2.06% とやや高め傾向にある。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) は 0.19%、バナジウム (V) 0.01% などは前述してきた鉄津と大差ないが、酸化マンガン (MnO) のみは、2.29% と突出する。鍛鍊津でも酸化マンガン (MnO) は 0.61% 留まりであって、該品のみは異常である。酸化クロム (Cr₂O₃) は 0.01% と前述してきた津と差はない。また、銅 (Cu) は 0.010% と僅かに高めであるが、この程度はバラツキの範囲で認められる。赤熱鉄素材の酸化防止に粘土汁を塗布する工程があり、強いて言えば、この影響であろうか。

(5) ARK-10 : 楕形鍛治津（鍛鍊鍛治津）

① 肉眼観察：平面は不整楕円形の小型椭形鍛治津 (36 g) である。該品も表裏は、濃緑色粘土質の表皮風化津となる。表面は気泡の露出と木炭痕を有するが、大きな肌荒れはない。裏面は気泡を多発し、木炭痕を残し、やや荒れ気味の肌である。

② 顕微鏡組織：Photo. 3 の②～⑥に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のベスタイトと、その粒間に淡灰色盤状結晶のファイアライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛鍊鍛治津の晶癖である。また、該品には金属鉄粒の零れがあって、それらの組織を④～⑥に示す。3種類の金属鉄粒は、いずれも低炭素鋼である。白いフェライト基地に黒く細いフェライト粒界が走り、その交点には、極く微量のパーライト (Pearlite) が析出する。このパーライトの占める面積は、炭素含有量の増加とともに増し、焼ならし状態では 0.4% 前後で約半分、0.77% で全部パーライトとなる。該品のパーライト

析出量から炭素含有量を推定すると0.02%前後であろう。

③ 化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) は54.26%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.17%、酸化第1鉄 (FeO) 58.46%、顕微鏡組織では金属鉄粒や鉄化鉄のゲーサイトが散在したので酸化第2鉄 (Fe₂O₃) は多いと予測したが、意に反して12.37%と少なかった。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は21.79%あり、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) を1.44%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) は0.18%、バナジウム (V) 0.01%留まりで、酸化マンガン (MnO) 0.56%は若干高めであるが、酸化クロム (Cr₂O₃) は0.01%と少ない。脈石成分は特別高くはないが、鍛錬鍛冶津に分類される。

3-3. 鉄製品

(1) ARK-12: ノミ状鉄器

① 肉眼観察：現存長さ11.2cm、最大幅2.0cm、厚み1.1cmで断面が台形を呈する鉄製品である。鉄製品は直立することなく、長軸方向で僅かに弯曲する。刃先が想定される先端部1.0cmの個所の断面を供試材とした。なお原形は保つものの、表層は鉄化が激しく、心金のみに金属鉄を遺存する状況であった。

② マクロ組織：Photo. 6 の①に示す。組織は、軟・硬2種の鉄素材の「合わせ鍛え」である。すなわち、皮金に炭素量0.12%前後の低炭素鋼の軟質材でもって、心金の0.7%前後の硬鋼を捲き込み、心金で锐利切削性を、皮金は耐衝撃性をもたせて刃歯を防ぐ複合構造をとっている。なお、軟・硬両素材は、折り返し曲げ鍛接を施してあるが、鍛接線は判らぬ様な仕上げがなされて、高度の鍛冶技術でもって製品化されている。

③ 顕微鏡組織：Photo. 4 の①～⑦に示す。①は、鉄中の非金属介在物である。介在物は非晶質硅酸塩系の中にウルボスピニエルの小結晶を晶出する組成である。始発原料は砂鉄が想定される。詳細はCMAの項で述べる。②は、軟・硬2種の合わせ鍛えの境界を示す組織である。左側の約2/3の領域が軟鋼組織である。白いフェライト基地に結晶粒界の交点に黒または層状のパーライトが少量析出し、これの面積率からみて炭素量は0.12%前後の素材である。また、拡散層を介して硬鋼の亜共析鋼 (C: 0.7%前後) が充当される。両者の境界が黒く空洞化するのは鍛接線に沿って腐食が進行した為である。③は、刃先側の硬鋼の組織である。全面パーライトが析出するが、白く網目状のオーステナイト (Austenite) 粒界にフェライトが認められる。拡大組織を④に示す。この組織から、当鉄器は900°C以下の温度から放冷されたと推定される。

④ ピッカース断面硬度：Photo. 4 の⑤～⑦に炭素含有量の異なる個所での硬度測定の圧痕を示す。⑤は炭素量が0.12%前後の軟鋼域での硬度で106Hv、⑥は拡散層の炭素量が0.3%域で135Hv、⑦は硬鋼域の炭素量0.7%で261Hvが得られた。この様にパーライトが多くなるに従い、硬さ、引っ張り強さは増加し、逆に伸び、衝撃値などは減少する。組織に対応した硬度値であった。

⑤ CMA調査：Photo. 8 のSE (2次電子像) に示した暗黒色ガラス質スラグ中に晶出した微小析出物の高速定性分析結果をTable. 4 に示す。この介在物からの検出元素は、鉄 (Fe)、硅素 (Si)、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K)、チタン (Ti)、マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na)、硫黄 (S) などである。鉄素地中のガラス質成分 (Si+Al+Ca+Mg+K+Na) のファイアライト (2FeO·SiO₂) とウルボスピニエル (2FeO·TiO₂) の晶出を想定させる結果である。

この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果をPhoto. 8 に示す。白色輝点の集中度は、分析元素の存在を表す。SE (2次電子像) の1の番号は、暗黒色ガラス質スラグに微小ファイアライトの晶出個所である。定量分析値は、40.2%SiO₂-12.3%Al₂O₃-9.2%CaO-1.5%Na₂O₂の非

POS.NO.3
COMMENT : ARK-12
ACCEL.VOLT(OV) : 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08(A)
STAGE POS : X40000 Y 40000 Z 11000

12-DEC-95

| | CH(O) | TAP | CH(O) | PET | CH(O) | LIP | | | | | |
|------------|-------|-------|----------------|---------|-------|-------|----------------|---------|------|-------|----------------|
| EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) |
| Y - 4 | 6.45 | 320 | ***** | OII - k | 2.75 | 367 | ***** | SI - 4 | 1.14 | 85 | ***** |
| RE - 6.73 | 335 | ***** | | BA - 4 | 2.78 | 126 | ***** | PB - 1 | 1.18 | 71 | ***** |
| SR - 4 | 6.86 | 221 | ***** | CS - 4 | 2.89 | 111 | ***** | TL - 1 | 1.21 | 90 | ***** |
| W - 6.98 | 345 | ***** | | SC - 4 | 3.03 | 91 | ***** | HE - 4 | 1.27 | 77 | ***** |
| OII - 7.13 | 5448 | ***** | | I - 4 | 3.15 | 91 | ***** | Fe - 4 | 1.28 | 78 | ***** |
| TA - 7.25 | 161 | ***** | | TE - 4 | 3.29 | 70 | ***** | PT - 1 | 1.31 | 83 | ***** |
| RB - 4 | 7.32 | 159 | ***** | OCA - 4 | 3.36 | 660 | ***** | IR - 4 | 1.35 | 76 | ***** |
| HF - 6 | 7.54 | 128 | ***** | SB - 4 | 3.44 | 76 | ***** | OS - 1 | 1.39 | 65 | ***** |
| LU - 6 | 7.84 | 91 | ***** | SN - 4 | 3.60 | 59 | ***** | ZN - 4 | 1.44 | 70 | ***** |
| YB - 6 | 8.15 | 90 | ***** | OK - k | 3.74 | 430 | ***** | CU - 4 | 1.54 | 53 | ***** |
| OAL - 4 | 8.34 | 1278 | ***** | IN - k | 3.77 | 45 | ***** | NI - 4 | 1.65 | 35 | ***** |
| ER - 4 | 8.37 | 106 | ***** | U - m | 3.81 | 44 | ***** | Al - 4 | 1.73 | 39 | ***** |
| ER - 4 | 8.82 | 57 | ***** | CD - 4 | 3.96 | 41 | ***** | CO - 4 | 1.79 | 63 | ***** |
| SE - 4 | 8.99 | 54 | ***** | TH - m | 4.14 | 31 | ***** | OFE - 4 | 1.94 | 869 | ***** |
| HO - 6 | 9.20 | 52 | ***** | AG - 4 | 4.15 | 34 | ***** | GD - 4 | 2.05 | 26 | ***** |
| DY - 4 | 9.59 | 41 | ***** | PD - 4 | 4.37 | 28 | ***** | MN - 4 | 2.10 | 45 | ***** |
| AS - 4 | 9.67 | 44 | ***** | RH - 4 | 4.60 | 26 | ***** | EU - 4 | 2.12 | 25 | ***** |
| O MG - 4 | 9.89 | 115 | ***** | CL - k | 4.73 | 19 | ***** | SM - 4 | 2.20 | 21 | ***** |
| TE - 4 | 10.00 | 35 | ***** | EU - 4 | 4.85 | 18 | ***** | AI - 4 | 2.24 | 14 | ***** |
| GE - 4 | 10.44 | 32 | ***** | OS - k | 5.37 | 29 | ***** | ND - 4 | 2.37 | 14 | ***** |
| GA - 4 | 11.29 | 24 | ***** | MO - 4 | 5.41 | 14 | ***** | PW - 4 | 2.46 | 12 | ***** |
| CNA - 4 | 11.91 | 62 | ***** | NB - 4 | 5.72 | 8 | ***** | V - 4 | 2.50 | 12 | ***** |
| ** | 14.72 | 12 | ***** | ZR - 4 | 6.07 | 15 | ***** | CE - 4 | 2.56 | 10 | ***** |
| F - 4 | 18.32 | 11 | ***** | P - k | 6.16 | 19 | ***** | LA - 4 | 2.67 | 7 | ***** |

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA MG AL SI K CA TI FE - 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
Mn RU PD

Pha.90SE (2次電子像) に示した試料中の非金属性物の分析結果である。含有物は暗黒色ガラス質スラグ中に木ばれ状のファイアライト (Fayalite2PeO·SiO₂)、白色多角形のウエーブスピニル (Uvespinel Fe₂O₃TiO₄) などである。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。鉄 (Fe) 8,929, 硫素 (S) 5,448, アルミニウム (Al) 1,278, カルシウム (Ca) 430, カリウム (K) 40, チタン (Ti) 367, マグネシウム (Mg) 115, ナトリウム (Na) 82, 鋼鐵 (Si) 29となる。試料もチタン (Ti) の検出から始発原因は砂漠と判る。当該地帯の岩層には砂漠と呼ばれる。

Table.4 ノミ状鉄器 (ARK-12) の鉄中非金属性物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POS.NO.1
COMMENT : ARK-13
ACCEL.VOLT(OV) : 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08(A)
STAGE POS : X40000 Y 40000 Z 11000

12-DEC-95

| | CH(O) | TAP | CH(O) | PET | CH(O) | LIP | | | | | |
|------------|-------|-------|----------------|---------|-------|-------|----------------|---------|------|-------|----------------|
| EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) |
| Y - 4 | 6.45 | 322 | ***** | OII - k | 2.75 | 450 | ***** | SI - 4 | 1.14 | 78 | ***** |
| RE - 6.73 | 335 | ***** | | BA - 4 | 2.78 | 126 | ***** | PB - 1 | 1.18 | 93 | ***** |
| SR - 4 | 6.86 | 256 | ***** | CS - 4 | 2.89 | 107 | ***** | TL - 1 | 1.21 | 85 | ***** |
| W - 6 | 6.98 | 245 | ***** | SC - 4 | 3.03 | 90 | ***** | HE - 4 | 1.26 | 89 | ***** |
| OII - 7.13 | 497 | ***** | | I - 4 | 3.15 | 96 | ***** | AU - 4 | 1.28 | 87 | ***** |
| TA - 7.25 | 200 | ***** | | TE - 4 | 3.29 | 78 | ***** | FT - 1 | 1.31 | 81 | ***** |
| RB - 4 | 7.32 | 173 | ***** | OCA - 4 | 3.36 | 726 | ***** | IR - 4 | 1.35 | 73 | ***** |
| HF - 6 | 7.54 | 109 | ***** | SB - 4 | 3.44 | 78 | ***** | OS - 1 | 1.39 | 75 | ***** |
| LU - 6 | 7.84 | 88 | ***** | SM - 4 | 3.60 | 55 | ***** | ZN - 4 | 1.44 | 65 | ***** |
| YB - 6 | 8.15 | 90 | ***** | OK - k | 3.74 | 354 | ***** | CU - 4 | 1.54 | 54 | ***** |
| OAL - 4 | 8.34 | 1285 | ***** | IN - k | 3.77 | 51 | ***** | NI - 4 | 1.66 | 48 | ***** |
| ER - 4 | 8.37 | 109 | ***** | U - m | 3.81 | 41 | ***** | TM - 4 | 1.75 | 36 | ***** |
| ER - 4 | 8.82 | 56 | ***** | CD - 4 | 3.96 | 45 | ***** | CO - 4 | 1.79 | 39 | ***** |
| SE - 4 | 8.99 | 58 | ***** | TH - m | 4.14 | 33 | ***** | OFE - 4 | 1.94 | 869 | ***** |
| HO - 6 | 9.20 | 52 | ***** | AG - 4 | 4.15 | 48 | ***** | GD - 4 | 2.05 | 39 | ***** |
| DY - 4 | 9.59 | 42 | ***** | PD - 4 | 4.37 | 34 | ***** | MN - 4 | 2.10 | 44 | ***** |
| AS - 4 | 9.67 | 56 | ***** | RH - 4 | 4.60 | 24 | ***** | EU - 4 | 2.12 | 26 | ***** |
| O NG - 4 | 9.89 | 133 | ***** | CL - k | 4.73 | 66 | ***** | SM - 4 | 2.20 | 14 | ***** |
| TE - 4 | 10.00 | 36 | ***** | EU - 4 | 4.85 | 15 | ***** | AI - 4 | 2.24 | 21 | ***** |
| GE - 4 | 10.44 | 35 | ***** | OS - k | 5.37 | 26 | ***** | ND - 4 | 2.37 | 13 | ***** |
| GA - 4 | 11.29 | 32 | ***** | MO - 4 | 5.41 | 11 | ***** | PW - 4 | 2.46 | 13 | ***** |
| CNA - 4 | 11.91 | 62 | ***** | NB - 4 | 5.72 | 10 | ***** | V - 4 | 2.50 | 31 | ***** |
| ** | 14.72 | 18 | ***** | ZR - 4 | 6.07 | 16 | ***** | CE - 4 | 2.56 | 12 | ***** |
| F - 4 | 18.32 | 14 | ***** | P - k | 6.16 | 9 | ***** | LA - 4 | 2.67 | 8 | ***** |

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA MG AL SI CL K CA TI V MN TE - 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
ZR PD CE

Pha.90SE (2次電子像) に示した試料中の非金属性物の分析結果である。含有物は暗黒色ガラス質スラグ中に木ばれ状のファイアライト (Fayalite2PeO·SiO₂)、白色多角形のウエーブスピニル (Uvespinel Fe₂O₃TiO₄) などである。当該地帯の岩層には砂漠と呼ばれる。

Table.5 不明鉄器 (ARK-13) の鉄中非金属性物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

品質硅酸塩組成である。これには砂鉄特有成分の2.4%TiO₂と2.0%ZrO₂及び、28.0%FeOを固溶する。FeOはファイアライト(2FeO·SiO₂)に帰属する。

SE(2次電子像)の2の番号は、淡灰色木ずれ状結晶の分析である。定量分析値は、51.1%FeO—34.1%SiO₂でファイアライトを表す。これには6.5%Al₂O₃—2.3%CaO—1.3%MgOの固溶物がある。

次にSE(2次電子像)の3の番号個所は、白色四角形結晶で、定量分析値は60.8%FeO—20.1%TiO₂でウルボスピニエル(2FeO·TiO₂)が同定される。砂鉄特有元素の3.3%V₂O₃も固溶され、他に7.4%Al₂O₃—1.1%CaO—8.5%SiO₂などガラス質も検出された。四角形結晶の中央の黒点がガラス質であり、これからの影響であろう。

以上の分析結果をみれば、定量分析個所の1のガラス質スラグと、3の白色四角形結晶から砂鉄特有成分のチタン(Ti)、ジルコニウム(Zr)、バナジウム(V)が検出されて、製鉄原料が砂鉄であったことが明瞭に推定される。当鉄器は在地製作の可能性はすこぶる高いものと想定される。

(2) ARK-13: 不明鉄器

① 肉眼観察：現存長さ4.6cm、最大幅2.6cm、厚み0.4cmの板状鉄斧状製品である。中央部断面は凸レンズ状の膨らみをもつ。表層は赤褐色鉄錆に覆われるが、心部は金属鉄を残す。供試材は、刃先から側面にかけて三角形に切り出した。

② マクロ組織：Photo. 6の②に示す。皮金は錆化消滅して心金のみ残す。低炭素鋼の焼入れ組織である。

③ 顕微鏡組織：Photo. 5の①～③に示す。①は、鉄中の非金属介在物である。細長く延伸された暗黒色ガラス質スラグ中に淡茶褐色多角形結晶を晶出する。鍛造鉄器である。②は、金属鉄のナイタル腐食で現れたマルテンサイト(Martensite)である。鉄素材は0.2%前後の炭素量を含有し、これを900°C前後の温度から水焼入れを施した組織で、細かい針状組織がみえる。

④ ピッカース断面硬度：Photo. 5の③に示す。針状組織の硬度値は、298Hvであった。不完全焼入れのマルテンサイトの硬度値と推定された。

⑤ CMA調査：Photo. 9のSE(2次電子像)に示した暗黒色ガラス質スラグ中に晶出した淡茶褐色多角形結晶の高速定性分析結果をTable. 5に示す。検出元素を強度(Count)順に並べると次の様になる。鉄(Fe)、硅素(Si)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、カリウム(K)、マグネシウム(Mg)、ナトリウム(Na)、塩素(Cl)、マンガン(Mn)、バナジウム(V)である。この介在物には、チタン(Ti)とバナジウム(V)の砂鉄特有成分が含有されて鉄素材は砂鉄と想定される。

この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果をPhoto. 9に示す。暗黒色ガラス質スラグには、ガラス質成分(Si+Al+Ca+Mg+K+Na)に白色輝点が集中し、4の番号の定量分析値は、48.3%SiO₂—12.2%Al₂O₃—7.4%CaO—1.4%Mgの非晶質硅酸塩組成が検出されて、これに微量ファイアライトが晶出するので、20.8%FeOや砂鉄特有成分の1.6%ZrO₂が加わる。

次にSE(2次電子像)の5の番号の淡茶褐色多角形結晶は、47.2%FeO—13.1%TiO₂組成で、ウルボスピニエル(2FeO·TiO₂)系が同定されて、他に9.0%SiO₂—5.5%Al₂O₃—1.3%MgOガラス質に、17.0%V₂O₃—3.5%Cr₂O₃の脈石成分が加わる。チタン系スピニエルであり、砂鉄原料を雄弁に物語っている。

該品は不明鉄器で器種に対する決め手に欠くが、焼入れ組織をもつところから工具類の一品とみるべきであろう。

(3) ARK-14: 不明鉄器

POSNO.2
COMMENT ARK-13
ACCEL.VOLT.(KV): 15
PROBE CURRENT: 5.019E-08(A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

12-DEC-95

| CH(O) | TAP | CH(O) | PET | CH(O) | LIP | | | | | | |
|---------------|------|-------|----------------|---------|------|-------|----------------|---------|------|-------|----------------|
| EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) |
| Y - 1 | 6.45 | 317 | ***** | OTI - k | 2.75 | 290 | ***** | HI - 4 | 1.14 | 88 | ***** |
| RE - m | 6.73 | 292 | ***** | BA - 4 | 2.78 | 129 | ***** | PF - 1 | 1.18 | 88 | ***** |
| SR - j | 6.86 | 240 | ***** | CS - 4 | 2.92 | 127 | ***** | TL - 1 | 1.21 | 83 | ***** |
| W - m | 6.98 | 240 | ***** | SC - k | 3.03 | 102 | ***** | HG - 1 | 1.24 | 84 | ***** |
| OS - k | 7.13 | 3003 | ***** | I - 4 | 3.15 | 88 | ***** | AU - 1 | 1.28 | 76 | ***** |
| TA - m | 7.25 | 176 | ***** | TE - 4 | 3.29 | 75 | ***** | PT - 1 | 1.31 | 87 | ***** |
| RR - 4 | 7.32 | 367 | ***** | OCA - k | 3.36 | 410 | ***** | IR - 1 | 1.35 | 85 | ***** |
| HF - m | 7.54 | 117 | ***** | SB - 4 | 3.44 | 69 | ***** | OS - 1 | 1.39 | 80 | ***** |
| LU - m | 7.84 | 85 | ***** | SN - 4 | 3.60 | 58 | ***** | ZN - k | 1.44 | 76 | ***** |
| VS - k | 8.15 | 73 | ***** | CU - k | 3.74 | 42 | ***** | OF - 4 | 1.54 | 56 | ***** |
| CAL - k | 8.44 | 703 | ***** | IN - 4 | 3.77 | 42 | ***** | NT - 1 | 1.65 | 46 | ***** |
| BR - 1 | 8.87 | 133 | ***** | U - m | 3.91 | 54 | ***** | TM - 1 | 1.73 | 38 | ***** |
| ER - m | 8.82 | 57 | ***** | CD - 4 | 3.96 | 39 | ***** | CO - k | 1.78 | 61 | ***** |
| SE - 4 | 8.99 | 61 | ***** | TH - 4 | 4.14 | 35 | ***** | CPE - k | 1.94 | 9611 | ***** |
| HO - m | 9.20 | 51 | ***** | AG - 4 | 4.15 | 33 | ***** | GD - 1 | 2.05 | 31 | ***** |
| DY - m | 9.59 | 46 | ***** | PD - 4 | 4.37 | 23 | ***** | MN - k | 2.10 | 33 | ***** |
| AS - k | 9.77 | 49 | ***** | RE - 4 | 4.46 | 24 | ***** | EU - 1 | 2.12 | 23 | ***** |
| CNC - k | 9.85 | 51 | ***** | OCA - k | 4.75 | 55 | ***** | SM - 1 | 2.19 | 23 | ***** |
| TB - 10.00 | 43 | ***** | RU - 4 | 4.85 | 22 | ***** | CR - k | 2.26 | 15 | ***** | |
| GE - 10.44 | 30 | ***** | S - 4 | 5.37 | 24 | ***** | ND - 1 | 2.37 | 14 | ***** | |
| GA - 11.29 | 25 | ***** | MO - 4 | 5.41 | 11 | ***** | PR - 1 | 2.46 | 12 | ***** | |
| ONA - k 11.91 | 49 | ***** | NB - 1 | 5.72 | 9 | ***** | V - k | 2.50 | 20 | ***** | |
| ** 14.72 | 12 | ***** | ZR - 1 | 6.07 | 12 | ***** | CE - 1 | 2.56 | 9 | ***** | |
| F - k 18.32 | 9 | ***** | P - k | 6.16 | 8 | ***** | LA - 1 | 2.67 | 7 | ***** | |

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA MG AL SI CI K CA TI FE ← 検出元素
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY POESENT
OS

Pos.907SE (2次電子像) に示した鉄中の非金属介在物の検出量より算びたものの分析結果である。成分相は近似していれ、(Fe) 9.611, 鋼素 (Si) 3.003, アルミニウム (Al) 791, 電算 (Ca) 506, マンガン (Mn) 68.9, タン (Ti) 290, カリウム (K) 237, マグネシウム (Mg) 91, ナトリウム (Na) 40となる。これもチタン (Ti) の値が最も高くなるが、鉄中のチタンは鉄鋼中の始発期では鉄鋼中のチタンと判別する。なま、Pos.907SE (2次電子像) は鉄板の表面から観察している。

Table.6 不明鉄器 (ARK-13その2) の鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POSNO.5
COMMENT ARK-14
ACCEL.VOLT.(KV): 15
PROBE CURRENT: 5.000E-08(A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

12-DEC-95

| CH(O) | TAP | CH(O) | PET | CH(O) | LIP | | | | | | |
|--------------|------|-------|----------------|---------|------|-------|----------------|---------|------|-------|----------------|
| EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) | EL | WL | COUNT | INTENSITY(LOG) |
| Y - 1 | 6.45 | 354 | ***** | OTI - k | 2.75 | 169 | ***** | HI - 4 | 1.14 | 95 | ***** |
| RE - m | 6.73 | 274 | ***** | BA - 4 | 2.78 | 131 | ***** | PF - 1 | 1.19 | 93 | ***** |
| SR - j | 6.86 | 259 | ***** | CS - 4 | 2.89 | 119 | ***** | TL - 1 | 1.21 | 95 | ***** |
| W - m | 6.98 | 233 | ***** | SC - k | 3.03 | 102 | ***** | HG - 1 | 1.24 | 92 | ***** |
| SI - k | 7.13 | 221 | ***** | I - 4 | 3.15 | 101 | ***** | AU - 1 | 1.28 | 97 | ***** |
| TA - m | 7.25 | 190 | ***** | TE - 4 | 3.29 | 82 | ***** | PT - 1 | 1.31 | 94 | ***** |
| RR - 4 | 7.32 | 165 | ***** | CA - k | 3.26 | 78 | ***** | IR - 1 | 1.35 | 80 | ***** |
| HF - m | 7.54 | 126 | ***** | SB - 4 | 3.44 | 76 | ***** | OS - 1 | 1.39 | 81 | ***** |
| LU - m | 7.84 | 103 | ***** | SN - 4 | 3.62 | 62 | ***** | ZN - k | 1.44 | 71 | ***** |
| VS - k | 8.15 | 91 | ***** | K - 4 | 3.74 | 61 | ***** | CU - k | 1.54 | 63 | ***** |
| AL - k | 8.34 | 79 | ***** | IN - 4 | 3.77 | 50 | ***** | NI - 1 | 1.66 | 53 | ***** |
| BR - 1 | 8.87 | 68 | ***** | U - m | 3.91 | 55 | ***** | TM - 1 | 1.73 | 51 | ***** |
| ER - m | 8.82 | 55 | ***** | CD - 4 | 3.96 | 46 | ***** | CO - k | 1.79 | 65 | ***** |
| SE - 3 | 8.99 | 59 | ***** | TH - m | 4.14 | 46 | ***** | CPE - k | 1.94 | 11173 | ***** |
| HO - m | 9.20 | 45 | ***** | AG - 4 | 4.15 | 38 | ***** | GD - 1 | 2.05 | 31 | ***** |
| UT - m | 9.29 | 47 | ***** | PD - 4 | 4.37 | 35 | ***** | CMN - k | 2.10 | 60 | ***** |
| AS - k | 9.57 | 21 | ***** | RE - 4 | 4.59 | 30 | ***** | ED - 1 | 2.12 | 39 | ***** |
| MG - k | 9.89 | 34 | ***** | CL - k | 4.73 | 31 | ***** | SM - 1 | 2.20 | 19 | ***** |
| TB - 10.00 | 36 | ***** | HU - 4 | 4.85 | 21 | ***** | CR - k | 2.29 | 22 | ***** | |
| GE - 10.44 | 32 | ***** | OS - k | 5.37 | 943 | ***** | ND - 1 | 2.37 | 16 | ***** | |
| GA - 11.29 | 27 | ***** | MO - 4 | 5.41 | 19 | ***** | PR - 1 | 2.46 | 15 | ***** | |
| NA - k 11.91 | 23 | ***** | NB - 1 | 5.72 | 9 | ***** | V - k | 2.50 | 12 | ***** | |
| ** 14.72 | 12 | ***** | ZR - 1 | 6.07 | 6 | ***** | CE - 1 | 2.56 | 9 | ***** | |
| F - k 18.32 | 36 | ***** | CP - 4 | 6.16 | 365 | ***** | LA - 1 | 2.67 | 9 | ***** | |

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
P S Ti Mn Fe ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY POESENT
F AS

Pos.107SE (2次電子像) に示した鉄中の微量元素の非金属介在物の分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。鉄 (Fe) 11.173, 鋼素 (Si) 943, 塩 (P) 365, チタン (Ti) 160, マンガン (Mn) 68.9である。分母物質成は磁化鉄 (Fe) であって、これに検 (P) の存在から 6-Fe-Pe3-Pe3三元素共晶であるステライト (Stellite) が想定される。無鉄特有の非金属介在物の組成であった。

Table.7 不明鉄器 (ARK-14) 鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

① 肉眼観察：現存長さ4.8cm、最大幅2.0cm、厚み0.9cmの不明鉄片である。本来は紡錘形でも呈するのであろうが、先端部と片側面は欠損する。先端寄りの断面は底面水平状で上面は弯曲し、両端は梢円状に窄まる。表層は赤褐色鉄錆に覆われる。

② 顕微鏡組織：Photo.5の④～⑧に示す。④は、鉄中非金属介在物である。前述したARK-12・13の介在物は鍛打されて展伸していたが、該品は小さく粒状の淡黄褐色の別系統の介在物である。鉄錆に含まれる硫化鉄(FeS)であって、鑄鉄と判定される。⑤⑥はナイタル腐食(Etching)で現れた共晶組成(C:4.23%)の白鉄(White cast iron)である。白色板状結晶はセメントタイト(Cementite: Fe₃C)、黒色はパーライト、蜂の巣状は、オースナイト(常温でパーライト)とセメントタイトとの共晶のレデブライト(Ledebulite)である。

該品は、鉄器として搬入されたのか、鍛冶原料が「下げ」用に準備されたのか定かでないが、古代以降になると、鉄錆は広範囲に出回る情勢であったと考えられる。

③ ピッカース断面硬度：Photo.5の⑧に黒色層状組織のパーライト部と、白色板状結晶セメントタイトの硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者が308Hv、後者が655Hvであった。組織に見合った値であろう。

④ CMA調査：Photo.10のSE(2次電子像)に示す淡黄褐色微量介在物の高速定性分析結果をTable.7に示す。検出元素は、鉄(Fe)、硫黄(S)、磷(P)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)などである。介在物組成は硫化鉄(FeS)、と磷(P)の存在はFe-Fe₃C-Fe₃Pの三元系共晶のステダイト(Steadite)が同定される。Photo.10の定量分析値をみると、70.5%Fe-26.5%S組成の硫化鉄となる。白鉄錆特有の非金属介在物である。

4.まとめ

荒木田遺跡の古代と中世に属する鐵滓と鐵製品の金属学的調査を行った。古代に属する鐵滓は、掘立柱建物跡の柱穴からの出土品である。祭祀との関連も看過できぬ事例であって、砂鉄製鐵滓と鍛練鍛冶滓の2工程の滓の出土となる。

また、中世になると、鍛練鍛冶滓のみの検出であったが、古代鍛冶滓に準ずる組成であった。更に時期不詳の3点の鐵製品が発見されて、2点は鍛造品、1点は鑄造品である。この3点の鐵製品は、いずれも砂鉄原料とするもので、古代から中世にかけての製品とみて矛盾ない材質であった。鍛造品の鍛接技術は、高度の合わせ鍛えが施され、刃物に焼入れ技術も採用されて、在地製作とすると、古代の墨書き土器や硯の共伴は、官営的な技術導入のものと技術集団との拘わりとして捉えられてくる。

註

(1) 柱穴出土鐵滓として、他の遺跡の例に、福岡県朝倉郡所在の二十谷遺跡がある。

(大澤正己「鍛冶関連遺物の金属学的調査」「九州横断自動車道関係文化財調査報告 49」～V 二十谷遺跡～福岡県教育委員会)に掲載予定。

(2) 日刊工業新聞社「焼結鉄組織写真および識別法」 1968。

ヴスタイト(FeO)は450～500Hv、マグネタイト(Fe₃O₄)は500～600Hv、ファイヤライト(2FeO·SiO₂)は600～700Hvである。

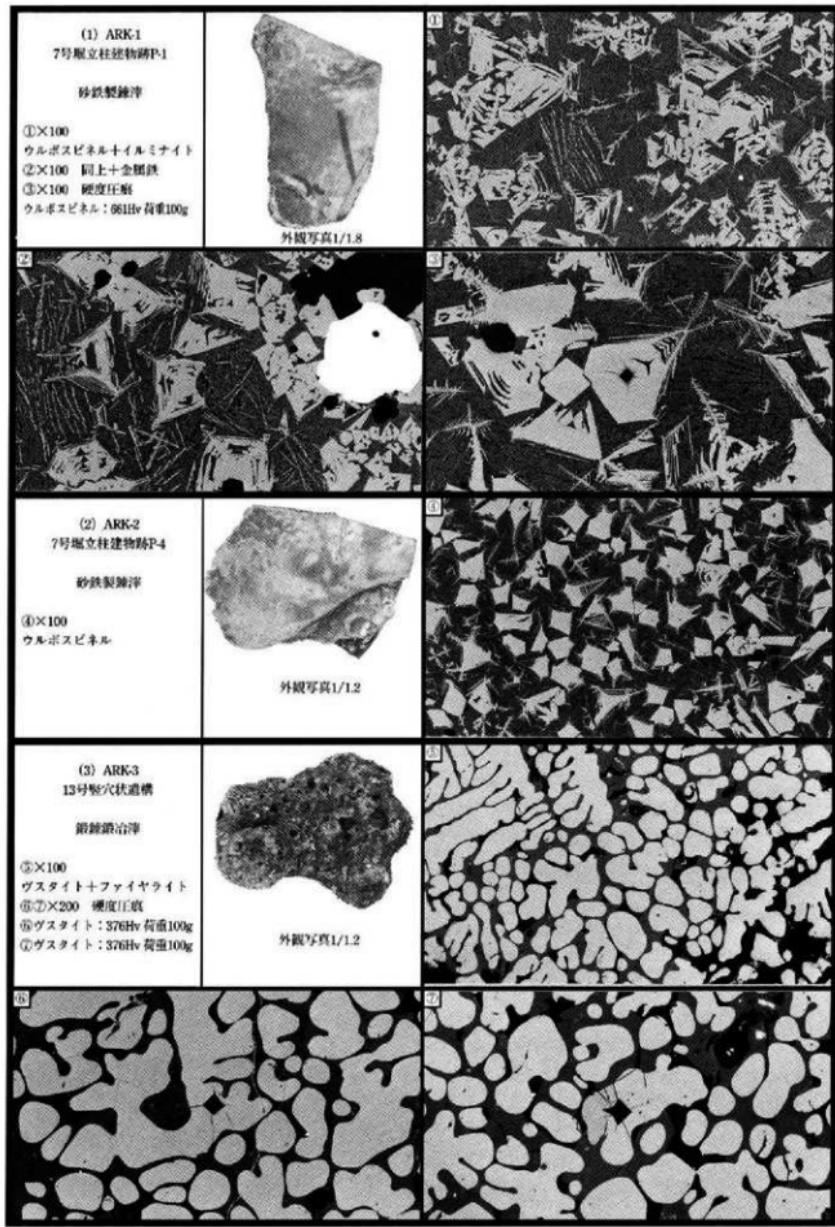


Photo.1 鉄津の顯微鏡組織

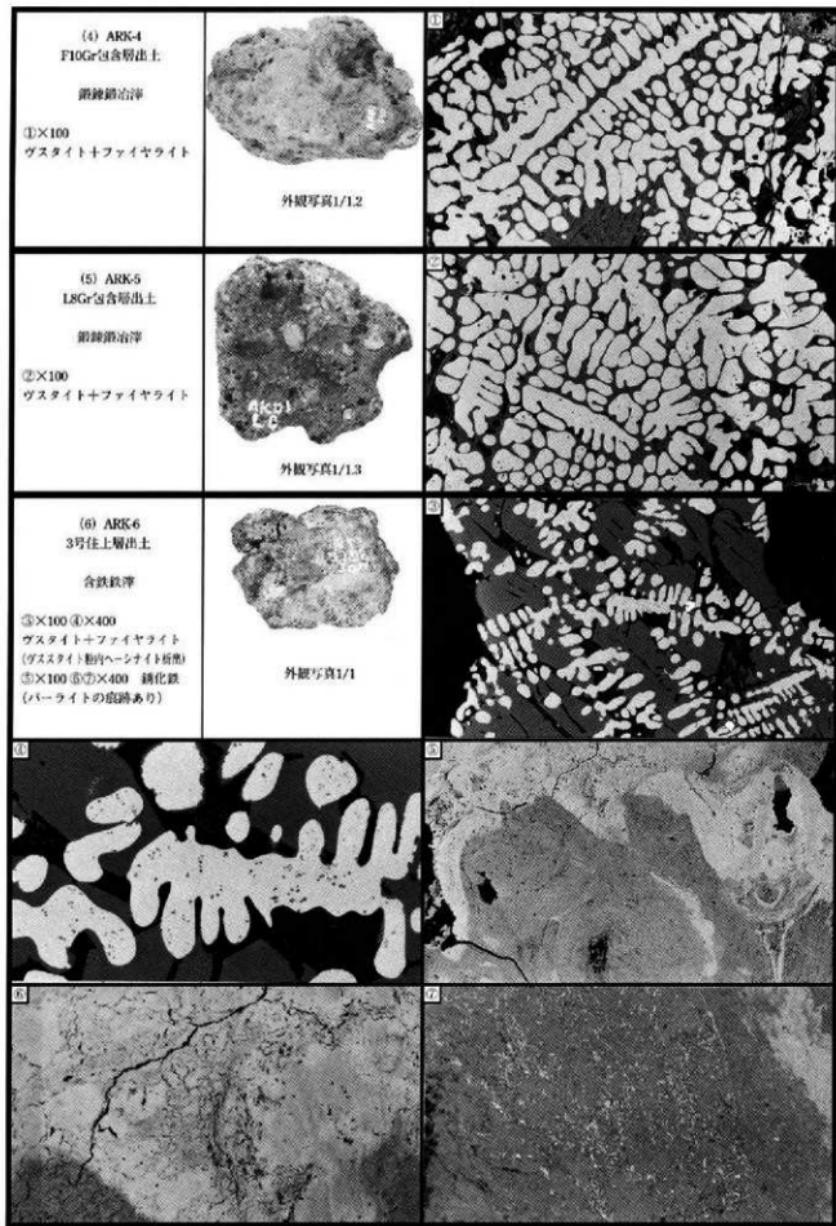


Photo.2 鉄津、鉄塊系遺物の顕微鏡組織

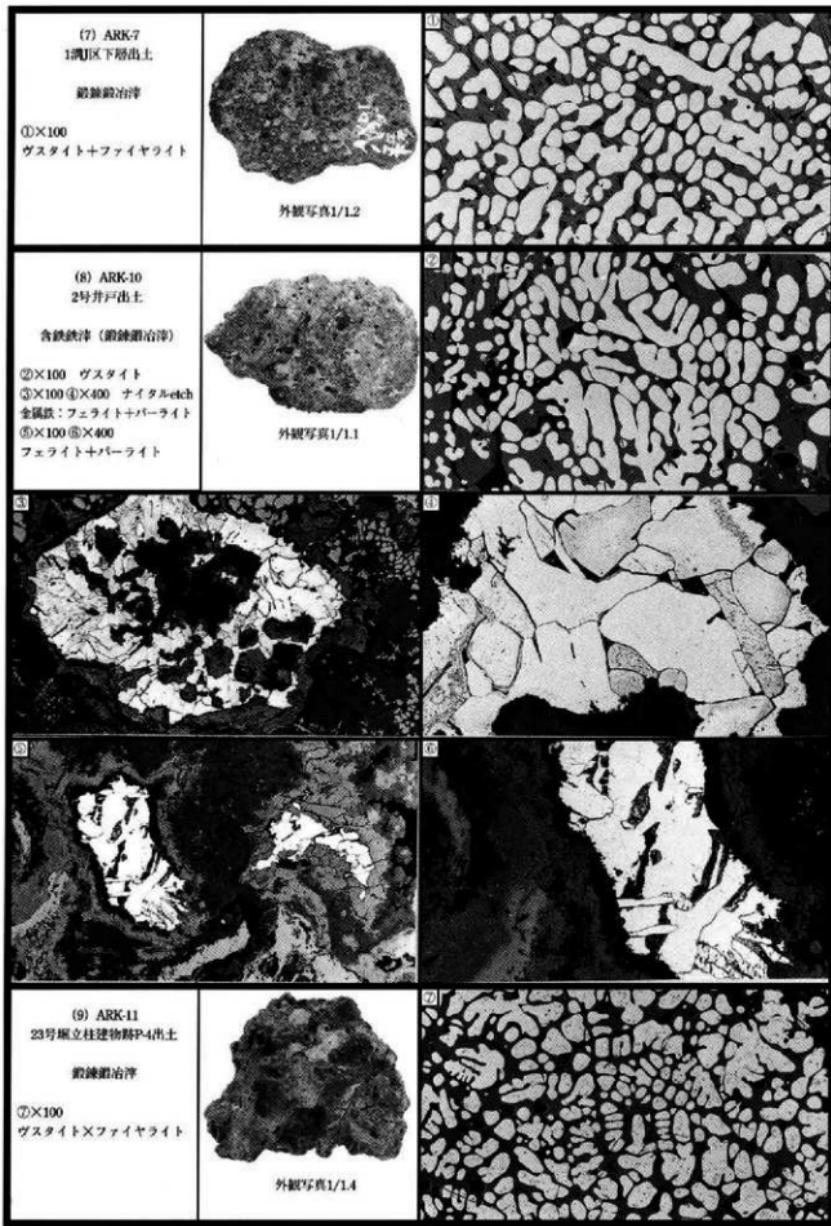


Photo.3 鉄滓、含鉄鉄滓の顯微鏡組織

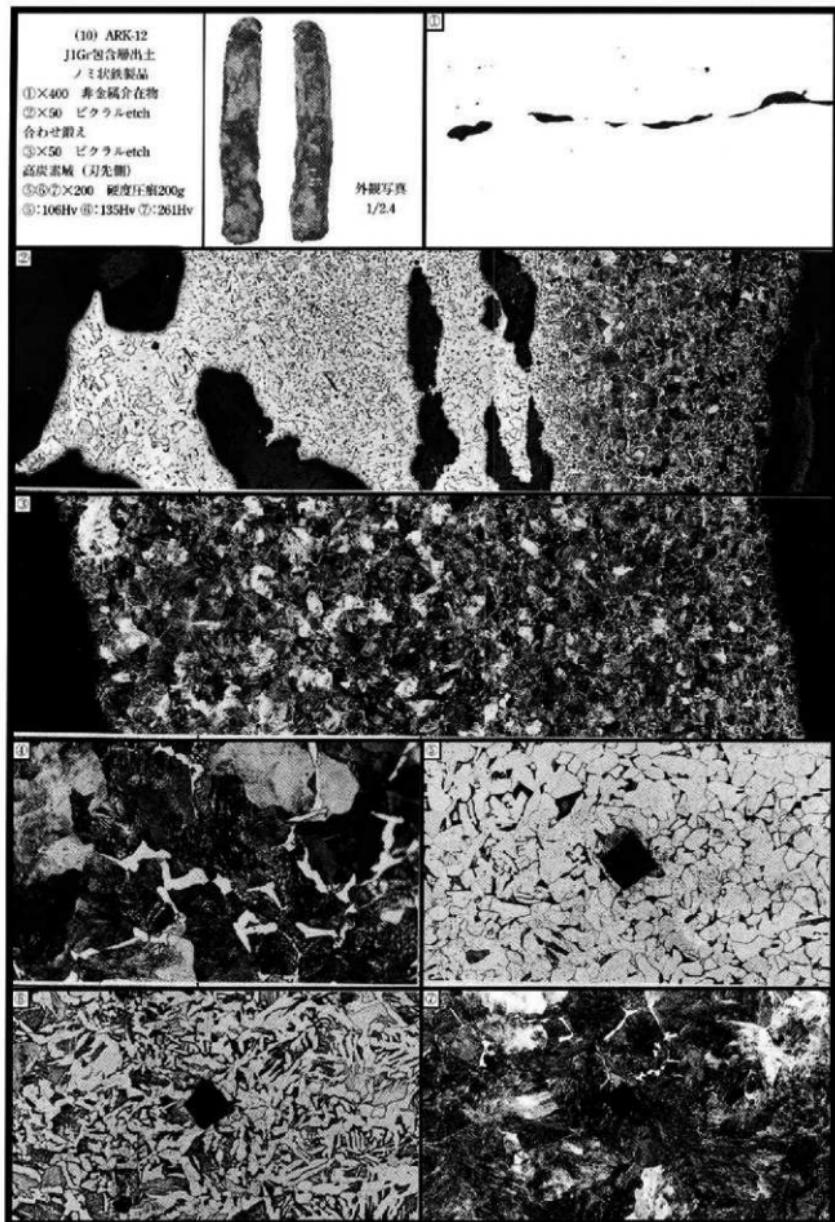


Photo.4 ノミ状鉄器の顕微鏡組織

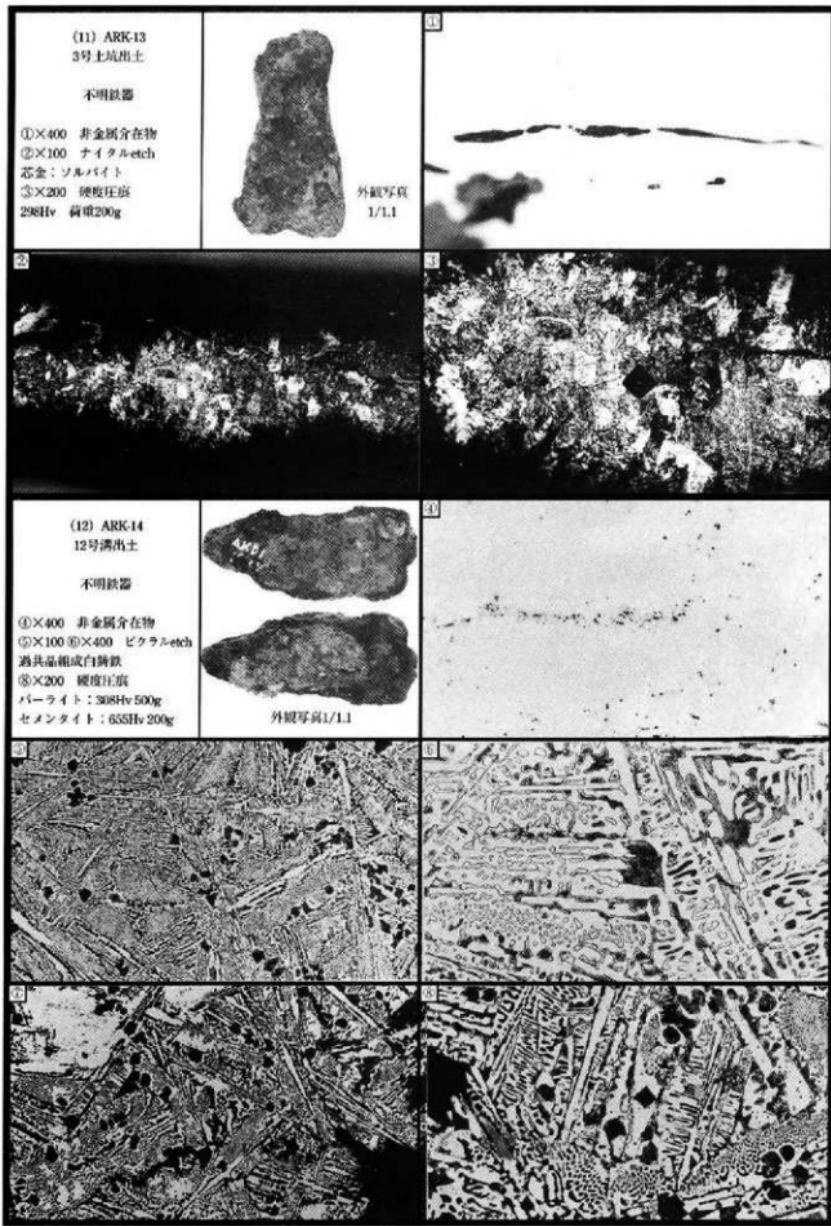
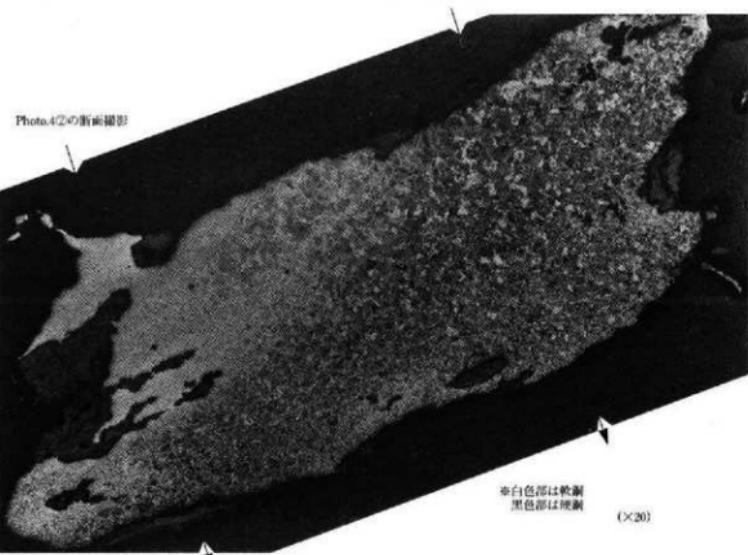


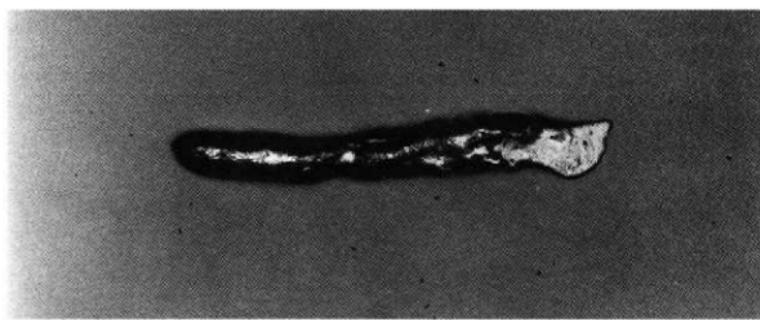
Photo.5 鉄製品の顯微鏡組織

①ARK-12

Photo.4③の断面撮影



②ARK-13



(×20)

Photo.6 ノミ状鉄器(ARK-12)と不明鉄器(ARK-13)のマクロ組織

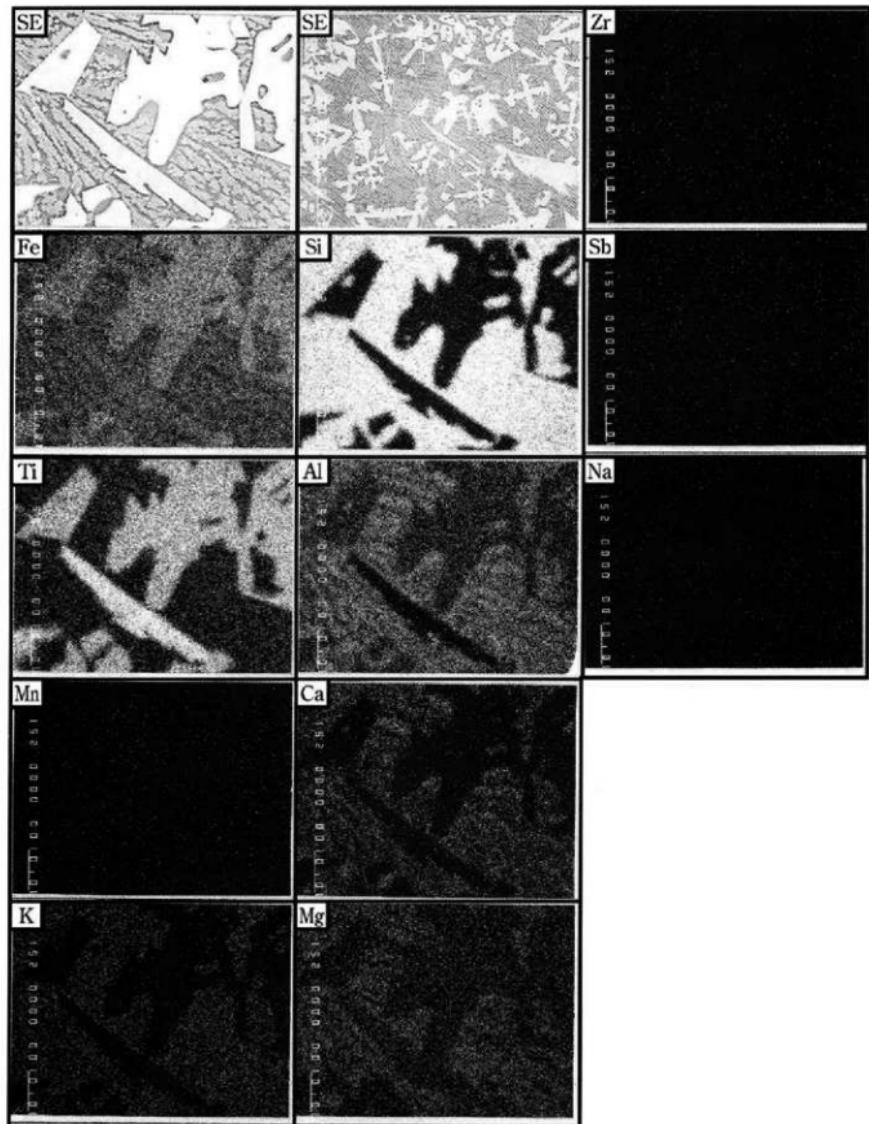
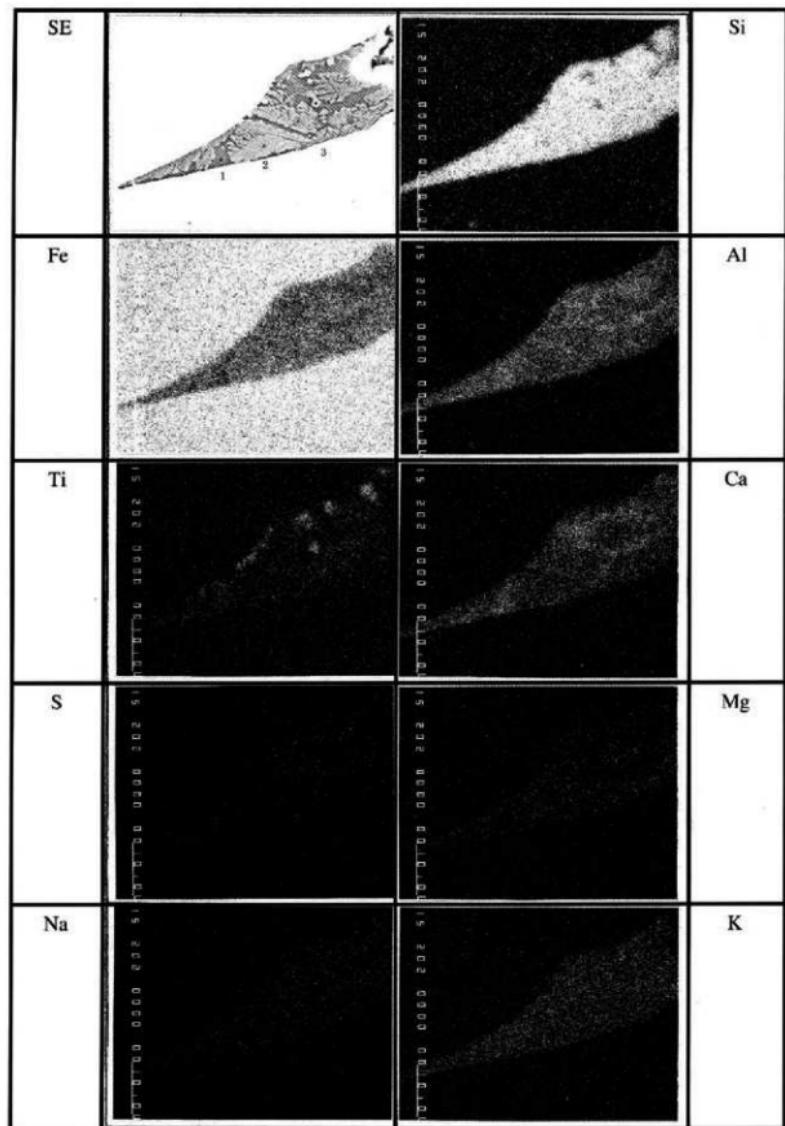
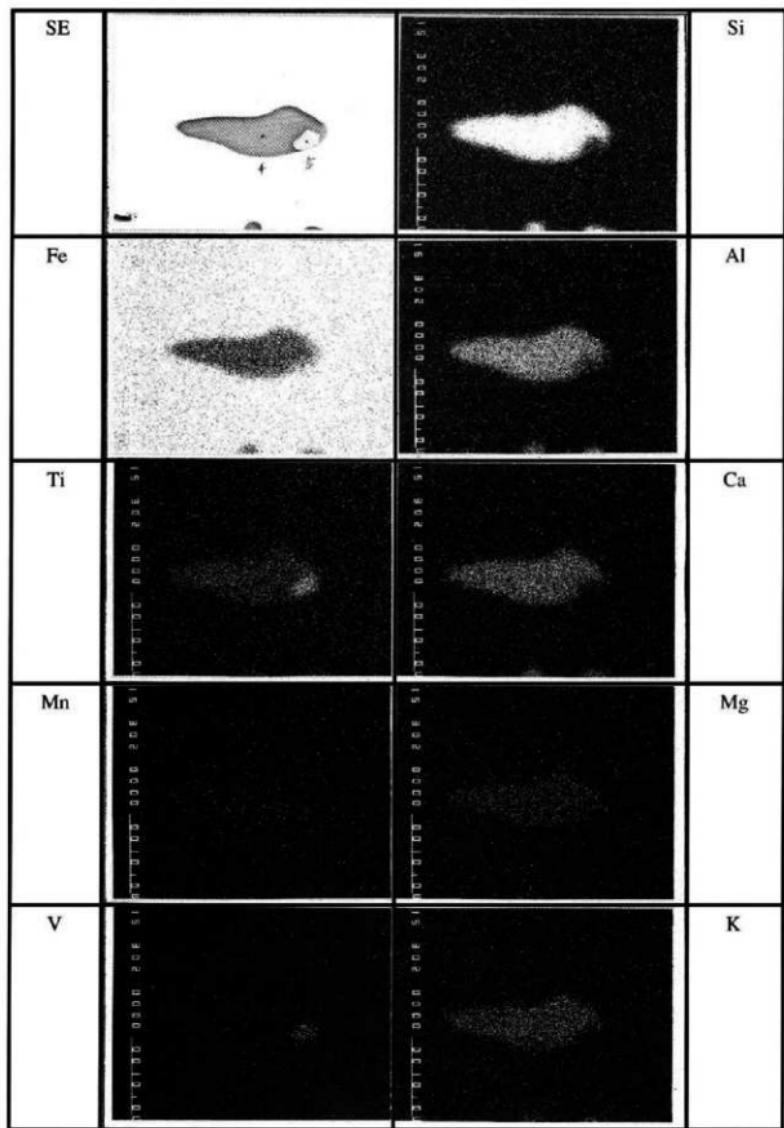


Photo.7 製鍊滓 (ARK-2) の特性X線像 ($\times 1000$) 縮小0.6



| | SiO ₂ | MnO | S | Al ₂ O ₃ | FeO | CaO | MgO | Na ₂ O | ZrO ₂ | TiO ₂ | Cr ₂ O ₃ | V ₂ O ₃ | Nb ₂ O ₅ | TOTAL |
|---|------------------|-------|-------|--------------------------------|--------|-------|-------|-------------------|------------------|------------------|--------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|---------|
| 1 | 40.211 | 0.487 | 0.610 | 12.337 | 28.028 | 9.170 | 0.332 | 1.518 | 2.014 | 2.407 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 96.914 |
| 2 | 34.06 | 0.762 | 0.038 | 6.490 | 51.107 | 2.293 | 1.308 | 0.975 | 0.632 | 0.740 | 0.610 | 0.027 | 0.000 | 98.441 |
| 3 | 8.489 | 0.601 | 0.000 | 7.433 | 60.793 | 1.082 | 0.448 | 0.391 | 0.606 | 20.138 | 0.455 | 3.297 | 0.000 | 103.644 |

Photo.8 ノミ状鉄墨(ARK-12)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値($\times 2000$)縮小6.6



| | SiO ₂ | MnO | S | Al ₂ O ₃ | FeO | CaO | MgO | Na ₂ O | ZrO ₂ | TiO ₂ | Cr ₂ O ₃ | ViO ₃ | NiO ₃ | TOTAL |
|---|------------------|-------|-------|--------------------------------|--------|-------|-------|-------------------|------------------|------------------|--------------------------------|------------------|------------------|--------|
| 4 | 48.306 | 0.803 | 0.015 | 12.175 | 20.789 | 7.426 | 1.400 | 1.060 | 1.594 | 3.012 | 0.000 | 0.163 | 0.036 | 96.782 |
| 5 | 8.985 | 1.094 | 0.000 | 5.494 | 47.213 | 0.951 | 1.307 | 0.121 | 0.228 | 13.142 | 3.494 | 16.995 | 0.000 | 98.905 |

Photo.9 不明鉄器(ARK-13) 鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値(×3000)縮小0.6

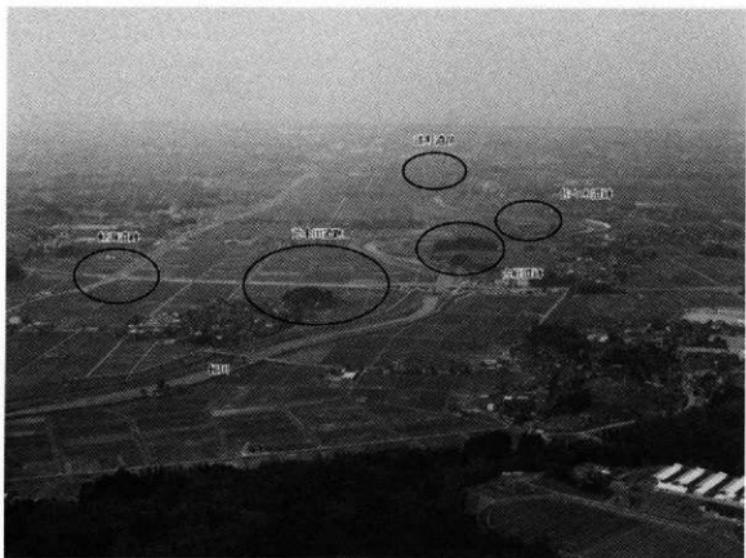
| | | | |
|----|--|--|----|
| SE | | | P |
| Fe | | | S |
| Ti | | | Mn |

| | Fe | Si | P | S | Cr | Mn | Ni | W | TOTAL |
|---|--------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 5 | 70.449 | 0.385 | 0.416 | 26.457 | 0.050 | 2.069 | 0.004 | 0.255 | 100.086 |

Photo.10 不明鉄器（ARK-14）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値（×3000）縮小0.6



遺跡周辺の景観（桃川下流から上流を望む）



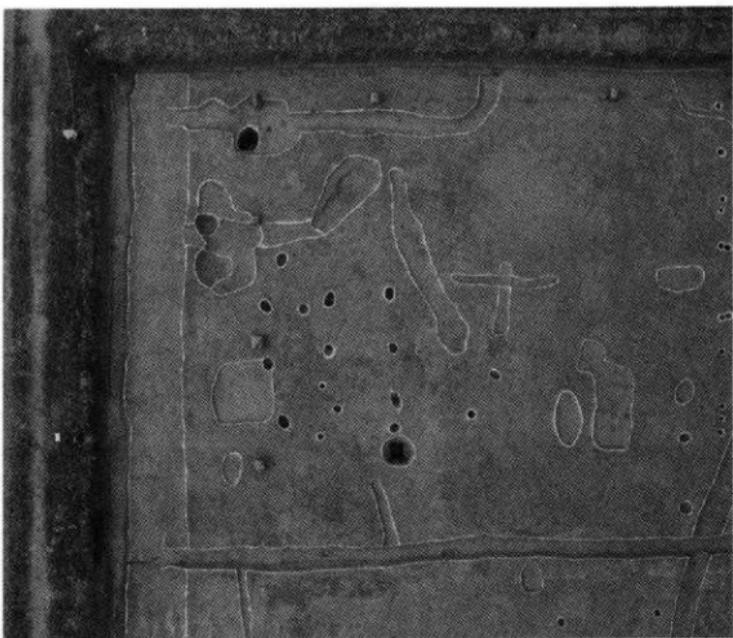
遺跡周辺の景観（桃川上流から下流を望む）



1次調査区全景(平成6年1月撮影)



2次調査区全景(平成6年10月撮影)



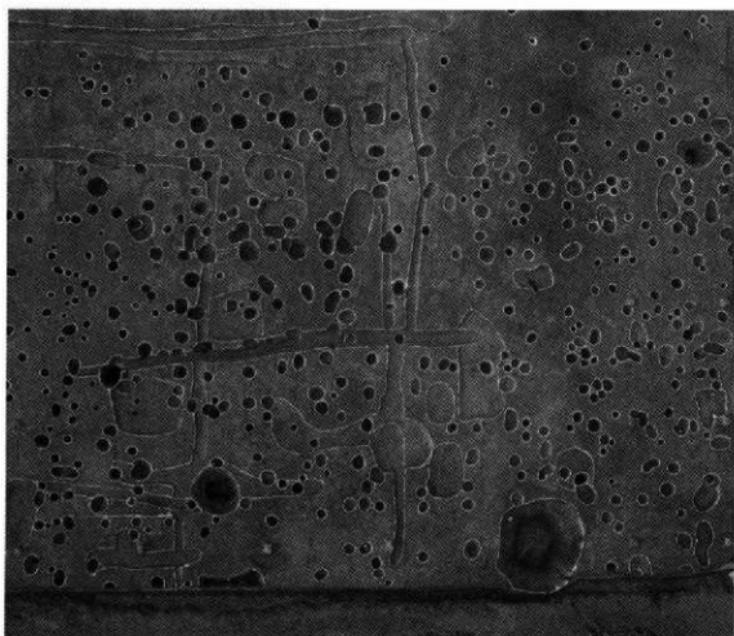
南西区域 (写真右が北)



南東区域 (写真右が北)



北西区域（写真右が北）



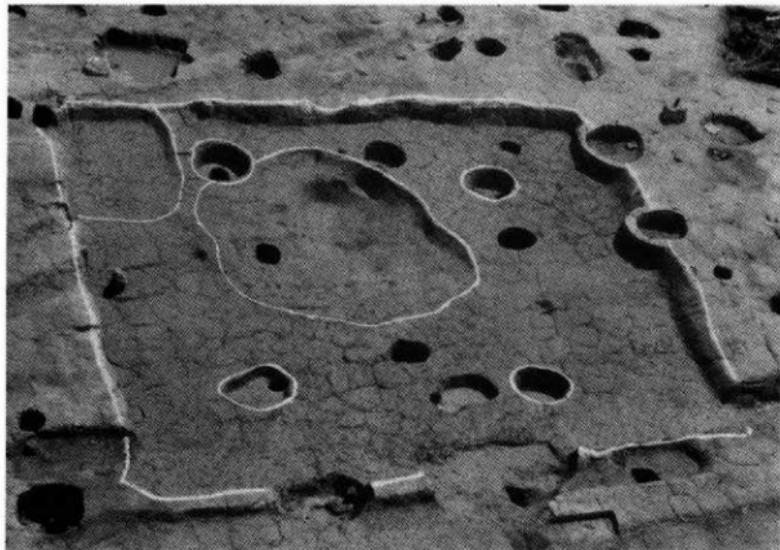
北東区域（写真右が北）



南半区域（写真右が北）



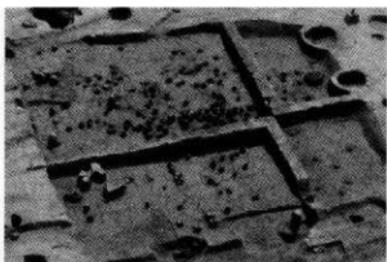
北半区域（写真右が北）



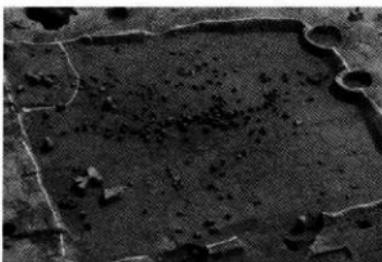
完復全景（西から）



上層土器出土状況全景



上層断面ベルト全景



下層出土状況全景

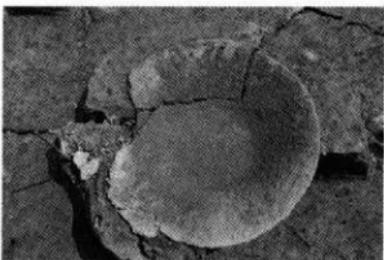


下層出土状況近景

（1号竪穴住居跡）



住居内落ち込み土層断面ベルト



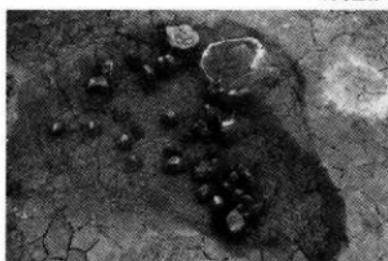
下層出土の高环

〈1号竪穴住居跡〉

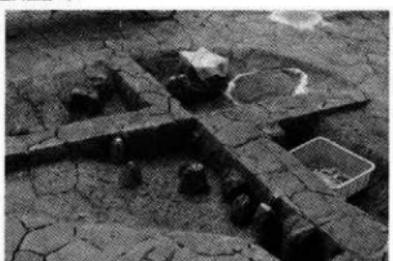


土器出土状況全景（南西から）

〈73号土坑（竪穴住居？）〉

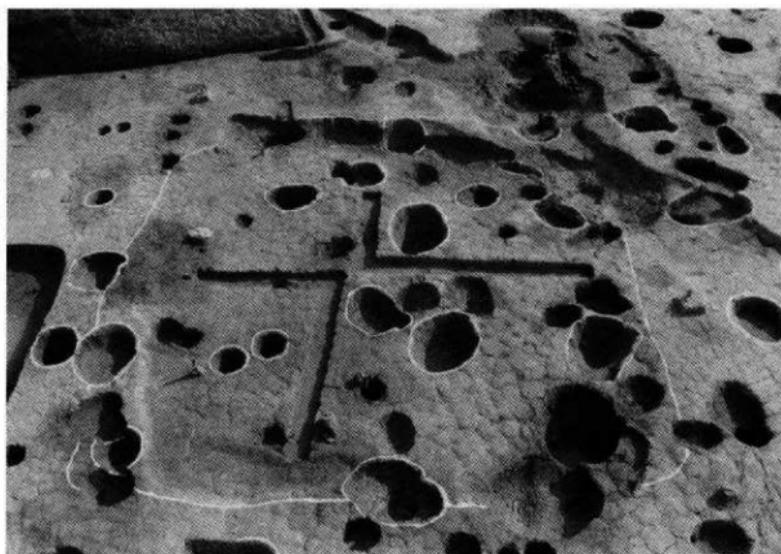


61号土坑全景



61号土坑土層断面ベルト

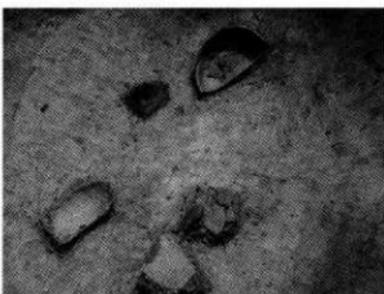
〈4号竪穴住居跡〉



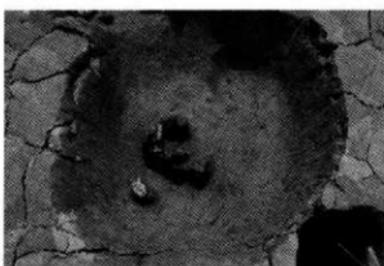
完掘全景（北から）



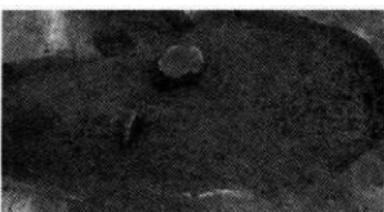
63号土坑全景



63号土坑土器出土状況



62号土坑全景



2号堅穴住居出土状況

〈2号堅穴住居跡〉



穴居全景（南から）



上層土壘出土状況全景



土削断面ベルト全景

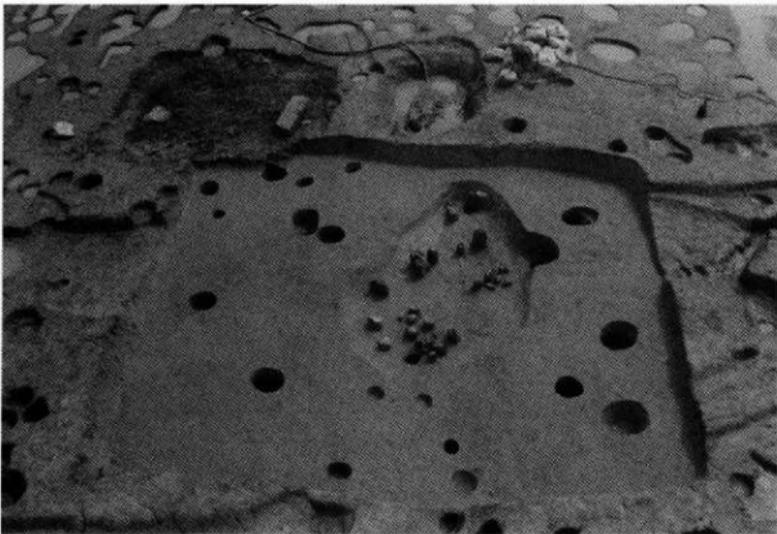


下層土壘出土状況全景



住居内落ち込みの土器出土状況

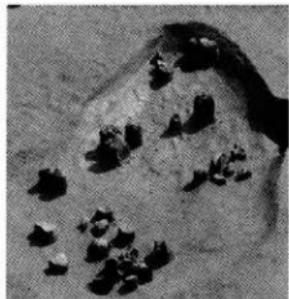
〈3号竪穴住居跡〉



完掘全貌（西から）



土層断面ベルト全景



住居内落ち込み全景



住居内落ち込み土層断面ベルト全景



住居内落ち込み土器出土状況

（5号竪穴住居跡）



下層土器出土状況（西から）



上層土器出土状況全景



下層土器出土状況近景（丸底壺）

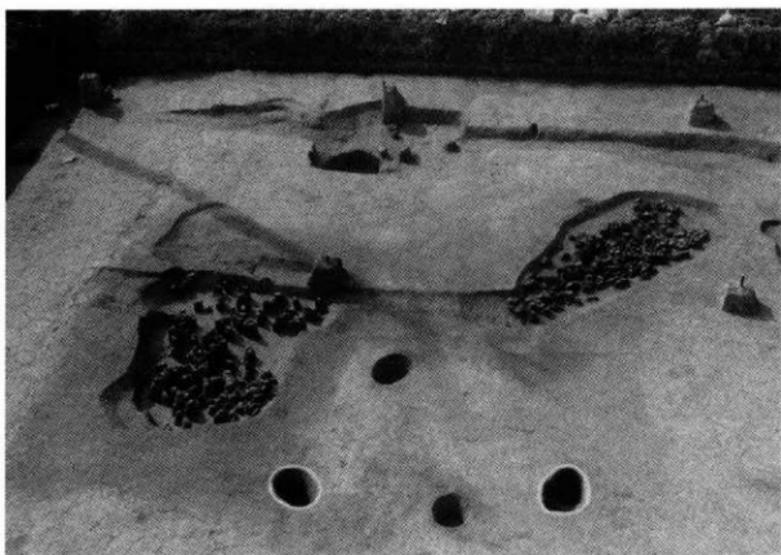


下層土器出土状況近景（丸底壺と甌）



下層土器出土状況近景（丸底壺）

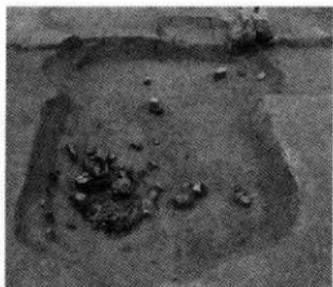
（5号竪穴住居跡）



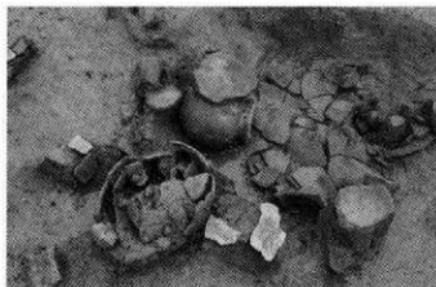
1号土坑・2号土坑遺跡（東から）



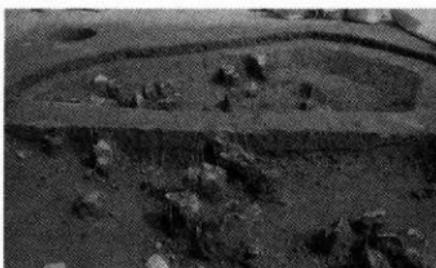
上一中層土器出土状況全景（東から）
(1号土坑)



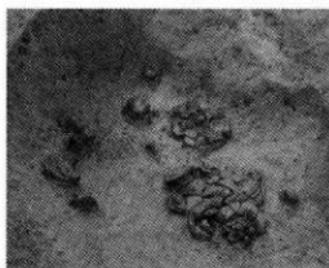
下層土器出土状況全貌



下層土器出土状況近景



上層断面ベルト全貌



最下底落ち込み土器出土状況

(1号土坑)

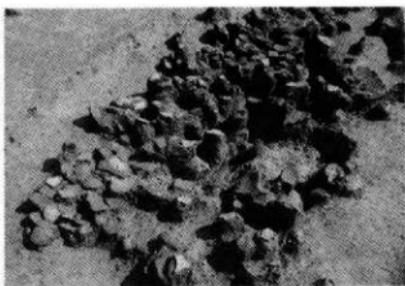


上～下層土器出土状況全貌 (東から)

(2号土坑)



土壙断面ベルト全景



上一卜層出土状況近景

〈2号土坑〉



土壙断面ベルト全景(東から)



土器出土状況近景

〈5号土坑〉



土壙断面ベルト全景(南から)

〈6号土坑〉



土器出土状況近景



土壙断面ベルト全景

〈11号土坑〉



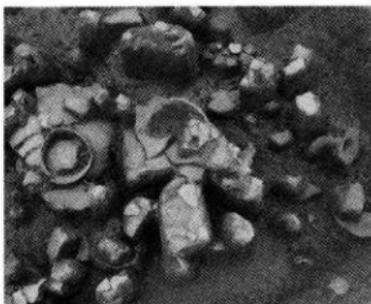
土器出土状況近景



土器出土状況全景 (南西から)



土器断面ベルト全景



土器出土状況近景
(14号土坑)



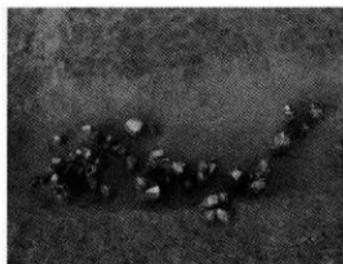
土器出土状況全景 (西から)



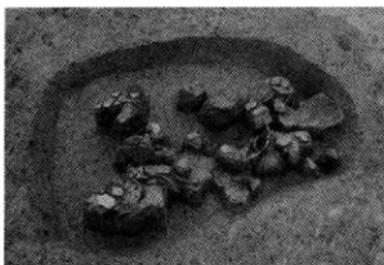
土器断面ベルト全景
(24号土坑)



土器出土状況全景（南から）
〈23号土坑〉



土器出土状況全景（南から）
〈40号土坑〉



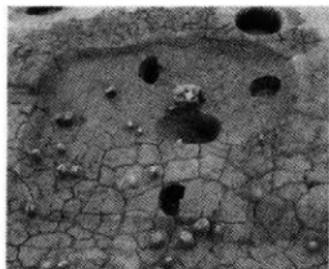
土器出土状況全景（北から）
〈35号土坑〉



土器出土状況近景
〈35号土坑〉



土器出土状況全景（北から）
〈36号土坑〉



土器出土状況全景（東から）

〈57号土坑〉



土器出土状況近景



土器出土状況全景（西から）

〈67号土坑〉



土器出土状況全景（西から）

〈71号土坑〉



土器断面ベルト全景



土器出土状況全景（南から）

（76号土坑）



土器断面ベルト近景



土器出土状況全景（北から）

（88号土坑）



土器断面ベルト近景



土器出土状況全景（南から）

（83号土坑）



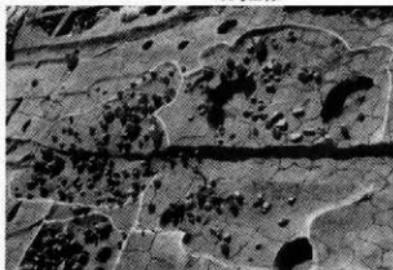
土器出土状況全景（南から）

（90号土坑）



土器出土状況全景（東から）

（99号土坑）



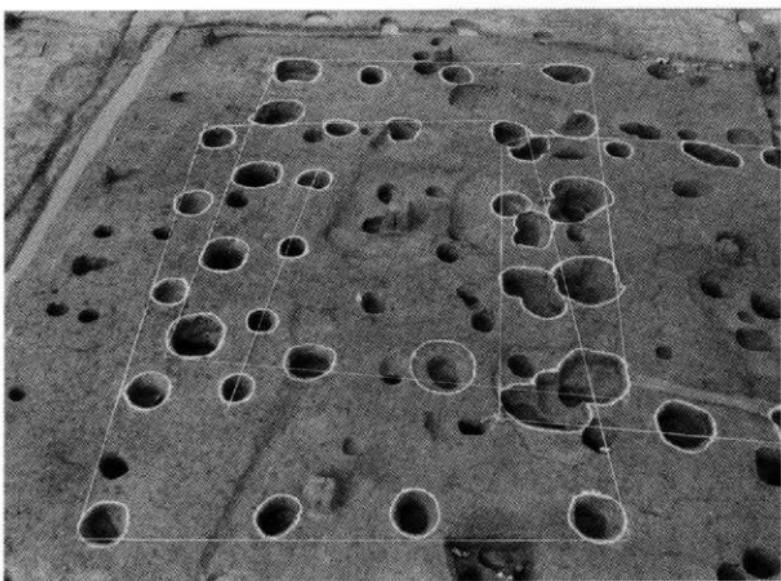
土器出土状況全景（北東から）

（2号竪穴状遺構）



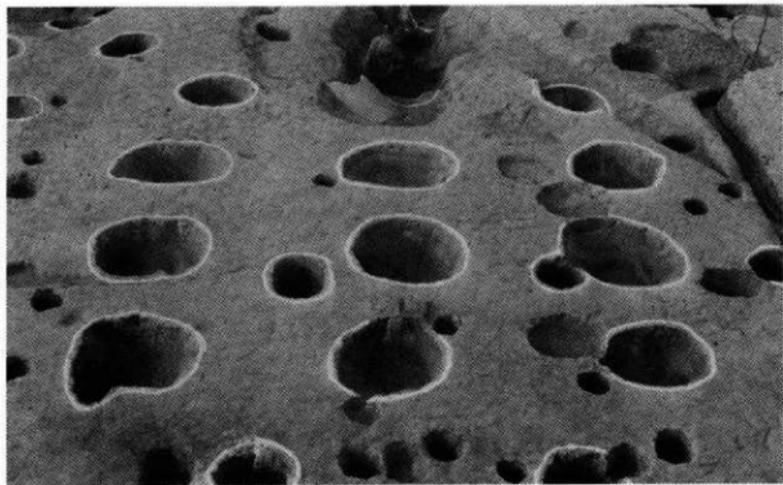
完掘全景（左は2号、右前は3号、右奥は4号、南から）

〈2・3・4号掘立柱建物跡〉

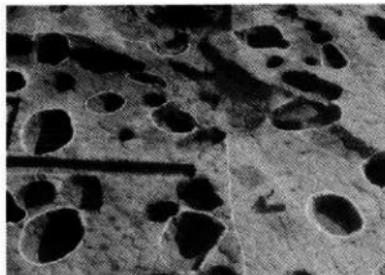


完掘全景（左手前は6号、中央奥は5号、右は7号、南から）

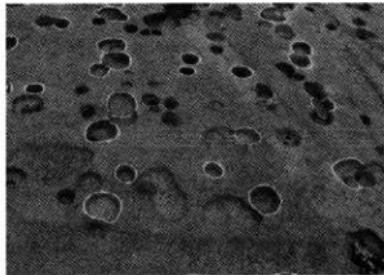
〈5・6・7号掘立柱建物跡〉



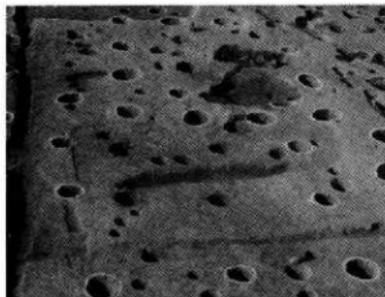
完掘全景（南から）
〈19号掘立柱建物跡〉



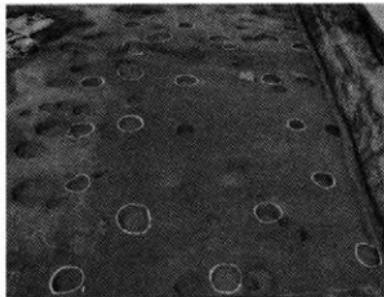
完掘全景（北から）
〈21号掘立柱建物跡〉



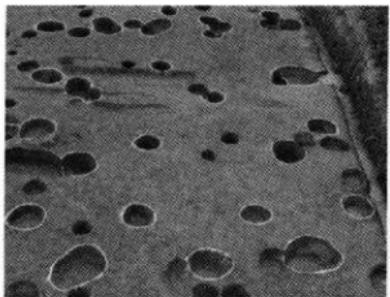
完掘全景（手前が26号、北から）
〈26・27号掘立柱建物跡〉



完掘全景（手前が17号、南から）
〈17・20号掘立柱建物跡〉



完掘全景（手前が31号、南から）
〈31・32号掘立柱建物跡〉



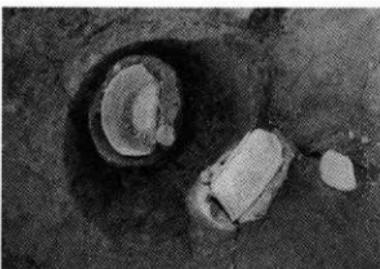
完掘全景（手前が33号、南から）
〈33・34号据立柱建物跡〉



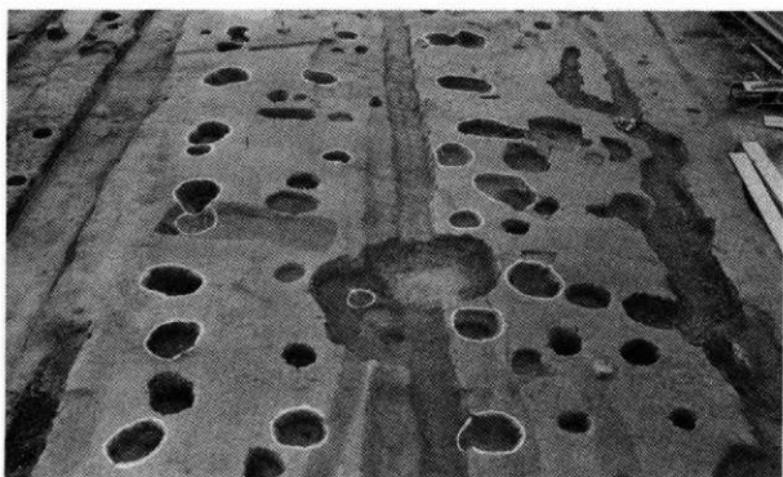
完掘全景（南から）
〈38号据立柱建物跡〉



柱穴内土器出土状況（P.1）



柱穴内土器出土状況
〈688号ピット〉



完掘全景（手前が43号、北から）
〈42・43号据立柱建物跡〉

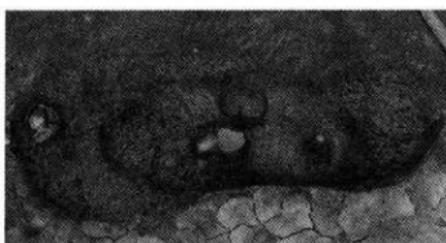


土器出土状況全貌（北から）

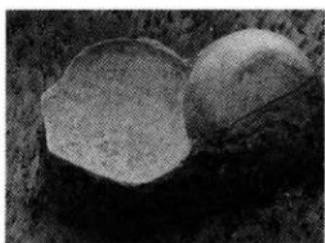


土器出土状況近景

〈27号土坑〉



土器出土状況全貌（西から）



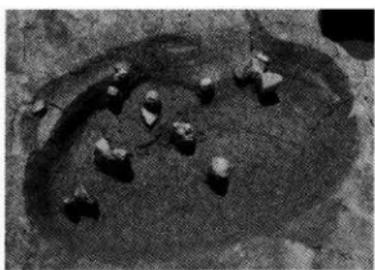
土器出土状況近景

〈59号土坑〉



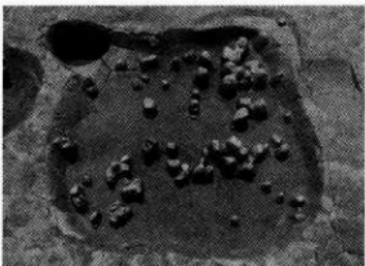
土器出土状況全貌（北から）

〈74号土坑〉



土器出土状況全貌（北から）

〈75号土坑〉



土器出土状況全貌（北から）

〈77号土坑〉



上層断面ベルト全貌



土器出土状況全景（南から）

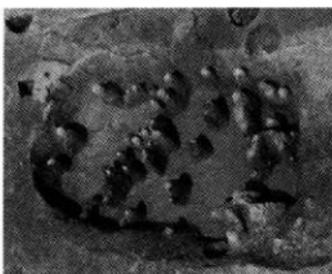


土器出土状況選景



土層断面ベルト全景

〈33号土坑〉



土器出土状況全景（南から）

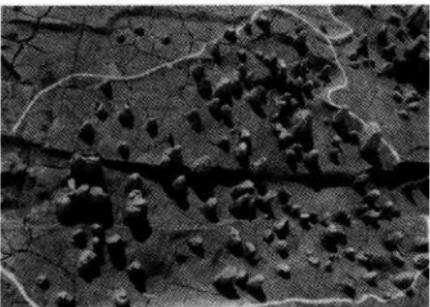


〈97号土坑〉

土層断面ベルト全景



土器出土状況概観（左奥から96・95・92・91、北から）



91号土坑土器出土状況全景（西から）



95・96号土坑土層断面ベルト



92・95・96号土坑土器出土状況全景（北から）

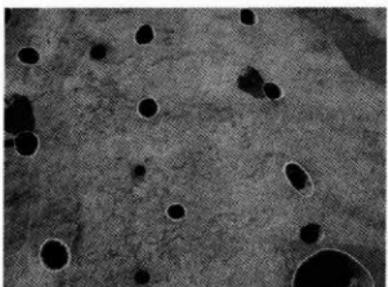


92・95号土坑土層断面ベルト

91・92・95・96号土坑



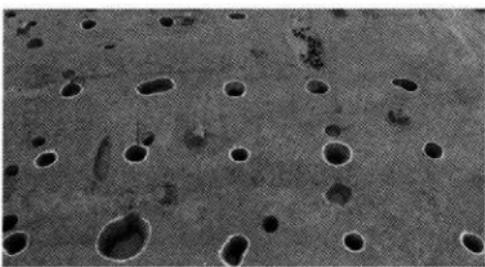
完掘全景（北から）
〈8号据立柱建物跡〉



完掘全景（東から）
〈1号据立柱建物跡〉

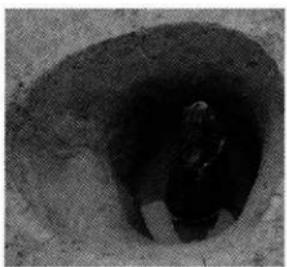


柱穴内遺存木柱（P12）

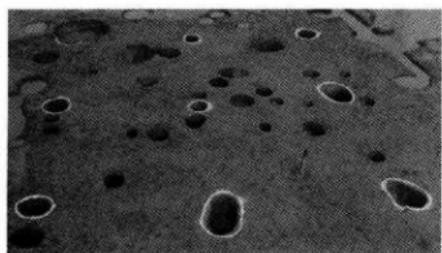


完掘全景（西から）

〈11号据立柱建物跡〉

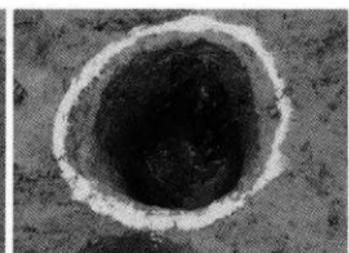


柱穴内遺存木柱（P15）

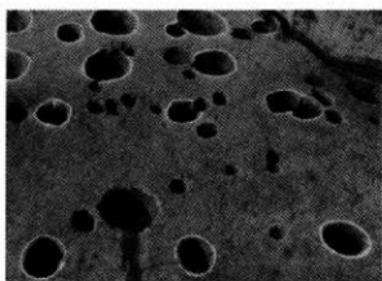


完掘全景(南から)

《14号掘立柱建物跡》

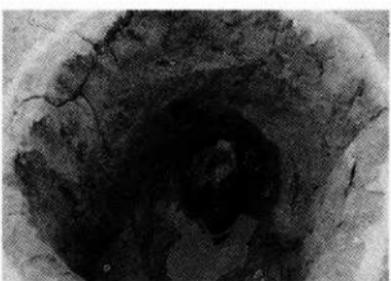


柱穴内遺存木柱(P4)

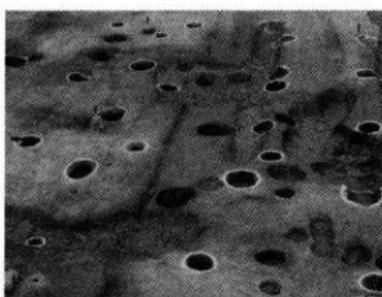


完掘全景(南から)

《18号掘立柱建物跡》



柱穴内遺存木柱(P7)



完掘全景(手前12号、南から)



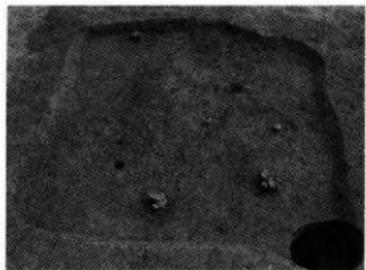
30号掘立柱穴内遺存木柱(P5)

《12・30号掘立柱建物跡》



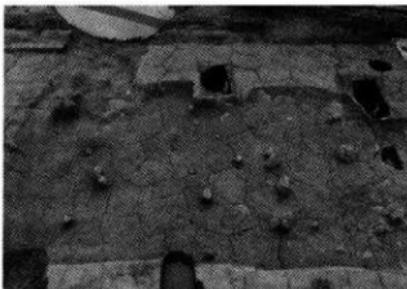
柱穴内土器出土状況

《200号ピット》

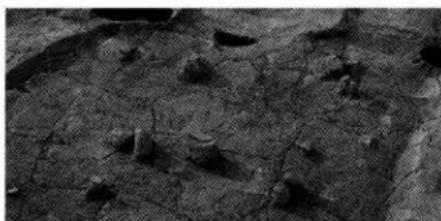


土器出土状況全景（北から）

（3号土坑（竪穴状造構））



土器出土状況全景（西から）

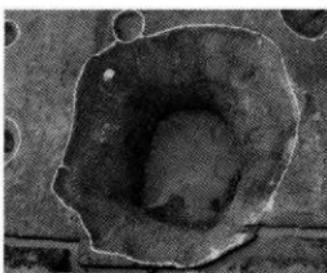


土器出土状況近景



土層断面ベルト全景

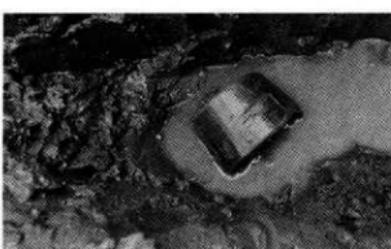
（1号竪穴状造構）



完掘全景（東から）

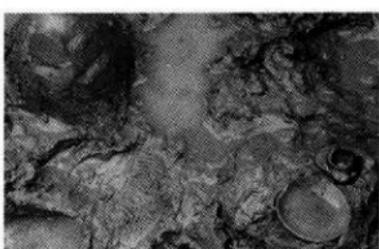


土層断面ベルト全景



下層陶物出土状況近景

（25号土坑（井戸））



下層土器出土状況近景



完掘全景（北から）



土層断面ベルト全景

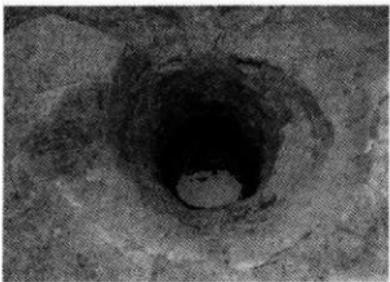


中層土器出土状況近景



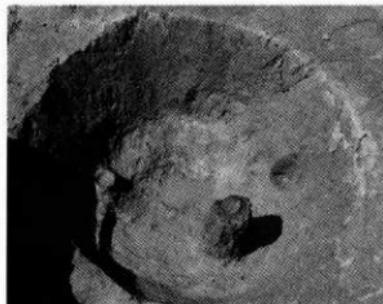
振り下げ作業風景

（39号土坑（井戸））

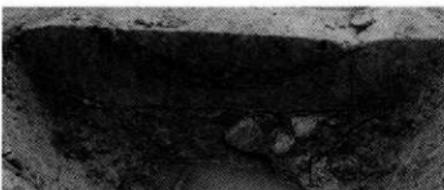


完掘全景（東から）

（85号土坑（井戸））

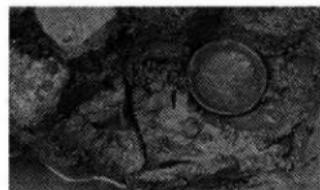


土器出土状況全景（南から）

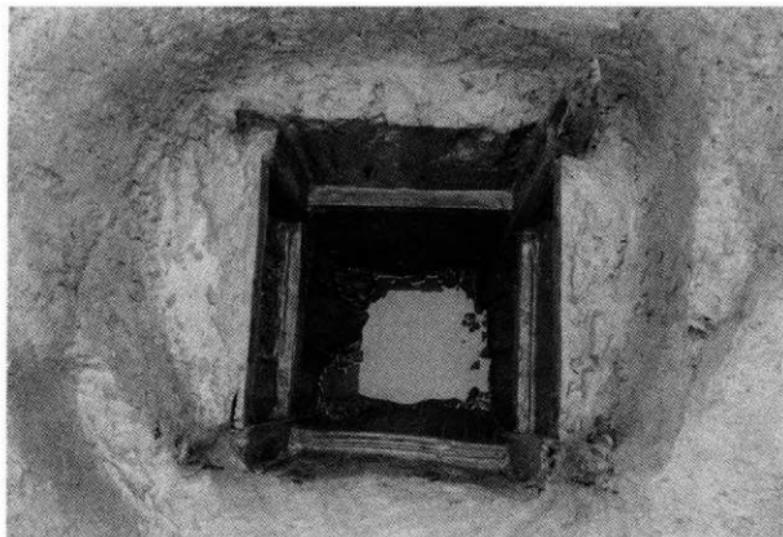


土層断面ベルト全景

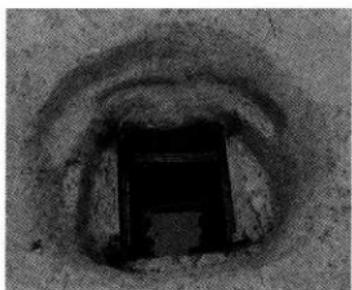
（102号土坑（水溜め状））



下層土器出土状況近景



井戸側近景（縦板細網片横棧ごめ）



井戸全景（東から）

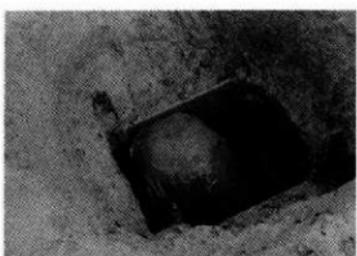


井戸側北面近景

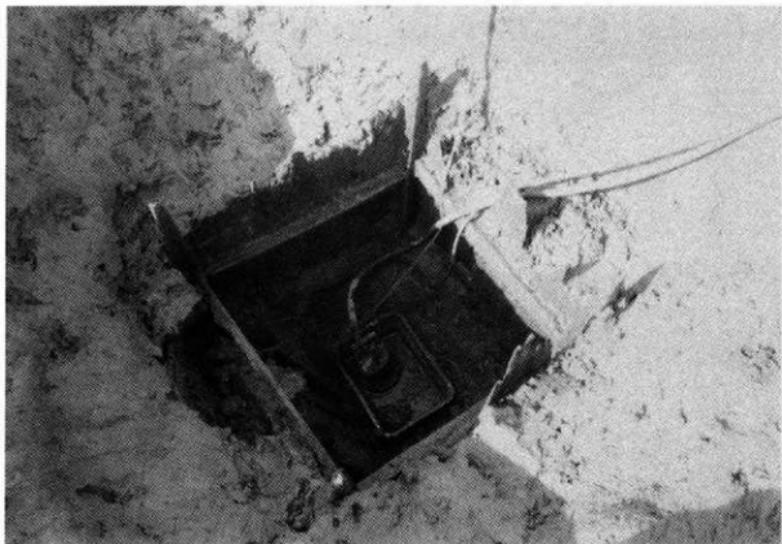


土壠断面ベルト全景

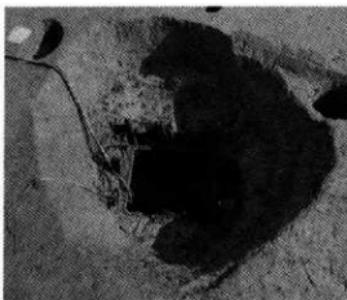
（1号井戸）



井戸側内掘り下げ風景



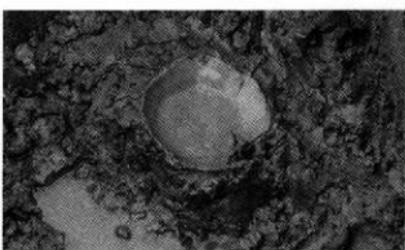
井戸側面近景（底板組頭横枝どめ、南東から）



完掘全景（西から）



土層断面ベルト全景



上層土器出土状況近景



井戸側内振り下げる風景

〈3号井戸〉



土層断面ベルト全景（Aセクから北へ）



土層断面ベルト全景（Bセクから北へ）

（5号溝）



土層断面ベルト（Aセクション）



土層断面ベルト（Cセクション）

（1号溝）



土層断面ベルト全景（南から）

（8号溝）



土堀断面ベルト全景（南から）

〈26号溝〉



上層掘り下げ状況（北から）



下層土器出土状況全景（北から）

〈43号溝〉



包含物除去作業



1号溝掘り下作業



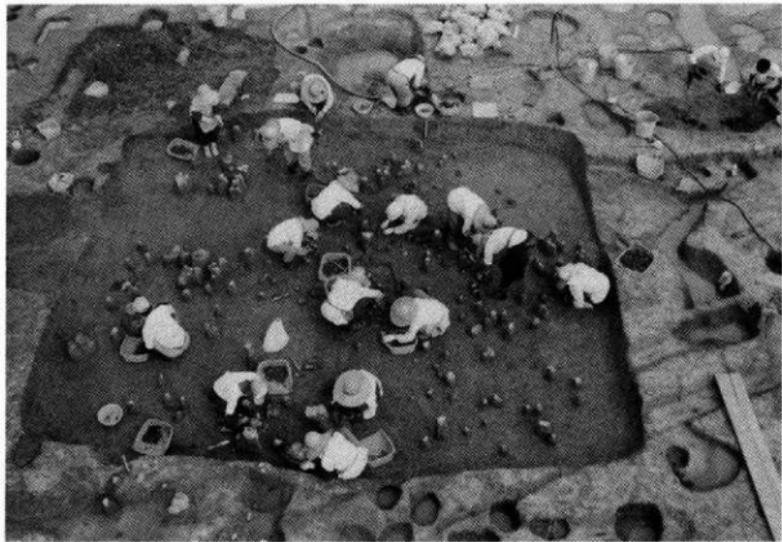
1号土坑掘り下作業



2号井戸掘り下作業



発掘調査作業員一同
(1次調査区域)



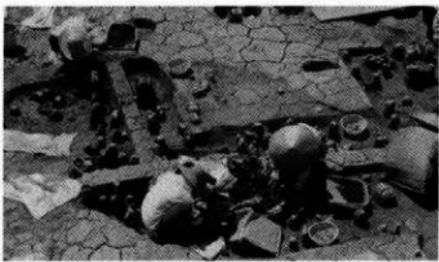
5号壁穴住居跡床面出し作業



壁面除去作業



樋立柱建物跡柱穴掘り下げ作業



91・92・95・96号土壤掘り下げ作業



遺物ドットマップ作成作業

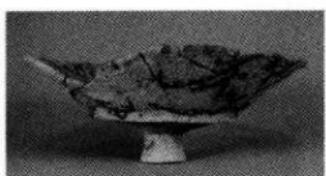
〈2次調査区域〉



66図-1 (1住下層)



66図-3 (1住下層)



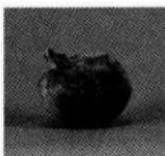
66図-9 (1住下層)



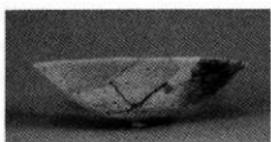
66図-8 (1住下層)



66図-16 (1住上坑)



66図-11 (1住下層)



66図-21 (1住上坑)

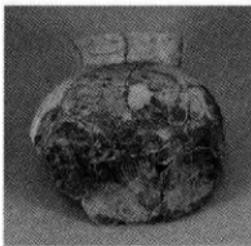


67図-27 (2住(62土坑))

（1号・2号型穴住居跡出土土器）



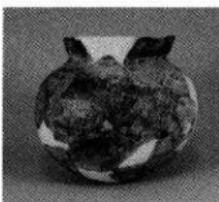
68図-48 (4住(61土坑))



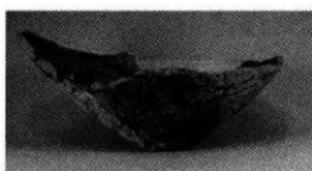
69図-55
(5住下層)



69図-58 (5住下層)



69図-59
(5住下層)



70図-73 (5住下層)



71図-74
(5住下層)



71図-77 (5住下層)



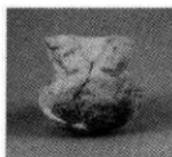
71図-78 (5住下層)



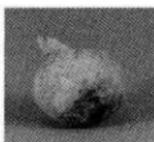
71図-79 (5住下層)



71図-80 (5住下層)



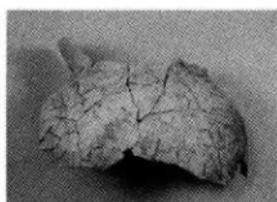
72図-93 (5住下層)



72図-94 (5住下層)



72図-96 (5住下層)



73図-118 (5住土坑)



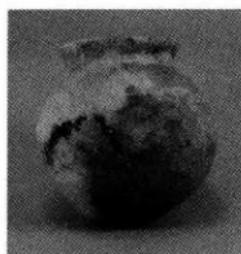
74図-84 (5住下層)



74図-128 (5住土坑)



74図-130 (5住土坑)

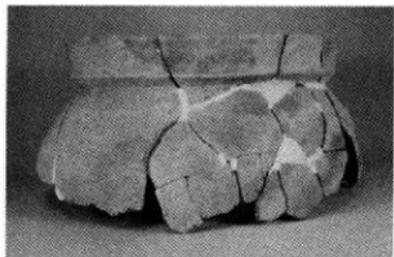


76図-139 (1土坑)



76図-140 (1土坑)

（5号竪穴住居跡・1号土坑出土土器）



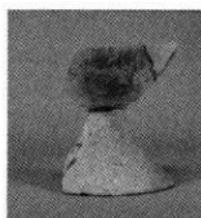
77図-144 (1 土坑)



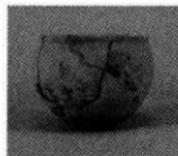
78図-146 (1 土坑)



78図-157 (1 土坑)



79図-158 (1 土坑)



79図-160 (1 土坑)



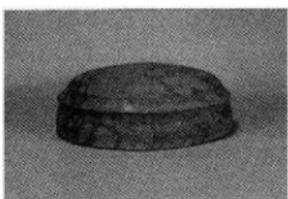
80図-181 (2 土坑)



81図-190 (2 土坑)



81图-194 (2号土坑)



82图-204 (2号土坑)



82图-200 (2号土坑)



83图-209 (5号土坑)



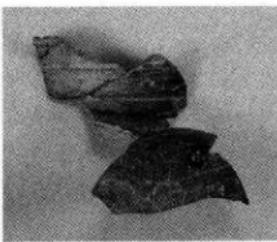
83图-210 (5号土坑)



83图-211 (5号土坑)



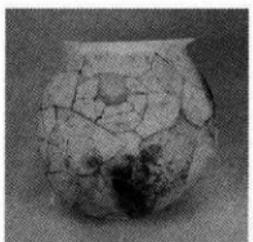
83图-214 (5号土坑)



83图-215 (5号土坑)



84図-227 (14土坑)



84図-232
(14土坑)



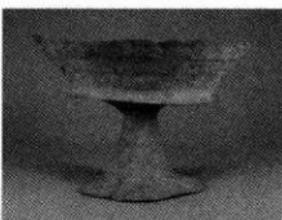
85図-235 (14土坑)



85図-236
(14土坑)



85図-237
(14土坑)



85図-238 (14土坑)

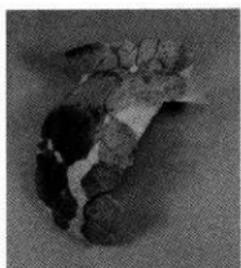


86図-244 (14土坑)

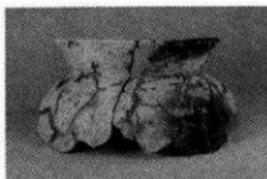


86図-245 (14土坑)

〈14号土坑出土土器〉



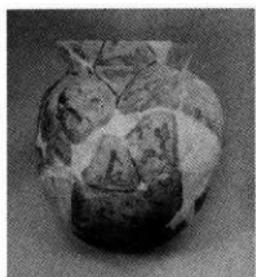
88図-262 (26土坑)



88図-263
(26土坑)



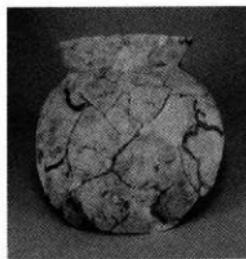
88図-264
(26土坑)



88図-265 (36土坑)



89図-273 (36土坑)



89図-274 (36土坑)



90図-278 (36土坑)

〈28号・35号・36号土坑出土土器〉



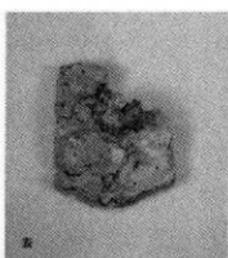
90図-277 (36土坑)



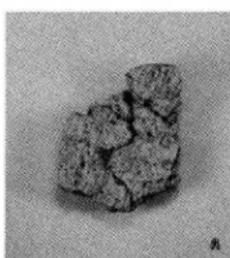
90図-281
(36土坑)



92図-302 (67土坑)

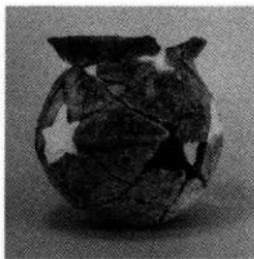


左



右

93図-316 (76土坑)



94図-319 (88土坑)



94図-334 (99土坑)

〈36号・67号・76号・88号・99号土坑出土土器〉



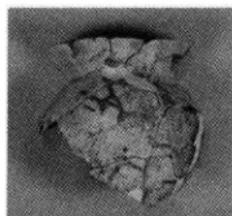
94図-335 (103号土坑)



95図-339 (106号土坑)



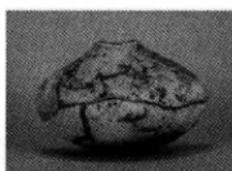
96図-354 (遺構外)



97図-360 (遺構外)



97図-372 (遺構外)

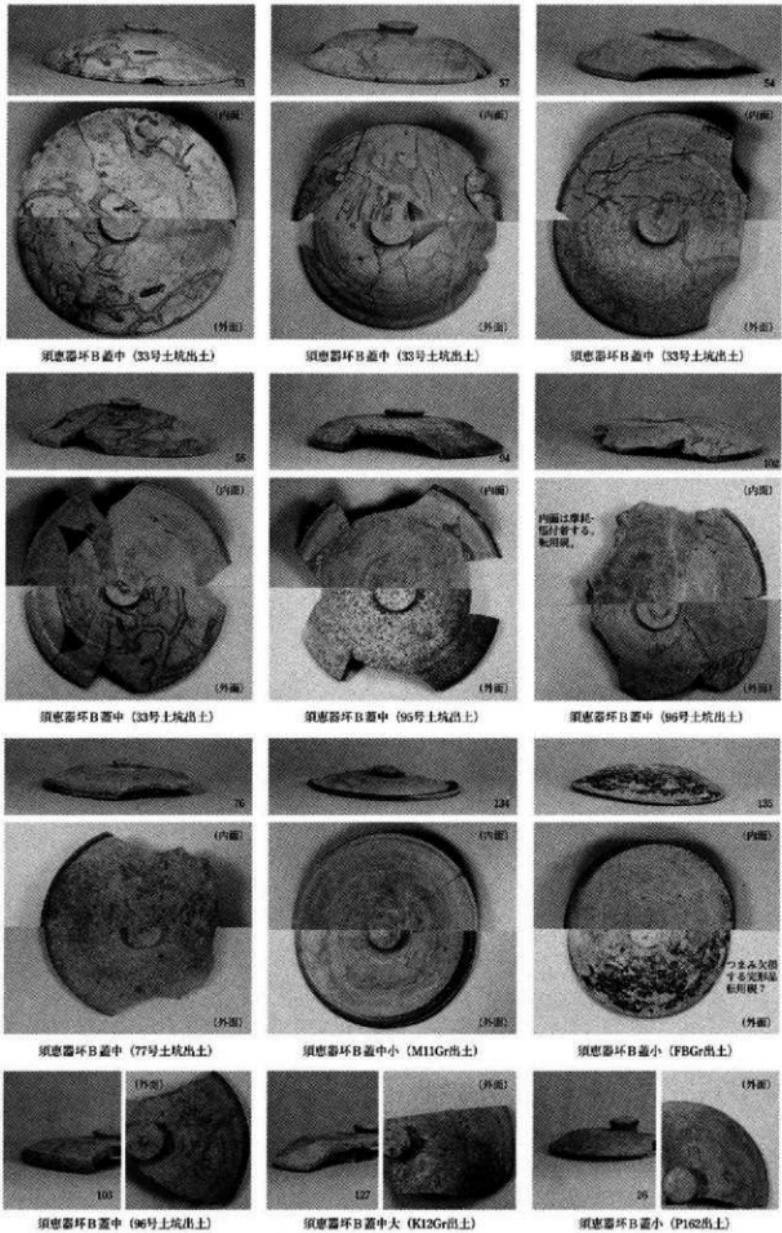


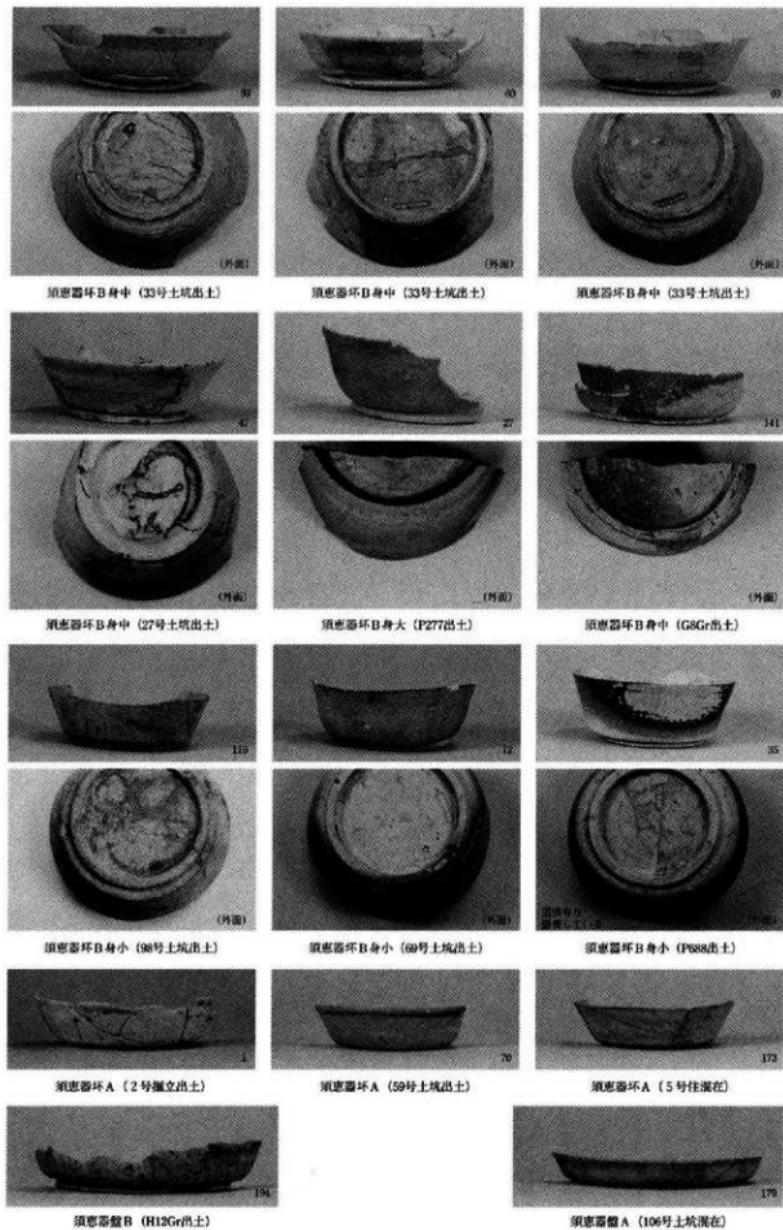
97図-362 (遺構外)

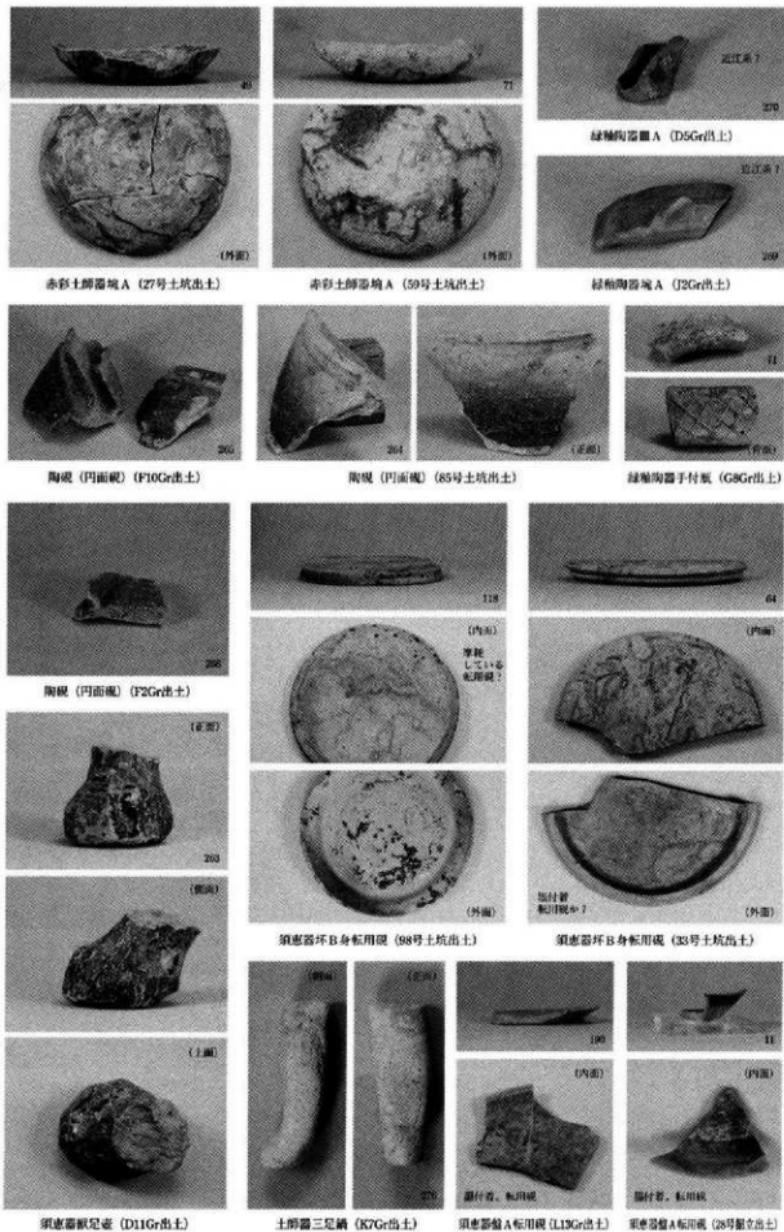


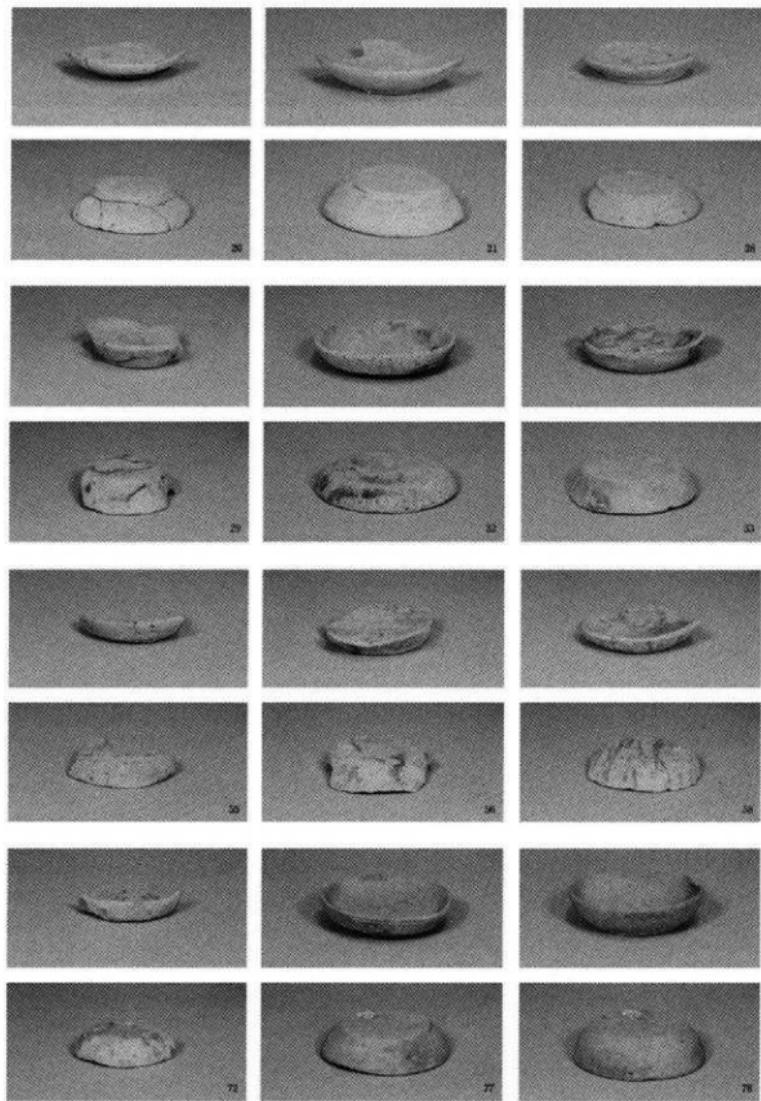
手づくね土器

後列右から 66図-20(1往土器)、
75図-138(2往火)、91図-289
(40号土坑)、97図-377、97図-378
(遺構外)、前列右から 97図-379、
97図-376、97図-380、97図-381
(遺構外)

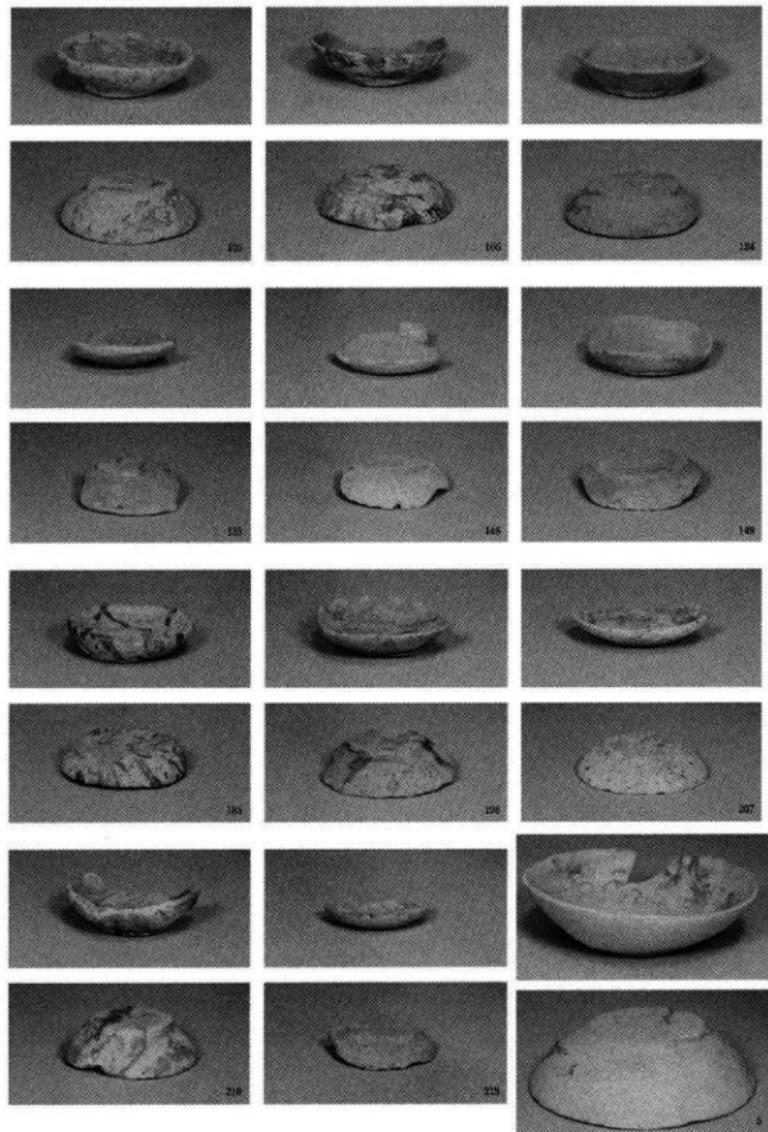


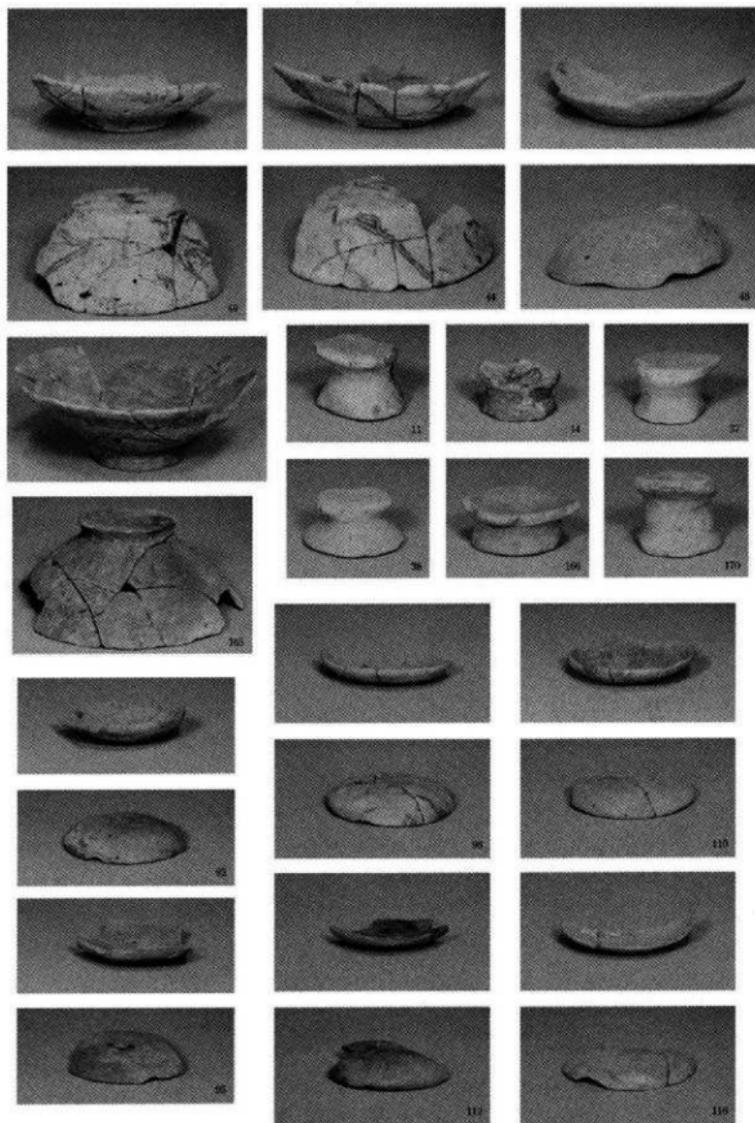


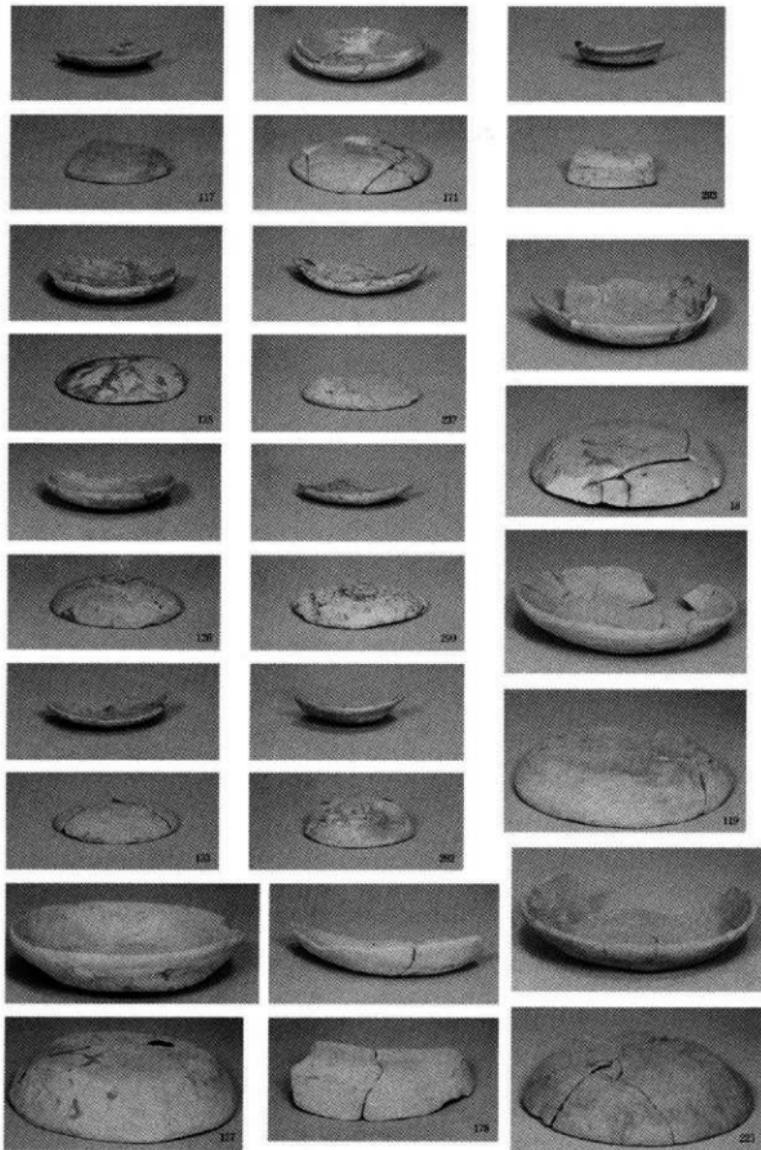


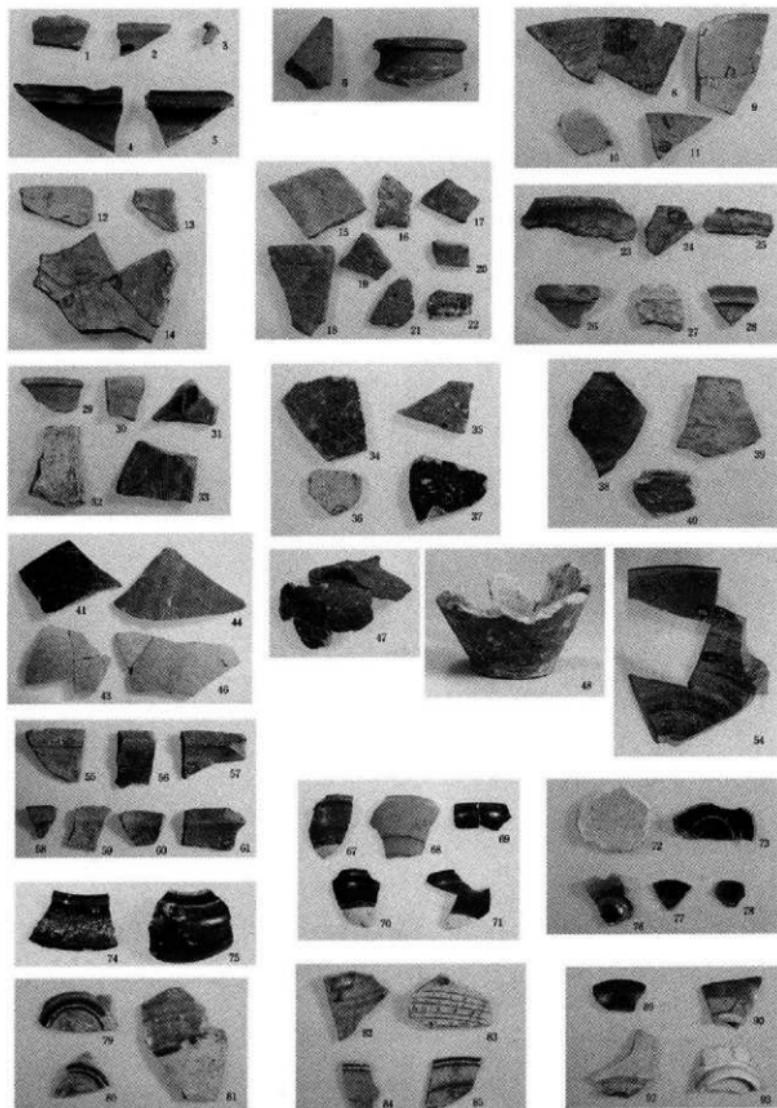


写真図版 48
中世の土器 (2)

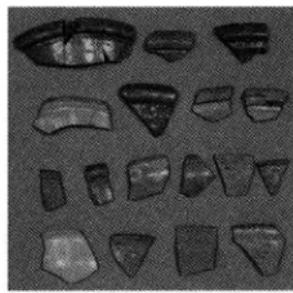
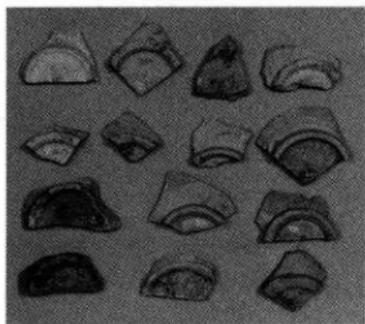
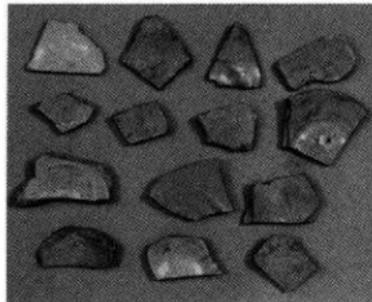




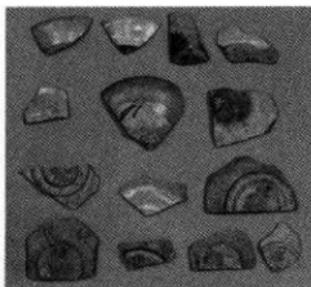
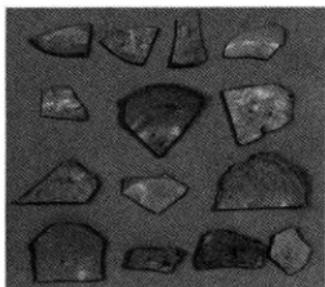




番号は実測図と同じ



白磁片



白磁片

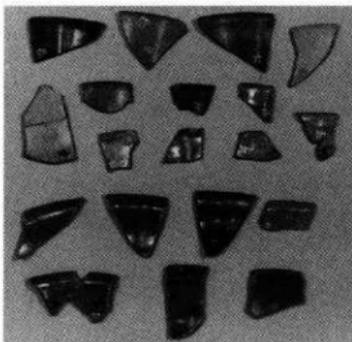
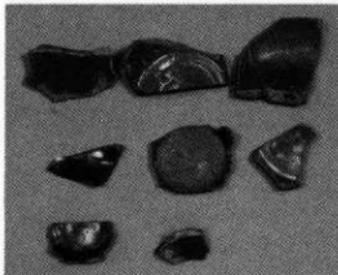
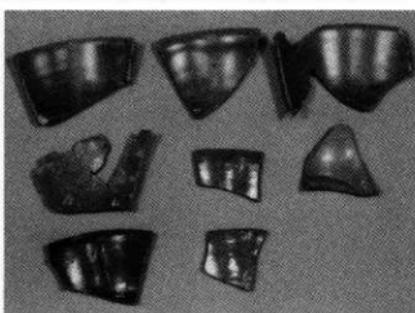


染付皿



(白磁・染付)

白磁合子



青磁

青磁

青磁・合子・香炉



96



97



98



100



102



103



99



101



107



110



111



112



117



118



119



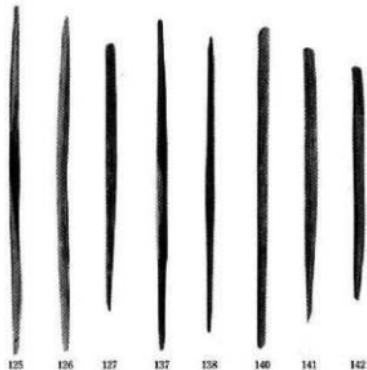
120



121



122



125

126



127



128



129



130



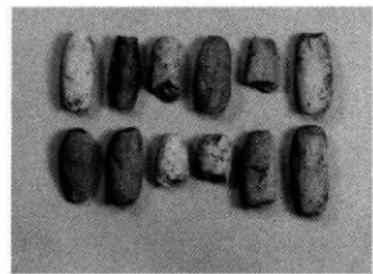
131



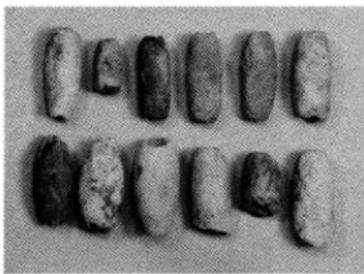
NO. 1 ~ 12



NO. 13 ~ 24



NO. 25 ~ 36



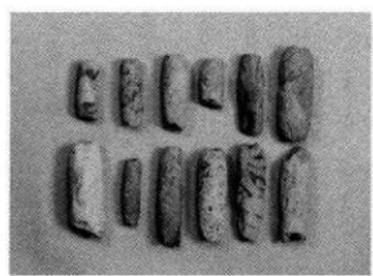
NO. 37 ~ 48



NO. 49 ~ 60



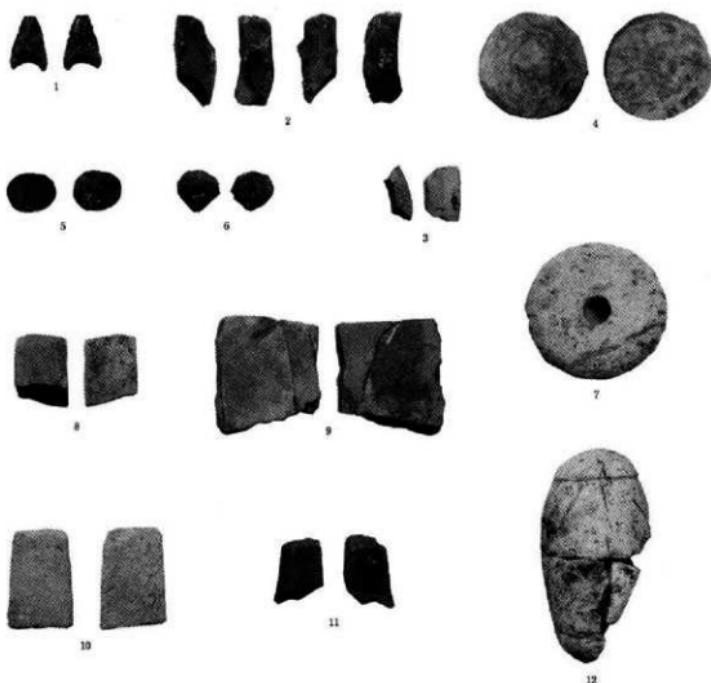
NO. 61 ~ 70



NO. 71 ~ 82



NO. 83 ~ 90



(番号は第14表・第149図に対応)

報告書抄録

| ふりがな | あらきだいせき | | | | | | | |
|---------------|--|--------------|--------------------------------|--------------------------------------|--|--|------------------------------------|---------|
| 書名 | 荒木田遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 北陸電力小松東部変電所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 宮下幸夫・望月精司・津田隆志・橋雅子・坂下義視・川畠謙二・宮田明・三辻利一・大澤正己 | | | | | | | |
| 編集機関 | 小松市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒923 石川県小松市小馬出町91番地 (電話) 0761-22-4111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1996年3月20日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | °°' | °°' | | | |
| 荒木田 | 石川県小松市 荒木田町内 187-1・2、 188、189番地 | | 03234 | 36度 24分 00秒 | 136度 30分 30秒 | 1次調査 1993.07.20 ～1994.01.12 2次調査 1994.04.01 ～1994.10.07 | 1次調査 2,500 2次調査 1,553 | 変電所新設工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 荒木田 | 集落跡 | 古墳時代 前・中期 | 竪穴住居跡5軒 土坑31基 | 土師器・陶邑座須恵器 石製腕飾具・石製模造品 | 古墳時代中期後半の良好な 土器一括資料 | | | |
| | | 古代 | 掘立柱建物跡35棟 土坑6基 | 須恵器・土師器・円面鏡 縁輪陶器・獸脚・鉄滓 | 中規模掘立柱建物で構成さ れる建物密集区域 | | | |
| | | 中世 | 掘立柱建物跡13棟 井戸9基、溝23条 竪穴6基 | 土師器・国產陶器・舶載 磁器・輸入銭・木製品・ 鉄製品・鉄滓 | 条里に基づいた堀や溝で区 画された星敷地の中に配置 された建物と井戸 | | | |

荒木田遺跡

—北陸電力小松東部変電所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成8年3月20日印刷・発行

編集・発行 小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地
電話 0761-22-4111

印 刷 株式会社 日本テリード出版
